
ひょうい!

ままま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひょうい！

【コード】

N8179L

【作者名】

ままま

【あらすじ】

死んでとある世界の住人に憑依してしまった。驚くことに憑依先は……

第一射 合い言葉はアミバ

早速だがみんなに教えたいことがある。なんだと思う？ふっふー、実は俺一回死んだんだよ、すごいと思うのだが。疑問に思わないかい？俺が今こうしてしゃべっていることに！何を隠そう俺は転生っばい憑依をしてしまったのだ！それにちゃんと神様にも会ったんだぜ？チートパワーをプラスして貰ったんだ！まあ何処の世界に行くかわからないから役に立つかわからない。俺としてはやはり元の現実世界へと転生したかったわけだよ。

「ゴボ！ゴボゴボボボ！ブボ！？アバババババ・・・アミバ！」

それにしてもおかしい。声が上手く出ない。最後なんか出たような気がするが。なんということでしょう。周囲を見渡しても真っ暗で何も見えない。感触からして俺はなにやら液体の中にいるような気がする。ああこれは羊水っていう奴かな？はっはー、俺もどうやらマイマザーに愛されているようだぜ。

生ジジ応 認ガガツ電 置をビー動ビツ灯

機械的な声にブオンという音がしたかと思ったら何故か明るくなった。だがなんかフィルターがあるみたいで少し見にくい。あれ？羊水の中かと思ったら・・・なんか古ぼけた部屋だ。古ぼけた部屋、ところが俺が入ってる容器（？）は異様に近代風のいかにも科学です！な感じである。灯りは・・・ランプ？なんで勝手に点くんだよ。当たりにまき散らされた本やら埃を被った机。何かのガラス細工が粉々に砕かれたかのような跡。そして何より視界が緑色。緑色の液体が俺を包んでいるっばい。それにしても変だ。呼吸してないはずなのに全然・・・あ、今苦しくなってきた。残念、俺の旅はここで

終わってしまった！おいどうにかしろよ。腕やら脚やら上手く動かせなくて俺と液体が入っていると思われる容器のガラス（？）は砕けそうに無い。というか変な液体飲んじゃった。

警告 号ガツ 6号ガガガ体ジー応レベルの低 緊 措ビービ動

「モガッ!？」

どこからともなく伸びてきてカポツと擬音が似合うマスクが俺の口に取り付けられた。マスクにはチューブが伸びている。ゴゴゴゴとチューブが俺の喉に入り込んだ液体を吸い寄せた。非常に気持ち悪い。というか俺なかなか死なないな。呼吸出来ないはずなのに案外結構イケルかもしれない。潜水とか得意なのか俺は。ふと気付くと普通に呼吸できるようになっていた。このチューブから空気が送られているみたいだ。安心安心。

ジジジ線体 応ガガツ定 後ギギツ定

ぷかぷかと液体が俺を揺らす。さてこれからどうしようか？俺一人でここから出れる気配がまったくくない。神様からチートパワーを貰ったが、……ちょっとやってみるか。

「ど・・・がい・・・」

声が出なかった。アレだ、数週間の引きこもりから久しぶりに外に出てしゃべってみた感じだ。おかしいな？というかここどこよ？何度でも疑問に思うところ。ちなみにさつきは『同調・開始』と言おうとしたんだ。あれだよ？衛宮んのあるだ。俺は実際現実世界に転生すると思っていた。だから剣やらなにやらを作り出すのではなくパソコンやら鉛筆の芯やら、日常生活最強を目刺していたわけなの

だが。そもそも俺が『同調・開始』で投影出来るかどうか知らない。俺は衛宮ん一人のための呪文だからな。俺は俺の呪文を考えよう。

さて、色々考えてみてもののどうすればいいのかわからない。一応機械的な声から推測すると俺には今生命維持装置的呢がついているのだろう。ドラゴンボールに出てきた回復装置か？ふむう・・・もしかして俺の今の肉体の保有者は死んだのか？だから生命維持装置は停止した・・・でも俺が憑依し一時的に命は復活。そして今に至る、もうね馬鹿かと。

「うあ・・・あ」

出ない声。助けを求めるにしてもどうすれば？装置が起動したことを誰かが気付いてくれればいいのかもしいない。さて、今の俺の状況から確認すると俺は現代社会、つまり俺が生きていた現実世界ではないということだ。こんな科学力みたことないしあるわけがない。すると俺が来てしまったのは科学がある程度進んだ世界だ。本当にドラゴンボールってことはないだろうな？周りの古ぼけた様子からしてそれはないだろうが・・・。

タッタッタッタッタ

ラ様！お　下さ　そ　へ行　いけ　ぬ！

・・・誰かが来たようだ。ようやく俺も解放される時が来たか。それにしても、一体どういうことだ？平和な世界だといいいのだがなあ。まあ極めれば衛宮んクラスの投影まで辿り着けるように設定してもらったのに平和を求めるなんて馬鹿げたことだと思っけど。そもそもこういいう回復装置(?)の技術があるという時点で何かのフラグのような気がする。

「うお！なんじゃこは！？って誰かおるのじゃ！」

来たのはチビツ娘だ。褐色に・・角？角が生えてら。どこかで見たことあるような気がするぜ。さて何だっけな？それにしても角っ娘か。いいね、そういう世界なんだろ。後ろにはゼエゼエ言ってるローブを着た人がいる。それにしてもこの角っ娘、なんか偉そうな格好しているな。時々見えるおへそがなんとも言い難いキュートなんだろうか。それにしてもこの出会いは最悪だろうな。俺裸だし。

「おお・・・、こいつは・・生きおるぞ」

コンコンと俺が入っている容器を叩く。無論割る気なんかないのだろう。その様子を見ていたローブの人 声からして女性かな？ はなんか焦っていた。

「近づいては駄目です！テオドラ様速く離れて！！」

そう言ったフードの女性はテオドラと呼ばれた・・・テオドラ？あなるほどテオドラ様ね。ああはい、あの帝国の皇女様だろ？なんでここに・・・ああ、神様よ。なんという場所に俺を行かせたのだろうか。この皇女様がまだロリっている様子からすると原作開始まで時間があることは明確だな。さて、話を戻すがそのローブの女性はテオドラを守るかのように前に立った。そしてまあ俺を睨み付けながら杖を構えるじゃないか。さてどう答えるものか。まあ声でないんですけどね

ゴボンッ

「見る！やはり生きておるぞこやつー！」

空気を上手く吸い込んでマスクの間から出してみた。今の俺にはこれしか反応できる動作が無い。あれ？瞬きできねえ。なんでだろ？ああ・・・俺目開いてなかったわ。それなのに周りの様子がわかってたのか。さてどういうことだろうか。目蓋を開く感覚を思い出せ。・・・目蓋を開く動作がこんなにも大変だとは！？さあいけ俺！！

「テオドラ様危ない！」

「うお！起きたのじゃ」

目を開くことが出来た。先程とは違ってフィルターをかけたような感じではなくハッキリクッキリと見える。ついでに変なオーラが見えた・・・かと思っただけすぐに消えた。なんだ今のは？やはり褐色角っ娘だ。見事にテオドラ様です本当にありがとうございました。

「貴様は何者だ！？」

従者の人だろう。なんせテオドラは皇女だからな。一人二人や百人いてもおかしくはない。いやさすがに百人はないか。さて俺にどうしろと？

ゴボゴボッ

とりあえず出来る反応を試してみた。がそれでもやはり警戒の様子は解けない。ああ俺はきつとここで『魔法』で木っ端微塵の微塵切りにされてしまうのか。折角チートパワー貰ったのに。まあ貰った理由も『最新パソコンとか作れるんじゃない？』が大まかな理由だ。今考えると現代に転生するとも憑依するとも一言も言っただけじゃなかった。

ガーーーーー!!!!!!

「わ!」

「テオドラ様!?!」

このじゃじゃ馬皇女がそこら辺にあった変なスイッチを押したようだ。なんとというお約束事。スイッチがあったら押す、それはある意味人類の本能だ。まあテオドラは人間じゃないけど。人間型の亜人だったっけ?角生えてるし、ああもうかわいいなあ!

ゴボゴボゴボ!!

足下から大量の気泡が浮き上がる。水中故の浮遊感が無くなっていく。液体が無くなっていつてるようだ。液体無しに俺は生きていけるかどうか不明だが・・・まあなんとかなるべ。液体が全て排出されマスクが取れる。俺は自分で体を支えることも出来ずに透明に容器にガツン!とぶつかつた。あんまり痛くなかった。そして先程まであったはずの透明のガラスのようなものが突然消えさり、俺は床にぶちまけられる事になった。

「テオドラ様下がって!!何者か不明ですので」

「おい!こやつを速く治療してやるのじゃ!」

そんな声を聞きながら視界が暗くなっていく。以後何があったのかまったくわからなかった。ただ願うことは例えこの世界であろうとも俺は生きていければそれでいい。まあ戦争前ならば間違はなく巻きこまれるだろう。その前にこの投影と『幸運を引き寄せる力』をこ

ントロール出来るようにしなくてはならない。まあ幸運を上手く引き寄せることが出来るようになればラッキーマンの如く誰にも負けることはないだろう。勝つことは出来ないにしろ・・・、勝つ必要性もあるかどうか。

「し・・・ら・・・」

知らない天井だ、とお約束の言葉をいつてみる（言えてない）。どうでもいいが英語で何だっけ？学校で英語を習うが正直あれは駄目だ。英語ってのはフィーリングなんだよフィーリング！そんなに英語力つけさせたいなら英会話方式で学ばさせるよ！？

さて、俺は目を覚ましたわけだが一体ここはどこだろうか？流れるには帝国だろう。微妙に高級な部屋の感じがするのは気のせいだ。ふと思うと俺は普通に上半身を起きあがらせることが出来た。これもあれも治療の『魔法』の御陰だろう。体の調子は・・・うむ、良くわからない！投影が使えるからといってすぐに解析出来るわけでもないし何より俺の呪文を見つけていないわけで、幸運は・・・どうすればいいのかわからないが感覚でやってみよう。ESPカードで練習してみるか？サイコロでもいいかもしれない。サイコロやESPカードで考えてみると幸運＝確率変動とも言えるかもしれない。やばくね？無茶な話であるが幸運にも相手が攻撃を避けなかった！なんてこともあるかもしれない。うわぁお。

「目を覚ましたようだな」

ふと気付くといつの間にか扉から入ってきたのかローブの人が話か

けてきた。従者の人とは別の人だ。まあどうでもいいのだが。この人が俺を治療してくれたのかもしれない。

「うあ？・・・あ、ご、ご・・・は？」

「随分と長く話していなかったようだな。喉の筋肉が弱り切っていた。治療してなんとかはしたが、まあすぐに喋れるようになるだろう。ああちなみにここはヘラス帝国のとある部屋だ。それ以上は話せぬ」

なるほど、やはり治療してくれたのか。それにしてもねえ『ヘラス帝国』とは・・・あの世界では間違いないようだ。問題は時代だが・・・なんとかなるだろ。俺の状態を説明したら、下働きぐらいはさせてもらうかもしれない。説明といっても気が付いたらあそこにあった、以上。なのであるが、さてどうしたものか。

「あ・・・あ、り・・・が、と」

「礼には及ばない。それにな、その・・・なんだ、こつという言葉は慰めにもならんだろうが、もう大丈夫だ」

な
ん
の
話だ？

大丈夫？はい何の話でしょうか？あれか、トリッパーにはお約束の悲しい過去（笑）でもあるのだろうか。そして俺には隠された殺人衝動が・・・ないな。さて一体何の話か不明だ。もしかしたら俺があの容器の中にいたことに関係しているのだろうか。一体どうい

わけか。まあ記憶喪失（爆）でなんとかなるだろう。

「な、なん・・・のは、な・・・し、です・・・か？」

少しずつだが声が出るようになってきた。こんなに速くなるものなのか。さすが回復魔法だ。

「まさか、覚えていないのか？・・・いやそちらのほうが良いかもしれん」

相当くらい話のようだ。まさかそこまで酷い状況だったのか俺は。まあ実際『俺』が受けたわけじゃないしそんな記憶も無い。元の持ち主には悪いと思う。だが何も思わないのはしょうがないことだ。

「今は休め」

そういったフードのおっさんは杖を取り出してなにやら霧を出してきた。あれか？眠りの霧ってやつ・・・か。

「チッ」

フードの男は冷静にしていたようで内心怒りに燃えていた。この帝国に魔導師として働く彼としてはこの帝国の黒い話をたびたび耳にすることはあったが、どれもこれも嘘か誠かわからないようなものばかりだ。魔法で寝た少年を見やる。色素が完全に抜けきったため絵の具をぶち負けたかのような白い髪の毛。血のような真っ赤な

目。それが彼を『不完全』ということを表していた。

「まさか・・・『ホームンクルス』とはな。しかも、戦闘を目的とした」

フードの男は拳を握りしめた。先程の彼の様子からして実験の途中は覚えていないのだろう。見つかった隠し部屋に合った所謂記録書それが今回の事件を物語っていた。戦闘を目的とし単騎による大軍撃破を目的とした生物兵器。それが彼の・・・36号が作られた目的であった。記録によると彼が作られたのはおよそ半年前、そして『死亡』したのは二日前。そう記録には36号・・・彼は死亡しているはずなのである。しかし見てのとおり彼は生きていた。

「願わくは・・・彼に幸が多からんことを」

そう言いフードの男は退室した。部屋に残ったのはスースーと息を立てる白い彼だけであった。そもそも彼を発見したのはとある一人の男がつかまつたことから始まる。その男は研究者であった。この帝国にとめる所謂技術開発部門の、来るべき戦争にそなえ強力な戦艦、鬼神兵、といったものの開発研究を目的とした一団の中の一入であった。情報によれば彼は上手い評価を貰うことが出来ずに所謂クビ寸前であったという。逆転をしようと思ひホームンクルスという作る難易度が高い存在に、大軍撃破というまさに夢のような力をつけさせようとしたのだ。結果は惨敗、それは保護された生き残りである彼の36という番号が表していた。彼は僅か数年という間に多くの人間を『土台』にして非道で外道な方法をとっていたらしい。まあ見事に見つかりつかまつたのだ。そして何を血迷ったのか、じやじゃ馬第三皇女がその研究者の秘密部屋に入り込み、そして冒頭へと繋がる。

「お主！あの、ほ、ホムンクルスはどうじゃった？」

噂の皇女がフードの男に話しかけた。フードの男はまあ予想していたのか、日常茶飯事だったのか突然のことにも特に驚くことなく答える

「様態は急速に回復しています。異常な速度で……。会話の件についても数日、いえ明日には問題無くなるでしょう。そんなことよりこんなところにいてよろしいので？」

笑みを浮かべながら暗にさっさと帰れ！の意味を含めていたのだが、皇女は気付かないのかいつもの元気さをどこかへおいて返答する

「そうか、よかった。妾もあの……。記録のことを見てしまったから」

「今は魔法で寝かせています。ただ、実験のことは何も覚えていないように」

その言葉に口を大きく開けて驚いた皇女、しかしその口もすぐに塞ぎ呟いた

「これで良いのじやろうか？自分が作られた、しかも殺す目的で、そうだと知ったらあやつはどう思うじやろうか……」

その皇女の呟きに何も答えることは無かったフードの男であった。どこか重い空気が漂う廊下。作られた体に移った少年はさて……
・一体どういふ足跡を残すのだろうか？その偽りの物語の上で。

「……クシユン！……だれ、か……がおれの、う、わさを」

魔法抵抗が強く数分で起きてしまったのは本人しか知らないことである。特に知っても何も無いのだが

T o b e c o n t i n u e d

第一射 合い言葉はアミバ（後書き）

終わってないのに二発目なんていう無茶っぷり

第二射 出席番号36

〔36号の概要、及び詳細〕

まず最初に決定する事項を書す。一つ、単騎による軍隊撃破を可能にする戦闘能力の保有。一つ、寒帯熱帯乾燥地帯あらゆる環境において100%の力を持った行動が可能であること。一つ、潜入暗殺情報収集に関する高い能力の保有。一つ、潜在魔力及び気の上昇。一つ、魔法適性の向上。一つ、特殊技能の会得。一つ、人間の形であること。以上を踏まえ36号の開発に至る。本個体は既存の実験体0〜35号の失敗を踏まえた上において改良を加える。

素体の本来の名称は不明。ナンバリングされた戦闘ホムンクルス、通称エックスはホムンクルス技術の応用とキメラの合成技術を用いた生体戦闘兵器である。なお既存のホムンクルスの基礎生体の作製において必要であった血液に高い能力を保有していた拳闘士を使用。優勝経験が多数であるため基礎能力の高さは期待できる。そして素体であった名称不明の人間を『吸わせ』基礎生体を成長させる。本来ホムンクルスの成長において外部から栄養その他を送り込むが既存の方法を脱した方法、素体である『生身の人間』を直接吸わせることにした。なおこの開発において人間が保有する生存エネルギーは非常に効果が高いことを確認。

キメラ技術を使用し更にこの36号の強化を図る。使用した素体として、魔狼、妖狐、多数の龍種、そして『鬼神兵』。趣味で猫も追加した。なお追加の途中に古龍・龍樹の皮膚を入手し組み込ませる。『レシピ』は別所に詳しくのせておこう。ケラベラス深谷の魔獣の入手は失敗、とても残念だ。研究者として拘る必要があるが何しろ私には時間が無かった。そして多くの人間を集め各属性の適性を入

手。これをキメラとして36号に吸収させる。そして多数の魔法術式を綿密かつ繊細に丁寧に組み込ませ「人間」の形を維持するようにする、私は専門ではないため非常に難航。しかし結果として色素を失うという事態にはなつたが許容範囲である。

そこに至る間に私はとあることを閃いた。技術の継承は可能か、否か。とりえず適当な手練れを手配させてもらった。様々な戦闘タイプの人、さすがに数は少なく10にも満たなかったが・・・、知識と経験の合成は私の古くからの夢でもあり心躍る。独自に開発した術式を脳に直接埋め込み知識や経験たる存在を抽出、それを36号に埋め込む。なおその時点において36号は自我に目覚めており非常に苦しんでいた。昇華には痛みがあるものだ、少しは我慢して欲しいものである。

基本素体の作製には成功した。問題なのは次の段階である。全身を兵器と化すため全身に術式を組み込んだ。36号が五月蠅いので喉を潰そうかと配慮したが瞬時に回復。笑いが止まらなくなった。肉体の皮膚薄皮筋肉神経あらゆる存在を自身の肉体を守る鎧とし、筋密度を上昇。従来のエックスの三倍ほど圧縮してしまったが肉の本来の柔らかさを出すのは苦労した。おかげで強靱かつ柔軟な動きが可能。さすが私だ、こんな私を捨てようとする帝国が悪いのだ。

少々私感を含めてしまったが今回の開発は上手くいきそうである。本来のエックスは術式を組み込む時点において多数死亡してしまい、生き残ったエックスも謎の死去。どれもこれも素体の貧弱さが疑える。しかし今回のエックスは開発全てに至る段階で生きていた。あとは数日にかけてじっくりと身体を馴染ませる。この36号が出てきたときこそ私の始まりでもあるのだ

とある研究者の日記より

その場にいた帝国の重鎮達は頭を抱えた。読めば読むほど研究者の狂気が疑える。人体実験を料理のようにレシピと言い張り、どれもこれも自身が失敗するなどと微塵も思っていない。何が彼をここまで狂わせたのか想像だに出来なかった。

「そして一度36号は死亡、例の男が躍起になったところで発覚し逮捕しました」

「しかし36号は復活した、あのじゃじゃ馬も厄介なものを見つけてくれたものだ」

とある老人が呟いたことに一同はうなずく。狂気が産んだ狂気の卵である36号を以後どうするか？それが今の会議の主題である。開発記録によれば生命体の形を成していることが理解出来ないほどの高密度な異常であることがわかる。実験のどれもこれも行き当たりばったりで何故成功したか理解できない。だが今36号がここに保護されているのだ。

「こんな術式を組み込んで36号は何故生きているのだ？何かわかったか？」

周りよりも少し若い初老の男性はフードの男に聞いた。このフードの男こそ36号を治療をした本人である。最も治療する場所は喉以外もなく本来の目的は推測できるように36号を調べるためであった。彼の良心が痛んだが帝国に身を預けた存在として背くわけにもいかず、何より36号が敵対することに恐怖を覚えた一人であった。

「詳細は不明です、体液等を解析してみましたが理解不能の一言に

尽きます。正直に申し上げると彼はもう人間でなく人間の形をした『何か』ですね。魔力や気の存在値も・まあ計測器がいかれましたね。魔法の適性ですが影の属性以外全てありませんでした。恐らく影に喰われたかと」

「そいつは危険すぎる！早急に処分するべきだ！」

毛深い獣人が机を叩き叫ぶ。その声に賛同する声も多数あった。しかし

「いや、これほどの戦闘力が確実に得れるのだぞ？来るべき戦争に備え訓練を施すべきだ。なあに死んでも所詮ホムンクルス・・・おっと、開発者はエックスと呼んでいたな」

「いや訓練の必要性もあるかどうか。これによれば知識と経験の継承もしているはずだ。成功かどうかは載っていないがな」

戦闘に利用、この意見も最もな理由である。あの研究者がこの帝国のために働いてくれたのだ。敵意の矛先は全て研究者である男であり、自分たちは可哀想なエックスを保護した。それだけであった。

「こんな外道な開発をしたことを外部に晒してみろ！それこそメガロメセンブリアの害虫どもがこやかに魔法を撃ってくるのだぞ！」

「その魔法も36号なら払い落としてくれるだろうさ。我々は36号を狂った研究者からただ保護しただけだ。その御礼として働いてくれるのだよ」

「その36号が我々に牙をむいたらどうなる！？我々が負けるとは思えぬが巨大な被害を被るぞ！？その時にこそあの害虫共が・・・」

！」

怒号が行き渡る会議室。しかしその一角には不思議と静かな場所があった。無論、熱くなっている重鎮達はそれに気付いていなかった。36号を兵士として育てる左翼と処分すべきだと右翼。そしてその真ん中には穏健派……、36号をただ一つの生命として生きて貰う。そういう考えを持った人たちがいた。ヘラス帝国はメガロメンセブリアを主体とする連合とよく区別される。というのも南部北部もあるせいか帝国には亜人が多く住んでいた。この帝国を治める皇族も亜人の一つである。人間は昔から同じ姿をした別の存在を忌み嫌ってきたのだ。故に亜人たちは昔からよく追いつていられた。なにか事故があったらまず亜人が怪しまれる。それほどひどいものであったのだ。そんな彼らは同じ人外であり人の姿を持つ36号のことを思わずにはいられなかった。勝手に作られ勝手に彼の将来を決めようとする。なんと愚かなことであろうか。かつての人間の所業を恨み通し今度は彼ら自身がそれを振るう。

「……護衛、はどうだ？」

そんな中ポツリと声が上がった。その声に関心を感じた重鎮たちは見る間に静まりかえっていく。ゴクリと喉をならす音が聞こえた

「じゃじゃ馬に責任を取らせるのだ。発掘したモノは発掘者のモノ、だ」

帝国の皇女を畏にはめようとするその画策に誰一人とも反対することとはなかった。彼女が彼を制御できれば御の字、彼がもし何かすれば皇女の責任だ。いくら皇女といえども多大な被害を出した存在を預かる責任くらいはある。最後の皆「おまえにまかせた！」作戦が発動した。本当にみつももない。お前等人間じゃねえ！（種族的な

意味で)

おつすオラ36号！なんだかよく知らねえーが今ヘラス帝国つてとこに世話になってんだ！働く必要もないし本当にニートつて最高だな！最高に最低でクール！つて奴だ

「調子はどうじゃ？」

「悪くは、ない」

起きたらあの皇女様がわざわざ俺の処にきたんだぜ。暇なのかどうか知らないがその優しさに俺感動。声もまだまだぎこちないが出るようになった。そういえば俺の姿をさつき始めてみたんだけどよ？なんでかアルビノだったぜ。日光とかヤバくね？と思ったがここは魔法がある世界だったな。なんとかなるっばい。ヒリヒリすることもなく安定している。

「そうじゃ！お主名前は・・・覚えておらんか？」

名前？前世の名前も忘れちゃったしな。さてどうするか。正直36号という俺の番号があるがそれを名乗ってもいい。この36号が受けた実験の数々はそりゃひどいものだった。まさか俺が思い出してしまうとはな。実感ないからマシだ。例えるならば過去に習った数学の公式『ああ、こんなあったね。はいはい』な感じなのだ。

「サーティックス・・・いや、ダブルシックスでいいか」

「む、そんな名でいいのか？ いやお主がそれでいいと言つのであればそれでいいのじゃが」

6の二乗は36。なんかコードネームみたいで正直かつこいと思つた。それにこの世界は厨二病が許される世界でもあるのだ！（多分）ならば大丈夫だろう。別に今ココでまじめな名前を考えるのも面倒だ。何より考える気になれない。忘れている本来の名前だが感覚として俺の名前はそうである！ なわけでコードネームみたいなほうが良い。ただそれだけだぞ？

「そうか！ じゃシックス！ 妾はテオドラ・・・む、長いのは別によいか。テオで良いぞ！」

無茶言つなこの角つ娘。突然皇女様を呼び捨てとかまじ難易度高いっす。小心者（笑）な俺には到底無理な話である。まあ無難な方でいくか。そういえばシックスとか呼ばれるとどこぞの怖いおっさんがアババババ

「無理無理、善処はしますよテオドラ様」

むー、とほっぺを膨らませていかにも不機嫌ですよ？ な感じを出すテオドラ様。いや、俺を萌え殺す気か。俺の今の肉体の耐久度がなかったら負けていたぜ。そんなテオドラ様の攻撃を受け流していた時に扉から誰かが入ってきた。従者の人か？・・・なんかオッサンだった。しかもすごく偉そうな

「テオドラ様、例の件に関して・・・」

「む、そうか。ではシックスまた来るぞ」

そう言っ出て行つた。例の件とか気になる言い回しだが・・・、ぶつちやけ俺のことだと思つ。帝国にしてみれば爆弾抱えているよなものだ。俺の概要は単騎による大軍撃破。戦闘に関する知識と経験も継承・・・されているらしい。魔法の適性とかは良くわからない。まあ言つと俺はただのホムンクルスではなく戦闘兵器エックスだということだ。エックスにシックス。どこかの兵器のディーラーも真つ青だ。とにかくそんな奴がここにいるんだ。俺の（肉体）製作には人間とは思えないような狂気の数々が詰め込まれている。メガロメセンブリアの元老院どもに見つかつたらそれこそ攻め込まれるきつかけを与えてしまふ。まあどうせ戦争起きるんだけどね。

俺一人になつたため部屋は静まりかえる。場所が場所・・・帝国の城の高い処にあるせいだ騒音もない。もしかしたら防音の魔法が使われているのかも。ちょうど誰もいなくなつたし投影の魔法（魔術と言つと色々厄介なのでこう言う）の練習、呪文を探すか。『同調・開始』ではなく俺の、俺だけの呪文を・・・。

「・・・『歯車・起動』」

ガチャンと壁一面の歯車がガタガタ動き出す。何かが流れる感じがした。成功だろうか・・・これが魔力かどうかはわからないが。なにはともわれ呪文は決定したことだ。何か適当なものを投影してみよう。そういえば俺の属性はなんなんか。衛宮んは剣だからな。向こうの世界とここの世界の属性には違う点が多くあるが・・・まあなんとかなるだろ。

知識を漁ってみる。さすがに宝具はないがりとあらゆる武器の設計図が・・・俺にはわかる。これ以外の表現が見つからないので読者の皆様は混乱するだろう・・・変なこと言つた？作り出すのは

一発の銃弾。ダムダム弾っておい！ちなみにダムダム弾とは鉛部分を剥き出したで非常に痛い弾丸である。最も今では規制されているし、何より最新鋭の銃では剥き出しの鉛が溶けてしまう。

「俺の属性は・・・銃、か？」

なんとなくだ。なんとなくしかわからないが銃っぽいような気がする。剣や槍、斧など設計図を片っ端から引っ張って見たがどれもこれもしっくりこない。弓や暗器普通、かな？飛び道具関連かもしれない。投合の武器は当てはまらないようだ。それにしても銃か。どこかの軍人が言っていたが殺す感触を覚えなくていいな。スナイパーシックスになろう。うん・・・ってなんで俺は戦うことを前提に考えているのか。

ジャッカルとか454カスールとかもじゃんじゃん出てくる。魔力（？）の問題はどうなんだろう？衛宮みたいな異常な投影にしてみらったがそれは『固有結界』から来ているもので、俺は実際どうなのだろう。試しに魔力（？）を抜いてみたが壊れる気配はない。俺にも『固有結界』が使えるのか？そこまで狂ってないと思う。これについてはおいておくほかないな。

「撃つてみたいな。心湧き踊る。」

人ん家（城）でぶっ放す莫迦はいないからしないけどな。しかし俺の感だとこのまま戦争に参加させられそうだ。俺が帝国の軍人なら俺みたいな喉から手が出るほど欲しい兵器はいない。訓練させて参加させる。それこそ安住や戸籍を振りかざして。覚悟するしかないのか？俺の体にこのチートパワーがあるから死ぬなんてことは・・・わからん。いやチートパワー貰ったのに肉体もチート化とか、どれほど『幸運』なことであろうか。

「……『歯車・停止』」

床に散らばった弾丸や銃を消す。それにしても俺の属性が重火器もカバーしているとは。もしかしてミニガンとか汚物消毒用火炎放射とかメタルストーム砲とかいけるかもしれない。そう思うとだんだん投影したくなってきた。コレが若さか！？

「シックス……話があるのじゃが」

ガチャッと扉を開けて入ってきたのは我らがテオドラ様。なにやら暗い顔をしているが、俺の処遇が決まったのだろうか。そもそも俺の処遇についてかわからないのだけでも。

「どうぞテオドラ様……俺の処遇、ですか？」

「!?!」

ダウト、いや違うかここはビンゴ！が正解か。俺は処分されるのか？もしそうだとしたら速攻で逃げ切る。自身は……あまり無いがこの肉体のスペックに期待しよう。北の連合軍の範囲まで行けば利用されるだろうが殺されることはない……はずだ。

「……お主は妾の護衛として働くのじゃ。何が責任じゃ。押しつけてただけじゃろうが」

震えながらそう言うテオドラ様。さて俺を押しつけられて残念に思っているのはしょうがないが……、さすがにシヨックだな。俺は完全にバケモノになっているのだからか。護衛か、守ることは出来るかもしれない。バケモノの命を使えばそれなりにはなるだろう。

「あ、いやお主のことが嫌いなわけじゃないぞ？ただ、妾の護衛と
いうことはいつか戦闘する時がくるのじゃ・・・お主には戦って欲
しく、ないのじゃ」

安心した。あそこまで露骨に拒否されると化け物ハートにも傷がつ
くよ？それよりなんで戦って欲しくないのか・・・。俺の目的は戦
闘だろ？いや戦いたいわけじゃないのだが。

「俺が戦闘を目的としたホムンクルス・・・エックスだからか？」

「お、思い出したのか？」

涙目になった顔を上げ俺のほうを見てくるテオドラ様。思い出した、
というより知識だろうな。何度も言うが他人事にしか感じないもの
だが。俺はコクンと頷いて答えた。護衛、か。まあやれるだけはや
るさ。どうせ戦う力はあるのだ。せめて俺を助けてくれた女性を、
守ることはするさ。一応男なもんで

「テオドラ様」

「な、なんじゃ・・・？」

「俺には戦うことしか出来ません。けれども・・・貴方だけは守っ
てみせます」

ベットから起きあがり知識としてしか知らない敬意を表す。ギクシ
ヤクしているかもしれないが、精一杯やってるから見逃して欲しい
モノだ。というか憑依して一日後に偉い人の護衛とか。俺運が良い
のか悪いのか・・・あ、俺幸運を拾う力貰っているんだった。

俺の忠誠を受け取ってくれたのか漫画通りの笑顔を見せてくれたテ
オドラ様であった

「早速命令じゃ。二人の時はテオと呼ぶのじゃシックス」

「.....」

それは反則だろ。

T o b e c o n t i n u e d

第二射 出席番号36（後書き）

帝国の皆様 36号は色々知らないと思っている
シックス 実は全部知っているが所詮他人事

第三射 ドタマに穴あけたる(前書き)

距離に関して変な感じですが・・・

あれだ、魔法世界の対魔障壁がすぐくて近距離じゃないと貫けないんだ。

第三射 ドタマに穴あけたる

重々しい空気の中一人の老人が肘を腕につき、手を顔の前で口を隠すように組み軍人かと思われる人間に聞いた。

「36号・・・シックスの訓練状況はどうだ？聞くまでもないが・・・使えるんだらうな？」

「既に訓練の全課程を終えました」

「え？」

「え」

「なにそれこわい」

「36号（以後シックス）に関する報告書」

某日シックスに対する戦闘訓練を開始した。本人の承諾は軽く得られたものの第三皇女が強く反発。以後シックスから直接説得されたものなり。訓練内容は以下の通り

- ・ 刀剣類、及びその他の武器を用いた接近戦
- ・ 暗器の使用訓練
- ・ 魔法の会得
- ・ 魔法に関する知識、及び術式に関する技術
- ・ レアスキル『投影』の訓練

以上の通りである。なお全課程を数日で終了されたし。開発記録に

もあつた通り知識と経験は継承されているようだ。魔法の件に関しては影の属性しか使えないため専門の魔法使いを抜擢。基本すら数時間で会得、後は実戦で昇華されることを願う。なお訓練過程が終了後にはシックス独自による旧世界の兵器『銃』の訓練を開始、これは形になるまで少々時間がかかったみたいだが現時点では目を見張るものがある。またレアスキルとして確認されている投影の魔法だがこれに関して多くの魔法使いが解析したがどれもこれも実現には至らず。この投影の魔法は魔力を用いて『現物』を生み出す特に極めて珍しい魔法である。なお自身が作った存在は自由に消すこともできるそうだ。この投影による魔法には既存の魔法と同じように錬度がありそれによって再現度が上下する。シックスが訓練に用いる銃の類もこれによる生産であり最初のほうこそ数発放っただけで故障の現象が見受けられた。しかし錬度を高めたのか現時点では故障の現象は見られず。またどれほどの生産を行うことができるのかまだ不明である。

（報告書より）

「すさまじい成長速度だ。いやここはやはり知識と経験の継承が成功した、と見るべきか」

獣人の重鎮がこの報告書に目をやり呟く。シックスの成長速度もさることながら『知識と経験の継承』がどれほどすさまじいものかを皆は理解していた。中には研究に関する全てのことを処分するのを反対したものもいる。何よりこの『知識と経験の継承』に関する技術だ。これをシックスのように実現させれば多数の凡人で数百年に一度の天才を越えることが出来るのだ。最もそれはあまりにも危険すぎるため皇帝自ら処分の命を下した。

「そしてこの投影という魔法、戦艦などは造れないのか？」

「設計図など詳細を教えてくださいるならばと本人自らそれを肯定して
いますが・・・第三皇女の強い反発によって実際作ることはないで
しょう。名目は護衛ですのであそこまで反対されると無理でしょ
うね」

チッと舌打ちの音が聞こえた。しかし戦艦など造らなくともこのシ
ックスがその分活躍すればいいだけだ、とまとめ役の重鎮が発言。
その言葉に無理に納得したのか厳つい顔で退室していった。

ダダダ！！

「当たり前じゃ」

ダダダ！！

「ど真ん中・・・というか木っ端微塵じゃ」

ダダダ！！

「・・・真ん中」

ダダダ！！

「・・・」

ダダダ！！

「これ以上する必要はないじゃろ」

圧縮空間に作ってもらった狙撃訓練施設で俺は射撃訓練をしていた。使用武器はバレットM82A2。素晴らしい出来だ。隣で耳当てをして望遠鏡を覗いているテオ。硝煙の臭いとか大丈夫なのか。まあいいだろう。俺が悪いわけじゃないし。ちなみにテオに確認されなくても『肉眼』で見えるからね。なにこの体。シモ・ヘイヘも目じやないから。どこの世界に機関銃でオンリーヘッドショットかます基地外がいますか？しかもこの体反動をまったく受けないのだ。RPG-7、ジャツカルやハルコンネンだって反動が無いかと錯覚してしまった。さすがエックスさんマジパネエっす。

「狙撃の秘訣はただ一つ、練習だ。かの死神シモ・ヘイヘもそう言っている。彼は『150mの距離から1分間に16発の射的に成功した』とか殺害率が150%とか。狙撃にはスコープだって用いていなかったんだぞ。しかも愛銃は今や旧式のモシン・ナガンM28だ」

俺の熱意ある演説にテオはため息を吐く。・・・あ、別に知らないか。ここじゃ銃（笑）だったんもんな。腹を貫通した程度では回復魔法で治るし。さすがに無関心ではないが。

「そんなこと言われてもよくわからないのじゃ」

「ああ、すまんすまん。旧世界の知識だ。俺には無駄な知識があるようだな。そろそろ上がるか。テオ、手伝ってくれてありがとな」

「ふん！妾の護衛じゃ！手伝うのは当たり前のことじゃからな！！」

いや護衛の訓練手伝う主様なんかいないって。しかも微妙にツンデし調なのは何故か。別の訓練もすぐに終わったし、そろそろ戦争も始まるか。始まった理由はなんだったかよくわからないが、俺が原因となって戦争とか嫌だよなあ。俺は俺の出来ることをするさ。何よりテオを守るという役目を。英雄？知るかボケ

「ほら速く行くのじゃ！」

「了解」

結果的にはこの世界は救われるしテオドラはジャック・ラカンに普通ではない感情を持つだろう。俺がいなくても物語は進む。だがこの世界には今俺がいる。俺がどう影響するかどうかわからない。本当は俺は何もしないことが良いのかもしれない。ここには本当の主人公がいる。だが悲しいけどこれ戦争なのよね。戦争中に俺に見つかって狙撃されちゃっても文句言わないでね。ハルコンネン使う気まんまんだから。あれ絶対人間に向けていいものじゃないって。何よ射程距離が4000mって。

訓練に訓練時々テオとイチヤイチヤしたり。そんな日々の中俺は一歳の誕生日になったり戦争が始まったりと。完全なる世界っぽい奴らが重鎮達に接触していたが・・・さてどうするか。さすがに射殺すると俺ってバレルからな。そんなことをするとまさしくメガロメセンブリアの老害どもが笑顔で噛み付いてくるな・・・どっかで聞いたような言葉だ。

「出撃命令、ですか？」

「・・・うむ。なにが護衛なんじゃろうな。妾を守るため討って出る、だそうじゃ」

ついにきてしまったようだ。どうせ俺が先頭に繰り出されるだろう。死んだとしてもそこまでだ。俺の肉体がそう簡単に死ぬわけがないがな。驚いたよ？まだ投影の錬度が低かったとき銃がよく破裂したんだ。持ってた手の皮や肉が吹き飛んだね。痛かったけどすぐに慣れるわみるみる再生するわ。

「テオドラ様」

「な、なんじゃ？」

「必ず帰ってきます。俺は貴方様の護衛ですから」

うむ！とにこやかな笑顔で返してくれた。くさい台詞だと思うが、俺の偽りのない本心だ。戦争は正直怖い。人を殺すことも。悲しいけどこれ戦争なのよね。悪いが糞ったれども、俺の礎となりな。

ゴゴゴゴゴゴゴ

すごい光景である。これが魔法界の戦争なのか。俺は一番先頭にある戦艦の・・・名前忘れた。まあいいか。空を覆い尽くす戦艦戦艦。俺にはただの的にしか見えない。射程距離4000mの餌食だ、愚か者め。近づいてきたら影で切り裂いてやるぞ。

「シックス殿、敵戦艦との距離残り5000mです」

不安の顔を隠し切れてないぞ艦長。まだ戦力が定まってない不確定な存在がここにいるのだからしょうがないのだが。相手が戦艦なら余裕だ。人を殺すのも慣れていはいるが、さてさて。知識と経験の継承がどれほどのものか見せて貰ったよ。軽く引き金を引けるんかな。

「……ああ」

フードを深く整える。俺はアルビノだからな。日光にはなんの影響もないが怖いのだよ。俺は白いフード付きローブをテオの前でもしている。フードも被ってるよ？あんまり顔見られたくないからべ。正直イケメンだったが目が怖いのだよ。さてそろそろ甲板に出て砲撃開始と行きますか。

「どちらへ？」

「蠅は邪魔だと思わないか？」

はあ？な顔をしている艦長どの。術式を追加して強化したハルコンネンの力を見せてやるうではないか。局点防衛用長々距離砲撃戦装備ハルコンネン、別に拠点じゃないが……。全ての地上・航空兵器を撃破できると豪語している兵器の威力を見せて貰おうか。あ、コンテナは邪魔だからハズした。どうせ弾は投影で作りまくるし。くつくつく、広域立体制圧用爆裂焼夷擲弾筒ウラディミールの炎を受け取れ蠅ども

ガチャン!!!!

風の音がゴウゴウする甲板。ダイレクトに風がぶち当たる。甲板に固定されたハルコンネンのスコープからの的を見やる。狙うはブリッジ、またはエンジン部分。兵器の知識詰め込めばそれだけ優位になるのだよ。何か撮影されているような気がするがまあいいさ。

ズドン！！！！

もはや『銃』はあらず。大砲かなにかのような轟音が空に響く。甲板に亀裂が走ったが気にしない。わざわざ爆煙をあげている戦艦を見やる必要もないな。じゃ次行きますか。

くとある艦長の日記く

開戦より数週、ついに噂のエックスが投下されるという話を聞いた。しかも私が任されている戦艦だというじゃないか。正直不安であったが、それもこの目で見たときそれが全て吹き飛んだ。

彼が甲板へと移動し莫迦でかい大砲みたいなやつが文字通り火を吹いたんだ。一瞬のことだったよ。私には何が起きているかわからなかったが。とりあえず遠見の魔法で連合軍の様子を見てみたんだ。もう何が何だかわからなかった。

次々と爆煙をあげる連合の戦艦ども。何もすることもできずむやみに回避行動をとり味方と衝突。そこを射撃（あの攻撃を射撃と書いてよいのかわからないが）され両艦共に火に包まれていた。私の戦艦の甲板から放たれる紅い一本の閃光は、連合の戦艦を次々と地面にたたき落としていった。

このときが彼が甲板に出るまえに言った一言「蠅は邪魔だと思わないか？」を本当に理解したときだっただろう。彼にとってアレはただ的、いやもはや的以外の邪魔ものでしかないのだ。上空から落ちてきた戦艦に尚更混乱していく陸軍。ブリッジを正確に狙撃していることに気付いたときは私は不安を越え恐怖を覚えたものだ。これがあの帝国の秘密兵器エックスなのだろう。

（某戦闘の後）

何発撃ったかわからないくらい撃った。焼夷弾の効果か辺り一面火の海だ。環境破壊？俺はテオを守ればそんなんでもいいんだよ！エゴをオカズに飯は食えないのだよ。気付けば味方以外の戦艦一つない青空に黒煙が天まで届いていた。制空権を反撃することも出ずに奪われた連合は既に撤退を始めていた。

「シックス殿、連合軍が撤退を始めました」

「……見えてる」

いつのまにか甲板に出ていた艦長が教えてくれたが本当に見えてるからね。彼の顔には不安の代わりに恐怖と興奮が混じっているように見えた。俺はただハルコンネンを立てて戦場という仮初めの名前であるただの蹂躞場を眺めた。多くの人間が死んだだろう。だがでっつていう。

重鎮達は空いた口が締まらなかった。まさか戦闘と呼べる戦闘を行わずに勝利を、しかも圧倒的な勝利をもたらしたのだから。会議場には大きなスクリーンに二つの映像が流れていた。方や黙々と長銃の引き金を引きリロードするフードの男。方やただ燃え尽きて沈みこむ戦艦の数々。

「勝つたな」

「ああ」

一人の重鎮がやっとの思い出で口を開いて放った言葉にその返事。だれもそれを疑うことなどなかった。ただ中にはそれが敵対するかもしれない恐怖を持つものがいた。その強さにただ陶醉するものがあった。

「これで連合の戦力は大きく欠いた。後は我々の仕事だ」

さすがに彼一人で戦争させるわけにはいかない、そんなことをすれば間違いない愚か者だ。結局どの重鎮たちも自らの手柄が欲しかったようである。

「この戦局で我々の被害は零、方や連合の被害は見た目で8割の損害だ。戦争を続行できるかどうか疑問すら覚える」

気が付けば映像は二つの映像は一つになっていた。映し出しているのは夕焼けを浴びるフードの少年。右手で支える立てた長銃。そして天に届かんとする黒き煙であった。

「聞いたぞ圧勝・・・というかお主だけで良かったんじゃったな」

テオドラの笑顔が眩しい。どうやら俺はこの笑顔に惹かれているらしい。なにしろ現実ではこんな笑顔を見る機会なんてまったくなかった。ロリコン？いいえ違います、俺も少年サイズだから大丈夫なの！というか俺一歳だから！ばくひとちゅ！！

「御陰で俺の出撃予定は繰り上げ、老人共がよってたかって少なくなつた手柄を奪い合うそうだな」

「ふん！いい気味じゃ！まあお、お主が妾の側にいられるのじゃからそこだけは褒めてやらんとな」

ブンブン怒ってかと思つたら顔を真っ赤にしてモジモジ言うテオ。ああ俺がもつと成長していたらお持ち帰りしていたることだ。あぶねえ

「テオから貰つたアーティファクトも使う機会がなかったな」

まだ仮契約だがテオによると将来は本契約もするらしい。本契約の方法って何だろう。いや予想はつくが・・・。

「そうじゃなー、折角いいものじゃったんだが・・・なあシツクス？」

上目遣いで何かを聞いてくるテオドラ。いや流れからしてアレしかないんだろっけどさ。

「仰せのままに・・・」アデアット」

出てきたのは龍の形を模したソーサー。ピンクの悪魔が乗りこなしピンクの機体に虹色の羽を持つエアライド、ドラグーンだ。俺があのピンクボールと同程度のサイズと考えたうえで、ゲームより二回りほど大きい。人を乗せて空を飛び回れる。

「よし！さあ行くのじゃ！」

音をたてて数秒で雲を突き抜ける。おいそんなに俺に体を押し当てるな。このマシンの特性故か自動に風やらを遮断する術式も展開するというサービスつき。帝国の城を中心にぐるぐる回るようにしないとすぐに迷ってしまうほど速い、なにこれすっごく速い。

T o b e c o n t i n u e d

第三射 ドタマに穴あけたる（後書き）

巨大な重火器はロマン。アーティファクトは移動用のブーツを。

第四射 帝国の狙撃手

戦争真つ只中というのにこんなマツタリしていいのかと思う今日この頃。俺が戦艦を撃墜しまくってから各地で連戦連勝。正直このままメガロメセンブリアまで到達しそうな勢いなのですよ。で、軍人さんかというと俺のせいで激減した連合軍の戦力を食い潰す勢いで走ってる。手柄が欲しいんだろ。俺が出撃する機会も5・6回に1回。『紅き翼』の情報もまだ出ていないわけでのまま終わってしまいそう。ぶっちゃけ勝てば戦争終わるからね。おそらく今頃連合軍側に大量の兵器やらが流れていると思うよ? 『完全なる世界』は戦争を続けさせて両軍を疲弊させるのが目的っぽいしなあ。

「おいシックス、なんか雑誌におまつばいやつの話があったぞ」
ああ、ついに俺も雑誌デビューか。ええと、MAGI・・・いいか別に。あれじゃね、将来タカミチが載るとかいう奴だ。さて俺はどう紹介されているのか。出撃すればするほど戦艦撃墜数が増えていくからな。ちなみに出撃回数全5回で大小あわせて撃墜数179隻(帝国調べ)らしい。終戦後のジャック・ラカンが130台だったからその軽く1・3倍。連合側には結構恐れられているらしい。

「何々?」

「今月の特集・帝国謎の狙撃手! その正体は?」

今巷で噂される帝国謎の狙撃手を今回を追ってみた。戦時中のため情報が極端に少なく帝国の公開情報にもまったく記されていない。

性別年齢も不明。しかし今回なんと彼を見たというところ軍人とコ
ンタクトに成功したのだ！帝国の狙撃手、いよいよその謎解明のと
きか！？

Q、顔などは見ましたか？見えたならどういう顔でしたか？

A、そうだな・・・、目が赤かった、な。それだけしかわからなか
った。怖かったんだよあいつがもつ銃が火を噴くたびに、仲間が
肉片になっていくんだ。もう怖く怖くて（泣）あいついつもフード
被ってるそうじゃないか。ここだけの話だけどさ、俺逃げ回ってて
ね、その時だったよ。見えたんだ。先ほど言ったとおり真っ赤な
目さ

Q、噂では複数人物という話がありますが？

A、そりゃねーな。考えてみるよ。複数人物ということはあの異様
に正確で強力な狙撃ができるやつが複数人いることになっちゃう。
あいつが出撃したらこっち側の戦艦のおよそ8割が地面とキスして
しまうよ（苦笑）あいつが出撃する時はな、ひとつの戦艦が妙に出
張ってたんだ。そこにアイツがいる。妙に出張ってる戦艦を見つけた
らみんな一斉に非難を始めるんだぜ

Q、戦艦を多く撃墜しているとのことですが、どれほど？

A、あー、一応連合の公式では92隻だったかな？正直いうとあれ
は嘘だな。開戦当初の戦いかなあ、俺が載ってる戦艦が運よく逃げ
ることができたんだけどよ。周りにはいまやいまや落ちそうな戦艦
が数隻だけだったぜ。見渡す限りの戦艦が戦意が最高潮にも関わら

ずにな、アイツの冷酷な狙撃であつというまにお陀仏だ。あのときはそうだな、50隻ぐらいあつたんじゃねーか？あいつが出撃していたのは5回だけらしいが。あいつがいる限り空には上がれねえ。面白い話だがアイツが現れて戦艦乗りが激減だ。（隊員募集中）

等といった彼（彼女？）に関する有益な情報はなかったが、狙撃手の恐ろしさだけは皆にも伝わることだろう。白フードに赤い目！みんなの情報を求む！！

〈特集・帝国の狙撃手の謎〉

「なんだこりゃ」

「いまや連合軍側にとってお主は恐怖の塊じゃ。おぬしのおかげで制空権がとり放題とな」

本当は地上への攻撃もできるが世の中バランスが大切だ。他の軍人さんにも手柄を残すように『手加減』しないとイケないとは。ドラグーンで敵のサイドからまっすぐ突貫したり地上に置きまくったメタルストームで弾幕張ったりと俺は快調だ。投影の錬度もぐんぐん伸びる。空に固定したまま撃つこともできるようになった。

「ま、お主がいれば戦争もすぐに終わるじゃろ」

「……あぁ」

それは無いな。まだあいつらが来ていない。時系列は知らないがあいつらは必ず来るはずだ、最強の魔法使いどもがな。そもそも俺が出撃するたびに何十隻も撃墜するのだ。それなのに一向に戦艦が無

くなる気配がない。『完全なる世界』もまだまだ終わらせる気はないようだ。

「む？旧世界のNGOとかいう団体が連合側に参加したらしいぞ？平和団体のくせに戦争を長引かせるつもりなのかのう」

NGO・・・『悠久の風』か！『紅き翼』がいよいよお出ましというわけか。正直怖いな。あんなでっかい魔法ぶつ放す奴と戦いたくないものだ。何しろ俺狙撃手なもんで。ベットに寝転がりフンフン言いながら足をばたつかせるテオに萌えながら俺はあいつらとの戦いをシュミレートする。まだ相性が最悪かと思われるジャック・ラカンなどはいないだろうが。それでもあの・・・ナギ・スプリングフィールドは恐ろしい。

悠久の風所属『紅き翼』を率いるナギ・スプリングフィールドの名はすぐに広がった。あともう一步でグレートブリッジを陥落させようかと帝国は真の目的であるオステティアへと手を伸ばしていた。が、奴らのおかげでひとまず後退したらしい。しかも超痛手を追った軍団が速攻で撤退してきた。それに鼓舞されたのか『完全なる世界』の仕業かあらゆる前線を押し上げられ、帝国の軍人どもは異様にピリピリしていた。

「・・・以上が作戦概要です。なにか質問は？」

「・・・無い」

俺の出撃命令が出た。情報によると連合は異様な戦力回復をしたらしい。誰か怪しんでほしいものだが正直殺し殺される戦争でそこま
で考えられることはできまい。

「『連合の赤毛の悪魔』にご注意を」

返事をすることもせず俺は最初に乗ったあの戦艦に乗り込む。艦長の目が異様にキラキラ輝いていて怖い。今回はあまり期待しないで欲しい。ああ『紅き翼』よ。それはそれはおろかなイカロスのごとく。俺の頭上を飛び越えることなど許さんよ。その翼ごと打ち落とすしてやる。

「シックス殿！今回もあなた様の狙撃を糞つたれ連合に見せ付けてやりましょう！フウハハハハ！！」

どうでも良いが甲板のひびは記念にとっておくらしい。ついでに言うところの戦艦被弾数が零なのだ。艦長が少し偉くなったらしい。ナギが出ていた戦争でもよ？この戦艦のクルーもなんか俺のことを宗教の域に入ってるぐらい崇めてくる。正直帰りたくなった。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

「フハハハハ！ー！ー！我らの戦艦の強さを見せ付けてやるのだー！」

ウオオオオオオオー！！！！

ブリッジに次々とつながる各部署からの雄たけび。耳が痛い、怖いなにこの戦艦怖い。というか我らってお前らただ戦艦縦横力クカク動かしているだけじゃねーか。火力が俺の狙撃（という名の爆撃）だけってどうよ？

「全・力・全・進！ヒヤツハーア！！」

おい画面につば飛んでるぞ艦長。それにしてもやはりこの戦艦が先頭になるわけなのだ。インペリアルシップに尻向けてるとかもはや笑えてくる。

「おい貴様！なんだそのウスノ口は！？インペリアルシップ皇帝に尻の穴でキスする気か！？ヒヤツハーア！」

「ヒヤツハーア！申し訳ございません！！」

いつのまにか掛け声が『ヒヤツハーア！』になっていた。そして前進を始めて数十分後、相手さんが俺の射程内に入ろうとする。

「ヒヤツハーアど・・・シックス殿！糞どもが『我々』の射程内距離に入ろうとしますよ！！」

おい何か最初変な風に呼ばれたような気がするぞ？誰だよヒヤツハーア殿って！どこまでテンション狂ってるんだ！というか我々て！俺のだよ馬鹿！つ、疲れるぜこの戦艦。

「いつになつたらあの帝国の狙撃手に会えるんだ？」

連合軍のとある戦艦での話。杖を持った赤毛の少年が仲間と思われるフードの男と短い黒髪のメガネの男に言った。

「安心してください。哨戒によると異様に出張った戦艦がいたそうです。あのインペリアルシップよりも前にね」

フードの男がフフフ、と笑いながら返した。それを見たメガネの男は、やれやれ、とため息を吐き自らの獲物である『刀』を握り締めた。

「へ！それはいい情報だ！後ろで逃げ回る卑怯者に俺たちの強さを教えてやらねえとな！」

ダアアアーン！！！！

その時だった。突如連合軍の戦艦に響いた爆音。帝国の戦艦との距離はまだあるはずであったのに。しかし誰もが起こったのか理解していた。帝国の狙撃手スナイプ・オブ・インペリアルが戦場にいると！その時点で多くの兵士の戦意は無くなる。特に戦艦乗りにとって彼の存在は致命傷とも言えるのだ。

「な、なにが起きた！？まだ距離は・・・狙撃か！？」

「そのようですね、ナギ。行きましようか。狙撃手をなんとかしないと勝利は得られません」

そう言い戦艦を一気に飛び出した『紅き翼』。意気高揚と身を乗り出したが既にそこは戦場となっていた。遙か彼方から飛んでくる紅い閃光が身が震えるほど正確に、戦艦へのブリッジへとまるで吸い込まれるかのように。次々へと爆煙を上げる戦艦を後ろにし『紅き翼』の面々は狙撃手のほうへとまっすぐ飛んでいった。

「ナギ！絶対に紅い閃光に当たってはいけません！あたったら間違
いなく即死です！」

ドオオオン！！！！

「ああ！わかつてるよー！！」

彼らが飛んでいっても魔弾は減らない。爆音と爆煙を起すそれは
まさしく『死』を体現していた。

ダアアアアアーン！！！！

「うお！危ねっ！？」

赤毛の少年へとまっすぐ飛んできた弾丸を間一髪で避ける。フード
の男はその時点で狙撃手が彼らへと標準を向けたことに気づいた。

「いけませんナギ！狙撃手に狙われています！ここは散ったほうが
！」

「（弾丸って斬れるのかなあ）」

「ああ！だが俺はあえてまっすぐ行くぜ！」

「（なにそれこわい）」

赤毛の少年の言葉に別のことを考えていたメガネの男は頭痛を覚え、
こめかみを押さえた。しかし彼もフードの男も、そんなところが彼
の良い場所だと、無理に納得していた。

ダアアン！！！ダアアン！！！！

しかし散ったのも無駄であった。狙撃手はただ一点、赤毛の少年へと標準を向けていたからだ。気づいたその時には既に遅く、先ほどとは比べものにならない数の弾丸が赤毛の少年へ向かっていった。

「（まずい！むしろ私達を散開させるのが目的でしたか！？）」

ダアン！ダアン！！ダアン！！！！

弾丸が赤毛の少年のロープを掠りとる。掠っただけでロープをボロクズのようにした威力に恐怖を覚える面々。されど恐怖を感じ取る時間も与えないのか弾丸は更に飛んでくる。

「はっ！後ろからネチネチすることしかできないくせに！うっぜえ！！！！！！」

赤毛の少年の右手に魔力が集まり『雷の暴風』が放たれる。弾丸を巻き込み爆煙をあげながら弾丸が飛んでいった方へと進んでいく。距離にしてあとどれくらいだろうか。彼らにとってその一撃必殺の弾丸の雨を超えることはもう二度と経験したくないものであった。

だがその放たれた暴風は帝国の障壁によってかき消された。さすがに赤毛の少年でも遠距離からの魔法では障壁を越えることはできなかった。

故にある程度近づかないと効果的な損害は与えられないのだ。彼の狙撃も遠くにいけばいくほど貫通力が下がるのは同じことであるが、違う点は彼の狙撃は二発同時に行われることであった。

「チッ！アル！詠春！援護してくれ！」

魔法の効果か狙撃はいつのまにかやんでいた。これを好機と一気に別の戦艦からの砲撃を潜り抜け先頭の戦艦を捕らえた。

「見つけたぜ！！マンマンテロテロ・・・」

異様に長い砲身の銃を狙撃体勢で構えていた白いフードを被っている男が見えた。彼は一向狙撃する気配がなく、赤毛の少年の魔法が放たれようとしたとき。

「ナギ！！畏です！！」

「メリークリスマス（地獄で会おうぜ）」

ダダダダダダン！！！！

赤毛の少年たちの更の上、桃色の龍の形を模したソーサーに乗り黒と白の銃を赤毛の少年へと向ける存在、間髪せずに気づいたフーアの魔道士『アルビレオ・イマ』はとつさに叫んだ。よく見れば狙撃体勢をとっていたのはただの人形であったのだ。

「あ、危なかった・・・」

ハアハア言いながら赤毛の少年を救ったのはメガネの男『青山詠春』・・・彼であった。赤毛の少年はいまだに啞然としていたがすぐに持ち直し、狙撃手へと見やった。しかし狙撃手は彼らに興味がないかのように高速で連合の戦艦へと向かって行った。

「野郎！逃げる気か！？」

「やられましたね、今回は撤退したほうがいいかもしれません」

「だー！ー！！！糞っ！狙撃手！絶対に覚えていやがれ！！」

赤毛の少年の叫びは、帝国の戦艦の砲撃によって掻き消された。

「忍法変わり身の術でござるよ、ニンニン！！」

それにしても危なかった。全然あたら無いんだもの。まあ『運』良く後ろの戦艦巻き込んでいたけど。というか完璧な奇襲だったのにあのフード野郎気づきやがって。というかキャラ被ってんだよ馬鹿。そいつを優先しときゃ良かった。

「おおつと危ね。だがその程度で我がドラグーンにはあたらぬ！当たらなければどうてことはないのだ！！」

連合の戦艦による砲撃、精霊砲だったか？それは帝国か。どっちだっけ？まあいいさ。俺の龍は止まらないいいいいやヒヤッハーア！！！！

「『歯車・起動』」

設計図を引き寄せろ。作るのはガトリングガンだ。両翼機首にくくりつけるように投影する。計三門の機銃が戦艦を狙う！さあ行こう戦争だ。俺の限界まで加速するこのドラグーンはあつという間に連合の戦艦上空へとたどり着く。

「誰か太陽を背に！？とか言っただけじゃない」

そんなことあるわけないので3門のガトリングガンが滑空しながら掃射する。3門のガトリングガンが戦艦を次々をぶち抜いてく。ああ爽快だ。・・・爽快とか何いってんだ俺は。そこから変の雑魚魔法使いが『魔法の射手』をぶっ放してくるが俺には当たらない。うらやましいな。俺影しか使えないもの。影の倉庫とか便利だけどさ。転移の魔法はまだ錬度が低くずれたりするのであんまり使わない。使わないからうまくならない。なにこの負のスパイラル。

ある程度片付けると撤退の動きがあった。その気になれば追撃戦も余裕で可能。というか先回りもできるのだが・・・。俺は戦闘狂ではないのでそんなことはしない。

どうにも俺はこの戦いで更に有名になってしまったようだ。もつとも名前も年齢も不明なのが。帝国の狙撃手スナイプ・オブ・インペリアルというそのまんまの二つ名で広まっている。白いフードに赤い目（雑誌情報）と桃色のソーサーにのっている。それしか情報が出回らないとは。連合の阿呆どもは帝国にスパイも送りこめないのか。

『紅き翼』と『スナイプ・オブ・インペリアル』との戦い。これからどう動くか。ここにゼクトやジャック・ラカンが増えたら俺でも対処できなくなりそうだ。影の魔法の練習をしとかないといけなくなるな。

身体能力に身をまかせるのも問題があるしな。気も大量にあるのだが基本的に魔力を使うので無駄になってしまった。偉い人によれば

咸卦法を使えるようになれば問題無し（モーマンタイ）とか言っていたがいつ習得できるのやら。

「あー、俺もずいぶん壊れてきたな」

T o b e c o n t i n u e d

第四射 帝国の狙撃手（後書き）

ガンアクションを期待してくれるのはうれしいけど文章だけで表現は正直無理かと思う。ガンアクションは漫画アニメでこそ映えるものだよ。

茶々 と結婚してえ

第五射 ヒヤッハーアの文学

ダアアン！！！！

戦争も中盤と言ったら良いのか。『紅き翼』の面々の御陰で進行速度が下がっているわけのだよ。最も所詮やつら少数個人の集まりだ。1を守っても9は攻められてしまう。特に俺が出撃している戦域で『紅き翼』とかち合うと99割(爆)の確率で抑えこむよう命令が下る。別にやつらが死んでもかまわんのだがそれなりに『原作』を思ってしまうのだよ。俺がいるから同じ流れにならないのかも知れないし、なるのかもしれない。世界の修正力とやらに期待するかな？それだとナギ殺したって生き返りそうだ。

ダアアン！！！！

あー、最近撃墜数増えねえ。連合の莫迦共も学習していたのか障壁を前面に張り巡らせるようにしてきたからな。1000mぐらい近づかないと貫通出来ない。出来ても被害は少ない。1000mも近づいたら艦隊戦始まつちゃうからね。最初俺が乗ってる戦艦が落ちないかと不安だったが・・・

ダアアン！！！！

上下縦横斜め前後カクカク動いて被弾率が未だに零。なんだこの戦艦は。弾幕ゲーム宜しくグレイズ大稼ぎだ。船員の士気も以上に高い。最近なんか『ヒヤッハーア』だけで通じるのか所々『ヒヤッハーア』しか聞こえない。何はともわれ、1000mも近づきたくない俺が確実に戦艦を撃墜するために、ハルコンネンの真の姿である30mmセミオートカノン砲2門を使うようにした。さすがに2門

から放たれる弾丸を同一カ所にぶち当てることは疲れる。精神的にフルオートしてもいいがそれだとスマートじゃない。狙撃がいいんだよ！・・・これのフルオート射撃はやばすぎるのもある。それに俺の現在の投影じゃフルオートだけでは耐えれない。影の倉庫にしまっておいた、前もって投影し術式を組み込んだ奴じゃないとすぐに砲身がいかれちゃう。

「精霊砲！ヒヤツハーア！」

「ヒヤツハーア！」

ブリッジからの音声。何だよ『精霊砲ヒヤツハーア』って。具体的に精霊砲をどうする気か貴様等。格好も変わってくるんじゃないのかこのままで。世紀末なかけ声の空飛ぶ戦艦ってどういう組み合わせだよおいこら。・・・さて、そんなことを考えていると連合の戦艦に飛んでいった精霊砲が消え去った。あつというまに。何故だ？大規模な対魔障壁か？

「む？」

何故か異様に目立つ高台。肉眼では見にくかったのでスコープ越しで見ると・・・

「・・・黄昏の姫御子」

ツインテ少女が鎖につながれていた。他の戦艦も消え去ったようだ。なんかめっちゃざわついている。もちろんこの戦艦も例外ではなく・・・

「シックス殿！なんですかアレはなんですかアレは！黄昏の姫御子

ってナンディスクー！！！！」

「……黙れ」

ダン！！！！

声が響いてくる音声管にジャツカルの弾丸をぶつ放した。ギャーギャー騒いで五月蠅い奴らだ。魔法が消えるなら、それは騒いだって同じことだ。伝統だけのオステイアという小国が戦争に勝つためにはこの手段しかなくこれ以上効果的な手段はない。オステイア王族が保有するマジックキャンセル。しかしその王族は魔法を消滅させながら魔法を使うという未恐ろしい存在だ。だが存在的な魔力が『英雄』を生み出すほど多いわけでないのだ……。王族だからしょうがない。王が先頭に立って戦うなんてことはありえないのだ。どこぞのアーサー王じゃないんだぞ？

「……乗る船変えようかな、テオに頼んでもらうか」

そんなことを考えていたりすると「ズガァン！！」を大きな音とともに鬼神兵の集団が吹き飛んだ。黄昏の姫御子がいた高台の前で守るように浮かんでいる集団『紅き翼』がそこにいた。突貫したら大打撃だな。少しは考えろよ。というかカツコイイな、ナイスタイミングだぞ、妬ましい。

「『来たれ』」

桃色の龍が具現した。これのおかげで虚空瞬動やら飛行術とか覚える必要ないので安心だ。ちなみにこういったソーサーは魔法界では異様に人気が無い。ソーサーで浮かぶぐらいなら飛行術の練習をするし何より筭があるし……。みたいなやつだ。軍事に開発しよう

しても個人用ソーサーでは用意する数が大きく費用がかかりすぎる。そうだった理由らしい。

「お、お前は『紅き翼』千の呪文の・・・」

高台を守っていたロープの魔法使いが赤毛の少年に指を向けて震える口を開ける。そこには希望と、たったその少人数で何をする気か？という疑問だけだった。

「そう！！ナギ・スプリングフィールド！！またの名をサウザンドマスター！！」

空中に浮遊し自分の名を誇るかのように叫ぶ。自分で二つ名を叫ぶ赤毛の少年に『アルビレオ・イマ』と『青山詠春』がやれやれ、と言った表情で。しかしどこか嬉しげに困っていた。

「行くぜうりゃあ！！『千の雷！』」

複数の鬼神兵を雷が貫く。大きな爆音と輝きを放つその姿はまさしく最強の魔法使いに相応しかった。あんちょこ見ながら唱えているという点で全て台無しであったのはここだけの秘密だ。周りに群がる帝国の尖兵を次々と倒す『紅き翼』

「・・・よう、嬢ちゃん。名前は？」

「ナ、マエ？」

そんな中赤毛の少年が、鎖でつながれた少女、黄昏の姫御子へと話しかけた。赤毛の少年の魔力は絶大、しかし人間個人の力では世界を変えることなど不可能。それをフードの男に言われた赤毛の少年だが赤毛の少年はそんなことわかっていて。そしてわかった上で行動している。

「アスナ・・・アスナ・ウエスペリーナ・テオタナシア・エンテオ
フュシア」

赤毛の少年は少女の口から垂れていた血を拭った。名前を聞いたころに満足した彼は、目の前に存在する帝国の軍を倒そうと気合を入れる。そのときであった・・・

ズガアアアン！！！！！！

「な、なんだ？」

「・・・狙撃手に見つかってしまったようですね」

慌てるオスティアの魔法使い。そして珍しくいつも同じ表情のアルビレオ・イマが険しい顔になっていた。赤毛の少年も、メガネの剣士も。高台の隅に巻き起こった爆煙を睨み付けていた。爆煙がはれる。しかし姿があつたのは桃色のソーサーのみであった。ソーサーがまっすぐ高台へとツツコンで来たのだった。だが驚いた彼らは一瞬の隙を作ってしまった。『彼』がその隙を突くにはあまりにも大きい僅かな隙を。

ガチャツ

「しまった!？」

メガネの剣士が叫ぶ。音がした方向は彼らの後ろ。黄昏の姫御子のほうからだった。

「……無様」

「白いフードに……赤い目!……す、スナイプ・オブ・インペリアル……!？」

「野郎!! せつけえマネしやがって!」

ただ一言しか言わなかった帝国の狙撃手スナイプ・オブ・インペリアル白いフード付きのローブにフードの奥から覗く真つ赤な目。彼は黄昏の姫御子を掴み上げ米神に黒い拳銃を突きつけていた。『紅き翼』の面々が攻撃しようとしても、黄昏の姫御子の存在がそれを許さなかった。魔法の詠唱よりどっちが速いか。無詠唱の魔法よりどっちが速いか。一目瞭然だった。

「餓鬼一人も救えないかスプリングフィールド」

無表情に淡々とのべる狙撃手。その様子に怒りが達した赤毛の少年は叫ぶ。

「てんめえ!!」

「ナギ!!!」

大きな焦りを抱いていたアルビレオ・イマは必死に赤毛の少年を押さえ込む。彼は今人質を取っているのだ。連れて行かれて利用されたらそれこそ終わりだ、とアルビレオ・イマは思っていたのだ。利用しないにしても黄昏の姫御子はオスティアの大きな戦力であるのだ。それを失えば、王家の血筋の一端を消すことにも鳴る。戦力を下げたことを喜んで帝国は進行してくるだろう

「すぐに発砲しない様子から見ると、なにか用でもあるのですか？」

アルビレオ・イマは彼が会話してくれることを望んだ。会話に引きつけられ、『紅き翼』も動けないが『帝国の狙撃手』の動き封じることが出来る。今や帝国連合両方にとって『狙撃』の代名詞とも言える彼の存在は大きい。戦わない、その一つだけで大きく違うのだ。

「.....」

しかし狙撃手は何の返答も無かった。会話には耳を傾けているよう

な様子だったためひとまずは安心するアルビレオ・イマ。今の彼らには時間稼ぎしか出来なかった。だが彼らは知らない。狙撃手の真の目的を

「（やべー、何も考えずに人質にしてしまったわ。お持ち帰りも駄目だろ？さすがに無抵抗の幼女殺せないし）」

戦場での迷いは死に直結する。狙撃手もまだまだのようだ。

「おい何か答える！」

ナギが五月蠅い。ほらみるアスナちゃんも怯えて・・・はい俺に怯えていますね。というか俺って近接の発砲とかあまりやりたくないんだよね。血肉が飛び散るし。旦那のジャッカル強すぎんだろ。普通の銃は穴が空く程度だろ？なんでバラバラになるんだ。あー、誰か俺をこのまま帰らせるきっかけ作れ。・・・しょうがない。最後の手段を使うしかないのか！情報渡すために来た！な感じにすればいいかもしれない。最悪の好感度も少しは上がるだろう。

「『完全なる世界』」

「ああ!？」

先生この人怖いなにこの人怖い。どうしてもチンピラです本当にありがとうございました。このチンピラは素で強いから本当にやばい。だいたいチンピラなんてやってるやつは噛ませ犬なだけどさ。さすが主人公(笑)

「人類か人間を選べ愚かなイカロスの翼・・・む」

丁度よかった!何故か妙に静かな艦長から戦闘終了のお知らせ。この戦域はある程度片付いたらしい。

「何わけわかんねえこと言ってんだ!速くその子を放せ!」

別にいいよ?もう俺帰るし。俺は銃を下ろして掴んでいた姫御子をナギにぶん投げた。あまりの出来事に声も反応も出来ないかお莫迦フィールド。お前如きに俺の行動を予測出来るわけなからう!!フウハハ!・・・艦長の笑い声に移ったか?

「・・・帰還」

テオ以外の前だと上手く話せない。超恥ずかしい。前世でもあんまり人と話す機会無かったからね。最初に見た存在であるテオは特別なのか。なんだか余計に恥ずかしくなってきた。

「おい待てや腰抜け！！」

ドーーーーン！！！！

放っておいたドラグーンに乗り込んで俺は戦艦へと帰還する。やっぱり駄目だったね。何も考えずに行動するのは。勝手に行動して上手いくのはああいう莫迦だけだよ。俺にはとてもとても。それにしても腰抜けだと？その通りだと思うよ、君よくわかってるね。狙撃手たるもの常に逃げ腰で殻に籠もるタイプじゃないと。近接戦闘するのは戦闘狂だけだろ。なんで魔法あんのに格闘するの？趣味かオラアア！！

ドオオオオオン！！！！！！

おおつとあぶね！あの赤毛の莫迦『千の雷』ぶっ放して来やがった！！怒り極大なせいかならぬ方向へと飛んでいったが……。これだから前線は怖い。もうお家（城）に帰りたい。そして布団を被りたい。そしてお家に帰ると今度は魔法使い様（笑）に実弾兵器を使うことをダシに莫迦にされるんだ。パパ、ママ、こんな職場ですが僕は頑張ってます。

「奴ら黄昏の姫御子を前線に出したとな!？」

帰宅後、俺の本来の任務であるテオの護衛にいそしむ。まあこんなところで襲う莫迦はいないよう。護衛という名の子守かもしれん。俺1歳だけどさ。

「なんじゃかいよいよ焦臭くなってきたのじゃ」

そりゃそうだ。気付くやつは気付く。戦力が減らない連合、突然帝国によるオスティア奪還のための戦争。そして降伏するわけもなく王族である黄昏の姫御子を投入し出す。まるで戦争を長引かせようとしてるみたいだ

「何かしらの存在が裏から糸を退いてるやもしれん」

俺の言葉に目を大きく広げる。焦臭いがさすがにそこまで考えはいなかったのだろう。それが『完全なる世界』と教えてもいいが、どうせオスティアのアリカ殿下との対面後普通にわかるのだ。示す証拠もないため、下手に教えて『完全なる世界』に追われることになりかもしれん。追われないようにするのが俺の仕事だがな……。なるべく危険な道を渡らせたくはないのだよ。

「何かしら!？そうだとしたら一体何を目的に……!？」

「戦争を長引かせて儲ける兵器屋か……」

「第三の国が漁夫の利を獲ようとしているのか……か？」

俺はコクン、と頷いた。しかし漁夫の利を獲るとするなら既に諦めているだろうよ。どんなに戦艦を送り込んでも俺が撃墜しちまうからな。互いの戦力を減らそうとしているのに、帝国が相変わらず、連合の戦艦はどんどん沈んでいく、って図になっている。『紅き翼』が出撃している戦域ではそうでもないみたいだが……。

「……今は保留じゃ。藪のなかに何がいるのかわからないのじゃ。藪をつついて何かを出すなんてことは……」

もう一度言っけと出てきたときの俺だけだな。

「やはり戦争はコリゴリじゃ」

皇女といえど第三位。継承権も薄く将来も政略結婚などで決まっているようなものだ。そんな自分の発言力が低いことを恨めしそうにため息を吐くテオ。肩をがっくり落とすその姿に萌えたのはお兄さん（一歳）との秘密だぞ？

T o b e c o n t i n u e d

第五射 ヒヤッハーアの文学（後書き）

全部愛の力さ

第六射 テオの乱心でござる

突然だが俺はキメラでもある。本当に突然で申し訳ないが・・・。
キメラとはまあ簡単に言うところ合成生物のことだ。一つの肉体に複数の遺伝子を持つ存在のことである。ギリシャ神話に登場する伝説の生物「キマイラ」に由来しているそうだ。本来は生物が持つ免疫という体内防衛システムが「自分とは異なるモノ」である異なる遺伝子を破壊してしまう。故にキメラは存在不可能であったのだ。

例外としては遺伝子情報が近いモノからの臓器移植だ。しかしそれは同じ人間という生物の範囲だからこそギリギリ可能であるのだ。俺の自身には龍やら狼やらあらゆる化け物が詰まっている。さて、人間と龍や狐や猫、マンティコアはどれほど遺伝子が違うものかな？そんな科学ではありえない技術を成功させた技術はまさしく『魔法』である。

更にいうとベース体であるホムンクルスも結構やばい。ホムンクルス、別名『フラスコの中の小人』その中からわかるとおりホムンクルスは大抵製作途中で死に絶えてしまう。禁忌とする場所もあり研究者も異様に少なく例が少ない。魔法といえどこれらの技術は相当レベルが高いものであるのだった。

俺の肉体を開発した研究者はまさしく狂気の塊と言えるだろう。だがホムンクルスとキメラという高レベルの技術を使用し、そしてその二つを組み合わせたその脳味噌は褒めることが出来る。最も、俺の知識での研究者・・・俺の産みの親は様子からして特に深い考えでもなく適当にホイホイ技術をツツコンでいただけのように見えるのだが。

ただ詰め込む技術のレベルが『無駄遣い』の言葉が合うほどすごい。なんでこの帝国抱え込みの研究者がクビになろうとしていたのかわからないぐらいだ。彼ならば数年に一度の研究成果の発表も楽々だと思っ。

そう考えるとこの研究者に『完全なる世界』が関わっていたのではないかと思ってしまう。そうであるのならば、優秀すぎる人材を方向性のある狂気へと導く、なんと恐ろしいことか。深く考えるのはやめようと思う。科学者は死に帝国の重鎮たちは俺に関するあらゆる存在を灰にしてしまったのだから。真相は不明でありそれには正直俺も助かる。

さて、俺には狂ってるもしか思えない過程で作られた。カメラに使ったサブの生き物も『こいつ強そうじゃね？よろしいならば追加だ』そんなノリで加えられた。途中で腐った過去の実験体もツツコまれるわ、鬼神兵が混ざるわ……。だが俺を俺として存在させるために組み込まれた術式は異様なものである。数百数千もの化け物が混ざったのにも関わらず俺が人間の姿をしているのは『肉体固定』の術式であるし、そんな大量の生き物が人間サイズになるのだ、体重がやばい。しかし俺は重くないのだ。体重を筋力に転換する術式を見つけてしまった、その時は啞然としたものだ。

俺は影の魔法というある意味『術式』を専門とする魔法しか適性が無い。開発途中ではあらゆる適性が抽出され追加されたはずであるが、なんでも影に喰われたとかよくわからない隠喩を使われる仕舞いだ。さて何故影の魔法が術式に深く関係するかというところ、

影の特性のせいであるのだ。影だよ影、『切断・貫通・拘束・倉庫』
しか思い浮かばない。詳しくなるとそこに『浸食・吸収・緩和・衝
撃』とか入ってくるのだが……。

影は火や雷のようにそれぞれものが外に影響することはない。つま
りだ。影を上手く利用するためには術式による追加効果が必要であ
るのだ。例えば『障壁破壊』や『爆破』などだな。『爆破』の術式
を組み込んだ影の塊で爆撃するチート野郎がいたとかいなかったと
か。一瞬のうちに大量の影に大量の術式を組み込むとは……さす
がだ。

術式は非常に面白い。科学と魔法の合成みたいな感じだ。呪文詠唱
による発動する魔法の効果を、文字で表すという。極めれば既存に
存在する『例』的なものではなく自分専用のものを作れる。まあ大
抵の人間は既存のものにちょっと追加したり修正したりして自分に
合わせるだけなのだがなあ。既存の『例』でも魔力を大量に込めれ
ば広域殲滅魔法も防げるからね。研究されきつてる感は否めない。
だが俺の肉体に組み込まれている『肉体固定』や『体重転換』は今
までに類を見ない存在だ。魔法とはそもそも人型の者が使うものだ
から『肉体固定』は必要ない。わざわざ犬や猫の体型になりたい奴
は……。いるかもしれないが。『体重転換』も必要ないものである。
200?300?程度では魔力強化のほうが随分と効果が高いのだ。
推定数百トンの俺だからこそこの術式である。これらの術式もあの研
究者が一から組み上げたものだと言ったときには……。鳥肌が立
つたよ。

「鳥肌が立ったよ（キリッ）」

「なに一人でブツブツ言ってるのじゃお主は」

すまん、術式の勉強が非常にややこしいからつい現実逃避してしまつた。俺の撃墜数が愕然と落ちている今日このごろ。ハルコンネンの強化、及びに影魔法の研究。訓練過程は終了したものの未だ未発達な部分もあるし何よりテオを守るためだ、幾らでも頑張るさ。

「テオのことを思うと頭が壊れそうで」

「う、嬉しいのじゃがどこか危ない感じがするのじゃ・・・」

顔を赤くしているが微妙に引きつっていたような気がする。フフ、照れやがつて・・・。さて術式の話に戻るが、不思議なことに俺は影以外の属性魔法は呪文で具現させることは出来ないが、術式による、例えば武器に属性を追加したりすることは出来るのだ。出来る、と言っても精霊の力を借りることが出来ないため非常に効率が悪いの難点であるのだが。

「グレート＝ブリッジも陥落したのじゃからそんなことをする必要ないじゃろ」

寝転がってタレているテオ。テオが俺が戦争に行くことに反対してくれるのはめっちゃ嬉しい。恥ずかしいから顔に出さないけど。『肉体固定』ってばマジ便利。おかげで帝国内で『顔がサイレント・キル』とか呼ばれた。命名は艦長。最近艦長が偉くなってきている。数隻を預かる提督になったとか。北の艦隊に配属されたとか。俺が乗る戦艦じゃなくなつたので泣いていた。「ヒヤッハーア殿！私はあなたを忘れません！」・・・名前が固定していた。

「テオのためさー、幾らでも頑張るさー」

「むう」

枕に顔を埋めてバタバタしている。ああー平和だなあ。え？グレート≡ブリッジが陥落したとか聞いてないって？そりや言ってるし俺出撃してないもの。グレート≡ブリッジは戦艦と違って防御主点だからね。俺の狙撃にも限界がある。それなりの重火器生み出せばなんとかなるかもしれないけどな。今回は作戦上俺は必要のなかったのだ。その作戦は簡単言つと

？堅くて『スナイプ・オブ・インペリアル』でも落とせそうにないぞ

？じゃ持ち前の大軍で落とそうぜ！

？遠くに行くのが面倒だな

？じゃみんなで転移しようぜ！

？じゃさっそく大規模遠距離転移の開発だな

？おk把握

大規模転移でグレート≡ブリッジの要塞までひとつ飛びだからな。艦隊戦でもないし狙撃の俺はあまり必要ないのだ。いや地上戦しようと思えば出来るぞ？普通に乱射すればいいだけだからな。いつのにか戦艦撃墜用になってしまった俺だ。最近も敵さんも上手くなつて数弾ぶちかましてようやく落ちるからな。その前に俺が乗っている戦艦が落ちないかとヒヤヒヤしてなかなか集中出来ない。・・・運が良すぎて適当に引き金引いても当たるのだがなあ。狙撃手として一発一発魂を込める必要があるわけで、そんなことは邪道である。

緊急の時は重宝するがな！！

「む？もしもし、なんじゃ・・・？何！」

電話っぽい魔法具で話だしたテオちゃん。・・・あー、グレート「ブリッジのことかな？確かあそこ大規模転移の侵略の後もう一回『紅き翼』の活躍で奪還するんだっけ。そして帝国は退却せざるを得なくなるわけだ。グレート「ブリッジを拠点にあらゆる場所に陣取ったのはいい。だがグレート「ブリッジからの物資補給が無かったらお終いだ。帝国は連合を落とす最大のチャンスでありながら、弱点丸出しという不思議な状態にあるのだ。一点突破という点ならば俺よりアイツらのほうが優秀だ。なにより人数が違うからね？」

「そうか・・・うむ、わかった」

ガチャッと切るテオ。何故だろうか？電話のような物には必ず『ぶるるる』という音と『もしもし』という返事と『ガチャッ』と切る音があるのは。様式美だろうか。というか最初に『もしもし』言い始めた人って誰だろうか？更に言うとドラマとかで電話が切れた後にももしも言うてる人がいるが・・・、電話が切れた後にももしもしても意味ないよね

「・・・『紅き翼』か？」

「そうじゃ、グレート「ブリッジは陥落。広域に点在している軍も即刻撤退しないといかん。また、遠のくな」

戦争、の一言は言わなかったが、俺にはよくわかるよ。戦争に参加している身であり、テオの護衛である俺はどうすればよいのか。俺が戦うことを拒否した場合、帝国は落ちる。それほど奴らの補給力

が異常なのだ。だが俺がいれば均衡する。均衡するどころか戦争に集中すれば連合を砕くことも出来る自信が・・・少しだけある。俺がいないほうが戦争が速く終わる、テオとアリ力殿下の出会いももう少し速くなっていたのかもしれない

「む」

テオが俺のロープを握っていた。どうにも顔に出ていたか。基本無表情（というか表情が上手く作れない）なのにテオはわかるらしい。これが愛の力か。

「・・・」

「・・・悪い」

俺の思考が読めるのか（愛の力で）無言で俺を貫く。だが俺も（愛の力で）言いたいことを受信しとりあえず謝る。俺は個人という兵隊なのだ、考えてもしようがないことだな。あるのは、やるべき事をやるだけ。先生俺シモヘイ頑張るよ！

「まるで誰かがこの世界を滅ぼそうとしているかのようだ、ですか？」

帝国から取り返したグレート＝ブリッジの畔にて、アルビレオ・イマが赤毛の少年の言葉に続いた。終わらせるために戦えば戦うほど、矛盾するかのよう戦争は長引いていく。『スナイプ・オブ・イン

ペリアル』一人によって連合の戦艦200隻ほど沈められたが、それでも今なお尽きる気配がないその供給力に誰もが疑問を感じていた。一人、褐色筋肉達磨のような男を除いて

「ある意味そうかもしれないぞ」

「ガトウ」

ダンディズムがしみ出して人の姿をしたようなスーツの男『ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグ』が肯定した。その隣には同じようにスーツに身を包んだ少年『高畑・T・タカミチ』がいた

「俺とタカミチの少年探偵団の成果が出たぜ。やはり奴らは帝国・連合の双方の中枢にまで食いこんでいる。そして奴ら秘密結社『完全なる世界』だ」

「『完全なる世界』ですか。そりやなんとも・・・偶然の一致でしょうかね」

アルビレオ・イマが顔を引き締めて言う、がいつもとあまり変わらないので皆重要性に気付かない。赤毛の少年は忘れていて、メガネの剣士は存在を忘れ去られていた。

「一致？なんだあ知っていたのか？」

「『スナイプ・オブ・インペリアル』がそんなことを言っていたな。確か・・・『人類が人間を選べ』だったか？」

さすがに影が薄いことを気にしていたのかメガネの剣士『詠春』が代わりに返す。それに答えたのは赤毛の少年の魔法の師『ゼクト』

であった。

「狙撃手か、そやつも『完全なる世界』の一派なんじゃろうか」

「そりゃねーな。自分達のことをベラベラしゃべるような奴じゃねーよアイツは」

否定したのは赤毛の少年『ナギ・スプリングフィールド』、彼の普段とは全然違うマジメで的を射ている解答に皆は驚きを隠せない

「あー、そこまで評価してんのか。そんなに強いのかそのスネイクとか言う奴は」

褐色肌の大男『ジャック・ラカン』が欠伸をしながら呟く。『紅き翼』の面々はそれに首を縦に振り肯定。ジャック・ラカンが『紅き翼』に参入し戦うようになってからは狙撃手の出撃回数が減り、一番大きいグレートブリッジ奪還戦でもいなかったのだった。

「というか『スナイプ・オブ・インペリアル』ですね、彼の射撃は正確無比ですよ。戦艦撃墜数ならあなたを軽く越えています」

「ば、馬鹿な！？たかだか後ろでチヨコチヨコ撃つよう奴に・・・」

ズーンと沈み込むラカン。ナギは同感する節があるのか引き笑いをしてそれを見ていた。

「シックス！出かけるぞ！護衛じゃ護衛！」

妙に元気だテオ可愛い。なんで今更出かける必要があるのか？つうかいつも護衛してますよ。襲ってくる莫迦いないけどね。

「御意」

まあどこまでもついていきますサー御姫様。あれ、これってデートじゃね？羨ましいか莫迦共。ウヒョヒョヒョ。

「オスティアのアリカ姫が妾と会いたいそうじゃ。なんでも戦争を終わらせたいとな」

ヒソヒソと教えてくれた。ああそういうことか。デートじゃなかったよ。・・・べ、別に期待していたわけじゃねーからな！本当だぞ！

「妾のプライベート船で行くのじゃ、操作はまかせた」

操作出来るかどうかわからない件について

T o b e c o n t i n u e d

第六射 テオご乱心でござる(後書き)

帝国軍北方艦隊・・・だど・・・!?

第七射 テオドラ様と愉快な豚共（前書き）

かんそうに

こころがおれる

なつによる

いずれのひにか

あきすぎたるや

みちゆを

第七射 テオドラ様と愉快な豚共

なんとかなる、これほど良い言葉はないと俺は思う。実際なんか
なったからこそ余計に重みを感じ、全国の受験生の皆に伝えたい。
いや本気にしちゃ駄目だよ?・・・まさか飛空船を動かせるとはな
確かに俺は色々なものを受け継いでいるが、それが知識であったり
と感じたことの無い経験という矛盾したようなものであるわけで・
。だがよく考えると原作でも魔法界に行った生徒達が普通に飛空
船を手に入れ普通に動かしていたような気がする。あれは市民船と
か言う奴だろうか。テオのプライベート船といえど普通に武装して
いるこの船は一体どっちに分類されるのか・・・。あ、皇族御用達
って奴か

「こつちでいいのか?」

「うむ、ほら・・・あそこの遺跡じゃ」

魔力エンジンの音が響く中、ゆつたりと目的地まで進めていた。移
動中は襲ってくる奴もいなかったしすこぶる快調な航海もとい航空
であるわけだ。アリカ殿下が何故テオと接触しようとするのかイマ
イチ理由がわからないがアリカ殿下がテオを認めている、と納得す
ることにしよう。確かに第三皇女で相続権が低いとはいえど彼女は
皇族だ。政治やらなんやら結構優秀っぽいよ?俺、政治とか全然わ
からないからどうすごいかよくわからないが。

「ドラグーンで行ったほうが速かったな」

「あれは結構有名になってるのじゃ、見つかりやすくなるじゃろ」

なるほど、そういうわけか。認識障害にも限界あるしな。そもそも認識障害の魔法は魔力やら気に精通した存在に対してはあまり有効じゃないしね。あれ隠蔽用だから。どこかのチーターズのように違う人に見せかけるような術式俺作れないから。専門は影の『切断・倉庫・浸食』に追加術式で『障壁突破・衝撃』だ。爆破とか難しすぎます先生。後は対魔、対斬、対壊、対突、対異常やら……。武器が強力な分だけ防御面にまわしているわけだよ。

「はい、第三皇女御一行様とうちゃく」

俺とテオ以外ないけどな！カツンカツンと外へ繋がる階段を下りる。荒々しい岩石が剥き出しの荒地のど真ん中の、かつて繁栄した文明の絞りカスなのか岩をくり抜いた物体の数々。ヘラス帝国首都から南東、大胆にも連合の領地内である。……畏だろこれ。常識的に考えて。いや実際畏ではないのだが、戦争中の相手国の皇位保持者と接触だなんて、俺にはマネ出来ない。……畏であろうがテオには指一本どころか同じ空気さえ吸わせはせんよ。

「うむ！苦しゅうないぞ我が騎士よ」

騎士？後ろで引きこもってバカスカ引き金を引く奴が騎士とな！？
・語呂よくね？韻踏みすぎだろ。俺の今の気持ちは『波貝』のようにはみ出ているぞ。

「……………」

「お、アリカ姫じゃな」

石畳の遺跡から来たのは腰まで届く真っ直ぐな金髪に、翠と蒼のオッドアイ。そしておっぱ……。オスティアの王女『アリカ・アナ

ルキア・エンテオフユシア』である。最近オステイアが大人しいので調べてみたら、どうにも彼女がクーデター起こして国を乗っ取ったらしい。悪いことに見えるが前王は『完全なる世界』と繋がっていて真つ黒黒助でして、っていうオチだ。

「よく来てくれた、テオドラ第三皇女。そちらは・・・！」「スナイプ・オブ・インペリアル』じゃと！？なぜここに？」

白いフード付きローブに加え赤い目ならば全員そうじゃね？・・・ああ、そういえば俺以外にこんな格好している奴みたことないわ。常にフード被ってる奴もないしアルビノによる赤目なんてほぼ居ない。そもそも人のアルビノってほとんど外でないからね。俺が異常すぎるのだ。アルビノの癖に妙に目がいいし確かに日光は眩しく感じるけどそれも慣れた。普通はサングラスとかかかかないと危ないんだけどなあ。肌色は血が通ってないのかと思うほど白いし。目がいい、というより第六感まで全て含めた感覚器官が異常に発達しているのだろうよ、俺特別製の肉体ですから。

「シックスはもともと妾の護衛じゃ、さて。そろそろ本題に入ろうかの」

護衛ですよー。守りますよー。な空気を感じてもらえないのが悔しいビクンビクン。というか『スナイプ・オブ・インペリアル』と言われたとき少し敵意感じたからね。そりゃ戦艦とか色々落としまくったけどさ、悲しいけどこれ戦争なのよね・・・何回目だこれ。

密会、といつても内容はだいたい予想できるだろう。戦争やめたいのじゃ、おk、頑張るのじゃ。と年寄り臭い会話が続く。なんとも言い難い空気だ。俺空気だしね。や、護衛が騒ぐようなことは極力ないほうがいいのだが。悪いがそうもいかないみたいだ

ガチャン！

「む、嗅ぎつかれたのか？」

コクンと俺は頷いた。アリカ殿下も少しは予想していたのだろう。結構落ち着いている。さて、今回のミッションはこうだ。アリカ殿下を追加したいいつもの護衛。今回は二人同時に護衛だからかなりキツイ。どつちかが捕まったらゲームオーバーだろう。殺されることは何故かないが・・・、テオが捕まる？おお勇者よ捕まらせてしまふとは情けない

「・・・目を潰れ」

ジャツカルさんは使えない。肉ミンチなスプラッターな光景みせてしまふからね。第三の鼻の穴が空く程度のものでいいんだよ！装備は『デザートイーグル』だ、全長269mm、全高149mm、重量2053g。使用する弾丸の弾頭径は0.54インチ。拳銃のくせにめっちゃくちゃ強い。ジャツカルさんと比べると月とおっさんだが。せいぜい肉が飛び散る程度だ。

「・・・覚悟ぐらいしておる」

ダツダツダツダツダツダツダ

大量の足跡が響く。隠れる気もまったくないらしい。移動中は尾行

された気配が無かったが、アリカ殿下についてきたのか、それとも事前に知っていたか。どっちにしろ俺には関係のないことである。やれることをやれ。俺の先生もそう言った。

「見つけ「パアン！」・・・」

パアン！パアン！パアン！パアン！パアン！パアン！

両手に持ったデザートイーグルさんが火を噴く。狙撃手としての誇りのため全員ヘッドショットで決める。下手な部位に当たって生き残ったら面倒だからな。情報を吐かせるのもいいがたぶん無駄で無理だろう

「ク・・・『スナイプ・オブ・インペリアル』！誰がこんなことをさせたのか聞く必要はないのか!？」

パアン！パアン！！

「そ、そうじゃ。お主なら出来るじゃろ」

身長の関係で俺の足下に伏せてもらってるアリカ殿下が銃声に負けじと叫ぶ。テオは俺のローブにしっかりとしがみついていた。いやはや役得役得、ってTPOぐらい弁えよう。さて、情報を掴むことは出来ないの理由は俺が一人で防衛対象が二人であるからだ。

「無理だ、護衛対象が二人いるのでな。そら外に出るぞ」

とりあえず脱出しなければならない。いざとなったらドラグーンを使えばいい。テオと俺はどうにでもなるのだ、問題はアリカ殿下。そのためにはアリカ殿下が乗ってきた船に行かないといけん。しかし

ここで問題がある、下手に船に乗り込むと結構やばいことだ。船からの攻撃は数で押し返ってくる相手には微妙な域だし、そもそも戦闘を目的とした船じゃねー。敵を全員なぎ倒す、あるいは戦意をゼロにする必要があるわけだ。

「……………」

無言でついてくるついていくテオとアリカ殿下。銃声が響き断末魔があがるたびにビクツと震えているのは隠しきれないようだ。それでもアリカ殿下は目を見開き死んでいった兵隊を見据えていた。なるほど、王女だ。テオ？テオはしょうがないでしょ。ただでさえ長命種族なんだから精神年齢の成長も遅いの！いいんだよ！

「オマケだ」

ダアアアアン！！！！

RPG-7をぶつ放す。遺跡が少し崩壊したが気にしない。少し崩壊つても何か違うような気がする。落ちてくる岩石を影で切り裂き前に進む。出口が見えてきた。もう大丈夫、とは行かないのが世の中。テオは血肉の臭いや硝煙で既に倒れそうだった。アリカ殿下も…………ドジったなこりゃ。刀剣で応戦すべきだったか？いや詠春じゃあるまいし無理だな。そもそも接近を許してはいけない状況だぞ？

「そこまでだ！貴様達は包囲されている！！大人しく「パン！！」……………」

ドサリ、と司令官っぽい奴が天を仰いで即死する。悲しけど（略）外に出た分、風があるし密室でもないので幾分調子を取り戻した様

子のテオとアリカ殿下。まあそれでもやばいんだけど、視界が赤くなるって結構きついよ。

「……狙撃手……いやシックス殿。これは逃げ切れるか？」

「シックス……？」

「護衛対象が一人ならばな。互いの逃げる方向が真逆だ、無茶言わない」

不安そうに上目遣いで握りしめてくるテオに萌え萌えしながら、されど冷酷に現状を伝える。テオだけ連れていくか、そうしよう。どうせこいつ助かるし

「テオ……駄目じゃ……Yes、Your Highness」

な、なん……だと……！？悪いが最後まで足掻かないと行けないようだ。さて最後まで兵隊も付き合ってくれるかどうか。下手に時間をかけると最高クラスの魔導師やらが来てしまう。特にあの三番目の白髪が来てしまうと駄目だな。そいつしか知らないけど。

「『歯車・起動』」

生み出すのはガトリングガン。ロマンの塊でありながら最高クラスの攻撃力。そんな素晴らしい一品を両手に肩左右、計4門呼び出す。それぞれが異なる標準を持って敵を殲滅しよう。俺の魔力が尽きるまで。テオが俺の背中に抱きつき、アリカ殿下が俺の足下に伏せる。邪魔だ、と言う前にそうしてくれたことは嬉しいものだ。

「今日の天気は鉛色の雨が降るでしょう」

ダーーーー、と左右前方から火を噴くガトリングガン。もはや音が一つとなり砲身がグルグル回る。体を動かし広範囲に広がっている敵を血飛沫に変えていく。相手も学習してきたのか障壁を肉を壁にして魔法を撃ってくる。さすがに弾丸では魔法を防げないので影の触手で打ち払う。最初こそ俺が圧倒的であったと思うが、敵さんは防御を主点としたゴーレムを召還してきたりと面倒臭いことこの上なし。

ガチャン、と左のガトリングガンがジャムった。あ、結構やばい。すぐに放棄して作り直すか、相手も訓練された軍隊、これを好機にと一気にせめ立ててくる。

「『縛鎖となりて敵を捕まえる魔法の射手・戒めの風矢』！」

一気に攻めてきた左側を埋めるために意識を分割しすぎてしまった。俗に言う油断、捕縛の魔法が俺にのし掛かる。術式を解析し反転させる時間も無い。風の魔法で全身に重みがかかる。筋力ではなかなか無理があるようだなあ、いかんいかん

「汚物は消毒だー」

棒読みで決め台詞を言いながら火炎放射砲で薙ぎ払う。純粹な炎のため魔法使いには防ぎやすいが牽制になる。現に燃え尽きる奴もいるしな。だが重みが随分と邪魔臭く行動が一步一步遅くなる。その間に次々と捕縛魔法が何重にも重なる。

「シックス！もうやめるのじゃ！」

「『歯車・起動』」

五月蠅エ、と無視して再度武器を投影する。何度でも何度でも、相手が消えて無くなるまで。歯車を回す回すぐるぐる回す。だがその時であった。衛宮ほど強烈な鍛錬をしていたわけでもない俺は限界が来てしまったようだ。投影そのものの魔法の歪みだろう。魔力を物質化するという異端、さすがに負担が大きい、ようだ。テオがなんて言ってるかよくわからない。

シ スーしり る ！ を開 ！

だんだんと視界が黒くなる。耳に入る音を置き去りにするような不思議な浮遊感。ミッシヨンオーバーってな。

「ああ、悪いテオ。歯車の調子が・・・」

暗闇の中、俺はそこに立っていた。当たりを見渡すと壁がある。それも一面の。その壁はどこまでも大きく近くにありそうで触れる場所には無い。その壁には歯車が付いていた。何重もの何百個もの歯車がギチギチと、ギギギギと音をたてて火花をまき散らす。魔力の暴走に近いものだろうか？弾丸をずっと投影し続けるのもなかなか

が大変な苦行だったのか・・・、さて。

「『歯車・停止』」

歯車の動きが鈍くなり、次第に止まる。火花をまき散らすことも無くなったし変な音もしない。あれか？起動したまま気絶（？）したからか？狙撃の鍛錬だけではなく投影の鍛錬もすべきだな。何はともわれ・・・帰るか。ここにはあんまり来れそうにないしな。俺の心の風景であるが、いつもあるとは限らないのだ。誰かのように同じ心情風景などありえないことであるぜよ。

ガチャ・・・ジャラジャラジャラ

「なんとという鎖」

って、手も足も固定されてるわな。結構関節とか窮めていてキツイ。力も上手く入らない。その上見ての通り（？）鎖でぐるぐる巻きにされている。それに魔力の放出が封印されているしなあ。警戒しすぎだろ常識的に・・・で、ここはどこなのだろうか。俺はどれくらい寝ていたのだろうか。何よりテオと・・・アリカ殿下は無事なのだろうか。ああ、なんとも不甲斐ない。あれほど守ると誓ったのに。

「シックス！起きたのか!？」

「無事か!・・・よかった」

あ、正面に居ましたね。区切られているけどさ。あまりのショックさに何も見えなかったよハハハ。あなた達も無事でなによりだ。というかアリカ殿下が俺に対して『よかった』とか寒気を覚えるんだけど。

「・・・悪い」

「気にしては駄目じゃ、あれほどの敵じゃ。あ、足手纏いがいたのじゃ、無理もないぞ?」

「巻きこんですまぬ・・・」

ああ、感動のあまりに涙が出そう。こんな俺でもいいんですね!いいインデイスネー!・・・ゴホン、何も無いよ?俺自身の現金さに呆れながらも俺は質問する。ここはどうやら『夜の迷宮』という場所らしい。メガロメセンブリアの東に位置する遺跡を利用した監獄、もつとも今では使われていないそうだ。

「どこか痛いところはないか!? 腹は減ってないか!? なにかあったらすぐに妾に言うんじゃぞ!？」

「かーちゃんか・・・脱出するか」

こんだけ騒いでも見張りが来ないということは、一体どうということかわからないが好機だ。助けが来るまで待つのもいいが、俺はテオの護衛でありテオを助けるのは俺の目的である。待つ、という選択なんて存在しない

「『歯車・起動』」

作るのは爆弾。体外に出せないのならば体内に出せばいいじゃない。という発想で手の甲と足先に軽く爆弾を作る。嫌だねこんな体、すぐに再生するから

ダアアン！！

両手両足がもげる。だがジュルジュル言いながらすぐに再生する。きもっ！？

「なな、な、ななな、なな」

「め、滅茶苦茶じゃ・・・」

結構ショッキングだったみたいだ。女性陣にはなかなか酷評である。無理もない。さて、いざ気合を入れて脱出しようとした時、それは起こった。

ズズウン！！！！

爆音を立てて壁が崩れた。見えるのは赤毛の少年、後ろにはメガネの剣士がいた。助けに来たようだ。そしてなにを隠そう俺はとてつもなく怒っている。今ならもう一段階越えれそうな気がするほどだ。手足もいだ意味ないじゃんかよー。

「よう来たぜ姫「パアン！！」「うお！危ねっ！？」

To be continued

第八射 狙撃と紅い翼

「おい狙撃手！なんでてめえがここに！？」

ガン飛ばされている今日このごろ皆様はどうお過ごしでしょうか。とは言ってもガンを飛ばされる理由くらいはわかるものだ。俺がこいつらから速攻で逃げ回っていたからだ。狙撃手たるもの接近を許してはいけない。しかしこいつらやばい、まじやばい。主人公様の運というか勘と言ったらいいのか、ヘッドショットかまそうとしたらクシャミで避けられるわ、丁度別の兵士が射線上に出てくるわ。本当になんなの？俺だって運が良いはずなのに！運を引き寄せる力は所詮こんなものだというのか！？」

「おいナギどうし・・・な！狙撃手！？」

メガネ剣士詠春もいた。ナギはともかく俺こいつとの相性の悪さはトップクラス。コイツが一番強いような気がするほどやばい。だってよ？弾丸斬ってくるんだもの。どこの斬鉄剣の担い手だよ畜生！というか斬ったところで割れた弾丸が飛んでくるだろうが！そのままはじき飛ばすとかどこのサムラーイだよ

「くらえ！マンマンテロテロ「やめんかあ！？」アミバっ！！」

ナイスだアリカ殿下、俺のためによう働いてくれた。それにしても華麗な一撃だな。見たところナギが力まかせの障壁を張っていたはずなんだが、見事に貫通しているね。これが噂のマジックキャンセルか。超怖い。未来に黄昏の姫御子があのエヴァンゲリオン（？）の障壁をぶち破るのもコレか。俺？俺だったら普通に避けるけど

「なんだか騒がしいのう」

テオよ、悪いがこれも戦争なんだ。・・・よく考えると俺って『紅き翼』に対するほとんどの相性が悪いような気がする。というか俺あんまり強いやつと戦いたくない。俺の専門は対軍、対兵器だから！？あんなチヨコマカ動く人間なんか相手したくありません！アンタ莫迦ア！？

タルシス大陸極西部オリンポス山『紅き翼』隠れ家

俺たちが捕まっていた『夜の迷宮』より南東、丁度タンタルスという港町の北にある山。海に直面していて、まさしく世界の端っこって感じがする。アリカ姫が『紅き翼』に「かくかくしかじか」という説明をしてくれた御陰で特に莫迦と争うことも無かった。まあナギヤラカンには戦おうぜ！なんてことになったのだが、本当に死ぬばいいのに。

「おい貴様等テオドラ様をこんな『豚小屋』に招き入れる気か？」

「そうじゃ！なんじゃこの掘っ立てご・・・豚小屋！？」

まじありえないデース。そもそも俺とテオは普通に帝国に帰る予定だったのだぞ？なんでなし崩し的とはいえこんな処に来なくては行けないのか。それをもう！なんでこんな豚みたいな奴らが

「逃亡者の俺等に何期待してんだよこの腰抜け」

逃亡者のくせに皇女であるテオをこんなところに？貴様バツキユン

してやるうか？

「なんじゃと！貴様無礼であるう！！名を名乗るのじゃ！」

テオはやさしいからな。こんな肉達磨の名前をわざわざ脳味噌の容量削ってまで覚えあげようとしているんだ。フハハハ、盛大に名を名乗るがいい！！

「その狙撃手のことだ！ええ？なあ腰抜けの狙撃手？」

手をひらひらさせて当たり前のことを言う達磨野郎、というか名乗れよ。皇女が名を聞いているんだぞ？常識的に考えて名乗れよ莫迦！

「「らあ！妾を無視するんじゃない！！」

「貴様ーア！？テオドラ様を無視するとは許せん！今すぐマツハで蜂の巣にしてやんよ！」

「おお？やんの「」ダアン！！ダアン！！」なにこれこわい」

ダアン！ダアン！ダアン！ダアン！ダアン！ダアン！ダアン！ダアン！

「あのやけに元気な少女が・・・そしてあの狙撃手、うるせえ」

「ええ、彼女がヘラス帝国第三皇女ですね。そして狙撃手は本来彼女の護衛だそうですよ」

ヘラス帝国第三皇女と呼ばれた、褐色肌に角が生えている少女を肩車しているフードの男。そしてフードの男は両手に黒い拳銃を装備し、ジャック・ラカンに乱射していた。少女がフードの男の頭をすごい勢いで揺らしているせいか標準が定まっていない。そんな光景を変な汗を垂らしながら見ていた、剣士詠春と魔法使いのアルビレオ。

「護衛か・・・、あの少女第一主義に見えるな」

「ええ、彼とは仲良くなれそうです」

未だに銃声が響くオリンポス山。アルビレオが友情の視線を狙撃手のシックスに向けている。そんなシックスはその時妙な寒気がしたというが・・・、それは別の機会に語ろう。

「さて姫さん、助けてやったのはいいがこっからが大変だぜ」

異様な光景を気にすることなく赤毛の少年『ナギ・スプリングフィールド』はアリカ姫にそう言った。ナギの後ろにはスーツ二人、ガトウとタカミチがいた。

「連合にも帝国にも・・・アンタのオステイアにも味方はいねえ」

非情なる現実を口ごもることもなくハッキリと言う少年ナギ。アリカ姫はその言葉に臆することもなく絶望することもなく、ただ不敵な笑みを浮かべ明日を見据えていた。

「ダアアアアン！！！！」「あ！てめえ！？それは反則「ダアン！！！！」

なにやら視界の後ろが騒いでいたがナギもアリカ姫も、見なかったこと聞かなかったこと知らなかったことにした。もちろん後ろのスーツ組の人も。そしてスーツのガトウはナギの言葉に繋げるように説明する。

「それどころかオスティアの上層部が最も黒いと、その可能性さえも上がっています」

「やはりそうか」

ガトウが更なる絶望を加えるが、それでもアリカ姫の顔は変わらない。

「我が騎士よ」

「だから我が騎士ってなんだよ姫さん！？クラスのにいったら俺魔法使いだぜ？」

アリカ姫の言葉に真つ赤になるナギ。帝国に『赤毛の悪魔』と言われた少年もまだまだであった。顔を真つ赤にしているナギに対してあからさまなため息を吐いたアリカ姫は向こうで起こっている惨事を視界に入れた。

「シックス！我が騎士よ！その筋肉達磨を肅清するのじゃー！」

「ヒヤッハーア！」

「え、ちょーおま」

アリカ姫とナギはその光景をなんとも言い難い沈黙で見続けた。ナギは少しだけ文句を言いたい気持ちを抱いたが……、

「あつちは素直だというの……」

再びため息、その様子に啞然と口を開けることしか出来ないナギであつたが、更にそれを無視してアリカ姫は続けた。

「連合に帝国、そして我がオステイア。世界全てが我らの敵というわけじゃな」

どこか遠くを眺めるアリカ姫。その心情には何があるのだろうか。恐らく決心、希望、未来。負の感情などあるわけもなく、戦うものためにただ勝利を信じるのみであつた。

「じゃが……、お主とお主の『紅き翼』は無敵なのじゃろ？それに『スナイプ・オブ・インペリアル』もいるしの」

「（なにそれ聞いてない）」

翠と蒼のオッドアイがナギを見つめた。後ろで騒いでいた仲間たちも彼女の、否、彼ナギのもとへと集まっていく。ただ、無敵という言葉に反応したジャック・ラカンが所々血を流していたりプスプスと煙を上げていることが色々台無しにしていた。

「世界全てが敵、良いではないか。こちらの兵はたったの8人、じやが最強の8人じゃ」

「（ナギ、ラカン、詠春、ゼクト、アルビレオ、ガトウ、タカミチ……あと一人誰だよ）」

彼女以外誰も口を開けることはしない。出来なかった、と言うほうが正しいのかもしれない。王族たる威厳か、それとも目標を見据え覚悟を決めた人間の誇りか。

「ならば我らが世界を救おう。我が騎士ナギと、我が盾と我が剣となれ！」

「（あ、俺？まじウケるんですけど）」

アリカ姫はその手に持つ黄金の剣を構えた。黄金の剣がオリンポス山の山際から漏れる太陽の光を反射し太陽の光は荒れ地となった一面を何よりも輝かしく照らしていた。それに笑みを浮かべるナギは、片膝について忠誠の意を示した

「へっ、いいぜ。俺の杖と翼。アンタに預けよう」

太陽に照らされる二人。風がナギのポロポロになったローブをパタパタと、アリカ姫の金の髪をサラサラと揺らしていた。『紅き翼』の反撃、英雄として利用され今や犯罪者となった者達の反撃が今始まるうといていた。

「おいテオどうすんだよ、なんか俺たちも戦うことになったんだけど」

「ふむ、まあ帝国にいるよりはマシじゃ。腐った重鎮共を掃除できる好機じゃ」

「わー、超アグレッシブ」

「いざとなったら帝国でも情報収集が出来る。『紅き翼』との二面工作じゃな」

そんな光景の端っこで、身をかがめてヒソヒソやっている主従一組。その会話も姿も誰にも見られなかったことは幸いであっただろう。

ナギの言うとおりにここからが大変だった。何にしろ相手がどこにいるかわからないからだ。相手の正体を掴めても、それじゃダメである。そういうわけで我ら帝国組と『紅き翼』による合同作戦が開始。作戦と言っても頭が良い情報収集組とその情報を元に潰しまくる脳筋組に別れ行動するだけだ。俺とテオは主に帝国で行動している。常にフードを被っていたため、フードをとったとき誰も俺の存在に気付くことがないという。街の中をフードで歩いていたらヒソヒソしたり、サイン色紙を持って後ろをストーキングしたりする民衆もさすがにいない。この点に関しては灯台もと暗しと言うべきか。

「ではキリキリ吐いてもらいましょうか。あなたは『完全なる世界』のなを知っているのですか？」

今俺は『紅き翼』のアジトにいる。ここにいるのは俺とアルビレオだけ。他の存在がいない時間を狙ってくれたのか、特にテオがいない時間を狙ってくれたのか非常に助かる。俺実は知ってるんだぜ？とか言ったら怒られそうだな。それだけは勘弁してほしいもんだよ

「……他の奴らは？」

「いないほうがいいでしょう？だから誰にも話さなかった。違いますか？」

自信満々に言われても困る。だって違うもん。話してもいいけど確かな証拠はない。例えば事実だとしても。皆を余計に混乱させるだけだし、何より最後にはこいつらが勝つものだから。俺がいても大きな流れは変わることはないだろうよ。

「感謝するよ。テオに聞かれたらなんと言われるか」

「ははは、安心してください。同じ幼女趣味のよしみでしょ」

何を言っているのかコイツは。幼女趣味？あー、言われればそうなのかもしれない。テオがいれば他の存在なんかどうでもいい感じがするし。というか忘れてるかもしれないけど俺まだ一歳だからね。

「『完全なる世界』……詳しいことは知らないが、奴らの目的は世界を救うことだ」

「は？」

莫迦？みたいな顔で見えてくるが事実だからしょうがない。しょうが

ないっいたらしょうがない。サシがピカチ　ウを選ぶぐらいしょうがないのだよコレは。

「人類の手によって世界は荒廃している。今でさえ、な。ならば将来は？」

「・・・なるほど、そういうことですか」

忘れがちだけどこいつ高位、しかも最上級の魔法使いだからね。めっちゃ頭いいんだよコイツ。正直魔法使いなんで誰もが人格破綻してるだろ。例ならばあの艦長・・・今は提督だけどいいか、艦長で

「将来苦しんでゆっくり滅びゆく人類、何も考えず荒廃させてゆく今の人間。聞いたよな？貴様たちはどちらをとるのかと」

だんだん違うような気がしてきた。正直相手は世界を無くすだけで何も考えていないような気がするが・・・さてどうするか。まあノリでなんとかなるだろう。

「『人類か人間か』とはそういうことでしたか。私たちは人間をとりますが、奴らは人類をとった。ただそれだけですな」

「・・・ああ」

こんな会話をナギに聞かれたら怒りそうだな。自分たちは正義のためにやっていることなのに、悪である『完全なる世界』が、まさか救うという道をとっているとは誰も思わなかった。未来に人間たちは思っても知れない『何故あるとき滅びなかった』と。このとき苦しみ悲しみ絶望して、今を生きる必要があるのかと？

「だがなそんなこと関係ないのだよ、少なくとも俺には」

衝撃的な事実のせいかブツブツ言っているアルビレオを無視して俺は言う。これだけは言っておかなくてはいけないことだ。

「何時何処で誰が何人死のうが俺にはどうでもいいのだよアルビレオ。俺は守るべき存在は一人しかない。例え奴らが絶対的な正義であろうとも、彼女を仇なす存在ならば俺は奴らに銃口を向ける」

俺の言葉に反応したのか、ブツブツ言うのをやめるアルビレオ。こいつ性格破綻しても立派な魔法使いだからな。お前等こいつ舐めすぎだろ。・・・お前等って誰だろうな。

「・・・こりゃダメな英雄ですね」

英雄か。俺はただ一人の英雄であればそれでいいのだよアルビレオ。大多数凡人の英雄なんざただの生け贄だ。もつともそれを否定する気はないがな。前世では俺も、その大多数凡人の一人であったからだ。よくわかる。何もせず強い人偉い人にまかせる、見れば悪いことかもしれない。だけどそれを出来ない存在がいるのだ。何を足掻いても主役にはなれない、誰かの前を歩くことも出来ない。ならばそれらはどうする？足掻くことをやめるのだよ。

本当にそう思うのか？勇者が魔王を倒すまで何もしていないと。勇者が街を襲う魔物を打ち払うまで何もしていないと。否だ、誰もが守りたい。家族を、大切な人を、隣人を。誰だっと思っさ、『もし自分が勇者ならば』と。

「正義の味方になどなる気はない。ただ一人のため存在する。それこそ俺の・・・役目だ。化け物である俺のな」

「化け物？」

「さてな」

それ以上何も言わなかったアルビレオだった。本当に助かるよこい
つ。空気読めるし。あえて読まない時もあるが。

T o b e c o n t i n u e d

第九射 魅せる！ドイツの科学力（前書き）

なにか いろいろ おかしい

第九射 魅せる！ドイツの科学力

「あの・・・シックスさんちよつといいですか？」

「じゃ断る」

「え」

ちよつど『完全なる世界』の拠点潰しの合間のひと時。テオも護衛の俺を放っておいてどこかへ行ってしまった。そんな俺は暇をもてあましていたわけで、お気に入り『フェイファー・ツェリザカ』を磨いていた。この『フェイファー・ツェリザカ』は馬鹿の塊である。なんと60口径のニトロエクスプレスという象撃ちの大口径マグナム弾を放つ『拳銃』なのだ。世界最強すぎてまともに使えない。もはやコレクションの領地である。

「銃を教える馬鹿だと？」

「そこまで行ってないです!!」

さて、俺は特に情報を集めるような奴でもなく施設を破壊しまくるような奴じゃない。戦闘にも最近に参加せずバックアップ的な位置にいる。もちろん予想できるだろうがそんなもの必要ない。一応こいつら世界最強の類だからね。そんな位置にいるせいかなである。先ほど述べたように戦闘の合間つてのもあるが・・・まさかそん

な時にタカミチから銃の扱いかたのレクチャーを命令されるとは思いもしなかった、俺仰天。

「やだ、面倒臭い」

「えー、お願いしますよー」

頼み込むのが面倒だが教えて欲しい、ってところだろうか。段々頼み方が雑になってきた。そもそもコイツ、ガトウに弟子入りしてなかったか？ 渋み成分の補給要因として。子供に銃を持たせるのはだめだよな、表現的に考えて。というか俺とこいつら『紅き翼』とは一応協力関係だが頼らないで欲しい。なにもかもテオの方針によるものだ。どこに貴様らみたいな無敵集団に協力する莫迦がいるものか。

「フフ、いいじゃないですか。教えてあげたらどうです？」

アルビレオがそんなことを言うものだから、ついつい師事してやることにしてしまった。こいつには微妙な借りがあるため大きく出れない。別に出てもこいつはアレを言いそうにないが・・・、一応ね。保険だよ保険、備えあれば嬉しいな。

「じゃコレから行ってみるか」

タカミチにS&W M29を渡す。44マグナムを使用する有名な奴だ。映画やドラマに出てくる奴は大抵これのカスタムモデル。射撃姿勢をしっかりとれば子供でも撃てる。というか姿勢がうまければもつとでかい奴も撃てるから。タカミチが輝く少年の目をしている。わかるよ、わかるぞ少年。これはロマンだから

な、単発式とか今時アレだがロマンだからな！姿勢をとって一発撃つたら相手からフルオートの弾幕飛んで来ましたとかザラだからな！

「まずはスタンディングポジションだ、文字通り立った状態から撃つ姿勢だ」

タカミチに姿勢の調整を与えているといつ帰ってきたのかわからないが他の莫迦どもが集まってきた。興味津々だけど派手な奴じゃないし見ていると面白くないと思う。見ている面白いのやはりガトリングガンだな。あの砲身の回転っぷりがすごい。

「目を10秒ほど瞑れ、開くと照準がずれるから腕を動かさずに足と腰で調整しろ」

姿勢を合わせるだけで何分もたつが特に文句も言わずに続けるタカミチ。最初のほうは知識と継承した経験をもとに試行錯誤であった、懐かしいな。すぐに当たるようになったが。最初はその姿勢が自然に出るようにしないとイケない。

「そのまま状態を維持、肩の力をもう少し抜け・・・、よし、好きなときに放ちな」

パン！と銃声が響く。タカミチが思ったよりも反動が小さく感じたことに驚いたのか目を大きく開いていた。もちろん輝いていたな。やはりいい、射撃は本当にいい。結果としては用意していた的には当たらなかった。その後何度も続けてみたが・・・。

「・・・何か一つに絞れ、あれもこれもするなら全て中途半端だぞ」

才能が無い、とは言い切れない微妙な域である。何度も練習を重ねればそれなりに出来るようになるかもしれない。でもならないかもしれない。そういうことを言っただけなら素直にガトウのところに戻っていった。それがいいと思うよ？俺教えるのも面倒臭いし。教えると言っても基本教えたら自分で大体出来るようになるけどね。必要な弾丸と銃を用意してやればいいだけだ。

「なーシツクス！俺にも撃たせてくれよ！」

とりあえず無視したが、あまりにも五月蠅かった。よく考えたらこいつまだ中学〜高校生程度の年齢だということを思い出す。ふふ、クソ餓鬼が。コイツの滅茶苦茶っぷりに忘れていたものだ。やはり目を輝かせているものだから渡してやった。ファイファー・ツェリザカさんをな！

「おお！カツケエ！！！」

ダアン！！！！

「……あれ？」

身体強化しているならばどうにかなったかもしれないが、射撃姿勢も考えずに片手で撃つもんだから腕が有ってはならない方向へ曲がっていた。ざまあみる莫迦。普段実弾兵器（笑）って小莫迦にしているがすさまじい科学力と職人の努力の結晶だぞ？……詠春はさすがに気付いていたみたいだが。さすが職人気質（過去の話だが）の日本人、さすがサムライだ。オー！スシゲイシャテンプーラ！！

『紅き翼』のオリンポス山の誓いから半年あまりが過ぎた。テオドラ第三皇女やアリカ姫の行動により最初こそ世界の敵として認識されていた彼らであったが、徐々に味方を増やすことに成功。その間に肉体労働担当者が要点を潰していく。単純だがこれ以外に道は無く、なにより今のところ一番効果的であったかもしれない。要点といっても違法な武器商人や私腹でブクブクに太った役人のお掃除が主であり、それらは『完全なる世界』でも端っこの中の端っこで、雑魚と一纏めにしても問題が無い存在であった。

「灯台もと暗しと大正デモクラシーって似てね？詠春？」

「あ、ああそうだな・・・」

『完全なる世界』の本拠地を突き止め、追いつめた彼ら『紅き翼』と帝国の英雄であり狙撃手の代名詞ともなった彼『スナイプ・オブ・インペリアル』たちは決戦へと迫っていた。

「不気味なぐらい静かだな奴ら・・・」

彼らの眼前には風の音しか響かない秘境。アリカ姫が生まれ後継者として育った国であるオステイアにこそ『完全なる世界』の本拠地は有った。まさしく大・・・灯台もと暗しと言えるだろう。雲の上に鎮座するその古代の宮殿。世界最古の都王都オステイア空中王宮最奥部『墓守りの宮殿』と呼ばれる場所、アリカ姫からすればどれほどの屈辱的なものか。誰が想像出来るだろうか。

「ケツ、そんなもんだら悪の組織って奴はな」

赤毛の少年の言葉に褐色肌の大男が返した。宮殿より遠く離れた地より彼らはその様子を見ていた。オレンジ色に燃える空と漂う雲の海、この世界においてそこだけが動いているように見えるほど神秘的で畏敬を産む。

「ナギ殿！帝国・連合・アリアドネー混成部隊の準備が整いました！」

鎮座する宮殿を一言二言言葉を交わしたただ見ていた彼らのもとに騎士装甲に身を包んだ女性の兵士がやってきた。頭の左右に後ろ向きに角が生えていた。彼女は中立武装国アリアドネーが所有するアリアドネー魔法騎士団のリーダーであり名前をセラスと聞いた。彼女に言葉に「おう」と応えるナギ・スプリングフィールド。そして彼女はナギにサインをねだり皆に笑われていた。

「I'm a shooter. A drastic baby .」

ただ一人、狙撃手である彼はそんなひとときの間に入ることもせず、引き金を引くように歌っていた。フードの奥から少しだけ見える赤目はただ宮殿を鋭く貫き、片手に持つ巨大な銃はその銃口を空へとむけた。ただ鎮座していた。

「The deep-sea fish loves you forever .」

歪な詩を歌う彼の様子に、笑い有っていた彼らは心を引き締める。セラスも狙撃手の背中から感じる威圧にゴクリと喉を鳴らした。そんな彼に、彼が友と認めた一人であるアルビレオ・イマが近づいていった。片眼だけを開き狙撃手、シックスに独り言を言うかのよう

に呟いた。

「狙撃手に深海魚、ですか？これまた歪な詩ですね。しかしあなたにはピッタリなものですね」

ガチャン、と巨大な銃を鳴らす狙撃手。決戦は間近に迫ろうとしていた。今シックスと別行動をしている彼の主であるテオドラ第三皇女はタカミチと共に帝国の正規軍の説得へ向かっている。ガトウとアリカ姫も同じように連合へと掛け合っているが間に合うことはないだろう。

「世界を無に帰す儀式か、そこにあるのは無か夢か霧か」

ダン！！と空へ一発の弾丸が放たれる。空へと伸びる紅い閃光をその場にいたものは皆眺めていた。そして彼が天へと手を伸ばし呟いた。

「『崩れ逝く齒車』」
ミッシング・ギア

天へと伸びた弾丸は爆発し閃光が飛び散らせ、それを合図のようにその場にいたもの全ては武器を取る。あるものは家族の無事を願い、あるものは愛する者の平穏を守るため、またあるものは自分の未来のため。

「よおし！野郎共っ！！行くぜ！」

杖を手を取ったナギが号令をかける。そして飛び出した。ナギ、ラカン、ゼクト、アルビレオ、詠春、そしてシックス。世界最強の彼らを前に騎士装甲に身を包んだ戦士たちは彼らのために戦う。今戦場に立つ彼ら全てが英雄であり英霊として、名が無くとも勇敢に戦

つたと語り続けられるだろう。

「お先に」

「あ！シックス汚え！？」

シックスがドラグーンを呼び出し一気に突貫する。桃色の閃光が敵を蹂躪し、桃色の龍の体から放たれる必殺の弾幕が敵を次々と撃沈していった。搭乗者が耐えられるまで加速し続けるこの機体を止めることの出来るものはそこにはいない。彼はまっすぐと宮殿へと進む。

「I'm a thinker. I could break it
t down.」

詩が戦場に広がることはなく怒号と魔法の爆音でかき消え去った。だが誰に聞かすわけでもなく彼は歌った。ただ戦場に立ち戦場で戦い戦場で散る。それこそ彼、否、「彼ら」が生み出され到達すべき目標でもあるからだ。

ダアアアン！！！！

『紅き翼』の仲間たちとかなりの距離を残したまま彼は宮殿へと突貫していった。古ぼけた岩石の壁が龍の突進を止めることが出来るわけもなく、龍はそのまま宮殿の奥地へと進んでいった。ガガガガガガと削れ破壊し砕く音。だがその音が彼の耳に届くことはなかった。彼はただ見えていた。その先にいる存在を。あらゆる億を超える大多数凡人が集まり一で億を超える天才を更に越える。それこそ彼の義務であり本能とも言えた。

「見つけたぞ『造物主』どうやら貴様を蜂の巣にせんと俺は人間に

なれないらしい」

ガチャンと両手に持つ黒き拳銃ジャツカルの銃口がその存在へと向けられた。本能は必要だからこそ本能として生き物に在り続ける。『その生き物』であるということは『その本能』を持つということだ。『その本能』が無くなったときこそ彼は戦闘兵器エックスではなくなるのだろう。その先どんな『生き物』になるかは・・・彼次第であろう。

「と、いうわけだ。生き物の進化に負けるといひさ。古ぼけた絞リカスが」

ダダダダダダダアン！！と幾重にも重なった発砲音。それと同時に放たれる水銀の弾丸が造物主へと伸びる。その時間はそれこそ一瞬の時間である。だがその弾丸は造物主に当たる前に魔法陣によって静止しカツンと落ちる。だがそれでも関係なしにと弾丸の雨を降らす。

一秒間に何発ものコツつと空になった葉莖が石の床に落ちる。造物主が体を反らしはずれた弾丸すら『運良く』跳弾し未だに余裕の雰囲気を出している造物主へと向かう。正面から放たれているはずの弾丸は、跳弾し何故か造物主に対して四面八方取り囲むように向かう。そのことに気付いた造物主は、一瞬だけ怯むのであったが・・・次の瞬間あらゆるものが吹き飛んだ。

パン！！というはじける音がする。シックスが張っていた防壁は術者を守る気もないかのように一瞬ではじけ飛び、至近距離で受けたシックスは全身がバラバラになりながら地面にたたき付けられた。・・・が、ブジュルという音とともに肉体が一瞬で再生、影の倉庫から取り出したハルコンネンを造物主に突きつけ焼夷弾を放

った。

ダアアアン!!!!!!!!!!

再生速度に驚いたのか、それともまだ生きていることに驚いたのか
造物主は動けなくその一撃を受け吹き飛んでいった。空気を燃焼さ
せながら宮殿の壁を何枚も貫き飛ばす。だがそれで決まるとも思っ
ていないシックスは追撃する。

歯車・起動

ガチャンと一つの歯車が壁にはまりこみ、全ての歯車に動力を与え
る。ぐるぐるがちゃがちゃと忙しく回転する歯車。ビリビリっと青
い稲妻を出しながらエネルギーを伝達する。頭の知識に接続し設計
図を引き出す。構造を把握し、部品を生成して、物体を構成し、存
在を具現させる。

「そら、ロードローラーだっ!!!!!!!!!!」

黄色に塗料されたロードローラーが彼の細い豪腕によって投げつけ
られる。片手で振り回すかのように投げられたソレはまっすぐ垂直
に飛んでいく。それこそ造物主が吹き飛んでいった速度よりも速く。

「!?!」

この魔法世界では『見ること』の無い物体に驚いたのか腕を大きく
広げ魔法を放ちロードローラーを消し飛ばさそうとした。だがまだ彼
の攻撃を続ける。

「ドイツの科学力は世界一イイイ!!!!!!」

彼の腕に支えられた8・8cm高射砲が造物主が魔法でロードローラーを破壊するよりも速く、高射砲の榴弾がロードローラーごと造物主へと向かいそして爆散する。高温の金属を高速でばらまき周囲を破壊しつくす。爆煙をあげ周囲の様子を探ることも出来ないほどであったが、彼は次に四門のM61バルカンを呼び出す。何に当てるかも決めていない4つの砲身から放たれる20mm×102の弾丸が大量の薬莖をまき散らし鉛の雨を降らす。ダーーーーーーと弾丸が放たれる音は一つになる。爆煙がより多きくなるうとも関係なしに造物主がいると思われる地点に飽和攻撃をする。そして・

ドン!!!

再び衝撃。彼が作った武器も全て消滅し、彼は四肢が吹き飛ぶ。ボールのように飛ばされる彼だがやはり再生。一瞬だけ腕の色が暗緑色に見えたがすぐに元の白い腕に戻る。だが再生しても何度も吹き飛ばされ再生する。吹き飛ばされ立ち上がり、頭が無くなった状態で歩き詰め寄り、そして弾丸を放つ。

ドン!!!

何度目かの衝撃。そしてようやく彼は五体満足のまま乗り越えてしまった。フラフラと立ち上がるシックスを見て造物主は何を思ったのか。そして重なる再生が原因か、それともただの様子見か。造物主と狙撃手は沈黙で向き合う。そこに言葉は無かった。硝煙と爆煙が立ちこめる。砕けて天井からあらわになった空から光が漏れる。風がサラサラと流れ、もはや役目をはたしていないシックスのローブをかすかに揺らす。対して造物主は、まどついていた黒い布が所々消し飛び燃え焦げ付いていた。

「あと何百回だろうな？俺を殺しきるのは。クックック、お前自身が次々にお前に勝てない因子を消し飛ばした御陰で随分とスツキリしたものだ」

造物主、始まりの魔法使い。魔法世界と十数億人の魔法世界人を創造したとも言われる太古の存在。魔法世界人が彼には絶対に勝てない理由であるのだ。それこそ人形が人形士に逆らえないように。造物主が自らが作り出したものに多大な攻撃力を誇るのも当たり前のことなのだ。無論それに関して魔法世界の存在をいくつも内包しているシックスにも言える。だが全てではない。例え魔法世界において作られたとしても、外の因子が紛れ込むのは当たり前だ。造物主が関与していない因子を持つためシックスの全てが削られることもない。

「貴様はなんだ？」

ようやく口を開いた造物主に対して「さあ？」と挑発するかのよう
に笑うシックス。残った肉体は既に再生しきっており、彼は度重なる破壊を「慣れ」ることで耐性を得ていた。現代の生物が数千万年の進化を経て極地で生活する生き物のように。だが攻撃に適応したとしても防げるわけでもなく、シックスにとってようやく同じ、あるいはこちらが数段低い土俵にやっと立てた状態であった。

「（あそこまで攻撃してこれかよ、もっとデカイなら奴行けるか？）

自身が放った武器とは比べる必要がないほど強力な兵器の設計図をひっぱりだす。しかしあまりにも異常な存在すぎて笑いが出るほどのソレは投影したこともなく作りきれぬ自信がなかった。例え作れ

るとしてもソレを完成させるには時間がかかる。間に集中が途切ることがあるならば、可能も不可能になっってしまうほどソレは異常だった。

「シックス！つてうお！？ラスボスがいやがる！？」

ピクッと動いた顔は無表情にしか見えなかったが、もし彼の顔の変化を感じ取るものがいたのならば、どこぞの新世界の神みたいな顔だと気づいていただろう。運が良いのだろう、良い時間稼ぎを見つけることができて。

T o b e c o n t i n u e d

第九射 魅せる！ドイツの科学力（後書き）

魔法だから細けえこたあいいんだよ！

第十射 艦長・最後の戦い（前書き）

We are the world を聞いてくると涙が出そうになる

ドラグーン搭載兵器の案を出してくださるみなさま、正直ありがとうございます。使いどころが難しいですがなんとか作中に出せるよう頑張ります。

他にもこんな武器あるよーっていう感想もお待ちしております。

ガンムとかは無理ですよ？

第十射 艦長・最後の戦い

何度目の衝撃か、もはやその衝撃の支配者たる絶対の破壊力は彼に對して既に無い。彼からすれば「あー、うん、横綱のハグと同じくらいかな？」程度であるのだった。そしてその中『完全なる世界』の幹部達の撃破を終え、狙撃手と見つめ合ってる（素直におしゃべり出来ない）造物主の元へ『紅き翼』の面々が到着した。シックスとの戦闘のため最初よりも幾分ボロボロの状態であった造物主だが『紅き翼』は目の前の存在がどれほどのものか『本能』で理解していた。完全な旧世界の生まれであり効果は薄い詠春ですら、これには勝てない、そう思ってしまうほどの威圧を造物主は叶え備えていた。

「な、なんだこいつは!？」

褐色の大男、ジャック・ラカンが叫んだ。魔法世界人の直系である彼は詠春よりも目の前の存在をより大きく感じるだろう。それこそ自身のことを絶対無敵と言いつつ自身に勝てないと、そう思わせるほどのものなのだ。その時、造物主から大きな力の波動を感じたゼクトはすぐに自身が持つ最強の守りを展開する。

ドオン!!!!!!!!!!

「ぐはあっ!？」

ゼクトの守りを見て、固めるように各々も防御障壁を展開した。しかしその衝撃はシックスの障壁が簡単に壊れたのと同じように次々と障壁を破壊。全て無駄であったのだ。衝撃は『紅き翼』の面々を軽々と吹き飛ばした。ラカンに関しては両腕を消滅させるというこ

とまで。その一撃によつて『紅き翼』は壊滅となつてしまつたのだ。その一撃を何度も受けたシックスが異常であることは言つまでもない。

「ぐう！ば、馬鹿な！？」

「まさか、あれは・・・」

全身を血みどろにしたアルビレオは何か気付いたのか。驚くことにその衝撃を正面から受けきつた狙撃手は全身からプスプスと煙を立てながら立つたいた。フード付きのローブは原型すらとどめていない。ほつたらかしの白い髪の毛がバサバサと揺れ、真っ赤な目があらわとなる。狙撃手は武器も構えず格闘の体勢も取らず呪文の詠唱もしようとしなない。そして造物主がフツと消えるのと同じように彼も同じように跳び上がった。

「テメエまでコラ！」

消えていく彼らを見てジャック・ラカンが叫ぶがすでに遅かつた。彼は両腕を失い戦闘はもはや不可能である。一撃で彼ら全てをピョンチに落とす造物主と、それを受けて何事もなかったかのようにするシックスの異常さが際だつた。

「俺にまかせなジャック」

血をダラダラと流すナギが立ち上がった。彼の目はまだ造物主を見ていた。絶対に諦めることなどない、そついう決心の目である。

「おいアル、お前の残りの魔力で俺を治療しろ、30分持てば大丈夫だ。へへっ、シックスもいるしな」

満身創痍でありながらフラフラと歩き出す。見れば遠くから銃声と魔法がはじける音がしていた。一度撤退を促す詠春とアルビレオであったが、そこでゼクトも立ち上がる。仲間達が二人の出ようとすのを止めようと声を上げる。それはラカンも同じことであった。彼を知るものがいれば「体勢を立て直す」という言葉が彼の口から出ることに驚くだろう。だが……

「俺は無敵の『千の呪文の男』だぜ？俺は、俺たちは勝つ！まかせとけ！」

ナギはそう言い放った。ゼクトとともに魔法と銃弾が交叉している場所へ飛び出す。もはや彼等には止められる術は無く、彼らはただ祈るしかなかった。一番神を信じなかった彼らが祈るとは、もはや皮肉にしか見えない。

ダアン！！ダアン！！ダアン！！ダアン！！ダアン！！

シックスの手が持っている黒き銃と白い銃から放たれる弾丸、人に撃てば一撃でバラバラにするような威力の弾丸は障壁で防がれている。しかし攻撃を止めない狙撃手。その場は均衡状態という言葉がお似合いかもしれない。狙撃手が弾丸を撃ち造物主は防御する。造物主が魔法を放てば狙撃手の影の魔法が打ち砕く。

「『歯車・起動』」

その一声でガチャと彼はは武器を構える。肩に背負うように具現したそれは91式携帯地对空誘導弾。現代における日本の自衛隊が使う携帯式の地对空ミサイルである。ボシュツと音ともに発射されたそれはまっすぐ造物主のもとへ向かう。造物主はまっすぐと飛ぶミサイルを軽く避けようとすが、刹那、シックスが一瞬で持ち替えたハルコンネンの焼夷弾がミサイルに直撃。大爆発を起こした。

「シックス!!!大丈夫か!?!」

「一人でようやるのう」

爆煙をあげている中、シックスの元にゼクトとアルがやってきた。シックスは彼らに一言「遅かったな」と告げるとガシャンとハルコンネンを構えた。爆煙から飛び出した造物主の攻撃を避けながらナギは魔法を打ち出し、ゼクトもそれに沿うように援護していく。しかし造物主の攻撃は強力、数撃撃ち合うとゼクトは壁に打ち当てられ気絶してしまった。一番傷が浅かったゼクトと言えど、それは自身の障壁が最も堅い部分に、なにより自分が居たからである。衝撃を近くで受けてしまったら、それこそ魔法世界人であるゼクトは耐えられなかった。

「お師匠!?!」

ナギはより一層バチバチと手に魔力を集め攻撃を激しくした。そして造物主の攻撃。ナギは倒れまた立ち上がり、そして攻撃を加える。ターン制のような戦いを繰り返す彼らは気付いていなかった。

「(総重量約1350t、全長42.9m、全高11.6m、砲身長28.9m、口径80cm)」

雷と黒い魔法が撃ち合い続けられている戦域を目の前に、目を瞑って真っ直ぐと立っていた狙撃手がいたことに。彼の心は今、歯車の城である。ガチャン！ガチャン！と忙しく動く、昔を思わせる機械。バリバリつと青い閃光が流れ、歯車がガラガラガラと回る。

「うおおおおおお！！！！」

彼に気付くことなく、最強の魔法使いナギは造物主を追いつめていた。無限と感じるほどの魔力が彼の全身に漲る。そして彼は自分が得意であり最も使う最強の魔法『千の雷』を右手に集めた。造物主は声にならない声を上げる。ナギはまっすぐそのまま造物主にその右手を振りかぶった。

ダアアアアーン！！！！

「『設置完了』」

巨大な雷を伴ったナギの右手が造物主の腹部を破壊した。更に雷電が造物主の全身をスタボロにする。血飛沫を上げて後ろに大きく飛んで行く中・・・、時間が止まった。時間が止まったとの同時に世界から色が無くなり全てがモノクロになる。それはナギも造物主もかわることはない。その静止した時間の中、ただ動いているのは狙撃手のみ。その上灰色になった世界の中で唯一、彼の目が血のように真っ赤だった。空中に静止した造物主の足下には・・・、煙突のような黒い筒状の物体があった。その黒い煙突のような『砲身』は血飛沫を上げる造物主を捉えていたのだ。

「言ったはずだ」

しかしその砲身も、本体も鉄くずをその型に集めただけのようボロ

給しないとやばいかもしれない。後何百回だろうな？ってカツコつけてたけど通算293回死んだから！293回死なないと『慣れ』ない衝撃まじ怖い。怖いばかりだな今日は。やはり外はダメだ。狙撃手らしく引きこもっておけばよかった。狙撃手に腰抜けとチキーンと玉無しはホメ言葉。

「お、お師匠？」

いいトコを俺に取られたナギが驚いていた。なんということでしょう、シヨタジジイのゼクトが黒い顔で立っていた。俺に造物主の衝撃を撃ってきたのもコイツだろう。なんだコイツ、操られているのか？そういえばアーウェルンクスにどことなく似ているな。髪が白い処とどこか莫迦な処が。なに？関係者か？白髪といえば俺も白髪じゃん。髪の毛染めようかな。目が真っ赤なのと合わさって怖すぎるんだよ。顔がイケメンなのが余計怪しい。

「覚えておけ。お前たちの情弱な発想が、人類を壊死させるのだと・・・」

「まさかお前造物主か！？」

話がトントン拍子に進んでいるが俺はどうしたらいいのだろうか。俺空気がな？でも攻撃喰らったから忘れ去られてはいないよな。どこかで聞いたことあるような気がする革命家みたいなことを言っているんで、カツコよく返してやろうじゃないか。ええーっと

「人類など、どこにもいないさ・・・造物主」

やべえきたなコレ。完璧に決まったよ。映画化決定だな。テオと一緒に見に行こう。俺の言葉に満足したような笑みを浮かべたゼクト

はどこかに飛んでいった。……これって「俺たちの戦いはこれからだ！」的な終わりじゃないか。原作ではゼクト死亡ってなっただけどころいうわけだったのか。直接対決したナギしかわからなかつたんだな。俺も知ってしまったということはこの莫迦に巻きこまれるのか？嫌だよそんなの。俺はテオにヒモると決意したんだから。護衛？あー、ちゃんとやりますよ。

「なあシックス……、お師匠のことは黙っててくれないか？」

正直疲労困憊でかつこいい言葉しか出ないようなのでコクンと頷いた。お前と一緒にまだまだ続く戦いの坂に登る気なんかないしなあ、どうぞどうぞ。別に俺が巻きこまれるなら他の人間も巻きこむけどさ。

ドドドドドドドドドド

「な、まさか儀式が!？」

あー、超揺れる。なにこれ超揺れる。儀式？儀式ってなんだっただけなあ……。ああ世界を無にかえすとかなんとかだったか。仕組みもわからんし俺何も出来ない。世界の始まりと終わりの魔法だよな？命の補給をしているのならばなんとか……。ならんか。命の補給もままならんし、やりすぎると生態系ぶっ壊れるから自重しなくちゃいけないし。さよならテオ、俺は生まれ変わってミジンコになります。

《諦めるなお主等！それでも世界最強か!？》

「姫さん!？」

わー、なんとというご都合主義、ヒロイン（笑）アリカ殿下のお出ましのようだ。なんとかなるの？諦めるなって言われても俺たちその儀式のど真ん中にいるんだけど。アルビレオやラカンたちは避難しているようだが、俺とナギはどうなるんだらうね。まあ俺には愛のドラグーンがあるから一気に脱出を・・・

「おろ？」

なにこいつ動かない。こいつ動かない。大切なことだから二回言いました。どうせなら三回言ってみようかな？と俺は現実逃避をする。なにこれやばい。ツエリザカさんを撃ったナギの右腕ぐらいやばい。そしてそれをすぐに回復させるアルビレオと後遺症すら残さなかった身体の神秘を持つナギぐらいやばい。魔力が衰退してきてるぞ。広域マジックキャンセルか？どんだけー、気合い入れすぎだろ。舞空術とか使えないかなー。

ゴオンゴオンゴオンゴオン

下半身と上半身がそれぞれ別の意志を持っているかのように動いている俺の耳に届いた音。ああ、俺が落としまくった戦艦たちの音じゃないか。既に壊滅していると思ったが・・・。おっ、スヴァンスヴィートだ。俺の狙撃で尻尾見たいな部分が火吹いてたのは笑ったよ、心の中で。いやー悔しいなあ、俺アイツだけ撃墜してないんだよ、畜生。他のド級戦艦とか空母は落としまくったんだけど。

《こちらスヴァンスヴィート艦長リカード！！助太刀するぜ！！》

ああ、髪の毛が異次元なおっさんだっけ？毎朝あんな・・・、オールバックに5つの角が生えたみたい髪型をセットしていると思うと泣けてくる。自然にああだとするならば一緒に飲みに行くクラス

だ。おっさんとはお断りだがその時は特別だな。

《うわあああああ!!! シック「黙るのじゃ!!! シックス!!!
無事かー!?!」 ツハアー!!!》

「うるせえ」

拡声器の向こう側からヒヤッハアヒヤッハア聞こえてくる。あいつら帝国軍北方艦隊じゃなかったっけ? インペリアルシップもいるってことはテオも来てくれたのか。なんだろう力が湧いてくるぜ、これが愛のパウワーか。でもドラグーン動かないから脱出出来ない、俺失望。飛行術なんか持つてないし。あれだ、元氣百倍になったが元の元氣がゼロだから何も変わらないっていう。

《魔導兵団 大規模反転封印術式展開!!!》

次々と宮殿を囲む封印術式の文様。すげえーこれ。どこから魔力持つてきてんだ? ここまで大規模魔力だとナギの魔力すら五分の一以下の足しにしかならんぞ? おおー、なんとという美しい術式。完璧じゃないか。一体を何を封印するつもりで作ったのか知らんが、これなら理論上魔王でも封印できるぞ。魔力が足りないけどな!!!

まあここまで魔力使っても範囲を半径50kmにしか防げなかったのね。どんまい!

ワアアアアア!!!

「ねえ帰っていい？」

「妾をおいて？妾の護衛が？」

はい無理。ところでなにこのパレード舐めてるの？俺英雄なんかならないって言ったのによ。何？俺の披露宴って！？やだ恥ずかしいノノって違うわ！！もうやだ俺帰りたい。周りの騎士たちが俺の方みてヒソヒソ噂しているじゃないか！！嫌だよ俺、友達に噂されちゃ嫌だからな！！

「（今日は顔の変化がすごいのじゃー、といっても妾以外には無表情にしか見えぬそうじゃが）」

えー、テオからのお願いという名の命令を頂きましたシックスです。顔を見せるのは嫌であるのだが、テオの命令ならつい従っちゃうビクンビクン。覚悟を決めるしかないのか？というか俺顔晒したら恨まれるんじゃないの？連合の人間どんだけ殺したと思ってるのよ。英雄？ただの人殺しです本当にありがとうございました！！

「そら今じゃフードを取るのじゃ、ほらほら」

小言で促してくるテオ。どうやら俺にもメダルをくれるらしい。なんということだろうか、メダル？いらねえよ代わりに愛が欲しいです。あああん！もう嫌だ。負けたい、人生に負けたい。敗北したいです先生。

「・・・もうしょうがないのじゃ！」

パサッ

ざわ・・・ざわ・・・

おおおううう、この糞餓鬼何しやがるう！？おおお俺のが公衆の面前にい！？ほらざわざわ言ってるじゃないか！？どういうことだよ、もう嫌だ。何度目だ嫌嫌言ったのは。むしろ快感になってくる。嫌よ嫌よも好きのうちー

「ふふふふ、どうじゃ！これが帝国が誇る『最強』の英雄『スナイプ・オブ・インペリアル』じゃ！！」

そんなことをメディアの皆様の前で・・・、というか人間一杯いすぎてあれなんですけど。まほネットの掲示板が大変なことになってしまっじゃないか！？あー、やべえテンションが変な方向で上がって逝ってるわ、落ち着こう。メディアのカメラフラッシュが俺の目にビクンビクン作用しているが気にしない。俺一応アルビノなんだよ？壊れても再生するけど嫌なものは嫌なのだよ・・・また嫌って言ってしまったな。

「ふひひ、もうどうでもいいや〜」

うふふふふ、ナギたちが笑っていやがる。本当にコイツら死ぬばよかったのになあ。腕が消し飛んだのにラカンはピンピン。詠春はガチガチに固まっていたけど知らない。俺の天敵だから知らない。俺の大好きな巫女さんの本拠地みたいなところに住んでいるから知らない。

「むふふ、シックスは人気者じゃの〜」

どうしてこうなった！？どうしてこうなった！？我が身のことのよ

うに喜ぶテオに萌え萌えしたり、オスティアは墜落するわもう散々だ。その時俺一回死んだしなあ。おお、こわいこわい。飛行術覚えようかなー。だが飛行の練習するなら射撃の練習をしますとも、糞ツタレが。

「というかアルビレオとかガトウとか逃げやがったな」

歓声と俺に向いてるらしい黄色い声が眩しい（日光的な意味で）しかし狙撃手たるもの我慢も必要だ。ターゲットの狙撃のため数日張り込むこともザラじゃない。時にはターゲットが最も狙撃しやすい地点に誘導するのもプロ（笑）の技だ。まあ俺なら隠れている壁ごと貫通させたり、周りの建築物やらを利用して跳弾狙撃しますけどね。

「あとでインタビューに答えてやるのじゃ」

マネージャーか糞餓鬼、その笑顔が可愛いから後でアイス買ってやる。

T o b e c o n t i n u e d

第十射 艦長・最後の戦い（後書き）

・崩れ逝く歯車^{ミッシング・ギア}

弓兵と同じように投影している物体の魔力を爆散させる。しかし弓兵のように魔剣やらじゃなく普通の弾丸なため、作るのに必要な魔力が少なく普通に爆散させてもあまり効果は無い。1の魔力を消費する物体をわざわざ10で投影して爆発させるよりも、1で爆発する物体を作ったほうがお手軽なのですよ。景気づけの意味しかない。弾丸は大量に使うためのいち魔力を込めるとすぐに無くなってしまうので、シックスは効率よく最低限の魔力しか込めないようにしている。弾丸の魔力を探知とかは極力させないようにしている。（エヴァンジェリオン（爆）クラスだと気付くかも）

・設置完了^{コンプリート}

作っておいた物体を一度に大量に具現させるだけ。やっぱりただの景気づけ。

・列車砲グスタフ・ドーラ

本来は一番機をグスタフ。二番機をドーラという。阿呆っぷりがたまらない戦略兵器。大鑑主砲主義の二番手（一番手は大和型戦艦）

造物主を最大級の兵器である列車砲で倒すことをすぐに思いついた人が多そうですね。他にも候補として

- ・日本人として大和型戦艦の主砲砲撃
- ・逆に大和型戦艦を直接たたき付ける力技
- ・さよならジエノサイド砲
- ・普通（？）にハルコンネンのゼロ距離射撃
- ・いつそのことナギが倒す

・愛の結晶ドラグーンの突貫

などがありました。しかし折角「アハトアハト」しましたし、名台詞を言ったのでドイツ繋がり Gustaf さんを使いました。

第十一射 みやほら（前書き）

大戦から20年後のとある日のことである。

「のうシックス？」

「なんだ？」

「働け」

第十一射 みやほら

働く、即ち労働。労働、即ち絶望だ。なんで俺が働かないといけな
いのかまったく理解出来ない。そもそも働くという行動は金を目的
とした動きだ。つまり金があれば働く必要ない。では何故金が必要
なのか。それはもちろん生活するためだ。生活の根源たる衣食住。
着る物も食べる物の住む場所も金が必要なのだ。逆に言いと『有る
ならば金は必要ないのだよ。つまり俺がテオの護衛として存在する
ことは衣食住が確定しているわけであり、つまり金を必要としてい
ない。結果として俺は労働、即ち働く必要がないのだよ。というか
俺テオの護衛として働いているよね？なんで働け？昼に起きて狙撃
訓練して飯食ってまほネット見て寝る生活のどこが悪い！？』

「何か問題でも？」

「・・・全然ないさテオ」

顔が怖かったので速攻で負けた。逃げてもいいよね、俺人間だもの。
あ、人間じゃなかった。まあ俺が人間か人間じゃないかなんて些細
なことだ。ナギが裸でリンボーダンスするぐらいどうでもよいこと
である。で、俺の最初の仕事になったのは帝国領内に潜伏する犯罪
者や賞金首の抹殺、及び捕獲。帝国領内つてのがポイントだ。いく
ら仲直り（笑）したとしても根本的な部分は変わらない。政治とい
うやつだよ。もっとも俺も、連合の手が伸びてる範囲で働きたくは
ない。なにしろ遠い。ドラグーンでひとつ飛びだけどさ。気持ち的
に嫌なのだ。そもそもお外で出たくないでござる。

「で、今度はなんだ？」

お仕事という名の厄介事を持ってきたのだろうか。突然テオの執務室に呼ばれた俺はいささか疑問の思念を持ってみたり。最近じゃ犯罪者も賞金首も帝国内じゃ異様に少なくなり、逆に連合の範囲内に生息するようになったらしい。ざまあみろ。

「お主に手紙じゃ、ええーつと・・・日本？つてどこからじゃ」

幼女から美女になったテオがなんだか異様な雰囲気を放つ手紙を渡してきた。ヘラス族では三十路でも人間換算だと十代らしいから・・・、まだ大丈夫だろ、うん。というか日本？日本人に知り合いはいないはずだが・・・詠春か？結婚式行かなかったことを怒っているのか？なおさら行くか莫迦め。

「ええー、日本、麻」

バリバリバリバリ

「やめて！」

邪悪な文字が見えた気がしたので破った。俺は悪くない。どうみても赤紙です本当にありがとうございました！！こんな手紙を俺に送ってくるとは莫迦にしてやがる。やっぱり蜂の巣に・・・するんだつたら結局行っちゃうことになってしまっうな。なんという二重の罠、これは恐ろしい。今孔明でもいるんじゃないだろうか

「何をやっておるのじゃ！！手紙を破るとは！！」

「考えてみる、俺に日本人の知り合いはせいぜい詠春ぐらいだ。しかも詠春は京都という場所に住んでいる。麻がつく地域に知り合いはいない」

「でも手紙を破るのはまずいじゃろ!!」

細けえこたあいんだよ!!・・・しょうがない、こうしようじゃないか。「この手紙は無かった」つまりそういうことだったんだよ。簡単に言うところの手紙を出した莫迦が悪いということだ。だいたい見なくても予想つくからね。

「内容もわかっておるのか?どんな内容じゃ?」

「どうせ警備員とかだろ?日本の麻帆良は魔導書やら魔力を溜めに溜め込んだ樹があるからな」

「・・・」

テオがなにやら考えこんでいるが気にしない。どうせこの魔法界にいる限り関係ないしなあ、だから考えても無駄であるというのに。それにしても随分とこの娘成長した。俺は今二十歳だけど娘的な視線で見れるぜ。いやー、一歳で戦争に参加して殺しまくったとかギネス級じゃね?ギネスは旧世界のほうだったわ。

「シックス。これは命令じゃ」

「ほ?」

なんだよ突然命令って。なんでそんなに真剣なの?俺嫌な予感しかないよ?まさか君まで俺に働けというんじゃないだろうな。・・・何度も言われたか。絶対に嫌でござる!!ニート三日もすれば奈落の底!とは誰が言ったものか。ニートを三日すると心もニートになつてしまうという偉い人の格言だ。俺もこういう生き方をしてみた

いものだ。

「麻帆良に行つて働くのじゃ、そして見て回れ。世界を！」

バーン、と後光がさす。なんだよ世界を見て回れつて。これでも俺も日本人だよ？中身だけだけど。ええつと、ヤマノテセンサー、ロツポンギー、グンマー、カゴシマー、ホツカイドドドド。チバシガサガ！！だろ？やめてよね、俺が本気でしたら日本なんか丸わかりだよ。

「なんじゃその顔は嫌なのか？ん？」

「角でぐりぐりするなじゃじゃ馬、畜生！毎週手紙を送つてやるからな！！」

「おーそうしろそうしろ」

ああ、おかしいよ神様。目の前が揺らいで見えないんだ。これは涙？あははは・・・働きたくなえ。お前達にわかつてたまるものか。起きたら豪華な『昼飯』が勝手に出てきて（出てきません）読みたい漫画があつたらすぐに届くし狙撃の練習しほうだいたし。家賃も払う必要なし！三食用意！豪華な部屋！なにより金が必要ない！護衛？・・・やつてるよ？大戦後俺の情報が一般公開され、テオを俺が護衛していることは魔法世界全区に知られているんだよ、そういうわけでテオを襲う莫迦はいない。

「うわーん、もう来ねえよー！！！！」

「な！？ちよ、それは・・・」

一気に窓から飛び出す。ドラグーンを呼び出しゲートへ向かう。・ゲートが繋がる日は大丈夫だろうか、まあ俺が頼んだら無理矢理開けてくれるかもしれない。こういうときに権・・名前を使うべきなのだよ、ふひひ。ほら視界の下にある街から愚民共が俺を指さしてくるんだ。ほら手を振ってやろう。・・キヤーキヤー五月蠅エ狙撃するぞ莫迦ども。ファンサービスだよ莫迦、言わせんな。

「日程とか全部無視したけどまあいいか」

そんな些細なことを考えながら俺はゲートへと向かうのであった。

「ぬう、その狙撃手は信用できるのかの？」

机に肘を立てて、苦虫を噛みながら呟いた老人がいた。もつとも後頭部が変に長い存在を人間というカテゴリーに入れることが出来るかどうかただ疑問を持つだけである。

「第三皇女第一主義ですからね、他の存在には興味を湧いていませんでしたが・・・」

その老人に対してメガネでスーツが渋い男、どこかしら『ガトウ』を思わせるかつての少年『高畑・T・タカミチ』が返した。対面する老人が心配の顔をしているのに対して、タカミチは妙にソワソワしていた。タカミチにとつて、彼はほんの数時間、下手をしたら一時間程度だったかもしれないが、銃の使い方を教えてくれた師匠でもあった。なにより彼の『守るべきはものは必ず守る』という

スタイルに憧れていた。

「逆に何もしなければ何もしない、か」

老人はカタカタとパソコンを打ち出す。接続するのは魔法世界における最大の情報サイトであるまほネット。闇の情報は手に入らないが一般公開されている情報ならば必ず細部まで知るところが出来る場所である。画面にはダブル・シックスの肖像と、彼にまつわる話。戦闘能力における考察などが書かれていた。

「狙撃手の代名詞とも言える彼がのう・・・ほ、なるほど『狙撃主』か」

もじつて『狙撃主』と書かれていることに納得している老人であった。老人は続いて疑問を口にする。「まず彼が来てくれるか」というごもつともな質問である。これに対してはタカミチも薄笑いしか出来なかった。来なくて当たり前来てくれれば御の字。客観的に見て、テオドラ第一主義であった彼がテオドラから離れることはほぼありえないのである

「シックスさん元気にしてるかなー」

彼が所属していた『紅き翼』の面々と肩を並べていた彼のことを思い出し、自然と笑みがこぼれる。彼の対艦対兵器における破壊力は最強とも言えるし、対個人においても無限に出てくるのではないか？そう思わせる銃弾があるのだ。正義の魔法使いたちは彼のことを腰抜けとか言うが、それは間違いこの上なく、なにより彼にとってそういう言葉はホメ言葉だから無駄だなあ、とタカミチがしみじみ思っていた。

「ほー、連合の人間には微妙な存在なのじゃな」

「ええ、帝国ではナギさんよりも有名ですね。大戦時ではラカンさんの1.5倍ほど戦艦を多く撃墜していますし、彼は帝国領土内で犯罪者や賞金首の抹殺をしていましたから」

そのおかげで犯罪者や賞金首が連合に流れてきたんですけどね、とタカミチは続ける。実際彼の言うとおりシックスは連合と帝国とでは真つ二つであった。同じように帝国の兵隊を殺しまくった『紅き翼』だが、それは何故か帝国でも人気がある。まほネットの掲示板では日々選ばれし者（NEET）達がこのことについて議論している、曰く元老院の仕業だと。そしてそれを書き込んだ者はいなくなるといふ都市伝説まで流れる始末であった。実際どうなのだろうか

「ほーほー、いいのう第三皇女（さいばいしゅ）が・・・」

帝国では守り神とも言える存在だが、連合では『悪魔の弾丸』の異名を故意に広めようとしている気配すらあった。だが連合の人間でも彼に憧れる人はいる。浸透しなかつたので選ばれし者たちは「ざまあwww」と書き込んだそうなの。

「あはははシックスさんに聞かれると死んじやいますよ」

「クシユン!! あー、だる」

ソーサーに乗っているフードの狙撃手は太平洋のど真ん中でクシヤミをする、これがバタフライ効果か!?

T o b e c o n t i n u e d

第十一射 みゃほら（後書き）

20年の間？暇があったら外伝的なもので出したいと思います。
間な話ですので短いけど・・・勘弁ね？
だって日本がオランダに・・・。

第十二射 After Five (前書き)

翔門会に入ってアマネちゃんを崇拜したい

第十二射 After Five

「あー、忌々しい太陽だ、ガツデム」

俺はどこぞの莫迦とは違う。故に俺はちょうど昼と朝の間あたりを狙って学園に侵入した。どこぞの莫迦はこの女子区生きの電車に乗っていたりと。まあそんなときにも認識障害の魔法は効くんだからすごい。とくにこの認識障害の魔法は糞つたれな麻帆良学園にある滅茶苦茶でかい樹から魔力チューチューしてそれを利用しているからか・・・、範囲がすごい。魔力の無駄遣いここに極まる、だ。さて皆様にとってお忘れがちな憎い奴かもしれないが俺はアルビノだ、色素がない。太陽がめっちゃ眩しくてうざい。死ねばいいのに。一番驚いたことに旧世界と魔法世界の太陽が微妙に違った。あれか、オゾン層破壊とやらで紫外線が多いのか・・・。

俺はゲートを通りアメリカのどっかに降り立った。その時だったね、朝日が丁度上がっていてよー、つい見てしまった。あれはひどかった。思わず「ピヤツ!？」て言いながらもがいた。非常にアレだったが・・・周りの人間が少なかったので少しお話した、おかげで俺の対外的評価が下がることはないだろう。俺の評価が下がることでテオの評価が下がる可能性があるからな。

で、朝日が目に激突したのでサングラスを買った、これいいね。最初は投影したんだが・・・、設計図があるわけない。ただのイメージによる投影だったせいかな、それに加えてグラスンの投影とかはじめてだったんもんで、どこぞの糞餓鬼がクレヨンで適当に書いたような形になった。フッフ、すぐに散っていったよ。

「どこから見ても不審人物だなこれは・・・、これだから旧世界は」

ガラスに映った俺自身の様子を見る。どうみても犯罪者です本当に・・・！これはひどい・・・！圧倒的ひどさ・・・！ざわ・・・ざわ・・・。で、グラスン買おうと店に入っていったわけなのだが、認識障害の魔法を忘れていて危うく通報され・・・るどころかどこからかモスバーグM590（ショットガン）らしき物体を取り出すという始末。

「We are the world」

さすがに人が居ないと言えど、いつまでもガラスを見つめるわけにもいかない。俺は歩き出した・・・そこで更に問題点が浮上する。どこに行けばいいのかわからないという。女子区という場所までは覚えているのだが、んー知らん。ただでさえやる気がないのに余計削る気が莫迦が。おい誰か迎えに来いよ。手紙破り去ったから細かいことは知らないのだ。まあいいか、ホテルでも探すべ。金は腐るほどあるし一番高そうな場所にしようではないか。

「（糞ツタレの狙撃にも良いしな）」

「何！？侵入者じゃと？」

朝でもないしかとって昼飯を食べようとするような時間でもない微妙な時間。とある学舎のそれはそれはとても偉いジジイの部屋。もはや人間見えないその頭部が特徴の糞ツタレなジジイである。さて、そんな微妙なジジイの微妙な時間に『彼ら』は正規のルートで

はない場所からの侵入を察知した。

「ええ、魔力を抑えているみたいで捕捉はまだしてませんが・・・、認識障害をしてるようでした・・・」

電話の向こう側から焦っているように感じられる声が聞こえる。焦るのも無理はないだろう、認識障害を使っている術者は非常に高レベルらしいのか、一人一人集中して探さないとすぐに見失ってしまうとのことだった。しかし一人一人集中していれば何万もの人間の中から一人を見つけたことがどれほどの労力か・・・。

「むう・・・空からの侵入に加えこのステルス性・・・AAクラス以上の奴かいな、タカミチ君？」

電話の向こうの相手は苦笑しながら肯定も否定しなかった。かすかに笑い声が聞こえてくるばかり。しかも少し『何か』に引いているような感じも合わさっていた。それにももしも？と尋ねた老人、そして返ってきた言葉は・・・

「ほ、捕捉しました学園長・・・本国クラスだとSA以上でしょうね・・・あははは」

「ふお!？」

スーツメガネの男は見ってしまった。街をぶらつくフードを被った男を。タカミチは忘れない、彼の後ろ姿を。タカミチはフウっとタバコを吹かし、フードの男であるシックスのもとへ走っていった。あまりの出来事に学園長と呼ばれたジジイへの報告も忘れて。

「あの、すみません」

後ろから白いフードの男へと話しかけるタカミチ、内心少しビビっていたがもしかしたら、という可能性も有る。最後に出会ったのは何時の日だったか、まだ自身が幼く『彼ら』の背中しか見ることに出来なかった日々を思い出していた。

「黙れヒゲ、俺は今忙し・・・oh、ナンティコツタイ」

振り向いた男の顔がフードから覗いた。後半の口調がエセ外人にしか見えない件についてはタカミチは触れることはなく、フードの男は非常に嫌そうな顔をしていた。タカミチは目印となる赤目を見ようと思っただが、サングラスをしているようなので本人かどうかはわからなかった。しかし動きやらを見て、なによりタカミチ自身のことを知っているようは振る舞い（学園内の魔法使いはそこまで驚かない）だったため彼がそうだと確信した。

「久しぶりですね！シックスさん！！いやー何年ぶりかな!？」

テンションが鰻登りどころかコイの滝上りクラスに上昇しているタカミチを見ながら、やれやれだぜ、な感じを出しているシックスであったが、動かないはずの口元が少しだけ上がっていたのは誰も気付かなかった。もちろん本人さえ。

「おら、仕事をもらいに来てやったぞ」

「ええ！すぐに学園長のもとに案内しますよ!!」

タカミチに先導されながら学園内を歩くシックス。数歩歩いたとき何か思い出したのかシックスのほうへと振り向き尋ねた。今まで何をしていたのか、自身が咸卦法を使えるようになったとか、エヴァ

ンジェリンがいるとか、そのサングラスはなんなのかとか。楽しそうに話すタカミチをじっと見ていて、シックスは何も言わずただ頷き、話を遮るようなマネはしなかった。

「あ、そういえばテオドラさんの護衛はどうしたんですか？」

「世界を見て回れとの命令だ。その命令を実行するにあたって丁度良かったからだ。手紙も来たしな」

ツンデレみたいなこと言うシックスに「うんうん」と満足するタカミチ。かつて彼が目指す『彼』たちの仲間と肩を並べ、そして戦ったシックスの大戦中のことを思い出ししみじみとしていた。だが最後に「手紙は見る前に破り捨てたけどな」とボソツと言った言葉が聞こえてしまい、一瞬だけ世界の時間が止まった。

「そ、それにしても世界を見て回れ、ですか。何故そんな・・・？」

タカミチの疑問に声に一瞬、いつもの無表情のまま口を開けたシックスだった。しかしすぐにシックスは思考に入り、顔はやはり無表情のままに。シックスの出生を知っている人間ならばこれの命令もあながち悪くないと言える、だが知らない人はただ疑問だけだろう。シックスにとって世界とは？それは最初に見た人であるテオドラであり、彼女が住む帝国であり、なにより戦争であった。・・・と思ってる彼らであるからして。

「・・・俺の母は緑色の液体で、父はいかれた科学者だからだ」

「な！？・・・まさか・・・初耳ですよそれ！？」

聞く人が聞けば頭がおかしい会話にしか見えないが、なにより大戦

中の、それこそ大冒険と言える旅の中において様々な経験をしたタカミチにとつてそれを考えつくのは容易なことであった。だが、まだ半信半疑であるのか不安な目をシックスに向けている。

「実は俺お前より年下だからな。戦争に参加したのは一歳前後だからな、hahaha」

「な、なんだつてー！！??」

「ふおつふおつふお、歓迎しますぞ狙撃手殿」

なんという、まさか生でみるコイツがここまでの奴とは思ってもせなんだ。なにこの後頭部？莫迦なの？死ねよ。中身が気になる、非常に気になる。パアンって撃つたらどんなお花を咲かせるのか気になる！

さて、咲かすとしたら銃の選択も非常に大事だ。あまりに強力な莫迦銃だと綺麗にならない。かといって弱すぎるとはじけ飛ばない。頭に残った弾丸を爆散させるのもアリか・・・いやないな。焦げ目がつく。美しくない。

「し、シックス殿？その白い拳銃をワシに向けないでほしいのじゃが？というかワシにかした？」

「・・・んあ？ああメンゴメンゴ、その後頭部を綺麗に吹き飛ばしたいと思っただんでいい」

「なにそれちょーやばいんですけど!」

イラツと来たが放っておく。このタイプの莫迦ジジイは下手にかまうと調子に乗るタイプだ。相手が偉いジジイなもんで大きく出れないことにつけ込む変態行動タイプだな。というかマジムカツイた、影の倉庫でも伸ばしておくか。いざとなったら倉庫から全門開放だな。出てくるぞ?一杯、それはもう。

「で?俺は仕事として何をすれば?」

「むむ!そうじゃな、丁度テストに合格したネギ君もいるんじゃない?」
副担「ガチャ!」「モガ!」

こいつ今春休みって言わなかったっけ?だとすると時間狙った意味ないじゃん。むしろ部活生がいて大変だよ。いや今はそんなところはいい、先生?やめてよね僕の専攻は兵器工学だよ?何を教える?というかあとでこのデザートイーグルさん洗わなくては、消毒もいるな。いやいつそのこと消してしまおう。勢いで口にツッコんでしまったが・・・、全部この莫迦ジジイのせいだ果てる。

「いいか?俺は先生なんかにならん、この学院には警備の仕事があるんだろ?それでいい」

ガチャッとデザートイーグルさんを口から抜いて消した。折角術式追加したのにもつたいないけど、ジジイとキツスカましたやつなんかいらん、せいぜい成仏してくれや。

「昼間何をする気じゃ?」

「はあ?」

イマイチ理解出来ない言葉を聞いた。あれか？俺が帝国産なのが悪
いのか？産地直送じゃだめなのか？イジメかこれは？なんで金があ
るのに昼間も働くのか理解出来ない、夜の仕事はエロくないテオの説得のこ
とを考えて万歩譲ったのだぞ。なんとということか、日本人はどうして
も働かないといけない莫迦民族なのか。働きすぎだろ少しは効率考
えろよ。つめ込めばいいわけねーだろ！！

「あんなジジイ？俺は金がある、つまり俺働かない」

「し、しかしのう、近所の目が」

「黙れ莫迦ターレ、貴様達日本人の気質なんか俺は知らん。夜の仕エロ
事もテオがあそこまで言ったためだ、昼の仕事をするぐらいなら今
すぐコートジボワールでカカオの栽培を始めてやる」

「なんでカカオ！？」

うっさいタカミチ、フィーリングだ。適当だ、チョコレート作って
毎年テオに送りつけてやる。金は大量にあるから高賃金優待遇のプ
ランテーション始めて地域密着型でも始めてみるか。カカオ王にで
もなってみるか、いいね。世界のことなんでも知りそうだよテオ。

「あいわかった、しょうがあるまい。それでじゃ・・・住むとこな
んじゃが女子りよ「ダアン！！」・・・ナンデモナイヨ？」

「高い処だ、一番高い処にしる。この麻帆良が遠くまで見通せるほ
どのな」

後ろの窓がバラバラになつてのを横目で見ているジジイが頷いて

いるので銃を下ろした。それにしても色々最悪だなこのジジイ。抹殺するぞ莫迦が。その長い後頭部は一体何のためにあるのか、その後頭部は考えるためにあるのではないのか!?

「うむ・・・探しとくわい。ああ、それと戸籍も勝手に作ってかまわんかね?」

「一応作れ」

マンガやDVDを借りるためには個人証明書がいるからな。それを得るためにはやはり戸籍はいるだろう。本来夜型つてもあるがここまでニートだと逆にすがすがしいな。どうせ窓あるいは屋上から狙撃するだけだしなあ。わざわざ俺が出向いてまで戦うような奴がいるならとつくに麻帆良潰れてるだろう、一応ここは魔法世界においても有用な魔導書やらが置いてあるからな。

「手配しておこう。警備に関しては後に連絡するぞい、念話しかないからちゃんと受け取るのじゃぞ?それと今夜12時に世界樹広場前「だが断る」なん・・・じゃと・・・!?!?」

「見せ物にする気か?よろしい、ならばこの麻帆良が世界で唯一列車砲が爆走する街に変えてやろう」

バリバリバリバリ!!

「やめて!!見せ物にする気はないのじゃが・・・ほら、チームワイクじゃったり・・・な?」

hahaha、何をおっしゃる莫迦ジジイ。狙撃手たるもの常に殻に引きこもり後頭部が長いジジイには従わないものだ、今決め

た。そもそもね、遠くからパンパンするだけの簡単なお仕事にチー
ムも莫迦も無し。というか普段から実弾（笑）な癖して何言ってる
んだこの莫迦共は。相手の手札を失笑で済ます魔法使いどもにチー
ムワークとか、ベルゼブブがキンチョールを振り回すぐらい有り難
し事なり。

「17時にまた来る、そのときまでに家を用意しろ」

トビラを開けてさようならつと。適当に17時とか言ったがそれま
で何をするか……。いや狙撃手たるもの地形把握は完璧でなくて
はいけない。360度あらゆる面からの狙撃と跳弾を操るときにこ
そ我が『狙撃主』たる本領が発揮されるのだ！！……めんどくせ。

「はー、寿命が300年ぐらい縮んだわい。なんという我が儘な男
じゃ」

ボタン、とシックスが退場した部屋に愚痴が広がる。ため息ととも
に吐かれたそれは撃ち抜かれた窓の向こうへと広がり、静寂が続く。
少しした後、タカミチが彼を弁護した。

「ハハハ、あれがシックスさんですよ。テオドラさん以外の存在に
ついては最低限でしか無いですから」

案内しているときの会話を思い出したのか、顔を伏せるタカミチ。
それを見て不安そうな学園長ではあったが、ヒゲを撫で回しいつも
の砕けたジジイになる。

「ま、理解出来ないこともないが……。彼は銃を扱うようじゃからな。魔法使い達、特に『正義の魔法使い』達からは非難の嵐じゃ。反面帝国の住人からは圧倒的な支持を得ているがの」

「『正義』をうたう連合の戦艦を200隻以上たたき落としましたからね。ナギさんたちが彼の狙撃をくぐっていったらしいですが……。アルさんが言うには『アイツ』を除いて唯一死ぬ覚悟をしたらしいですよ」

「フオッフオッフオ、それにしてもタカミチ君。君は嬉しそうじゃな」

タカミチは笑っていた。彼にとってシツクスもまた憧れの一人でありごく僅かな時間といえど師事してもらったこともあるのだ。学園長の言葉にタカミチは「また彼と仕事が出来るからです」と、最近仕事で疲れ気味の顔を吹き飛ばし、満面の笑みで返した。

「ネギ君には来るべき日に教えよう。ほれ、修学旅行ももうすぐじやしのう。……。あ、エヴァンジェリンのこと忘れておった」

「あ」

ジジイが策略を練りながら大変なことを思い出す。最強種の一人として過去最高額の600万ドルの賞金首である彼女だが、学院にいる理由はナギ・スプリングフィールドの呪いによって縛られているからだ。ナギの息子ネギ・スプリングフィールドの試練の一環として呪い解除を狙う彼女に襲わせようとしているのだ。学院結界もあり吸血鬼としての力を大部分削られている彼女は、それこそただの『幼女』である。600年研磨してきた経験もあるが……。狙撃

に効果があるだろうか？

「まずいですね、彼ならばエヴァを一方的に虐殺出来ますよ!？」

「いますぐ念話を！」

ガタガタと机から立ち上がりソワソワする学園長と頭を抱え出すタカミチ。そしていざ学園長が念話を送ろうとする・・・

(ただいまこの念話はご使用出来ません。現在電波が届かない場所にいるか、そもそも拒否されている可能性があります)

「おおおい!!--!!」

「17時になって来たときに話しましょう・・・」

そうじゃな、と机に頭を押しつける学園長。一件で発せられた悲鳴が学園七不思議の一つに加えられたのは、どこの話であろうか？

T o b e c o n t i n u e d

第十二射 After Five (後書き)

色々修正、誤字がやばい。

第十三射 狙撃手の弟子（前書き）

予告的短編を書いてみた

第十三射 狙撃手の弟子

トユルルルルルルルルルル……ガチャ

「もしもし……俺だ」

夜中の何時だと思ってやがるんだ莫迦ジジイ。ただでさえ時差ボケで死にそうなのにバツキユンするぞ。……どうせ一眠りしたら時差ボケ治るんだけどね。素晴らしい肉体だ。それにしても電話番号教えた覚えはないのだが……ってコイツが用意した部屋だから知っているのか、なんかストーカーみたいだ。どうせ仕事だろう、受けた分ぐらい働くさ。とっとと屋上に出来ますか。

「シックス殿！夜中すまんが援護してくれんか！？思ったより敵が多くてのう」

「金は？」

「払う！今日は思ったよりも大勢来てるんじゃない。敵の位置……」

パスー、とタバコを吹かす。実際タバコじゃなくて魔法薬の応用で作った薬なんだけども。効果は興奮血圧を下げるものだ。あと煙が紫外線を吸収してわずかにマシになるらしい。一体どういう原理か非常に気になる。魔法薬なんて俺にはサツパリーニヨだったかな。知っても出来ない。投影？設計図すらないのにあんな細かい物体作れるか。で、タバコを吸いながら見るのは麻帆良の夜景。百万ドルには負けるがなかなか趣がある……かな？

「ああ……既に捕捉した、全方位いつでもいけるぞ？」

俺の目玉は大抵のものを捉えることが出来るぞ。フッフ、風で飛ばされたスカートもバッチリだ。いかんノイズが入ったか。ガチャンとハルコンネンを構える。範囲が狭いから狙撃体勢に移る必要も無いな。麻帆良も狭いもんさね。そして俺の弾丸は百八発あるぜよ

「なんと!？」

「なめるなよジジイ、帝国の狙撃を見せてやるさ」

スナイプ・オブ・インペリアル。いつからか帝国ではなく帝王の意味にすり替わって来たらしい。狙撃の王様な感じでな。まほネットにおける『帝国最強のシックス様 666弾目』参照だ。相変わらずまほネットは混沌の海であるが、なかなか有益な情報も多い。なにより個人個人の包み隠されていない感情があらわになっているのだ。耐性が無いものならば寝込むくらいひどいものだが。

「目標をセンターに入れてダアン!目標をセンターに入れてダアン!
!目標をセンターに入れてダアン!目標をセンターに入れてダアン!
!目標を・・・飽きた」

言葉に合わせる必要なんかないな。肉眼で捉えること出来るし。なによりこれだと狙撃が遅い。別にこのままでも援護が目的だから大丈夫だろうが、まあ初仕事だ。全力とはいかないが本気で行かせてもらおう。それしか能がないんでね。撃ち負けはせんよ、当たるのであれば。

「はあっ・・・はあっ・・・クッ！」

麻帆良のとある森の中にそれはもう奇妙な光景があつた。黒髪ポニーテールの女子中学生が刀を振り回し化け物っぽい奴らと戦うという光景だ。さて、そんな一部の大きなお友達が待ちに待ちそして望んだ光景であるのだが、見ればその少女は大分苦戦しているようだった。ボロボロになりながら、しかし決してその手に持つ刀を放そうとはしない。美しい

「マナ？そっちはどうだ？」

「フフ、これはピンチだね。弾がソコを尽きたよ」

そして刀を持った少女と背中を合わす黒髪ロングに褐色の肌、長身の少女は応える。口は軽いが手に持つ拳銃の中に既に弾丸は無く、そして疲労により肩が揺れていた。それは勿論刀を持った少女にも言えることである。お互い五体満足であるが疲労困憊、俗に言う”ピンチ”だろう。

「これはこれは、余計に報酬を貰わな「パァン！」なに!？」

褐色の少女（大）が更に声を繋げるときにそれは起こった。目の前の化け物達、鬼や鴉天狗といったやつらが突如”はじけ飛んだ”のだ。頭を中心に円状に吹き飛ぶ化け物たちは為す術もなく、木の影や仲間の影をそのままに、そしてそれごと消し飛ばしていった。

「これは狙撃か!？」

「援軍・・・なのか？」

褐色の少女は自身がそういう武器を使うのか目の前の光景に関して心当たりがあった。だがその行為にこそ心当たりがあるものの、それを行う人間に心当たりは無かった。極東の地でありながらそこから一帯の魔法使いたちの拠点とも言える麻帆良だからこそ、『狙撃』という行動に出る人間は彼女”龍宮真名”ぐらいしかいないのだ。

(お〜い、桜咲君に龍宮君。今援軍をよこしたからもう少し・・・え？もう来てる？)

(学園長！？一体誰が・・・！？)

今頃念話をしてきた学園長。見れば困んでいた化け物は全て消滅し、そして術者と思われる人間は上半身が無かった。何かに挟られたような死体。そこで龍宮真名はその狙撃をした人間について、ある程度の予測がついた。正確無比でありながら異様な速度での狙撃・・・。

「まさか・・・師匠？こんなところで？しかし・・・」

「ふう、他の地域も同じような感じだったらしいぞマナ・・・マナ？」

なんでもないと慌てて返す。その様子に何か言おうとしたが、特にかける言葉も思いつかなかったし、なにより疲れていた。互いは無事に安堵し、一方は例の狙撃の恐ろしさを。もう一方は恩師であり恩人でありいつか越えるべき存在を思い出していた。

「(あれは・・・アルカナか？なんでここに・・・って確か”そう”だったな。最近何も覚えてねーなあ)」

で、360度一秒間に数発の狙撃というギネスもビックリどころかもはや変態な記録をたたき出した例の狙撃手だが、彼は仕事（という名の虐殺）を終えプハア〜とどこぞの金に汚い豚野郎のように煙を吐き出した。特に意味はないそうだが、なんとなくやりたくなるらしい。煙の輪っかをぼっぼっぼと出したり暇つぶしにはいいとのこと。

「あー、もしもーし。こちら狙撃手」

夜よりも黒い何かがコンクリートの床からニョロニョロと伸びた。その先には携帯電話がある。彼の目のように赤色の携帯をカパッと開き彼は電話した。相手は雇い主である学園長である。いちいち報告するのは面倒な彼であるが、組織に組み込まれている以上我が儘も言うわけにはいかず渋々といった表情。

「シックス殿か、仕事が速いのう。先程の狙撃に関する質問が多数じゃ」

「俺の存在のことは言っなよ？」

「わかっておるわい、適当に誤魔化しておいたぞい。ファファファファ」

笑い方が異様にムカツイたシックスだったが、その怒りを聞こえるようにした舌打ちで我慢した。学園長がそれについて何か言っていたが無視して、小汚いお金の話になる。後には自身のここにいる理由が無いという理由で見事に100万を超える金を得ることに成功したシックスと、空を見ながら何かを呟く学園長が残ったそうなの。

「おおお、なんという・・・この金喰い虫め!？」

「黙れ、これで最新のゲーム機器とプロジェクターでも買うか。部屋が無駄に広いし面白そうだ」

大画面でリオレ スを拡散弾で滅多打ちにしたのはまた別の話である。逆鱗がとれないのはただ運が悪いだけだ。シックスが住まうことになったのは注文通りの高層マンションの一番上のフロアである。運よく誰も買い手がいなかったのでそのフロア全部の部屋を買ったのはさすがというべきか。金を出したのは学園長であるのだがここでは触れないでおこう。

「まずは発売日を調べてスケジュールをたてなくては、一切の無駄も赦さんぞ」

中身の本質は未だに変わらず、更に言うなら魔法世界というある意味閉じこもった世界で何年も過ごしたのだ。その思いはどれほど積もったものか。彼以外に知るよしはないだろう。別に知っても特に意味はないのだが。

「クフフフ、我が腕の中で息絶えるが良い!例えゲームをクリアしても第二第三のゲームが(略)」

真夜中の上、なにより最上階全てが彼の部屋であるため屋上に誰も来なかったのが幸いしただろう。所変わって、真夜中にマンションの屋上から閃光が飛ぶという噂が広まったとか・・・。調べようとしても誰も見つけるのが出来なく、そのまま泡の様に噂は消え去っていった。

「良い買い物をした」

次の日の夕方のあるところ。夕焼けを浴びながら俺は帰宅する。左手にはゲーム機、右手にはソフトが入っている袋。完璧だ。レトロから最新作まで網羅、糞ゲーワゴンゲーから地雷ゲーなんでもお取り寄せ可能。ククク、脳汁の分泌が止まらない。

「普段のローブじゃねーから怪しまれないしな」

さすがに認識阻害が全体にかかっているとはいえどやめた方がいいものである。中には勘の良い人間がいるし、なにより俺がここにいるのは極秘なのだ。名目ではジジイの個人戦力だとか言ってたな。まあなでもいいさ。俺の今の姿は赤いネクタイに黒いスーツという簡単な姿だ。白髪オールバックに黒いサングラス。ふむう、どこのヤクザだ俺は。今気付いたが俺を中心に道が左右に分かれていつているように見える。

「怪しまれないけど怖いっていう」

だが今更この格好を止めるわけにはいかない。何故だがそう思う。まあ結構この格好気に入ってるから最初から変える気はないのだ。この麻帆良だからきつと俺の格好もいずれどうでもよくなるさ。たぶん。それにしても面倒くさい。俺的は折角日本に来たのだから京都へ行きたい、というわけでジジイに休暇（仕事を始めて数時間後）を貰おうと思ったがダメだった。なんでもタイミングがどうのこうの言っていた。仕事を守れないやつがテオを守れるわけがないそうなので（テオの言葉）渋々従うことに。

「あー、北海道行きてえ」

カニを食べたい、カニの味噌汁飲みたい。なんでこう、食物関係になると異様にやる気が増すのか……。まあいいさ、食べ物は必要なものだ。だからしょうがない。食っても食っても体重も体格も変わらないからな、ダイエットも必要ない。いるのは『肉体固定』の術式をいじることだけ。その気になれば猫にもなれる、んまい！！もふもふもふもふ！

「もしかして……師匠？」

ちようど俺の横を通り過ぎた女子中学生が俺に話しかけてきた。見た目大人だからコスプレにしか見えない。褐色黒髪ロングというモ口俺の好みだから困る、俺とテオの間を切り裂こうとする邪神だなこれは。というか俺のことを師匠って呼ぶのはやはりアイツしかないな。タカミチは言わない、言えよ。

「アルカナか、なんでここにいいのか気になるが」

「今は龍宮真名さ、それとその質問はこっちの言葉だと思っけど」

マナ・アルカナ改め龍宮真名。一応俺の正式な弟子でもある。仕事に出会った主従一組の従者がコイツだった。四階の鈴みたいな名前の組織に所属していたが……。コイツも俺と同じように銃機を扱うタイプだった、俺の正体のことを知るなり弟子にしてくれと頼まれた。お断りしたいところだったが、主従そろいに揃って俺をストーキングしてくるものだから半年の間だけ弟子入りを許可してやった。あれ？こいつがいるということは主人もいるのか？

「お前には関係のないことだ、あと俺のことを師匠と呼ぶのをやめる」

「わかったよ師匠」

カチンツと来るねこの女。畜生いたる所成長しやがって。コイツの成長具合だったが、チート級だったね。撃てば撃つほど当たる、なにこの女こわい。俺のハルコンネンに興味津々だったが反動を計測したら大変なことになっていたので諦めてくれたよ。二丁一式のケルベロスと交換になあ！妙に喜んでいたがどうしたものか・・・、つてよく考えたら帝国の英雄である俺が直接渡したものじゃねーか。どんだけ価値があるのか。まあ大量生産できるんですけどね。

「ここで傭兵の仕事をしているのさ。なかなか高額だからね」

わかります！一回の出撃で百万はもらった、結構絞ったけど・・・。というか傭兵？なんでコイツ傭兵なんて真似を・・・わーお。忘れていたがアイツ死んじゃったんか。ご愁傷様、俺には関係ないけどな！紛争地帯に介入しているのさ、五体満足のほうが少ない。まあ・・・どんまい。

「昨日の件は礼を言うよ、御陰で仕事仲間と一緒にあの世行きにならなくて済んだ」

「あの程度の敵でそれか、俺の弟子のくせに不甲斐ない」

俺が弟子と言ったせいか目を開いて驚いていた。対して「師匠のようにバグじゃないから」と言われた。確かに中身も肉体もバグであるのは間違いないが。そのバグの弟子のくせになんたる始末・・・！これはひどい・・・！ガンナーとしては弾数が命だからね、魔力

が尽きない限り無限供給できる俺と、やはり差がついてしまっただろう。魔力に自信があるのなら魔力弾でも撃てるんだが、生憎ねえ！。

「師匠はどこに住んでいんだい？」

「なんで教えないといけない？」

「フフ、冗談さ。あそこのマンションの最上階かな」

なんで知ってやがる。そりゃその屋上から狙撃しましたけど！？コイツは化け物か！？って化け物のほうが都合いいな、バグの弟子だし。コイツ魔眼持ちだろ？あれ？邪気眼だったっけ？羨ましいな魔眼、かつこいいし。俺の目はその気になれば複眼でも何でもなるが。魔眼と一言で言うとかっこよすぎる。

「oh、ソナナワケネーダロイ」

「ダウト」

バレた。まあコイツに住所バレてもどうでもいいや。コイツなら俺の性格知っているし言いふらすこともないだろう。さすが我が弟子だ、一瞬で見破るとはな。これで褐色黒髪ロングじゃなかったらどんだけ良い奴なのか（テオとの仲的な意味で）

「誰にも言いふらさないさ、・・・そういえばあそこの餡蜜が美味しいんだよね」

チラっ、チラっとコッチを見てくるのはアレか。脅しかこの莫迦弟子。しょうがない、金は使うためにあるものさ。昨日貰った100

万を半分も使っていないし別にいいか。どうせ食い物がゲームしか買わないので。ついでに夕飯も行くぞ

「うるせエ寿司食いに行くぞ」

「お、イケル口だねえ。デザートに餡蜜もお願いするよ」

コイツ餡蜜好きだな、なんでか知らないが。ちなみに俺は炙りサーモンが一番の好物だ。え？聞いてない？世の中には無駄な知識つてのもあるんだよ！その無駄な知識が生活における潤滑油となるのだよ！ってけーねが言ってた。

けーねって誰だよ

T o b e c o n t i n u e d

第十三射 狙撃手の弟子（後書き）

カニ食いてエ

第十四射 不死の仔猫（爆）（前書き）

褐色肌はいいよ、二次元限定だな！

第十四射 不死の仔猫（爆）

この麻帆良学園とは摩訶不思議な場所でもある。そもそも、こんな極東の地にこんな聖地級の場所があるとは俺には理解出来ない。魔法世界における大英雄『紅き翼』のメンバーたるアルビレオとタカミチ二人がこの麻帆良にいるわ、英雄級の力を持つというこの学園長、過去最高賞金首の『闇の福音』、英雄の頭でもあるナギ・スプリングフィールドの実子もいる。利用すれば世界を覆う大魔法の行使を可能にする魔力を保有する樹（バントウって名前だったか）やAAAクラスの禁書もあるわ……。一体ここは何なのか。

タアアン！！

日本といえば京都だ。京都はなんと世界有数の霊地でもある。素晴らしいさすが京都だ。日本の文化そのものが他の国々の文化と異様に異なり、その異なる文化が寄り集まった場所の京都だ、観光客美味しいです。テオと一緒にまわりたいものだ。一応”皇族”だから無茶なことは出来ないのだが。悔しいビクンビクン、っていう冗談はさておき……

タアアン！！

なにこの仕事超チヨロイ。前回のごとく敵戦力を撃ち抜く必要は本来無い。関西ジュジュチュ協会の強行派の一派なのか、いわゆる式神を行使して攻めて来る。式神はまあ使い魔的な存在なのだが、魔法使いの従者の代わりの存在なため猫や鴉といった使い魔より遙かに強力だ。中には下手をしたら傾国をぶちかますような奴を使役した存在もいるという。……噛んでないぞ？

タアアン！！

ジャパニーズモンスター、妖怪である彼らは正直『滅茶苦茶強い』の一言だ。従者と違い大量召還可能、使用する魔力もあらかじめ紙に込めたものを使用するというエコロジ。さて、そんな奴らであるが驚異的では無い、というのも式神という概念状のため魔力の供給を続けなくてはならない。無くなればボンツと還っていく。エコロジだが燃費が悪いという一見矛盾したような奴らだ。で、簡単に言うと狙うのは術者だけでよい。特に俺は脳天一撃必殺だからな。式神共はある程度自立するが、すぐに終了だ。

タアアン！！

ジジイの話では術者を拘束するのではなく、殺すという理由のためか少し反感を買っているそうだが……。俺が狙撃するのは突破されそうな地点のみであるため、公に文句を言うことも出来ないとのこと。一方的に悪と決めつけてブチコロス癖に、もう一方では殺すという行為に文句を言うとは。なんとも面白い存在である。

タアアン！！

一方的な正義とかなんとか言うが……。俺は特に何も思わない。肯定の意も持つし否定の意も持っているさ。その一方的な正義が世界を包んだら、まさしく世界は平和になるだろうよ。個人の意見？莫迦か貴様等、それこそ最も戦争を起こす種だ。俺は誰に言っているものか。最近やった変なゲームのせいだ。畜生俺ならばBETAなど肉体解放だけで殺せるというのに！

「こちら狙撃手だ……。終わったぞ」

「うむ、今日は撃った数が少ないようじゃな。ってことは……」
電話でジジイに繋げる。活躍などから給料を出すことをやめたのか、俺は弾数の歩合だ。使った弾丸が多いほどそのぶん給料は高くなる。わざと多く使ってもいいのだが、無駄なことはいらない主義だし。なにより金に困っているわけじゃない。働くならば金を必ず貰う、っていうアレだ、そういうアレだ。狙撃手の誇りとしてより少ない弾丸で一撃必殺を。心の師匠のように必殺率150%を目指さなくては。

「スイス銀行に振り込め……意味？特にない」

ガチャッと電話を切る。ちなみにどうしてスイス？ってな人のために説明しておくが……、スイスが永世中立国だからだ。戦争に介入もしないし軍隊の通行も赦さない代わりにこちらは何はしない、っていう国な。どうということかというところ、スイスの銀行に振り込めば警察も何も出来ないってことだよ。僕は悪い殺し屋じゃないよ、ぶるぶる。ガリアルで出来る（ような気がする）……むむ

ガチャ……

「ほう……気付くか」

どうやらお客さんのようだ。招いてもいないし拒絶しているわけでもないが……、狙撃手の後ろをとるとは命知らずな奴だ。まあ俺はどこぞのスナイパーよろしく撃つわけじゃない。だが狙撃手は後ろがら空きだからその反応は正しい、殺されても生き返ると言っ
てよい俺だからこそ余裕っぷりを醸し出せる。命知らずなのはどっちだよって話だな、上手いぜ俺

「さすが帝国が誇る狙撃手だ」

黒いマントに金色の髪が月夜で輝く。彼女の目の前には依然として麻帆良の夜景を見ている狙撃手がいた。彼女の隣には彼女の従者である魔法と科学が融合したガイノイドの姿もいる。そんな彼女たちは最近学園における魔法関連の人間たちに噂になつていふという・・・、『もしかしたらこの学園に狙撃手いるんじゃない？』という話を聞いた。学園長のジジイに聞いてもはぐらかさる、だが彼女ほど長く生きたい存在ならばこれが答えとなつてしまふ。『狙撃手が実在する』

「だが背中をとられるとは狙撃手として「マスター!!」なんだ茶々丸？」

未だにタバコを吹かし麻帆良の夜景を眺めている狙撃手は彼女『エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル』の存在に気付いてないかのように、しかしタバコを持っている手と逆の手には銃を構えていた。無論、彼女もそれには気付く、だからこそ話を進めようとしていたのだ。

「な、なん・・・だ、これは!？」

狙撃手として背中をとられる、それは狙撃手としては最悪の状況だ。彼女は世界最強の狙撃手であるシックスの背中をとりご満悦の表情であったが、彼女の従者『絡繰茶々丸』の声に反応し、そして気付いてしまった。茶々丸の無言の目配りに合わせて見てしまったのも

のは、彼女たちを狙う無数の『銃』がそこにあった。

「砲撃の魔法使いが背中をとられるとはな、ククク」

そこで狙ったかのように振り向く狙撃手を見て、ようやく彼女は気付く。誘い込まれたという現実には。一見狙撃手の背中をとるという行為は狙撃手にとって致命的であるが、致命的であるからこそ対処をしない狙撃手はほぼ皆無だ。魔法陣のトラップをしかけるもの、高密度の障壁を張る物、対処にこそ様々な方法はある。

「（チツ、嵌められたツ！・・・なるほど英雄だ）」

エヴァンジェリンは彼の姿を見て、噂通りだ、と思う。曰くフード付きのローブを着ている、曰くその目は血のように紅い、曰くフードを深くかぶりその目しか見えない、と。学園に閉じこめられて15年、様々な意味で暇を過ごしていたエヴァンジェリンにとって彼の来訪は天の声にも等しいものだった。

「13秒だ。貴様がここに降り立ってたったマヌケな時間は」

エヴァンジェリンは益々興味が湧く、まるで自分を閉じこめた憎き『アイツ』のように……。目の前の狙撃手は彼女のことを知りながらも、そんなこと関係と言わんばかりの行動言動思考、だが彼女はそこに『紅き翼』とは違う英雄としての器を垣間見たような気分だった。

「ほう、私が『闇の福音』でありマガ・ノスフェラトウであることを知りながら、マヌケと言いつ切るかスナイパー」

フードの影と夜ということもありながら顔の様子は見えない。しか

し、何故か彼の二つの目はまるで光っているかのように、ハッキリと赤く染まっていた。彼女が攻撃しないとも思っているのか、攻撃したとしても対処できるという自信か、手を大きく仰いでいた。

「随分と偉そうな糞餓鬼だな。お前がどういいう魔法使いだろうが、俺には関係のないことだ。立ちふさがるのなら鉛色の空を見せてやる」

「クツクツク、さすがだな狙撃手。連合には随分と嫌われているよ。うだが・・・納得いくものだ」

嫌われている、とハッキリと言うエヴァンジェリンだったが狙撃手は不機嫌になる様子もなく、誰にも気付かないようニヤツと笑い、展開していた銃機を消した。彼女はそれを見て驚く。魔法の類ならば、銃を生み出すという工程を作る必要も無く、幻影の類であるのらそもそも彼女には効かない。そしてなにより自分を殺すアドヴァンテージを消したのだ。

「いいのか？私が貴様を殺すやもしれんぞ？」

「無駄だ」

ハッキリと言う狙撃手に対して、楽しそうに笑うエヴァンジェリン。最強の魔法使いの一人として扱われる彼女をまえにして「お前は俺に勝てない」と宣言しているものである。ただの蛮勇か、それとも・・・どっちにしる彼女にとって好ましい性格であった。

「くくく、自信満々だなあ？」

彼女からすれば、正直今の状態において狙撃手に勝てる要因は一つ

も無いことはわかっていた。600年研磨させた経験がどこまで力
バーできるかにかかっている。だが経験といえどどこぞの糞餓鬼じ
やなく、戦場を渡り歩いた英雄の一角である彼に有効的なものだと
は思わない。故に彼女はいつでも動けるように神経を張り巡らせた。

「ここに縛られている上に学園結界で力も封殺、むしろそれで俺の
眼前によく出れたな」

「・・・15年目でようやく気付いたというのにつ！？」

ほのかにシヨックを感じたエヴァンジェリンであるが、それを悟ら
せるわけにはいかない。600年も悪の魔法使いとして生きた彼女
にとつて感情を隠すことは容易であるのは言うまでもなく、シヨッ
クを上手く隠せたのか、それを表に出さず会話を続けた。

「んで？用はなんだ？」

「なんだツレナイなあ、私が噂を確かめにきてやったというのに」
だら〜ん、と腰をかける狙撃手を相変わらず見下し（位置的な意味）
ながら言葉を言うエヴァンジェリンであるが、特にシックスは、見
ての通り、気にすることもなく答える。コンクリートの床に寝転が
りながらタバコを吸うという一部の人からは積極的に怒られそうな
姿を見せる彼に、警戒心という言葉を忘れたのかコイツは、という
心情であった彼女であり、表情が次々に変わる主の姿をしっかりと
録画していたポンコツがいたのは秘密だ。

「噂あ？・・・んあ？まあどうでもいいがな」

「狙撃手がいる、とな。狙撃で思い浮かべるのは貴様だけだからな、

ダブル・シックス」

狙撃手的な心情から言えば噂されることは想定内である。内心で「モテる男はツライな」半分冗談を思おうとしたところ、背景に角の生えた般若がいたので一瞬でその思考は消え去った。フードと夜という関係もあつてか冷や汗を誰にも気付かれることはなかったが、体温の上昇やらなんやらを感じ取ったガイノイドの従者がいた。が、あえて空気を読んで黙っていた。なかなかやる。

「俺も聞いたぞ？この麻帆良には合法的ロリ吸血鬼がいるってな」

「……」

「十中八九マスターのことが「少し黙れ」Yes」

なんだこの莫迦は、と口から出そうになったが持ち前の無表情無關心無気力のスキルを使用して喉に詰め込んだシックスだったが、目を細めてしまったためかエヴァンジェリンは思いつきりシックスを睨まんた。眼力で鳩も射殺す勢いだったが、そこは戦場で死線をクリック抜けたシックスには無効である。なにより封印された状態では、特にエヴァンジェリンという幼女のにらめっこレベルだからしょうがない

「もういい茶々丸、帰るぞ」

「ハイ、マスター」

エヴァンジェリンの目的は達した。帝国が誇る最強の英雄と言われている（連合では不人気）彼がこの麻帆良にいる、それだけで随分と麻帆良における生活も楽しめる、そう思った彼女であった。あの

ナギ・スプリングフィールドでさえ戦場で会えば恐怖を覚えるという狙撃手、連合の空を恐怖に塗り替えた犯人が、この正義の魔法使いどもがいる、さらにはナギの息子がいるこの麻帆良で警備員になっているという笑い話だ。

「（狙撃手に背中を見せるとか莫迦か）」

そんなことを思いながら飛び去っていく二人を見てタバコの煙を吐く。本当は彼の無表情のせいか気付かなかったが、不機嫌さがMAXであるシックスだった。彼の表情を明確に読める存在はただ一人であり、なんとなくわかる存在が数名なのが幸いした。突然現れた幼女に測られるという一種のご褒美（一部）なのだがシックスにはそういう属性は無い。

「（ますます奇妙な処だ麻帆良学園は、どこかに戦争ぶちかます気か？関西呪術協会に喧嘩売ってると思えんが・・・）」

ジジイの思考的には何も考えてないのだが、見れば見るほど怪しいのは言うまでもない

「なんとという・・・絶望ッ！勝てない・・・俺が・・・ッ!？」

ざわ・・・ざわ・・・、という擬音が聞こえてきそうな我が家です。まさかこの麻帆良で俺がここまで苦戦する敵がいるとは思いませんかった・・・。なんとという失態、狙撃手たるもの事前に相手のことを調べ徹底的に潰すための作戦を考えておかなくてはいけなかった。

。。。

「なんとという連戦・・・無理！！畜生・・・バ・ベルめ！！！」
次々と死んでいく仲魔たち、サマ カームが間に合わないだ！？
王の門とやらは化け物かつ！？反則たる常識的に、なんで連戦なん
だよ莫迦めっ。

「くそう、これがメガ ンクオリティか」

ダメだな、今日はやめたやめた。散歩にでも行くか。狙撃の練習も
続けないといけない。魔法球も持つてくればよかった。さすがにエ
ヴァンジェリンのように時間圧縮までは無理だったが、任意の空間
を作り出すことは出来たのだ。だがとまた一から作るとなると、し
んどいものだぞ。ジジイに頼むか、それとも射撃に携わる部活にで
も顔を見せてみるか。まあ適当に歩きながら考えるべ。

ガチャ

「おや師匠奇遇」

ボタン！！

「幻覚だ」

俺ゲームのしすぎで目が疲れているかな？道理で変な邪神様の幻覚
が見えるんだ。畜生、なんでテオじゃない。そこまで邪神オーラが
強烈なのか、自称したくはないが英雄の一角である俺が負けるだと
っ！？畜生、褐色肌黒髪ロングという『何かの極み』とか・・・な
んて強さだ。これで巫女服で迫られたら死ぬ、十二分に死ぬ。女^テ

オドラ

神様の加護が俺を守ってくれるように祈るしかあるまい

ピンポーンピンポーン

おかしいぞ、今度は幻聴が聞こえるようになってきたな。それにしても・・・おかしい。重大なことだから二回言いました。奇遇なはずなのに最上階にいるとか、今なお聞こえてくる呼び鈴の音とか、一体全体どういうことか。なにがなんだからわからない。ああ、神様。今俺に邪神を打ち倒す力を授けたまえ。

ピンポーンピンポーン・・・ダァン！！

あれ？呼び鈴じゃない音が聞こえたような気がするぞ。しかもしょっちゅう聞いたことある音だ。具体的に言つと発砲音かな？サイレントタイプみたいだが・・・。幻覚幻聴の次はなんだよ、俺は今忙しいのだぞ。

「や、師匠！」

「oh」

貴様つ。誰が修理代出すと思ってやがる。ジジイだとわかってんのか、お？よしもつとやれ。それしても本当に俺の住所を特定するのはなんとという奴だ。調子に乗って訓練しすぎたか？ふむう、ケルベロスの件もあるし戦闘力が結構高いんじゃない。ケルベロスの弾丸は問題ないみたいだが・・・ケルベロスそのものはまだ使う気はないのか。聞いてみてもはぐらかされるし。

「なんでお前ここに」

「少しお腹がすいてね、偶然にも師匠の家が近くにあったんで……」
理由になっていない件について。いつのまにたかる女になったんだ
コイツは。邪神様め、それ以上俺に近づくんじやない！ナンマン
ダムナンマンダム！！

「十字架っぽい奴の前で手を合わせてるってなんの宗教？」

いかん、ついパニツシャーを出してしまった。神様の加護がありそ
うだからなあ、その気持ちわかります！くやしい！！ビクンビクン。

「……はあ」

手でついてこい的な意味を出すとフンと笑いながらついてくるこ
の女。何故か逆らえない。まるでテオドラのようだ。褐色とおっぱ
いという部分しか似てなくせに一体どういうことか。今日も憂鬱、
明日は曇りの日。なんとまあ、最低な場所だなこの麻帆良。

「なんで十字架を背負っているんだい？」

「……あ」

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

第十四射 不死の仔猫(爆) (後書き)

パニッシャーの機構はまじエロイ

第十五射 神鳴流は弾丸を斬る

「ねーねー龍宮さん」

とある教室にてこんな会話があつたそう。放課後に入り皆部活に行くなり友達とだべっていたりと、そんな教室の一角にてマイクを片手に持った、パイナップルみたいな頭の少女が褐色肌の少女（大）に爆弾を落としたのだがきっかけである。

「なんだい？」

褐色肌の少女は龍宮真名、一方マイクを持っている少女は朝倉和美といい、この麻帆良におけるパパラッチとして有名である。この朝倉和美が動くとき大抵やっかいなほうに流れるのが常套であり、なんの因果か朝倉和美に話しかけられたマナである。特に共通の会話を持っているわけではない二人であるためマナは珍しいと思いつつながら無難に答えるのだが・・・

「龍宮さんってさ、彼氏いるの？」

「・・・は？」

爆弾が落ちた。それも極大な。”彼氏”の言葉に教室が一斉に静まりかえり、会話している二人のほうを見ていた。一瞬の静寂の後、キヤーキヤーワーワー五月蠅く騒ぎ出す。下手をしたら教師を潰すこのクラスの元気の良さは麻帆良随一とも言われ、特にこの麻帆良における学生の中で最も歪な生徒達がいるクラスである。麻帆良学園女子中等部3-A、そのクラスには天才はおるわ忍者がおるわガンナーがいるわ魔法使いがいるわ剣士がいるわ、色々厄介なクラス

である。

「フッファー、ネタは上がってんだよ！」

チラッと二人にしか見えないように写真を取り出す。マナは声が出ない、出せなかったのだ。写真には一組の男女、何を隠そう女こそ龍宮真名本人であり男は白髪のスーツ男。シックスが映っていた。そこでマナはようやく気付いた、己がやらかしてしまったことを。

「oh」

師匠の口癖が移ったかな？と思う暇はない。写真を見ようとクラスの間人間が集まってくる。もともとお祭り好きの連中な上、女子中学生という他人の恋愛といった部類に関してはそれはもう砂糖に群がるアリのごとく。戦場において傭兵たる冷徹さを兼ね備える龍宮真名は今、教室という戦場で儂く散っていった（エロくない）

「うわー！めっちゃカッコイイ！」

「おお！外人さんだあ！」

写真に写る白髪オールバックの男”シックス”に対して各々の評価を与えるクラスの人間達を見ながら龍宮真名は色々と複雑な感情であった。『計画通り！！』と言えいいのか『しくじった！？』と言えいいのか・・・、どちらにせよ目立つのを極端に嫌う（そのため異様に目立つ）ためシックスにとってなかなか面倒くさいことなのだ。特にこの3-Aの人間は。下手をしたら町中で見かけたシックスをストーキングするかもしれない。

「渋いなあ、アスナの好みちゃうん？」

「んー・・・」

そんな中このクラスの莫迦のリーダー格である少女の品評が始まる。翠と蒼のオッドアイに長いツインテール、髪留めの装飾としてある鈴がチリンと鳴く。写真のオッサンをみて、ムムム、と唸るように丹念に見て回り（エロくない）そして出た結果が

「殴りたい」

「「「！？」」」

「なんでかしらねー、妙に腹が立つわ。結構好みなんだけど・・・あるえ？」

自身ですら理解出来ない感情を他人が理解出来るかどうか。彼女『神楽坂明日菜』は頭をひねるようにして考える。が、考えても考えても腹が立つてくるのは何故なのか。これが噂の生理的嫌悪という奴なのかまだ彼女にはわからなかった。ただ言うなれば彼女の失った過去が関連しているのだが、これはまた別の話にしよう。

「へへへー、もう逃げられないよ龍宮さん！」

「彼とはただの知り合いだよ・・・あははは」

目が泳ぐとはまさにこのこと。明日の方向を見る龍宮真名の目を生粋のパパラッチである彼女が見過ごすわけがない。次々と質問攻めをする朝倉和美と愉快的阿呆達、まだまだ1日は続く。

「（・・・本当に誰だ？）」

そしてその写真を妙に熱心に見つめるポニテ少女がいたとかいなか
ったとか。

今夜はとても面白いものが見れるという。莫迦ナギの息子であるネ
ギ・スプリングフィールドとエヴァンジェリンの決闘が始まるそう
だ。その日だけ警備が異様に強化されながらも、とある部分だけ誰
もいなくなるという不思議な警備体制だった。ジジイの電話によっ
て知らされたことだが・・・、俺にくれぐれも狙撃するなという注
意を再三払ってもらった。やかましい限りだ。

「だるい」

実際見ていると非常に面白くないことが判明した。エヴァンジェリ
ンは経験もあるし、結構前から吸血活動によって魔力を蓄えたらし
い。だが見れば、十数発程度の魔法弾で牽制しあってるだけだ。1
0歳の子供にしてはなかなかやるがな。魔力の多さ、なにより才能
の塊だ。主人公としての悲しい過去（笑）もちゃんともっている言
うことはない。なるほど主人公だ。

ダアアン！！

エヴァンジェリンから放たれる冷気の魔法をくぐり抜けたりもろに
当たったり、素人全開のくせに中位精霊を召還するわ一体なんだコ
イツは。将来有望なのは間違いないな。確かにコイツなら英雄たる
存在になれる。連合の奴らが好みな英雄にな

「でも子供なんだよなー」

橋まで誘導したエヴァジェリンを罠にかける。そこまではいい。非常にいい。持てる力を持って敵を打倒する、それこそ人間が頂点にたった知恵という武器だ。だがその後がひどい、なにこれ莫迦なの。罠にかけたただで勝利を確信するのは二流どころか三流。というか罠を破った敵にだだをこねるとは。

「ごめん正直羨ましい性格だわ」

一体どういう家庭で育つ・・・、父親は行方不明、母親はアレだしなあ。家庭の件はしょうがない。環境がどんだけー、っていう話なんだな。だが俺が一度訪れたウェールズのあの村は結構信頼出来るんだけどなあ、学校のほうに問題があったか、この家庭崩壊野郎。

「師匠、ネギ先生はどうだい？」

ぼーっと観戦しているとマナがやってきたようだ。一応屋上は俺の家の一部なんだけど。そういう風に見取したとジジイが言っていたが、不法侵入ですね。勇者しかり魔法使いしかり社会のルールも守れないか。特に勇者！お前タンス開けるんじゃないよ、ステテコパツ持っていくんじゃないよ。

「まあ、才能はあるな。将来にこきたーい」

「ハハハ」

どうにも、聞いたところによると初日で魔法バレ起こすわ、女子寮にて変態行為をかますネズチューが使い魔とか、クシャミで武装解

除が起こるとか、なんだお前ここに何しに来てるんだよ。一応主席
プラス飛び級で卒業だろうが。最初に魔力のコントローलさせるよ
一応名門だろうが。なんだこのツッコミどころ満載な環境と莫迦餓
鬼は。

「なんだあのツインテ・・・障壁突破・・・？」

「神楽坂明日菜だね、本当になんだ？」

へーあのオレンジのツインテールは神楽坂明日菜と言うらしいぞ。
真祖の吸血鬼の障壁を跳び蹴りで破る”女子中学生”だ。とういう
かどこかで見たことあるような気がする。よー見たら左右の目の色
が違う。何色かよくわからんが・・・ん？あるえーどこだっけなあ。
まあテオドラ以外の雌のことなんざあどうでもいいさ。というかマ
ナちゃんあんまり近寄らないでくれる？

「足に障壁突破の術式でも埋め込んでいるのかね」

「そんな、師匠じゃあるまいし。体に埋め込んだ術式は発動すると
痛みが発生するもんなんだよ」

「もう慣れた」

「・・・」

なんだその顔は、まるでゲテモノを見るかのような顔はなんだ。大
切なことだから三回目も言っただけいいですか？ああ、はい。”慣れる
”って結構大変なのよ？そりゃ極地対応型凡庸兵器オレだけだよ、
説明書(?)によれば裸で南極横断も出来るらしいぞ。あくまで能
力値から算出した結果だけだよ。どうやって”慣れ”の能力を数字

にしたのか一切不明なので信憑性に欠けるがな。

「おい、なんだアイツは」

「ノーコメントで」

結局最後は魔法の撃ち合いで終わらせるのだろう。あのツインテ・
・あー、カグラザカアスナだったか。そいつはあの莫迦餓鬼にと
って色々大切なモノらしいな。折れかけた心が元に戻すか、ただの
中学生が。それにしても障壁を消すとなー、まるでマジクキャン
セ・・・あ、アスナ姫だった、アイツ。やつはー、やつと思いつ
た。あれから20年もたつとさすがに忘れちゃうよーなははは。

「持つべくして持つか、そして持つモノのはやはり『ソコ』へ」

「?」

隣のマナが首をかしげた。いずれコイツにもわかる 때가来るだろ
う。さて、エヴァンジェリンの『闇の吹雪』と莫迦餓鬼の『雷の暴
風』、一見均衡しているように見えるが、一体何を遊んでいるのや
ら。それにしても10歳で砲撃魔法を使うか。なかなか気合い入っ
てるなー。あ、クシャミが・・・

「クヒヒヒヒ」

「師匠・・・」

ナニコレ、まじ面白いんですけど。武装解除がのったクシャミに負
ける闇の吹雪（笑）そしてスッポンポンになる幼女の図。ひゃひゃ
ひゃひゃひゃひゃ、幼女の裸とか誰得だよマジで。どういう原理で

クシャミに武装解除を・・・クヒヒヒ。やっべえなにこれ録画して『まほ動』に投稿すればよかったかもしれん。ヒヤヒヤヒヤ

「そして落下ヒヤヒヤヒヤする幼女ヒヒヒヒ」

「わ、笑いすぎだよ」

「だってよ？クヒヒ、クシャミに負ける闇の吹雪って、なにそのギヤグ？」

エヴァンジェリン（笑）になってきたな。やはり幼女は幼女か。無理もないさ、幼女だからな。そして落下する幼女をしっぽり助けてフラグをたてるっと。なるほど完璧だ。エヴァンジェリンは封印されると見た目通りの幼女だからしょうがないな、魔法薬の補助でなんとか魔法を打ち出すみたいだが・・・、飛行なんて出来るわけもないか。いや俺も出来ないんだけどね。ずっとドラグーンに頼っているから。

「いいもの見れた、爆笑だなこれ。まほネットでスレ立ててやろう」

「やめときなよ」

タイトルは何かいいかな。闇の吹雪がクシャミに負けたという事実を全面に押し出すか、結果として幼女がスッポンポンになったことを売るべきか。迷うな、いやぁー今から楽しみだ。フヒヒ。

翌日だったかその日は

トウルル「ダアン!!」……

五月蠅エ、時計を見るとまだ5時にもなっていない。家の電話が鳴るということはジジイからの電話ってことになる。仕事だけの目的のために来ているが……、何か寂しいものだ。フン、そんなことはどうでもいい。何はともかく夜の警備しかしない俺だとわかっておるくせにそれ以外の連絡とは……、本当に何を考えているのかあのジジイ。

(シックス殿!電話にでんかーい!!!)

(電話にでんわーい)

ジジイからのモーニングコールとか本気で死にたくなるからやめて欲しい。既に寝むたさとダブルノックで死にたいから。それでもなおしつこく念話をかけ続けてくるヤンデレジジイの相手をしてやることにしたのだが……、朗報と言えば朗報か。妙な仕事を押しつけられたことになったが……

「京都、ね」

「うむ、京都における揉め事解決のエキスパートとして修学旅行に参加して欲しいのじゃが」

なるほど、タイミングとはこのことか。莫迦ジジイ最初からこうするつもりだったのかよ。なんだかムカツクなあ、末端が上部のことなんざ考える必要はないが……、納得は行かないものだ。ジジイの部屋に至急来てくれとのことだったか、行ってみればあらこの通

り。

「それで？」

「というのは名目で本当はワシの孫の護衛な」

近衛木乃香嬢のことだろう。こんな後頭部の孫が大和撫子を体現をしているとはな、遺伝子の神秘と言うべきか、そもそもこんな後頭部にどうやってなったのか。非常に気になるころだは、生憎ジジイの生態系について詳しく知ろうなんざ一ミリも思わない。

「金」

「前300後700」

「引き受けよう・・・と言いたいところだが」

なかなか羽振りがいい仕事だ。単位は万、成功報酬として合計1000万貰えるということだ。1000万あれば大量に株も買える。株主総会にいい話を聞けるかもしれないしな。話はずれたがこれは中々美味しい仕事だ。餓鬼のお守りで1000万、いい。実際本当に護衛は必要なのだが、別の護衛もいるしそこはなとかなる。まあ一番これが問題なのだがな

「護衛が既にいるだろ、なんでわざわざ俺を？」

俺の質問に対して、ムムム、と唸る莫迦ジジイ。だいたい予想はつく、というより僅かに覚えている。木乃香嬢の護衛として桜咲刹那がいる。初日の仕事でマナの隣にたポニーテールだ。で、桜咲刹那の性格に色々問題があって、木乃香嬢の護衛のくせに側に近寄ろう

としないという。何がやりたいんだか。

「それなんじゃがなー、色々あるんじゃよ」

色々ありすぎる莫迦。面倒なのは嫌だぞ俺。観光する気全開だぞ俺。本当に揉め事を解決することになったら追加料金は・・・無理か。暇つぶしのゲームでも持っていこう。電車で移動だろ？電車といえばゲームだろ、ちゃんと音は出さないように。マナーぐらい守れよな莫迦ども。

ガチャ

「失礼しま・・・あ」

誰か来た、黒髪のポニーテールだ。ポニテといってもサイドテールだがな！デコ属性もついてるな。とういうか君刀持って校舎うるつくなよ、認識障害で何も思われないとしてもよ。辻斬りかコイツはとういか俺を睨まないで欲しいなあ。結局コイツ誰だよ。ってああ、桜ボンバーか、名前と顔が一致しなかったよ。

「学園長・・・こちらの方は？」

「ふおっふおっふお、シックス殿じゃ。シックス殿が此度の件で手伝ってくれる。協力して任務にあたるのじゃぞ？」

「護衛は私だけ十分です、こんなどこぞの馬の骨が・・・あ、マナの隣にいた人だ」

マナの隣？なんの話だ。飯食いにいった覚えしかないが・・・その時見られたか？一部以外の関係者に見られるとはしくじったな。こ

いつが持っている刀どつかで見たようなある気がするなあ。アスナ姫の事もあるし、どこかで見たんだろうけど。だがなかなかいい傾向だな、主のために俺を馬の骨と言つか、リアルに馬混じってるかどうかすればいいのかわからない。

「まあそう言うんじゃないぞ。実力はこちらが保証するZ O Y」

ダァン！！

「ふげえ！」

キラツと星を出してウィンクするジジイを撃ち殺したくなった。だが実弾はさすがにやばいのでゴム弾を撃つことにする。ゴム弾といえど非常に痛い、というか数メートルならば貫通することもある。そう、あるのだ。さすがジジイか、俺が撃つ瞬間物理障壁を張りやがって。ゴム弾ならば「殺す気なかった」とうやむやに出来そうだが、お金とか使って。

「な！？貴様学園長に何をする！？」

「すまん手が勝手に」

「ふざけるな！」

やっべー、めっちゃ怒っているよこの娘。相手がジジイだとなんでも許せるような気がするの俺だけだったか。惜しいものだ。

「いてて・・・いや、いいんじゃない桜咲君。シックス殿、この娘が木乃香の護衛の神鳴流・桜咲刹那君じゃ。頑張るのじゃぞ？」

「しかし・・・」

まだ文句を言うかこの莫迦ポニテは。このままだと俺が京都へ行けないじゃないか。信用されても滅茶苦茶困るが、このままでも困る。いいかジジイ、俺は京都へ行きたいんだ。くいつと合図をジジイに送る、なんとかしろよ莫迦、という意味が通じるか・・・、通じるよ莫迦。

「では聞くが、ずっと木乃香の側で護衛できるのか？」

「・・・それは」

「そういうことじゃ」

なかなか卑怯だなジジイ、近寄らない理由を知っているくせに。結構好感を持てるぞその態度。莫迦ポニテも無理矢理納得してくれたのか渋々下がる様子。ジジイが取り出した契約書を細部まで確認し、契約の印を書く。一応正式な書類なのでヘラス帝国第三皇女テオドラ・バシレイア・ヘラス・デ・ヴェスペリスジミア護衛ダブル・シックスと長つたらしい名前を書かなくてはいけないとは。だが今の俺はテオドラのためなら深海のセンジュナマコでも獲ってこれるよ、ガチで。

「フオッフオッフオ、では頼むぞシックス殿」

「足を引つ張るなよポニテ」

「な!？」

色々負けている捨て台詞を言いながらガチャッと扉を開けて退室っ

と。それにしても1000万か、本当に何を買おうか迷うな、こつちで出来た金は基本的貯めないようにしているし。いっそのこと募金するか？コンビニの募金箱に札束ツツコンでみたかったんだよね。無理矢理入れようとしている姿を見せ付けてやりたい。あ、エロくないぞ？いやテオドラに貢ぐか、それがいい。早速考えなくては。

「おい待て！」

何を買おうか迷っているシックスは幾分上機嫌であった。しかしそれもすぐに終わる。校舎から出て数歩のところまで黒髪ポニテの少女に、明らかな敵意を向けられて呼び止められたからである。仕事の関係上恨み妬みを貰いやすいシックスであったが、シックスが帝国における名を考えるとそれをやたら飛ばすモノはいなかった。敵意を明らかに向けてくるのは愚か者だけ、ということを目に埋め込んでいるシックスは、故に腹がたつた。株を買わずに1000万全部使って装飾品をオーダーメイドしてテオドラに送ろうという計画における脳内作戦会議を妨害されたのが9割ほどだが。なおシックス0からシックス9まで満場一致で「第16658回俺の主自慢大会」が開催されるところだった。

「貴様何者だ？」

刀を鞘から抜きギンギン（エロくない）に殺気を送る彼女に対してシックスはその苛立ちを隠そうともせず、だが実際は無表情だから隠れてしまっただが、やれやれと言わんばかりに手を振る。

「使者が剥き出しの刀を振り回すか、なんだかなあ」

「答える！」

対して彼女の返答は変わらない。シックスはかすかに覚えている知識からなんとか彼女がただ近衛木乃香のことを想っていると、そのことはわかっているのだが刀を振り回して余計な敵を作ろうとしている彼女の行動は矛盾にしか想えなかった。しかしただ主を想う、シックスの彼女に対する好感度は滝登り（？）であった。

「（これが若さか・・・それにしてもなんと素晴らしい餓鬼だ、将来有望だな）」

「答える気はないか、・・・ならば斬る！」

「（なるほど、斬ればわかる、か。みよんな名言だ）」

斬りかかってくる少女を適当にかわしながら余計なことを考えるシックス。相変わらずな余裕の表情（無表情）の相手に苛立ちを積みらせる少女だが、刀を振れば振るほど”ブレ”ていくことはシックスは見抜いていた。

「貴様・・・ッ！」

「やれやれ・・・うざったい莫迦ポニテだ」

シックスは己の得物たる拳銃を取り出す。相手は気を使うことにおいて右に出るものがないと言われる神鳴流の剣士である（ラカンを除いて）だからこそシックスは、使う弾丸こそゴム製であるが、比較的威力が高いものを取り出した。

ダァンダァンダァン！！

様子見程度で放った弾丸は真つ直ぐと少女の心臓と脳天と顎を狙う。だが所詮様子見程度でありシックスの予想通り、というわけではな
いか少女の持つている刀が弾丸を切り裂く。結果はもちろん無傷で
ある。

「我が神鳴流に飛び道具は効かんぞ！！」

「へー、すごいね」

首を横に90度傾けて相手を莫迦にしてみるとしか思えない口調で褒
め称えるシックス、対して少女はコメカミに怒りのマークを浮かべ
てプルプル震えていた、悪くないとか良い奴とかそういう話じゃな
い。声を上げて勢いよく斬りかかってくる少女、そしてシックスは
少女が持っている刀のことを思い出していた。

「ああ、詠春の刀かそれ（そういえば詠春も飛び道具云々いつてた
な）」

「長のことを知っているのか！？」

「まあどうでもいいか・・・飛び道具ね、じゃこれは？」

もぞもぞとスーツのポケットから取り出したのはガトリングガン。小
さいポケットの穴から2メートルはある大きさのソレを取り出した光
景とソレそのものに若干引きながらも、しっかりと刀を構える少女。
だがシックスが彼女の手が震えているのは見逃すわけがなかった。

「毎分6000発の飛び道具はいかがかな？」

その兵器はM61バルカン。その信頼性によりアメリカ空軍における戦闘機ほぼ全てに搭載されているロマンと実力を重ね備える兵器である。

「いや、あの・・・」

刀の先を若干下げながら「わけがわからない」状況をなんとか打破しようとして少女は思考を張り巡らせる。対して「ヒヤッハーア！」と言いながら弾丸は出してはいないが砲身をギュインギュインと回すシックス。その時の音が非常に心地よい。少女は考える、だが生憎考えて答えが出るほど頭が良いわけでもなかった。

「そこまでしてくれないかなシックスさん・・・」

「高畑先生！」

「ケツ、なんだよタカミチ、いまから面白いところだったのに」

そんな時に救世主^{メシア}たるタカミチが現れた。変な汗をかきながら急いでやってきたらしい。そして知り合いっぽい二人に対して、特にシックスのほうにだが、驚きを隠せない少女は説明を求める。

「あー、桜咲君。彼は僕の知り合いでね、悪い人じゃないよ（たぶん）」

『紅き翼』に所属していたタカミチの言葉通りなら、彼の知り合いを斬ろうとしたということになり、結構やばいことである。そしてそれに気付いた少女に謝罪の嵐を貰うのだが・・・、「ならばM6

「バルカンと神鳴流勝負しようぜ！」という悪魔の交換条件を取り出したシックス。だがタカミチの懸命なお願いに渋々とそれをポケットに入れてひき下がった。なおこのときポケットに2メートルはあるガトリングガンが入るといふ異常光景を見て、少女と同じようにドン引きしたタカミチであった。

「(よい子のみんなはマネしないでね!)」

T o b e c o n t i n u e d

第十五射 神鳴流は弾丸を斬る（後書き）

君の為なら深海魚 in ヘラス帝国

好評発売中！

第十六射 暗黒便箋三十六の波紋

く拝啓 親愛で崇高かつ最高なテオドラ様へ

最近こつちでは桜とか言うピンク色のエロい木の花びらが散り緑色になってきたような気がしなくてもありません。

そんな今日このごろテオドラ様は如何お過ごしでしょう。
テオドラ様といえば

《以下便箋3枚分ぐらいの賞讃の嵐》

つまるところ私はあなたのような御方にお仕え出来て幸福で死にたい気分です。

さて、本題に入りますが、麻帆良での仕事の都合において日本の古都、京都へ行くことになりました。

良い土産を用意したいと思っております。

今日も元気だテオ可愛い。

く敬具 シックスより

「(どこで踏み外したんじゃろうか・・・)」

気合いの入った旧世界からの手紙を読むふけてるテオドラ第三皇女の姿があった。一見頭がおかしいんじゃないの?と思ってしまうほどの内容具合に呆れて、空をボーッと眺めている皇女は今後のことを考えてしまう。

「(そもそも本題が二文って・・・)」

最強の従者のダメダメっぷりにドン引きしながらもやはりどこか不思議な、何か胸が熱くなるような感情を持つてしまう彼女だった。この手紙を彼のファンに公開したらどんな社会現象が起きるのか少し好奇心の湧いた皇女だが、そう民衆が上手く信じるわけもない。馬鹿な考えだといそいそと返事を書く準備をする。まさか本当に七日に一枚は手紙を出すというマメさと溢れて腐り果てそうなその忠誠心に少し感謝をしながら、どこかご機嫌で手紙を書き紡いだという。

「（嬉しいのじゃがぶっ飛んでおるのう・・・これが愛か!?!）」
20年以来の関係である。お互い娘と父、母と息子、そして何より愛する者ものと恋するものの関係である。シックスの出生の理由のためいろいろと複雑な関係であるが、それでもテオドラは現状に満足していた。しかしどこか行き過ぎなシックスの文様に引きつってしまふ皇女であった。

「（少しは妾立ちを・・・やっぱダメじゃ!）」
もどかしい感情を抱いて、表情が次々と変わる第三皇女を心配したり微笑ましいとにこやかだったり、世話をする女官たちが噂をしていたそう。

「えーこちらは京都における揉め事の専門家のシックスさんです。何かあったらこの方がゴニョゴニョしてくれませう」

おっぱいフェスティバルなメガネの姉ちゃんに紹介されましたワタクシ、狙撃手ことシックスでございます。さて、外を彷徨く用のスーツに身を包みましたがなんでも俺は”あの”3-Aと一緒に行動することになったのだ。ターゲットから近いのはいいことだがあまりに近すぎて行動が制限されるような気がする。あとこの3-Aの視線がおかしい、黄金を見つけたアメリカ人並だ。

「あー！マナちゃんの隣にいた人！？」

「本当だっ！？」

マナに聞いたところ俺と一緒にいたところを写真に撮られたらしい。殺気も威圧も何もない一般人相手だったら俺気づけないよ？だって後ろから狙撃するだけじゃん？俺の仕事。あきらかなモノじゃないと俺は気づけないんだよ。俺の仕事の的に相手が俺に気づく前にやるからいいのだよ、お解り？

「みなさんお静かにー！？」

ギャーギャーやかましい。震える手をテオに9割9分をそそぐ良心の残りの欠片を用いて自制する。噂の莫迦餓鬼の姿も始めて見たよ。うな気がするよ。エヴァンジェリン（笑）との決闘の時は魔法しか見てなかったからね。折角の京都だというのに騒がしいのはちよつとお断りしたいものだ。古都だぞ？世界最強の古都だぞ？東京（笑）になるぐらい素晴らしいところだというのになんという、・・・なんという！

「あー、ご紹介されました。ダブル・シックスだ。揉め事をあんまりおこすなよ」

目を輝かせている莫迦共は莫迦餓鬼の注意を聞いたのか口を抑さえる。俺の言葉に「ハアーイ」と寒気が覚えるような言葉で返してきた。いかん、帝国で引きこもりすぎて対人戦闘続行不可能だ。今更だがな！なんかよ、その目の輝きを通り越して殺気とか威圧とか、そんなチャチなもんじゃないにかの片鱗を匂わせる感じの奴がいるぞ。なんだあのパイナップルは。そもそもなんだこのクラス。小学生みたいなやつから乳がハリケーンな奴もいるぞ。

「ええと、シックスさんでいいのかな？ちょっと質問させてもらっていいかなー？」

「軍事機密に関わらない程度なら」

「じゃまず一つ！龍宮真名さんとはどういう関係かな！（軍事・・・）」

なんだコイツ、俺のポケをスルーしやがって。軍事機密とか、言い訳です本当にありがとうございました。あ、別に本気にするなよ？実際軍事機密って結構やばいから、戦艦の製造方法とか。網羅しちやっただけ。三ヶ月ほど訓練時間をくれるなら本物を見せてやりますよ。金取りますけど

（なあmana、こいつのパイナップル切り落としていいか？）

（反省してるから勘弁してあげて）

なかなか難しいことを言ってくれるなこの莫迦弟子。俺はこういう妙にテンションが高い奴は嫌いなんだ。いや、そう考えるとこのクラスの人間大体当てはまるような気がする。俺の返答を待っているこのパイナップル女をどうするか、おいmanaなんとかしろ。

「息子の知り合いだ」

「な、なんだってー！？」

、な空気を醸し出す。最終手段的なアレだがまあいいだろう。結果として被害はマナに返り咲くってな。いやいや、それにしてもいい空気だ。この暢気な莫迦共とこの旅行において『何か』を感じ取っている訓練された莫迦共の。ギャップ萌えとはこのことだったのか。さて、騒いでいる莫迦共を放っておいて、俺は新幹線へと乗り込む。よく考えたら俺ここに来て初めて新幹線にのるわ。

「シックスさん、今回は宜しく願います」

「んあ、まあボチボチな。ポニテもまあ適当に楽しんでおけ」

ポニテではないと自身の名前らしきものを言っているが気にしないことにしよう。ここで今回のミッションの確認をしよう。成功報酬は合計1000万、尚前金として300万は既に得ている。作戦概要はターゲットの護衛。護衛において一般市民への被害は確実にゼロにすること。魔法バレの責任は莫迦餓鬼に押しつけよう、俺の知ったことじゃないし。どうせバレルだろ、うん。ターゲットの名前は近衛木乃香。学園ジジイの実孫であり、莫迦魔力の保有者。敵はこの魔力が目的かと思われるなり。

「（莫迦餓鬼のほうは・・・まあ、適当に期待しとくか）」

敵戦力は不明、恐らく関西呪術協会の一部かと推測。対魔弾丸でも用意しておくか。式神やらなんやらはマトモに相手するのは面倒だ。ジジイの要望にて敵戦力に対してはなるべく生け捕り。非常に難し

いことを言つてのけるが金を貰つてるので断れない。まあ、力の見せ所だ。

ガタンゴトン・・・ガタンゴトン・・・

新幹線が動き出した。俺は座席には座らず後ろのほうに立っただけだ、車両と車両の間にあるあの空間だ。ちなみに桜咲も何故かいる。あれか、ご主人様と一緒に入れられないほど愛おしいか、いい光景だ。憎たらしいほど愛おしいはこのことだな。俺もそのレベルまで達したらきつと昇天しちまいそうだ、フヒヒ。

「(3-Aにおいて戦闘可能な人間は・・・4、いや5人か？相手が式神ならばアスナ姫は最高戦力だ・・・って、マジックキャンセル扱えるかどうか不明か)」

戦力の分析、ジジイによれば魔法がバれているのはアスナ姫だけらしいが。中には感じているものもあるかもしれない。そういう奴らが集まっているからね。戦闘が可能なのは桜咲、マナ、糸目、中国、次点でアスナ姫。行動できるのは桜咲、マナ、アスナ姫の三人ということになる。だがマナは傭兵として狙撃手としての誇りを叩きこんだから金を貰わない限り動くことはないだろう。莫迦餓鬼は置いておく。アスナ姫がターゲットの側にいるのは幸いだ、俺はずっと後方でスコープを覗いておけばいい。前に出て戦う必要がないのだ。

「(桜咲は例の件もあるしずっと一緒というわけもあるましいな)」

莫迦餓鬼とアスナ姫の二人でターゲットを常に護衛、何かあったら桜咲が駆けつけるといふ寸法だ。敵が本国最高クラスでも無い限り二人が桜咲が駆けつける前に死ぬこともないだろう。ま、任務の都

合上俺が殺させることもさせんがな。相手の戦力が不明なため途中の戦力低下だけは避けたい。

「(万が一、ターゲットが確保された場合・・・)」

敵戦力がターゲットの魔力を狙っていると考えると『何か』を用意している可能性がある。ただ攫うだけだとすぐに奪還のメドが立つてしまうからな。すぐにその魔力を利用した何か・・・思い出せよ俺、全然思い出せんぞ。一般人どころか英雄の魔力を越えるターゲットを利用する魔導兵器か。だとすると国崩しクラスの化け物になる。召還された場合、全力を持って排除せねばならんな。グスタフさんでも用意しておくか。

「(人質にされたら場合は・・・どうでもいいか)」

2000mも離れてなければアリの肩間に弾丸をぶち込む自信がある。人質をすり抜けて敵に当てることなんざスコープ無しでも出来るぜ・・・ためしたことはないけどな。ただ人質にして関東魔術協会と交渉の可能性も考えておこう、ターゲットは関東魔術協会の頭の孫であり関西呪術協会の娘でもある。敵が関西呪術協会の手のものならば魔法使いどもに何か制限を与えるようにするだろう。

「(下手をしたら関東魔術協会でも関西呪術協会でも無い第三の勢力・・・いずれにせよ、俺というイレギュラーが存在するのだから何が起きても不思議ではないな)」

日本そのものに大ダメージだな。それとも敵がそうだとしたら魔導兵器狙いか。やれやれ、厄介な仕事を押しつけられたものだ。京都と聞いて俺もノリノリだったのがアレだがな。京都楽しみでしようがないのは秘密だ。

ワーワーキヤーキヤー

「五月蠅エ」

前の車両から騒ぎ声が聞こえる。先程、とうか出発するときから五月蠅かったか今聞こえるのは悲鳴だ。早くも妨害でも入ってきたのか、そうだとしたら相手は二流の糞莫迦だ。一般市民に何の影響も与えずターゲットのみをしとめる、これがプロ（笑）の通常だ。もう既に焦っているのか・・・無いな。

「行かなくていいのでしょうか？」

「一般ピーポーも巻きこんでいるのならむしろ行く必要はないさね。少なくとも忍者と中国人と莫迦餓鬼が動くさ」

忍者、中国人は一般市民だが戦闘力は保有している。マナは言うまでもない。前者二人も見習いの魔法使いよりも役に立つだろう。前方の様子から見るとただ騒いでるだけなので・・・カエル？まあいい、ただのイタズラレベルだな。マジメに考えるならばどさくさに紛れて莫迦餓鬼が持つ手紙の入手か、ターゲットの捕獲は無理だろうし。

「ツバメだな」

「私が」

このポニテもある程度は仕事に慣れていさらしい。まあマナと行動していたし、中学生の割りには神鳴流も板に付いていた。なにより俺の弾丸を切り裂くというな。一定のレベルの神鳴流ならばジャッ

カルの弾丸も切り裂くぞコイツら、おお、こわいこわい。ま、ハルコンネンさんだと無理だがな。出来るのは詠春か、歴代最強とか言われている青山姉妹か・・・、あいつら焼夷弾の炎ごとぶった切るからな。なんだアイツらコワイ、だから神鳴流は嫌いだ。代表者たる詠春とは巫女について語り合う仲だがソレだけは勘弁してほしい。

さて、話を戻す。奪おうとしたのは手紙だった。ドサクサに紛れてツバメ型の式神に奪わせたらしい。だがポニテが飛んできたツバメをスパツと斬った。この狭い車両内で野太刀を使うという神業（神鳴流なだけに）だ。キンツと刀をしま音しか聞こえなかつたな、すげエ。何よりツバメだけを斬るといふね。なにこの娘天才じゃね。

「（俺を襲ったときの焦ってなかつたら中々だな）」

「待てー！ー！ー！！！」

莫迦餓鬼が追いかけてきたようだ。というかね君、車両内にネズチユ一連れてくるんじゃないよ。いや、それを言うのならば10歳の子供が教師という立場になっている異常を先になんとかして欲しいのだがなあ。まあ今更俺が言っただってしょうがないし、末端たる俺が一言申しても意味は無いだろう。そもそも俺のことを嫌っている人のほうが多いからね。言っても聞くわけがない。何より俺が麻帆良に知っていることを知っている人間は10人にも満たない。

「ネギ先生・・・？」

「桜咲さん・・・それと、ええと」

「シックスだ。ミスタ・スプリングフィールド、車両内ではあまりはしゃぎすぎないようにして欲しいものだがね」

「あ、すみませんシックスさん」

妙にへこへこしながら謝られた。”五月蠅エ莫迦しゃべるな”という副音声が聞こえないらしい。というか俺自己紹介一応したよね？なんでコイツ聞いてないの？・・・別に覚えて貰ってもどうでもいいな、特に男にとか。マジ勘弁して欲しいって感じ

「気をつけたほうがいですよネギ先生、特に向こうに着いてからはね」

手紙を渡すポニテに腕をブルンブルン振る莫迦餓鬼。いや「落とし物です」って渡しても普通に怪しいよね今の俺たち。だが莫迦餓鬼はそこら辺のことを考えては無いようだ。その代わり肩にのっているネズチューがなにやら呟いている。残念だったな、ヒソヒソ話だが俺の『あらゆるテオの命令を聞くため』の特別製イヤーには筒抜けだ。なにやらこつちをチラチラ見ながら車両に戻っていったが・・・、あのネズチューは特に俺のほうを見ていたが一体なんなのか。

「桜咲、さっきの発言でどうにも疑われたみたいだぞ」

「えっ」

あのネズチュー、女子寮で性犯罪を起こすくせに頭だけは回るみたいだ。だが今回はまわりすぎてドツボに嵌ってしまったな・・・ジジイの野郎誰が味方か説明もしていないのか。下手をしたら仕事の邪魔になるぞ。そんなときはそんなときで、別にヤツてもかまわないのだがな。書類にはターゲットの護衛と3ーA生徒の安全。それに『極力魔法をバラさない』というふざけた条件、バレることは確定だな、原作でも確かそうだった気がする。残念だが3ーAの担任の

話は一個も無い。

「（死体で返つてこようがバラバラになろうが、任務完遂のための犠牲だ。正義の魔法使いの大好きな役職だ。さぞや本望だろうよ）」

どの道刃向かつて来た場合だけだね。さすがにそれは無いことを祈るよ。俺でもかつて背中をまかせた人間の子で、何より子供だ。未来が定まっていらない子供を殺すのは将来的な損害だな。もしかしたらテオの肉の盾になるということもあり得る、というかそれだけであつてほしい。莫迦と殺し合い、そして莫迦餓鬼と。親子に渡つて殺し合うか。面倒だ。・・・いや悪くないかもしれん。どこかのベストセラー作品に似たような展開があつたはずだ。

《まもなく京都です、お忘れのないよう御気をつけ下さい》

来たか、ついに俺の京都初上陸作戦が始まる。フヒヒ、鹿苑寺龍安寺清水寺平安神宮伏見桃山二条城どれを最初に堪能するか。いや、まず最初はお茶と団子を楽しむべきか！？

「ときに桜咲」

「なんででしょうか？」

「100万程度で買える程度の土産ってないか？」

「.....程度？」

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

第十六射 暗黒便箋三十六の波紋（後書き）

もはやヤンデレ

新幹線のなかで一話分作ってしまったが気にしない

第十七射 京都かと思つたらアスナ姫

「(なんたる醜態・・・)」

狙撃手は激怒した。恐らく一般市民が今の彼ほど激怒しているのなら般若やら鬼やらと言われることだろう。常に無表情である彼の顔が幸いしてその怒りを周囲にぶちまけることはなかった。彼の眼前には京都に観光に行けばだいたい通る木造の建築物、その建築物から見る京の街は実に素晴らしいものである。そう清水寺にるのであつた。

「(なんだよ噂の飛び降りるアレって)」

黒髪の活発そうな女の子の言葉に呆れる。その言葉に続いて小学生としか思えない体型の双子が飛び降りれと煽る光景を見てしまったのは、シックスにとってどれほど屈辱的なものか想像出来るだろうか。はしゃぐ中学生たちの傍らにはオデコな中学生がガイド顔負けの解説をしている。彼の頭の中には”魑魅魍魎”というまったく関係の無い言葉が揺らいでいた。

「(へー、生存率って85%なんだ。思つたより低いな)」

普通の人間の場合のみの数字のため微妙に勘違いしたまま妙な雑学が脳内フォルダに詰め込まれていく。解説をしていくオデコな中学生の話聞いて驚いたり頷いたり、ギヤーギヤーと騒いだり。そんなハイテンションな女子中学生に引つ張り回される子供先生は先生たる威厳の欠片も無かつた。もはやただの友達、もしくは友達の弟的なポジションだ。

「（ほう、恋占いか。テオのために108周ぐらいまわるべきか・・・）」

目の前で妨害かと思われる所業　丁度恋占いの石に挑戦していた金髪とピンクな中学生がカエル入り落とし穴に嵌っているというを見てはいるが、特に気にすることもなく助けることもなく何より一番大切な人のことを考えていた。彼にとってテオドラ>俺>その他という不等号が成り立っていた

「シックスさん」

「・・・まあ様子見程度だろ」

隣にスツと入り込んできた黒髪サイドポニテの少女が言葉をかける。彼女は”桜咲刹那”シックスが今回頼まれた仕事である護衛の、とある人間の本来の護衛である。背中に担いだ竹刀袋を見る者が見れば本物の得物が入っていることには気付くかもしれない。一言言葉を交わすだけだったが、それで意思疎通が出来ることをシックスは関心していた。戦場において無駄口は死に繋がる、戦場を知っている証拠である。

「（音羽の滝か。確か右から友情・努力・勝利だったか）」

一番左の滝に群がる少女達をみて思う「お前達は何に勝つ気なのか」と。実際左の縁結びの滝であり、勝利という言葉もあながち間違っていないのだが・・・シックスもテオドラのために飲んでもいいのだが、彼はこういう神頼みということは少し遠慮したいタイプだった。自分の努力などを神の御陰にすることとは努力を無にかえすことであるのだから。彼にとってテオドラとの将来は自分で掴むものであり神などが間に有ってはならないと、そう思っているの

だ。

「（そして何より上にある酒樽がな・・・安い酒を飲んでも致し方あるまい）」

遠くからその光景を傍観の立場で見やるシックス。隣にいた桜咲刹那も思わずため息を吐くほどひどい惨状だった。安い酒と言えど酒は酒。中学生どもは淹に仕込まれた酒の味を気に入ったのかガバガバ飲み酔いつぶれていた。慌てる子供先生は他の先生方に悟られることのないよう必死に誤魔化した。なんとか全員バスに押し込められたのは3-Aのメンバーが異様に身体能力が高い御陰だろう。

「最初から無いやる気が1番の紙ヤスリのようにゴリゴリ削られていくな」

「1番の紙ヤスリはもはや紙ヤスリじゃありませんよ・・・」

番号の数はおおむね1？四方にある粒の数である。1番の紙ヤスリはただ大きな粒が乗っている紙である。というか削れるかどうかさえ不明な一品だ。もちろん現実にはそんな物品は存在しない。工場に頼めばもしかしたら作ってくれるかもしれないが決して頼まないように！

「えーっ！？私たちが変な関西の魔法団体に狙われているですって！？」

京都嵐山、大堰川のすぐ側にあるとある旅館にて。京都らしく和風のその旅館にひっそりとツインテールの少女の声がチリンという鈴の音とともに響いた。それに対して詳しく説明をする肩にオコジヨを乗せた子供は今まで黙っていたことをとりあえず謝った。

「んも、しょうがないわね。いいわよ、ちょっとぐらいなら力を貸してあげるから」

ふうっと一息吐きながら子供に協力をするという言葉に、その子供はどこか感動している様子だった。だが、協力するにあたって問題なのが敵対する人間のことだ。その子供の肩にのっていたオコジヨが疑わしき人物の名前を言う。

「そうだ姐さん、うちのクラスの桜咲刹那って奴とあの白髪のシックスって野郎が敵のスパイらしいんだよ！何かしらねーか？」

突然のオコジヨの根拠も無い言葉に驚く少女であったが、彼女自身の親友である近衛木乃香の昔の言葉を思い出す。

「でもねー、このかがええーっと、桜咲さんでしょ？その子と幼なじみって言うていたの聞いたことあるわよ。ん、でも二人がしゃべっている様子見たことないな・・・」

幼なじみ、という言葉に何か気付いたオコジヨである。このかは京都出身であり、その彼女の幼なじみということは彼女も京都出身、つまり関係者の部類で考えるのならば関西呪術協会の一人である可能性がとて高いのだ。同じようにそれに気付いた子供はとあることを思い出しクラス名簿を開いた。

「あー！京都出身って名簿に！？京都・・・かみなるりゅー？」

間違いなく京都の出身であることがわかり、ますます彼女、そして側にいた不自然な修学旅行に参加したシックスへの疑惑の感情はますます増えるばかりであった。オコジヨは彼女たちが間違いなく敵だと断言するが、ツインテールの少女”神楽坂明日菜”と”ネギ・スプリングフィールド”はまだどこかで違うのではないか？という気持ちだった。

「でもこのシックス？って人は怪しいわね」

「だろ！？（ただの偶然？だよなあ）」

だが神楽坂明日菜もまだ少女である。実際怪しいわけだが個人的の好き嫌いで相手を評価していた。オコジヨはシックスと聞いて『とある事』を思い出すが、その可能性は極端に低いわけがただの思い過ごしと、ただの偶然と思いその思いを胸に隠した。

「ネギ先生ー、教員の方は早めにお風呂済ましておいってくださいねー」

「ハヒツ！？」

突然後ろから声をかけられ驚き変な声を出したネギ・スプリングフィールド。魔法使い関連の話であるため一般人（と思われている）へ聞かせるわけにはいかず、聞かれたかな？とヒヤヒヤするがそんなことはなさそうだったのでひとまずホッと安心する。ここで話を区切りネギ・スプリングフィールドは風呂へと足を忍ばせた。

「（なんとという・・・なんとというものを・・・!?）」

京都と言われれば何を思い出すだろうか。それは人それぞれであるが、大抵共通点が存在する。さて、処変わってここ、祇園新橋通へと足を伸ばした狙撃手”シックス”は一応一時教員的な立場にいたのだが、それをサボっていた。

「（これが白川南通・・・だと・・・!?）」

太陽が落ち空は真っ黒。ライトアップされた桜の花びらが舞い散る様子をしみじみと見やるシックス。彼はまわりにも感動していて、見た目外人のヤクザっぽい格好（黒ピッチリスーツ＋オールバック＋サングラス）のせいなのか人に避けられていることに気付いてなかった。

「（あまりにも感動・・・！生きててよかった・・・！）」

主のために戦うこと以外に生き甲斐を始めて感じたシックスはまた一つ大人への階段を上り精神的にレベルアップしただろう。ファンファーレが聞こえきそうな彼の姿を見ていた観光客は『怖そうな外人さんが日本に感動していて可愛い』と思いつながら頷いていた。

「（今の俺なら愛の結晶を投影できるような気がする）」

もちろんそんなことは出来ない。シックスはどこから取り出した超巨大なカメラ、この日のために金をかけた世界最強1億6000万画素のカメラを撫で回し、その祇園新橋通りの光景を写真に収めまくっていた。あまりに巨大なカメラのため人が避けていた彼の周り

にも自然と人が集まるようになってきた。

「(邪魔くせえ・・・ラブビーム出すぞこら)」

主第一主義であり、他の存在は最低限でしか無い彼でも常識を守ろうとする良心(1分程度)はある。珍しいカメラで記念に撮ってくれ撮ってくれと言葉をかける観光客には最後の砦として

「Ich verstehe Japanisch nicht」

美しいドイツ語で丁重にお断りするのであった。でも舞妓さんと一緒に映ったりする当たりがいやらしい。だがそれも、端から見れば日本にはしゃいでいる外人の一人として埋もれていくのだろう。古き町に溢れる現代の人間たちはその古き良き景色に癒され記念とする。

「(祇園新橋通か、日本もまだ捨てたものではないな)」

今では少なき木造の建築物。かつての姿を保ったままのそれらはひどく美しく見える。真夜中が暖色の光で色づけされているようで、そこは旧世界の日本でありながら幻想的で、何よりも現代的だという不思議な矛盾を抱えていた。

「テオと一緒に来たかったな」

どんなに感動しようが興奮しようが、一番大切なもののことを考えて一気に萎えていくシックスであった。そして「日本語いけるじゃん!？」と思つた周りの観光客達であった。だがやはり怖いので何も言えずただいるだけになってしまっていた。しょうがないさ、人間だもの。

「すまねえ姐さん！？俺あてつきり敵かと・・・」

お風呂でのエロゲーでもなかなか無いイベントを過ごしたネギ・スプリングフィールドと桜咲刹那は色々あつて誤解を解くことに成功していた。素直に謝るオコジヨとネギをひとまず置いておき、彼女から敵対戦力についてのレクチャーが始まった。

「敵は関西呪術協会の強行派の一部。陰陽道の呪符使いがいるようです」

呪符使い？という感じのオコジヨとネギに対して親切にも説明を行う桜咲。どうしてだろうか、日本を知らない外人に日本のことを説明するときの高揚感があるのは。それはひとまず置いておき説明を続ける桜咲。

「彼らの特徴は西洋魔術師と同じように、従者を従わせているように呪符使いには善鬼や護鬼といった強力な式神を使うのが基本です。それらを破らない限り攻撃は届かないと考えたほうがいいでしょう」

ネギと明日菜は後方になにやら余計なイメージを抱いたが敵が”とりあえず結構強い”ということとは理解したらしい。

「そして何より私のような京都神鳴流がガードについている可能性もあります。もともと京都神鳴流は京を護るためため、魔を討つための武装集団ですから」

京都神鳴流と言えは彼女桜咲も当てはまるといことを言うネギと明日菜だが、桜咲自身の発言である「裏切り者」のと幼なじみである人を「ただ護りたい」という言葉に思わず感動した二人だった。湿っぽい話を逸らすため桜咲はこちらの切り札的な人の話をした。

「しかしこちらには、学園長自ら雇った強力な傭兵がます。彼がいる限りよっぽどのことですら負けることはないでしょう」

「傭兵？」

ネギは首をかしげる。明日菜も同じようなものだったが、あまり”傭兵”という言葉に良いイメージがないせいかわ顔が微妙な感じだった。

「シツクスって奴か？」

オコジョはその人間に心当たりがあったのかその人物の名前をポツリと呟いた。それは正しく桜咲はコクリを無言で頷く。一度彼と戦った桜咲だからこそわかるものである、焦っていたとはいえ神鳴流の刀を軽々と避けて、タネは理解不可能だがガトリングガンを所有している彼が強いということ。

「・・・その頼りになる彼はどこなのか？」

写真で見たとおりの彼の様子を思い出す度に、何かもどかしい苛立ちを感じるがそれで怒りをあらわにするほど愚かでもない。護衛として雇われているのなら近くにいるはずなのだが、白髪という目立つ分だけいないということがしつかりとわかっていた。

「彼はその・・・見回りに（嘘ですけど）」

桜咲は思い出す。この旅館に着いたとたん「ああ桜咲、俺ちよつと祇園新橋通に言ってくるわ。え？護衛？お前でなんとか出来なかつたらなんとかするわ」と言つてのけた。彼の實力は学園長となにより『紅き翼』のタカミチが保証しているが。彼のやる気の無さは如何なものか。

「僕も見回りに行つてきますね！」

突然頼りになる仲間が増えたせいも元氣よく飛び出したネギを止めようとした明日菜だが、彼にその言葉は届かす見えなくなつてしまつた。不安になる明日菜だつたか、近距離での護衛を担当すると桜咲き言いなんとか納得した。

「（ああ、これが京都か。なんとも素晴らしい）」

そんなときにガラッと自動扉が空いて招いたのはシックスだつた。スーツをピッチリと着こなし渋み成分が醸し出され明日菜の好みであるが、やはりどこか苦手な様子だつた。

「あ、シックスさん。お帰りなさい、どうでしたか？」

少し威圧を込め、暗にサボるなという言葉を送つた桜咲だつたが返つてきたのは意外な言葉。思いつき京都を楽しんで来たという。いく前はダルダルな彼が今ではピカピカの新入社員のように輝いていた。そんな彼は明日菜と目を合わすと、ああ、と納得したように頷いた。

「何ですか？」

「まあ護衛の件は適当に期待してるさ。あの莫迦餓鬼にも。何より神楽坂嬢にな」

嫌味的なものだと思ったのか不機嫌な様子で尋ねた明日菜に、手を振り返すシックスの顔は先程の輝く顔とは違いいつもの無表情へと変わっていた。一瞬、その顔をどこまで見たことあるような気がした明日菜だったかそすぐにそのような気持ちは消え失せた。

「時に桜咲、見事に侵入されているがどうしたのだ？」

そこには最後には「それを特定は出来ないけどな」と付け加えるシックスと「何それ？」な顔をした桜咲と明日菜の二人だけがいた。ピューと風が吹く。そこには自動販売機を動かす電気の声しか聞こえない。数秒後ようやく解凍され・・・

「えっ」

「え」

「なにそれこわいです」

何かの片鱗を感じた。

T o b e c o n t i n u e d

第十七射 京都かと思つたらアスナ姫（後書き）

なんかーggdgdしているねー。

そういえば莫迦坊主の出番が妙に多いですね。

誤字やらの修正は遅れます。最近投稿が安定しないで申し訳ない。

第十八射 狙撃とアーウェルンクス

二人の少女たちと一人の少年の走る音がする。切羽詰まるような窮乏を醸し出すその足音が京の街がくぐりぬけ風と共に去っていった、なんちゃって。走る少女の片方、鈴の髪飾りの橙色ツインテールの”神楽坂明日菜”と黒髪サイドテールの”桜咲刹那”なんだか馬の尻尾が多いような気がするがひとまず置いておこう。10歳程度だろうか、赤毛の少年は”ネギ・スプリングフィールド”という名前であった。

「ねえ刹那ちゃん、ホントのこっちでいいの!?というかシックス、さんは!？」

思わず自然と呼び捨てにしそうだったが誤魔化した。先程言ったとおり走っているのは三人、本来の護衛である桜咲はいるのだが雇われた彼の姿はいなかった。

「ええ!大丈夫です!シックスさんが既に敵を捕らえました!シックスさんは完全に後衛型ですので仕方ありません!」

「(撃ち殺したほうがはやいが・・・自分のミスは自分で拭えよ莫迦餓鬼共。この程度で終わるなら護衛する価値すらないわ)」

全力で走っているため勝手に声が大きくなる。彼女たちが走っている遙か遠き後方、具体的に言うならば彼女たちが泊まる旅館の屋根に陣取っている彼の姿があった。仕事をするときには被る白いフード付きローブ。魔法世界の間人達を、特に連合の船乗りを恐怖と叩き込んだ英雄の姿がそこにあった。フードの奥から見える真っ赤な二つの目は”お猿の着ぐるみを着たターゲットを抱え込むメガネの姉

ちゃん”をしつかりと捕捉していた。

（桜咲、奴は駅へまっすぐ走っている。十中八九罠だろうが・・・
クク、聞くまでもないな）

「駅へ逃げ込むそうです！急ぎましょう！！」

念話によつて敵の位置を知らせるシックス。彼は本来狙撃手でありこのような偵察兵の真似事はあんまりしたくはないのだが”仕事の完遂”という戦人の誇りもある。何より好き嫌いで失敗してしまえば”狙撃主”たる自身の名と主の名が傷つくのだ。

「見つけた・・・お嬢様ー！ツ！」

丁度駅に入り込もうとしているお猿の着ぐるみを着た人間がいた。防御に危うい呪符使いが装着している以上、何かしらの術式が組み込まれた武装であることは容易く想像できる。共に走っている明日菜とネギに注意を施し、駅の中を一気に突っ走る。

「人払いッ！少しは準備してきたわけですか！？」

明日菜の「何故駅なのに人がいないのか？」という疑問を口に出す前に桜咲が答えを出した。人払いとは普通の人を寄せ付けなくする術法の総称であり。今回は人払いの術が込まれ、一定の範囲内に影響を及ぼす呪符を使用したようだった。

「しつこい人は嫌われますえ〜」

止まっていた電車に乗り込むお猿と追いかける者達。それを遠目で見ていたシックスはため息を吐いた。彼ならばはしつかりと逃走経

路を確保 駅の向こう側に移動用の何かを用意するなど するのだが、相手さんはターゲットを利用した”何か”に釘付けなのか、焦っている様な感じもしなかったが、相手さんの手際の良さに反して準備が整っていない様子に疑問を思えた

「（勢力の中に極めて優秀な部下、反して不出来な上司・・・か？）

」

もし彼が前世の記憶をまだ持っているのならソレが誰だが思い出すことは出来ただろうが・・・、20年の、生まれたときから戦い続けた彼にとってソレを忘れるには簡単だった。それに足して、彼自身この物語のイレギュラー、という考えではなく平行世界の一つだと考え”原作”と同じように進む可能性があるわけではないと思っていた。自身と同じように”何かしら”の追加された敵がいるかもしれないのだ。

「お札さんお札さん、ウチを逃がしておくれやす〜」

ピツと水行の韻が込められた札を投げつけた。その瞬間車両の内部を埋め尽くすほどの大量の水が放出された。札を使う、なによりこれこそ五行思想で戦う呪符使用の特徴である。西洋魔術師との違いはタイムラグが発生しないということだ。西洋魔術師は優秀ならば詠唱破棄などが出来るがそれは一部の簡単な魔法限定である、少なくとも上級の砲撃魔法を詠唱破棄する人間は存在していない。反して呪符使用は逆に強力な攻撃全てが詠唱破棄みたいなものである。準備、という点では遙かに大変であるが、攻撃力は随一を誇るのが呪符使用の特徴である。

「（金生水の利用による大水行、とまではいかないが中々たいしたやつだ・・・だが、逆もまた然り。土剋水生木剋土、折角だから趣

味で作った陰陽弾を喰らえー、うお！眩しッ）」

一人でブツブツ言いにやけながら一発の弾丸を放つ。弾丸は真っ直ぐと電車へと向かい、そして水で溢れる車内の窓を貫通した。中にいた少年少女達は水でもがき苦しんでいたが、より大きな苦しみを味わうことになるだろう・・・。

ゴゴゴゴゴゴゴゴ！！！！

大地は水を濁し水を吸収し水を塞ぎ止める。水は木を育て木は水を必要とする。大地は木を育て木は大地を食らいつくす。三つ巴の状況で全てを相殺させようと考えたシックスだった。思惑通りに車内の水は盛り上がった大地に塞き止められ木が水を吸収する。

「あれ〜〜、敵さんにも呪符使いがおるんかいな」

「水が・・・ワプッ!?!」

木の根っこやらツタやらがうねるうねる。一見さんならば触 だと思っうほど曲がりくねって少年少女達を軽く締め付けた。全身を伝って締め付ける、だがその締め付ける強さは決して生き物を殺すような強さではない。いやらしい強さなのだ、なんという状況。

(メンゴ桜咲、木行がちよっと強すぎたわ)

「シックスさん！！学園長に報告しときます！！斬空閃！！」

力の限り刀を振るう。飛び出した斬撃が木の根っこやツルやらを切

り裂いていき同時に電車の壁を貫通して弾丸が飛んでくる。弾丸によつてボロボロにされていく木はすぐに活動を停止し、そして消え去った。

「はぁ．．．なかなかやりますなあ。しかしこのかお嬢様はお渡ししまへんえ」

敵が”このかお嬢様”と呼んだことに驚く明日菜とネギ。その二人は相手の正体の謎が浮き彫りとなり、桜咲に質問する。彼女は相手が呪術協会の人間で、今攫われているターゲットの魔力を利用し呪術協会を牛耳ろうとしている、という可能性を説明した。スケールの大きさに再び驚く二人。三人は更に追いかける。

「はぁ．．．よーここまで追つてきやしたなあ」

階段の登った向こう側に相手はいた。お猿の着ぐるみを脱ぎさりその全貌をあらわにする。丸メガネに長い黒髪、誰もが大和撫子と言える容貌だった。目が怖い以外は。

「せやけどこれでお終いどす。お札さんお札さん、ウチを逃がしておくれやす」

「うわっ!?!」

巨大な火柱が桜咲たちの道を閉ざした。大文字型の巨大な火柱の向こう側に笑いながら消え去ろうとする相手に、シックスは「これま
でか」と、ガチャンと巨大な狙撃銃を構えた。だが弾丸が放つ前に
・
・

「『風花 風塵乱舞!』」

ネギ・スプリングフィールドの魔法が炎をかき消した。巨大な炎を容易く打ち消すその風の魔法は、親譲りの魔力と才能だからこそなせる技だろう。消え去る炎を見て、悔しそうにその少年を睨み付ける呪符使いは地団駄をふんだ。更に地団駄を踏んだのは彼女だけではなかったのは秘密だ。

「（空気読めよ莫迦餓鬼、俺がイケテル狙撃決めるところだろうが）」

「逃がしませんよ！このかさんは僕の大切な生徒で、大事な友達です！」

杖と従者”神楽坂明日菜”の仮契約カードを構えるネギ。勇ましく従者に魔力を送り戦闘が始まった。始めて西洋魔術師の従者と共の戦闘なのか、焦りが見える呪符使いだが、懐から二枚の札を取り出して迎え撃とうする。仮契約によってもたらされたアーティファクト”ハマノツルギ”という名のハリセンを持った明日菜と刀”夕凧”を抜いた桜咲が飛びかかった。

「（妙なハリセンだ・・・、それにしてもこのシーンでハリセンとは中々美味しい）」

飛びかかった二人だったが、突然現れた呪符使いの式神によって妨害された。見た目熊と猿のぬいぐるみだが、れっきとした善鬼・護鬼の一種であり強力なのは間違いない。守りを固めた呪符使いはタワーゲット”近衛木乃香”を抱えて逃げようとする。声を上げて静止させようとする桜咲だがそれは無駄なことであり、式神の妨害によって前に進むことが出来ない。だが・・・

「うりやつ!!」

パンと風船が割れるような音がした。その音がした方向へと見やると、ハリセンを猿にたたき付ける明日菜の姿。そして風船のように散っていく猿。その瞬間のため足を止めてしまった呪符使いの隙を狙い桜咲が呪符使いに飛び出した。だがそれでも届かなかった。

キーン!!

「何っ!?!」

「どーもお初に、月詠います」

桜咲の剣撃を止めたのもまた剣撃。剣と剣がぶつかる甲高い金属音が響き桜咲は足を止める。突然現れたその剣士はどうやら呪符使いの仲間らしく、桜咲と剣を撃ち合った。桜咲は相手のその剣撃二刀であったが、に覚えがある。いや無いわけがない。なぜならその太刀筋はまさしく彼女と同じ”京都神鳴流”そのものであったからだ。

「神鳴流か・・・」

二刀の小回りのきく太刀筋は始めてなのか苦戦する桜咲である。最近の神鳴流は対化け物を考慮した野太刀を使用している。一対一という立場ならば大きな刀と小さな二刀、どちらが有利だろうか。それも同じ技と同じ動きをする場合ならば・・・。

「(もう、いいか・・・。下らん飽きた面倒くさいだるい腹が立つ)」

だが彼女たちの決闘はそこで終わりを迎えるだろう。あまりにもグダグダであったその戦場を、本当の戦場で歩いた彼にとつて不機嫌極まりないものである。なにより互いがまるで”不殺”でも貫いてるかのような……。確かに”不殺”はいいことだ、それはシックス自身ですらよく理解している。だが、目指す道がたかだがその理想程度に負けるのならば……。それはただの道化。道化だとシックスは思っていた。

「（俺は英雄ではなくただの人殺し、ならば殺そう何より主のため。そして自身のため）」

殺す殺さないの議論がどれほどくだらないものかもわかっている。だが同じように”わかっている”程度で己の理想は碎かれないのだ。故に彼は構える。この世に誕生し、戦場にたつた日から撃ち続けたように。黒き影が彼の手に伸びる。影が何かを形作りそして”ソレ”を取り出した。黒い影はまるで液体のように、中に入ったソレをシックスの手元に残して消え去った。

ガチャン

「I'm a thinker.」

ダァン！！！！

銃身が火を噴く。真夜中で大きな発砲音、それは不自然なほど周りに響くことはなく誰も気付くことはなく、それは下で騒いでいるであろう3-Aの人間達も同じことだった。ただ一人の関係者はその発砲音を聞き、懐かしい気持ちで蘇ったという。弾丸は真つ直ぐと人間が視覚出来ない速度で飛んでいく。弾丸は真つ直ぐと呪符使いの脳天を……。

「『冥府の石柱』」

カァン！！と弾丸は衝突した。何より突然現れた黒き石柱に。シックスは舌を鳴らした。一度で貫けないならば・・・貫くまで撃つまでよ、と再び爆音と言ったほうがよい発砲音。だがその石柱を作った術者は次にシックスがすることがわかっているのか防御を堅め弾丸を貫けないようにする。本来ならば石柱関係なしに焼夷弾やら徹甲弾を放つのが、そこは市街地であり、傍にはターゲットがいるわけで・・・。下手に強力な武器を使うと任務失敗である。

「新入りはん！？一体何が・・・」

突然ことで新入りと呼ばれた白髪の少年以外は誰も動けないでいた。啞然とする呪符使いはこの出来事のせいかな近衛木乃香を地面と落とし、桜咲と二刀の神鳴流剣士”月詠”もその剣撃をかわすことをすっかりと忘れていた。

「千草さん、ここは撤退するよ。『狙撃主』に狙われている」

「なんやと!?!」

旧世界で、その旧世界の端っこである日本で狙撃主という言葉を聞くとは呪符使いを思いもよらなかった。そして理解している。彼に狙われているといことは、死ぬ確率がマッハで赤信号だということ。地面に落としてしまった近衛木乃香を恨めしそうに見やる呪符使いだが、まだ作戦は始まったばかりだと、そう無理矢理納得して大人しく撤退していくのだった。

「チッ、命拾いしましたなあ!」

「（・・・アーウエルンクスか。まさかここで弾かれるとは・・・。次はその顔面を砕いてやる）」

狙撃に失敗したシックスは無表情の顔を崩していた。それはもう眉間に皺を寄せ恨み潰すように。タバコを吹かし月夜に向かってターン！と一発弾丸を放った。特に意味は無い、だがなんとなく放たないと気がすまなかった。

「（狙撃手つてまさか・・・！間違いない！こいつぁトップニユースだ！！）」

そして真実にとどり着いたオコジヨは一人ではしゃいでいた。何気に彼のファンだったオコジヨである。

T o b e c o n t i n u e d

第十八射 狙撃とアーウェルンクス（後書き）

少しだけ陰陽の話をしたら陰陽系オリツシユのネタがヌルヌル浮かんで来たけどどうしようか。

なんだか6が空気を読めない馬鹿になってきましたね。

誤字脱字の修正は遅れます、申し訳ない

第十九射エ

「刹那ちゃん！何が起きたの今！？」

突然の出来事にもほどがあった。自分達が戦っていた、もう一步の処で逃げられそうになっていた敵。そして突然巨大な石柱が呪符使いを護るかにように遮ったという事態。そして何か叫んで帰っていた新手。説明するとしても支離滅裂な流れであったのだ。桜咲刹那もある程度予想はつくかまさか麻帆良で狙撃をしていた人物とシックスが同一人物だとは思うことはなかった。

「恐らくシックスさんが狙撃したんでしょう・・・しかしあの白髪の少年が」

あの狙撃を妨害した、と付け加えた。あの麻帆良での狙撃と同じならば、それを察知して防御した白髪の少年の実力はどれほどのものなのか。どこから狙撃したのか気になる神楽坂明日菜だったがその疑問を口にするには無かった。何故ならそのとき・・・

「ああああー！！狙撃！？赤目！？シックス！？どうみても同一人物じゃねえかあー！！」

未だにボケーっとしているネギ・スプリングフィールドの肩に乗っていたオコジヨが轟叫んだからである。その声でようやくハッと目を覚ましたネギだったが、同時に声が耳に突き刺さり大変なことになる。オコジヨが彼のことをしているようなので桜咲、神楽坂両名ともオコジヨが知っていたのである。その彼について尋ねたのだった。

「知っているの？エロオコジヨ、知っているなら早く言いなさいよね」

知っていたからこそ彼が”ここ”にいる可能性が極端に低いわけで、彼を摸倣した人物であるほうが限りなく高い。知らないからこそ神楽坂はそう言うことが出来た。無論オコジヨはその点をふまえて神楽坂に説明しようとした。

「そりゃー姐さんないっすよ。シックスといやあ魔法世界の帝「少し黙れ」ハヒイ!？」

「ッ!？」

その説明はされることなく中断される。ネギの影からドロドロと黒い塊を従えながらその彼は現れた。彼は昼間のようなスーツではなく見るだけで寒気が立つほどの”何か”を秘めているフード付きローブを着ていた。夜のせいもあるのか、不自然なほど真っ黒なフードの奥から真っ赤な目がギョロリとオコジヨに視線を送る。蛇に睨まれた蛙のようにオコジヨは動けなくなるが・・・

「(悔しい・・・けどビクンビクン)」

「シックスさん、どうかしましたか」

ターゲットを抱え込んだ刹那がシックスに尋ねた。答えは返ってこない。しかし刹那は彼がすこぶる不機嫌だということをなんとなく理解していた。だが理解していたのはさすがに刹那だけ、刹那の言葉が無視したと思った明日菜は声を上げる。

「ちょっと！無視はひどいでしょ!？」

「黙れ」

「う……！」

その場の空気に重圧がかかった。その暗闇の中から真っ赤な目がただ浮いているように見え明日菜はカタカタといつのまにか肩を振るわしていた。シックスがコツコツと近衛木乃香のもとへと歩きだし手を添えた。すると幾何学的な紋様が近衛木乃香に次々と浮かび上がった。白く発光したその魔法陣が近衛木乃香の全身を包み、そしてフツと突然消え去った。

「No problemだ」

刹那達の疑問は消え去った。全身に異常が無いか見ていたらしい。光が消え去り静寂に戻る。シックスは首をコキンコキンと鳴らしたと思うと、すぐさま影の中に沈み込んでいった。残ったのは微かな風がながれる音。消え去った後ようやく辺りを支配していた重圧が消え去った。

「な、なに？今の……？」

「ありや解析の術式ってんだ姐さん、それにしても生シックスだぜ！？一生自慢できるっすよお！」

明日菜の疑問に答えたのは震えていたオコジヨであった。しかし明日菜の疑問に答えたのはいいがそれは50点というところだろう。彼女としては影に沈み込んだほうが異常だと思っていた。さすがに魔法に慣れてきたとは言えど実際見たことのある魔法使いはネギとエヴァンジェリンだけであり、その二人が決闘したときは別の魔法

を見せたのだ。ある意味攻撃用の魔法よりも奇妙な感じがする転移魔法だろう。

「カモさん、生シックスって……。彼はそんなに有名な人なんですか？」

刹那は学園長に直接雇われ、そして『紅き翼』のタカミチと交流があることを思い出した。今思えばそれなりに名が広い人物だと気付くことが出来たはずだった。まだまだ未熟、と自身を戒める。

「一部じゃあの『紅き翼』よりも有名っすよ」

「ええ！？」

そこで一番驚いたのは何よりネギ・スプリングフィールドだった。名前からわかるとおり彼は『紅き翼』のナギ・スプリングフィールドの実子である。世界で最も有名だと思っていた父とその仲間達より有名な奴がいるとは思いもしなかった。何より有名ならば魔法学校で何かしら教えられるはずだ。

「彼は魔法世界のヘラス帝国の英雄っす。大戦時に連合の戦艦を200隻以上叩き落とした人なんすよ？その御陰で連合側の人間からしちゃ今でも怖れられるような人っす」

なるほど悪い意味でか、と刹那は思った。確かに彼は何か恐ろしいことをやっているような雰囲気だった。明日菜も驚いていたのだがそれはシックスとはまったく関係の無い事に対してであった。魔法世界のことである。ファンタジーの結晶のような単語が出てきたためか、夜中だというのにテンションが登りに登った明日菜が大きな声を上げて、ツインテールがピヨピヨ動いていた。

「ん〜・・・なんやあ？」

「お嬢様!？」

色々ありすぎて一時と言えど大切な彼女のことをスツカリと忘れてしまい、穴にでも入りたくなった刹那である。しかし、その後は幸運か不幸か。今まで遠かった彼女と刹那の距離が少しだけ近くなったようだった。

「も、申し訳ございません! 馴れ馴れしくなんということをして!？」

走り去っていく刹那を不安そうに見やる近衛木乃香だったが、ポンと彼女の親友である明日菜が肩に手を置いた。刹那の後ろ姿を見ていた木乃香は「また明日」と走り去っていく刹那に聞こえるように大きな声で叫んだ。

「（なんとというラヴ臭、妬ましい）」

転移しても気になったのか、旅館の屋根からその様子をバッチリ捉えていたシックスがボソッと呟いた。今、彼は深刻なテオ成分不足に悩まされていたのだ。ホームシックスと冗談でも言えない状況だった。思わず引き金を引く張ってしまいそうなほどに・・・彼の手は震えていた。

「（これが愛の試練か・・・なんとという・・・）」

非常にムカツク、アーウェルンクスがいたということは思い出したがまさか彼処で出てくるとは思いもしなかった。俺というイレギュラーが入るにもかかわらず少し楽観的すぎたな。あそこで狙撃に成功しておけば全て解決したというのに！というか失敗・・・圧倒的敗北・・・しっばい・・・しっばい・・・だと・・・！

「おぼおわー」

何気にシヨックだった。例え神から与えられた能力にチートボデイと言えど、それなりに訓練を施した。戦場も歩いたし（本当に歩いたわけじゃない）制限を付けた極限状態でも勝って来た。だがまだどっかで慢心があるのだろう。慢心せずして何が王か、なんという言葉はマジ必要ないから。命が複数あつて中々死なないが造物主以外から命を削られたこともない。落下して一度死んだのはノーカウントだ。じよ、冗談じゃ・・・

「狙撃したみたいだけど・・・な、何があつたんだい？」

「五月蠅エ近寄るな」

今の俺の状態は手と膝を地面（屋根）につけてガツクリとなだれている状態。かなりやばい状況ということも皆にも覚えて欲しい。というか近づくなつて言ったのに俺の隣に「やれやれ」な感じで自然に座らないでくれるかな？

「殺す、絶対に殺す。アーウェルンクス、絶対に抹殺だ、クカカ」

「（ああ、狙撃失敗したのか）」

まだチャンスはある。そうまだ今は一日目だ。明日明後日アイツはターゲット奪還に必ず現れる。その時が貴様の年貢の納め時というわけだ。なんだか失敗しそうなフラグが乱立しているがその程度俺には通用しない。ここまで怒ったのは何時以来か。『紅き翼』の莫迦共にテオがいるというのに豚小屋に案内された時以来か。いや・・・ラカンがテオを莫迦にしたときか・・・。テオがくじ引きでハズレたときだったっけ？まあ・・・なんでもいい。

「（こりやものすごく怒ってるね、でも対人だとなかなか良い成績を残せないのがいつもの師匠なんだよね）」

なんだか俺全然ダメなような気がした。なんだろう・・・俺を構成する歯車共がギシギシ言っているような気がする。もういい、寝る寝て考えよう。明日には明日の風が吹くんだ。ククク、覚えておけよアーウェルンクス。認めよう、君の力を。今この瞬間から君はレイヴンだ。

「貴様の首をテオのもとに届けてやる、フヒヒ」

「（届けたら大問題だよ、毎度ながら少しずれてるなあ）」

「なんだ文句でもあるのかマナ・アルカナ」

「なんでもないさ師匠、そろそろ私は寝るから」

ああとつと寝てこいや莫迦弟子。俺は今限りなく忙しいのだぞ。緊急用のテオ成分補給回路（妄想

）の起動じゃ限界があるが、無いよりはましだ。というか俺も寝るか。精神的に疲れた。寝るのが一番テットリ早い解決法なのだよ、カカカ。

ああ、それにしてもなんと不甲斐ない

気付いたら朝になっていた。というのもしようがない。寝たのはだいたいの予測だが3時ごろ。起きたのは6時だ。つまり寝たのは3時間だ。学園にいたところは太陽が昇るあたりに寝て、太陽が降りる辺りに起きていた。なんとという二ート、素晴らしい1日だな！

「実に美味し」

いつものように3ーAの莫迦どもがギャーギャー騒いでいるが食事の出来の良さを考えるとどうでもよくなってくる。味噌汁、ご飯に焼き魚、ほうれん草のおひたしに付け合わせの漬け物。ジャパニーズフードは世界最強だと思ふんだ。食って食っても太らないアラ不思議。なによりうまい、英国の焼くか煮るしかない料理は全然違う。もっとも英国は紅茶とケーキだけならば随一だが……。

「(うぜえ)」

目の前を桜咲とターゲットが通り過ぎていった。何をやっているのか莫迦共が。食事処で追いかけてこするんじゃない、ゴミが飛ぶだろ。それに加えて見れば莫迦餓鬼に群がる学生共。どうやら自由行動を一緒にまわろうとしているみたいだが、互い互いが牽制しあっている。どうにもなっていない。一方俺のほうは特に関わろうとしていないためか、一部の変な視線を覗きなんということもない。楽で結構、どうせ高所でターゲットの近辺を見渡すだけだ。それにしても……

「他人の恋模様ほど撃ち滅ぼしたいものはないな」

「……ッ!?」「」

周りの人間達がビクツとしたような気がした。狙撃手たるものこういう細かいことにも気を遣わなくてはいけない。俺にとってなによりも孤立無援が当たり前なもんで。いや、俺の武器の特性上援護があつたら困る。特に近接タイプの人間は非常に必要なのは昨日の件でもお分かりだろう。へたをすれば味方ごと撃ち殺すもんだが、ただの狙撃銃ならばなんとかなるが……、これまた強力な魔法使いだとすぐさま察知されて弾丸を叩き落とされる。まあそこは数で勝負すればいいのだがな。

「（昨日の奴らの気配は無い、と……まあ昨日今日、しかも朝早くからはないだろう）」

500メートルぐらいなら人数を把握するまでに達したこの異常感覚にも感謝せねばいかん。御陰で帝国城のどこにもいてもテオの居場所がわかるため……。今すぐ愛（会い）に行けるんだな、コレが。

「（圧倒的心眼!）」

龍安寺という物を知っているだろうか。枯山水で有名な龍安寺だ。枯山水、石ころで池や川の流れを表した日本庭園の形の一つである。目で見るとは心を通して見る、八百万の神を信仰してきた日本人だからこそその感覚であり、何より龍安寺の枯山水は『心』に深

く関連している。龍安寺の石庭は15個の石を一見無造作に5か所、点在させただけのシンプルな庭であるが……。

「（これが日本、日本の心！）」

幾分日本について勘違いしてきたシックスである。典型的な日本通の外人を見ていつぞやと同じ、その場はなんともほのぼのな空間だったという。さて、話を戻すが龍安寺の石庭には先程言ったとおり15個の石がある。15は完全な数字だ、十五夜という月が満ちることから15を完全としているという見方だ。この石庭では必ず石が1個隠れて14個しか見えぬという。修行に修行を積んだ僧は、いつか心眼で最後の1個を見通す。それが龍安寺の石庭である。

「（それにしてもぶっ飛んだ考え方だ、水を感じるため水を抜くという）」

日本人の感性が外国諸国とずれているのがよくお分かりだろう。日本には八百万の神がいるというが・・・エル・ニーニョもびっくりな神様軍団である。こんなシックスが遙か遠き前世の祖国、日本に感動している中、3-Aの人間達は大変なことになっているのだが・・・それは割愛しよう。ネギ少年が告白されたり野次馬がいたりその勇気に関心したりと、実にどうでもいいことである。だがシックスも”一応”程度には理解しているため、定期的な桜咲刹那との連絡は忘れなかった。

（桜咲イ、こっちは問題ない。そっちは？）

（同じく）

何度目かの定期連絡も問題無かった。どっかい正太郎と立ち上がる

シックスは再び歩き出す。思いっきり観光を楽しむつもりで、仕事とプライベート辺りを両立出来ているのやら、出来ていないのやら。普段通りの外出用スーツを着こなした一見マフィアな外人である彼を避けるようにしている観光客の様子に何時気付くのか。

「（そろそろ昼か・・・精進料理でも食っていくか）」

ガイドマップをペラっと開き料理の欄を見やる。前を向いて歩かないのだが周りの人が自然に避けていくためぶつかることはない。シックスとしては「なんだか空いてるねえ」と内心思っていたのだが、やはり自身の格好については何も思わないらしい。

「（食った後は二条城でも行くか、かの徳川栄枯盛衰の理である城になあ、フヒヒ）」

案外テオドラがいなくても大丈夫かもしれない彼だった。

T o b e c o n t i n u e d

第十九射エ（後書き）

なんかもうスクナ来襲まで寝ていても良いような気がした。

変なほど脱字誤字が多かった、なんという失態

第二十射 彼に敗北は無し

パパラッチという言葉に好感を持つ人は極端に少ないだろう。パパラッチの語源は特に意味の無い人名の「パパラッツォ」とも騒がしいことでヤブ蚊の意味を持つ「パパラッチ」というイタリアの方言とも言われているが定かではない。そもそもパパラッチとは俗に言うカメラマンの総称の一つであり、よくドラマなどで見るこの出来る「著名人のプライベートを撮影して雑誌や新聞を取り扱う会社に売り飛ばして金を貰う」人間のことだ。まあ生活のため良い印象を持つことはあまり無いだろう。しかしこれらの行動で汚職事件やらが発覚したこともあるのでまとめるわけにはいかない。

「（超能力者！？宇宙から来た正義の味方！？人間界に來た魔法少女、男の子版！？）」

パイナップルみたいな赤紫の髪を持つ少女がトイレで唸る。彼女の名前は朝倉和美。彼女こそ麻帆良のパパラッチと呼ばれるはた迷惑な存在である。とは言っても彼女にでも良心やら自制心やらはある。現に教師であるネギ・スプリングフィールドに生徒の宮崎のどかが告白したという話を直接インタビューし、本当だとわかったとしてもそれを表に出すことは無くただ応援したりした。だが、それでも彼女が今顔をツッコミそんな場所はそれと比べる必要がないほど”奇妙”な場所であろう。

「どつちにしろデカイネタに違いは無い、問題はそれをどうやって記事にするか…」

彼女は今までに撮った写真を思い起こす。今でこそ考えてみれば”異常”ととれる現象はいくらでもあり、それを写真にも収めて来て

いる。『麻帆良では特に何も思わなかったこと』がここ、京都では疑問に思えて来たのだ。だがまだ足りない、証拠が足りない。彼女の記者魂が中途半端な記事を赦さないと燃えていた。早速彼女は行動に出ることにした、記者(?)として身につけた変装術をここで使わずに何に使う!?

カポーン

処代わり露天風呂、露天風呂には噂の少年ネギ・スプリングフィールドがいた。京都に来てから、襲われたり告白されたりと様々な事件が立て続けに起こり少年は既に疲労困憊、肩をがっくりと落としたため息を吐いていた。同じように温泉に浸かっているオコジヨが叱咤するも無駄なことであろう。彼はまだ数えて10歳の子供なのだから。

「ん?誰か来たぜ?」

「あら、ネギ先生?」

先生タイム、ということのでゆっくりと浸かっていたネギだったが、そう今は先生タイム。教師なら誰かが入ってくるのだ。現れたのはメガネ巨乳のしずな先生だった。風呂にピアスとメガネとは不自然極まりない。少しは考えてほしいものだが…。今は置いておこう、なぜなら今

「うふふふふ、実はねネギ先生。私あなたの秘密を知ってしまったの…」

ネギの耳元で言葉をかけるその女性にたじたじな様子。魔法使いと
いうことがバレたためか必死に誤魔化そうとするが、ダメだった。
魔法を見せてとせがむ彼女。それでも抵抗するネギ。そこで彼女の
最終兵器とも言えるべきかネギを自身の胸に押しつけて一気に攻め
立てる（エロくない）大きな胸に溺れて溺死しそうなネギだったが、
これが幸いとも言えるべきか。さすがイギリスの変態紳士ネギ・ス
プリングフィールドだった。

「あれ？しずな先生胸がすごく小さくなりましたか？」

「な、何いっ！？失礼ね！それでもクラスナンバー4よ！」

クラスという言葉が決定的だった。正体を表せとネギは言葉を継げ
る。バレたらしようがないと、ようやく彼女の本性が現れた。赤紫
のパイナップルみたいな髪の毛、そう朝倉和美である。ネギもまさ
か自身が受け持つクラスの人間だとは思わなかった。しかしネギも
”一応”魔法使いである。彼女の記憶を消そうと魔法の呪文を唱え
るが……

「おおつと待ったー！このケータイが見えないの！？下手な動きは
しないで。この送信ボタンを押せば…ふっふっふ」

彼女の手には携帯電話。携帯電話の液晶には送信直前の画面が映っ
ていた。送信のボタンを押せばあら不思議、朝倉和美を通じて全世
界に広がるドキドキワールドワイドウェブな作戦である。朝倉和美
の周到の良さにオコジョは怯む。さすがに英雄の息子といえど全世
界に広まってしまえばお終いだ、オコジョにされるのが目に見えて
いる。何よりオコジョが怖れたのはシックスの存在である。エロオ
コジョはエロオコジョなりに彼のファンであり、このような失態を
すれば彼が失望するのは目に見えている。

「ふう、どうしてこんなことを…」

「フフ、スクープよ。全てはスクープのため」

ジリジリと詰め寄る朝倉和美、そして一步一步下がっていくネギ。ネギに至ってはもはや涙目だった。朝倉和美の野望が今ここで成就しようとしていた。魔法を使わせようとよグイグイ引っ張っていくが、どうやら時間をかけすぎたようだ。京都へ共に来ている魔法の関係者はネギ・スプリングフィールドだけでは無いのだ。

「どう！魔法を「ダアン！」と使う…気に……」

ブシューと彼女の手にあつた携帯電話の液晶部分に思いつきり風穴が空いた。あまりにも突然なことでネギはもちろんのこと、朝倉和美さえ穴が空いた携帯をじっと見つめたまま動かなかった。バチバチと放電したり煙をプスプス上らせたり、百人が見れば百人が「ダメだなこりゃ」と思う惨状になっている携帯である。

ダダアン！！

「キヤツ！？」

あそこまで派手に風穴空いたらさすがに耐えられないか、音とともに破裂してバラバラに飛っていく携帯だった。爆発の規模は小さく瞬時にどこからともなく飛んできた弾丸が携帯をはじけ飛ばし朝倉和美への被害をゼロにした。しかしこのことに気付くはずはない。彼女からすれば突然携帯に穴が空き、突然爆発し、偶然自分はケガを負わなかった、ただそれだけであった。

「(ミツシヨンコンプリートだ、莫迦餓鬼)」

どこかでこういう声がポツリと聞こえた。だが証拠が無くなっただけで彼女に魔法がバレたことは間違いはなく、妙な奴に知られたものだ、と黒スーツにグラサンの超怖い青年がため息を吐いた。彼からすれば、バレることは前提なこの修学旅行ではあるが報酬を減らされる建前になってしまふ可能性もあるわけで、一度だけスコープの標準が朝倉和美のコメカミと重なった。だがそこで思い直す、3 - Aの人間の安全も確定されているのに狙撃するとダメじゃね、という風に。どちらにせよ学園長に殺意が積もり狙撃手『シックス』であった。

「(俺は知らなかった、莫迦餓鬼の仕業だ、ならば俺は悪くない。悪いのは莫迦餓鬼とこの時代だ)」

「(あわわわわわ、シックスの旦那!?こ、こうなったら…)」

弾丸ということに気付いたオコジョは、いつそのこと朝倉和美を身内(関係者)として扱う作戦に出ることにした。最初っから知っておけば評価が下がることはあったも最低にはならないだろう。なによりシックスと上手い関係を作っておけば、帝国にパイプが出来るということと同義なのだ。より罰から遠ざかるため、これはしょうがないことなのである。

夜になった、なったが俺の仕事は変わらない。なにより確実にアー

ウエルンクスを狙撃するため。昨日と同じように屋根で警戒中なのだよ諸君。さて、特に今日は何も起こらないことを願う。矛盾しているが正直今の感想だ。なぜならば今、超絶に面白いイベントが開催されているのだからなあ。楽しみで楽しみでしようがないのだよ。

「頑張るなああの莫迦ネズッチュー」

見れば旅館全体を覆う魔法陣、仮契約の魔法陣だ。この中にいる限り口づけを交わした者全員仮契約に陥れる変態な事態、しかし俺とはいうとワクワクテカテカが止まらない。ロマンスティックが上がり続けていると言ってもいいぐらいだ。他人の恋模様は撃ち殺したくなるが…どうにも口付けをするイベントが開催されるようで。魑魅魍魎のごとく入り乱れる（エロくない）ことだろう。

「一人につき5万オコジョ\$だったか。所詮ケモノの貨幣だが、これはおいしい」

今は準備中らしい、トトカルチョも俺は参戦する気マックスなわけだが、誰につき込むかが問題だ。誰につき込むとしても倍率を考えて、もしかしたら二人…連馬になるかもしれないし、それでも当てやすくするよう単馬が。これは難しい。俺の勘的にいうところいうのは武闘派ではなく大人しい（ように見えて牙を研いでるような）奴が勝ちそうな気がする。

《修学旅行特別企画〜くちびる争奪！修学旅行でネギ先生とラブキッス大作戦〜！！》

始まったようだ。タイトルで非常にイラッと来たがここは抑えておこう。所詮餓鬼共に遊びだ。二十歳になった俺は大人だからな。ここは耐えてやろう。それにしても撃ちたい。さて、結局俺が付き込

んだ相手は”宮崎のどか”だ、こいつは絶対に腹黒いタイプだと思う、俺の気のせいだということをお願いばかり。倍率はなかなか高い。というのも忍者やら中国やらシヨタコンやらが参戦しているのでどうにも影薄くなる。ダークホース的存在だな。逆に俺は美味しいというわけだ。

「(……莫迦餓鬼?)」

さていざ開戦。ということになったのだがそこで問題発生。何故か莫迦餓鬼が旅館から出て行った。杖を所持しているところを見ると警備としてまわるつもりか。なるほどこれは面白い。今のうちに別のチームを叩きつぶす時間ということだろう。だが最後まで潰しあうとしても教員に見つかってしまえばお終いだ。なるべく早く莫迦餓鬼が戻ってこなくてはならない。

「クヒヒ」

イヤホンから流れてくる朝倉嬢の実況解説を聞くとどうやら急展開とのこと。やはり忍者中国チームが優勢。相手が普通の人間ならばさすがに敵うわけがない。俺がつぎ込んだ宮崎嬢に同チームの綾瀬嬢の様子が流れることは無い。お、なるほどそういう経路をとるか。視界に直接映る彼女たち、どうやら窓の外から伝って来るらしい。非常用階段を開けておいたり完璧だ、これは将来に期待。だが莫迦餓鬼はいないはずだが……。

「んまい！」

炙ったドラゴンミートの塩漬けをつまみに帝国の倉庫から勝手に掻っ払った高そうなワインを飲む。優雅だ。愚かな子羊共が莫迦餓鬼のくちびるを奪うため互いにつぶし合う。勝者はもれなく魔法界進

出の仮契約カード。普通の魔法使いが聞いたら卒倒しちゃうようなイベントだ。帝国の愉快な者どもはむしろ参加しちゃう勢いだけだな！……ワインのラベルを見たらテオが産まれたときに作られた記念ワインだとさ。死にたくなってきた。

「（莫迦餓鬼が五人？いや、本体も含めて六人か。映像に撮っておけばよかった）」

阿鼻叫喚とはこのこと、ロビーに集合した莫迦偽を奪い合うこの様子。莫迦餓鬼の分身体がいるみたいだ。全員で5体、途中で綾瀬嬢が気付いて1体を潰したから残り4体。片っ端から口づけを噛ますが、残念、全部偽物ということだ。口づけをした瞬間自爆するという謎の能力も発動。この式神のモトを作ったのは桜咲はずだが、どうやって作ったのか超気になる。結果としてやはりロビーにいた莫迦餓鬼は全部偽、そこでようやく本物の莫迦餓鬼が帰ってきたわけだが……なんとというナイスタイミング。

《本屋ちゃんの勝ちだー！！優勝宮崎のどか！！》

綾瀬嬢の策略により見事にミッションコンプリート。俺は一切関与しない、しかし儲かるものは儲かる。これは美味しい実に美味しい。食券が莫大な数になるっていう。やはりそこは盛大に使うべきだろう。確か三つ星レストランがあるのでそこを貸し切りにしてテオへの愛の詩を歌うべきか……。クヒヒ、今から超楽しみだ、アーウェルンクスの汚い顔面にショット出来るわなんだこの修学旅行。莫迦餓鬼共は必要ないが来て良かったと思う。

「楽しそうだね、師匠。…あ、おいし」

浴衣を着てきた俺の愚かな莫迦弟子がいた。俺が魔法界で狩って保

存しておいたドラゴンミートの塩漬けだ、美味しいのは当たり前。どの料理の教本にも載ってないワイルドな料理。炙って食う！酒と一緒に食う！これが一番おいしいのだと俺は思うね。というか莫迦勝手に食うな、何よりその格好で近づくんじゃない。

「止めなくてよかったのかい？ 仮にも魔法使いに分類されるんじゃないか」

俺の隣に座る、俺が横にずれる、莫迦弟子もずれる。という奇妙な光景を映しながら下らないことを聞いてくる。仮にも魔法使いに分類されるのは確かなことだ。だがでつていう。魔法使いだからといって秘匿を大切にするというのもおかしいものだ。俺的にはどっちでもいい、が正しいわけだが。バテて困ることなんか……銃刀法違反程度だ。ぶつちゃけ魔法関係ないね！武器を生み出すのは魔法だけだ。

「わたしの きおくに ございません」

日本の政治家の得意技を発動する。あんまりやると信用を失うので気をつけよう。俺みたいにテオ以外の存在なんかどうでもいい奴が使うことにしろよ。テオ以外の信用とか仕事に関するもの以外は本当に入らないから。戦場において……昨日仲間だった奴が今日敵として殺し合い、そして明日ゲイになっているというワケの判らないこともあり得るこの社会なのだから。

「なるほど。お、ワインもおいしい……第三皇女誕生記念のモノじゃないか」

この莫迦弟子が人をありえない存在を見たときのような顔をして見ってくる。失敬だな君は、失敬だな！俺にだって失敗はある。いいか

？人とは失敗を糧に成長していくものだ。ならばしようがないのだよ。俺が人間じゃないということを考えなければ。更に加えると混ざりモノだ。総合的に見て9分の1程度はヒトガタかもしれない。

「ばかやめろ」

死にたくなるから。飲んだものはしょうがない。人は言えない妄想を持ちながら飲むことにしよう。記念ワインだからといって一本しか無いというわけじゃないしな。帝国に帰ったらパクって永遠に所持しておくことにする。飲めないようにコルクのところを針金と封印術式で固定して。一生見て楽しんでやる。毎日写真を撮って成長記録でもとるべきだろうそこは。ワイン相手に。

「（隙がないなあ）」

キラーンと莫迦弟子の目が光っているような気がする…。まあいつもの事だった。この莫迦弟子はいつも何を考えているのかサッパリサッパリだ。俺の弟子なせいなのか元々なのか。面倒なものだ、莫迦な弟子を持つというのは。

「フフフ」

「なんだ気持ち悪い」

突然笑い出した莫迦弟子に若干引きながら俺はあることに気付く。この時ばかりは俺の眼力を呪いたい。だが俺には勇気が足りなかった。いまこの時目を潰しておけば汚物が目に入ることもなかったのに。決して美味しいかと思ってませんから。俺はいつだってテオが全てだから。テオのためなら死ぬるよ俺？百回ぐらいだけど、で、

結局

なんでこいつ下着つけてないのだ？

という疑問に帰るしかない、誰か俺を助ける。悪魔が襲ってくる悪魔怖い。俺の脳内で戦争が起こっている。邪神めついにココまで来たのか！？俺とテオの仲を切り裂こうとする魔王め。俺が”いつか”成敗してやる。ひとまずここは撤退を所望するべきだろう。戦略的撤退だ、決して俺は負けはしない。たとえ今負けただとしても”いつか”かならず勝ってやる。

「（ちなみに戦争の結果、シックス4が裏切って、シックス9が日和見主義になってしまった。なんという……なんという！貴様達のテオへの愛はその程度か！？）」

「どうしたいんだい師匠？そんなにジロジロ見て？フフ、恥ずかしいなあ」

上目遣いをやめる莫迦大女！負けはせぬ！負けはせぬ！たかだが褐色おっぱいごときに俺は負けない！素肌に浴衣という一種のお決まりパターンがここまで強力だとは。俺の脳内の戦場の跡地を見れば…その激しさ（エロくない）がすぐにわかる。俺にとって造物主よりも強い存在だ。テオよ、俺は無事に帰ってこれるだろうか？

「テテテテッタイ」

月と星が輝く空を見やる。テオドラが笑顔で手を振ってくれているような気がした、フヒヒ。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

「
（チツ）
」

第二十射 彼に敗北は無し（後書き）

白騎士おもすれえ

アバターの性別は勿論女ですよ、あれ？俺だけ？
というか頭だけ騎士兜ってもはやギャグですよ。

第二十一射 敗因はごく単純（前書き）

ザジさんまじパネエっす

そういえばPV100万いってました。こんなオニ小説を見て
いただき誠にありがとうございます。

第二十一射 敗因はごく単純

「I'm a thinker」

ご機嫌いいように見える外人っぽい人が京の町を歩く。思考を深めさせるような歌を隣にいてやっと聞こえるような音量で口ずさむその姿には、やはり人の視線を集めてしまうものだ。そもそも、目立つような格好をしているのだがそれを外したとしても 外見ははずことは出来はしないが 目立ってしまうものだ。一見日本に来てうかれている外人さんに見えるが：中には歩き方などから”タダモノ”ではないということを理解してしまうものがある。特に京都では神鳴流を主とした数々の対魔の一族がいるためすぐにわかるだろう。

「（私は狙撃手）徹底的に討ち滅ぼせ）」

修学旅行三日目の午前。適当にブラブラと歩いているようだが気付くものは気付くかも知れない。白髪グラサンスーツの男が歩いている、歩いているが”何か”を中心にしてぐるぐると回っていることに中心の”何か”は言うまでもなく彼の今回の仕事、護衛対象である近衛木乃香である。大和撫子を体現したような彼女であるが、彼女の祖父である妖怪ジジイと本当に遺伝的に繋がっているのか不明、故に学園の七つじゃない七不思議の一つとして数えられる。しかしそれ以前に『なぜ学園長の後頭部は長いのか?』という疑問があるという事態、さすが麻帆良と言うしかないだろう。

「（京都まで来てGame Arcadeとは、なかなかわかつている莫迦餓鬼共だな）」

うんうん、と何かに納得する彼の背中からは謎の哀愁が漂っていた。今彼の脳内ではテオドラ第三皇女とのデート模様が放映され、先日明確に裏切ったシックス4を洗脳の作業に入れ込んでいるのだろう。脳内シックス十常侍の中で一番凶悪な”滅殺”を司るシックス4の裏切りは脳内派閥に大きな影響を与えた……、という話はまた今度にしよう。今彼から見えるその光景、決してターゲットとオマケの集団からは見えない距離から見ているソレは誰が見ても仲の良い集団にしか見えない。

「（まだプリクラとか合ったのだな）」

女7に対して男1という世の中の定理を破壊したその光景を見やる。だが結局彼の思考の行き先は『テオと行きたかった』であるためその光景を目撃したとしてもダメージはない。転生とも憑依ともとれる出身なため、かつての常世を思い出す。既に擦れたひと昔の映画のようにボヤけている存りし日々。そしてその常世にテオの存在がないことに絶望するがそれを表に出すことは無い。かつての日々は西暦で数えたとしてもだいたい十年後、ある場所では20年ぐらい科学が進んでいる部分もあるが…時代の流れを感じとれずにはいられないシックスであった。

「（……莫迦か？まあいい、か）」

ゲームセンターの中で和気藹々としているのだろう、ネギ・スプリングフィールドに神楽坂明日菜というある意味中心人物達も楽しそうに遊んでいる。彼女らはまだ子供だ、いちいちその程度で護衛云々言うわけもなく”やれやれ”と言った感じで見やる。そこまではいい、だが妙な形になっているニット帽の少年を見逃すとは如何なものか、とシックスはため息を吐く。それは失望だけではなく、無駄に妙な期待をしてしまった自身への戒めでもあった。

「やっぱ名字スプリングフィールドやて」

簡単に背後をつけ回すことが出来た。どこかの海王の如く背中にピツタリとくつつき呼吸を共にし、狙撃手として鍛え上げた隠密性の効果もあつたためだろう。見事にその少年は敵の一派であることが判明。シックスは脳内で設計図を片っ端から引き上げ、影の倉庫の眠るあらゆる兵器の撃鉄を上げる。京都という敵のホームであり、アーウエルンクスという魔法界でも上位どころか最上位の一人である魔導師が存在しているのだ。負けはしない絶対に。という気持ちには持つており、どう動いても勝利の光景が見える。先程アーウエルンクスを最強の魔法使いの一人として数えたが、それはあくまで魔法界での話。だがここは現実世界とも言える場所であり、派手な魔法を使うことは出来はしない。それは彼自身も同じことであるのだが……。

「やはりサウザントマスターの子供やったか、まあ「千草さん」なんや新入り？」

「コタロー君、敵につけられるとはやってくれたね。まあ相手が相手じゃ無理もないけど」

「なんやて!？」

コタローと呼ばれた先程のニット帽の少年だけではなく、メガネの呪符使いも驚きを隠すことは出来なかった。つけられることを想定外として数えたつもりはない。だからこそ強力で広範囲な人払いを張ったのだ。なにより「すぐ後ろからつけられる」ことが無い限り辿り着けないような迷路まで仕組んで。だが一番驚いたのは白髪の少年、かつて大戦時において『紅き翼』と『帝国の狙撃手』達と殺

し合った存在であるアーウェルンクス本人だった。

「出てきなよ、狙撃手」

一言で言うならば”ありえない”だ。どこの世界に背中にピツタリとくつついて人をつけ回す存在がいるものか。どこの世界に”ソレ”を実行し、なおかつバレることが無いという状況を作り出す存在がいるものか。だが今そこにその存在はいた。アーウェルンクスの言葉に従うかのように、フツと現れたかのように見えた白きフードを深く被った空の支配者がそこにいた。

「あれまー、狙撃手さんですなあ。ここでドンパチ始めるつもりかいな」

ウフフフ、と白目黒目が反転している少女が笑う。彼女にとって今彼らの立場にいるのは何より”殺し合い”をするためであり相手が強者であるならば尚更良い。彼女にとって帝国最強とも呼ばれる存在が目の前にいるのは千載一遇のチャンスとも言える、小刀を抜きこすり合わせ金属同士、しかも肉を切り骨を断つために鍛え上げられた匠の金属刃がシャキンと鳴る。

「へっ、人の後ろをこそこそとつけ回す卑怯モンが俺に勝てると思っなよ」

狙撃手って何?と思いつきながら指を鳴らすニット帽の少年。どこから仕入れてきたのか謎の学ランを見事に一昔のヤンキーのごとく着こなしている姿はサマになっている。なお、こういう世界において服装について語るのは危険極まりない行為のため気をつけよう。

『立派な魔法使い』では一番好ましい奴やけど、ウチらの邪魔す

るなら容赦しまへんでえ」

肩がはだけたやはりどこかおかしな服装の呪符使いが札を放つ。出てきたのは鬼、善鬼と呼ばれる呪符使いの護衛だ。筋肉隆々のその姿は一目見て”鬼”とわかるだろう。更に五行の力を封じ込めた札を構える。だが彼女としてはやはり今現在での戦闘は避けたいところであつた。彼女の目的はアクマで関西呪術協会と関東魔法協会であり、その目的を達成するとある手段を実行するためのタネが近衛木乃香である、ただそれだけである。彼女の故郷でもある京の街を破壊したくはなかつた。

「見敵必殺の意味、わかるか？なあアーウェルンクス？」

「……出来ればここで相手したくはないのだけど無駄なようだ、ね！」

白髪の少年が言葉の終わりとともに石の槍を放つ。六方晶の灰色の槍が真っ直ぐとフードの男へと向かうが、そのフードの男の足下から伸びた漆黒の鞭が切り刻み無に返す。だが切り刻む直前に飛び込んだ剣士月詠がいた。二本の小刀を振りかぶり切り刻もうとする。石の槍が刻まれた瞬間のことであつた。故に月詠は必勝の文字を思い浮かべる。人を斬ることに特化した彼女の刀を受けてしまえば、たとえ小刀と言えど……、だがこれは裏切られる結果となつた。

ガキーン！！

金属同士がぶつかり響く音がする。狙撃手である彼の右手に存在するのは歪な形の刀剣類。唯一彼の属性がカバーする剣である”ガンブレード”そのものであつた。柄の部分が回転式拳銃という構造をしている剣は俗に言う震動剣の作用を持つ。

「ガンブレードやなんて、珍しい得物どすな」

震動すれば震動するほど切れ味が増すという話を聞いたことがあるだろう。中には震動熱によって焼き切る武装も存在し、その威力は凶悪である。しかしこれは勿論再現に至っては非常に困難な武装である。敵を斬り殺せるほど強力な震動を発生させる武器を人間の腕が扱うことが出来ようか、いや出来るまい。その震動を剣として扱える範囲内に抑え、尚かつ威力を増大させる。特に今の彼が所持するガンブレードは敵を切り裂く瞬間、弾倉に込めた弾丸を破裂させ震動させるという構造である。

「そら、もう一本だ」

ガキーン！！ガァン！！カァン！！ダァン！！

斬る瞬間引き金を引く。だがそれに至って人間の指は耐えられるだろうか……。それほど扱う人間が少ない武器をあまつさえ二刀。刃が自身の身長ほどあるそれを片手で軽々を振り回し、破裂させ、震動させ、敵を切り裂こうとする。小刀の利点は扱い安さだ。小回りの効くそれは一見攻撃力不足に見えるが、実際の殺し合いを経験した人間ならばわかる。全てを急所にすれば問題は無い。むしろその攻撃の速さによる連撃はまさしく死を誘う踊りであるのだ。

カァン！！キーン！！ガァン！！

だが今の状況を見てはどうだろうか。自身の身長ほどの、刃だけでも1メートルを超える鉄の塊をただ腕を振るうかのごとく。小さな刀の役割を最初から否定するその行為に月詠は例え剣の天才だとしても、自身が今持っている武器では勝ちめは無かった。だが……

「俺を忘れんなや！」

スツとシックスの隣に割り込んで来た黒髪の少年。腰を低く落とし正拳を放つ。シックスは特に驚くことも無く、鈍い音とともに左手のガンブレードを盾に防御。しかし気を強化された少年の拳の威力はダメージを与えるほどではなかったが、シックスを飛ばすには十分な程であった。浮き上がり無防備になるシックスだったが、相変わらずの無表情は変わらず、それが黒髪の少年の怒り具合を上昇させる。

「そら、行きますえ〜」

追撃。彼の上空に待機していた呪符使いが、鬼の肩に乗っていた。真っ赤な鬼はその手に持つ巨大な棍棒をシックスにたたき付けようと振り下ろす。直撃、しかし肉が爆ぜるような音はしなかった。つまり彼が障壁にて防御を実行し、彼を殺すには至らなかった証拠でもある。地面を陥没させ棍棒の先がシックスごと埋まる。瞬間に変わる攻守、映画でもお目にかかれないような戦闘がそこにあった。

ここまでの戦闘で5秒もたっていなかった

ダウン！！

「ッ！？そう簡単に逝ってくれまへんか！」

地面にたたき付けられたはずであった。しかしシックスは”そこ”に何事も無かったかのように”横”に立っていた。それこそ彼が身につけているフードには破れている箇所も無く、地面にたたき付けられたハズであるのに汚れなども無かった。白く白く純白のローブ

には何も無かったのだ。そこが地面と思わせるほど自然にビルの”横”に立っていた彼が放った弾丸が鬼を一撃で還らせた。最初の連撃でダメだとわかった呪符使い達は一齐に散らばる。一撃必殺の弾丸を降らす彼を正面に集まるなど愚の骨頂である。

「街を破壊するわけにはいきまへんなあ」

「千草さん、待って」

空間隔離の結界を張ろうとした呪符使いに待ったをかけるアーウェルンクス。疑問に思う彼女だったが、彼の説明を聞いてなるほどと納得する。空間隔離した時こそ大量破壊を得意とするシックスが本気を出す一番の機会だからだ。今でこそ、彼が一齐に散らばった彼女たちに投合してくる鉄製の単純で無数で無骨な刃で牽制しているが、彼の本領である”兵器群”が飛び出したら……、アーウェンルクスは最低でも自身がスタボロ、他の人間は皆死ぬことになる、と予測をつけていた。

「チツ!? 撤退しますえ!」

「させんよ、莫迦猿」

黒い塊を空中に浮かび上がらせそれを足場にピョンピョン跳びはねるシックスは、ほんの僅かな時間で彼女の後ろをとる。しかしガキンツ!と次は石の剣と鉄が押し合う。瞬間で数撃刃を交わしたかと思うとシックスは黒い塊を利用し後ろに下がる。下がりながら飛ばしてくる刃を魔法の射手で撃墜する。爆煙が巻き起こり視界が隠される。しかし爆煙の向こう側ではまた刃を交わす音。恐らく月詠と撃ち合っているのだろう。

「今のうち、クっ！」

「……」

転移魔法を使おうとしたが、全て無駄であった。爆煙の向こうから伸びてきた影の槍が襲い掛かり妨害する。強力な貫通能力を保持しているのを一瞬で見抜いたアーウェルクスは呪符使いを思いつきり引つ張り戦線を離脱させる。呪符使いは扱い用に文句でも言いたかったが、目の前に突き刺さった黒い槍が口をふせいだ。

「（これはまずい）」

アーウェルクスは既に今回の作戦の失敗が確定していることを予感していた。例え今逃げられたとしても、疲労により作戦続行はきつい。何より今の戦闘が彼らにとって何よりも危険なモノである。端から見れば4対1という構図なため彼らが有利に見える。しかし実際はどうだ。一人は未熟、帝国の英雄に手も足も出せない。一人は武器、速度もリーチも違いすぎた。一人は準備不足、何より”アレ”を召還するために戦闘は極力しないようにしていた。一人は制限、未熟な前衛のため強力な魔法も使うことが出来ず、例えいなくても町を破壊するという行為に繋がってしまうため使うことは出来ない。

「（極地による戦闘とはね、まさかここまでとは）」

シックスが追いつめられているように見えて実際は彼らが追いつめられている状況だった。”投影”というある意味無限の補給力を持つシックスだからこそ、極限における戦闘能力の保持を可能にする。彼が街を破壊することは無い。彼が投げた刃は何か当たる瞬間に陽炎のように消え去っていくのだ。だが自身の横を通りすぎるとき

は、間違いなく存在している本物の刃であることは間違い無かった。

「（そして何より……）」

相手は時間を稼ぐつもりはないだろうが…、時間が立ては立つほど彼らは不利になる。ネギ・スプリングフィールドが持っている親書を奪うという行為も、失敗しても次のフェイスに問題無く移れるとしても必要なことである。ネギ・スプリングフィールドへの妨害が今回の作戦でも非常に優先されるべき内容であるのだから。更に増援が来るという可能性さえも浮かび上がる。これだけは避けなくはいけない。

「そら？どうした？隔離しないと俺を倒すことは出来ないぞ？」

言ってくれる、とアーウェルンクスは舌打ちをする。もはや彼はこの京都における作戦の成功失敗のことは頭に無く、今後どうするか、それしか無かった。撤退するにしても遠距離転移は作戦完了後の撤退、今この時に使えば最初から作戦を否定することになる。だからといってつとり速く短い転移をすればどうか？4000メートルの狙撃をする彼の目から逃げることは出来るかどうか、五分五分な処である。

「言ってくれるね、隔離した瞬間、戦争でも起こす気がする？」

「（テオドラへの愛を込めて）戦争ね、それもいいかもしれん、がナンセンスだ。アーウェルンクス」

アーウェルンクスにとっても狙撃手シックスの存在と思考を好む部分はある。正義だの悪だのよりも、何よりも自身と自身の大切なものを守るため。殺す殺されるをどうでもいい言い訳で濁すというわ

けでもなく、全てを背負いそして生き抜くという目標は実に素晴らしい存在である。故に彼は欲しかった。『完全なる世界』の一員として彼が欲しかったのだ。彼と戦い彼のことはよく理解しているつもりだった。彼の行動の基準は全て”テオドラ”であり、次に自分残る存在は全て”それ以外”として扱う存在なのだ。もし彼に「テオドラと永遠に一緒にいられる空間」を提供する代わりに仲間になれ、という取引をするならば……

「Border of life そろそろ踏み越えるべきじゃないか人形」

彼の言葉によって思考が遮られる。狙撃手が白髪存在を知っているのが今は関係無い。今は何をどうやって、千里の狙撃主から逃げのび戦力を整え、そして本来の目的、失敗がすぐ側にいる作戦をどう遂行すべきか、であるのだから。

「お前達の敗因はたった一つだ……」

「テオドラを愛している俺に出会ったことだ」

「（いや、その理屈はおかしい）」

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

第二十一射 敗因はごく単純（後書き）

脳内シックス十常侍（エスパイダでも可）

” 愛欲 ” のシックス0

” 破壊 ” のシックス1

” 怠惰 ” のシックス2

” 希望 ” のシックス3

” 滅殺 ” のシックス4

” 強欲 ” のシックス5

” 究極 ” のシックス6

” 未来 ” のシックス7

” 永遠 ” のシックス8

” 絶望 ” のシックス9

第二十二射 最強の敗北

所謂ピンチ、という処ではないだろうか。前門の狼、どこるか後門ごと突貫しそうなイノシシ。狭い道を広げようとすればイノシシも一緒に大きくなるという。これほど面倒な相手はいない。彼、フェイト・アーウエルンクスは思考する。今日の前でガンブレードを振り回し、離れば影の槍やら鉄製のバールのようなものが飛んでくる。それを回避したとしても空中に固定された影の球体を跳びはね瞬時に背後を取る。魔法で飛行していない人間が三次元的戦闘を行うその姿はある意味芸術であった。

「（倒す、あれを？逃げる、あれから？どうやって……いや、あるにはあるが。まったく面倒なもんだよ）」

自身が得意とする必殺とも言える石化の高位魔法で援護する。しかし結果は目の前で元気に跳びはねる狙撃手の姿。最初こそ彼の腕を石化したりすることは出来たのだが……。トカゲの尻尾のごとくブツリとリアルに嫌な音を出し腕を切断。かと思えばニヨキニヨキ生えてくる。次には石化の魔法が効かなくなると言う状況、大戦時でさえなかなか見れないあまりの光景にアーウエルンクスはまだ慣れていないが仲間達はどうか。呪符使いに限っては口元をおさえ、黒髪の少年の時間が止まった。しかし剣士だけはキラキラと子供らしい瞳でまるでヒーローを見たかのようにしゃぐ。でもってより激しく斬り合う。どちらかという呪符使いはこちらの剣士のほうに引いていた様な気がする。

「余所見か、アーウエルンクス？」

「それだけはないね」

ガキイン！と互いが持つ得物のせめぎ合う音。方や数度も扱われ既に刃こぼれしてヒビが入ろうとしているガンブレード、方や魔力によりつくられし灰色の石剣。数撃後には狙撃手が持っているガンブレードがガキンと音を立てて崩れ去る。だが、それを好機と見て剣を振るえばどうか。砕け消え去る右の剣か、まだ扱える左の剣か。答えは簡単だろう。しかし狙撃手に限っては違う。砕けたはずの右手のガンブレードは”いつのまにか”新品のごとき輝くガンブレードを持ち再び襲ってくるのだ。

「レアスキル”投影”か、相変わらず卑怯な能力だね」

やれやれと言った感じで言うが、言葉が交わされる空間の間には死の剣撃が舞っていた。

「なあに、所詮殺す道具さ」

「違いない！」

「俺を忘れんなやあ！」

黒髪の少年がアーウエルンクスを援護する。撃ち合っている脇から出てきたかと思えば狙撃手は一気に後退する。一番これがいやらしいと彼らは思っていた。満足に撃ち合わず、しかし未熟な戦士が前に出ればどこからか取り出した鎖を用いてまで接近戦に固執する。現在、その空間は強力な人払いを張っており一般人が来ることは無い。しかし人が来ないだけであるため街を破壊すれば色々面倒なことになるのだ。魔法、あるいは別の神秘を使うものにとってよほど”頭が悪い”のでなければ干渉をしようとも思わない。故に強力な魔法を使うことは出来なかった。そして離れない前衛、下手をすれ

ば魔法で巻きこんでしまおうという。

「ウオオオオオ!!!」

「莫迦犬が、吠えるだけしか出来ないか」

ならば空間を隔離すればどうか？確かに出来る、そこならば現実の世界を傷付けることなく、最大攻撃力が売りの魔法使いの本領を發揮することが出来る。しかしアーウェルンクスが使うような『石』の魔法は魔力による威力ではなくどちらかといえば質量による純粋な破壊力を保有する。では狙撃手はどうだろうか？彼も同じである、質量と純粋なパワー、それも魔法という神秘の結果によるものではなく、確かに製造には魔力を消費するが、普通の人間でも知っているあらゆる兵器を用いることにある。それこそ一人で戦争という現状を作り出すことの出来る大量破壊の英雄『帝国の狙撃主』であるのだ。

「にとーれんげきざんがんけーん!!!」

「残像だ」

剣士と撃ち合っている狙撃手は現状では狙撃の言葉は思い浮かべることが出来ない。むしろ接近戦を主体とする剣士とも言えるだろう。影と金属を扱う攻撃の殆どが必殺の狙撃手。制限され、作戦のこともあり焦り始める彼女たち。その時点で勝負は見えていた。アーウェルンクスは今回の作戦の遂行完了のため、とあることを思い浮かべる。隠す必要は無いがただの逃走方法だ。

「(…彼らと似たようなことでやりたくはないけどね)」

「（俺から逃げるつもり、か。博打とはな、良い響きだ）」

いや、思い浮かべるといふ言葉は間違っており言うならば最初からその作戦は脳内にあった。しかし実行するか実行しないかの問題であったのだ。しょうがない、とアーウェルンクスはその作戦を口に出そうとする。しかし丁度吹き飛ばされ彼のすぐ側に弾き飛ばされた剣士、月詠がその作戦を口にした。

「フェイトはんと千草はんでお逃げやすう、後はウチらでなんとかしてますから」

「……わかった」

月詠は”二枚”のあらかじめ用意していた撤退用の遠距離転移符をアーウェルンクスと呪符使いに渡す。一枚は彼女自身の、もう一枚は黒髪の少年”犬上小太郎”の物であり、狙撃手にぶん殴られながらサムズアップしていた。勿論狙撃手は撤退などを許すワケがない影の槍を飛ばしながら肩に武器を背負った。その武器は直径70mm、全長953mm、重量7kg。戦争地帯にいれば必ず目をするメジャー兵器RPG-7。逃がすより一部街を破壊して妨害したほうがより良い、というわけである。

「やらせん!!」

「『小さき王、八つ足の蜥蜴、邪眼の主よ、時を奪う毒の吐息を石の息吹』」

これは決して狙撃手を石化させる目的では無い。やらないよりやったほうがマシの部類であるただの目眩ましである。同時にアーウェルンクスは障壁を全力で展開する。ここで温存しそのまま負けてし

まうより、全部使い切っても逃げのびること。そして”今夜”までに回復に力を注いだ方がいいだろう。

ダアアアーン!!!

「(やったか!?なんていうことは間違いなく無いとして……)」

携帯式対戦車擲弾発射筒の弾頭が爆発する。戦車をも破壊するその威力は目を見張るものであるが、高位魔導師の障壁を破る結果にはならなかった。しかし狙撃手が込めた魔力をエサに火力が極端に上がった威力を封じるために使われた魔力も極大である。夜まではなんとか回復するだろうか現時点における戦闘は不可能であろう。爆煙を巻き上げ戦場の視界を悪くする。しかしこれはアクマで一般論アーウエルンクスもどういう状況か”理解”しているし狙撃手にいたっては”見えて”いた。

「いかせんよ、死ぬまでは」

狙撃手は何を企んでいるかすぐにわかっていた。だが、ここでもうやく4対1と、街を破壊出来ないという現状の効果が現れる。前には剣士と闘士。前に出ようとしても倒すことよりも妨害に力を注ぐならば後ろから、故に彼は空中で狙撃体勢に入る。構えてからコンマ一秒ほど、弾丸が発射、加速、推進、脳天をぶち抜こうと回転する。だがそこには不運にも彼が最も苦手とする神鳴流の剣士がいたのだ。しかもその神鳴流剣士の中で天賦の能力を保有する月詠がいた。

「行かせませんえ〜」

シュー!カキーン……

抜けたような声であったが、彼女の”最後”の太刀筋は異常なものであった。火事場のなんとやらとでも言えればいいのだろう。しかし近距離という範囲での狙撃を彼女の刃が捉えることは最初は出来なかった。そう最初だけは。奇跡、否、それは『人を斬る』という外の道であったものの努力をした彼女の侮辱に当たる。ならばこそ、それはたった一度とはいえ必然言えたのかも知れない。

多重次元屈折現象

それは反則と言える業。彼の佐々木小次郎が放ったという”燕返し”なる技に具現した超常現象。この世界の魔法ですら届かぬ平行世界への可能性すら得ることの出来る大魔法である。その斬撃は「二つ」あった。それは”同時に見えるほど速い”わけでも本当は二刀持っていたというわけでもない。本当に”同時”に放たれた斬撃である。二撃目、彼の即死の弾丸を彼女の刃が弾いた。この光景にはさすがの狙撃手と言えど驚きを隠せなかった。転機、一瞬の隙が生まれた。それはもう隙とは呼べない僅かな隙間であたった。

「今や!!!」

何より狙撃手にとって痛手になったのは刃が弾丸を弾いた瞬間”人払い”の術を解除したことであった。故に微かな隙が少しだけ、マチユピチュの石壁のごとき隙間程度にこじ開けたのだ。フェイト・アーウエルンクスがそこを突くには容易いことである。二人は転移魔法陣を発動、一気に戦線から離脱、狙撃手が探知出来ないような場所まで撤退していったのだろう。未だに狙撃手が放ったRPG-7による爆煙は上がり、動き出した街では異様に目立つ。それはつまり、人が来るということだ。何より関わるのが善悪テオドラ関係なく”タブー”とされる一般ピーポーが。

「うふふ、上手くいきましたな」

「我目標喪失也つてか」

「へっ、まだまだだな。兄ちゃんも」

その場に残った剣士と闘士は軽口を叩く。しかし内心安堵の感情が一杯であった。それは遠距離に転移したアーウェルンクスも同じことであつた。偶然に偶然を重ねた、まさしく奇跡とも言える大博打。狙撃手が備える『幸運』を力でねじ伏せた瞬間とも言える。

そもそも最初から彼が黒髪の少年を殺していたら？

たとえ未熟な前衛と言えたが、一人から二人ではまったく違う。単純な1+1の計算ではないのだから。

彼が街のことを考えなかつたら？

これは有り得ないだろうが、彼がテオドラ以外に”最悪”であつた場合考えられた。最低限として行動するからこそ、余計に一般人との干渉を避けるからこそその結果。

彼がもう少し強力な兵器を使つたら？

街のこともあつたのだろう。彼は結局ガンブレードか比較的弱い射撃、そして無音の影魔法、そして体術のみであつた。スタングレネードなどの制圧兵器の使用の可能性は十分にある。お互い制限されたからこそ、アーウェルンクス達はボロボロになり、彼らが撤退することが出来たのだ。

最後の狙撃をふせぐことが出来なかったら？

これが決定的であつただろう。これにはアーウエルンクスも驚きを隠せなかった。最低でも弾丸を一発もらい負傷しての撤退が最高だと考えていたアーウエルンクスにとつて幸運極まりないことだつた。そんな偶然の偶然、狙撃手は「見事だ」と内心で正直に賞讃する。結果としては中心である二人を殺すことは出来なかったが……、片方の魔力をほとんど削りもう片方には焦りを埋めつけることが出来た。そして今この場に今にも倒れそうな二人。現状では行動続行の可能性すら疑うことが出来る。そもそも彼の仕事は”護衛”と”安全の保証”であり敵の抹殺ではない。

ザッザッザッザッ！

足跡と人々の疑問を表すのであろう声が聞こえ始めた。狙撃手は「だから嫌いだ」と愚痴をこぼす。集団でしか能力を發揮出来ない人間のくせに、好奇心だけは異常に高い。好奇心猫を殺すとは言ったものであるが”集団”の猫だつたらどうしようも無いだろう。シックスとしては大量虐殺になるためそれは止めておきたい事であつた。

「クカカ、アーウエルンクスに伝える、『今回は俺の負け』とな。次はその腐つた顔面に鉛をぶち込んでやるさ」

故に彼が、曲がり角の向こう側から今に詰め寄ろうとしている一般人のすぐ近くで殺すというリスクを負わなかつた。たとえ彼が英雄であろうとも、いや魔法世界の英雄だからこそこの日本の京都における揉め事は避けたい処であつたのだ。

「（何より次はテオドラと観光するのだ、立ち入り禁止にでもなつ

たら…）」

ズブズブと影に沈み込むながら 彼らの戦闘からは軽すぎるが
その惨事を見やる。なんとか動き小さな体で倒れた月詠を抱えて
走り去ろうとしている黒髪の少年。彼の頑丈さには目を見張るもの
があった。なによりまだネギ・スプリングフィールドと同じぐらい
の子供だから余計に映える。彼は戦う者に年齢のことは考えないが、
少年の将来に期待を寄せる。なによりテオドラ優秀な盾となること
を。

「The deep-sea fish loves you f
orever.」

彼こそ戦場という深海にたたずむ深海魚、その戦場（深海）しか生
きられない。何よりも深く暗く、誰よりも上を見上げ渴望した。だ
からこそ余計に恋しくなるのだろう、光の世界に。ただ彼にとって
それが誰も愛する彼女だということだけである。

「（今回は僕の負けだよ、狙撃手。やはり君はいい）」

最強と呼ばれた者達の戦闘の結果、最強の者達は互いに負けを認め
た。アーウエルンクスとしても二度とこんな大博打のような逃走劇
を送ることはないし
、することも出来ないだろう。

「 ああ、以上だ」

戦闘の報告を学園長のジジイにしたところで特に何かが変わったことは無い。なぜならばアーウェルンクスのこととはただ強い敵として伝えていないからな。俺としてもジジイに余計な介入をさせて報酬を減らされる口実は作りたくない。しないと祈りたいところだが可能性はある。既に1000万を”アレ”に振り込むことになっているのだ。ジジイなんて滅びればいいのに

「（回復速度は不明だが……、今夜に来ることは違いない）」

今夜は満月、あるいは満月に最も近い状態だったはずだ。夜の眷属である吸血鬼ほど効果が現れることは無いが、目標がこの京の地に眠る大鬼神だと仮定するとその可能性は益々高くなる。目測だが近衛木乃香嬢ほどの魔力を扱えば操れるだろう。召還されたら召還されたらで”食う”ことも出来るし、めっちゃデカイらしいのでただ的になりそうなんだが……。

「（日が落ちるまでおよそ半日、あいつら全員が行動するとしても……戦力の分散の可能性は低い。しかし足止めが必要だからな）」

召還者のすぐ近くでは砲撃魔法の餌食、ならば一端距離を置いた地点で妨害。しかしさすがに疲労はしているだろう。単騎の妨害は無ければ増援……式神か。呪符使いがいるのだから間違いあるまい。最後になるのだから出し惜しみはしないはずだ。だから一番の問題は鬼神がどこに封印されているのか、ということだが……。もう少し探知魔法とかの訓練をするべきだった。感覚での探知だから限界がある。飛驒の大鬼神とか言われている奴が封印されているのだから龍脈やらに沿っているのだろうが……。全然わかんねえ。

「（封印されていそうな場所……本拠地の真下とかありそうだな）」

これだけははずれてくれることを祈る。ターゲットがその真上に来ているのだから好機そのものだ。アーウェルンクスならば不完全でもあそここの結界を突破できるだろう。むしろ”今回”のアーウェルンクスはそれが専門のような気がする。詠春でもいきなり突破されいきなり襲われたら……微妙だな。突然結界を越えて襲撃、隙だらけになるだろう。

「や、師匠。相変わらず怖い顔だね」

「滅べ莫迦弟子」

桜咲と念話を通じないがどうでもいいか、今頃近衛嬢とイチャラブつてんだらうよ。それにあそこまでボコボコにしたんだから莫迦餓鬼達でもなんとかなるだらうし。結局戦人の俺が考えた処で何かが変わるわけでも確定するわけでもない。それに今回の戦闘で妙に神経を使ったからか若干疲れた。設計図も無いガラクタを速攻で作って速攻で消すとかいう無茶な投影のせいだろう、少々脳内の神経が焼き切れたかな、すぐに治ったけど。おお怖い怖い。

T o b e c o n t i n u e d

第二十二射 最強の敗北（後書き）

なんか色々言い訳して見逃した感がありますね。

というか雇気楼をまずは最初から書き直したい。いや書き直そう、これが終わったら。

第二十三射 時の引き金

ブルルルル……

「……んあ？あゝゝ、もひもひ？」

旅館のロビーにて携帯の着信音が広がる。その携帯の持ち主はシックス。眠たげなその目をこすりながら携帯を開く。彼と同じように麻帆良の生徒もいるのだが、ソファでふんぞりかえっている彼の姿を疑問に思わないのは何故だろうか。謎は深まるばかり、さすが麻帆良の生徒とでも言えはいいかもしれない。気が付いたら眠っていた、的は雰囲気醸し出すそのシックスの姿はかなり珍しいと思われる、そしてまったく関係ないがその風景を納めている写真、あるいは映像はマニアには高額に売れるだろう。

「わしじゃ！！お主は何をやっておるのじゃ！？」

うつせえうつせえ近所迷惑だ、とロビーにまで聞こえそうな学園長の言葉を戒める。何で怒っているのかサツパリ要領の掴めないシックスだったが、玄関から見える外の様子を見て納得したようだった。携帯を器用に頭と肩で押さえ、ポンツと右の拳で左の手を叩く。現在は夜、星々が煌めく闇の時間。そんな詩人みみたいな言葉を考えるシックスは密かに焦っていた。

「（やべえ寝てた）」

「こりゃ！聞いておるのか！？関西呪術協会の本拠地の結界が破られたのじゃぞ！？」

破られたことには自身は責任は無い、と思うシックス。何度も書くが彼の任務は”護衛”と3-Aの一般人の”安全保障”である。本拠地の結界が破られたのは本拠地の奴らの責任であり、それを自身に着せるなど呪怨を込めて呟く。確かにその通りである、現に学園長ですら本拠地の結界が破られるとは思わず、デマカセですぐにバシるだろうがシックスもまた「まさか破れられとは、遺憾の意である」と言えがいいのだ。総責任者である人が気づかず現場の人も気づかなかった。ならば悪いのは？

「結界を破られるとは、ご愁傷様」

「人ごとじゃないぞい！そもそも本拠地には生徒諸君も行ったという、護衛はどうしたのじゃ！？」

「なるほど、次はネギ・スプリングフィールド及び周辺の護衛人の失敗を俺に押しつけ、尚かつ自身から顔をツツコンだ一般人（仮）の安全を？そりゃ無理でござる。さすがに俺でも戦場の真ん中を歩く餓鬼を戦争から助けるなんて、わははははは」

シックスだって無茶苦茶なことを言っているとわかっているつもりだった。しかし学園長はこの言葉に黙ってしまう。契約の内容上確かに近衛木乃香の護衛と、『一般人』の安全は保証するように決められている。しかし本拠地にいる生徒はどうだろうか？確かに中には何も知らない一般人はいる、だからこそ学園長はシックスに責任を追究することも出来るのだが……、では彼女たちを連れて行ったのは誰だろうか？彼に責任を追究するということは、ネギ・スプリングフィールドにも責任を取らせないといけなくなるのだ。

「わかった、よくわかった！お主の責任については後々語らせて貰うとして速く現場へ急ぎ任務の続行を！後生じゃ！こちらもすぐ

に増援を送る！」

シックスは意外とも言える表情をした（らしい、なにしろ無表情なもんで）切羽詰まるのはしょうがないことだが、電話の向こう側からはゴンツと何かをたたき付ける音、そして後生という本来、上の立場であるはず学園長の願望。そこまでされたらさすがのシックスは断れない、そもそも契約上行くという行為が決定しているのが九割ほどであるのだが……。

「了解だ、学園長殿」

「へえ？」

ピツと向こう側で何か騒いでる学園長を無視して電話を切る。内心、増援とかどうやって送るんだよ莫迦ジジイ、と思う。麻帆良から京都まで、狭い日本と言えど速攻で送ることなんざ無理な話である。そこれこそグレートブリッジ奪還戦で行われた大規模転移魔法のようなものが無い限り。あれは帝国のの秘術のため外部の存在が知っているとは思えない。ならば個人転移か？と思うが転移魔法は相当難易度が高い。転移符を使うとしてもここまでの距離を行けるはずがないのだ。転移魔法を使う人間が麻帆良に……エヴァンジェリンぐらいしか思い浮かばなかったかやっぱり彼にとってどうでもいいことであつた。

「や、師匠。仕事のサボりかい？」

「シックス殿も行くでござるか？」

「強い奴と戦えるアルね！？」

電話を切った後、正面に居るのは彼の弟子『龍宮真名』と忍者『長瀬楓』、彼が言う中国『古菲』の三人だった。どうにも誰かが救助要請的ななにかでも送ったのだらう。面倒くさそうな顔をするシツクスはこれ以上厄介事を担うつもりは無かった、であるからして

「お前達はお留」「お断りするよ」……」

代表マナ選手の一言でぶった切られた。だが内心こいつらが負けるとも思っていないわけで仕方がなく、それはもう渋々と言った表情で許可をした。電話が鳴り響き数分後のことである。京都の街の空高く、魔法世界では知らぬ者はいない恐怖の龍が雲を切り裂いていた。

「クカカ、これが1600年前に打ち倒された飛驒の大鬼神というわけか」

でかい、思ったよりもでかい。でかすぎて逆に萎える。確かに大気を振るわすほどの威圧を持っている。が所詮クラシックモンスターだ。莫迦弟子一同を下ろした俺は、祭殿を含む湖を一望できる高台でその様子を見やっていた。視界の隅では群がる鬼共を俺がよこした二丁拳銃ケルベロスを使って片っ端から木っ端微塵にしていくマナ・アルカ……龍宮真名だったか。

ガチャーン！！

さらに語るならばマナの援護をするように拳を使う中国。いやコイ

ツ強いんだけど。なんで中学生がこのレベルに達っしてるの？才能なんてレベルじゃないな。なにかバグでも起きたのか……莫迦^{ナキ}や莫^ラ迦のほうはまだバグだが…、将来に不安を感じる。忍者のほうはあの黒髪の闘士やらとニヤンニヤンしている。あの忍者もなかなか強いな。……おいなんだこの生徒共は。

（おい狙撃手！私の得物も残しておくんだな！）

（デカイ奴と小さい奴がいるが？）

（デカイ奴だ！）

了解了解つと。増援っていうのもやっぱりエヴァンジェリンだった。呪いやらなんやらはどうにかするらしい。出来るなら最初からなんとかしとけよ、そもそも3年の約束だったんだろが。俺が気にしてもしょうがないことだけだな。ま、あの莫迦ババアはどうやら相当気合いの入っている様子。俺としてもただの的よりも、アーウエルリンクスをぶち抜いた方が楽しいと思う。

「鳴らせ撃鉄、回せ歯車、流れよ我が概念」

ガチャンとバレットM82に弾丸を装填する。影ながら取り出したそれは徹底的に速度と貫通力を強化したせい化け物に……。まさか射程内が10倍ほど長くなるとは思いもしなかった。対物ライフルのくせに貫通力が高すぎて無駄な破壊をしないという芸術品だ。

「銃口を天に向け、我が身を焦点に」

魔力を銃に施した術式に流し込む。一つ一つ起動する様子がわかる。精密回路のごとく細やかでありながら、嵐に揺れる大海のごとくそ

れはもう大きくうねる魔力光。大気を震動させ、そして大気を制圧する。

「進めよ鉄塊、砕けよ脳髓を」

スコープ越しに見えるその世界は外の世界と切り離される。視覚以外の五感を全て閉ざし狙うは敵。まるで世界が一コマごとに見る道楽アニメのようにゆっくり、ゆっくりと時間を進ませる。向こうに見える世界はただ一つ。今その時、ネギ・スプリングフィールドを殴ろうとしているアーウエルンクスの腕、好機? ……いやまだだ。

「我こそ狙撃手、敵を討ち滅ぼせ愚かな深海魚」

アーウエルンクスの腕が捕まれる。ネギ・スプリングフィールドが掴んだのではない。彼らの足下には影の沼、エヴァンジェリンが転移して来たようだ。彼女の手がアーウエルンクスの攻撃を妨害する。同時にずるりと身を乗り出す闇の魔王。遙か遠いここでもわかるほどの魔力量、これが『不死王』か。素晴らしい存在だ。

彼女がこちらを見て、ニヤリと笑ったのは気のせいだろうか

「貫け運命、灰色の魔弾『時の引き金』」
クロノ・トリガー

弾丸は音を飛び越え無音

ネギ・スプリングフィールドは驚愕した。彼女『エヴァンジェリン・

A・K・マクダウエル』にはではない。確かに彼女” 闇の福音” の出現には多少驚いたものの、今の驚愕はそれによるものではないのだ。彼は遅延魔法という珍しい魔法を駆使し、最強の一角フェイト・アーウエルンクスに拳を一発浴びせた、そこは賞讃に価するだろう。そしてその後の出来事だった。アーウエルンクスが憤怒の感情を表しネギを殴ろうとする、が……

「（影を利用した転移魔法!?!）」

何者かが妨害する。アーウエルンクスもまた驚愕した。その未熟な子供に攻撃を入れられたのもある。帝国の英雄である狙撃手一人でもこっちは大変だというのに最強の幻想種『真祖の吸血鬼』エヴアンジェリンすらやって来たというのもある。しかし、彼らが驚いたのはやはりそれではない。

「ぼーやが世話になったな、若造」

15年振りの外、しかも自身が好む京都という場所のせいもあって彼女はすこぶるご機嫌である。彼女にとって先程のネギ・スプリングフィールドを護るといふ行為はただの気まぐれであり、このご機嫌のせいもあつた。彼女にとって憎む相手でもある馬鹿の息子でもある彼を護るほどのご機嫌の良さがそこに現れた。

カアン!!

突然、まるで磁器の置物が砕かれ崩壊するかのように彼、アーウエルンクスが崩れ始めたのだ。この光景にはも動じることのないエヴアンジェリンは不敵に笑うだけだった。普通の生き物ならば、頭吹

き飛んだとき血肉も飛び散るはずである。狙撃手が使った弾丸は無駄な破壊をせず、つまるところ頭が吹き飛ぶという結果にはならないのだが、頭に穴が空くのではなく”崩れ落ちる”とは如何なものだろうか。

「……………」

アーウエルンクスは湖にバラバラになりながら崩れ落ちる。そのとき、ヒビの入った眼球がしっかりと狙撃手を睨み付けていた。視線が建物のあいだをくぐり抜け、木々の奥を見通し、発見。親指を下に突きつけている狙撃手が口を開く。

「『あ』『ば』『よ』『さ』『ん』『ば』『ん』『め』」

視界が水に埋まる前、狙撃手の口がこう動いていた。湖のバシャバシャと彼の”部品”をぶちまける。たった数秒、下手をしたら1秒も経っていなかったであろうその時間の間。しかし瞬間の出来事は誰も忘れることは出来ないだろう。

（ク、そらエヴァンジェリン、とつとつ”アレ”を食わねば俺が喰うぞ？）

（見事だ狙撃手。今度は私の番、というわけだな、ククク）

エヴァンジェリンとシックスはお互いに悪そうな笑みを浮かべる。周りの人間達は時間がまだ止まっているようだった。無理も無いだろう、突然”闇の福音”が来訪したかと思っただら…今度は本拠地の結界を破ったアーウエルンクスが崩れ落ちる。当事者でなければ支離滅裂な出来事に思えるだろう。

「マスター、結界弾セットアップ」

(やれ)

そしてエヴァンジェリンの従者が弾丸を放った。単独で戦う狙撃手とは違う『援護』の意味を含めた封印弾である。例え巨大なリヨウメンスクナカミであろうともその結界に封じ込められた、しかしさすがその巨体、結界はせいぜい10秒ほどしか持たないらしい。その報告を従者から受けたエヴァンジェリンは、十分だ、と高笑いを始め、そして唱えた。必殺の絶対零度魔法を。

見えるのは砕け散る古の大鬼神

ヒュー

やるねえ、さすがエヴァンジェリンだ。広範囲殲滅呪文の一つ、氷属性の最高峰『おわるせかい』、しかもそれを一定範囲内に納めるきるといふ荒技をやつてのけるとは。俺でも絶対零度だと行動不可能だからな。怒らせないように気をつけよう。

(おい狙撃手！聞こえるか！さつさと返事をしろ！?)

(なんだエヴァンジェリン、俺は帰る処なんだが…)

敵をぶち殺したのに何で慌ててんのか。俺もアーウエルクスを貫いたからご満足であるため、今ならテオドラ関連以外のお願ひも少しだけ聞いてあげたいところだ。……ふむ、何でも莫迦餓鬼が石化を喰らったらしい。俺にどうしろと言うのだ。俺の管轄外、それは

契約のこともあるし治療の魔法の話でもある。

（お前さんと同じさ、覚える必要の無いもんは覚えん。そもそも影以外の適性が無い）

（ななななな）

（なんだ惚れたか？）

（黙れッ！）

ブツンと念話が切られる。なんだ凶星なのか、しょうがない奴め。まったく莫迦餓鬼はあの莫迦^{ナギ}と同じように無節操にフラグを立てるとは。良い船エンドでも希望する気か？しかしあの莫迦^{ナギ}は何故か女性陣の間で「じゃあ分け合おう」という結論に至るといふ謎の展開を構築、まあ最後はアリカ殿下が勝ち取ったのだが。息子はどういふ道を辿るか……、どこをどうバグったらそうなるか是非知りたい。そうしたらテオドラ三人分ぐらいのフラグタワーを建築するといふのに。……………む。

パンン！！

「やれやれ、あの絶対零度から逃げるとは」

また肉片になった人間の死体が出来てしまった。お掃除は微生物にまかせることにしよう。見つかったても変死体ですね、わかります。ま、一応詠春に連絡……しなくてもいいか面倒くさい。などと考えていると、祭殿の辺りが光っていた。誰かが治療しているのか……？ おお、接吻しているぞ！0歳の餓鬼と女子中学生が、これは仮契約か。これはターゲットの護衛の範囲内に納めるべきだったか……、

今なら撃ち殺しても問題無いような気がする。詠春ならばむしろ推奨する気がするしな。

(おい、絶対にやめる)

何かを感じ取ったのかエヴァンジェリンが莫迦餓鬼の前に立つ。しかし周りの生徒共から見れば奇怪極まりの行動である。さすが幼女、考えることが違うな。というか俺の空気をそこから感じとるといっね、なんだこいつら。3-Aの連中は化け物か!?間違っても相手にしたくない連中だ、面倒だから。

「お疲れ様師匠、このケルベロス使わせて貰ったよ」

「ああ見てた。それを使えるようになったか…しかし及第点だなマナ、狙撃手たるもの「常に腰抜けであれ、かい?」……」

ああ、よくわかってるじゃないか莫迦弟子。後ろから撃つだけだろうが前にでてガン!!カタしようが関係無く怪我をするとは情けない。まったく情けないなあ!

「おや、ここにいたでござるかシックス殿」

忍者も現れたが俺にどうしろと言うのか。なんで集まる?お前等はトイレに友人を誘う女子中学生……女子中学生だった。というかね、こいつ自分が忍者って処隠す気ないでしょ全然。いや普通の忍者でも「ござる」とか言わないけどね。

「シックス殿がまさかマナの師匠とは驚いたでござる、一つ拙者と手合わせを……」

「寝言は寝ていえ」

戦争屋に手合わせとか無茶言わないで欲しい。俺使うの主に銃器だからね、わかる？手加減なんてしにくいんだよ。わざわざ餓鬼との手合わせに鎮圧用の衝撃弾なんか使いたくないもの。普通の弾丸と違って投影にもう一工程かけるから。ただでさえ多用するんだから。

「あいやー、みんな速いアル」

「お前達もとつとと帰れ、俺は先に帰る」

ズブズブと転移魔法を発動する。ああ影に沈み込むってなんでこう、気持ちいいのか。そしてなんか中国人が「また走るアルか!？」とか言っような気がする。若人よ、しっかりと走るが良いさ。

T o b e c o n t i n u e d

第二十三射 時の引き金（後書き）

脳汁が湧いて固有結界みたいな呪文が出来ちゃった

『時の引き金』クロノ・トリガー

ようは世界が遅く感じるほど集中して行う狙撃。

イメージソングはカル

英霊として召還されたとき、過去現在未来あらゆる可能性を
撃ち抜く超絶技巧になる、多分。

マナ あいのうた（前書き）

温めたネタもあり、小話が見たいという方もいたようだし、邪神に洗脳されたお友達もいるみたいなので。

マナ あいのうた

「なんだ莫迦少女？」

私と彼が出会った場所も時期も、何より第一印象も最悪だっただろう。何しろ場所は紛争地域、それも戦争まった中という時期だった。弾丸が飛びかよい死肉まき散らす硝煙の世界だった。私が従者として、主がそういう場所で活動する、とあるNGO団体に所属する魔法使いだっただからしょうがないことでもあったが。

「ハツハア、NGOねえ。しかもそれで『立派な魔法使い』に？そりゃ立派なこと、せいぜい戦争屋の後始末として頑張ってくれたまえ」

私の主、コウキは質問した。所属等を聞いたのだが、まず基本として先に私達のことを話す。しかし返ってきた言葉はこのような物、勿論コウキがその人物に怒る。何しろ目の前の存在は自分達の、特にコウキの正義という存在価値を否定し笑ったからである。客観的に見ると私のことを莫迦少女と言ったのが半分以上かもしれない。だが。私はそんな目の前の存在に銃口を突きつけたままだった、そもそもその男（声からの推量なのだが）はこんな日が強いアフリカの砂漠地帯だと言うのに、自分から魔法使いですよ？と言わなければ、あの白いフードローブだった。いや日差しをふせぐならわかるが、魔法使いなら障壁があるし……。そのローブの背中側に金字で刺繍されているマークをどこかで見たとあるような気がする。敵という可能性は十分にあった、むしろ敵であってほしい。

「まあいい、さ……俺にはまったくこれっぽっちも関係……む」

パン！と銃声が響く。魔法使いっぽい相手が使うのは私と同じように、珍しく銃器だった。だが今はそれどころじゃない。コウキはその”惨状”を作った目の前の男に詰め寄る。彼が放った弾丸は私たちが負っていた魔法犯罪組織の一員に直撃した、その人物は過去の存在と成り果てていた。私は驚くことしか出来なかった、なにしろ彼は”こつちを見ていて私たちと話していた”からだ、銃口だけ右を向け”躊躇無く”引き金を引いたのだ。そして放たれた弾丸は敵の上半身を喰らった。銃の威力はもちろんそれを抑える腕、敵の察知の速さ、そしてその精度。どれもが私と同じ銃器使いとは思えない、まさしく魔法のようなものだった。

「ああん？こつちはわざわざ魔法界からちよつかいかけてきた莫迦の抹殺命令を受けてんの、生死とかどうでもいいし」

コウキだってあの連合が作った奇妙な『正義の魔法使い』のようなことをするわけではない。ただ純粹に救いたいから救っていったのだ。『立派な魔法使い』として。だからこそ彼は最低でも話し合いを行いたかった。だが目の前の存在は、一体”何”だ？殺すという行為に何も感じていないのか？警告も無しに、敵を撃ち抜いた？

「ああそう、俺には関係無いことだ……お前達はお前達の道を往け」

怖かった、彼の目が。フードの奥から見える戦場でも映したかのような真つ赤な目が怖かった。そしてその目が私たちを、コウキをまるで道ばたに置いてある石ころのように見る目が。私はこのとき直感した、私は彼を絶対に好きになることはないだろう、と。……ま、まあ恥ずかしい限りだがそれは間違っことになるのだが。

「……何？」

振り返り金の紋様を揺らしながら帰ろうとする男に「待て」とコウキが声を上げる。放っておけばいいと思うのだが、それが出来ないという彼の性格をよく知っているわけで。私はとにかくコウキをいつでも守れるようにすればいいだけだ。そういえば、やはりこの金の模様をどこかで見たことが……

「ああ立派なことだ、俺にはととてもとても、何しろ深海魚なもんで」

彼の言葉にはコウキどころか私すらもポカンとしてしまった。深海魚という言葉がただの比喩ならば、たとしても比喩の向こう側の意味がまったくわからない。では事実だとしたら？魔法使いがいるんだ、亜人がいる。ならば深海に関する亜人？砂漠に？水中生物では無いが、深海にすむ亜人が砂漠にはちよつと……、そんな頭をひねる私たちに気付いたのか、彼は答えを教えてくれた。その時の彼の真っ赤な目はまるで「小さな子供が迷子になってしまい、そして泣きじゃくった後の目」のようだった。

「戦場という深海でしか生きられない、ってことだマガステル」

その言葉にハツとなる。コウキも気付いたのだろう目の前の存在が、どどういう環境にいたのか。彼は甘さや『立派』や『正義』がまったく通用しない場所に生きているのだと。だとすれば、私たちが彼に言う言葉は、結局彼にとって「持つてる故の悩み」みたいな舐めたようなものであるのだから。

「せいぜいもがけ、或いは届くやもしれん」

「ふふふふふ、ああ久しぶりだ」

「マナ、ご機嫌アルな！」

そこは戦場だった。人と人が争うような戦では無いが……褐色肌の腰まで届きそうな黒髪の少女とチャイナドレスを着込んだまんま中国人が背中を合わせる。そんな彼女たちの周りには映画やマンガでしか出てこないような変な集団。角が生えていたり一つ目だったり、はたまた狐のような尻尾や耳を持っていたり、鴉のような羽が背中にあるなど……。ところがどっこい、これは現実……………！

「ご機嫌になるしかないさ、何しろ師匠と同じ戦場にいるんだ」

ウフフフ、と笑う褐色の龍宮真名が笑う。可憐な少女そのものの笑い声だったが手に持つのは鉄塊。それも敵を殺すという明確な使命を持った兵器”銃”であり、その銃の中でも使い手がただの人間以外、という極めて阿呆らしい銃器『ケルベロス』だった。両手に持っているそれは銃身に赤と白の十字架が施され、その巨大差は普通の拳銃とは違う。

「ななな、なんで龍宮さんが！？っていうか銃！？」

彼女たちがそこに降り立つ前から戦い続けていたツインテールとポニーテール（サイドテールとも言つ）の少女。そして言葉を出したのはツインテールの少女だった。

「図にのなるよ小娘共……………」

しかしその疑問に答える前にマナ達を取り囲む人外達。楽しそうな声を上げる中国人の少女だったが、マナのほうはフウッと鼻で笑い、ガチャンとハンマーコックを倒す。彼女の脳内にあるのはただ一つ、彼女の師からの言葉だけだった。

「おお、怖い怖い。なにしろ私は腰抜けだからねえ」

彼女のそんな言葉を人外共は聞くことは無かった。なにしろ彼らは既に首から上が存在していなかったからである。剣を振るう鴉の羽が生えた人外も、その剣ごと撃ち滅ぼされていく。巨大な体躯に筋肉の鎧を被った鬼達も為す術なく無限かと思われる弾丸に滅せられていった。まさしく隕石のごとき鉄の雨、必殺の弾丸が空中を駆けめぐった。

「（腰抜け！？）」

「（マナがよく言う口癖なんです！）」

どこが？と素直な疑問を口にするツインテールの少女に対してマナが返した言葉はごく単純明快だった。見る見る滅っていく人外共を背中にガチャンと銃器を鳴らすマナの姿は、それはもう美しかった。そうで、ツインテールの少女『神楽坂明日菜』はその姿をどこかで見たことがあるような気がした。

「何故？それは私が『狙撃手』で『狙撃主』の弟子だから、だよ」

「（狙撃手の弟子？シックスさんのことかな？）」

守り、という言葉を否定するその必殺の弾丸が戦場を舞う。狙撃主

から授かった誇りと狙撃手たる信念。そして何よりも越えたい存在であり、いつか背中をまかせてくれることを願う彼の言葉。彼女は腰抜けの意味をよく知っている。確かに彼女は師は何よりも腰抜けだった。それはもう…

「私のリロードはエボリューションだ！」

地獄の番犬が吠える。その咆哮はまさしく地獄へ誘う死を体現していたのであろう。

そうだ、私は彼の弟子になった。それまで私は彼のことが嫌い嫌い、……とにかく何よりも嫌いだった。下手をすれば親の仇レベルだったかもしれない。戦場で渡り歩くという行為のせいか彼と出会うことはよくあった。そして彼の背中の刺繍のことも思い出したものだ。驚いたよ、とても。何しろ彼は紛れもない”英雄”だったから。

「なんだ莫迦幼女？」

いつぞやと同じその言葉、しかし”今”は私にとって何よりもそれが救いだった。私はただ泣いていた。隣にいるのが憎い彼ということとを忘れて。今考えると私はそこまで彼のことを嫌いでは無かったのかもしれない。彼の言葉は全て正しく、何よりも眩しかったから気付かなかっただけかもしれない。

「……見るマナ・アルカナ。これが『立派な魔法使い』の結末だ」

これは後になって気付いたことだったが、始めて彼が私の名前を呼んでくれた出来事でもあった。出来事？あぁ、私の主、コウキが死んだんだ。それも彼が話し合おうとしていた途中にいきなり襲われて。覚悟はしていたつもりだった、こういう世界で生き私も人を殺したこともある。だが、思ってしまった。私が殺した相手も、こっやって泣いてくれる相手がいたのかもしれない、と。

「英雄も、正義も、悪も、死ねばただの肉塊だ」

帝国の大英雄『ダブル・シックス』それが私たちの目の前の存在だった。狙撃の代名詞、帝国の守護神。テオドラ第三皇女の護衛。調べれば調べるほどわんさか彼の詳細が出てくる。彼が『正義の魔法使い』の対極にいるということも。故に彼に対する意見も対極、それは今葬式にきている”僅か”な同僚達の様子からでもわかった。帝国では『偉大なる狙撃』、連合では『最低最悪の化け物』と

「ならば、何故お前達はそれに殉じて死ぬのか、俺にはわからんよ。まあそれが”人間”というものであるのだろうか……」

疑問に思った。人間という言葉に違和感を覚えたから。まるで彼が自身のことを人間ではない、とでも言うかのように。その疑問は現在でも解決することは無い。ただ、彼の弟子となり連れ回された時、テオドラ第三皇女がいつか教えてくれるという言葉を買った。まだ私は彼の側に立つことを許されならしい。いつか、その日が来るまで私は師匠と同じように”歌う”だけだ。

「私を、弟子に、ヒッグ、して…下さい！」

泣きながら彼の真っ赤な目を見た。やはりいつぞやと同じ真っ赤な

目。フードの影に浮かぶ血の湖。しかし映していたのは戦場でもなく血肉の赤でもなかった。まるで夕日のような、暖かさを抱いた母の腕の中のような。とても恥ずかしい限りだ、こういう感想を持つなんて。テオドラ様には目を見開いて驚かれたがね。「妾以外に見せる…じゃと…!?」なんか顔がすごかった。具体的に言っていると毎週腕が増える化け物と戦う主人公みたいなの…。

「貴様はこれから狙撃手となる、なによりも腰抜けの狙撃手に、な」
わかったか莫迦弟子、とやはり私の名前を呼んでくれなかった。まあその分時々呼んでくれる名前がとても嬉しいものになっているのだが。スナイプ・オブ・インペリアル。ただの英雄でありながら皇帝の名を持つ大英雄。座右の銘は”テオドラ命”だそうだ、非常に悔しい。けど最近反応が良い感じになつてるような気がする。連合ではすこぶる嫌われている、まあそれも連合の一部なんだけども、英雄、それはもう我が儘な英雄だった。

「I'm a thinker. I could break it
t down」.

「I'm a shooter. A drastic baby」.

何よりもテオドラ様テオドラ様、あのダーク・エヴァンジェリンが掲げた『誇りある悪』も連合のジジイどもが言う『正義の魔法使い』も、彼にとってはただの違う考え方。時には危険に見えるテオドラ道を真つ直ぐ進んでいる師匠だけど、いつかマナ・アルカナ道を進ませて…ゲフンゲフン。

「なんでお前が…」

「そりゃ師匠いつも歌っているからね、弟子としては覚えな」と

その英語の歌は文法もわけのわからない典型的なよくある歌だった。歌詞が歪で悲しいこと以外は。日本語でその意味を言うのは難しいが……理解できる、歌の意味を。その歌こそ師匠の全部だと思ってしまうほどの、私には彼を表していると思ってしまった。戦場を歩くととき、引き金を引くとき、彼はいつもその歌と共にあった。私は歌う、師匠が歌うのと同じように、しかし意味はまったく異なるラブルング。私は彼を、彼は弾丸と彼女をただ想う。

「Sound of jet, They played for
out……」

私は思想家、壊すことしか出来ない愚か者

俺は思想家、壊すことしか出来ぬ愚か者

私は狙撃手、ただ敵を撃ち抜くだけ

俺は狙撃手、敵を滅ぼし進もう前に

心乱れ、向こう側に飛び越えようが

例え心が乱れようが、向こうまで滅ぼして

ただ私は思うのみ

貴方のためを想い

そう、私とともに戦場を

戦場を渡り歩く俺は深海に

私は深く潜る者、いつまでも貴方を愛している

俺は深海魚、いつまでも貴方を愛している

私の想いは何よりも貴方へ

俺の想いは貴方が全て

誰かが待っていていようとも、貴方の側に

誰かが待っていていようとも、貴方の側に

銃声を鳴らそう、貴方のために

ジェット音響き、やがて戦場へと渡ろう

「ねえ莫迦師匠……」

「なんだ莫迦弟子」

「……なんでもないさ」

「撃つぞ」

まったく師匠には落ち着きだとか、そういう言葉は消えてしまっているのか。ロマンとか色々欠如してしまっているね。まったくいっ
になったら……気付いてくれるんだろうね？いや、もしかしたら師
匠気付いていてワザとそうなのか……。まあ、諦めたりはせんよ、勝
つまでは。

T o b e c o n t i n u e d

マナ あいのうた（後書き）

帝国直々お仕事用白フード金字帝国紋様付きローブ。

値段、プライスレス＋テオドラへの愛

マナ人気すぎワロタwww

そしていつのまにかマナさんパネエ状態に。

第二十四射 巫女巫女カーニバル

あれから1日、というかその日の夜が明けた。フェイト・アーウェルンクスに即死級の一撃を放ち見事撃沈、その結果として狙撃手『シックス』はすこぶるご機嫌でもあった。例え狙撃手との戦闘を経て、戦闘力が著しく低下していた今回の敵一派だったが、式神が誇る大多数かつ強力という面を全面に押しだし、そして狙撃手と戦闘をした故一回り成長した彼らに、ネギ・スプリングフィールドとその仲間達は苦戦を仕入れられた。しかし、手負いは手負いであり、そこに狙撃手の弟子『龍宮真名』をはじめとする3-A武闘派衆が増援、彼女達だけでも過剰戦力とも言えたかもしれない。しかし更に最強の魔法使いエヴァンジェリンが乱入、唯一戦えると言っているフェイト・アーウェルンクスは狙撃手により退場。つまるところ負ける処がまったく無かったとも言えた。

「やあ、皆さん。よく休めましたか？」

スーツを着込んだ少し老けめの男性が声をかける。その男性は、かつて『紅き翼』のメンバーの一人として戦場でリアル無双戦士を實現した最強の剣士『近衛詠春』という。狙撃手が最も苦手とする一人である。理由は言うまでもないが、音速級の弾丸を察知して叩ききるという行為をするためである。遠距離、しかも実弾狙撃という限られた範囲ではすこぶる相性が悪い彼と狙撃手だったが、おもいのほか仲が良かった。その理由は……まあ言うまでもないだろう。

「狙撃手は来ておらんぞ」

彼が声をかけた少女達の周りをキョロキョロと見回した詠春。それに対して、京都を満喫しているエヴァンジェリンが何が目的かをし

つかりと理解して答えた。彼は『近衛木乃香』の父でありその護衛『桜咲刹那』から彼の存在を聞いていた。結婚式にも一応招待したのだが、返ってきたのは手紙一枚と祝いのつもりだろう物品一つ。手紙には二行に一つ”テオドラ”という言葉が入るし、その送られた物品は高級近藤さん（大切な家族計画）だった。結構感謝した。

「そつえば長と知り合いましたよね、どういふ関係なんですか？」

残念そうにしている詠春に桜咲が聞いた。というのも、シックスは神鳴流のことを詳しく知っているし（情報戦のつもりだろう）剣士が相手では何事かと『詠春』と比較していたからだ。結構深い、敵が仲間かよくわからないがそれなりの仲だということはわかっていた。詠春は「後でわかります」と短く答え、彼女達の、否、ネギ・スプリングフィールドの目的である彼の父の、『紅き翼』の別荘へと案内した。話を知っているオコジョとしては教えてもいいのだが、自分がわざわざ言うことでも無いし何より詠春が説明するようなので大人しく黙っていることにした。

「あの？長さん、小太郎君や、あのお猿の人は？」

お猿？という疑問を頭に浮かべながら、詠春はネギ・スプリングフィールドの疑問に答えた。

「それほど重くはならないでしょうが…それなりの処罰があると思います。お猿……ああ、天々崎千草のことですか？彼女は………」

「死んだぞ」

口ごもった詠春に繋げるように答えたのはエヴァンジェリンだった。ネギにとって予想外の結末だった。詠春は内心エヴァンジェリンに

感謝する。どうして？というネギの疑問に答えたのも同じくエヴァンジェリン。彼女は”狙撃手”の名前を出さずにただ死んだ、としか言わなかった。彼の使い魔であるオコジヨはある程度予想、狙撃手が射殺したという予感については、黙ってみていることにする。わざわざ主を不安にさせたくはなかったからだ。何よりも狙撃手が冷酷であることを一ファンとして知っていた。

「そんなことよりも、問題はあの白髪の餓鬼だ。狙撃手が撃退したが……あれはゴーレムなどと言ったほうが正しい存在だったぞ」

詠春はフェイト・アーウェルンクスについてエヴァンジェリンに”嘘”の報告をする。あの白髪が本当に”アーウェルンクス”ならば、それは自分達『紅き翼』が対処せざるを得ないからだ。エヴァンジェリンはその嘘の報告には特に興味も無かったようで、鼻で笑い別荘へと足を向けた。

「すごい、本がたくさん」

虫みたいな触角のアホ毛を持つ少女が素直に驚嘆する。その少女はある意味本好きのためこういう場所が好きなのようだ。もともと彼女が”ここ”にいるというのは場違いでもある。それは彼女だけでは無いのだが……

「ここに、父さんの……」

ラピタを発見した某息子のごとく感動するネギ・スプリングフィールド。天井まで奥抜け、三階建ての別荘は日光が燦々と振り、白く明るく過ごしやすい場所と言えるだろう。”部外者”である少女達が本をあさくっているのを横目に、ネギは詠春に彼の父のことを聞く。詠春は、もとより話す気だったため、彼の関係者を集めた。

「この写真は……？」

詠春が見せたの一枚の古ぼけた写真。その写真には六人の人物が写っていた。サウザントマスターと、その戦友達である。正面にナギ、その左前にはゼクト。ナギの右後ろにはアルビレオ、左後ろのは詠春。の真後ろには褐色の大男ラカンが映っており、詠春の後ろには真横を向いた渋いおっさんのガトウ。20年前の写真のため詠春が今までにないくらい若く映っている。その場に狙撃手がいたのなら、適当におちよくっていただろう。

「こつちのは何ですか？」

「ああ、それですか」

戦友達の写真の横にある何か。同じサイズの写真立てっぽい奴だが、上から布が被さってその正体は見えない。詠春は「これも同じく、戦友であり宿敵で、そして大切な友の写真ですよ」と懐かしむような表情でその布をとった。

「わあ、かわいいなあこの子」

同じく古ぼけた写真。違うのは映っている人物はたったの二人。男と少女だ。少女はその男にもたれかけ、見るものを魅了する満面の笑みを浮かべていて、男のほうは無表情に、その真つ赤な目をこちらへと向けていた。シックスとテオドラである。角が生えているが、特にそういうもんだろ、と慣れきった生徒達だったが、一番驚いたのは後ろに映る男についてだった。

「彼女は魔法界のヘラス帝国第三皇女テオドラ、そして後ろの彼は

彼女の護衛であり帝国最強の大英雄『ダブル・シックス』です、彼らは私たち『紅き翼』の協力者でした、まあそれ以前はその男とよく、その……殺し合った仲ですが」

「よく見ておけよ貴様達、生きる伝説がそこにいるのだからな」

あはははは、と結構重いことを誤魔化す詠春と、まあ私もだがな！ わははは、と高笑いをするエヴァンジェリンだったが彼女たちは特に気にしなかった。というのも、その写真にはお姫様が写っていて、今回の修学旅行に護衛としてやってきた彼がその護衛で、しかも帝国とか魔法界とかいう話が出てきて、さらに『紅き翼』に所属していた彼が胸を張って大英雄と言つてのける人物だということに口がふさがらなかつたせいでもあった。

「シックスの旦那は有名だぜ兄貴、旦那に対する意見が真つ二つだったり、なにより旦那はそのお姫様のためしか動かない鉄壁だからなあ」

真つ二つ？という疑問を口に出したのは桜咲刹那だった。『紅き翼』と並ぶ英雄であるのに意見が真つ二つというのはどういったものか、答えは簡単だった。彼は正義でも悪でも無く、ただ一人のために戦う。ただそれだけだった。

「私は彼のあり方は素晴らしいと思っています、しかし実際実行出来るかどうか……だからこそ彼は誰よりも強いのでしょう」

オコジョもうんうんと唸る。それを見ていたツインテールの少女神楽坂明日菜は彼らが映る写真を手にとってじっくりねっぷりと見た。彼女は何故か、後ろの男が懐かしく感じたからだった。修学旅行で見たスーツの彼よりも、龍宮真名彼氏疑惑の時の彼よりも、懐かし

くそして……

「なんでこの人がこんなにムカツクのかしら？」

「生理的嫌悪って奴だろ？神楽坂明日菜、そいつは相手が子供だろうが大人だろうが正義悪関係無く、そのお姫様に仇なす存在ならば軽く引き金を引く男だからな」

周りの少女達は驚愕する。詠春の顔を見ても、それが事実だと、そう言っているのがわかっていた。つまるところ、彼、シックスは殺すのだ人。それが子供だろうが関係無く。ネギ・スプリングフィールドは理解出来なかった。なぜ、なぜこんな人間か自分の父と同じ英雄と呼ばれる存在なのかと。彼には”人間の心”が無いのか、ただ疑問としてそう思った。だが、その疑問には詠春は答えなかった。その場の空気は重苦しくのっかかる。

「……そうでもしなければな、守れなかったんだよ餓鬼共」

だが、そこでエヴァンジェリンが言った言葉で流れが変わった。

「ええ、彼女はまあ、じゃじゃ馬と呼ばれてましたが、いえだからこそ帝国民には人気で。さらに英雄シックスが護衛として側にいるという事で」

「継承者争いということですか？」

エヴァンジェリンの従者が口を開いた。エヴァンジェリンも詠春も首を縦に振って肯定する。テオドラとしては、継承者としての格を上げるつもりは無かったが、彼女を持ち上げてくる存在はいるものだった。それは彼女が公の場にて宣言したとしても、なりは潜める

がそれは続く。まあ、彼女に媚を売って『その後』のことを考えていたのだろう。

「ドロドロだったそうだが、決定的だったのが狙撃手が連合に嫌われているという点だ。実に幸いだったな」

彼を率いるテオドラが上につけば勿論連合とは色々厄介なことになるのである。お偉い人たち自分の命大事なのか、それともただ平和を噛みしめたいのか、結局テオドラ継承争いは有耶無耶なまま自然消滅した。いつの世だって、人は上を目指すものである。それはシックスでも否定はせずむしろ肯定の意を出した。もつともシックスは「ああそう？じゃさよなら」と、上を目指す故の壁と自ら成り、そして俗に言う汚れ仕事を自身が引き受けたのだ。ぶっちゃけそういう面もあり帝国内でも狙撃主の名はいよいよ広まることになるのだが…。

「ぼーや、これが覚悟だ。お前が父の後を追おうが悪の魔法使いになろうが……必要なことだ」

説教する気はなかったのだがな、面倒だから。とエヴァンジェリンは鼻で笑いながら詠春からもぎ取った一枚の布を再び彼らが映る写真へと被せた。この写真、シックスは非常に否定していたのだが彼の愛する例のお姫様が押してその結果としてここにあるわけである。皇族になると、二人で映るということが極端に少ないせいかもしれない。

「ゴホン、ナギ・スプリングフィールドの話ですが……」

詠春はネギに彼のことを話す。ナギ・スプリングフィールド、魔法界における英雄であり知らぬものはいない魔法使い。彼は公式上1

993年に死亡となっている。今からおよそ10年前、忽然と姿を消しそれから一切表にはなくなつたのだ。しかし、その彼に出会つたものがあるのだが……それはネギのことである、今はどうでもよいことであるので省略しよう。

「で？何か用かジジイ？」

京都から真つ直ぐと我が家（偽）に帰つてきた俺であつたが、帰つてきた瞬間学園長のジジイに呼び出されることになつた。金は振り込むことになつているし、わざわざ会う理由が見つからない。全員五体満足で無事だつたわけだし、任務失敗ということもない。では何故か？そもそもジジイからしかかつてこない俺の携帯を壊そうかと悩んでいる最中なのだな。

「まずはシックス殿、此度の件感謝しますぞ。まあなにやら焦臭い出来事もあつたようじゃが……木乃香が無事でよかつたわい」

「任務はこなす、で？本件は？」

俺が急がず、というかムカツいてくるがジジイは手を置いて俺の言葉を静止してくる。いかんいかん、少し焦りすぎたな。狙撃手たるもの常に冷静で落ち着いてなくてはいけないのだ。一撃必殺を確実にするための必要事項でもあるぞ。

「責任がどうのこうを言つてたのじゃが……まあこれはもういいじやろう、全員無事、これ以上のない成果じゃ。本件はな、フェイト・

アーウェルンクスと君の今後についてじゃ」

責任うんぬん言われたら今すぐ出て行こうかと思ったが、ここは金の払いがいいからひとまずは落ち着ける。で、アーウェルンクスについてなんだというのだ。俺の今後って、帰っていいのかが。帰っていいなら今すぐ「貴方に会いに行きます」状態になるのだからなあ。

「彼と君たちの関連ぐらいはぶっちゃけ知っておる。『紅き翼』と共に戦った君だからこそ聞きたい……彼を完全に消滅させる気は？」

「ない」

シリアス調丸出しだが俺は無い、まったく無い。俺はテオドラのために戦うのだから、わざわざ『紅き翼』が残した絞り滓をお掃除するなんてゴメンだ。もっとも、アーウェルンクスがテオドラに対して危険行動をとれば、誰よりも速く潰してみせようホトトギス、もといバシレイア。そもそも完全に消滅って、造物主は未だに生き残っているっぽいし、あいつの他には20年前と10年前にナギが潰している。つまり、何体いるのかわからない。俺が破壊した三番目も下手をしたらまだ起動しているかもしれない。あそこまでバラバラにしたが……、なんとも言えない。相手は反則造物主が作ったお人形さんだからね。

「そうか、まあお主の行動を決定するつもりはない、で」

まだ何かあるのか、と俺は答える。それにジジイには意外と口ごもって何んやら言いくいみたいだが、俺が部屋を出ようとすると早急に口を開いて言葉を言った。俺としては速くからそうして欲しかったが、なにしろジジイだ。病気が何かだろう。そのまま死ねばいいのにな。

「3・Aの龍宮真名君がお主の弟子という報告があつてな……マジ？」

「ああ、本当だ」

汗をだらだらと流す莫迦ジジイに、俺は冷酷とも言える一言で返す。思えばそうだろう、自身を褒めるつもりはないが……帝国の英雄である。そんな俺の弟子がこんな汚い麻帆良で学生、あまつさえ傭兵としてコキ使っているっていう。ぶつちやけ莫迦弟子自身がいいのなら俺は一向に構わんのだが。英雄の弟子とも言えば報酬も上がりそうだが、それにまほネットで大いに騒がれることだろう。

「莫迦弟子の意向だ、俺は関与せん」

俺の言葉に安心したのか、イスにもたれかかるジジイ。なんでも腰が痛いそうだ。エヴァンジェリンの封印の件で判子をずっと押し続けていたらしい。ざまあみる。もう少し速く準備しておけば判子を押し間隔の時間も増えたであろうに。責任者のくせに問題を先送りにしたのがバチに当たったな。まあ莫迦^{ナキ}が作った問題だから先送りにする気持ちもおおいにわかる。ただしジジイ、テメーはダメだ。

「どつじゃ？そのままネギ君を弟「ガチャン」……oh」

何やら腐った生卵クラスの臭さを感じたが気のせいにしておこう。教えるという行為は非常に嫌いだ。故に俺が莫迦弟子を連れ回したときも見て覚える撃つて覚えるだったから。あとは歌を覚えていたがそれはまったく関係ないので止めて欲しかった。

「いいかジジイ？俺は銃しか撃たない」

それは死神が林檎を食べると同義なのだよ。

T o b e c o n t i n u e d

第二十四射 巫女巫女カーニバル（後書き）

次回は

テオ こいのうた

マナ あいのうた

シックス はるがくる

の三本です、嘘だけど。

第二十五射 穴

「（やはり火星か……」 ナギ”も厄介なものに首をつつこんだな）」

パタン、と本を閉じるローブの男。日光が燦々と降り注ぎ、白きローブは一層と輝いている。フードを深く被っておりそのものの姿は見えない。しかし、不自然なほどハッキリと見える目だけが赤く紅く朱く、太陽光に反射した血の湖のごとく鈍く輝いていた。ミシリ、と堅い表紙を握る彼の指がプルプルと震える。

「（バレないでも思ったか元老員が……）」

そうそこに彼はいた。フードの背中全体を覆う金の文字で描かれたヘラス帝国の紋様。それは例え皇族を護る近衛兵ですら身につけることの出来ぬ偉大なる紋様。それを身につける彼の名前は『ダブル・シックス』という狙撃手の王。ヘラス帝国第三皇女テオドラ・バシレイア・ヘラス・デ・ヴェスペリスジミアの護衛であり最強の大英雄の名を持つ生きる伝説。金の紋様を身につける彼は皇族に”最も近い”存在である証拠であった。帝国において20年連続『カツコイイ男』『抱いて欲しい男』『最も強い男』の全てにおいてNO.1の三冠を保持しつづけたその男は忌々しそうに天井のガラス越しに空を見上げた。

「（幻想、か……、だから何だっつてんだろうな）」

「おや……やはりあなたでしたか」

ガチャッとその小屋に扉を開けてきたのはスーツの男。老けぎみの黒髪の『近衛詠春』だった。そうそこは京都。前日ネギ・スプリン

グフィールドが訪れたナギとその仲間達『紅き翼』の別荘、という名の隠れ家である。修学旅行から帰ってきたシックスは数日の休暇を貰い、気になることもあってこの場所に来ていた。

「来るならネギ君たちと来ればよかったのに」

「わざわざ俺が顔を出す理由もない、俺はこの書物に用があったのだから」

そう言うが詠春は嬉しそうな感じだった。彼も彼も、十何年ぶりになるという古い知り合いであり、時には背中を合わせて戦った仲であり、そして何よりも得難い死合を交わした宿敵とも言える間柄だった。一方、シックスは相変わらずの無表情。こればかりはテオドラや某弟子のように見分けることは出来ない詠春だった。

「あの馬鹿の馬鹿魔力で暗号化された本を？」

その家の本は詠春も言う通り暗号化されている。普通の人が見れば奇怪な外国語で書かれたただの難しい本だが、見る者が見ればそれは重要な魔導書となり、非常に危険な存在になる。だが実際中身を解読し会得するためには暗号を解かなくていけない。これはかつて魔法が『個人技能』であった時代の名残であり、己の研究成果を残す、残すが他人には見られないようにするためのものである。暗号が複雑なほど、術者は優秀、つまり中身に記されている内容も非常に価値が高いというわけだ。

「フン」

「はははははは」

フン、と鼻で鳴いた彼は手元にあつた魔導書を一気に複合した。手元の魔導書全体に幾何学的な紋様が浮かび、尚かつそれらの周りの空間にさえそれは及ぶ。模様を映し出した光がバチバチと数度なるかと思うと、丁度鍵穴のようなものが生まれ……、シックスの右手にもたらされた輝く鍵がそれに刺さる。ガチャン。ロックをはずす音が響いた。中身を早速見たシックスはこれまた早速ため息を吐く。こんな本いらないだろ、と本を閉ざす。

「これはハズレだな、官能小説だ（狐耳ものとかなかなかわかつてる）」

ギクリ、と詠春が震える。もちろんシックスは見逃すはずもないのだが、眼球だけ詠春のほう見やり、そして何事も無かつたかのように再び魔導書、もとい官能小説を今度は己による暗号化をかけ本棚に戻した。少し詠春がソワソワしていたような、とシックスは思うが同じように無視、シックスが結構楽しんでいたのは言うまでもない。

「調べ事ですか？」

「まあ、な。お前には関係の無いことだが」

『紅き翼』の隠れ家にある物で調べ事でそれはないだろ、と叫びたい詠春だった。しかし出来ない、彼は先程弱みを握られたようなものだったからだ。時間が経てば意味が無くなるが、今その瞬間だからこそ本領を発揮する弱みだった。それに、詠春は彼のことを信用していた。故にシックスが”必要無い”と言えば、それは本当に”必要無い”ことだと詠春は思っていたのだ。

「そうですか、調べ事が終わったらウチに寄っていきませんか？良

いお茶菓子を出しますよ」

「（何も言わないか、本当に出来た奴だ）ああ、行こう。それにもう終わった」

シックスは思う。このように詠春、かつてのアルビレオ。そしてジヤック・ラカン。この三人は特にこういう空気を本当に肝心な時は読む奴らだったなあと。ガトウは仲間という意識が強すぎた節があり、こう上手くはいかないが……。例え”物語”においての主人公の面々といえど、当時はまったく言っていないほど信用も信頼も寄せていなかったシックスだったが、わざわざ家に寄るとは、と彼は一人で「ありえねえ」と内心で愚痴をこぼした。

「なあ」

「なんででしょうか」

「……俺はこれからも守れるのだろうか」

「守るのが貴方の役目でしょう」

「ハッ」

なんでもないとシックスは”笑い”ながら扉を開けて外に出た。彼は特に意味も無く、体の歯車を回し音を立てた。いや、本当は意味があったのかもしれない。しかし、例えあったとしてもそれは本人しかわからぬことであろう。それを見ていた詠春は、かつての”仲間”の成長に驚きを隠せず、あとで狙撃手に追いかけて回されることになるのだが、これはまた別の機会に語ろう……

「それにしてもなあ」

「なんででしょう」

前を歩いていたシックスがゆっくりと振り向きそのまま詠春に尋ねた。詠春としては彼から会話を持ち出すことも少なかつたせい、彼と会話のタネをまつたくも予想を立てることができず（一つを除き）何事か、と心を引き締めた。もとよりテオドラのことはしか考えてない彼がわざわざ他人と話す、なんてことはやはり珍しいものだった。

「お前老けたな」

「……ええ、仕事が」

ククク、とフードで顔を隠し笑うシックスを見て、目元をひくひくさせる。確かに詠春はこの言葉にある意味予想はしていた、それは予想ではなく確実に至るレベルで。しかし今はどうだ。わざわざ『紅き翼』の隠れ家で調べ事をするという、一見緊急事態に近い状態でありながら、まさかこのような質問するとは詠春は思いもしなかった。タイミングが違う、だが思えば……シックスだからこそこういうタイミングで言うのではないか？

「（テオドラ以外のことは何も考えてないようですね）」

「俺の弾丸を切り裂くお前が懐かしいな、そのまま火炎放射で消毒したくなるぐらい」

シックスの危険な発言のことすら耳に入らず「やはりコイツはこうだった」とかつての戦争を思い出す。戦争が終わり京都で嫁を貰い

今の立場になった彼は、事務系統の仕事に追われることとなり、結果として「鈍って」しまった。そして修学旅行において本拠地の境界を破られあやまつさえ油断、そして石化の呪いを受けてしまうという失態。旧世界のサムライ・マスターとまで言われた彼が無惨な姿をさらしてしまった、もちろん老けたということも含めて。

「いや、それではぬるいか。さすが詠春、大陸間弾道弾にくくりつけても余裕そうだな。H A H A H A」

「（そういえば彼は何故日本に……帝国は？）」

再び歩き出す男達。独りでにしゃべるシックスは詠春の無視っぷりに怒ることすらしなかった。別に聞いても聞かれなくてもやはり、どうでもいい（特に天敵たる詠春には）存在だった。詠春の思惑はますます深まるばかりだが……、思考が分割されていない時点で中々やばいということを感じてほしい。周りが見えなくほど集中するのはいいが、戦場だと死に直結する。だが「そこまで鈍ってしまったのかもしれない」などと少しも思わないシックスは少しばかり薄情と言えるのかもしれない。

「何故あなたは日本に？」

思考がまとまった詠春だった。考えても考えても彼の日本にいる理由は依然として見つからなかった。で、考えて結論が出ないならば直接聞けばいいじゃない。ということでも早速聞いてみることにした詠春。それはあまりのことだった。突如首を横に90度傾け非常に嫌そうな顔をするシックス。肉体が固定され基本無表情のはずの彼が地獄の底を描いたような憤怒に染まっていた。思わず半歩引き下がる詠春はそこで気付いた、気付いてしまったのだ。

「(地雷…?)」

「そうかそうか”詠春”もそう思うか、ふむふむ……」

先程の半歩程度では収まらない光景を見た。首を傾けたまま一人でブツブツ言い出したシックスが背後に血の涙を流している黒い後光の仏様のビジョンを映す。さらに加えてそのブツブツ言っている内容を聞いてしまったのだ。出来れば聞きたくない、可能ならば逃げたい、神様がいるならば…ッ!

「テオ　だってよ　ドラが　テ　ラの愛が　滅
殺　絶　」

「(うわぁ)」

いつぞ来た彼からの手紙が子供に見える。向こうは二行、こちらは二秒。呪詛レベルに達したテオドラへの想いがぶちまかされていた。詠春としては彼がいるということ、そのテオドラも日本に来ているのでは?と思ったがどうも違うみたいだった。捨てられた?違う、捨てられたならば「お前を殺して俺も死ぬ」　ENDだろう。長期任務ならばどれほど長く日本にいるのか。語り合った(刀と銃と巫女で)仲としては、互いに背中を任した彼がこんな可哀想な姿に、ただ同情するしかなかった。

「もういい!お前は頑張った!もういいんだ!!やめろ!」

シックスを抱きしめ肩を叩く。もう止める、もういい、と何度も何度も言う。しかしシックスの言葉は止まらない。それでも詠春は言い続けた。なによりも友のために。

「光がつ！？AMSが逆流するううあああああ！！」

AMS（貴方のことが 抹殺したくなるほど 好きです、の略）

ぎゃああああああああ、と叫びながら走り出したシックスに手を伸ばす詠春。しかしその手は届かなかった。地面に倒れ込み詠春は己の不甲斐なさに嫌悪する。気で強化しまくった拳がコンクリートの地面を粉碎し、詠春の涙が大地を潤した。

「また守れなかった！！あの時誓ったのに（第36回巫女会談ダブルシックス記念にて）俺はッ！？」

その後二人はありふれた高級玉露とお饅頭で何事も無かったかのようになつた。優雅な一時を過ごしたそう。補足程度だが巫女に囲まれて

「シックス様、マスターが呼び「No thank you！」しかし…」

再びここは麻帆良、麻帆良で最も高いマンション（高級）の最上階全てを住居とする狙撃手は休暇を満喫しようとソファに寝転がり情眼を貪っていた。しかし、彼は思った。「エヴァンジェリンに呼び出されるようなことはしていない」「なぜこのロボ娘はここにいる？」「そもそもなんでこいつは俺の家を知っている？」等とそれはもう色々思考が回っていた。

「鍵は？」

休日の真昼、突然玄関のチャイムが鳴ったかと思うと、次の瞬間に鍵をゴリゴリする謎の音。シックスがセキリユティについて考えている間にそのロボ娘『絡繰茶々丸』は彼の部屋に入ってきた。勝手知ったるなんとやら、客人のように靴をビツシリ揃えて脱ぎ、パタパタとシックスの前に構える。パタパタとかお前どこの新婚さんだよ、とかシックスはその思考の厚さによって思考が鈍っていた。

「マスターが壊しても良い、と。ああいえ、私は反対したんですが、その……」

シックスはもじもじするロボ娘に若干イラ立ちながら質問する。銃を撃つてもいい、撃つてスクラップしてしまえば……シックスの脳内会議が開幕する。ここで撃てば休日は今”救われる、そう今だけだ。後でエヴァンジェリンが怒るに決まっている。例え封印されたよう、よ、と言えど怒らせるのは面倒だ。シックスとしては基本的テオドラ>損得>>>善悪の順番で思考の方向が定まっている、今はテオドラがないことを考えると次は損得。ここは今耐えて、明日を生きよう。そして崇めようテオドラ様を！とシックスの心情世界に光が差し込めていた。

「修理は？」

「後で私が」

「なんでここを？」

「マスターが学園長にキリキリ吐かせて……あ、学園長には秘密で」

無茶を言うな莫迦ロボ、ですよー、とシックスとロボットらしい

無表情での会話、しかし何故かオロオロしている絡繰茶々丸。存外相性がいいかもしれない。何はともかく昼（太陽が昇っている時間）には絶対に働きたくないでござる状態のシックスは絶賛お断り中、しかし絡繰茶々丸も負けてはいない。主の命令を従うとい従者たる信念があつた。

「シックス様がロリコンだという噂を流すとマスターが……」

ニヤリとする絡繰茶々丸、彼女と念話して指示をしているエヴァンジェリンも同じような顔をしていたのだが……これは作戦ミスと言わざるを得ないだろう。なにしろ、彼がシックスであるからだ。こういう噂話など、テオドラに関わらない己への評価など非常にどうでもいいことだった。

「ああ、そうか。まあ頑張れよ。ロリ代表エヴァンジェリン」

エヴァンジェリンも念話の向こう側で己の失策を感じ取った。思えばそうである。そもそも彼は普段太陽が昇っているころは動かない、基本昼間に行動する普通の人間からの噂など通じるはずもない。それに旧世界の端っこの国である日本での、それはもう限られた地区の評価など本当に彼にとってどうでもいいことであつた。例えば国家権力の狗が襲つてこようと、彼はそれを打ち倒す力があるのだ！（良い子はマネをしてはいけない）

「一応聞いておくが目的は？（というか直接念話も送れないのか）」

「本気で戦つてみないか、と……」

エヴァンジェリンは600年研磨し続けた自分だから、という下らない理由で直接送らないだけだが、それを知ること無。戦闘の

言葉を聞いてシックスのまとう空気が変わる。シックスにとってエヴァンジェリンが何を本当の目的としているかわからないが、戦闘という言葉には結構惹けるものがあった。テオドラを護るために力を研磨することはいいことだ、とシックスは結構ノリ気だったが……、生憎それだけホイホイ付いていく彼ではない。

「三分10万で動いてやる」

(巫ツ山戯るなー！！今すぐ来い狙撃手！！ええい速くしろ！茶々丸、無理矢理にでも連れてこい！)

「無茶言うな、でありますマスター」

ガタガタと扉の修理を始めた茶々丸を無視して詠春に土産としてもらった煎餅をボリボリ食べる。途中茶々丸がお茶を入れてくれたことになんともなく感謝し、そして大画面で時々大きな騎士が戦うゲームを楽しんでいた。切れたエヴァンジェリンからの念話を一方的に拒否しているせいもあり実に静かで、修理しているロボ娘と煎餅食べながらゲームをする英雄、それはまさしく資本主義社会の模式図のようで……。

「(直すなら壊すなよポンコツ)」

「(直すなら壊さなければよかった)」

お互い作られた存在なためか、案外思考回路が似ていた

To be continued

第二十五射 穴（後書き）

あいと

ゆうきと

ておどらの

ものがたり

こうひょうはじばいさちゅう

第二十六射 真祖と究極（前書き）

とつぜんの できごと

第二十六射 真祖と究極

『箱庭』という魔法がある。それは文字通り箱庭を作り出す技術にて魔法技術者達の最高峰である『ダイオラ魔法球』たるマジックアイテムを指す処である。『箱庭』とはまさしく、現世界と架空空間を切り離すという大魔術にも等しいものだがそこまで深く考える必要はない。特定の土地を切り抜きそのまま魔法球の中にツッコムことも出来るし、ある程度制作者の想像によって作ることも出来る。まあ想像して作るならば大量の魔力と高度技術が必要不可欠なため、やはり切り取ったほうが早い。『ダイオラ魔法球』の特徴としては、大規模の土地をある程度の大きさの球体（直径1メートルほど無い）に圧縮でき、持ち運ぶことが出来るという点、中の気候を変えられる点、そして最も大きな利点である『時間制御』という点だ。

「ククク、よく来たな狙撃手！」

「（うるせえ）」

例えば彼女『エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル』が所有する通称”別荘”は外の1時間を中では24時間に変えるという。もつとも時間による矛盾を減らすために、中で24時間立たないと外に出ることは出来ない。これは彼女のような不老の存在が使うことで最大の能力を発揮する。時間の概念が存在しない彼女だからこそここを大いに利用し、最強の魔法使いの一角として魔法世界中に恐れられることとなったのだ。しかしシックスとしては、吸収した命の分だけ寿命があるとはいえ、あんまり多用したくはなかった。そのため彼が帝国に置いてきた『狙撃練習用ダイオラ魔法球』は時間変動を起こしていない。もとより彼が製作当初において力不足と

いうのもあったが……

「（なんでギャラリーが、……ハッ！？巻きこんで殺す気が、さすがだな）」

「フハハハ、よく見ておけばーや！世界最強同士の戦闘を！……おい聞いているのか狙撃手」

聞いてはいるのだが、このロリババアの対処具合に困惑していたシックスは敢えて無視をしていた。見て見ぬふり、もとい聞いて聞かぬふり。しかしエヴァンジェリンは怒ったかと思えば、何故かご機嫌がいいせいが高笑いを始めて流した。さて、ギャラリーとしている者は、ネギ・スプリングフィールドを初めとする愉快な仲間達。何故彼らがエヴァンジェリンの別荘にいるかという点、それはネギ・スプリングフィールドが彼女に弟子入りをした御陰であった。その修行の一環として本物の殺し合いでも見せたいのだろう。所詮ロリでした、と結論付けるシックスは仕方が無く動いてやることにした。学園長としてもネギの成長を希望しているらしく、微少ではあるがお金を貰ったせいもある。仕事と割り切れば、テオドラ以外の事にもなんとなくやる気を出せるのだった。まあ結局テオドラのために鍛錬するというのが後押ししたのだが。

「茶々丸とチャチャゼロは引いておけ、壊れるやもしれん」

ですが、と従者『絡繰茶々丸』は食い付こうとするが、本来戦闘狂のはずのチャチャゼロ エヴァンジェリン最初の従者である殺戮人形のこと が素直に引き下がったのを見て口を閉ざした。チャチャゼロとしては戦いたい、しかし戦えば恐らく”死ぬ”ことにならざることを直感していた。例え”例示”としての戦闘だが、相手はあの『狙撃主』でこちらは『闇の福音』であり、互いの牽制程度で並

の魔法使い達を殺す最強種の戦いなのだ。

「いい判断だエヴァンジェリン。生憎手加減が出来ないのでな」

フードを被ったシックスが首をコキツとならず。思いの外やる気はあるみたいでエヴァンジェリンは思わず武者震いがした。密かに従者を下からせたことを安堵し、次は語る必要は無かった。ただ今は互い殺し合う生き物、ただ今は己を刃と弾丸に。不老不死と究極生命体の戦争が始まった。

ダアン！！！！

始まりの合図など戦争には無かった。突如狙撃手の弾丸がエヴァンジェリンを襲いかかる。卑怯？否、これは卑怯にあらず。もう既に戦争は始まっているのだから。エヴァンジェリンは跳躍し回避する、足下を通った弾丸の風圧を感じますます震えが止まらなくなる。

「ハッ！どこを狙っている！！」

空へと飛び上がったエヴァンジェリンを追いかける狙撃手。足の筋力のみ”で空へと舞い上がりローブをバサリと……

「『固定・弾性・影玉』」

鋼のイメージだろうか、彼の声は。ローブの中から大量の黒い影の球体が空中のあらゆる処に分散し、そして空中にて静止した。これは彼が空を飛ぶ技術を会得していないため、使うことにしたただの空中の足場であり、彼の”フィールド”とも言えるだろう。縦横無尽、固定された影玉を足場に三次元的軌道を持ってエヴァンジェリンへと襲い掛かった。

「魔法の射手！！氷の119矢！！」

だがエヴァンジェリンがそれで倒れるほど甘くはない。影玉の間をすり抜けるように飛行する彼女は魔法の射手を放つ。氷の矢が同じく影玉の間をすり抜け、狙撃手へと襲う。狙撃手は手に持つ銃を放ち”全て”撃墜した。次々と飛んでいく100以上の矢を”ほぼ同時”に弾丸で撃墜、それどころか彼の軌道は止まることなかった。

ギーン！！！

互い互いの魔力、武器は必殺の威力を持っている。狙撃手の右手にもたらされたガンブレードでエヴァンジェリンに斬りかかり、エヴァンジェリンもまた右手に構えられた相転移魔力剣『断罪の剣』エクスキューションナーソードを持って相殺する。剣と剣がぶつかりあった瞬間、周りの空気が振動した。衝撃を飛ばし斬撃を与え攻撃を為す二人の空中に展開された剣舞。時折聞こえるガンブレードの爆発音がテンポを1個ずつ、1個ずつ引き上げ剣撃の嵐となった。

「（なんとという重さだ、これで”魔力強化”していないだとツ！？）

」（真祖の吸血鬼か、どんな化け物か）」

声を上げ断罪の剣を振るうエヴァンジェリン。フードの奥から覗く真っ赤な目がそれを確実に捕捉し、超常の力を持ってガンブレードで対応する。しかし精練されつくしたエヴァンジェリンならまだしも、狙撃手が振るうガンブレードはアクマで通常の鉄塊。限界がくるのも無理は無かった。均衡し合っていた剣が、断罪の剣がガンブレードを斬り倒し、狙撃手の胸元を斬った。

血飛沫

衝撃

衝撃に襲われたのはエヴァンジェリンだった。ワケがわからない状態で”腹に何かが深く抉りこまれた”原因を探す。答えはすぐに見つかった。斬った、確かに斬った狙撃手の胸元。そして抉り込まれている暗緑色の腕のような”何”か。それが斬った部位から伸びていた。狙撃手は斬られた瞬間、肉体の再生を始めた。血飛沫を上げたものの超再生を保有する彼には命を微塵も削ることは出来ない。肉体を再生するために、盛り上がった”生命体”はそのまま正面にいたエヴァンジェリンへと殴りかかったのだ。

「ぐう！！（なんだ、コイツ！？）」

エヴァンジェリンはジュールジュールと”蠢く”その腕を見てしまった。頭、手、翼、尻尾、角、あらゆる生物の部位が根底を為し、一本の何かになった腕を。獣達の悲鳴か、それとも”使われた”ことによる歡喜か。エヴァンジェリンは恐怖と尊敬を覚えた。彼はまさしく『化け物』モンスターだと。そして本来英雄に狩られるべき敵が、大英雄とまで言われる存在に昇華したことに尊敬したのだ。

「『齒車・起動』」

ガチャンと確かにエヴァンジェリンの耳に届いた、生き物が連結する音が。生あるものの、部位を齒車とし、命で部品を作り、存在を持って連結し、群を持って個と為す。それが狙撃手シックスの正体であり根源であり、生物としての到達点。

究極生命体

その言葉がエヴァンジェリンの脳内を横切る。最強種とも、幻想種としても、例え今目の前の存在にとってはただの”命”であり、故に彼は化け物で英雄で、何よりも尊く、醜く、醜悪で、神々しく。それは生命の起源で諸悪の根源。

「それが”お前”か、化け物め」

だからこそ口が開いた。彼の魔法が発動し、例え全方向から小銃、重火器、兵器、あらゆる”部品”に狙われているとしても。狙撃手はとくに驚く様子も無く、己の正体に気付いた彼女に怒る気配も、かといって感心するわけでもなかった。

「ああそうだ、……それで？何だというのだ？」

戦争が再び始まった。エヴァンジェリンは己が持つ真祖の肉体によるアドバンテージと、多大な魔力、そして誰にも到達出来ぬ600年の練磨を持って魔法を発動する。彼女の周りをぐるぐる回る無数の魔力球。その軌跡はまるでカイコの繭のように連なり、そして解放された。

「魔法の射手！！連弾・闇の999矢！！」

「燃やせ貫け殲滅せよ」

機関銃を鉛の雨ごと漆黒の矢が喰らい、炎をまき散らす火炎放射と黒い雷光が互いを破壊し、弾丸がエヴァンジェリンを貫き、兵器を喰らう闇と崩れ去る重火器。誘導連鎖爆発を幾重も起こすその光景は”せかいのおわり”と比喻されてもおかしくはないほどの光景だ

った。遠くから見ていた彼らは驚愕を隠せなかった。それはネギの師となった彼女の強さ故か、それともそんな彼女と均衡する狙撃手のせい故か。それともその鉄と火薬と魔力による戦争の光景のせいだろうか。答えは一つ、全てだ。彼らはその全てに目が惹かれていた。

「『闇の吹雪』」

爆煙の向こう側に確かに響いた詠唱。そして爆煙を蹴散らして迸る漆黒のブリザードが狙撃手を襲った。障壁を持って防御する狙撃手、しかしその防御は破られる。漆黒が狙撃手の全身を包み、破壊し、まき散らした。黒いモヤを立てながら水面に落下していく”死体”を見て、それでもエヴァンジェリンは”追撃”の手をゆるめなかった。

「『氷神の戦鎚！』」

空中に鎮座するエヴァンジェリンの右手が高く振り上げられた。手の先には巨大な巨大な氷塊。大人一人がゴマ粒に見えるかというほどの巨大な円錐状の”杭” だった。敵を撃ち抜く巨大な杭が真っ直ぐと狙撃手へと振り下ろされる。真祖の吸血鬼の腕力を持って行われたそれはあらゆる存在を貫くだろう。

バキィッ！

それが”狙撃手”へと迫ろうとしていたその時だった。ビキビキと杭は粉々になり空中で消え去ったのだ。黒い塊となった狙撃手から伸びた謎の線、どうみても線としか言いようのない黒き”槍”が氷神の杭を貫き、破壊し、そのままエヴァンジェリンを貫いた。首の付け根に大きく穴の空いた彼女は吐血する。が、彼女もまた再生能

力持ちだである。

「殺しきるか、さすがだエヴァンジェリン。”死”んだのは久しぶりだったぞ」

ボロボロになった彼の肉体は既に全て回復していた。海に落ちていったかと思われた彼は、桃色の竜『ドラグーン』に乗り空に浮かんでいた。エヴァンジェリンも狙撃手も、互いが軽く笑いあうと再び死合を始めたのであった。

ダアンダアンダアン！！

彼の弾丸がエヴァンジェリンの肩と腹を喰う。彼女の魔法がシツクスの胸と足を吹き飛ばす。そして再生。影の向こう側から伸びてきた光学兵器の光が彼女を焼き切ったかと思えば、黒いブリザートが彼を砕く。徹甲弾が彼女を襲ったかと思えば最強種たる彼女はその高速の砲丸を回避し、彼女の空を覆うような魔法を彼の影の手が全て叩き落とした。

「それで終わりか！？狙撃手！」

「ハッ、沈んでる吸血鬼。貴様には水底がお似合いだ」

左手に銃、右手にガンブレードを装備した狙撃手。右手に断罪の剣左手はバチバチと魔力の渦が今にも撃ち出されようとしているエヴァンジェリン。超接近戦による必殺の剣撃と、超接近距離で行われる魔法と弾丸の応酬。右の剣で斬り合えば、左の弾丸で敵を討ち滅ぼし、左の魔法で敵を撃ち抜けば、右の剣で防御する。

「『歯車・起動』」

空中に姿を現したのはアーモンド状の何か。あまつさえ狙撃手はそれをエヴァンジェリンのほうに蹴り飛ばし、いつのまにか構えていた巨大な銃で撃ち抜いた。その巨大な銃こそ彼が大戦時から使い続けたハルコンネン。術式で徹底的に強化され、大戦時のときと比べてかつてのソレを”玩具”と言いのけるほどの強力なものだった。ハルコンネンにより広域立体制圧用爆裂焼夷擲弾筒ウラディミールがアーモンド状の何か……”ミサイル”を貫いた。

爆音、轟音、重音

火と火炎と爆炎がまき散らされた。狙撃手にも襲いかかる灼熱、しかし彼が焼かれるような気配は無く、フード付きのローブのみが灰となり空へと消え去っただけだった。狙撃手の普段隠されている本体が露わとなった。異常なほど白い体躯に、灰色の装備品。腰から下を全身かくすような革製のズボンに、膝と肘を覆うプロテクター。彼が普段装備しているもののだが、それを相手に”見せる”ことになるのは初めてだろう。もっとも、今はまき散らされた煙で当事者以外は見ることに出来ないものだったが。

ブシュ

「余所見は厳禁だぞ？」

縦に切り裂いた。縦に真っ直ぐと……、彼女の右手にもたらされた断罪の剣が彼を頭から股間まで切り裂き、彼を左右半分に切り分けた。黒目と白目が反転しているエヴァンジェリンがその600年の年月を経てきた威圧を解放している。空中にふらふら漂う右半身、左半身。勝利か？とエヴァンジェリンすら思ってしまうほど綺麗に決まった。しかし……

ガシッ

右が右を、左が左を。それぞれの半分の体がエヴァンジェリンの腕を浮かんだ。再生しきっていない、しかしそれでも動く彼の姿はまさしくモンスターだろう。バラバラになっている右手と左手から術式が解放された。封印の力を込めた術式を直接撃ち込まれたエヴァンジェリンの動きが止まってしまった。魔力も気も封印するほど強さに練り込んだそれは、別荘の中でありながら麻帆良の結界内と同格の能力を保有する。つまり今は、彼女はただの少女となってしまうのだ。

ゲジユル

「残念」「はずれだ」

右半身から左半身が生え、左半身から右半身が生えた。互いが互いの言葉を補う。そして”二人”の狙撃手が自らの力を持って、同時にエヴァンジェリンの頭を蹴り殴った。腕を固定され、封印され対処も出来るはずが無いエヴァンジェリンは真っ直ぐと、真っ直ぐと、真っ直ぐと飛んでいき、ギャラリーが見守る広場へと直撃し、広場を破壊する。

「トントンデモ設計だなこれは」

それぞれの右手と左手が合わさり、分裂している細胞の様子を逆再生するかのようになつた。狙撃手は遠い場所である、崩壊していく広場を見やった。エヴァンジェリンが起きる様子も無く、よく見れば目を瞑ったまま動く気配が無い。気絶したのだろうか、と崩壊が収まり、従者を始めに次々とギャラリーたちがエヴァンジェ

リンへと集まっていた。

「（なんとという強さだ、これが真祖……二度と戦いたくはないものだ）」

造物主の戦い以前も、以後も”死ぬ”ことが無かった彼はため息を吐いた。20年の間において、死んだ原因の9割9分が造物主であるのにも関わらず、彼女は己を数度殺し斬ったのだ。特に最後のアレには彼は対処することが出来なかった。介抱されるエヴァンジェリンを遠目に、縁起でもないご冥福（死んでない）をお祈りした。

「当然の結果だ。撃ち負けはせんよ、当るのであれば」

真祖の吸血鬼と言えど、ある意味それを越えるべくして生まれた究極生命体のスペックには届かなかったということだろうか。己のズタバ口になった姿を見て、フウと息を吹き彼は影の倉庫から再び口ーブを取り出した。

「（否、今回はかりは油断しただけか。伝説、伊達ではなかったか……）」

狙撃手を斬った直前にエヴァンジェリンが再起動していれば戦闘は続行していたらう、と予測した。彼女の魔力が尽きるのが先か、彼の命の貯蔵が尽きるのが先か。それはその時が来るまで永遠にわかることは無いだろう。

To be continued

第二十六射 真祖と究極（後書き）

シックスは生体戦闘兵器から究極生命体に進化した！
そういえば造物主よりも戦闘が長いような気がする。
次の投稿でネギ君達の様子がわかる、そんな感じで

第二十七射 サー・シックス

「ケケケ」

小振りの人形が刃物を力チ力チ鳴らしながらその光景を見ていた。隣にはその光景の一つとなっているエヴァンジェリンの従者であり、その人形の妹的存在『絡繰茶々丸』もいた。その従者は何も言わずただその光景を脳内へと納めていつている。彼ら彼女らは見ていたのだその光景を。

「すごい…」

サイドテールの少女が思わず呟いた。その言葉に異存を唱えるものはいない、出来ない、出来るはずがない。誰も何も言わず、喉を鳴らし息を飲み、彼ら彼女らの網膜にただその光景は映る。飛び交う死と交差する暴力、そして競われる武と攻め合う業。超常、これが最強、理解不能、それだけに尽きるかもしれない、その光景は。剣撃から小さな牽制程度の大魔法、戦争しおいというより、むしろ舞踏と言ったほうがいいかもしれない。

ダダダダダアアン!!!

シックスの周囲からまき散らされる鉄塊、それを破壊していくエヴァンジェリンの魔法。互いが互いが一撃必殺の乱舞を行い、交わり、そして”耐え”しのぶ。死を体現した狙撃手の弾と、技を持って乗り越えるエヴァンジェリンとの死会い（せんそう）は熾烈を極めていた。空中を文字通り跳びはねる狙撃手の、その移動方法から斬撃銃撃爆撃狙撃あらゆる攻撃に至るまで異常だった。彼の手に握られている銃も、彼の周りに浮遊している銃も、銃声を止まらせること

は無かった。

「ね、ねえ。今手足吹き飛ばなかった？」

誰かが言ったであろうその言葉。あまりにも異常すぎるその戦争故か。それともそれは真実で、信じたくない故か。それは定かでは無いがただ一つだけ言えることがある。例え手足が吹き飛んだとしても、魔法の矢に挟られようとも”まだ”戦闘は続いているということだ。闇と氷の矢が無数、それは天を覆い尽くすほどの量で狙撃手に迫るとしても、破邪の力を持った銀弾が推進したとしても、闇と氷が弾丸を喰らい、鉄と影が魔法を潰す。剣と剣がぶつかり、爆音が響き轟音が走り回る。

「……………」

ネギ・スプリングフィールドも例外では無かった。むしろ、彼が一番それを熱心に見ていただろう。なぜならば、彼はエヴァンジェリオンと戦ったことがあったからだ。麻帆良に修行に来て、学年を登り新しい春の季節、彼と彼女は戦った。結果としては有耶無耶、魔法に打ち勝ったという点を考えればネギの勝利だった。だが、今胸をはって彼女に勝てた、と言えるだろうか。戦った時と比べるのが無礼になるほどの戦闘密度。自分と戦った彼女と同一人物なのか？そういう疑問がただ脳内に浮かび上がる。そしてその彼女と互角以上に戦う、英雄であるナギ・スプリングフィールドと同格以上の存在と言われた彼を、奇妙な心情で見やるネギ・スプリングフィールドだった。

「な、なにこれ……？」

何故かネギの肩に乗っているオコジョとその光景を何度も交互に指

を差しながら言うのは『神楽坂明日菜』だった。彼女はネギ・スプリングフィールドが教師としてやってきた初日に、魔法の存在を知るといふ幸運か不幸か、とりあえず知ってしまった彼女はある意味古参と言えるかもしれない。エヴァンジェリンとの決闘の時も彼女が駆けつけた。まだまだ未熟だが魔力の補助があればマシな戦闘を行うことも出来る。

だが、これはどうか？

目の前に展開される戦争しあを見て思う「本当に彼らは魔法使いという分類にしているのか」と。それは彼女がある意味優しい性格から来たものであり特に言及はしない、彼女は二人がどれほどの化け物モンスターかまだ完全には理解していないのだ。特に狙撃主シックスに関しては、その化け物性がどれほどのものか、まだエヴァンジェリンですらその片鱗しか感じとってはいない、まだ数ヶ月程度の魔法に慣れた程度で理解することは不可能とっておこう。

「（ネギと全然違うじゃない！）」

内心で叫びたい気持ちだった。彼女にとって魔法とは標準になるべくしてなったネギの魔法である。目の前の光景は、彼の魔法とは比べるほどのないほど完璧で、強力だったのだ。まあ、彼女の性格のためか「だから何？」という原点復帰をするのだが実にどうでもいい限りである。

ダアアアアアン！！

爆音が別荘内に響いた。彼や彼女達はその爆発がどういうものかは知ることは出来なかったが、その驚異だけは知る、理解出来る。超近距離での超高速で超機動による超密度の戦闘だ、例えば『古菲』

などはなんとなくその光景を捉え（言うまでもないがものすごくすごい事）目の前の存在がそれほどのものか理解していた。しかし大抵の人間は戦闘による副産物としての、外部への影響、爆発やら剣撃の音とかから推測するしか無かった。

「テメーラニゲロ！！」

人形が叫んだ、動けた者は少なかった。絡繰茶々丸古菲や桜咲刹那、一步送られてネギや神楽坂明日菜。

ドオオン！！！！

動けた人の御陰でその”結果”は避けることは出来た。その広場に直撃した結果、煙がはれる。それが露わになる。黒を主体とした服は既にボロボロ、しかし体には傷一つとも無いエヴァンジェリンがそこにいた。起きない様子から見ると気絶しているようで、一部の者は理解し駆けつけていった。駆けつけた後、ようやく戦闘が終わったことに気付くほど、その直撃は急だったのだろうか。

「（今シックスさんが縦に……まさかな）」

”その光景”が爆煙のせいで誰にも見られなかったのが幸いとも言えたかもしれない。見てしまえば、まさしく人を見る目が変わってしまっただろう。それに誰も信じるはずがなく、信じたくもない。まさか「人が縦に割かれて、そのまま二人になる」ということなど。

ガチャ

「むう？」

数刻後、もう既に太陽が沈み静寂となっていた。そのころに彼女は目を覚ました。音がしたほうを見ると彼女の従者が丁度料理を置いたところだった。従者は色々言葉をかける、しかし返ってきた言葉は

「フハハハハハ！！！」

高笑이었다。さっきまで気絶していた主の奇行にただオロオロするしかない彼女の従者。ベットに仁王立ちする幼女という極めてレアな光景をなんと表現したらいいだろうか。ボロ布になっていた服も従者が着替えさせ、今は幼女な寝間着を着ている。腕を組んで仁王立ちの様子と合つてなさそうで妙に合っているというか。取り敢えず突然笑い出したエヴァンジェリンに絡繰茶々丸はどう対処したらいいものかサツパリわからなかった。

「マスター！起きたんです……か？」

ドアをバン！と景気よく開けて入ってきたのネギ。エヴァンジェリンの弟子となつてマスターと呼ばせることにしたらしい。だが、入ってきたのはいいもの……気絶していた幼女が突然起きて高笑いをするという状態に息を飲んだ。

「マスター……頭でも打つたんですか？」

「黙れ！」

恥ずかしくなったのか、顔を赤くしながら枕を”全力”で投げ飛ば

すエヴァンジェリン。放たれた弾丸が向かう先はネギ・スプリング
フィールド。まあ避けられるはずもなく、枕にぶつかって数メートル
飛ぶというビックリ仰天な惨事を起こしたりと、その後入ってきた
神楽坂明日菜を初めとする少女達と一悶着あったりと、先程まで戦
場で戦っていたエヴァンジェリンとは思えない様子だった。

「処で狙撃手はどこいった？」

「サー・シックスでしたらお食事中」

「……さて、早速言いたいことが二つ出来たぞ」

従者の言葉を遮ってまで言いたいこととは一体何なのだろうか。そ
れはエヴァンジェリンにしかわからないことだろう。しかも二つ、
従者の僅かな言葉で一体何を考えたのか。凡人には理解の出来
ぬ、それは600年の研磨の末の結果ではないのだろうか。

「まず最初だ、「サー」とは何だ？」

なるほどそつちか、と従者は頷いた。じゃどつちだ莫迦口ボ、とエ
ヴァンジェリンの言葉があったが片っ端から無視して説明しだした。
また従者の顔には「そんなこともわからないんですか？」みたいな
ドヤ顔をしていて、エヴァンジェリンは青筋を立てながら我慢して
話を聞いているものだった。

「サー、とはナイトの称号を持つ人の敬称ですよマスター。日本語
では勲功爵、勲爵士、騎士爵、土爵などと言われますね。オマケ程
度ですが、ソール本社長にも与えら「さて」はいなんでしょう？」

「騎士ということにはわかっている。だが何故今更狙撃手のことを、

そう呼ぶんだと聞いているのだ！」

血圧上がりますよ、とたしなめる従者の御陰で更に血圧が上がってしまうエヴァンジェリン。絡繰茶々丸のどこで覚えてきたのかわからないボケに、疲労困憊。もっとも戦闘の後というのもあったが、とりあえず肩で息をする。息を整え、彼女は従者と正面から向き合った。向き合った、向き合ったが説明が来ない。エヴァンジェリンがどうした？という風に首をかがげると、従者も同じように首をかがげて……

「さあ？」

エヴァンジェリンがツルン、と滑って建物の白い壁に後頭部をぶつけた。非常に痛そうな光景に、周りの少年少女（少年1に対して少女多数）は少し足をひき、同じように後頭部をさすっていた。余談だが、その直後治療しようと近衛木乃香がアーティファクトを呼び出したという、真祖の吸血鬼もお茶目なものだと思う。

「ハアハア、もういい！次だ！」

「ハイ」

「食事だ！なんで狙撃手は人様の家で勝手にくつろいでいる！……いや、招待したの私だが、妙に納得がいかないというか」

従者はとりあえず案内するようなので、ゾロゾロとみんなで付いていくことにしたらしい。久しぶりの骨のある戦闘で、そのストレスを発散出来てご機嫌だったエヴァンジェリンだったが、既に新しいストレスを植え付けられているという。ベットの上だけの上機嫌（上だけに）をもう少し噛みしめたかった、とエヴァンジェリンは思

った。思っても思っても、上手くいかないのが世の中である。

「エヴァンジェリンか、死んだかと思ったぞ」

夜景が一掃（？）出来るホールの真ん中に彼はいた。蠟燭の炎がゆつくりと辺りを照らし、満天の星夜が色を付けている。細長いテーブルの一番奥、狙撃手がどこかの特上のフランス料理を彷彿させるような、豪華な食事を優雅にナイフ&フォークで次々と消化していく。

「おい」

「今食事中だ、見てわからんか莫迦吸血鬼」

今日で一体何回目だろうか、彼女のコメカミに青筋が浮かび上がったのは。目の色が反転したり、戻ったり。邪気眼を抑える選ばれし者達（age14）のごとく、そんなご様子のエヴァンジェリンを尻目に黙々と食べ続ける。赤色の上品なワインを、コクリ、ゆつくりと味わって飲み干す。満足そうに頷く狙撃手の目になつたらしい。空になつたワイングラスを…

「お注ぎします。サー・シックス」

「1」苦勞」

これだ、エヴァンジェリンが言いたいのはこのこと”なのだろう。細長いテーブル、よくある貴族の食事を思い出せばいい。食事、先程も言った通り極上のフランス料理だ。従者、貴族っぽい風景には決定的だろう。ならば問う、どうしてエヴァンジェリンの従者達が主を崇めるかのように、彼の後ろ左右にいつでも動けるよう待機し

て、隣にはこれまたいつでもワインを注げるようにワインを抱えて立っている。計三人の絡繰茶々丸の姉妹ゴーレムたちだった。

「実に美味しい」

「感謝の極み」

ペコリとワインを抱えている従者がお辞儀で返す。エヴァンジェリンの怒りの震えを知っているのか、知らないのか、知っているが覚えて無視しているのだろうか。「そんなの関係ねえ！」と言わんばかりに流され、そしてこれが当たり前かのように自然に。あまりにも”ハマ”りすぎて「え？何か問題ある？」とか思ってしまうほど

……

「貴様等は何をしているんだー！！！」

怒りの爆発、エヴァンジェリンの背後にはヴェスヴィオ火山噴火のビジョンが流れている。何を？という風に　やはり姉妹は似ているのだろう　互い互いに目を合わせて……首をコテンとかかげる。そして何かを確認するように、一斉にエヴァンジェリンへと振り返るゴーレム達に、まあ無理も無いがエヴァンジェリンの雷が落ちた。

「（実に騒々しいな）」

「あんっ！そこはッ！？……あ、ひあん！そんなに！だ、だめえ！」
エロくない

巻いてはダメです巻いてはダメです、と連呼している姉妹ゴーレム達と、またであるが……今日何度目かの異常光景に呆気取られて完璧に忘れさられている彼ら彼女ら。片っ端からネジを巻いていくエ

ヴァンジエリンとどこか幸福な顔をしている姉妹ゴーレム。そしてその光景を、どこかの喜劇でも見るかのように「ハハハハ」と笑いながら食事を続行する狙撃手。恐らく誰もが空気になりえるであろう。ついでにワインの引き継ぎはいつのまにか絡繰茶々丸がしていた。勿論彼女もエヴァンジェリンの標的となつたのは……言うまでもない。

「（あ、これはマスターが大事に保管していたロマネコンティ1964年ものですね）」

飲む者が最も少なく、語る者が最も多い王道的最高級ワイン”ロマネコンティ”のルビーのような赤色が、狙撃手の手に握られたボルドーのワイングラスの中で波打っていた。

「おい茶々丸！今度はお前か莫迦口…ああ！それは！？」

そんなドタバタしていた日から数日たった。狙撃手ことシックスの生活は今まで通りに昼は適当に過ごし、夜に警備をするというスタイルに戻った。エヴァンジェリンが最も大切にしていたのであろうワインを空けて飲むわ、ついでにワイン保管庫の中のコレクションがいくつか紛失するという事件が起きるわ、彼は見事に入りを禁止された。それどころかエヴァンジェリンの家に近づくなという有り難い言葉も貰っている。

「飲まないワインはワインではない、まったく本質が見えていないな」

その日のことを思い出し、少し愚痴っぽい言葉を吐く。空を仰ぎながらタバコの煙を鼻から吸う。シックスは吸われなかった煙を、ふと目で追った。空へと続く病気の塊、その先には今にも雨が降りそうな厚い雲。梅雨の季節が来たのだからしょうがないことだが、シックスは自身の武器のこともあり雨は、というか全体的に水は嫌いだった。

「ドラグーンで蹴散らすか……、いや、こんなことで使うのはな」

テオドラとの契約によって手に入れたアーティファクトだ。もう少し愛のある使い方をしなくてはならない、というシックス独自の理論によって梅雨撲滅大作戦は決行されなかった。本気でやったのなら、恐らく周囲に多大な被害が出たであろうが、中止になったのは幸いなことだろう。雨天中止と言えはいいかもしれない。

「むっ」

ピク、とシックスの耳が動いた。限られた時間の上、雇われているという狭い範囲での警備だが彼は学園結界との接続を許可されている。侵入者がいるのならこういう風に”わかる”のだ。やるか、と腰を上げた途端にやる気を失ったシックス、再び座るといふ奇行だったがそこは狙撃手の家の一部であり目撃者はいなかった。

「（まだ明るいしなあ、どうせ野良犬か何かだろう。やっても別に金が貰えるわけじゃねーし）」

出来るならばやらない、でもどうせするなら金を貰う。それが彼のスタイルである。貰った金は生活費以外全て数日で消え去るといふ荒い使い方、のように見えるが7割はテオドラへ貢ぐという結果で

ある。実際、帝国にある彼の通帳には0が10個”ぐらい”並んでいるいるわけで、彼にとつて警備で手に入る金は 本人も多いと自覚はしてはいるが たったの少しでしか無いのだ。

「犬より猫だよな、……でも狐が一番だな」

T o b e c o n t i n u e d

第二十七射 サイ・シックス(後書き)

アーチャー(笑)

アチャー W W W W

第二十八射 己を弾丸に（前書き）

若干（1000字ほど）長くなりました。
でも、最初のは削りたくなかったんだ！

第二十八射 己を弾丸に

「なあ、お前等狙撃手って知ってるか？」

これはかつての大戦中の小話である。とある連合軍の戦艦乗りの間で行われた会話の一節から。カツンカツンと、金属製の廊下を渡る武装した兵士二人が、こんなたわいも無い会話をしていた。片方の兵士は焦げた豆の苦汁コクビの入ったカップを持っている。

「狙撃手だ？狙撃する兵士だろ？それがどう「違う違う」ああ？」

相方の言葉を遮ってまで否定するもう一人の兵士。首を横に何度もふり、手を軽く広げてそう言った。相方の兵士は少し機嫌が悪くなった。この程度で、というのが実際は戦時中であり常にピリピリ、しかも現場は現場で色々厄介なことがあり、その相方もそうとう参っていたようだ。

「これは噂なんだがな……」

「……」

兵士が真面目な顔をする。相方もその顔に吞まれてしまった様子。彼らは一般の兵士と言えども、戦争を経験し今も生きているものたちだ。少なくとも”やばい”空気とそうではない空気の違いを見分けることは出来た。そう、相方が感じたのは”やばい”空気だ、その噂が連合において非常に厄介だと、経験が告げていた。ゴクリと喉を鳴らし、兵士の言葉を聞いた。

「帝国にいるんだよ、その噂の狙撃手がな」

「噂……」

ああ、と兵士は相方に返した。相方もここまで来れば何のことは理解できた。兵士の言う狙撃手が何者かは知らない、しかしその狙撃手は連合にとつて”やばい”奴だと。しかし相方は同時に思う、やばいと言えばこちらにも『紅き翼』の連中がいるのだ。そこを口に開こうとしたが、その前に兵士が答えた。

「なんでも『紅き翼』と直接交戦して、逆に撃退したらしい」

「マジかよ!?!」

彼ら一般兵士でさえ『紅き翼』の異常さを直接見たことがある。特に赤髪の魔法使い。彼の放った砲撃魔法が敵の戦艦を貫通していたのはもはや笑い話の領域だ、嘘か誠かという意味で。兵士の言葉は『紅き翼』の連中と互角、いやこれは願望だろう「互角であってほしい」という。『紅き翼』の連中以上に”やばい”奴がいる、それも味方『紅き翼』よりも……。

「おいおい、つてことは……」

「ああ、最近ソイツのせいだろう」

最近、という言葉はその兵士が言った。というのも”最近”戦況が芳しくなかったのだ。連合VS帝国、と簡単に一言で言えるが、実際は超大国と小規模の大多数国家の集まり。帝国が有利に見えるそうだが、実際はそうでもない。兵隊を動かすのは金がかかる、そういう意味では国家別に動かそうと思えば同時に多面攻略が出来る連合は強い。もっとも、小規模程度の国家で人間よりも強い亜人の、そ

の亜人の頂点になったヘラス族が治める大国には敵うわけもないのだが。そんなわけで、当初はガンガン押されていたわけだが、そこで『紅き翼』の面々が参上した。あつという間に帝国の軍を押さえ込みあまつさえ大撤退させるという極めて上等な戦果。参加当初には「戦争が長引いた」と平和主義の兵隊も嘆き悲しんだが、勝利という存在が見えたところでその不満の声は消滅。さて、そこで噂の”彼”が現れたのだ。

「噂つてのは、戦艦が既に100隻ぐらい落と「ブーツ!!」うお!汚ねっ!?!」

相方は理解不能な発言のせいで呑んでいたコーヒをぶちまけた。正面には兵士、そこは惨状だった。だが、その気持ちも大いにわかる。戦艦100隻と一言で軽く言うが、その気になれば小国を落とすほどの大戦力だ、それから考えればどれほど”ヤツ”が恐ろしい存在か、すぐに想像出来る、理解出来る。

「ゲホッ!ゲッホ!うえ………気管に豆汁が………」

「おい大丈夫かよ」

胸をドンドン叩く相方を心配し、背中をさすってやる兵士。よくある兵士の日常の一節だ、次の光景が無ければ。その瞬間戦艦内部に赤いランプが点灯し、音が響く。

ビービービー……!!

「な、なんだ!?!」

「第一種戦闘配置!?!今からかよ!?!」

「ごちゃごちゃ戦艦内部が急に騒がしくなる。今まで初めのこともしれないだろう。突然第一種戦闘配置、つまり臨戦体制、いつでも戦闘できる体制をとれと警告されたのだ。しかし、兵士や、その相手も周りの兵隊も、準備すら終わっていない緊急事態の中の緊急事態。しかし”この映像”を見ているものはすぐに理解できたかもしれない。」

「おい！痛えな！気をつけ」

そして映像はここで終わった

「（雨に紛れて、か……、喧嘩売ってるつもりか？）」

ガラス越しに外の様子を見ながら狙撃手は思考する。外ではシトシトと長くいやつたらしく重い雨が降っている。時折見える雷光と、その都度聞こえてくる雷鳴。梅雨らしく非常に湿っぽい空気、火器を扱う彼にとって、それは大敵とも言えるだろう。現に彼は珍しく顔を歪ませて「あ、私フキゲンなんですけどー」な佇まいをしていた。

「（この気配、悪魔か？）」

そんな不機嫌な狙撃手だったが、雨に紛れ込んだ愚か者の気配をしっかりと感じとっていた。雨で若干気配が薄くなるとはいえ、気配を探ることにある意味特化している狙撃手にとってそれは廊下ですれ違うことにも等しい、と本人は述べている。しかし、悪魔、しか

も気配からそれが上級 制限されてさすがに全力は出せないだろうが であることも看破し、疑問に思うのが学園側に対応だ。

「（ジジイが気付かない？……気付いて放置か？悪魔の狙いを知っている？）」

そこまでいけばそのジジイが犯人かもしれない。むしろそうであつてほしい、まったく積もっていない恨みを晴らすいい機会だ、と狙撃手は呟いた。ただ一つ余計に困惑するが…、学園長が犯人ではない場合の時だ。

「（学園の人間、上級悪魔を内部で召還し気付かないという学園側のマヌケっぷりを披露するつもなのか）」

それはありえない、と否定する。世界各地より集まっている魔導書しかり、世界樹の護衛のこともある。気付かない、などと巫山戯た言い訳をするほど莫迦ではないのだ。

「（外部の人間、有力候補だが……。可能性は低いが学園長が気付かないほど隠密性に優れているのか、それともやはり気付いていないフリをしているのか）」

十中八九外部の人間による行動だろう。しかし目的がやはり不明だ。幸い、上級悪魔が学園を片っ端から破壊という行動に出ていないことを考えると、何かそれ以外の目的のために動いているのだろう。まさか悪魔を本の回収というお使いをさせるわけでも、この麻帆良を占拠させるつもりもないだろう。

「（気付かないだけならば、それはそれで厄介だ。まあ、それでも俺が動く理由にはならない。時間的に考えて）」

夕飯時だ、契約上彼は深夜の警備にて、学園長の要望があつて初めて行動出来る。そういう点もあり、彼は学園長からの指示が無い場合ほとんど動かない。彼が住む家と、別の方向を進んでいる悪魔、つまりところ狙撃手の彼が目的でもない。ならば？

「ネギ・スプリングフィールド」

ボソリと本人以外誰もいない部屋で呟いた。電気をつけておらず真つ暗な部屋、時折輝く雷光によつて、一瞬だけ内部の様子がわかる程度。夜になり街灯から照らされる真つ黒な雨雲からまだ雨が降っていた。狙撃手はただ、真つ赤な目を持って電気の灯りで輝く夜景を見つめるだけで、首をコキン、とならした。

「（正しいのならば、元老院か……？）」

考えるならば、元老員の一派である可能性もある。実際の真偽はともかく、奴らはウェールズのとある村にて悪魔を召還し襲わせた。しかも中には上級の存在もいた。目撃者は結局生き残つたスプリングフィールドの名を持つ二人のみ。本当に悪魔かどうかは不明だが、そのウェールズの村は高位魔法使いの巣窟とも言える場所で、上級悪魔を直接降臨しない”限り”滅ぼされるなんてことも無い、そう考えていた狙撃手である。

「（……アーウェルンクス？）」

彼らが相当しぶといということを知っている。狙撃でバラバラにしたといえど、人形というのならば人間よりも容易く修復しやすいのだ。現にナギ・スプリングフィールドは戦時中、最後の戦いにおいて一体、そして10年前にもう一体と計2体を破壊してい

る。狙撃手がその”三番目”のアーウェルンクスを破壊しているとしても”四番目”の可能性がある。

「未だに時代に喰い付く気が老害共が……ククッ」

狙撃手は見えない元老員共に罵倒を浴びせ、そして英雄である己自身のことを含めて失笑を漏らした。狙撃手は深い思考から戻って来れば、既に感じていた悪魔の気配が世界樹あたりと被っていた。しかしそれでも動き気になれない狙撃手はハアとため息を吐く。

「（テオドラよ、お前ならどう動く？どうでもいい存在のために弾丸を放てと言うか）」

主のことを想うと、何故か無性に自害したくなる（結局死なない）狙撃手はそう思った。魔法界での話ならば、彼の評価はそのまま主であるテオドラへと繋がる。しかし今はどこだ？日本という旧世界の東の端っこ、その小さな島国のとある都市での話なのだ。例えば「英雄ナギの息子を助けた」という美味しい展開がぶらついているとしても、ナギの息子の存在を知っている人は極端に少ない。

「（あー、超死にてえー会いに逝きて〜。そして今の俺は三六倍だ、愛が）」

ガチャン、と突然両手にもたらされたガンブレードに弾丸が挿入される。トリガーの部分でグルングルンと景気よく回し、一振り、二振り、ピタツと静止させたかと思うと数秒後、窓のガラスをぶち破ってそのまま暗闇の空へと飛び出した。もう既に雨は止んでいて、干切れ干切れになり始めた雲のスキマから星々の光が差し込めていた。

雲海つき抜け、己を弾丸に……

そのことは突然起きた。悪魔の襲来だった。しかも例え制限され、力の大部分が出せないとは言え爵位持ちの上級悪魔だという。その上、この悪魔はネギ・スプリングフィールドの大いに関係していた悪魔だった。数少ない爵位持ち上級悪魔の一体として、その悪魔は呼び出され、そしてウェールズの、ネギが育った村を壊していったものたちの一匹であり、村人を次々と石化させていった犯人だったのだ。

「クッ、君たちの勝ちだ……」

そのことを知ったネギは魔力を暴走させた。もとより魔力のコントロールが少し苦手であった少年は、その暴走によって発揮された己の力に驚愕する。しかし気付いたときには遅く、悪魔の光線がネギを襲おうとしていた。だが、その悪魔に追われていたいつぞやの狗族の少年『犬上小太郎』が間一髪で救助、そしてネギは本来の落ち着きを取り戻した。かくして、共に戦うことになったネギと小太郎の連携もあり、悪魔『ヘルマン』は徐々におされ、そしてネギの魔法『白き雷』を貰い、魔界へと還ろうとしていた。

「いいのかな？私にトドメを刺さなくて……」

しゅっ、と音を立てながら徐々に消えていくヘルマン。彼は魔族であり、召還という契約をもって現界する。トドメを刺さなくてもヘルマンは消えるが、それは倒したことになるらず召還という立場が消え、魔界へとただ帰るだけになるのだ。さすがに現界してからのダ

メージは受けるものの、傷を回復すれば問題ない。もとより人間より遙かに頑丈な生物なのだから。

「……僕はトドメを刺しません」

ハッキリとネギは言った。その表情には迷いの言葉の欠片もない。再度ヘルマンに、問われるが、それでも答えに変わりは無かった。そのネギの答えに大きく笑うヘルマンはとても愉快で、歓喜に満ちあふれていた。彼は悪魔といえど、少しはマシな部分があるのかもしれない。

「いつか絶望するかもしれないぞ？」

「それでも……です」

答えは変わらない。ヘルマンの小馬鹿にしたような笑いは鳴りを潜め、満足そうにフフ、と鼻で笑った。

「まったくつまらん、ヘラス帝国第三皇女 テオドラの護衛君とやらも出てくるかと……お……もった」

そう、そのことは突然起きたのだ。満足の笑みから一点、まるで化け物を見た子供の如く、彼の目は大きく開いた。同時に空気が変わったことを誰もが感じた。俗に言う「嫌な予感」とも言えたかもしれない。嵐の前の静けさ、と表現も出来るほど空気が変わった。そして……

ガンッ！っ！と一本

ガンッ！っ！と二本

ガンツ！！つと三本

ガンツ！！つと四本

「ぐあああああ！！」

空から剣が振ってきた。それぞれヘルマンの手足の先に突き刺さり、無理矢理”還る”ことを妨害したその剣。深く深くステージに、その悪魔の肉体にまるで拳銃のような構造をしている剣が刺さっていた。ヘルマンの表情の全ては痛み。最後の力で動こうとしても、剣から血を巻き上げるだけで動けない。そして、彼の眼は”最期”にそれを捉えることになる。空から人が落ちてくる、その人は口を開けて、本来声が届かないはずなのに、それでもヘルマンの耳に確かに届いた、届いてしまった。

「な？絶望しただろ？」

悪魔の思想はそこらで終わる

。 た つ

下向きに剣先を向けてそのまま落下してきた”狙撃手”。その剣は見事に悪魔の頭部を貫いていた。あまりに突然、そして冷酷で無慈悲な一撃。

「（やれやれ、なんとというヤツだ……あのヘルマンとかいう悪魔も運が無い）」

遠くからその様子を見ていたエヴァンジェリンは、その光景を見た。自分ですら彼の登場は予感することも感じることも出来なかった。そこで、ブルブルつと寒気を覚える。人が歩くように狙撃手が剣を突き立てたことに、もしかしたら恐怖を覚えたのかもしれない。

「し、シックス……さん？」

「ん？なんだ莫迦餓鬼。トドメを刺したかったか」

何のことかわからない、と空気を読めない様子の狙撃手が、ネギに振り向きもせず淡々と答えた。側にいた小次郎も、かつて戦ったソレとはまったく異なる彼の表情を見てしまい、ガクンと膝を曲げた。なんてことはない表情、いつもの無表情だった。

死を石ころと見ているような、そんな無関心で無気力で、無謀な目の

「違います！……確かに彼は悪魔で、トドメをさすべきだと思います

す。でもなんで……!？」

「いい質問だ、莫迦フィールド」

「え？（莫迦フィールド？）」

その質問にご機嫌な様子を表した狙撃手だった。手を大きく天へと広げる。しかし声の恐ろしいこと。アクセントも何も無く、機械音声の如くただ台本を読んでいるだけのよう。狙撃手は嬉しそうに顔を”歪め”て、悪魔だからどう、とかそういう話を聞いてないように答えた。

「答えはいつも一つ、コイツがテオドラの名前をイヤらしく口にしたからだ。ん？ああ安心しろ、おまえ達がどうテオドラを呼ぼうが”おまえ達”には何もせんよ」

ゾクリとネギは背筋が凍る思いだった。彼の側へ捕まっていた少女達が集まる。それぞれの顔には困惑、批難、ネギのことを想う顔、目の前で命が無くなったという現実には驚く顔、様々であった。しかし誰もその感情を口に出すことは無かった。

「ハハハ」

と狙撃手の乾いた笑い声がステージに、少しだけ響いた。だが、そんな時にようやく力を振り絞って彼に声をかけた存在がいた。

「ねえ、シックスさん」

「なんだ神楽坂嬢」

神楽坂明日菜だった。チリンと鈴をならし、神妙な顔で彼と向き合った。そのときに見えた彼の真つ赤な目に少しも怯えた様子も無く、狙撃手はその肝の太さを褒めるべきか、それとも共にテオドラへの愛を語ってくれるのかという歓喜か、半々と言ったところだろう。

「そんなにテオドラって人のことが大切なの？」

ピシリと空気を止まった。

「ああ、勿論だとも神楽坂嬢。彼女は俺の全てだ」

「その人を幸せにしたいの？」

「無論だ」

狙撃手は嬉しそうに答えるが、明日菜は疑問を覚えた。疑問というよりも違和感。確かな違和感だった。ペンギンの群の中にガンムがいるぐらいの違和感。まるでその言葉は彼の腹の中のスピーカーから出ているのではないかという、そんな不思議な感想を覚えた。

「じゃ「止める神楽坂明日菜」エヴァちゃん!？」

空気がまた元に戻る。灰色の世界だったが、色が蘇った。明日菜の声を遮ったのはエヴァンジェリン。その隣には従者の絡繰茶々丸もいた。

「止める、と言ったんだ。お前”達”にはコイツの思考は理解出来ん」

でも、と声を上げる明日菜だった。彼女は狙撃手の何かに気付いた

のだろう。しかし、それではあまりにも……ひどすぎる、彼のその考えがまさか「彼自身による考え」では無いということなど。問われなかった問いだが、「シックス」はフルフルと頭を振って応えた。人間のように、先程とは違って感情のこもっている声だった。

「まあそうだろうな、まさしくそうだろう。……だから何？」

やれやれ、と息を長く出しながら「シックス」はそう言った。明日菜はあまりにも普通に「だから何？」という返しに何も言えなくなかった、まるで子供みたいな言い訳、だけどとてつもなく的確を得ているという矛盾。エヴァンジェリンですらそうだった。エヴァンジェリンにとってはある意味予想できた答えだが、その思考をふまえて、そういう答えを出すとはさすがに予想外だったのだ。だから、だからこそ、これだから、シックスは強いと。もはや尊敬の値するレベルでエヴァンジェリンは思った。

「俺は銃だ、兵器だ。誰かに使われないといけない。目的あってこそ俺だ。まあ少し……壊れているがな」

苦笑しながら狙撃手は答えた。それをハツとし聞いて謝ろうと口を開いた神楽坂だったが、それは口に出ることはなかった。なによりも謝る相手が手で制してきたからだ。「問題無い」とハツキリ述べ、シックスは影の中へと沈み込んでいた。

「（さすがだアスナ姫。お前がN.O.3だ）」

言うまでもなくN.O.2は自分で

もちろんN.O.1はテオドラである。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

第二十八射 己を弾丸に（後書き）

狙撃手のヤンデレ思考の正体ですね。

思い出してほしいのは、シックスに最初に与えられた役割について、
ですかね。

結局、衛宮んと同じように壊れているのですよ。

実は最期の明日菜の話はもうちょっと長くなるつもりでした。

でも、シリアス（爆）が続くと見たくなくなりますよね（自分はな
ります）

そして次回、いよいよ「テオ こいのうた」公開予定

「さあ諸君・・・派手にいこう」

テオ こいのうた(前書き)

あえて なにも いうまい

テオ こいのうた

「テオドラ様、シックス様からいつものお手紙と、やはりいつものお荷物が」

魔法界ヘラス帝国帝都国城某第三皇女の部屋、お付き従者がいつものお手紙を持ってきたようだ。従者が入ってくる前まで、部屋の中をソワソワ動いていたり、鏡に向かってなにかをしていたりと、妙に落ち着かなかった様子が一転、従者が入ってきた途端にシャキーンと身なりを整えた。従者はもちろん、そんな第三皇女の様子をしつかりと把握しており、手紙を食い付くようにみている様はさしずめ犬、尻尾があるのならばブンブン振り回しているだろう。生憎、角はついているのだが……

「おお！……ゴホン。そ、そうか。……荷物？また何か送ってきたのか」

そう”また”である。シックスからの贈り物は沢山あるのだ。しかし、今回ばかりは何かが違っていた。それは毎週送られてくる手紙や、時々それに付属してくる荷物（奉納品）をテオへ送り届ける熟練の従者が（性別では女性の）その何かが入っている箱の”重み”を感じ取ったのだ。木目が美しい大きめ箱に入ったものが気になる第三皇女は、チラチラそっちのほうを見ながら、妙にニコニコしている従者から手紙を受け取った。

「やれやれ、マメなヤツじゃのう、フフ……、お主まだおったのか？」

「はい」

微笑みを漏らしたが、従者に見せるつもりは無いそう。とはいっても、帝国内の特に侍女達の間では二人の関係のことをよく知っている。シックスが毎週手紙を送ってくることも、奉納品が時々付いてくることも。昔からじゃじゃ馬第三皇女のことを知っているペテランの侍女からは、涙を流されその成長に感動したという。本当にありそうだから困る。

「む」

「どうかなされたので？」

”邪念”がこもってそうな封筒を破ろうとしたとき、皇女は何かを思い出したようだ。手の動きをピタッと止めると、その日の日にちを確認し、納得したように頷いた。従者も同じように日にちを確認するが、さすがになんのことかわからなかったらしい。

「そつえば、シックスが来て21年目じゃ」

「なるほど。ようやくシックス様も21歳ということですね」

「……アイツ妻より歳下じゃったな」

シックスの生誕に関することは徹底的に隠されている。しかし、この従者はその日、生体兵器エックスが見つかったその場にいた従者であり、シックスと皇女の間をよく知っている間柄で、二人もこの従者を信用している。シックスの出生・年齢などは帝国でも今では重鎮の一部、それこそ俗に言う”良い奴”ぐらいしか知っていない。実はかつての艦長もその中の一人だ。何故か出世街道を音速機でかつ飛ばすぐらいの勢いで凱旋し、今では妻子持ちのヒヤッハーア人

間になっている。

「そっか、あれからもっ……」

昔のことをゆっくりと思い出す皇女。彼女は頭が良い、いや、良くなくてもその日のことは全て思い出せるだろう。それぐらい、印象深く、まさしく運命（Fate）というヤツなのかもしれない。

「おい！お主！しつかりするのじゃー！」

妾とソイツの出会い是最悪じゃった。まあこの後、よく考えた結果気付いたことじゃったが。なにしろ……シックスは裸じゃった。いや、まさかあんなに……それは置いておく。最初が真っ裸であった出会いという最悪じゃったが、その出会いそのものは最高と思う。今後のことを考えてみると、実に恥ずかしいがの。緑色の液体が入ったガラスのケース。”実験動物”と言っても違和感が無いほどの状態。普通ではなかったの。

「調子はどうじゃ？」

「悪くは、ない」

次の日のこと、速くもそやつが目を覚ました。内心その回復力に驚きながらも、それでもやはり声が少し擦れておった。どれほど長くしゃべってないか、ケースの中で育っていたのか、あんまり想像はしたくはない。研究レポートを見る限り苦痛も伴っていたみたいじ

や。そやつはキヨロキヨロと忙しく周りを見渡しかと思うと、こちらをジッと見たりと。好奇心旺盛でなによりじゃ、フフン。妾の美貌に釘つけというわけじゃな。……今でこそ敵が多いので油断ならんがの。

「サーティシックス・・・いや、ダブルシックスでいいか」

正直名前を聞かない方が良かったと思う。明らかに”36号”に関する名前じゃった。じゃが、説明を聞いたところ記憶は消し飛んでいたはずじゃ、だとするとその名前はよっぽど印象深いことなのか。しかし、そやつの顔を見る限りその名前に嫌な様子は見せなかった。そこで妾が名前に関することを言っても、むしろ記憶を刺激すやもしれん。

「む、そんな名でいいのか？いやお主がそれでいいと言つのならそれでいいのじゃが」

そうじゃ、そやつが前に進もうとしているならばそれでいいのじゃ。正直内心焦っておったが、口ごもることもなかった。皇族という人々のご機嫌取りを受けるためかばーかーふえいすが得意でよかったよかった。さすが妾、痺れるのう。そういえば、その後こそやつが妾を護ってくれたと言つたのじゃったな。阿呆な騎士が表面上でするのではなく、心から……すまぬ、ここカットで。しかもじゃ、そやつは……シックスは記憶をもっておった。昨日の報告から色々整理して思い出したのじゃろう。本当は、帝国はシックスから恨まれるはずなのじゃが、それでも、それでも言ってくれたのじゃ。

「俺には戦うことしか出来ません。けれども・・・貴方だけは守ってみせます」

<もげる

「うっうっ」

「顔に出てますよテオドラさ」見るな！」oh……」

恋に焼かれている真っ最中でもがき苦しんでいた皇女に、あえて空気を読まない従者の冷酷な一声。ただでさえ真っ赤な顔のテオドラ（with ニヤケ）が更に真っ赤になる。照れ隠しに従者に向かって手元にあつた枕（もらい物だが誰からかは言うまでもない）を従者にぶん投げた。一方従者は上半身のみでその枕を回避、冷酷なことにその枕は空中を切った。その動きは全ての攻撃を回避するぐらゐの勢いだったらしい、残像だ。

「（なるほど、これがシックス様の言つてた『萌え』ですか。さすがです）」

「チッ」

乙女らしからぬ舌打ちをする皇女。外見ではボンキュッボンの美女の彼女はもう三十路。といつても長寿族であるヘラス族の年齢である、人間に換算するとまだ十代である。これは美味しい。微笑ましい皇女の様子を見ながら、その皇女の状態を今日本で死にかけているであろうシックスにどう伝えるべきか、非常に悩んでいる従者だった。

「そんなことより……て、手紙じゃー！」

誤魔化すように、声を張って封筒を切る。なんの変哲もない便箋13枚。ところどころ力のいれすぎて黒い穴が空いているのはいつものこと。便箋13枚のうち12枚が近況報告とまったく関係ないことも復習程度に覚えておいてほしい。12枚のピンク色を通り過ぎてもはや暗黒色になってきている便箋に目を通し、笑ったり、顔を赤くしたり、その手紙の中に「莫迦弟子」の四文字が入っていて微妙な顔になったり、次にはその莫迦弟子を「異魔神^{イモジン}」とか書いてあってざまあと思ったり。

「ふむふむ」

「（フヒヒ）」

ガタつと立ったかと思うと、その12枚の便箋をどこからか持ち出したファイルに挟み込み、呪文を紡ぎ封をする。門外不出の暗黒ファイルの誕生である。シックスが手紙を送るようになって、だんだん暗黒色の内容も増えてきたのだ。テオドラ曰く「こ、これは封印して邪念を取り払って処分するんじゃ！勘違いするのではない！」とのこと。封印^{ファイル}ごとその邪念オーラを放っているのは気のせいらしい。

「えーっと、どれどれ」

く拝啓 親愛（略）テオドラ様へ

（さらに略、暗黒便箋12枚分のお経）

この腐った日本という国では夏に近づいてまいりました。

いっそのこと絶対零度魔法をかけながら走り回りたい気分です。

そうそう、前回報告しましたように、京都という古都へ行っ

りました。

そこで安くて良い土産があったので購入しましたので、送らせて頂きます

次はテオドラと一緒に京都へ行きたいものです。

さて、報告というものではないのですが……

京都にて『完全なる世界』のウンコ共が活動している節がありました、死ね。

アーウエルンクスとかいう三番目のシルバニアファミリーもいました
たが撃退。

とは言っても生物なまものですので

生きたままそちらに行く可能性があります、死ね。

今日も元気だテオ可愛い。

く敬具 シックスより

「（これはひどい）」

ツッコミどころが満載である。勿論暗黒便箋のほうにも沢山あるのだが、皇女にとってその部分は封印指定のどうでもいい存在だという。こんな普通に『完全なる世界』のことをサラっと言つてのけるあたりがシックスだと、改めて実感した皇女。そして所々にある『死』という単語には必ず穴が空いている。どれだけ憎しみを込めたのか考えたくもない。

「（シルバニアファミリーって……）」

アーウエルンクスのこともある。それなりにやばい事態だといのに、シックスからの手紙には重要度がシルバニアファミリーという単語以下に見えて、重要度の上下の変動が激しくて困るのだ。シックスの”中身”のこともありただでさえ普通に考える優先順位がバラバ

ラになつてゐる彼だ、今頃日本の麻帆良学園で高笑いをしながら銃器を磨いているころだろう。

「（毎週毎週、マメなヤツじャのう）」

定期的に送つてくる手紙だ、内容を考えるのも面倒になるかもしれない。しかしシックスはちゃんと送つてくるのだ。帝国を旅立った日「もう来ねえ」とか言つておきながら、翌日には速達で「帰つていいですか」などと巫山戯たことを言う彼。彼にとってはそんな面倒なこと第三皇女のためならば！とその気になれば三日に一度のスペース配分を行うことも出来るだろう。

「土産……これか」

「どうぞ」

まだいた従者にビクつとしながらも、よく考えたらいつものことなので放つておくことにした。手紙を読み終えた皇女は、すこしばかり落ち着いた赤い顔で従者から土産を受け取る。従者は自ら手紙の内容も見ようとはしない優秀な存在だ、実に有望でもある。木目の箱、金色の文字が書かれているがテオドラや従者にはなんて書いてあるかわからない。

「布……？羽織る服か？」

「これは着物ですね」

ほうkimono？、と従者の言葉に感心する。木目が綺麗な箱の中に入つてゐたのは、皇族である彼女ですら口から声が漏れたほどの”おーら”を放つ地が黒の着物。シックスが送つたのは日本の和

の心の結晶であり、文化の極みである着物。その中でも”大振袖”と呼ばれる袖が長いタイプの着物だ。黒を地とし、桃色や紅色の花が描かれ、アクセントとして金の刺繍。テオドラは知らないが、帝国の紋様らしきものが俗にいう”五つ紋”として、それに加えてある薄い桃色の帯が目立っていた。

「着物？」

「そういえばシックス様は日本に行ってたんですよ、その日本の礼装ですね。その種類だと……婚礼？」

ボンツとテオドラの顔が（より）赤くなつた。もちろん従者はそういう反応を期待してニヤニヤしているわけだが、あながち間違つてもない。シックスがどういう意図で送つたのかはサツパリだが……、従者はその眼力で大振袖が皇族が着ても恥ずかしくない、むしろ相應しい一品だと見抜いた。ひっそりと入っていた領収書には桁が全部で7桁の乱数字、もう少しで8桁に届こうかというぐらいだ。最後には通貨を表す言葉、従者といえど相場はわからなかったが、雰囲気はすごかった。

「ニヤーーー！ニヤーーー！！」

「ふむう、ですが着方がわかりませんね。こういうのは帯の結び方やらなんやらが決まっていますから……専門家を呼びましょう。うう、ついにこの日が」

「いや、しかし……お主がどうしても言つなら……うふふ、そうじゃろ？……だ、ダメじゃ！まだ日が……」

話し合っていたはずなのに、従者は皇女を無視してその専門家に連

絡を取り始め、皇女の頭の中で”何か”が起きていた。いやんいやんと手を頬に当てながらクネクネしている様子と、妙に張り切っている従者は感動の涙で前が見えなかったという。

「I'm a thinker」

シックスが歌っておった。いつもいつも歌う歌じゃったな。聞けば旧世界の言葉らしい。道りでまったく意味不明じゃったわけじゃ。まあ例え知っていたとしても歌というものは大抵文法やらを無視するのがアレじゃからな。歌う人聞く人によって意味が変わってくるもんじゃ。特に思考回路が違うシックスだと、それは尚更大きく出てくるものじゃろう。

「I could break it down」

そんな妾でも一つ気になることがある。どうしてこやつはその歌を……悲しい顔とも違う、しかし嬉しいわけでもない。とりあえず不思議な顔をして歌うのじゃろうと。顔、というより目なのじゃがな。いつもの真つ赤な目がフードの奥から覗いておる。普段は不透明の血色なのじゃが、この時ばかりは半透明であり、しかし底が見えない沼のような……。

「なあシックスよ」

「なんだ」

「お主は何を想ってその歌を歌う？」

正直に聞くことにする。シックスの中身のことはある程度理解しておるつもりじゃが。戦後からもう長い。壊れておった思考も大分回復してきおてる。学習ぐらいはシックスでも出来るし、何よりシックスにとつて刺激的な日々じゃったから。……やつは”空”だった。目的という液体を注ぐ空っぽの存在。中身をつめるのはあたりまえじゃろう？問題はいくつ目的が入るかどうかじゃが、さて。まあ無理矢理詰め込んでもいいの、多分大丈夫じゃる。

「そうだな、9割がテオドラで1割が……」

「1割が？」

珍しく口を閉ざした。聞けばなんでも話すしなんでもしてくれるシックスにとつて非常に珍しいことじゃった。まあ正直予想は出来ておるのじゃがな。こやつは”兵器”として存在する。目的を達成するための道具として、持ち主（妾）が使いこなす道具……、まあ「だから何？」な話じゃな。世の中には考える道具もあるのじゃぞ？インテリジェンス何とかという奴。いつか、自らで目的を見つけ、自ら生きてほしい。それが妾の今のただ一つの願いじゃ。

「壊れた俺はどこに行くのだろうか、つてな」

「壊れた道具は直せば良い、改造も出来るぞ？」

結構ひどい会話だと思う。シックスが己の存在について考えていることも、それが”だから何？”という風に考えておきながらそれに縛られるしかないことも。だからこそ妾は正直にシックスを”道具”じゃと言った。今更じゃな、20年たった今では互い互い遠慮す

ることも無いじゃろう。それに……

この程度で嫌いになったら泣いてやるのじゃ

「ふむ、善処しよう……I'm a shooter. A drastic baby」

一瞬だけ、目を大きく開いて驚いておった。が、すぐに笑い（結構かっこいい）また歌いだす。狙撃手としてのあり方と、狙撃主としての誇りと、シックスたる概念で、シックスたる価値の、奴が奴を示す恋の歌。意味はまったくわからんし、知ろうとも思わない。なぜならば……伝わってくるから。その歌こそシックスで、シックスとしての全てがその歌に。

「All are as your thinking over」

これでも皇族じゃ。言葉の違いなぞ越えてやるのが普通じゃ、多分。

I'm a thinker.

妾は考える

I could break it down.

その巫山戯た思考回路をぶち壊すため

I'm a shooter. A drastic baby.

その体撃ち抜いてでも……

「そつじゃシックス」

「ん？」

お主のためならどんな壁でも越えてやる。妾にここまでさせるのじや、少しは……ゲフンゲフン。お主が深く暗い深海まで行くと言うのなら、残念じゃろうが妾もついて行くぞ、戯けめ。そうすればいつでも話すことも出来るし、いつでも妾の肩を抱けるのじや！

「祭りがあるみたいじゃが」

「いつでもお側に」

お主の歩く音、戦う音、生きる音。妾に全て聞かせてもらおうのじや。ん？だつて妾皇族だもん。まだまだ満足しない、こやつとはもつと一緒にい……、その前に、こやつをちゃんとした生き物に調きよ……教育しないとな！少し不満じゃが、外を見てくるようにさせなくてはいけない。ふむう、現地妻でも見つければ解決しそうじゃがなあ。もちろん反対じゃが。こいつが見つけれるかどうかは微妙じゃが、寄ってくる阿呆はいそうじゃな、マナとかマナとか。

満足せずして何が皇族か

T o b e c o n t i n u e d

テオ こいのうた（後書き）

皆さんが満足出来たかどうか、正直不安であります。

第二十九射 チャオズ（前書き）

物語的に言うと

新章開始みたいな

第二十九射 チャオズ

例えばの話をしよう。世の中には触れてはならぬものがある。それを触ってしまったときの話だ。何が起きるのだろうか。そこで一番問題となるのは”何に”触れてしまったかどうかだ。触れてはならぬもの、様々だが有名処を上げるならば過去現在未来万物の知識の源泉『アカシツクレコード』だろう。可能性があるかぎりその知識は永遠に無限に増え続ける、そんなものに触れてしまえば人間などすぐに沸騰（しちゃうよお！）だ。そもそも実在するのか実に怪しい。誰も触れることの出来ない眉唾存在であるのにもかかわらず、やはり永遠に誰かが目指す処なのであろう。いや、もしかしたら…：噂されるのだから誰かがソレに接続し、尚かつ生きて帰ってきたのかもれない。あれだ、よく怪談で使われる『生きて帰ったものはいない』というあれだ。さて、そんな触れてはならぬ物を上げてみたものの…、特に何も言うことは無い。接続して水蒸気になるのもよし、帰ってその知識を披露するのもよし。結論を言うところ

「うるせえ」

そう実に喧しいのだ。梅雨も明けた、いよいよ暑くなってもうすぐ夏休み。しかし、その前にはこの麻帆良学園には学園祭なるものがある。学園都市である麻帆良総勢で行われる祭だ、さぞや豪華なのだろう。しかし考えてみれば、祭そのものというのは非常に良い。良いが準備に時間がかかる。規模が大きいほどそれは顕著に顕れる。いや、祭の音だけならば非常に良い、太鼓の響きなどは風情に溢れている。そこは問題ないのだ。では何か？

「……うるせえ」

火炎放射を持つて彷徨きたい気分だ。しかし今彷徨いても何かコスプレをしている程度にしか見えないだろう。外を見れば、予想通り祭の準備、というか既に仮装を始めているものもいる。出し物の宣伝をするもの、何気にパレード風の豪華なものであるのだが。さて、諸君。覚えてほしいことがあるのだが基本俺は子供が嫌……苦手だ。無茶なことを言っていると思うが子供が自己中心的に騒ぐ。あのキーキーキー耳に響く莫迦声をどうにかしてほしいものだ。とは言っても、今回ばかりは俺は極めて少数派のため、弾丸を転がしながら我慢することにしよう。何より相手は一般人だ、最近一般人でもヤツてもいいような気がしてきたが……気のせいだといいが。

「こういう日は寝るに限るな」

一応絶景ポイントだ、俺の部屋の屋上は。暇つぶしにと木を植えてハンモックでゆらゆらしながら読書タイムなのだが。まあ知つての通り昼間は五月蠅い。更にただでさえ麻帆良の中でも高さに最高レベルの屋上だ、日が心なしに強いような気がする。温度的には大丈夫だが、直接日光はやばい。あと外が五月蠅い（大切なこと）。横目でチラッと見てみれば大通りでなにやら凱旋門もどきのモニュメントまであるわ、気合い入れすぎだと思う。前夜祭の時にその凱旋門に広域立体制圧用爆裂焼夷擲弾筒ウラディミールでもぶっ放してキャンプファイアーを……。人々の涙と恨みでそれはもう綺麗で鮮やかな鮮血色の炎が巻き起こるだろう、いかんお腹が空いてきた。

「狙撃主シックス、ようやく見つけたネ」

何を隠そう、それが俺の趣味だ。具体的に言うと『天賦の才を持つ人間が、その才能を完全に伸ばすことなく、心半ばで死に絶える』光景みたいな、それを鑑賞したりと。実際に実行してみたりと非常

に良い。悔しさと後悔の念で涙を流す『あの時もう少し頑張っておけば』と、なんと風流で趣のあることだろう。

「は超 貴 調 はと 付 三」

出来れば、自分の将来が見えているものだと言いたい。世界で最も成長している企業の御曹司が、その企業を貰い受けるその日に本社ビルが炎上する。それだけでも俺は満足する。追加するならば御曹司が啞然とする光景も目にいれたい、そして録画して世界に配信したい気分だ。世の中はさぞや幸福に包まれることだろう。惜しむらくは魔法界では無いことだ。というか魔法界では禁止された。我が愛しの主様に。なんでも性格がひねくれていているらしい。おお、なんということだろうか。嘆かわしい、だけどテオの命令ならビクンビクン。

「 協 し 狙 間 」

生憎だがテオの幸福にまつたく関係の無いことなので、この世界ではやらない。不思議なことだが、テオが言うには俺のこの趣味はまったくテオの幸福と関係ないらしい。それならばしょうがない。遠くから『ごく普通に自然発生』した人の不幸を舐め取るように見るとしよう。そういえば……、テオに送った奉納品に喜んでくれただろうか。皇族にはちよつと地味なような気がするが……、まあいい。寒くなったときの燃料にもなるという一石二鳥な物品だったから。いや、嫌いな奴の首をしめるときの布にも使えるということは一石三鳥……！？なんということだ、実に美味しいじゃないか。だがそう考えると（略）（略）（略）（略）

「 不 」

いかんいかん、無駄な永遠思考のせいで隙が出来てしまった。これは非常にやばい。狙撃手たる俺が内に引きこもるならまだしも、外のことを忘れるなぞ言語道断。思考分割マルチタスクもしようと思えば出来るのだが、いかんせん地味だからな。実は俺が吸収した命の代価と情報を形成する魂の分だけ分割出来る。その気になればスーパーコンピュータとやらにも勝てる、らしい。ただし今の姿だと人間サイズなので無理だ。固定を解いて脳味噌の増設にいそむ必要があるというわけだ。固定なんか解くと俺大変なことになるから解かないけどな。

さて、今日という日は実に素晴らしい日だ。外がやかましいという点を考えなければ……いや、例え今日のように五月蠅いとしてもそれを大幅に上回る良さだ。何を隠そう、俺が”ココ”に来て早21年目。以前のことはほとんど思い出せなくなってきたが、それはどうでもいい。変に覚えていてもしょうがないことだ。21年前の今日俺は始まった。はじまりはとつぜんに、なんてレベルじゃない。起動して数十秒後にテオに合うという幸運もさながら、俺は一体どこへ行くつもりなのだろうか。

最初のほうこそ、ただ面白がっていたただだが今はそんなつもりはない。現に真剣マジで俺の心が壊れているということにも気付いた。やはり投影は色々やばい。属性の件もあるし、やはり不安に思っていた。俺の思考（天才愛）は借り物かどうか、という不安だ。俺の本当の考えは一体どこにあるのだろうか？あの埃と煙の赤銅色の工場街も、昔は時々見る程度だったが今はそれしか映っていない。精神

崩壊が進行している原因は投影か。まあ結局……

「そんなことはどうでもいい」

「ほう、さすがだネ。では本題に」

借り物の思考だろうが、本心だろうが……俺の感情だ。そもそも否定することなどありえない。自分で自分を否定するとは、黒歴史を思い出した大学生かお前は。そう考えると実にすがすがしいものになった。つまるどころ、テオドラは最高ってことだ。ここは是非テストに出してほしい。最近、テオドラのことを考えて意識が飛ぶなんてことも少なくなった。これは一体どういう原因でこうなり、どういう理由で収まってきたのかサツパリだが……テオに報告すると文体上喜ばしいことらしい。ならばいいだろう。

「？ 主力 間 ツ！」

I'm a thinker. 俺は思想家、その考えはどここの存在か。そんなことはどうでもいい。一番肝心なのはどんな思考か、ということだ。嘘も突き詰めれば本当になる。うむ、実に素晴らしい言葉だ。俺の想いよテオドラへ届け！！ヘラス帝国のテオドラへ届け！

「で？お前は誰なんだ？」

「エ？」

「……………」

超鈴音は啞然とした。何を隠そうこの正面に、こちらに背を向けているフードの男が「まったく聞いていない」からだ。噂通り、嫌な部分で的中したと胸にこみ上げてくる不安が露わになる。てっきり聞いているかと思ったら……名前の部分、つまるところ最初っから聞いてないという。主以外は最低限でしかない彼が、まさかここまですとは思わなかったのだ。

「なるほど、答える気は無いというか」

「ままま、待つネ！」

ガチャンと撃鉄を起こし出した狙撃手に慌てて手を振りながら答える。確かに答えることは出来なかった、しかしそれは名前を明かすことにためらうとかそんな話じゃない。ただ啞然とし、反応が遅れただけのだ。その程度で銃を向けてくるとは……、いやまだそこはいい。一番問題なのが『話をまったく聞いていない』ということだ。俄に信じがたい。夢であつてほしい。妙に力説していた自分がただの一人芝居だと気付いたとき……彼女の心情は羞恥で一杯だった。結構半端無いレベルで。

「本当に聞いて無かたの力!？」

「……………何を？」

「(うわー)」

残酷な現実テンシの正体テーゼを知り、なんとも言えない感情が心底から滲み出す。『やっちゃまったぜ!てへっ』なんてレベルじゃない。非情な現実の前に、彼女はがっくりとうなだれるしかなかった。そんな理解

不能の光景を見ていた狙撃手はこの少女が一体何を目的としているのかサツパリ不明（聞いてないだけ）なので、とりあえず銃口を向けてみたものの……

「（……え？何？何かした？というかこの莫迦中国不法侵入なんだけど）」

珍しく混乱していた。彼から見れば、突然後ろにエセ中国人みたいな少女がいきなり背後にいて、名前を聞いたら慌ててがっくり頂垂れるという。5W1Hの大半が不明という状況。何か一人でブツブツ言っている少女に若干イラツキながらも解決策を脳内で求める。

「（銃殺……目的が不明却下。撲殺……面倒。埋める……どこに？コンクリがいいな。帰って寝る……よし、それだ）」

「あ！ちよと待つネ！」

危険な思考から一転、何がどうなって『寝る』という選択になるのかサツパリ理解出来ないが、とりあえず寝ることにした狙撃手がその少女に背中を見せた時だった。狙撃手はこの少女がただの痛い子としか見ておらず無視することも出来たのだが、どこかで見たことあるような気がしないでもないの……でも顔を向けることなかったが立ち止まった。

「私は超鈴音チャオ・リンシエンていうヨ！『帝国の狙撃手』アナタに話がある……ちよ！？待つネ！お願い待……うわあ」

そーなのかー、と呟いた狙撃手は部屋に戻ることにした。狙撃手は、正直名前を知っても特にどうでもいいという人間バケモノだったのを忘れないでほしい。ある意味本当の名前が無い彼にとって、名前とは肉塊

の識別用語みたいなものだ。彼が見るのは中身の情報だけ、テオドラ以外特こじボイントにエセ中国人という怪しさ格別満点大喝采の人間が相手だと尚更のことだろう。結局終始話を聞いてなかった狙撃手だった。

「（噂通りにもホドがアルー!?）」

うがぁ！と両手で頭を抱え込み、無人となった高層マンションの屋上で一人もがいた。その噂がまさしく彼そのものだという現実は、天才の彼女と言えど理解出来なかったらしい。ある意味彼と対等に話し合うつもりならば……彼と同レベルでテオドラを語るとというのが近道かもしれない。なぜならば、彼女もまた特別な存在なのだから。

『スナイプ・オブ・インベリアル帝国の狙撃主』に関する話を聞いたことがあるだろうか。彼はその名前の通り帝国……魔法界のヘラス帝国という超大国の英雄である。様々な亜人がたむろしていたその地域にて、頂点になり帝国を気付き上げたヘラス族にちなんでいる。その帝国の第三皇女テオドラ・バシレイア・ヘラス・デ・ヴェスペリスジミア、長つたらしい名前だが皇族だと考えると普通かもしれない。とりあえず第三皇女に仕える、護衛として存在するのが彼、ダブル・シックスだ。

彼の名前は魔法界全域に知れ渡っている。というのも彼は、先程述べたように英雄だからだ。それも大英雄と呼ばれるほどの存在である。英雄と言えば彼と同時期に存在した『紅き翼』の面々も数えることが出来る。とはいっても国内ではやはりシックスのほうが人気である。『紅き翼』の代表として『千の呪文』サウザント・マスターナギ・スプリングフィールドがいるが……そこはどうでもいい。シックスにまつわる話として有名なのが『連合と帝国』と略されている話だ。

『連合と帝国』簡単に言えばシックスは「連合にはすこぶる嫌われているが、帝国では何よりも人気だ」という話だ。大戦時において連合を壊滅においやったという観点からすれば、無理も無い話なのだが、そこで出てくる問題が『紅き翼』だ。彼らは大戦時、連合の戦力として参加した。つまりとところ、帝国の人間からすれば『紅き翼』、連合の人間からすれば『帝国の狙撃主』が嫌われるのも問題はない。

しかし、帝国内でも『紅き翼』は人気がある。そりゃ世界を救った英雄だ、当たり前だろう。そこなのだ、問題というのは。何故狙撃主は当たり前前に連合に嫌われていながら、『紅き翼』は関係ないのか。それは日夜様々な憶測が交錯しているが……。有力候補なのが「元老員じゃね？」という意見だ。どこの国、世界でも政治家というのは腐った奴が多い、そういうことだろう。だが、ここまで色々語ったが結局は人それぞれだ。連合内でも狙撃主に憧れる少年はいるし、妙に金がある（理由は不明）狙撃主のファンクラブに所属している存在もいる。

さて、もう一個有名な話を上げるならば狙撃主の思考回路についてだろう。彼が主である第三皇女の護衛で、彼女以外には働かないとはこれまた有名な話だ。その結果、殺す殺さないがかなりシビアなのだ。大戦終了後、彼は帝国内のみで働いていた。彼の仕事内容は「帝国内の賞金首、犯罪者、犯罪組織の抹殺」だ。そこで彼の性格が顕著に顕れる。9割が死亡、1割が精神に異常をきたすという残酷な結果しか残っていない。さすがにこれでは帝国連合関係なく、「平和」を唱う人間には眉をひそめてしまう話だろう。

そういう部分では、帝国にも反感を買う存在はいる。だが、結果として帝国内での犯罪は激減（おかげで連合内で激増）していると、

それを表だって言う人間はいなかった。むしろ「殺さなくては解決しなかった」問題も解決しているという。例え戦争を生き抜いた軍人でも、自ら進んで殺すことはほとんど無い。戦争以外では「殺す」という行為は”犯罪”である、だからこそ倫理的な……。

シックス自身がどう思っているにしても人々から見れば「自分達を護るため手を汚す」という聖人に見えてしまうのだろう。もちろんシックス自身は第三皇女以外を護るといふ行為はしない。ただそれは第三皇女を護るといふ過程の間にあるだけだ。それに加えて「妾仕事する男が好きじゃ」といふ公式宣言の結果でもある。翌日へローワークが大いににぎわった。……例えば、公式には存在しない彼の弟子が、彼と対立したとき。彼は迷うことなく弟子を撃ち殺すだろう。それぐらいの思考回路を持つ。もとより”普通”の観点では無いのだ。彼が帝国を離れたのは、第三皇女の命令でもあるし願いでもある。兵器として存在する彼が、いつか……、という願いだ。

「ヒクシッ!」

「風邪ですか？テオドラ様？」

「噂なら十中八九シックスじゃろうがな……」

T o b e c o n t i n u e d

第三十射 造物主の畏（前書き）

いつのまにかPVが200万どころか250万逝ってました。
投稿を初めて二ヶ月でここまでとは、さすがネギまだと思います。
御覧なさる皆様に感謝とテオドラの愛を込めて。

フヒヒ

第三十射 造物主の畏

ピリリリリリリ……

「んああ？」

ガンガンに冷房の聞いた部屋の中で、もぞもぞと毛布にくるまっっている男が一人。ずるずる動いたかと思えば、枕元にあった赤色の携帯電話を手に取った。どうやら彼の携帯にメールが届いたらしい。彼は疑問に思った。なにしろ彼にはメールアドレスを交換するような友人はいない、作る気もない。携帯電話が鳴るということは大抵麻帆良学園の学園長からの任務通達程度だ。というかほぼ100%それである。ジジイからのモーニングコールに死にたくなったりする彼だが、数秒後にはその考えは忽然と消える。つまり、彼の携帯電話には電話しかかかってこないのだ。学園長側としてもメールなどという時間差がある物よりも速攻性のある電話を使うため、メールアドレスの交換などしていない。誰だ？という疑問を持ちながら彼は携帯を開いた。

「oh、It is dream」

これは夢です。ガシヤンと携帯電話をゴミ箱に投げた。携帯電話は綺麗な放物線を描きガコンと的中する。やれやれ、と堅くなった体を伸ばしながら彼はブツブツと呪詛のように何かを呟く。コキン、コキン、と体の様々な関節から音が響き、妙に心地よい感じを楽しむ彼だったが、顔は不機嫌そのものだった。何を隠そう、モーニングコールがジジイから異魔神『龍宮真名』に変わったただけだ。何を考えているのか、写真が添付さえている。彼は時計で現時刻を確認すると昼少し前、おそらく彼女が学園に行っているはずであろう時

間だ。

「（おかしい……俺が夢から覚めないとは）」

ゴミ箱に入っている携帯は開いたまま、画面には一人の褐色の少女（？）が映っている。彼女こそ狙撃主ダブル・シックスの一番弟子の龍宮真名。とても中学生とは思えない体つきで、成り立ちを見れば10人中7、8人は振り向くのではないか、というほどの美貌だ。褐色肌で黒髪は腰辺りまで伸びて揃えられている。どんな美貌であろうと、彼にとつてはどうでもいいことなのだが、一つ一つのポイントが何故か彼……シックスの好みをピンポイントにつつくという始末なためこの上厄介である。

「（ああテオドラよ。どうして貴方様はこのような過酷な試練を俺に）」

壁に掛けてあった十字架（っぽい銃器）をどこの宗教かわからない拝み方で拝む。彼女の姿だけでも彼にとつてはなかなかつらい。何よりも、彼の主であるテオドラに全てを注ぎ込む彼にとつては、その決意を打ち砕く邪悪な化身にしか見えないのだ。極めつけは彼女の服装。

「（なんで巫女服なのだ……いや、それを何故俺に送る？）」

ガツンガツン、と壁に頭を打ち付ける彼。画像の彼女は紅白が美しい日本の美『MIKO』の格好をしていたのだ。ただでさえ、隠れた彼の性癖を貫く彼女の美貌だというのに。これまた追加要素で彼の属性を見事に撃ち抜く『MIKOFUKU』装備だ、これはやばい。彼の頭が壁に当たる度に、壁にひびが入り陥没していくが気にしない。高層マンションなりに防音防震機構のため、下にすむ人々

には被害が行っていない、はずである。

「諸行無常 是生滅法 生滅滅已 寂滅爲樂」

悟りワードを連発し、胸を貫いた邪神光線に抵抗する、彼の脳内では、脳内シックス十常侍が戦争を起こしているだろう。一人一人が、行動こそ違うにしろ彼と同格の存在だ。それが10人一度に暴れているのだ。かつての戦いよりついに7対3になった状況だ。一見テオドラ派が有利に見えるが、裏切った3人は脳内シックス十常侍の中でも極めて攻撃的な感情を司っている。”滅殺”を筆頭に”究極””破壊”そして今でこそテオドラ派に戻った”絶望”だが、またいつ裏切るか定かではない。

「国破山河在 城春草木深 感時花濺淚 恨別鳥驚心 烽火連三月 家書抵萬金」

その言葉はついに漢語にも至り心を静める。愛の試練、愛の試練、という言葉徹底的に口にし己が”世界”を保とうとする。彼は思う。

「待て、慌てるな。これは造物主の罠だ」

まったく関係の無いことなのだが、とりあえず誰かの責任のしなくでは気が済まなかった。そうしなくては精神に、今以上（異常）の崩壊をもたらすことになるだろう。ぐわああ、と蠢きながら彼は毛布を被ったまま ずりずりという擬音が似合う 四つんばいで歩き回った。誰かに見られているならば、それこそ都市伝説『悟りワードを連発しながら愛の試練を越えようとするモコモコ』が生まれることだろう。非情に怖い、決して近寄らないように。

「そうだ、死のう」

ヒヤッハアア！と言わんばかりにバン！とドアを開けて外へ飛び出した彼。幸運にも目撃者はいなかった。しかし、妙に魔力を放っていたため少しだけ、魔法関係者に震えを与えてしまったのは余談である。数分後、死闘の跡と言わんばかりに削れて疲労困憊の彼が帰宅することになった。それは彼の弟子に見事に見られ、余計な出来事になってしまったのは……非情に残酷な話であった。

「（ああ……光が見えるよ……）」

「んー」

ご機嫌で包帯を巻いていく狙撃手と、動く力すら残っていない狙撃手。学校にいるはずなのに何故ここにいるのか？そんな疑問を考える余力もなかった。怪我は既に治っているのだが、師の性格に似たのか「え？どうでもよくね？」な感じだった。

数日がたった。麻帆良学園祭まであと一日。だが結局は前夜祭ということで盛り上がってしまう日だ。シックスは普段通り、学園長からの指令があれば動き、それ以外は寝る喰う出す遊ぶまた寝るといふ極めて不健全な生活をしていた。時には寝ていたはずなのに時間が変わってなかった、ということもあったほどだ。24時間寝るとは如何なものだろうか、さすがと言わざるを得ないだろう。

「何の話でしょうね？」

「んあ……」

一方こちらネギ・スプリングフィールド及び桜咲刹那。前夜祭で盛り上がるうと準備している最中のこと、おっぱい戦士源しずな先生から話があったのだ。どうにも学園長が彼らに話があるらしく、世界樹広場前に来るよう言ったのだ。何の話か検討もつかない二人と一匹オコシヨだった。広場に来ると、桜咲刹那が違和感を感じる。前夜祭ということでも麻帆良全域大いに盛り上がっているはずなのだが、どうにもその広場は、麻帆良の象徴とも言える世界樹の側にあるのにもかかわらず、人一人たりともいなかったのだ。

「あれは……？」

「お……ネギ君」

広場前には確かに学園長が待っていた。だが、彼の後ろにも多数の人間。スーツ姿の、いわゆる教師から、制服姿の生徒、はたまたネギ・スプリングフィールドの好敵手とも言える犬上小太郎の姿も。あいかわらず謎の学ランを装備しているが気にしない。タバコをくわえたタカミチもいたのだが、何の集団か見当も付かなかったネギだった。

「あのー、こちらの人達は？」

「うむ、ネギ君にはまだ紹介しておらんかったのう」

集まっているのは魔法先生、及び魔法生徒。という話だった。ネギは修行のためにここに来ているのだが、修行だからこそ計らいか魔法先生の存在を知らなかった。大勢の関係者に驚くばかりだった。先生達から筆頭に次々と握手やらと挨拶をしていく。特にガングロの教師からは強く握手されたが少年は何のことかわからず、桜咲刹

那もまた仕事以外のことでも目にするよりも大勢にいたことに驚いていた。

「一応……あと一人いるんじゃない。恐らく来ないと思うので説明するぞい」

あと一人、という部分にはネギだけではなく周りの関係者達にも驚きがあった。関係者達は「既に全員揃っている」と思っていたのだが、実はそうではなかったという。ほぼ身内という関係とも言える彼らですら知らない追加戦力。そこで思い当たるのが『狙撃手』だ。数ヶ月前から学園長の私兵として活動し、非情な存在であるのだが確実に任務を成功させ、あまつさえ狙撃手が現れてからは一気に楽になった、というのが正直な感想だった。ついに彼が来るのか、という淡い願望もあったが、どうやらそれは無駄であつたらしい。だが、やはり気になる面々としては面白く無い。とはいっても例えここで「腰抜け」などと挑発しようにも肝心の相手がいない。その上本物の狙撃手にとってそれはホメ言葉になるだろう。むしろ喜んで引きこもる。本当に面倒くさい性格をしていることで有名なのだ、彼は。

「まずネギ君、君は」世界樹伝説”を知っておるかな？」

”世界樹伝説” 毎年毎年流行る程度の噂だ。よくあるレベルの『伝説の木の下で告白したら成功する』という出所が個人の願望に満ちあふれている噂だ。普通ならば”ありえない”と一言で一蹴出来る。しかしここは何を隠そう麻帆良学園である。魔法という神秘が日常に隠れ潜み、尚かつ日々人外による攻撃にされされている（防御する側も人知外な人間）ことを一般人が知ることもない。そういう存在がいるからこそ、あながちその噂も本当なのかもしれないということだ。

「実はな……それ本当なのじゃ」

てへっ、という感じで舌を出しながら巫山戯る学園長に一同から若干殺気が飛んできたところだった。その噂というのはやはり本当らしい。しかし、と付け加えるには22年に一度という周期だと言う。それが丁度今年だという話だ。原理としては世界樹が溜めに溜め込んだ魔力が最も多い時期であり、俗に言う人々の願望を叶えるほどの高密度であると。その噂（誠）が麻帆良全域に伝わっており、確実にそれを実行しようとするものが出る。それを妨……阻止するのが彼ら魔法使いの役目だという。

「22年に一度の周期で魔力は外に溢れだし、世界樹を中心とした六ヶ所の地点を起点な魔力だまりを形成するのじゃ。この魔力が人々の心に影響するのじゃなあ」

ギヤルのおパンティおくれとか即物な物はダメじゃがな、と最後に付け加える学園長だった。思えばこの集会上にシックスが参加しないのもうなずける。他人の感情がどうかなるうとも、彼にはまったく関係の無い話であるからだ。むしろ、側に第三皇女がいるならば術式を用いてまで無理矢理魔力を引き出し実行犯にもなるだろう。そんな奴だからなあ、と学園長は内心ヒヤヒヤする思いだった。彼の碎けた常識を信じ、とりあえず説明を続ける学園長。更に付け加えて成率は120%らしい。20%がどういう意味なのかまったく理解出来ない。5人告白すると6つのカップルが出来るとかそういう話なのだろうか。

「天候は晴れ、忌々しい太陽だ。ガッディンム！」

突如ワケのわからない罵倒を呟いたのは彼の帝国の大英雄とも呼ばれた『帝国の狙撃主』ダブル・シックスである。麻帆良前夜祭ということもあつてか、既に祭が始まっているのではないかと言つても変わりがないほどの繁盛っぷりだった。そんな中、無表情なりに忌々しそうな顔をしている彼が歩いてきた。いつものローブではなく、どこにもありそうな普通の格好だった。サングラスを装着し、ほつたらかしのせいか白髪が風にゆれることも無い。麻帆良という特殊な地域のせいか、外見だけではどこかの怖いお兄さんにも見えるが、避けられるような空気でも無かった。

「前夜祭チケットあとわずかだよー！」

そんな声があちらこちらで聞こえる。もちろんシックスはその声に止まることもない。欠伸を漏らしながら道を征く英雄がただ一人。本当ならば数刻前、学園長から呼び出しがあつたのだが、任務の概要を少し聞いただけで彼は考えるのを止めた。どうにも学園長からの任務はお気に召さなかつたらしい。というのもその任務というのは「告白するのを阻止せよ」という、本人としてはあまり使いたくない英雄という立場だが、20年前の大戦時で多くの人間を殺した彼にその任務だけは無いと思う。それとも、よっぽど大変な事なのか、と疑問を覚えたシックスだったが、それも違うらしい。

「（むしろ参加したいぐらいだ）」

告白すれば120%成功する。人々の感情を弄ぶのは魔法使い達の間でもタブーとされていることで、特に麻帆良では大多数の人間が生活している。告白する人の数も多数だろう。危険といつちや危険

だが……、何故それが告白というベクトルにしか反応しないのか？ という術式をそれなりに嗜んでいる彼にはすごく気になる処だった。木なだけに。言葉に反応するなら「俺の肉　になれえい！」でもいいような、というのが正直な感想だった。

「(戦闘……？影かこれは？……あ、あれ食おう)」

遠い場所で戦闘の気配があったようだ。しかも使われている魔法は影。影使いというのは非情に珍しいのだ。使用上やら外見上やらも”正義”とはまったくかけ離れている存在というのも加算されているのだろう。もっとも、シックスのように影を使う英雄が現れたことでその考えは薄まってきた。結局、彼は戦闘が行われていることは察知したが、自分に被害が来るということも無いため放っておいた。特に関係ないがそこら辺で見つけた出店の焼き鳥をんめえんめえと貪っていた。

「(おおー、派手にやりよるわ)」

無関心ではあったが、彼の眼がその光景を捉えていた。気分は野球観戦といったところだろう。そこにビール缶があれば彼は間違いないオッサンだ。いつのまにかネギ・スプリングフィールドと一緒に行動するようになっていくいつぞやの狗族・黒髪の闘士に京都神鳴流・桜咲刹那。桜咲刹那が一人の少女を抱え込んでいる。どこかで見たことあるなあ、どこだったっけ？と先日 of 挨拶を完璧に忘れていたシックスだった。その4人組を追いかけているのは彼が反応した影人形。

「(オ　ラ座の怪人か)」

影人形の顔がまさしくオ　ラ座の怪人みたいな仮面をしていた。遠

隔操作も着実にこなしている分をみると結構出来るようだが肝心の戦闘が正直すぎてダメっぱかった。というのが彼の感想である。とりあえず数をコントロールするように訓練されたのだろう。買った焼き鳥の完食し、彼はまた歩き出した。

「（厄介事は面倒アルね……あ）」

そこでようやく、桜咲刹那が抱え込んでいた人物について思い出す。だが彼の知る中国人が二人いて、尚かつ見分けるつもりも無いためか、彼の想像ではなにかと色々と混ざっていた。微妙にモンタージュされ、その人物はこの世界に存在してはいないだろう。そしてやはりシックスは名前を思い出せない。予想通り！という顔でもしてくれればいい。

「（えーえー、超……チャオズ？なんだ餃子か）」

正面にある中華料理を出す屋台を発見し、答えを得る。もちろん間違っているのだが、そんなことは知らなかった。適当にカウンターに座り、辛い物を徹底的に辛くしろとの注文を与え、適当に待つことにした。視界の端っこにロボットらしき少女、というかエヴァンジェリンの従者がいたようだが。誰がどこで何をしようとも、テオドラ以外どうでもいい彼にとって、話の種にもならない些細な事だった。

「お待たせしました。サー・シックス」

「「」苦勞」

エビのチリソースを飲み物のごとく貪る彼がいた。麻婆豆腐を主食のごとく食べる彼がいた。担々麺をデザートのように完食する彼が

いた。彼の好物はエビのチリソース、というか辛い物全般。色々混ぜられているせいで味覚が鈍いのか、それは定かではないがとにかく辛い物が好きだった。まあ、これは蛇足になるのだが。

((((サー?))))

そしてこれが周りの人間達の感想だった。

T o b e c o n t i n u e d

第三十一射 ししょー

太陽が地平線の彼方に落ちる。反対側から月がゆっくりとゆっくりと。日本のある学園都市・麻帆良学園。その麻帆良の学園祭がいまやいまやと始まるうとしていた。街々の灯が、天上の天井に散りばめられた星々の輝きが、学園祭を大いに盛り上げようとしているが如く。ハラワタにまで響くように重く、それでいて心地よい音が空に広がった。花火だ。赤や緑、黄色と空に華が咲き誇り、そして炎のように儂く散りゆくその一瞬。麻帆良学園のいたるところで上がり続け、散り続け……。そんな空に一角に人々を乗せた飛行船が一つあった。飛行船自体はどこどこに浮かんでおり、誰も疑問に思うことすら出来ない。

「ネギ先生達はもうでしたー？」

花火が打ち上げられ、散るゆく光景を背景に、そのときの音をバツクグラウンドミュージックに。ローブを着込んだまん丸メガネの少女が、側に立っていたもう一人の少女にそう言った。言葉をかけられたシニヨン（お団子頭）の少女は、彼女こそ今回のとある作戦を企画している『超鈴音』だ。うむ、と言葉を出し、嬉しそうに笑うその姿はまさしく少女だろう。最も頭の中身は百年は先を行く天才なのだが。

「茶々丸のデータやハカセの話通り……いや、それ以上に良い奴だ
たヨ」

ペコリ、と更に後ろに控えてた『絡繰茶々丸』がお辞儀した。その飛行船の上には彼女たち、合計で三人いたのだ。なぜ、エヴァンジェリンの従者たる“彼女”がここにいいのかはまだ不明ではあるが、

彼女は彼女で己の信念でも貫いているのだろう。

「上手く味方に引き込めれば、かなり使えるかも知れぬヨ」

花火がはじける光に照らされながら、彼女たちの作戦は一步ずつ、一步ずつと着実に進んでいた。ただ、ハカセと言われた少女が、後に続けるように己が言った言葉に後悔することになる。

「引き込むと言えば、狙撃手さんのほうは？」

「……………」

無言で超鈴音は返した。少し後ろのほうに立っていたハカセと呼ばれた少女は、見事に何かの不機嫌オーラを背中から出しているのを見てしまうことになる。そと超鈴音のほうへと歩き、回り込むように顔を覗き込んでみれば、よくある「嫌な奴に会った」時の顔をしていた。少し肩が震えている。ハカセと呼ばれた少女も、実はものすごく頭が良い。故に”地雷”を踏んでしまったことに気づき、絡繰茶々丸もまた「まあ彼ですからね」と、声には出さずに呟いた。

「無視されたヨ……………恐らく、というか10割の確率で名前も覚えていないネ」

フーフー、と息を吐き心を落ち着けようとしている。空の向こうでサムズアップしている彼について、よほど嫌な思い出あるのだろう。話しに行っただはずなのに、確実に名前を覚えてもらってもいない、という何がどうなっただのか、それを想像も出来ないハカセだった。修学旅行の時からチヨクチヨク見ていた限り、徹底的に無視をするような人間では無いはず、と思いきこんでいるハカセだがそれは実に間違いである。あのときは仕事の件もあった、そして何

より今回は超鈴音のタイミングが悪かったと言わざるを得ないだろう。

「彼の性格から考えて、敵対することも無いネ。まあ味方になる事も無いのは置いておくヨ」

キツパリと言い放つ。だが、そんな言葉とは裏腹に顔は相変わらず、なんというか嫌な奴とバツタリ廊下ですれ違ったときの顔をしていた。絡繰茶々丸は一応その”嫌な奴”のことは周りの二人よりかは知ってはいるものの、そこまで嫌われる彼が一体を何をしたのか非情に気になるのか、脳内にあるデータベースを掘り返していた。もちろん、それで答えが出るわけではない。

「予感が当たったというか、想定していた最悪の予感的中とはネ……」

クラシックならばキー！と叫びながらハンカチを噛みしめているだろう。それぐらい彼女の心情はひどかった。そのまま掌と膝を床（飛行船）におしつけ、がっくりと頂垂れるかと思っぐらい。

「うふふふー」

「あはははー」

「捕まえてみるのじゃー」

「よっしゃー待てー」

「師匠ー待ってー」

ガバツ！

天国と地獄を両方一片に味わった猛者がまた一人、太陽があと数時間で真上に来ようかという時間に目を覚ました。たった一瞬の闇の波動を喰らった彼といえど、その闇の波動はいささか荷が重すぎたらしい。変な汗と嫌な汗、そして心地よい汗を同時に流すという器用にもほどがある事態を巻き起こしていた。冷房がキンキンに効いているせいか、ブルっと身を震わせる。本来、彼の肉体の特性上そういうことは起きないはずのだが……彼の知りうることのない”何か”がそこにあるということだろう。

「（あ、Ambivalent!）」

アンビバレンツ、矛盾を司る言葉だ。彼は思う。テオドラを追っていたはずなのに、何故自分は莫迦弟子から追われているのか、と。三竦み、とは言い難いがその光景はなんともいえない……まさしく『天国と地獄』だろう。彼、ハアハアと息を荒くしている。一体どういう原理で”あのような”状況にいたったのか、何故自分はテオドラを追っているのか……

「（いや、まだそこはいい。むしろ捕まえる、うん）」

一番疑問に思うのが彼の弟子『龍宮真名』だ。彼の愛する皇女を彼が追っている。捕まるか捕まらないか、そんな微妙な距離がまた趣のある、と一人で勝手に頷く。で、そんな彼の後ろには彼がいつぞや与えた二丁一式拳銃『ケルベロス』を振り回しながら追いかけて

くる彼の弟子。

「や、闇の波動が……ッ！クッ、腕が!？」

邪気眼が発動したのではなく、本気^{マジ}で右腕の色が変わり始めた彼。暗緑色になったかと思えば、いつも通りの白色、かと思えば鴉のように真っ黒な羽が皮膚の中から生えてくる。ついでに羽根の付け根から黒い液体もドロリと、表面張力に沿って丸みを帯びながらポタリと垂れていく。彼は特に不安定なキメラ体であるためか、時折このように”中身”が漏れてくることもあるのだ。恐らく異魔神に浸食されたせいで体を構成する術式に影響を与えたのだろう。フーフーと息を長くゆっくりと吐き、術式構築のメンテナンス。すぐに体の異常は収まった。

「（ハー、しんど）」

どっこいしょ、と言わんばかりにのそりと起き出す。先程あった体の異常のことなど、すぐに忘れることにした彼だった。意図的に異常を起こすこともあるし、何より異常が起きたところで体が変わるだけで何の悪影響もないためである。そんなときふと、彼の視線が窓のほうを向く。飛行機が編隊を組んで曲芸飛行を行っている。驚くべきは操作している人間はみな学生という点だろう。支配が空まで及んでいるとはさすが麻帆良と言うべきか、そこは安全性を考えると言うべきか。

「あー、だるい」

もぞもぞと再び布団のなかに潜り込んでいく。英雄がこのような姿で本当に申しわけないが、それはそれで良いらしい。とは彼の言葉である。絶対に無い。外では麻帆良祭が始まったようだった。麻帆

良全体に聞こえるかのようなアナウンスとともに、一般客と思われ
る人々の河が動く。どこかのカーニバルっぽい際どい衣装をした踊
り子が乗っている山車やら、というか本物の象にのっている奴もい
るのだが。布団に入り込んだ彼には知るよしの無いことだった。

「（あー頭が痛い）」

感覚器官が強化ではなく、元から異常なためか人々の気配を感じや
すい。万を軽く超える人間の気配が同時に襲ってくるというのも歪
なものだろう。戦場にて接近戦をあまり取らなかつたことに今更幸
運を覚えながら、一部以外の夢の続きを見れるよう呪詛を呟きまた
眠り込んだ。大きく麻帆良祭と書かれた凱旋門のようなモニュメン
トの下をくぐり抜ける人々。麻帆良にある湖にて鳥 間コンテスト
をし、人々の努力の結晶を見る人々。ネタに走ったあげく最低な記
録をたたき出した鳥もいた。そんな彼にとって、どうでもいい日常
が続く……………ワケもなかった。

「（一人……………二人？何故同じ気配が……………）」

今度は悪夢でもなんでも無い。布団を掻き揚げ起き出し、影の倉庫
から普段着を取り出しどこかの手品のごとく一瞬で着替え、屋上へ
と身を乗り出した。彼は嫌よ嫌よ、とは言っていたが、それで拒否
をするというのも良い話ではない。彼なりに”悪い気配”を探して
はいたのだが、そこで彼の思考通り変な気配があった。

「（分身……………いや、両方”本物”だ）」

どこかでまったく同じ気配がしたのだ。魔力の波、気の波動と様々
だが、似ることはあっても”同じ”ということはありません。それ
とも、同じ気配に見せるほどの制御に長けた術者という可能性だろ

うか。目的も不明、学園長からそういう話も無かった。もう寝る気にすらなれない彼は外に出ることにした。外に一步でれば、住宅街の一角であるのにもかかわらず祭気分。自らの気配を周り同化させるようにとけ込み、そして謎の増えた気配を追っていくことにした。

そうして、行動したのが運のつき。今更外に出たことに後悔を始める。俺は変な気配を探して、近づいていったのだが……、なんということだろうか。

「いや、あの、これはですね！こういう趣味とかではなく……」

最近俺は幻覚を見る機会が多いと思う。やっぱり外はダメだと思う。少しやる気を出してみればこれだ。また”コイツ”達だったというわけだ。

「あの、シックスさん。あまり見ないでください……」

見てはない。むしろ目に入れたくない。この正面にいる桜咲刹那と莫迦餓鬼がコスプレしている格好など目の毒だと思う。いや、まだコスプレはまだいいかもしれない。変わった格好をするだけだ、特に何の感想も覚ええない。莫迦餓鬼にいたっては着ぐるみだ。それは放っておいて、問題は桜咲刹那だ。

「なるほど、お前は痴女だったというわけだ。あんまり近寄るな」

「違います！」

と声を大きくして叫んでくるわけだが、安心しろ。もう隠す必要は無いぞ。こういうテンションが上がる状況だ、しょうがないさ。一時のテンションに身をまかせるのは非常にいただけないが……人それぞれだ。特にテオドラに関係無いし。

「その安心しろよ、と言わんばかりの目を止めてくださいー」

バニーガール、というかウサギの格好をしているコイツは一体何なのだろうか。莫迦餓鬼は先程言った通りもはや着ぐるみ、でコイツ桜咲刹那。へソどころかお腹の大部分を大きくさらけ出しているのはどういう意図だろうか。オプションと言われるウサ耳も装着している。わざわざこういう格好を……俺心配。

「旦那、これは変装ですね！」

「なるほど、変装でこれか。……おめでとつ」

何がですかあ！？ともはや涙目を流している桜咲刹那チシヨはもうどうでもいい。俺にはウサギの属性は持っていない。もし持っていたら消毒してやるところだ。俺の精神世界的に考えて。狐の格好をしているのならばっ。俺は修羅道に落ちる覚悟も持っているぞ。何かのフラグが立ったような気がする。具体的にいうと莫迦弟子に。未恐ろしいものだ。

「あ、旦那にアレのこと聞いてましようぜー」

旦那旦那五月蠅いこの夢の国のネズチュー。アレとか俺の正面で言われても困る。厄介事を持ってくるつもりかっ。察しろよ、もう俺は働きたくはない。やる気出してウサギガールの痴女を見てしまっ

ただ。仕事をしないと、この残酷さ故に大目に見てほしい。

「あ、シックスさん聞きたいことがあるんですが……」

そう言いポケから何かを取り出した。時計らしき物体、らしきというかまんま時計だ。魔力が籠もっている時点で普通ではない……マジックアイテムだということはわかるが。そんなもん見せられても俺にどうしろというのだろうか。鑑定眼なんてまったく持っていないのだから勘弁してほしい。

「これ、カシオペアっていうんですけど……実はこれタイムマシンなんです」

「なん……だと……!？」

いや、まて落ち着け。本当にタイムマツスインだと確定したわけじゃ……。あれ?もしかして気配が増えたのはこれのためか?なるほど、それならば納得が行くというものだ。問題は何故それが莫迦餓鬼の手元にあるかという。古今東西関係なく時間操作は誰にも辿り着けない魔法であったはずだが……すげえなこれ。

「なんでまたこんな代物を……」

「超さんから貰ったんですけど」

超……?チャオ……誰?まあいい。微妙にどこかで聞いたことあるような気がするけど、どうせ中国人か何かだろう。中国人の知り合いなんざいないし、知り合いがいたとしてテオにどういう影響を与えるか、十中八九与えることはないだろう。で、こいつが誰から

貰ったとかはどうでもいいのだが、結局一番気になるのが何故ソイツは”コレ”を持っていたのか、である。

「一体どうやってこんなものを……使ったのか？」

「あ、はい」

「通りで、お前等が二人ずついるわけだ」

ゲエツ！？なんて顔をしている。なかなか器用なことだ。たしかに、時間関連で考えると、同じ時間に同じ気配がいるのも頷ける。で、その超とやらも増えていないことを考えるとこのアイテムはこれだけしかないのか、あるとしたら何か制限があるのか、聞いてみたところ……実験的なアレだそう。下手をすれば狭間に落ちるとかいふ。それを使うとかどんな命知らずかつ。

「そういえばシックスさん」

「ん？」

で、いきなり真顔になって言葉をかけてきた桜咲刹那。いや痴女だった。

「超さんが火星人とか言っていましたけど、実際そういう宇宙人っているものなんですか？」

「火星、ね。いや”そんな奴”はいない」

そうですか、と頷く桜咲刹那。どうにも超とかいう奴は火星……間違いなく魔法世界に関する奴なのだろう。そしてタイムマッスィー

ン。これは未来の科学とかわけのわからないものらしい。未来の火星人、まあ魔法世界人のことだろうが……嫌な予感しかないな。そんな奴がこんな異次元アイテムを作り出してまで過去にきているのだ。何か行動を起こすのだろう。というかそんなことを言っただよな気がする、誰かが。そりゃチャオズか。自爆が十八番なのだろうか。

「もういいな。まったく面倒なことを……」

俺は転移することにする。人々の前で転移しても「映画の撮影か？」とか「手品すげえ」とか。認識障害の魔法について少し議論したくなるけど、やはり面倒だから止めておくことにしよう。下手をしたら犯罪起こしてもスルーされそうだ。魔力にものを言わせてやってみるか……いや、やめておこう。テオがなんて言うか想像したくない。

痴女との出会いを胸に秘め、そしてそのまま忘れることにした彼。冷房をつけっぱなしにして部屋に戻ってタバコを吸っていた。全身から力を抜き、だるう、という感じで適当に時間を潰す彼はどうみても英雄の欠片すら見えない。肺に入っていた煙が、自然に上るようにフヨフヨと彼の口から漏れる。時間は既に昏すぎを回っている。しかし彼には食事をとる気配も無い。

「（また増えやがった）」

寝ている途中に、世界樹がある辺りで妙な魔力が迸ったのを感じた、

がどうせまたアイツらでしょ、ということは無視していた。結局麻帆良祭1日目は彼、シックスに無駄な疲労を与えただけで終わることとなる。いまだにゴミ箱に入っている携帯電話が震えていたことにも、そのときネギ・スプリングフィールドが英国紳士としてディープキスを行い一人を悶絶死させようとしていたことも、彼の弟子が昼間の任務にて（何故だか知らないが青筋を立てながら）大多数の告白を台無しにしていたことも、やはりネギ・スプリングフィールドがまた別の誰かにフラグを構築していたことも、彼の知る処ではなかった。

更に言うならば、超鈴音の作戦において非情に重要な部分となる麻帆良武闘祭も、彼が動くには賞金のお金が足りないらしい。いや、たとえ足りていても彼そのものがこの存在のことを知らなかったため、余計に無駄になっただろう。エヴァンジェリンや、学園長の念話を子守歌にして「いい仕事したぜ」的な顔で、彼の睡眠はより深く、暗い底へと沈んでいった。また捕捉程度だが、武闘大会にて彼の旧友は彼が来ることを期待はしていたものの、反面間違いなく来ないだろうと予言のクラスで予測し、見事に的中していたことに少し喜んでいた。

「ギヤ——！！！！」

かれでも ゆめには かてない

T o b e c o n t i n u e d

第三十二射 雌鳥のくちばし

学園祭一日目の太陽が落ちた。彼が寝ている間に、麻帆良学園にある龍宮神社にて行われていた麻帆良武闘祭の予選が進む。もちろんそんなことを知らずにグースカピースカが寝ていた彼だが、一応魔法界という異世界に君臨する超国家ヘラス帝国に所属する英雄である。まあそんなわけで、ただ寝ている状態からしても何かに反応出来る程度には成長していた。毛布に包まれながら、時々悪夢にうなされているように見える。で、その少し後にはヴァルハラに辿り着いた戦士のごとく良い笑顔になったりと顔が忙しい。そんな忙しさの中ピクリと全身に何かが流れるような動きを見せた。動きが一端停止し、毛布をかきあげながら目を覚ます。

「（重力魔法か、また懐かしいものを）」

彼は窓の外を見た。雲一つ無き晴天がどこまでも続いている。いつも通りにコキリと全身の関節を鳴らし着替えを始めた。足下の影が伸びてきて彼の全身を包む。そして影が消えた瞬間には、背中に金字の紋様が描かれているフード付きローブ。フードを深く被ると、今度は彼が影の中へと沈んでいった。ちなみに携帯電話はゴミ箱の中でバラバラになっていた。同時に麻帆良のとある場所にて影の門が開く。

「（……アルビレオか、またまた……ご冗談を）」

一人で微笑しながらその光景を見やった。彼が立っている場所は瓦の上。瓦で組まれた屋根だ。正方形に組まれたその会場の場所は龍宮神社。神社の名前を思い出し、彼の弟子との繋がりがあるのか、と疑問には思うが考えたところで答えは出なかった。彼と似たよう

な格好をしている彼の悪友とも言える懐かしきアルビレオ・イマ。そして彼と対峙していたのである。黒髪の少年は既に重力魔法で潰された跡を残し気絶していた。

（おや、おなたも来たのですか）

（重力を使ったのはお前かアルビレオ）

アルビレオの勝利宣言がおこなわれている最中にもかかわらず彼と念話をしている。アルビレオは　アルビレオと言われたことに文句があるのか　自分の名前をクウネル・サンダーズを言い張る。別に名前のことなんてどうでもいいと思っっている彼にとっては、どれが名前でも関係無い。だからこそ、別に誰かの名前に拘るということも無かった。

（クウネル、ねえ。お前実に莫迦だな）

（フッフ）

念話でわざわざ笑い声を飛ばしていくアルビレオ、改めてクウネルに舌打ちを飛ばす彼。彼はクウネルに倒された少年が運ばれていく中に妙な視線を感じていた。まるで監視でもされるかのような視線だった。神経をとぎすましてみるものの、結界でも張っているのだろうか、彼はその正体に気付くことも無くため息を吐いてその場を去った。

「あなたも参加すれば良かったのですがね」

「冗談言っなクウネル」

麻帆良のとある一角にて。相変わらずフード同士の彼らが対話していた。クウネルの言葉に、嫌々と手を振りながら返す彼。フード付きローブを着込んでいる怪しい二人であるのにも関わらず、人々が彼らに何かの反応を示すことはなかった。

「まあそういう風に思っていましたから」

フフン、と胸を張って言うクウネル。だがフードの奥から見えた彼の顔はいつも通り何を考えているのかサッパリ不明な顔で、勿論それを見ていたシックスも無表情で。やはり変な二人組だった。そこでシックスが言う。「何故お前がここにいるのか？」という質問だ。普通の質問であるのだが、それは私が聞きたいです貴方に、と速攻で返された。少しの間だけ沈黙が続く。

「……まあ誰が何処で何をしようか、どうでもいいか」

「ええ………テオドラ以外は」

勿論だ、と笑いながら返すシックス。クウネルはその返事を聞いて満足そうに頷くのだった。

「私は図書館島の司書をやってます、地下に私の部屋がありますので」

「なんだこれは」

「招待状です。あなたに門番を殺されては困りますから」

ハハハ、と笑いながらクウネルが差し出してきたのは一枚の紙切れ。シックスはそれを乱暴に掴んだかと思えば、それを地面に捨てる。しかし招待状は地面に落ちるところか、影の中へと沈んでいった。

「ハッ、門番の役割台無しだな」

「まったくです」

歓声が溢れてきた神社のほうへと顔を向けながら彼は腕を組み、そして苦笑した。クウネルも釣られるようにその方向へと顔を向けた。

「どうやらキティ……エヴァンジェリンの戦いが始まるようですね、ご一緒に？」

「んー、まあいいか。精々見て楽しむとするさ」

一方はまるでいなかったように消え、もう一方は影の中へ。不思議なことに、彼らが消えた場所にも、彼らが現れた場所にも人はいなかった。妙に怪しいダブルフードが会場へと足を伸ばす。さすがに視線は集めたものの、麻帆良祭においてはこれより”怪しい”コスプレをしている人間がチラホラ、中には”素”で学生とは思えない体型の人もいる。エヴァンジェリンを含めて。会場の真ん中、対戦が行われるであろう石畳には二人の少女が対立していた。

（ほう、貴様も来たのか狙撃手）

（頑張れよーキティー）

やる気がまったく感じられないシックスの言葉、だが言葉遣いはともかく内容が問題大ありだったのだろう。威厳良く（小さいため良くない）桜咲刹那と対峙していたエヴァンジェリンはバナナに滑ったド　フのように滑って頭を打ち付けた。会場の放送から聞いてみると、どうにも彼女が転ぶのは二回目らしい。すぐに起きあがったエヴァンジェリンは彼と、彼の隣にいたクウネルを睨み付ける。それに対してダブルフードは右手で握手してまま、エヴァンジェリンに左手の親指を立てている姿を見せ付けた。

（貴様かー！アルビレオー！！！）

（やだなあ、私はクウネルですってば）

（落ち着けよ）

別の視点から見ればキーキー一人で騒いでいる幼女なわけで。もちろんその仕草も可愛いわけで、会場は変な空気になっていた。エヴァンジェリンと対峙していた桜咲刹那も、彼女の謎の怒りに対して何も言うことが出来ず、もはや引いていた。そのことに気付いたエヴァンジェリンは勿論怒るのだが、五月蠅いダブルフードのほうが重要なのだろう。後で縊る、と念話を送り再び対峙した。

「ところでクウネル」

「ええ、なんででしょう」

エヴァンジェリンと桜咲刹那の対戦が始まった。桜咲刹那はエヴァンジェリンから対戦前に言われた言葉によって何かを考えているようだった。そのため、エヴァンジェリンの初撃とも言える攻撃を喰らう。攻撃と言ったが、エヴァンジェリンは人形士たるスキルとし

て糸を使い、桜咲刹那の右腕を固定。突然ワケのわからない状態になった桜咲刹那はさらに焦ることとなる。エヴァンジェリンが糸を思いっきりひっぱると、桜咲刹那はまさしく人形のように投げられ、そして糸による関節技を追加される。観客のほうは念力だの、なんだの色々と推測はしているが、関係者以外では対戦している本人達しかわかることはないだろう。しかし、肝心のダブルフードはそんな状況に目をやることすらしなかった。半分はわりと本気で、もう半分は面白さで。

「なんでお前がこんなイベントに？」

「フッフ、ネギ君の様子を見ようかと思いましたが。それに……ナギからの言葉を」

シックスの言葉に対して、ええ、と続いた返事。懐から一枚の仮契約カードを取り出した。クウネル……否、アルビレオ・イマが持っているアーティファクト『イノチノシヘン』を使うと言うのだろうか。彼のアーティファクトは極めて珍しい物である。半生の書と言われる、人間の半生を綴った魔導書を用いて、その人を再現するという能力を持っているのだ。コピーしたとき、それは人格から身体能力あらゆる面までを再現する。外見的特徴だけコピーしたりと、彼の性格が合わさって非常に嫌らしい能力であるのは間違いない。

「なんだあ、ただの子供だろーが」

「ええ、そうですねえ。だからこそ、妙に手を加えなくなるのですよ」

わけわからん、とクウネルに呆れながら返事をする彼。手をどこかのアメリカ人のように広げ、お手上げ侍と言わんばかりにため息を

吐く。そんな様子を見てどこか楽しそうにするクウネルにイラつと来ながらも、ようやく思い出したかのようにエヴァンジェリンと桜咲刹那の対戦を見やった。しかし肝心のその光景が……

「帰りたい」

「テオドラは我慢する男が好きですよ」

「なんだとっ」

糸によって固定されている桜咲刹那。そしてその正面に仁王立ちになったまま停止しているエヴァンジェリン。シックスもこれがどういふ状況かはわかってはいるが、見ているものからすれば非常に楽しくない。覗いてみる方法もあるのだが、そういう魔法をわざわざ覚えることもしなかったので、適当にクウネルに流されるのだった。彼女たちは恐らく、エヴァンジェリンが作り出した仮想空間内にて戦っているのだろう。エヴァンジェリンが”全力”を出すことは無いだろうが、桜咲刹那としては”本気”を出さなくては確実に勝てない相手だ。

「そうだったのか。それは初耳だ……」

「ええ、頑張ってください」

30秒後解凍された彼女たちが動き出す。その間にシックスが「帰りたい」趣旨を述べた回数は合計4回、なかなかのスコアだ。このスコアに満足するのはシックスではなくクウネルだったという事実は……ここだけの話だが。

「おえっ」

「（見えちゃいましたね、今）」

何故か猫耳和風メイドの格好をしている桜咲刹那とロリロリ合法幼女のエヴァンジェリン。突然彼女たちが動き出し、そして桜咲刹那が一撃をエヴァンジェリンに当てた。そのまま倒れ込むエヴァンジェリンだった。麻帆良武闘祭にて、エヴァンジェリンは桜咲刹那に敗北したのだった。会場の隅っこには聞くだけ不快になる音を出すフードと、その光景を見て「もったいない」と呟くフード、二人はダブルフード！がいたのだが……それは一体どこの話だろうか。

「ふむ、私はネギ君に挨拶してきますが……どうです？」

「NONONO、面倒だ。厄介事の塊じゃねーかあの莫迦餓鬼」

クウネルはニコニコ笑いながら、では、と言いつつと消え去った。やる事が無くなったのもあるし、自ら進んで何かをやるつもりも無いためだろうか、クウネルが消えたのと同時に彼は歩き出した。目的も無く、適当に歩き回ろうとしていたのだ。まあ、運がいいのか悪いのかまた面倒なことに巻きこまれることになるのだが。

「（転移すればよかった）」

このように後悔するのは何回目になるのだろうか。

「少なくとも私は最初の一人は違う。憎しみを持って殺した。そこの大英雄はどうだ？」

打ち身程度の怪我であるのだろうか、治療を終えたエヴァンジェリンと桜咲刹那。そして神楽坂明日菜が会場の隅っこにいた。やる気

をだすと何故かこういう目に遭う彼は一体どういう星に生まれきたのだろうか。星どころか中身と肉体は異世界の壁を越えているのだが、それは考えないことにしよう。

「……………さあな。最初は大量殺人から始まったからな」

戦艦を叩き落としたのだ彼は。恐らく多くの人間が死んでいるだろう。それを普通と受け取る自分と、むしろ進んで第三皇女のために殺そうとする自分が存在し、殺しを否定する自分なんか存在しなかったのだ。殺すのが彼の存在意義、とまではさすがに言えないが、テオドラを護るといふ役目を与えられた彼は殺すという行為には何も感じなかったのだ。

「た、大量つて……………」

「それを別に誇る気も償う気も、もちろん背負う気もないがな」

命を背負うとはよくある名言だ。生き残った人々が思い半ばにして逝ってしまった。それを作った者達がその思いを背負うということなのだろう。

「フン、狙撃手に聞いたところで頭が痛くなるだけだったな。神楽坂明日菜も桜咲刹那もソイツの話はあまり聞くなよ」

だが、シックスはそもそも考えからして違っているのだ。彼が用いる考えはただ一つ『テオドラを護る』ということだけだ。今でこそかつての通常な感情が戻って来ているとはいえ、その感情が中心であることは間違いない。故に、死を償うこともしないし背負うこともしない。償ったことで命が戻るわけでも、背負って何かが生産されるというわけでもないのだ。それは全て”テオドラ”のため

あり、背負うは全て”テオドラ”なのだから。彼は所詮”兵器”なのだ、何に使おうとも鉄屑に罪は無い。故に、だからこそ”彼女”は敢えて背負うと言うのだろう。彼は彼女のため、彼女は彼のため。彼は愛し愛される、彼女は受け入れ包み込む。それはそういう関係であり、それ以外なんでも無い。ようするにラブチュッチュしているわけなのだ、死ね。

「なあに、死んだら関係なくなるさ」

彼の言葉に絶句しているのだろうか、神楽坂明日菜も桜咲刹那も言葉を出すことは出来なかった。それは己のことを『大量殺人』と言い放った彼に対する軽蔑か、それともそうやって生きることしか出来なかった彼に対する同情か……。彼の知る由は何一つも無く、彼は結局興味を失うことに繋がった。

「余計なことを考えるなよ、まさしく本当にどうでもいい奴だからな」

「で、でも……」

何か反論したいことがあるのだろうか。しかし肝心の彼は既に影の中に沈み始めていた。面倒くせえ面倒くせえ、と呪詛のように呟きながら。もう彼が仕事とテオドラ以外でやる気を出すことは無くなるだろう。やる気を出して、何が悲しくて女子中学生に「あ、どもっす。俺殺人犯！」などと言わないといけないのか。モチベーションの欠片すらも失い始めた彼はただ独り、テオドラのためを思う。

「（これだから外は……）」

彼がふと、目に入った彼女たちの顔は何故か何かを決心しているよ

うな顔だった。何が何だかわからない結果となったが、厄介事を運んで来なければなんでもいいだろうというスタイルとして考えるのを止めた。最後にエヴァンジェリンが何かを思い出しのだろう、アルビレオの名前を叫びながら消えそうになっているシックス殴ろうとしていたことだった。「ざんねん ざんぞうだ」という捨て台詞っぽい発言をしてシックスは転移していった。もちろんコレは火に油を注ぐ結果になるのだが。

「（あー、まさしく”これだから”だ。∴これだからテオ以外は……）」

全てが崩壊しそうな問題発言は心の中で反復された。転移先は勿論彼の家。屋上に転移し、彼はロープを影にしまい込むとすぐにハンモックに乗り込んだ。”今は”良い夢が見れると信じて！シックスの（悪）夢はこれからだ！ご愛読ありがとうございました！

T o b e c o n t i n u e d

第三十二射 雌鳥のくちばし（後書き）

主人公の周りの描写をするのが面倒になってきた件について。

あ、ちゃんと続きますのよ。

第三十三射 勇者タカミチ（前書き）

明日菜ちゃんの隠れヒロイン度が半端無い

第三十三射 勇者タカミチ

「邪悪な気配がする」

一眠りを終えたのだらう。彼が縁起の悪い言葉を口に出しながらノソリと起き出した。手で目をこすり、周りを見渡す。太陽がカンカンに照るといふ状況に殺意を覚えたものの、そこは我慢して手元にあつたペットボトルの中身を飲み干した。太陽に当たっていたせいかぬる〜い状態なのだが、それは気にすることはなかった。ハンモックから降りて、高層マンションの特徴たる高い屋上（当たり前のことだが）から、その邪悪な気配の原因を探しだした。邪悪な気配というか、目撃したら銃弾が弾け飛びそうな、そんな気配を放っているのだ。彼は魔力を通して眼力を強化する。かつて大戦において、個人携帯火器を持って軍隊兵器と同格にならしめた彼の眼は血のように赤い。ギョロリと目玉の様子が変わる。目玉に縦線横線斜め線が入っていく。複数の角膜を形成し、それを具現する。

「（……………気持ち悪っ）」

数千から数万の視界が彼の脳内に同時に入ってきた。それを同時に処理し、それを探し求める。彼の真つ赤な目は複眼となっていたのだ。まるで昆虫のような、というかまさしく昆虫のソレであるのだが。祭りでにぎわい、そして羨えることの無さそうな麻帆良の景色を観察する。何というか邪悪な気配のというか、やる気とかそんな話を越えるような……………具体的に言つとタカミチあたりが女の子とデートしてそうな。

「ハハっ、タカミチめ。俺に喧嘩でも売ってるのか」

彼の複眼の一つがその光景を捉えた。同時にもとの目玉に戻り、その光景を見ている彼の顔は大変なことになっている。ゴゴゴゴゴ、と魔王登場間近のような震動が彼を包む。彼が住んでいる高層マンション全体が震えているような気もするが、実のところ気のせいではなく事実で、一応別に住んでいる人もいる。しかし、麻帆良祭ということもあってか何の反応も無かった。いよいよ心配になってくるが今は関係無い。

「…………… よろしい、ならば戦争だ」

彼の目玉が捉えている光景はすさまじいものだった。『紅き翼』の一人として、その時はメンバーの背中を追うことしか出来なかったが、今でこそ最高クラスの戦闘力を誇るようになった彼、タカミチである。30台に突入したのか、それとも修行の影響が老けて見えるオッサンだが、まさかそんな彼が14歳前後の女子中学生とデートだとは。なんたる状況か。ロリコンとか言っている場合ではなかった。 ”狙撃手” たる彼ですら耐えることの出来ないことだった。自分は愛する第三皇女の側にいることが出来ないのにもかかわらず！ なんてアイツは………… ツ！？ という感情で一杯だった。彼の分割された思考666個、その全てにおいて『判決・有罪』という表明を出したのだ。そして最高議長である彼本人はもう言う必要がないだろう。

「タツカラプト・ポップルンガ・ピピリット・パロロロロ」

どこかで神のドラゴンを呼び出しそうなわけのわからない言語を使いながら彼は影の中へ沈み込んでいった。全ては平和のため、全ては愛する者ため、全ては隣人のため、彼は立ち上がったのだ。かつての大戦の時のように。何故ならば彼は英雄であり、一人の男であり、一人の戦士だからである。特に関係はないが。

「うああー！！工学部のロボティラノが暴走したぞー！！」

白衣を着た学生達がソレから逃げていた。そのまんまティラノサウルスの形をしたロボット、どうみても本物にしか見えないそれが暴走してしまったのだ。太い二本足でドシンドシン走り回っているのだが、どんな科学力を持っているのか全国の皆さんにも考えてほしいものである。そんな大変な現場だが、そこに運良くデェト中のタカミチと神楽坂明日菜がいた。教員としてタカミチは動かなくては行けない。神楽坂明日菜に、その場にいるよう言葉をかけて走り出した。

「いかん！！」

ロボティラノがぶつかつた柱にヒビが入り込んだ。そのまま倒れそうになるのだが、その下には身動きの出来ないワンコロが！？咸卦法を使い、瞬時に回り込み柱を支える。柱を支えるに当たって、その重量故か足下が陥没している。後はロボティラノを止めるだけだが、そこで問題が起きた。

「電池が切れたぞー！！倒れるぞー！！」

どういう意味かまったくわかりたくないが、電池で動いているらしい。見た目体長10メートルはありそうなロボットを電池で動かすこの異常をなんと表現したらいいのだろうか？あれだ「わけわからん」だ。動きが止まつたロボティラノはバランスがとれるはずもな

く、その場に倒れ込もうとする。しかしその倒れ込もうとした場所には、麻帆良の生徒がいた。腰が抜けて動けていない。まずい！とタカミチが思った束の間

ザンツ！

ロボティラノが真つ二つに”斬”られた。別の方向に倒れ込み、肝心の生徒達は無事だったようだ。斬ったのは身長ほどもある大剣を持つている神楽坂明日菜。常人の動きどころか達人でも、というか人間の動きじゃないのだが……、瞬間にてその大きな物体を斬るという。剣を振り回す才能、どれも一流と言えた。彼女がそんな動きが出来たのも咸卦法という気と魔力を融合させて行う究極技巧のおかげだ。言葉にして言うのは簡単だが、実際出来る人間はほんの僅か。かの帝国の大英雄ダブル・シックスですら咸卦法を使うことは出来なかったほどだ。

ゴゴゴ許ゴゴとゴゴゴゴ！！！！

自身ですら何年もの修行を経て到達した咸卦法を、女子中学生が使うという現実には驚きながらも、というか魔法関連は現実とは言い難いが、成長した彼女にしみじみと思っていたその時だった。地震が起きたのだ。本当のことを言えば、地震というより大気が震えているような、何かが現れるようなそんな雰囲気、まるで魔王と対峙する勇者のごとく。地震の中に微かに聞こえた謎の声、恨み妬みあらゆる負の感情を込めた悲しい声。奴が現れた。地面に大きな漆黒の穴を開けて、魔王が君臨した。

オオオオオオオオオオオオ……

かの映画と勘違いしているらしく、むしろ興味津々でそれを見ている。戦士の顔になったタカミチに、神楽坂明日菜の胸キュンポイントが刺激されたり、それを遠くで見ていたストーカー軍団（ネギ＋）は未だに動くことを忘れていたり。

「クソッ！」

パン！と彼の居合い拳が化け物の頭部に直撃する。彼の拳は、ポケットに拳を入れることで発動している。居合い斬りの要領で拳を出そうというトンデモ技だが、現にここにて体現している人間がいるのだ。見えない拳圧を何重にも飛ばす彼だが、肝心のダメージを与えているかどうかはわからない。黒い触手が弾け飛ばし、ウジ虫のように断片となった触手がビチビチ動き回りそして消滅する。本体は体を大きく反らせただけで、再び咆哮。

「ダアアアガアアアミィィィチィィィ！……！！！」

「先生のこと呼んでるよねアレ！？」

現場にいる一般人から見れば、魔王（彼）からプリンセス（神楽坂明日菜）を護る勇者タカミチという構図なのだが、肝心の該当者達はそれどころじゃない。咸卦法を使いタカミチが再び攻撃しようとしたその時、

ザンッ！

「……………」

「あ」

触手の塊が二つになった。大きくお腹の部分を横にまっすぐ斬られ、呪われそうな咆哮を上げながら影の中にドボンと沈み消え去った。斬ったのは同じく神楽坂明日菜だったが、勝手に体が動いたように、更に自分が退治するとは思わなかったのか、周りからの拍手も耳に入らず、剣を握り締めていた手をじっと見ていた。おおー、と一人で呟いたりしている彼女の側にタカミチが駆け寄る。

「大丈夫かいアスナ君」

「は、はい！」

すごかった、と彼女の頭を撫でるタカミチ。突然のアクシデント（化け物）が出たものの、むしろその御陰で距離が縮まったような気がしないでもなかった。憎しみとか、悲しみとか、そんなものが色々浄化された感じがする彼だが、また別のどこかで目覚めたような気がする。

「ウゴウゴ、例え俺が負けても第二第三の……あ」

麻帆良の街の中、建物と建物の間にあるスキマ。誰も来ないような裏通りには彼が倒れていた。調子に乗りすぎた感も否めないが、まあ別にいいか、と欠伸をもらしながら服装を整える。タカミチを狩ることは出来なかったものの、確かにそれは残念ではあるが、黄昏の姫御子の戦闘力を再確認出来たのはいい収穫である。

「（例え斬撃に耐性があるとしても……）」

斬られたお腹の部分を指でなぞった。既に傷跡も残っていないがまさか、例え黄昏の姫御子であるとしても、女子中学生に斬られるとは思いもしなかったのだ。それどころか……

「（命を数個持っていくか、どんな得物だよ）」

その通り、彼女の一撃は彼の命を数個同時に持っていたのだ。数個同時に持っていくことなど、かつての本気で行われた模擬戦の時のエヴァンジェリンですら出来なかつた芸当だ。出来たのは唯一、造物主の絶対攻撃『造物主の掟』のみだったのだ。今思えば、彼女の能力を使用して初めて『始まりと終わりの魔法』を行使出来るのだから、彼女もまた……なかなかの才能の持ち主である。

「（魔法生命体ということを除いてもこれは、すげえな）」

彼はキメラ体として存在している。例外にも血を通貨に、魂を情報に、肉体を部品に、それぞれ吸収し我がモノに出来るのだがそれをした上で彼は本来、様々な生物の特徴を持っている。持っているといっても、それはツギハギだらけのモノであるのだが、中にはまさしく魔力によって肉体を成し、魔力によって生きる魔法生命体という存在もいた。魔法を拒絶する彼女の特性から考えれば天敵とも言える。しかし、彼女の一撃で数個持っていくのは、それとは違うような気がするのだ。

「（まあ……どうでもいいか）」

ウツヒヨイ、とご機嫌良くなった彼は、タカミチの所業をスツカリと忘れ、手紙のネタになるものを探すべく歩き出した。どうせ考えたところで彼の優秀すぎて、もはやぶっ飛んでいる脳味噌では答

えは出ない。出るまで考えるのもアリかもしれないが、時間という区切りを”まだ”大切にしている彼にとってはやはり無駄なことだったのだろう。

「（命が数個削られるのなら、命を数個補充すればいいじゃない）」

とかそんな意味不明な迷言を反復し、麻帆良の人混みの中へ溶け込んでいった。で、彼が結局お膳立てすることになったタカミチと神楽坂明日菜だが、さすがにタカミチは彼女のことを女性として見ることは出来なかったのか、告白を紳士っぽくちゃんと断った。で……、麻帆良の太陽が落ち、夕焼けの名残がうつすらと残っている空の時、高台から麻帆良を見下ろすシブメン・タカミチ。

「フっちゃんいましたね、タカミチ君」

「なんだ、折角源氏計画出来たのに」

彼女の懐かしき日々を思い出し感傷に浸っているタカミチの左右にフードマンが現れた。小さい頃は、黄昏の姫御子の名残として無言な子供だった。しかし年月を重ね、親友とも呼べる友人ができ、そして彼女『黄昏の姫御子』は『神楽坂明日菜』になっていったのだ。嬉しい反面もある、しかし彼女の告白を断り、こんな関係が崩れるかもしれないことを怖れた。しかし彼はちゃんと向き合ったのだ。感動物だ、ダブルフードがいなければ。

「極上の逆玉ですのに」

「まあ、さすがに関わりすぎたな」

「よして下さいよ」

タバコの煙が空を漂う。クウネルもシックスも、その姿にかつての戦友を思い出すことが出来た。大人になりましたねえー、というかオッサンにな、とフードの連携プレーに苦笑するしか出来ないタカミチだったが、それもどこか懐かしいやり取りで。かつて背中を見ることが出来なかつたかつてとは大きく違っていることに、なんだか嬉しい反面寂しいという感情も覚えた。

「僕に、人に愛される資格なんかありませんよ……」

「（それはある意味アスナ姫を侮辱していることにもなるのだが……、俺が口を出すことでもないな）」

「……」

タバコをつけ直した彼の言葉に、何かの考えはあるものの二人は言葉を出すことは無かった。そこから遠い場所では、神楽坂明日菜と色々ニヤンニヤンしている（間違い）人たちがいるのだが、彼女が前に進めるよう願うばかりだった。

「それにしても、本当に驚きましたよアル。まああなたが死ぬとは思いませんが、今までどこに？」

一転して、戦う者としての顔を見せてタカミチは話を切り出した。

「毎年学園祭に顔を出してましたよ？」

「ええ！？」

「世界樹の魔力を利用するしか外に出れないってことだろ、タカミ

「チ」

会えなかったことの残念さか、それとも学園祭という一定範囲でしか登場しない彼への驚きか。彼の驚きに返答したのはシックスだった。シックスの言葉に納得し、クウネル……アルビレオもまたそれを肯定した。タカミチはずっと休養中だったアルビレオに対して色々聞きたいことがあるのだろう、しかし今は彼が聞いたのはただ一つ。

「彼の生死は……？」

「生きていることには違いありません、シックスは？」

「行方は知らんが、余計なことに顔つつこんでるのは間違いない。その余計事もある程度は予想ついているがな」

同感です、とアルビレオはシックスに言った。彼が、ナギ・スプリングフィールドが生きていることに嬉しいのか、口元をつらせながら、ネギ・スプリングフィールドの発言が本当だったことを確信した。言葉というのは、かつてネギが住んでいたウエールズの街が悪魔に襲撃され、そしてナギによって助けられたという話のことだ。

「ところでシックスさん？」

「ん？」

「お昼のアレなんですか？」

「……………It is event」

危うく死ぬ覚悟をしたというのに、という感情が籠もっているタカミチ。シックスは珍しく汗を流して別の方向を見ていた。アルビレオは、フフフ、といつも通り笑っているが、手元にビデオカメラがあったことにタカミチは、不運にも気付くことが出来なかった。そして、もっと色々話したいことがあるのだろうが、タカミチの携帯が鳴り響いたのだった。

「すみません、会議のようで……え？シックスさん？ええ、隣にいます……ハハッ、無茶を」

「フフ、ご苦労様です」

「（そうだ、お家に帰ろう）」

学園長のほうからの電話なのだろう。タカミチが会議との趣旨を述べ、学園長からのSクラス級の任務『シックスを会議に参加させよ』を承諾するのだが……、

「ねえシックスさ……いない……」

「フフフフ」

既に彼は帰った後だった。彼が転移したかと思われる影のゲートの跡がその場に残っていた。乾いた笑いをしながら、やはり彼らしい、と嬉しくも思う彼。最後にアルビレオに挨拶をすると、彼は学園長のもとへと走っていった。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

第三十三射 勇者タカミチ（後書き）

ネギま二次作において、こんなシーン見たことねえや

×オットコ又シ

オッコト又シ

でしたね、本気で気付かなかった…

第三十四射 スナイプ・オブ・インペリアル

麻帆良祭三日目、祭の最終日だ。さすが最終日というわけなのか、盛り上がりがピークに達しようとする最後の日だ。朝早く、彼は寝床から起きあがり屋上から外の様子を探っていた。夜中において、寝ているときに感じた奇妙な気配、気配と言っていいものかと疑いたくなるような何かだが。こういう時にあたる嫌な予感が脳内を巡ったのだ。麻帆良の中央にある大通りを終わりが見えないパレードが続いている。凱旋門の下をくぐり、校区内を進軍し、商店街を蹂躪し、住宅街を踏破していく。白目さえも消え去った彼の紅い血のような複眼が麻帆良を睨み続け、その光景を脳内に送り続ける。感覚器官を全開にし、大量の人々の気配が脳内に入り込み、まるで数十人と同じに会話しているかのような異常を覚える。

「……上かつ！」

”狙撃手”が上へと舞い上がった。人間の筋力とは思えない、それど鳥のように飛んでいるわけでもなかった。まさしく彼は空へと跳び上がったのだ。空高くに突如感じた人の気配、転移魔法にははおかしい。麻帆良は強力な魔力結界を張っていて、その影響で直接外から麻帆良内に転移することは理論上不可能なのだ。内からの転移という可能性が大部分だが、実行するものの多くは彼のように家へ帰ったりとする転移、しかし先程感じたのは上、遙か上空なのだ。普通に移動するという転移からは考えられない。座標設定を失敗したということも考えることが出来るが、真偽がどれだとしても、確認するしか答えは得られない。

「1、2、3……10人と獣か、これは」

空から落ちてくる気配と、実際の目から入り込んでくる映像を見る限りの話である。何か叫びながら落ちているところから予測すると、予定外の転移、しかも空を飛べていない。彼のように空を飛ぶ方法を持っていないのに転移を行えるだけの能力を持っているだろうか。だんだんとハッキリとしてくる人の影、彼がその正体がわかったとき思わずため息を漏らした。最近ため息が多いことに不安を覚えながら。また”コイツ達”かと、さすがアイツの血族だと、彼はそう思わずにはいられなかった。

「『来たれ』」

アデアット、そう唱えアーティファクトを召還する。10人はさすがにキツイが、それでも数人の人間が乗れるほどの大きさのソーサー。桃色の機体を持ち、虹の翼羽ばたかせ空を駆ける龍が具現した。爆発音を鳴らし、彼……ネギ・スプリングフィールドとその他大勢のもとへと飛んでいった。男1に対して女多数という奇妙な光景である。どこかの三流ドラマのごとく円状に落ちていく彼女たちの周りを更に円状にぐるぐると円転した。

「し、シックスさん!？」

「スカイダイビングか、なかなか高等な趣味だな」

違います!と否定したのは桜咲刹那だった。ハッ、と彼は鼻で笑いロープの中から伸びた影の触手が彼女たちの足首やら手首やら、腰やらを固定し引っ張っていく。突然のことに「ギャー! 触手だ!」とか誰かが言っているが彼が気にすることも無く、もちろん彼が変な気持ちを抱くこともない、ミジンコよりも小さい些細なコトである。それはそれで逆に失礼にあたるほどのレベルのだが、彼

じゃしようがないだろう。彼女たちを思いっきりヒツパリそして桃色の龍『ドラグーン』が文字通り火を噴いた。

「あ、あああああああ！！！！」

「おお、これなかなかでござる」

「これは夢これは夢、逃げちゃだめです逃げちゃだめです」

「おおー！！！」

そして急降下する。滑空していく桃色の龍を楽しんでいるのが半分、恐怖を覚えずにはいられないものが半分。ちなみにネギの肩に乗っていたオコジヨは既に気絶していた。風の斬る音が劈くように、かつてない勢いで地面が近づいていく。大通りの真ん中へと落ちていく。地面へと、地面へと、地面へと、それは徐々に大きく眼球へと入ってきている。

「ああああ！！ぶ、ぶつかりますシックスさあああああ！！！！！」

「ヒアツハーア！！！！！」

ほぼ直角ダウンヒルをぶちかました。地面に触れる瞬間カクンと曲がった。地面スレスレを滑空し、そしてその後瞬時にて停止した。ふわりと軽やかに影の手が彼女たちを離して、どこかの建物の屋上に下ろした。どこかスッキリした表情の彼と、全員グロッキー状態になっている彼女たちだが、彼は特に反省もしないらしい。一転、ネギ達はそのまま落下してトマトみたいな展開になりそうだったということから、言ってもいいのかわからないが一応助けてもらったっぽいのであんまり強く言い出すことは出来なかった。もちろん、

グロッキーでそれどころじゃない部分を合わせてはいる。

「楽しんでもらえて何よりだ」

「こ、この人は……はあはあ、修学旅行にいた……ひい、人じゃないですか……ぜえ」

一見貧弱そうな、オデコが広い少女が生き残っていた。ほう、と彼は感心する。もっと頑張ればよかった、とかベクトルが正反対なことを考えてなければやる気のある人間だと褒められたことだろう。ぜえぜえ、と肩で息をして今にも死にそうだ。「全然楽しくねえよ莫迦」と全員思ったのに、全員ツッコめないこのもどかしさ。知っている人は知っている、彼が英雄だということ。そんな英雄のお巫山戯けで天地無用になるとは、ある意味予想通りと言っべきか、とりあえず最低なことである。

「し、シックスさん、ありが……はあ、で、でも……」

「そうかそうか、もっとやれっつてか」

このいやしんぼめ！と続ける彼に何も言えなくなったネギだった。本当にコイツは彼なのか。偽物にすり替わっているのではないか、そう思えてしまうぐらいだ。言葉を聞いてなさそうにしているが、実際はニヤニヤとしているので聞いた上で、あえて無視しているのだろう。大きく（物理的に立場的にも）出れないことを利用して、本当にひどい奴だと思う。

「楽しかったなー、なあせっちゃん？」

「え、え……は、はい……ぜえ」

「……おい、誰だこいつ教育した奴は」

彼が言う忍者やら中国ですら、グロッキーで何も言い出せないのに何故かこの黒髪の少女、見事に大和撫子を体現したような彼女が平然としていた。彼女の従者として、何よりも大切な人として側にいる桜咲刹那でさえ忍者達と同じようなものなのに、一応書いておくが両方性別上女である、若干危ない気配を感じるものの、彼からみれば性別を超えたなんちゃらかんちゃらで良いことらしい。彼が疑問を口に出したあと現在の教育者であるネギと、彼女の父親であるかつての戦友『近衛詠春』のどちらかの可能性という答えに彼は氣付いた。

「（素晴らしい才能だ）」

首を横に曲げ、息を整えたり別の誰かに起こされているグロッキー集団を見やる。女の割合と男の割合が決定的に違うのだが、集まっている女は別に好みじゃない（というかテオドラ以外だから）ので別にどうでもよかった。そもそもその少ない男が10歳の子供なのだ。今の内に切り落としたほうがいいかな？とかその程度しか思わなかった。

「う、うぐっ……」

「ネギッ!？」

突然倒れたネギにいち早く反応出来たのは、彼の背中に無言の圧力をかけていた神楽坂明日菜だった。それを感じてはいた彼だが、ハハ、とこれまた同じく「あえて」無視していたのだ。振り向いたら我が身を数回殺したハマノツルギが飛んで来そうな予感がしてい

たからである。数回死んだ程度では死なないが（矛盾しているが正しいとはこれいかに）彼にも芋虫のようなプライドがあった。女子中学生に数回殺される英雄、笑われるのはどっちだろうか。もはやギャグである。

「あーあ、魔力の使いすぎな。ざまあみ……さて俺はもう行くか」

速攻で転移した彼は、急いで発動したためか彼の仕事場である屋上に来ていた。やれやれ、と何に言ったのか不明、というのも心当たりが多くあるせいだが、とりあえずそういう言葉を漏らした。麻帆良祭最終日という時期に必ず起きる、一体何を目的としているかサッパリ不明だが、世界樹が発光している様子がわかる。昼間でさえ視覚出来るのに、太陽が落ちたらより目立つことだろう。

「（というか学生は木が発光することに違和感を……今更か）」

ポリポリと右手でアゴは引っ掻きながら世界樹を見ていた。視界の端っこには、ループしているのかと疑問に思うぐらいに、一日目、二日目と同じようにはしゃぐ学生達。疲労という言葉を『ゲート・オブ・バビロン王の財宝』に置いてきたんじゃないかという考えまで出てくる。彼はいつぞやのヒャッハーア言う人たちを思い出し、速攻で記憶を潰すという器用な行為をした。あんまり思い出さたくないそうだが、英雄でさえ怖れる彼らなのだろう。

（おーいシックス殿！お仕事じゃー）

(金は?)

(むぐ!?!?.....払うぞい。今回はかりは、の)

また厄介事か、と思うがそれを表に出すことはしなかった。何故か気分が良いというのもあった、珍しく素直にお金を払うということもあった、彼はタバコに火をつけぷかぷかと吸いながら学園長がいると思われる部屋に移しようと、煙を漂わせながら術式を展開した。だがそこで問題が発生する。それは誰も想定することの出来ない緊急事態だった。

「(学園長室どこだっけ?)」

うーん、と唸るが答えは出ない。大切なことはその時の空の雲の数まで思い出せるのに、興味が無いことは二ワトリ並の記憶力しか持たないという。例の芋虫級のプライドにかけて思い出そうとするが

.....

「(あー、やばい。面倒臭くなった)」

やる気を出した途端に、やる気がなくなるような事態が起きるのはいつものことだった。だが、一度受けると決めてしまったのでやらないという選択は存在しない。学園長に関する最後の記憶が「スケベ」なので、恐らく女子中エリアにいるはずだ、と反転したの太クラスの勘の良さを見せるのはこの後の話となる。

「全世界に対する強制認識魔法ですか？」

彼が屋台でアイスクリームを買っている時間、学園長室には多くの関係者達が集まっていた。その言葉を言ったのは誰だったか、その後続く言葉の大多数は「信じられない」だ。そうだ、魔法使いという存在は一般人にとって魅力的すぎたのだ。中には本当に魔法使いという存在を認知した存在もいた。それこそ、彼らの存在を世界に広めようとした者がいないはずがない。医療では治せない病気を魔法では治すことが出来る、金のかかる兵器より個人で完結する魔法という武力、全てはそこにあった。もつとも、現在麻帆良において魔法という枠組みで現代兵器を使う存在がいるのだが、ここでは割愛する。さて、余計なことを世界に知らせようとした人たちがいたが、それは全て失敗している。それは今の彼らを見てみれば言うまでもないことだ。

「そんなことが……」

だが、今回は違った。新聞、テレビ、あらゆるメディアを越える方法によってそれを為そうとする狂気の沙汰。強制認識、つまり、いるということ教えるのではなく、いるということ無理矢理気付けさせるのだ。それも”世界規模”という。確かにこれならば魔法使いの存在を外に知らしめようとしている人間の長年の願望が願う。そしてそれを可能にするタネも麻帆良にはある。だが、普通に考えて誰が信じようか。

「これならば確かに……しかし、これは確かなのですか？情報元は……？」

黒い肌をした教師が当たり前な疑問を口に出した。一番の問題がソレなのだ。魔法使いからしてみれば、現代の一般人が巨大な隕石が

落ちてくるぜ、とか言っているレベルなのだ。確率として存在はしている。しかし、その確率は馬がドナドナを歌うのと同じくらい（絶対に歌いません）のレベルのだ。だが彼の疑問に学園長は答えることはなかった。

「情報元などどうでもよい。ただ一つ言えることはなんとしても阻止、じゃ」

「なるほど、だからこそこの”作戦”ですか。確かに祭りの中”2500”の敵を相手にするのは難しい。ならば当事者として参加させる、ですか。なかなか大胆な…」

安全策は十分に講じる、と注意をした。内心「ワシのアイデアじゃないのじゃがな」とか思いながら。だが彼も同じように生徒を思っているのは間違いないのだ。それならば、と関係者達は次々と賛同の声を出す。一般の学生を魔法使いの戦いに参加させる、思えば最低の行為だが、更に考えるとこれが一番良い方法なのだ。敵も一般人がたむろする学園を戦場とする、敵が阿呆じゃないかぎりそんなことはしない。そしてその敵は阿呆じゃないことが既にわかっているのだ。ならば、敵が一般人を傷付けない”何か”があるという答えに辿り着くのは難しい話じゃない。

「確かにウチの生徒はこういうの大好きですからねー、それに能力もありませんし」

「存外、戦力として役立つてくれるかもしれませぬね」

太った教師に続いて、線が細い同僚と続いた。麻帆良の生徒の異常さは彼ら魔法使いから見ても際だっているのだ。中には、一般人でありながら『フ気』に辿り着いた、もはや才能とは言い難い『神の恩ト』

『恵』を授かっている者もいるのだ。それに相手はゴーレムだということが判明している。ご丁寧にも敵の主戦力と思われる存在から進軍してくるルートまで。

「この……六体の巨大生体兵器というのは？」

「学園の地下に封印されていた無名の鬼神を科学の力で使役するようです。これが出てきたら生徒は下からさせるべきでしょう」

ツルツル頭の教師の疑問に答えたのは、彼と同じように資料を読んでいた女性。足の付け根までサラリと髪が伸び、切りそろえられている。まあそんな容姿の話はどうでもよく、そして現代魔法使いにありがちな一般人との遠距離恋愛に焦っている人であるのもどうでもいい話だ。

「しかしこれをどうするつもりだ？ 学園結界の中では高位な魔物、妖怪は動けないはずだが……」

「いずれにせよ」

魔法使い達の間で、情報を交換し合いそして細かい作戦を練っている。だが、結局やるべきことはただ一つのみ。時間の関係でこのような事態と言えど本国からの援軍を頼ることも出来ない。そしてこの計画を実行する敵もまた……この計画を阻止しなければ、文字通り世界が変わる。もはや新世界と行ってもいいほどの……

「それでは諸君！ 全力を持って「ギイイ……」「……フオ、遅刻じゃぞ傭兵殿」

学園長の最後の叱咤の言葉を遮った者が学園長の元へと歩みよる。

彼を中心に左右に分かれていく魔法使い達だが、彼らは声を出すことが出来なかった。最初のほうこそ、不敬にもほどがある登場に声を上げようとしたものもいた。だが、見てしまったのだ。彼の背中に存在せし金字の紋様を。

「へ、ヘラス帝国の金字……」

誰かがそう言った。

「傭兵ってあの狙撃の……」

誰かが呟いた。

「まさか、噂が本当だとは……」

誰かが声を漏らした。

「いよう莫迦ジジイ。殲滅戦か？」

彼こそ英雄、スナイプ・オブ・インペリアルと。

T o b e c o n t i n u e d

第三十四射 スナイプ・オブ・インペリアル（後書き）

隠された真実編

「のうネギ君？」

「はい、なんででしょうか？」

「未来ではワシらは負けたんじゃない？ シックスはどう動いたのじゃない？」

「寝ていたら既に終わっていたと……そう言っていました」

N i c e e n d

第三十五射 田中さんの憂鬱

「フオフオフオ、好きにやるがよい。じゃが……」

狙撃手の問いに学園長は答えた。フードを深く被ったまま対峙している彼と学園長。そんな彼らの背後では魔法使い達は静かにしていることは出来なかった。あれは本物か？何故ここに？サイン欲しいと言葉を交わしあっている。無理も無い、彼の性格は有名なのだ。だからこそここにいるのがおかしいと気付く者は多い。しかし、それを彼らに聞こえるような声で言い出せるものはいなかった。重圧とでも言えばいいのだろうか。殺気、これは違う。狙撃手が歩いただけ、そのフードを被った男が通っただけ、それだけで”ソレ”は十分だった。

「生徒、及び学園を傷付けることは一切許さん、もちろん出来るじやろ？」

「期待してる」

ハッ、と鼻で笑いながら彼は振り向いた。魔法使い達が再び左右に分かれる。狙撃手はまるで誰もいないかのように、その紅き眼はまるで彼らを石ころかなにかとして見ているようで、無視したまま扉を開けた。ゴクリ、と魔法使い達の誰かが喉をならす。まるで”化け物”の胃袋に入り込んだような威圧感に誰もが汗を流していた。ガチャリとゆっくりと扉を開けたところで、狙撃手は何かを思い出したかのように、今度は魔法使い達を見て口を開く。

「俺の前に立つなよ、死ぬからな」

二タアと眼だけが笑い、ボタン、と返事を待たずに消え去った。そこでようやく音が帰ってくる。誰かが息を荒くしている。学園長はガタツと立ち上がり、魔法使い達の正面に立った。魔法使い達は息を整えたりと、忙しかったが学園長が前に立つとさすが、というべきが直立不動をする。しかし、流石に彼の登場には納得がいかないというか、何故彼がここにいいのかという疑問がある。

「学園長？彼はやはり……」

「うむ、皆の者。紹介が遅れたの。先程の傭兵こそ儂が数ヶ月前から雇っていた狙撃手じゃ。彼は諸事情により世界を回っている。そこで儂が是非、とな。そうじゃ、彼こそ『帝国の狙撃主』ダブル・シックスじゃ！」

おおー、と歓喜の声が上がった。誰もが知っている英雄、それこそ帝国ではあのナギ・スプリングフィールドよりも有名で人気を集めている本人なのだ。彼の能力とその異常さ、そして何よりも肝心な”強さ”を持っている。学園長は感嘆の意を覚える。半信半疑だった魔法使い達の士気を極端に上げさせたのだ。彼の登場のタイミング、さすが狙撃主”狙う”のう、とか思っていたのだが、勿論違うことは黙っておこう。

「例え、本国の援軍が無くとも諸君ならば必ず出来る。そして何よりも”彼”がいる。諸君！全力を持って作戦にあたってくれ！」

ハッ、と魔法使い全員がならった。同じ戦場に英雄が立っている、それは万の軍勢よりも頼りになる存在だった。個を持って軍を為す彼の全てが語り継がれていた。魔法使い達は顔を引き締めて、次々と学園長の部屋から出て行く。互い互いに声を掛け合い、あるいは競争を持ちかけ全ては護るため。

「頼んじゃぞ……英雄殿」

誰もいなくなつた学園長室。窓から空を眺めていた老人が一人、そう呟いた。

「戦力は十二分、精々気張れ莫迦餓鬼共」

麻帆良のとある高層マンションの屋上。最上階が一人に買い占められ、ついでに屋上までも彼の私物となつていた。高く高く、麻帆良を一望出来る屋上に男が一人。背中側に大きく金の刺繍が入れているフード付きローブを着込んで、タバコの煙を味わっていた。フードを深く被るその様子は不審者にしか見えない。

「（なんとというB級感、感無量だな）」

彼は作戦の全てが書かれているチラシを見た。まんま彼の戦友がプリントアウトされている。火星ロボット軍団から学園を護る魔法使い軍団という設定だそうだ。なんかもう滅茶苦茶だが、結局真実であるので何も言うことは無かった。クラシックスタイルのど真ん中を歩くようなローブと三角帽子のセット。ついでに星やら月を象つた玩具のような杖。チラリと眼下に広がる麻帆良の街を見れば、人が大いに集まっている世界樹広場。時々光の射手っぽいものが飛んでいく。

「（対非生命型魔力駆動体特殊魔装具……なんであんな産廃が）」

時時飛んでいく光を発する道具のことだろう。自動人形やらゴーレムやら、そういった魔力を原動とする非生命体の活動を停止させる武器だ。これは本来、かつて魔法界を包んだ『闇の福音』に対する武器として開発されたものである、もちろんそんな極端に使用範囲が狭い武器が広まるはずもなく、大抵が処分、最近では処分する金すらケチって倉庫に死蔵されているほど。彼の言うとおりゴミクス、産業廃棄物なのだ。だが、今回ばかりはそれがあることに感謝出来るかもしれない。相手はそういうゴーレム軍団なのだから。

「(……来たか)」

遠くに見える麻帆良湖沿岸部。敵が現れたようだ。大量の魔力稼働兵器を持って次々と進軍していく。その場所に展開されていた学生達は早くも戦闘に入ったようだ。視界の奥深くで生徒達が裸になっ
ていくという謎の状況に頭を傾げながら、彼は影のゲートを開いた。まだ動きべきではない、と彼の転移先は世界樹広場前。防衛すべき6つの拠点の一つであり、麻帆良湖沿岸からまっすぐと進んだ先にある。誰もいないような建物の影から現れたとき”ゲーム”の開始をつげる鐘が麻帆良に鳴り響いた。

《それではゲーム開始!!!》

司会の声を鬱々しく思いながら、彼はただ立っていた。まだ自分が出る時期ではない、と思っていたのだ。始まってすぐに落とされる砦など護る価値も無ければ、その砦にいた人間の能力を疑う。まだ魔法使い達は出てきてはないが、学生達が思ったよりも奮闘しているようだ。例えば世界樹広場前に辿り着いたとしても本の数体、それもすぐに世界樹広場にいた学生達にジャンクにされていく。

「（……あの女、銃の才能あるな）」

どこかで見たことあるような……、と彼は首を傾げるが、案の定思
い出すこともなく確認することもなく、ほんの数秒で考えるのを止
めた。彼に才能あるな、と思われた少女が活躍し周りの人間から拍
手を貰っている。彼のように冷めた人間に気付くこともなく、戦場
が次第に激しくなっていた。多脚のロボットが盾となってゴーレ
ムを運ぶ。隊列を作り進軍してくるロボットに押され始めたのだ。
放送からは聞くと全て同じような感じだそうだ。誰かがダメだ、と
声を言ったときだった。

奥義 百烈桜華斬

瞬間の出来事だった。突如空から落ちてきた少女（親方ー！）が二
人、ゴーレムの集団を斬り倒したのだ。一度に数十体のゴーレムを
倒し、周りの人間達は驚くばかり。

「（桜咲刹那にアスナ姫……なんであんな格好を）」

来たのは彼の言うとおりの少女達なのだが、格好がイベント臭溢れ
ている。神楽坂明日菜は左腕を護っている大きな籠手をつけや騎士
のような姿、桜咲刹那は” 何故” か和風猫耳メイド、というか武
闘祭のときの格好だった。驚く様子から一步下がった場所で見
た彼は理解出来なかった。なんでもヒーローユニットだそうだ。

「（なるほどね。ヒーロー側は自由に動くことが出来、そして学生
側の士気、防御地域が被らない、と。ゲームかつ）」

飛び出して一気に敵軍を撃破していく彼女たち。二人の剣士が背中
を合わせ大軍を戦っている。その様子が何故か懐かしいと思っ

まった狙撃手だった。放送からは各地にヒーローユニットが来たという趣旨の声が上がっている。反転、一気に勢力を盛り返す学園側勝負が単調すぎる、と彼は思う。

「（故にこれから、というわけだな）」

歯車・起動

長い長い砲身をもった巨大な銃。金属特有の鈍い光を出しながらそれは具現した。そんな金属の塊をあるうにか片手で振り回し肩で支える。まだ彼は動かない。突然現れた”兵器”に周りの者は驚く。最終兵器とも言えるヒーローユニット（英雄存在）はただ空を見据えるのみ。

バチイ！！

「（……………落ちたか）」

一般人には聞こえない音だった。何かが壊れる音。同じに感じるに”妖”の気配。それが示す結果はただ一つ、学園結果が何者かに落とされたということだ。ゲームの本番がやってきた。無名の鬼神がやって来る。この世界樹広場へと真っ直ぐ歩いてくるだろう。真っ赤な眼が歩いてくる鬼神を捉えた。同時に見える本物の魔法使い達は結界で動きを封じ”英雄”が巨大な一撃をかました。この麻帆良には英雄がもう一人いるのだ。現在は『悠久の風』という組織に所属しているタカミチのことである。彼へと腕を伸ばした鬼神、だがその腕が突如斬り飛ばされ、そしてタカミチが体勢をとった。爆音とともに巨大な一撃が鬼神の腹に穴を開けた。

「（封印がデフォルトなのか……………そうだったな）」

封印しようとして魔法使いが群がり始めた。鬼神というのは人間の悪意といった感情を集めたものである。魔法世界のように人工的に作られたものではないため時間が立てば復活する。それこそ人間がいる限り封印しか手が無いのだ。

「鬼神兵ねー、親近感が湧いてくるのは何故か」

突然タカミチが動いた。何かを拳圧で撃墜、黒い何かが発生する。敵にも”狙撃手”がいるのだろう。その狙撃手はキツパリとタカミチを諦め、そして周りの魔法使い達を狙撃していく。黒い渦に飲み込まれ魔法使い達、そして消えていった。原理を出来ないものの、リタイアだということはわかった彼は歩き出した。恐らく敵側も勝ちに来たのだろう、と。

「さあ諸君、派手にいこう」

眼前まで迫っていたゴーレム達を肩で担いでいた兵器でまず一発殴る。空へと打ち上げられ、そして一発の発砲音。空中で分解し地面へとたたき付けられた。周りの人間達が突然現れたように見える彼に驚く。彼は無言で更に歩く。

ダァン！！

数体のゴーレムが吹き飛ぶ

ダァン！！

数十体のゴーレムが分解される

ダァン！！

数百体のゴーレムが彼に迫る

彼はフン、と鼻で笑いながら腕を振るった、それだけだった。しかし腕から伸びた風がそれを許さない。彼の腕が暴風を巻き起こしゴーレムを吹き飛ばした。

「（む、建物が……まあいいか）」

吹き飛んだゴーレムが建物に頭からツツコンでいたりと惨事を巻き起こすが、彼は見て見ぬフリ。

キイイイイン！！！！

大軍のゴーレムの口から出てくる光線が彼に迫る。今度は彼は手の平をそれに向けた、向けただけだった。空中で光線が”止まった”という、バチバチと光線が音を出しながら彼へと伸びる。しかし、光線は彼の正面数歩前で停止したのだ。そして反転

「カアッ！！！」

光線が全て反転する。ロボットの口から出た光線は、放たれた口へと帰っていく。数百かという光線は一つ残らず彼に届くことはなかった。光線は放ったゴーレムの頭部を破壊するという結果になった。周りからは歓声の声、それを聞かずに彼はただ歩いた。

「（タカミチ……？ク、あの莫迦め）」

突然消え去ったのを感じた。それも彼が思ったタカミチ以外の者ま

でも。高い魔力などを発している者から次々と消えていく。苛立ちを覚えながらも彼は進んだ。彼の持つ長い銃が敵を貫く。彼が持つ機関銃が敵を掃討する。彼が持つ全てによってスクラップを大量に生産していった。

「お、おい巨大ロボットが来たぞー！！！」

「……………」

逃げていく生徒達、逃げながらも攻撃するがそれは止まらなかった。広場へとまっすぐ続く道を進むその巨大な鬼神は「運が悪かった」と言うしかないだろう。そこは彼が護る唯一の場所であり砦でありもはや兵器であるのだから。鬼神がまっすぐと進む向こうには彼が立っていた。撤退していく人々とは逆に前に進む彼。何人かは彼に声をかけるが、彼は無視をする。

「お、おいあんた……………」

逃げ回る人々が止まった。それは違和感がありすぎた。鬼神が倒せない？否、倒せるかもしれないという違和感だ。ゆつくりと近づき合う人と巨大なロボット。ありえはしない、しかし人々は思ったのだ。ゆつくりと歩く彼の背中を見て、巨大なロボットは負けると。そう思ってしまうほどの何かを持っていた。辺りの場は戦場だといふのに、そこは音がしなかった。

「退け」

パン！とはじける音がした。どこから？鬼神の頭部からだった。胸を大きく円状に削りとばし、そして頭部を吹き飛ばしたのだ。生命として肝心な物を失った鬼神は倒れ込む。彼を押しつぶすかのよ

うに、悲鳴が聞こえた。全て無駄に終わるというのに。

「なんだ、聞こえなかったのか」

彼へと倒れ込む鬼神を、その瞬間彼は殴った。普通に、学生の喧嘩のように殴った。それだけで十分だった。鬼神が衝撃により浮かぶ、だがその巨大さ故にすぐにまた落ちてくることになるだろう。

ダダダダァン！！

彼の銃が火を噴いた。一発が右肩を吹き飛ばす。一発が左肩を吹き飛ばす。一発が腰を吹き飛ばす。一発が胸を吹き飛ばす。弾丸が鬼神を貫き、そして崩壊させた。地面に落ち来てたものは既に肉片。そして次第に薄くなり消えていく。

歓声

彼は空を見た。既に夕日が沈もうとしている。その刹那、夕日を背景に空に人間が映った。投射映像の一つなのだろう。空の大きく映ったのは一人の少女だった。彼女こそ彼らの敵である『超鈴音』であつた。

《苦戦しているようネ、魔法使いの諸君。私がこの火星ロボ軍団の首領にして悪のラスボス、超鈴音ネ》

お団子頭の少女が演説する。新ルールだと言う退場システム。とある銃弾に当たるとイベント終了後にまで飛ばされるという時間跳躍弾の説明。即失格となるというルールがここに定められた。そして知らされるヒーローユニット大半の撃破という真実。学生の中には既に諦めている者もいた。しかし、世界樹広場前、彼が歩く道の人

間はそう思わなかった。そう、そこには彼がいたのだ。

「なんだ、ぬるいな」

彼の手に持つ拳銃から弾丸を放つ。それは全てロボットの胸部に当たり、バラバラにしていく。彼らは見たのだ。このフードの男が全てを薙ぎ払う様子を。全てを淡々と撃破していく英雄を。誰も倒せない鬼神を倒した存在を。

「……………フン」

パン！！彼の銃が空へと向けられ、そして弾丸を放った。空に不可解な現象が起きる。黒い塊が空にポツンと浮かび上がったのだ。なるほど、と狙撃手が思うと同じに彼は長い砲身の狙撃銃を取り出し、あまつさえスコープを見ようとせず弾丸を放った。弾丸を放った敵を撃ち抜くために……。

「あばよ、莫迦弟子」

To be continued to Double Six

第三十五射 田中さんの憂鬱（後書き）

あんまり無双出来ませんでしたね

第三十六射 狙撃主 VS 狙撃手 (前書き)

記念日ですね、36的に考えて

第三十六射 狙撃主 vs 狙撃手

「ハアハアハア……まったく甘かったよ」

褐色の少女が右腕を押さえながら必死に、鬼気迫る表情で走っていた。抑えている右腕は赤く染まっている。ポタリ、ポタリと常に赤い液体がしたたり落ち、鬼気迫る表情に苦痛を付け加えていた。彼女の名前は『龍宮真名』という、偉大なる英雄の弟子にして裏の世界でも有名な傭兵の一人であった。そんな彼女は今必死に、それこそ“鬼”が追ってきたのかのように逃げていた。

「なんでも出来る奴は出来ることしかない、ってね。ああ、まったく無茶な仕事を押しつけられたものだよ！」

そして振り向き空中に左腕に持っていた拳銃で一発の弾丸を放つ。空中で金属が炸裂する音。甲高い音を響きかせ、空中で激突したはずの弾丸が彼女の頬をすり抜けた。髪の毛数本を斬り飛ばす弾丸に冷や汗が出てくる。そして“今頃”聞こえてくる狙撃音。これが示すのは相手の狙撃が、少なくとも1000mを越える証拠で、そして向かい合った弾丸を弾き飛ばすほどの貫通力。彼女の持っている拳銃でさえ改造を施し威力は格段に上昇しているはずだった。正面衝突した弾丸を、片方の弾丸を力でねじ伏せ何事もなかったかのようにつき進む、彼女でさえ『帝国の狙撃主』の狙撃の弾道を少しだけ、ほんのすこしだけその軌道をずらすことしか出来なかった。

「（好奇心猫を殺すというか、猫ごと爆破だよまったく）」

カァン！カァン！と複数の音が耳に入る。彼女は体をよじらせ、空中で前転し、ステップをするかのようにソレを“回避”する。文字

通り四方八方から飛んでくる弾丸をまさしく間一髪で避けていた。このままショートヘアになるんじゃないのか、ということとを薄々感じながら痛む右腕を抓る。恐ろしいことに、この四方八方から……”弾丸の檻”を作っているのは特定個人だということだ。彼女『龍宮真名』は彼の弟子であるものの、師と自分の力量の差に笑うしかなかった。いや、これは彼女が彼の弟子として”付け回した”ころから知っている。そう、それこそ嫌というほど。例えば跳弾、自身ですら精々3段だ、だが狙撃手はそれを6・7段で行うことが出来る。「あっちのほうから弾丸が来たから狙撃手はあっちにいる」という常識を真つ向から覆す所業をするのだ。

「(化け物にもほどがあ、クッ!)」

一つの弾丸が左足をかすった。わずかに肉を食いつぶす。しかし彼女は倒れない、止まることはない。止まれば死であり、そこはまさしく戦場なのだから。彼女は師から授かった誇りと、何よりも「腰抜けであるべし」という言葉を反復する。本当の意味でそれがわかったような気がした瞬間だった。

「フッフッフ」

息を規則正しく吐き漏らし、そして弾丸を放つ。拳銃で放った弾丸は”足搔く”などという無駄なことではない。何よりも明確に敵を殺すという目的を持った弾丸だ。

「(拳銃1000m射撃も出来なくてなにが狙撃手か)」

師匠風の言葉を心に浮かび上がらせる。彼女自身は未だに気付いてはないが、彼女は笑っていた。気でも狂ったのだろうか、否、それは違う。純粹に楽しんでいるのだ。それは子供が親と遊ぶのと同義

である。たとえ硝煙と血の飛沫が飛び交う戦場だとしても、むしろ戦場だからこそ。右腕を服の切り裂いて作った布で思いつき縛る。もう痛みは感じない、だからこそこれからが本番である。前代未聞の”狙撃戦”が始まった。彼の数段の跳弾が彼女を包めば彼女はそれを全て回避し、彼女が弾丸を放てば彼の狙撃で叩き落とされる。

「は、ハハッ！」

学園を走り抜けた

「最高だ、師匠！」

弾丸が頬をかすった

「出来れば戦場以外でも付き合っただけのだけどっ！」

弾丸の檻がより狭くより”堅く”作られていく。だが、彼女は空へ跳んだ。腰につけたホルダーから二丁の拳銃を放棄、空中に投げ捨てられる。否、それを掴んだ。彼女は右腕が痛むのを抑える。二の腕を持って四の銃を。四つの銃口から弾丸が飛んだ。縦横無尽に飛んでいく弾丸を全て”檻”にあたり、叩き落としていく。計算されて撃たされる跳弾は少しでもズレれば壊れるのだ。

「シッ！」

正面から飛んでくる狙撃弾を腰を落として回避、横転し回避、バク転し回避、弾丸を放ち回避。皮膚に直接伝わってくる弾丸が飛び去った空気圧に心地よさを感じ大きく跳躍する。内心跳んだことに後悔をする、しかしそれでも全身で感じる風が、なによりも良かった。狙撃弾が彼女の落下点を打ち砕く。もちろん、そんな彼女はまとも

な着地が出来ないわけで。バランスを大きく崩した。全てが終わろうとしている。

「（ああ、所謂ピンチか）」

「チェックメイトだ”マナ・アルカナ”」

ゴリッと彼女の後頭部に銃口が突き立てられていた。彼の足下には影の水たまりがある。転移して来たのだろう。最期に呼ばれた名前のことすら考える暇も無かっただろう。彼は冷酷に、そして当たり前前に引き金を引いた。

ダアン!!!

「なるほど、運が良かったな”莫迦弟子”」

「ああ、まったくだよ莫迦師匠」

弾丸は彼女を貫くことは無かった。何故か、そもそも全てがおかしい。銃口は頭に突きつけていたはずだ、それなのにはずれた。彼も撃ち抜く気満々だった、それなのにはずれた。何故か、何故か。しかし彼も彼女もただ「運が良かった」としか言わなかった。はずれたことに対する怒りも無かった。はずれた安堵もなかった。

「それは勘弁してほしいネ、狙撃手」

彼女の手が銃をあらぬ方向へと向けさせていた。彼女が銃に手をそえ、手をそのままスライドさせる。その瞬間彼の手に持っていた拳銃がバラバラに分解されていった。文字通り部品になって地面に落ちていく金属片を見ながら、狙撃手は口を開けた。

「やれやれ、傭兵にあんまり心入れると痛い目みるぞ？」

「作戦実行にまだ必要という捉え方をしてほしいネ」

「作戦に必至な傭兵か、傭兵はどこまでいっても使い捨てだぞ？ククク」

互いが互いが大胆不敵に笑い合う。真名としては自分を差し置いて彼と話し合う中国人に引き金を引きたくなったもののクライアントなのでしょがない。

「ハハ、悪いけど超。私はここで引かせてもらつよ」

「わかたネ」

そう言っただけで龍宮真名は跳び去った。その気になれば銃口を向けたであらう彼だったが、そこにはタカミチを撃破した超鈴音がいたのだ。どういふ手品で彼を撃破し、尚かつ自分と彼女の戦場にどう干渉したかはわからない。だが、戦場で誰がどういふ手を使うことなどどうでもいいのだ。確かに事前情報として調べる、しかし肝心の戦場では何が起きるかわからないのだ。特に彼女のような理解不能な力を行使する存在は。

「狙撃手、アナタも退場して「パン！」ッ！」

「なんだ、避けるかつまらん」

彼女の声を聞くつもりはない、と銃で語った。つまらん、と一言で斬ったものの狙撃手は、シックスはただ驚いていた。至近距離で音を越える弾丸を避ける、バグにもほどがある行為だ。だからこそどういふ手が見えてくる。例えば、彼の悪友とも言えるアルビレオ・イマ。彼は武闘大会において異常なまでの耐久力を誇った。事実、その彼はただの分身であり、結果として言うならば彼に勝つことは出来ないのだ。彼のようにではないが、避けるという関係、なにか仕組み（手品）があるという予測を立てた。そして並列思考の一つ、それが答えを出す。

「ク、なるほど時間跳躍か」

「ッ！？さすがだ狙撃手」

答えが出た。ネギ・スプリングフィールドが見せた”超鈴音”から貰ったという時空跳躍時計カシオペア、時間を跳ばす弾丸の制作者そしてタカミチを初めとする学園の魔法使い達を 情報が回るよ

りも速く　瞬間的に潰すその異常さ。近距離で音を越える弾丸を回避する、もはや速度と言つていいものか不明な存在。自ずと答えは出る、後は”カマ”引っかけるダケでよい。戦場における情報こそ何よりも確かで、何よりも文字通り得難い物なのだ。

「……ク」

瞬間彼らが動き出す。彼女は時間を超え、彼は全てを越えた。彼の弾丸が何も無い空中に放たれる。そして刹那以下の時間を持つて彼女がシツクスの背中を殴ろうと……

「そら、受けてみる」

ダン！とダンプがぶつかつたような音を立てながら超が吹き飛んだ。背中に回りこんだ超だったが、すでにシツクスは背後へむけて回し蹴りの体勢を取つていたのだ。時間を止める彼女に、予測とかもはやそういう話ではなく確実に当たる攻撃をしてきたのだ。そしてまた突如シツクスは攻撃の態勢をとつた、弾丸が”ソコ”に現れた超へと襲い掛かる、が彼女はまた消え弾丸は当たることはなかった。そればかりか今度は正面。正拳突きを構えをとつていた彼女が彼の正面に。

「……ッ」

ピクン、と何かを感じた超は再び消える。そして上から落ちてきた幅広い刃を持つガンブレードがその場に突き刺さつた。更に刺さる直前にはシツクスは跳躍、同時に超の拳が彼がいた場所を破壊した。

「（一筋縄でいかない力！）」

破壊と”同時”に彼女は既に彼の背後を取っていた。跳躍し隙が出来た、だからこそ当たる。彼女はそう思っていた。だがそれも当たることは無く、むしろ自身が攻撃を受ける直前だった。自身が時間を止めて動き蹴りを出す、そして時間は動き出す。その間に彼は敵の攻撃を分析し、あまつさえ攻撃を加えるのだ。なんたる”異常”さか、彼女はゴクリと喉をならした。見事なものだと、時間を止める自身にここまで戦えると。たった数撃の撃ち合いだった。しかし彼女にとってそれは数百に値する。

「ヨチヨチ歩きだな、貴様。いいのだぞ？」

正面の男は言って退けたのだ。時間を止めるなど関係ない、と。ゾクリ、と彼女の背中が何かが迫った。時間を止めれば、空に滞空しているシヨットガンから弾丸が放たれる瞬間だった。彼女がタカミチを退場させたことが出来たのも、彼が教師という立場で彼女が彼の生徒だったという点もあった。俗に言う油断があったのだ。だが、彼はなんだ？と。女子供に対して躊躇もなく引き金を引いた。自分以上どこか彼の弟子にさえ。

「（相手が悪すぎるネ、こんな化け物だとは）」

そして彼の背後に回り拳を向ければ

「つまらんな」

彼の足が”既”に彼女の頭を捉えている。

「クッ！」

同じ英雄でもタカミチと狙撃手ではここまで違うか。躊躇や戸惑い

が人間としてまったく無い彼に疑問を覚える彼女。”普通”すぎるのだ、敵を覚悟を持って倒す、そこはいい実がいい。しかし、それでは殺気という存在が生まれる。彼はそのようなものを一切持たずに息をするように、ごく自然に彼女を殺そうとするのだ。一撃一撃ガードが間に合わなかったら、と嫌な未来を想像し彼女の額に汗が噴き出る。

「さすが英雄ネ、ここは引かせてもらおうヨ」

故に彼女は撤退を決断した。例え時間を越えて攻撃しても彼は対処できるとはいえ、逃げるといふ手には行動することは出来ないだろう。彼女のもくろみ通り逃げることは出来た。彼から見れば一瞬で彼女がどこか別の場所に転移したとも言えるだろう。彼自身も追うことが不可能だと理解していたため、特に何の行動も出さなかった。

「（正直ギリギリだな。時間停止マジ卑怯、ダメ絶対）」

ハアとため息を吐く。既に太陽が落ちて闇に染まろうとしている空を視界の隅に入れながら、本来の持ち場に帰ろうとするのであった。気付けば、彼が護っていた世界樹広場前を除き、五つの場所が奪われている。空へとまっすぐ伸びる魔力光。地上から自身を狙う口ポットの光線を回避し、弾丸を返す。

「（ハア、やれやれ……大金だぞ、これは）」

広場前に辿り着く。正面から今まで一番大きそうな鬼神がそこへ迫ろうとしていた。学生達は波状攻撃をしかけるが止まる気配はまったくない。腕を振るい攻撃を弾け飛ばす。重々しい歩く音が次第に大きくなっていく。誰もがダメだと思った。そこには彼がいることを忘れて。

「ドイツを舐めるな木偶の坊」

爆音だった。耳を劈くような轟音だった。大地を震わし、生徒達がソレを見れば……、巨大な砲台、砲身、全てが巨大。世界樹広場をドンツと制圧している巨大兵器が一つ。

「れ、列車砲……？」

誰かがそう言った。そして何かを思い出したかのように生徒達は鬼神へと振り向く。なかつた、鬼神の腹が、頭が、腕が。残っているのは足の先。今日何度目かの歓喜。突然現れた列車砲へと人々が集まっていく。砲身の先にただ立っているフードの男。数少ない口ポットがまだまだと言わんばかりに迫るが、もう生徒達の敵ではなかった。

《最後のポイントはまだ無事だー！！なんとなんと突然現れた列車砲！一体誰がこんなことを！！》

彼はテンションが上がり放題の司会の声を聞きながら、ふと誰かが近づいてくるのを感じた。まっすぐと飛んできている。杖にまたがっている特徴的な赤髪、そして何よりも歳が10前後だろうという子供。ネギ・スプリングフィールドだ。司会の声を聞きながら、少年はまっすぐと空へと駆けていった。

「列車砲まで持ち出すか、狙撃手は」

「……お金がつ」

空中に浮かぶ、金髪の少女と後頭部が長い変な老人がいた。突如現れた列車砲が爆音を上げている様子に、少女は楽しそうに笑い老人はしょんぼりしていた。鬼神をバラバラにしたところでネギ・スプリングフィールドが空へと駆け上る。空にこそ超達が待ちかまえているのだ。その時だった、エンジン音みたいな音が響きながら何か近づいてくる、桃色のソーサーだった。

「おいおい学園長、ここの魔法使い共が旅行気分か何かか」

「む、むむむ。あいやー」

フガフガとボケだした学園長を無視して、上を見上げた。巨大な火柱と爆音が響く。広範囲殲滅魔法『燃える天空』が発動したのだろう。そんな魔法まで使うかと彼は思うが、彼の目に入り込んだ光景、超が全身に呪文処理が施されているのが見えた。激痛を伴って無理矢理魔力を引き出しているのだろう。彼も同じような術式が組み込まれているが、彼は痛みには既に”慣れ”ていた。

「燃える天空か、なかなか派手だな」

「狙撃手、貴様はどちらに賭ける？」

「ふむ、なるほど。それならば俺がやる」

「おいやめろ」

ガチャンと言い笑顔でハルコンネンの銃口を飛行船へと向ける彼だ

つたが、金髪の少女エヴァンジェリンに真顔で阻止される。学園長はまだブツブツ言っていたので二人とも無視をして会話をしていた。火の魔法を光の魔法が、空で戦っているネギと超の間でぶつかり合っている。酒の肴とは言い難い光景だが、シックスはそれを見ながらワインを影から取り出し味わっていた。

「おい、それ私のじゃないか」

「おまえんちで拾った」

凄い形相で睨んでくるエヴァンジェリンを「どうどう」とたしなめる彼に、余計に怒りをつのらせる彼女。彼らの背景では『燃える天空』と『雷の暴風』がせめぎ合っているが、実にどうでもいいことであつた。

「だから拾つたんだ。お前の物は俺の物、俺の物はお前の物だ」

「なんだその分け合い精神は!？」

ネギの雷が超の炎に打ち勝つたことも実にどうでもいいことだつた。二人がわけのわからない喧嘩をしている最中、光が麻帆良を包んだ。強制認識魔法が発生したと思つたら実はそうでもなかったとか、学生達がまた戦争を始めたとか、超が家系図を持ち出したとか、超が未来に帰つたとか、ネギが何かの決心をしたとか、全て実にどうでもいい話である! まつたくもって!

T o b e c o n t i n u e d

シックス あんがいだめっばい(前書き)

とある未来のIFのお話

お巫山戯成分が大目です。
時間に関する矛盾には大目に見て欲しいです。

シックス あんがいだめっばい

「oh, What is that?」

アレは何でしょうか。という疑問を口に出さずにはいられない。突然大きな音と振動、ついでに破壊したくなるような光が空まで上っている。なんだアレは、ただその疑問しか口に出せなかった俺は一体全体どうすればいいのだろうか。テオドラのご信託を預かるしかない、ヒヤッホーオ！なんだろう、ものすごく心地よい。全てがどうでもよくなるこの感じ、最高だ。今なら平行世界の俺を銃殺出来るぞ、間違いない。さて、窓から外を見てみると……うむ。

「やらかしたな！」

時間を見ると既に夜、まんま一日寝ていた俺はさすがと言う他がない。発光しまくってる世界樹の上空、また光が螺旋状に旋回し一点に集まっていく。なにこの魔力ふざけているの、どこかの変態技術者達は本当にやる事が理解出来ない。というか何を発動させる気なのだ？下手をしたら世界を包み込むような大魔法……なんかもうどうでも良くなってきた。仕事場無くなりそうだし帰る準備でも始めるとしよう。俺は何も悪くない、仕事を貰ったときだけ仕事をすめるのだ。本当に出来る奴は出来ることしかししないのだよ、まったく！なんてことを考えながら荷物整理という名前の影の倉庫に力任せでぶち込む。倉庫ってばマジ便利。俺の術式追加兵器群も常に待機状態だ。ここから光学兵器攻撃するとマジうめえ。

「さらば麻帆良よ、永遠に。メリークリスマス（地獄で会おうぜ）」
「ガシャン！！とガラスが派手にぶっこわれる。さぁドラグーンよ、

我らは帰るべき場所に帰るとしよう。あ、いかに何かが発動するっぽい。え？バ ス？光がすごい、光がやばい。目が、目があああああああああ！！！！俺の！アルビノな！目が！痛い痛い痛い。あ、慣れてきたわ。前が見えないけど。眼の神経焼き切れたんじゃないのだろうか。ただでさえアルビノで色素細胞が無いのに光が直接目に入ってくるとか本当に無いわ。

「ぬ、ぬわあああああああ！！！！」

光が俺を包み込む。なんだろうこれ、黄金の草原を走っているような。あ、いかん。なんだこの魔法は？……強制認識？強制認識全世界に広めて何するつもりだ。というか何を認識させるのだろうか。ちよっとばかり解析してみる。なんとということでしょう、魔法という存在に対しての強制認識です本当にありがとうございます。おい、どういことだこれ聞いてない。責任者を呼べえい！！帰るところじゃないぞこれ！何かあったらテオドラツラツラツラツラツラツラツラああああああ！！！！

「なんてことがあった」

「……は？」

ざわざわと何か騒がしい外。魔法界ヘラス帝国帝都、そこにある大きな城、皇族の住まいでありヘラス族という亜人の聖地とも言われるかもしれない場所である。そんな場所にて一人のフードを被った男と、褐色肌に角の生えた美女が対面していた。フードの男こそこ

の帝国の大英雄『ダブル・シックス』本人であり、その美女こそ彼の主であるヘラス帝国第三皇女『テオドラ・バシレイア・ヘラス・デ・ヴェスペリスジミア』である。長い名前だが気にしないことにしよう。二人の対面は実は”ある事件”の発生から1ヶ月あまりの出来事だった。

「つまりお主は暢気に寝ていたと？」

「Yes, my master」

ジト目で睨み付けられる英雄は、フードにより見えてはいないが変な汗をダラダラと出していた。しかし、20年来の付き合いである美女……テオドラは彼のそんな様子を見事に看破しており、仕事に失敗、というかこのような”大事件”の合間ですら寝ていたというある意味人間っぽい感情。それを得ている彼に、麻帆良に感謝するべきか英雄としてダメダメな従者を叱るべきかという不思議な状態だった。

「ハハハ、何をおっしゃるウサギさん。俺はいつだってアナタの側に」

「……恥ずかしいことを言って誤魔化してもダメじゃぞ？」

「ギ、ギクーー！！！！」

キリッ、とカツコイイ台詞を決めたシックスだった。その言葉に顔を真っ赤にしたものの、真意を見事に見出し彼の作戦を潰す。というかギクーー！って、というシックスの変わり具合にむしろ不安を覚

えるものの、兵器という彼が人間になったという安心と喜びが大きかった。何よりも彼の言葉に嬉しかった。彼の言葉は本心であろうがタイミングが狙いすぎている。さすが狙撃手。

「なってしまったものはじょうがないのじゃ。本来は麻帆良の人間達で処理しなくてはいけなかったこと……、世界は大きく変わってくるのじゃ」

「……世界が変わっても、俺とお前は変わらないさ」

そうじゃのう、とシックスにかかるテオドラだった。麻帆良の人間が処理しなくてはいけなかったこと、大事件、それは「魔法が旧世界の人間にバレた」ということである。バレたというよりは1ヶ月前の所業による強制認識が正しいのだが、ひとまずそれは置いておくことにしよう。強制認識によって魔法という存在が世界にバレたため旧世界は大変なことになっている。魔法という力は便利すぎたのだ。医療では治療出来ない怪我を魔法では容易く治すことが出来、そして何よりも個人で兵器を凌駕する存在になることが出来るのだ。

「旧世界にいる魔法使い、及びそれに関する人間。そんな者達が次々と移民してくるのじゃ。大変なことじゃぞ……」

「ゆるさん、ゆるさんぞ虫けらどもめ！じわじわと鬨り殺してやるあうああああいいい……！」

あの 莫迦 餓鬼 は 一体 どこに いる の で しょうか
フヒ フヒヒヒ ヒヤハ

「ハアハア！例え俺が寝ていたとしても！否、俺がいたとしても関係ないぞー！！」

事件から一週間たった。麻帆良の魔法使い達は大勢の人間に魔法使いがどうか言われているが、大変だな。俺は目立たないようにしていたためか魔法使いという部分は知られてしまったが人が集まるということもない。そこは安心だ、タカミチやら学園長の莫迦ジジイも取材されまくってるぜ。結局拒否しているけど。だが残念だったな。日本のマスメディアを莫迦にはいけない。あのストーカ―体質だけは勘弁してくれ。俺？カメラ破壊してやったら警察が追って来ただけ何か？ラ ボー怒りの俺、と言わんばかりに戦車で走っていたら追ってこなくなった。そう思ったら……

ファンファンファン

待てやあ！そこの戦車男おあ！

バララララララ

要救援！要救援！相手は武器を作り出す魔法使いだ！

ゴゴゴゴゴゴ

待たないぞ撃つぞ！待て！待てって言ってんだオラアアア！

！！

「人間まじ怖い」

機動隊が追って来ました。先生、俺はどうしたら良いのでしょうか？兵器群を持って追い払っても地獄の底から「うおわあああああ……」と黄泉返ってくるこの変態共をどうしたらいいのでしょうか。どれもこれもあの莫迦餓鬼のせいだ。何だ？何が悪い？ええい、人一匹や二千匹ありんこと変わらないだろうが！莫迦餓鬼がチャオズとやらを見逃したせいで散々だ。速く見つけ出し何があったから洗いざらい吐いて頂き俺は速攻で国に帰らせて頂きますからね！んもう！！フヒーーーー！！！！

「ええいままよ！カモン、グスタフ！」

かまわん突撃だーーーー！！

ヒヤッハアア！！

「oh」

これが日本の機動隊だと。莫迦な、この俺が死ぬってか……、じよ、冗談じゃ

「元老員共は全てのゲートを断絶すると決め、父上もそれに賛同し

たそうじゃ」

「今のところの最善策だな。しかしいつか旧世界の人間はこっちに来るぞ」

「そこまでなのか？」

ああ、とシックスは彼女に言う。彼は人間の怖さ（日本の機動隊は言うまでもない）を知っているのだ。人間達は進化と排他の生物である。そこに進化という道があるならばそこを歩き、進化の道はたに何かがあるのならそれを排他する。そういう生き物だ。いずれ科学の力を持って、あるいは独自に魔法に辿り着きそして魔法世界に到達するだろう。

「ままならんものだ、奴らが来たときもう一度戦争が来る」

「……科学とやらは恐ろしいものじゃな。魔法も」

テオドラは続きを言うことは無かった。突然魔法を得た彼もよく知っているのだそれは。魔法という科学、科学という魔法、極めた物ならばどっちだろうが変わりは無いのだ。現に超鈴音は科学という力を持って誰にも到達出来なかった時間跳躍を実現したのだ。どちらが良い悪い強い弱いなど、それこそ無駄な話である。

「麻帆良の魔法使い達は？タカミチもいたんじゃろ？」

「全員オコジョだ、タカミチは幾分軽かったがな。責任者は死ぬまでオコジョだそうだ、古い先短いのにな、ハハ」

そうか、とテオドラは表情を暗くしながら頷いた。実はシックスは

最後に伝えていないことがあった。それはネギ・スプリングフィールドの存在である。少年が例え英雄の子供であろうとも同じようにオコジョの刑は免れなかった。しかし、少年は突如脱走しそして消えていった。消息不明なのだが、彼はそんなことは気にはしなかった。少年がどう動こうとも”ここ”は変わることはない。そして超鈴音の願いも全て台無しになっているのだろう、と。過去は過去、現在は現在、未来は未来、たった一つの生命体が時間という大いなる流れを変えることなど愚かにもほどがある行いなのだから。

「（例え過去に行こうが……”この世界”は戻せないのだよ）」

窓の外を見る。人々があわただしく交差している。移民が来た影響だ。カンカンと建物の増築をしているのである。金槌音。市場では多数の人々が歩き回っている。時には怒号、お祭り気分にもほどがある。帝国側の結論としてはゲートの断絶、残念なことであるが全員の移民が終わってない場合でも。しかし移民は希望するならば全て受け入れると、皇帝が約束したのだった。警備隊やギルドが働き口として山ほどあるという。戦争需要ならぬ移民需要である。土地が狭いなら莫迦丸出しの所業だが、生憎ここは”超”大国ヘラスなのである。そして何よりそこには彼がいた。

「シックス、そろそろ時間じゃぞ？」

「……わかってるさテオ」

帝国の大英雄、帝国の狙撃主、狙撃の代名詞にて最強。数百年先まで、否、帝国が没するその日まで彼は語り継がれることになる。旧世界と魔法世界の戦争において、圧倒的戦力を持って敵を蹂躪しつくした人知を越えた化け物として。なによりも救国として、そして偉大なる魔法使いとして。

「それにしてもまあ、皇帝も認めてくれたものだな」

「クフフ、当たり前じゃ。こういう時にこそ嬉しいニュースが欲しいものなのじゃ」

なあ旦那様？

ああ、まったくその通りだな

「見つけたぞおおお莫迦葱いいいい！！！」

「し、シックスさん！？一体どうなってるんですか！？？」

「貴様のせいだ！貴様のせいで！機動隊に追われることになったのは貴様のせいだー！！！」

「な、なんで？え？機動隊？」

「シックスさん何したんですか！？」

「寝ていたらいつのまにか強制認識だとう！？巫ツ山戯るなー！！一週間どこにいったのだ！？俺はなあ俺はあ！寝ていたらこうなっていたのだぞ！？そうだ、マナ・アルカナはどこだ！？俺が抹殺してやる！フハハハハ！！」

いたぞ！民間人を人質にしているぞ！！

殺してもかまわん！絶対に助け出せ！

ハッ！

「ほ」

「「「「「「」」」」」」

The End

第三十七射 ファンサービス(前書き)

マジメに読まないように推奨します

第三十七射 ファンサービス

「おいジジイ」

「ふお！？なんじゃ突然？」

おらあああ！と扉を思いつきり開けて学園長室に入ってきた男が一人、彼こそ帝国の大英雄と呼ばれるダブル・シックス本人である。諸事情により主第一主義の彼がこんなところにいる。学園側は夏休みに突入し、いよいよ暑さも本格的に。学園都市というコンクリの塊なせいか暑さもこれまた強い。とはいっても魔法という力で緩和できる上、彼はそういうことを必要としない肉体をしている。その気になれば裸でサハラ砂漠を歩き回れるし、逆立ちしながら南極大陸を横断も出来るだろう。彼にとって暑さより重要なことは”光”である。白い肌に真っ赤な目、俗に言うアルビノである彼には光はやばい。肉体が克服しても苦手意識だけは消えない彼の天敵であったのだ。

「実はな……」

「む……」

ゴクリと学園長は息を飲んだ。基本的に無気力無関心無干渉である彼が、マジメな顔になって話を出そうとしているのだ。学園長たる彼には信じ難いことだが今こうしてシックスはその顔をしているのだ。彼がそこまでして話すというコト、それがどんなものなのか、と覚悟を決めた。

「帰る」

「ふえ？」

ニツコリ、ではなくニタアと眼だけが歪んで笑うシックスだった。どんな無理難題かと思ったら、確かに十分勘弁して欲しいことなのだが、実際は三文字、漢字に変換すると二文字という極短絡的な内容。しかしそれで全てがわかってしまうほど、シックスのことをよく知っている学園長だった。何よりも主であるテオドラの元に帰ろうとする、本能的な何かを持っている彼なのだ。というか帰る帰る言うのは今に始まったことではない。

「も、もう少し残ってくれんかのう〜」

「ほう、なるほど。つまりなんだ？俺を殺す気なのか？」

「なんでそこまで!？」

テオドラ！テオドラアアアッヒヤイ！うわあああ！！！とか言い出した”誰もが羨む英雄”の本性を目の当たりにして、コイツどうしたら治るのじやろうか、とか思っている学園長だった。実際はここ、麻帆良に来て随分、というか完璧に近いほど既に治っているのだが秘密である。帰せー返せー俺のテオドラを返せー、と地獄の底から湧き出た亡者のごとく学園長に詰め寄るシックス。血の涙を流している時点にもうドン引きだった。むしろ「帰れ」と言いたくなるぐらいひどい。

「む、誰か来ているぞ」

「なんと」

「学園長先生？神楽坂明日菜ですけど？」

「あの、シックス殿？血の涙拭いてくれんかのう？お願いじゃから舌打ちをしながらローブでゴシゴシふきだす。それで！？という驚きを隠せない学園長だったが、もう一度ノックの音が学園長を促すしょうがない、と入ってくるよう言う。入ってきたのは神楽坂明日菜、他に近衛木乃香、桜咲刹那の二人もいる。まず彼女たちが最初に驚いたのは血みどろになったローブを着ているシックスの存在だった。

「あ、あの……これ」

「ああ、俺のことは気にするな。もう少しで死ぬところだったただけだ、大量出血で」

「H A H A H Aとラテン系陽気な外人っぽく笑うシックス（無表情）のほうをチラチラ見ながら学園長に一枚の紙を渡す。

「フオフオフオ、英国文化研究倶楽部か」

「あ、はい。そのー」

「あんなメシマズ国家を研究して何の糧にするつもりなのだ」

「シックス殿？お願い少し黙ってて」

「そ、それで……どうかな？」

「Ohと学園長からのお願いを信義になって聞き届けることにしたシ

ックス。上目遣いで学園長に頼み込む神楽坂明日菜に「フツ成長したな」とか適当に思っていると桜咲刹那に話かけられた。どうにも気になることがあるらしい。

「シックスさんは何故こちらに？」

「シックスはんも何か用事ー？」

「俺、帰る、お家に」

「……」

「へー、そうなんかーお土産買わんとなー」

近衛木乃香ののんびりしている表情に驚きながら「何故片言なのか」という疑問を覚える桜咲刹那、普通に会話している近衛木乃香がいるせいか疑問を思っている自分に疑問を覚えてしまう。というか会話がすぎすぎてそれどころじゃなかった。お土産の話になったらシックスがゼロの桁が10個程度の買物について聞くわ、普通に「あー、わからんわあ」とハニカミながら返す彼女。あまりにも自然な会話に「自分が間違ってる？」とか思う桜咲刹那だった。そして気付けば神楽坂明日菜は学園長からの設立の許可を貰おうとしているところだった。

「よかるうー！認可じゃー！」

「ありがとうございま、……あれ？」

「ふお？どつした……あ」

「ククク」

学園長は判子をポンと押した後、気付いた。書類が入れ替わっているという事実。愉快そうに笑うシックスのほうを見やり、ハツとした表情で書類を見る。

「……仕事完遂じゃと？」

「ではさらばだ、永遠に！」

ヒヤッハア！俺は自由だア！と言いながら、書類をぶんどり”窓”から派手に飛び出したシックス。バリンとガラスが崩壊していくと同時に、学園長は白く燃え尽きていた。ある意味麻帆良全ての戦力を集めても抑えられるかどうか、というレベルの戦力を一瞬で失ったという事実。そして口調ぶりから二度と来ないという絶縁。もうなんでもいい、とか言いながらその下にあった本当の書類に力なく判子を押す学園長だった。

ヒヤハハハハハハ、いざ征かん自由の空へ！！！！

キヤーーーー！！！！

うるせえサービスだ莫迦！

ファンファンファンファン……

「「「「「」」」」」」

「……なんじゃこの土産は？」

「よくわからなかった、反省はしている、でも後悔はしてない」

警棒とか手錠とか、ある意味使えそうな（プレイとかで）物でそれ以外はまったく使えそうにない物を土産と言いつける英雄がいた。ヘラス帝国、帝都、帝国城にて長年（三ヶ月ぐらい）の願望が願ったシックスだった。帝都にある大通りを金字の紋様が刺繍されたロブを着込んで凱旋してきた彼だが、反面外は異常な騒ぎとなった。堂々と歩く英雄、周りの目に関係なく全てを威圧するように。何を考えながらシックスが歩いてきたかは知らないが、とりあえず彼は帰ってきた。外はお祭り騒ぎである。よくわからない狙撃手饅頭とか売ってるような気がする。

「……これが妾が喜ぶとでも？」

「ごう、雰囲気です」

実際は二へら顔が止まらない皇女なのだが、同じように實際役に立たない物体を持ってきたコイツをどうしようかと悩んでもいた。そして柔らかくなったというか、なんか意味不明になって帰ってきたということ、麻帆良をどう破壊しようかなあとか物騒なこと考えていたり別に麻帆良じゃなくてもよかったかも思えないか思ってた。

「護身用？にどうぞ」

「護身用なのはお主じゃろつが、存在的に」

ハハハ、と軽く笑いながら受け流す。日本警察が所有する警棒を渡されても非常に困ることの上ないだろう。というか普通に盗人のような行為をしてくる彼に驚きだ。テオドラはそれを問いつめたものの、返って来た言葉に啞然、というか返す言葉が無かった。莫迦まっしぐらになった彼をどうすればいいのだろうか。

「戦利品だ」

と、一言。思考が野蛮になったかと思えば、優雅にワインをコクリを飲み干す上流社会人。むしろ合わさって色々ひどいことになっている。

「……この世の中に公的機関と戦って戦利品を獲る存在がいるんじゃない？」

「今思えば……」

なんじゃ反省しておるのか？と怒りは一端収まる。まあ返ってきた言葉はやはりダメっぽかった。

「穢滅しとけばよかったな」

「……」

とりあえずこの壊れて治って壊れた責任を麻帆良に取らそうかな、とか思い始めた第三皇女テオドラだった。しかし怒ってはいるものの終始ニヤけててしまりが無い。結局最後には「寂しかったが送り出してよかった」と思う彼女だった。この阿呆は後で修正してけば大丈夫とどこからか湧いた自信を持って、そう決めるのだった。今はとりあえず、今まで渴望していた何かを補給するのだった。

放課後ウオータイム

大戦時終了時においてこういう話があった

その話の真偽は確かではないが、多くの人間が真だと言った

もっともそれはメガロメセンブリア元老員が全否定をしたのだが

その話は結局有耶無耶なまま闇に消えることとなった

英雄ダブル・シックス

魔法界で最も有名な英雄群『紅き翼』と戦い、そして彼らが真なる英雄となった戦い

造物主と呼ばれる者、彼が率いる『完全なる世界』との決戦において造物主を倒したのは彼ではないのか？

という話である。

目撃者……最後において終わりの間近で見てきた者達の噂話である

諸説、というか通常は、教科書にも倒したのは英雄『紅き翼』であり

それを率いるナギ・スプリングフィールドだという

しかし人々は見た

雲海を突き抜けた一本の線を

魔法でもなく、勿論魔力の一撃でも、気の何かでもない

火薬の、金属の

無骨な一撃が空へと伸びたという

そして人々は見た

崩れ去る無数の鉄塊を

魔法でもなく、勿論魔力の一撃でも、気の何かでもない

鉄の、鋼の

無骨な鉄塊が地へ落ちたという

金属を扱う英雄などただ一人

彼こそ英雄、狙撃の代名詞、最強にて最高

スナイプ・オブ・インペリアル

ダブル・シックスである

彼の扱う個人技能についての目測は様々である

魔力を物体化、あまつさえそれを兵器という形にて具現するという
所業

かつて大戦において空よ地よ海よ、全てを血に染めた化け物の所業

畏敬と恐怖と切望と渴望と

全ては彼女のために、彼はそこに存在す

空へと伸びた一撃、地へと落ちる鉄塊

そして直後に起きる世界の終わりと始まりの魔法

噂が出るのもしようがないかもしれない

帝国の人々ならばむしろそれを好ましいと思う

何よりも『紅き翼』が敵を倒したなど、誰も言っていないのだ

それは我々『紅き翼』でさえ

嫌な予感がする、ドロドロで黒い漆黒の沼のような

嫌な予感しかしない、歩けば歩くほどからみつく螺旋の蜘蛛の糸

連合……メガロメセンブリア元老員が何かを隠している

その話が出てくるのはすぐ後の話

同じく帝国も何かを隠している

その話が出てくるのは大戦時

いつ？どこで？だれが？

英雄ダブル・シックスという存在を得たのか

いつ？どこで？どういうわけで？

彼が第三皇女の護衛となったのか

魔法使いとしては珍しい銃器を扱う者

その中でも”極”とも言っていないほどの戦力が

『いままでどこにいた？』

その疑問が口に出ることは案外簡単だろう

出身、生年月日、経緯、全て不明の大英雄

魔法使いでありながら

魔を扱わず、鉄を用いる錬鉄の化け物

魔を用いて、火をもたらす生命体

鉄を火を持って鋼に鍛え

鋼を持って歯車を

誰かが聞いたという、その音を

英雄が蹂躪していく戦場で聞いたという

歯車の音を、連結する音を、回る音を

私はそこで一つの仮定を立てた

歯車というのは彼の音ではないか？何故彼から歯車の音がするのだ
ろうか

その仮定、バカバカしくてそれ以上の答えは無いだろう

彼は作られた存在なのではないか？

それならば

出身、生年月日、経緯、無いのは当然だ

下手に”設定”するより、しないほうが良い

最初からそういう目的で作られたのならば

彼が護衛という存在にいるのも納得がいく

投影という彼の個人技能

私はそこに兵器という部分に目をつけた

それは彼を表しているのだと

彼そのものだ

彼こそ一体の、一個の兵器として

もう一度言おう、バカバカすぎると

証拠も確証もなく、ただの観察からの推論である

ただ

彼が私に言った『化け物』という言葉

これが頭から離れなくてしょうがない

彼が人間ではないということだろうか

それとも、そういう思考を持っているということだろうか

思えば

確かに彼は壊れていた

”人間”というか一生命体としておかしかった

全ては彼女を、一も彼女に

彼はそういう男だった

兵器投影ということをふまえ、表現するならば

彼女こそ担い手で

彼こそ兵器……、使われる者

彼は彼女のために全てを注ぎ戦い、そして殺す

そこに担い手たる彼女が、全ての責任を

兵器に罪は無い、あるのは使う者

皮肉にもほどがある

もし彼女が望むなら

もし彼女がそのように使うなら

さて、それはどういうことになるのだろうか

もし誰かがこれを見ているなら、もうすでに私はこの世にはいない
だろう

これを書き残し、私の目標は心半ばで打ち倒される

私は知ってしまったのだ

どうか、どうかこれを見ているアナタにお願いです

これを後生に……

”奴”は一人ではない

”奴”には勝てない

”奴”こそ頂点である

”奴”と戦う者よ、覚悟を決めよ、真理を閉ざせ、答えはその向い
う側に

「というコラムを作ってみたのですが、どうでしょうか。なかなかの出来かと……アナタの正体をソレっぽく伝えることが出来ますね」

「死ねアルビレオ」

T o b e c o n t i n u e d ! !

第三十七射 ファンサービス（後書き）

さあ諸君、いよいよテオドラのターンだ

マナ？知らね

第三十八射 魔法界の英雄（前書き）

少し気味悪く、残酷な表現や不愉快になるような表記があります。
注意するようなレベルじゃないかもしれませんが一応ここに注意書きを。

第三十八射 魔法界の英雄

帝国領・アルギユレー大平原北部、地平線の向こう彼方まで続くま
さしく大平原である。ヘラス帝国首都帝都から東に位置し、そこか
ら南に行けばメセンブリーナ連合の拠点メガロメセンブリアがある。
かつては大戦の影響により地表が露わになったこともあった。しか
しそれから20年あまり、季節のこともあってか永遠かと思われる
ほどの草原が広がっている。青空広がる晴天の下に”ソレ”はあつ
た。じゆるじゆるとウジ虫が蠢く黒き外殻の間に見えるピンク色の
……肉体。もう血は干上がりしきったのか緑の大地を鮮血に染色し
ているのみで血肉の間から湧き出ていることはなかった。黒い鱗、
黒い角、黒い……全てが黒い一匹の化け物が死んでいた。いや、一
匹ではなかった。永遠に草原が続くかと思われるその先には、見渡
す限り黒と紅。時には何かが呼吸をしているかのようにズルズル動
くが、もう既に虫の息。ソレが死ぬのは後数秒もかからなかった。
緑を黒と紅に染めた犯人らしき存在がそこより遙か上空に鎮座して
いた。桃色の、機械的であり流動的な体躯をしている竜を模した飛
空型魔導具、虹色の炎を灯しながらじつと……。

「黒竜の群か……珍しいというかありえないな」

黒きソレを眼下に治めながら彼は言った。黒きソレ……『黒竜』だ。
見渡す限り竜の死体が転がっていたのだ。空を支配したという翼に
は大きな穴が空き、全てを燃やす炎をはいた口は顎と頭から切り裂
かれている。万人の兵士の剣と槍と弓を弾いたその外殻……黒い鱗
は焼き爛れ肉ごと真っ二つにされ、そして火で燃やしたのであろう
肉が焦げる匂いと黒き体躯から伸びる黒い煙。戦争でもあったかの
ような光景だった。墓場とも言い難い、全ては今さつき朽ち果てた
もの故に。体中に穴や特徴的な形の剣が無数に刺さっていたり、中

には元の姿が想像出来ないほどバラバラにされているものがある。それだけではなかった。まるで見せしめかのように、×印に建造された……無骨な金属の塊にこれまた特徴の無い大きな数本の杭。一匹の大きな大きな 群の中の王だったのだろう 角と数多の敵を撃ち殺してきた証である無数の傷跡を持つドラゴン。黒い鱗は全てを吸収するかのような漆黒で、牙はあらゆる敵を食い千切り、尾を振り回せば全てを薙ぎ払う大きな大きなドラゴン。数本の杭を持って、両翼・喉・腹・両足・尻尾の真ん中を根元まで深く刺し固定していた。×印に磔にされていたのだ。黒竜の王の顔にはまるで『化け物』^{モンスター}でも見てしまったかのような、絶望と恐怖の色に染まっている。竜の顔だというのに、それがわかるほどの何か……。否、その何かこそ上空でそれを見下ろしている彼なのだろう。

「（天変地異の前触れ、いや俺が起こしたばっかりか……嫌な気分だ、ムシヤクシャしてやったっていう感じだ）」

ただの無表情に、フードの奥から覗く真っ赤な目玉がそう呟いたように。本来、いや例外であっても竜は極めてプライドの高い存在である。幻想種と呼ばれる俗に言う『めっちゃ強い生き物』の”種族”としての頂点に立つ存在だ。格下どころか餌、下手をしたゴミクズ程度にしか思えない人間に彼らは決して頭を下げない。彼らは能力主義だ、人間の魔法使いが10人集まっても未熟な竜じゃないならば一掃出来る。彼らに勝つ存在など極めて少ない、それこそ兵士や騎士達の憧れの一つであり、ある意味ステータスとも言える『竜殺し（ドラゴンスレイヤー）』の称号があるのだ。人には確かにそんな竜を一掃出来る奴もいるが極めて少数、そしてその結果にあるのが個体としての竜の死。人より強い、という原初の本能が書き換えられる前に全て終わる。ということもあり竜は総じて基本的に人間を見下しているのだ。だからこそ……、もしこの光景を見た竜族がいるのなら……一体何を思うだろうか。

死死死死死死、見渡す限り死の海

黒黒黒黒黒黒黒、見渡す限り同胞の亡骸

「つまらん、誰だよ竜の丸焼きとか言った奴は」

プライドが高い故に竜は常に孤独である。数百年の一人旅の末に雌或いは強力な雄がいたとき結ばれ子供を産み育てるのだ。壮大な愛のテーマを感じさせるがそういう種族なので特にどうでもよい。だからこそ、こういう群で行動するのはおかしいことなのだ。確かに群で行動する竜種はいる。そもそも群というのは天敵、捕食者から身を守る方法の一つだ。個体個体が強力な黒竜が群れるはずがないのだ。それなのに群れて行動するという異常、まるで「何かから逃げている」ような……。

「丸ごとの竜なんざ一匹もおらんではないか」

全ての黒竜が惨殺されたスプラッターな光景である。一番被害が小さいと思われる死体ですら切り口が一つ、まあその切り口は頭から尻尾の先まで繋がっているのだが……。他には内部から何か爆散でもしたのかという、腹がぐちゃぐちゃになった”物”程度だろう。倒した記念に塩を振って豪快に丸焼きでも作ろうかな?とか思っていたのだが御覧の有様である。途中で、竜の王をはりつけた後だが、生でもイケるなどか言い出したほどの人物だ、さぞや頭のおかしい存在なのだろう。

クルクル、キュー

「なんだ、生き残りがいるではないか」

母親であつたのだろう、竜の一匹にすりよつて鳴く小さな赤子の竜がいた。その場に降り立つた彼にもう既に逝つてしまつた母親を守るかのように立ちふさがり威嚇する。ケホツと炎を吐くども小さな灯程度の炎。例えば子竜の母親であつても焼くことの出来なかつた相手を倒すには全て無駄という他が無い。一步一步彼が歩く度に、震える体を押さえ威嚇する。見事だ、素晴らしい個体だと彼は思った。母親を守るため、王を殺した全てを殺す化け物と戦おうとする、戦えるのだ、と。故に、だからこそ…

「我が血肉になるがいい、歓迎しよう偉大なる竜の血肉よ」

フードの奥から”何か”が飛び出した。おぞましい何かがヒトガタの頭と繋がっている。暗緑色の…：…所々に目玉が”食いこんでいる”大きな口のお化け。肉体を構成する全てが別の生物。人の腕、獣の足、顔、角、翼、ぐちゃぐちゃにミックスしてそういう型に押し込み固めただけの『モンスター』が、パカリと口を開く。口の中からおぞましい呻き声。悲しみの声、復讐を願う声、歓喜の声、歓迎の声、そして死を願う声。獣の頭が、人の頭が、獣人の頭が、魔の頭がゴロリゴロリ。本能的恐怖を刺激されたせいか動けない子竜は消えることになった。パカリと一飲み、咀嚼も何も無い。ただあるのはゴクリと飲み込む音と子竜の最期の足掻きだった。フードから伸びる頭デツカチの化け物はすぐに消え去ることになる。フードの奥に消え去つたかと思えば、真つ赤な目がギョロリ。ついでにバサリと何か。

「翼が生えてしまったぞ……むう」

ロープを貫通して伸びた黒い翼。最初は子竜のように小さく可愛らしいツルつとした翼が、次第にミシミシという音を鳴らし、ひび割れ、大きく大きく……。人を簡単に包み込むような大きな翼となった。ひび割れた外殻の向こう側から溶岩でも煮えたぎっているかのような紅が鈍く輝く。翼を動かしたのどのような物かと彼は触ったり観察してたりするが、次第に飽きてくる。そもそも彼には必要の無い物体であるのだ。

「戻すのは……まあいいか、いらん」

ブチリ

「なんと邪魔な、なんか気持ち悪いし」

ブチブチと筋繊維が千切れる音を出す。ブシュッと血を巻き上げたかと思えば、周りの肉が盛り上がり穴を塞ぐようになだれ落ちる。ゴキーン、と彼にだけしか聞こえない関節の音が一回、フードの破れた跡から見える彼の背中の穴は、もう既に普通の、いつも通りの白色の肌になっていた。では最後に、と突然彼の手元に現れた巨大な銃を振り回す。四方八方その銃から無数の弾丸が放たれ、そして火炎を撒き散らす。竜の肉体より漏れた脂肪に引火していき、その辺りは火の海へと変わった。だが、火の海のと真ん中にいる彼が、炎が無いかのように普通に歩き出し、そのまま火の向こうへと消えていった。

後始末も面倒なものだ

轟々と燃える。青空広がる晴天の下の大草原が、黒き煙と竜の死体と血肉と炎の紅により染められた。後に語られる『アルギユレー大平原の竜殺し』である。大小1000を優に超える竜を単騎で全滅させた事件である。これもまた、帝国の大英雄を語ることで欠かせない一つの物語になるのだ。最後に残ったのは炭化した何かと灰に積もった大地。そして黒竜の王を括り付けた×印のモニュメントと七本の杭のみだった。

「ふむふむ……アルギユレー大平原謎の大火事と謎のモニュメント！ねえ」

新オステイアの都市の中心市街地にて、商店街の一角にあるオープンカフェにて二人の男が対峙していた。片方はモニヨモニヨと肉の塊を優雅に食べ、片方は新聞の目玉を読んでいる。

「ああ、それ俺だ。なあにお前にも出来るだろう莫迦ジャック・ラカン」

「おめーと一緒にするな腰抜けダブル・シックスが」

ガツハツハと笑う褐色肌の大男を無視して食事を続ける彼。灰色のスーツにオールバックの白髪、意識障害の術式を組み込んだサンダラスとどこかのヤクザの尖兵にしか見えない容貌だ。片方の大男も大男で結構ヤバイ橋を渡ってそんな雰囲気だ。似合っていないメガネを着用、もちろんこれにも意識障害がかかっているのだろう。二重

の意味で目立ちまくる二人が普通にオープンカフェで寛げるのもこの御陰である。ヤクザのような白髪の男の名前は『ダブル・シックス』という、もう片方の彼の全てを正反対にしたような褐色金髪の大男の名前は『ジャック・ラカン』という。

「あー何々？大平原に住む移牧民の情報によれば竜の大軍とそれを一人で撃破していく男……、そして帝国の公式発表によりそれは英雄『ダブル・シックス』の行為だという。公式には人々を襲う竜の掃討の任務を受けた彼はそこで激闘を始め、その結果竜のプレスが草原に広がり今回の火災の原因だと考えられる、と述べている。また残った×印のモニュメントは彼の武器の一つという話だ……、何したんだオメエ？」

「一番デカイ奴を磔にした」

「……」

さすがの俺でもこれは引く、と口元をひつかせるラカンだった。珍しく黒竜達に同情の思考を抱かせる。新聞によれば群の竜は1000を軽く越えていたという。恐らく皆殺しだろう、とテーブルに置いてあるコーヒーを飲みながらそう考えていた。彼に聞けば否定するだろう、一匹見逃した、と。そこはジャク・ラカンにとってわざわざ質問することもできなかった、そして彼目線でどういう結果になったかは知ること、そもそも必要なかったのである。

「で？お前が帝都から、というかあのじゃじゃう……テオドラ第三皇女の側におらずにオステイアにいるのは何故なんだ？」

キュピーンと目が光った彼に反応して言葉を変えた。モニョモニョと何枚目だよ、と疑問に思うほどずっと肉を食っている彼は面倒臭

そうに、欠伸をしながら答えた。

「20周年なんたらでテオが記念祭に参加するそうだ、下見……いつ戦場になるかは知らんからな」

「そういえばおめえここに来るのは初めてだったな」

ああ、と短く返しながらウェイトレスにおかわりを要求している狙撃の英雄。もう考えるのはよそう、とジャック・ラカンに変な笑いしか出せなかった。随分物騒な考え事をしているな、と思った途端に戦争に身を任せていた自身が平和ボケしたことに気付く。最近様々な場所で異常……例えば強力な竜の群など、考えなければ珍しいの一声済むような事が多発しているのだ。一概に、何も起こらねえ、などと言える彼ではなかった。シックスは肉をゴクリを飲み込み、オマケ程度だが、と注意して言葉を出す。

「土のアーウエルクスがいた、一応撃破はしたがまだ生きているやもしれん。アイツはおまえ達『紅き翼』の敵だろう？」

「速く言えよ……へー、アイツがなー。ってアイツとはまた違うだったな。どいつもこいつも悪役ですって言わんばかりだったが……ん、どうしたあ？」

「ク……『白き翼』^{アラアルバ}だよ」

クイツと親指をカフェから見える広場の真ん中の空中投影式映像に指す。空中に浮かんでいる画面には赤髪の少年がゲートの支柱を破壊していく映像が映っている。その後にはその少年の仲間達と思われる少女達の顔写真とオマケ程度に犬っぽい少年の画像。全員が全員高額のお金首になっている。

「なんだあ？俺たちのパク……あ」

「貴様が迎えにゆく手筈だったのだろう？」

忘れてた！ハハツ、と忘れ去られたほうからは実に勘弁してほしいことであつた。画面に次々と変わっていく各々のメンバー達。シックスは賞金額が賞金額なので帝国領内に入ったら速攻で潰そうとか恐ろしいことを考えていた。ただ、面白いことに赤毛の少年だけ名前が伏せられているという。愉快すぎてこの上無し、と彼は笑いを抑えることが出来なかつた。

「まあどうにかなるだろ、あの馬鹿の息子だし」

「ああ、あの莫迦だからな」

お前も莫迦だし、同種族的なシンパシーだな、と笑いながら言うシックスにああん？と睨み付けるジャック・ラカンだったが、特にそれ以上発展することも無かつた。二人が戦えば新オステイアなど次の日の出には無くなっているだろう。一人で戦争を行う英雄と、一人で大軍と互角に戦う英雄、正直どっちも信じ難いバグなのであつた。

「そつだ！おめえ拳闘大会に「赦さん」何をっ！？」

「よっぽど”面白い”こと以外はお断りだ、というか殺すぞ」

「殺！？なにおまえこわい。あー、折角注目ネタがよう」

ジャック・ラカンの提案を最後まで聞くことなくバツサリと切り落

とした。だが、残念そうに、うへえ、と顔を歪ませる彼に対して、ニタアと眼だけを笑わせながら再びクイツと先程の賞金首を紹介していた投影機を指す。ああ？と目を擦りながら今流れている光景は

《瞬・殺！ナギ・コジローチーム驚異の14連勝！彼らには驚くばかり！！》

「へえ……いいこと思いついたんだが？」

「7：3な、勿論俺が7だ」

「いやそこは5：5……いや7：3でいいです、はい」

フハハハハハハ！！と白色サングラスと褐色筋肉達磨がカマセ系悪役のように高笑いを始めていた。店からの批難の視線も気にすることなく”いいこと”の構想を練っていく莫迦達。勢いで意識阻害の魔法が碎けて、大変なことになるのはまた別の機会の語ろう。

「おい、カゲタロウとか巫山戯ているのか」

「えー！？センスあるじゃーん！」

「いや、大分俺もそれでいいかな？つて気がしてきたけど」

T o b e c o n t i n u e d

第三十八射 魔法界の英雄（後書き）

カゲタロウは犠牲になったのだ

犠牲……

そうだ犠牲だ、犠牲の犠牲になったのだ

犠牲だと

そうだ奴は犠牲になった

第三十九射 ともだち（前書き）

カゲタロウ人気すぎワロタ

第三十九射 ともだち

「必殺技か……うゝむ」

強くなりたい、と願う青年が歩いてきた。フードを被り顔を見せないようにしているが、歩いて揺れる度にフードの奥から特徴的な赤色の髪の毛が見える。青年はただ、彼の師や父のように強くなりたい、しかしどうすれば？と青年らしく困惑しているようだった。青年の親友である黒髪に犬耳の生えた拳闘士仲間がかつてこういったことを思い出していた。

「アホっぽさ？あー、確かにお前は足りへんな。アスナ姉ちゃんのほうがどっちかというとサウザント・マスターに似とるって」

青年の知り合いであるアスナという人物を思い浮かべる。実はその青年こそネギ・スプリングフィールドであり、彼の拳闘士仲間というのは犬上小太郎のことなのだ。もともと今では諸事情、というか賞金首になってしまっているので名前や体型を変えているのだが。ネギは神楽坂明日菜の強さについて考えながらグラフィクスの街を歩いていた。

魔法界エリジウム大陸 自由都市グラフィクス

ヘラス帝国より南南西の存在する大陸にあり、その大陸でもかなり発達している都市である。自由と銘うつてるように拳闘大会やら賭博やら、火山地帯の影響もあってか屈強な亜人達が多く生活しているのだ。その名物はもちろん拳闘大会だ。世界中の実力者達が、

名誉やら権力やらを求めて戦い抜く格闘競技である。一応スポーツ的なアレだが、さすが魔法世界だ、腕が無くなったり瀕死の重傷を負うのが日常茶飯事であり、そこに勤める医療術師は腕が次々に達していくという。とはいっても出場選手の間でも「なるべく気絶させて終了させる」はもはや暗黙の了解に位置している。結局手足を吹き飛ばすことになるのだが（ここが肝心）

「やっぱり……必殺技……かなあ？」

「必殺技がなんだって？」

「わひい!？」

ボソリと呟いた青年、ネギの背後から渋い声が聞こえた。バツチリ聞こえていたみたいで実に恥ずかしい限りであるが、ここ魔法世界では必殺技というのはある意味必須要素であるため案外普通なのである。あたあた、と顔を真っ赤にして否定するネギだったが、背後の大男　フードを被り褐色肌のゴツイ顔しか見えないが　その男は恥ずかしがることはない、むしろ持っけて普通だ、と言いのけた。驚きのあまりにフードがフサリと、青年の顔が露わになり人々の視線を集めた。

「俺が教えてやらんことも無いが…そうだな、必殺技一個につき授業料50万ドラクマ、考案料20万ドラクマ、そして著作権料10万ドラクマ頂こう」

高っ!？とそれは青年だけではなく周りの人々も同じ感想を持った。突然わけのわからないことを言い出したこの男に対して、もちろんそのような言葉を述べるのだが……目の前の男は質問に答えることはなかった。ただ一言、それから起きる惨劇を予告したのである。

「今は俺の心配よりテメエーの頭上を心配しな」

「ハッ！」

ストーン、と黒い槍が青年の頬元を通った。少しだけ擦り頬の薄皮を切った、擦っただけで大量に出てくる血の量からどれほどの影が切れ味を持っているのか、それは人体など軽く切るであろうと簡単に予想できた。目の前の男はただ、命拾いしたな、とニヤリと笑いながらお金の請求をする。突然の出来事で思考が追いつけていない青年はすぐさま戦闘態勢をとる。誰だ、という疑問を攻撃してきた存在に叫んで聞いた。服装はただのスーツ、旧世界でよく見る不快な深い藍色の。そして極めつけに特徴的な白い覆面。人の目を模しているのだらう、仮面全体に大きく描かれた目の外線、黒目に当たっている部分には天を指指す手の甲。手の甲にまたギョロリと覗く無機質で簡単に描かれた二重丸の目。いつでも誰でも”ともだち”になれそうな風貌をした存在が立っていた。

「ナーギー君、あーそびーまーしょー」

青年の視界が黒に染まった。瞬時に全身に魔力を通し強化した青年は間一髪で影の鞭を避けた。影の鞭はそのまま通り過ぎ後ろの建物をスパツ切り裂く。青年はゾクリ、と背筋が凍るのを感じた。停止を促す言葉もとどかない。返ってくる言葉は

「やっぱり友愛が大切だよねナーギー」

と一言。何かにつけて友愛と結びつける強すぎる変人に未だに迷いを持っている青年だった。無数に繰り出される影の鞭を手足のようには操り青年を切り裂こうとする。建物をまるで熱したナイフでバタ

―を切り裂くように、無駄な破壊を一切せずただ切断していった。下では人々に危害を加える可能性があるためか、建物を上へと登る青年。そして対面する影の使い手。影の使い手はまるで達磨落としいように切り裂かれズレまくっている建物の上に器用に立っていた。

「君の友愛が僕を呼んだんだ。僕はヘラスのカゲタロウ、」ともだち”さ”

「待ってください！ここでは被害が！」

「グダグダ言っでんじゃねえ！！」

少年探偵っぽい締めくくりをした影の使い手。そして人々がワラワラ集まってきたとき、人ゴミの中から又ツと出ていた先程の褐色の大男がそう言った。もうすでにフードは被っておらずハチマキっぽい何かを額に巻き付けた金髪の男。男は言う、ここ自由都市という名前の通りストリートファイトはいつものこと、むしろやれ！と。そして何より”本気っぽい”相手に、前を向かないと死ぬぜ？と忠告したのだ。その通りだと”その後になって気付く。もうすでに、影の槍が胸もとまで来ていたのだ。たった一瞬だった、その一瞬に体をくねらせ腹の横を通らせたが、衝撃によりそのまま建物に激突する。肺か、あるいは心臓か、確実に急所を狙う”殺意”を持った攻撃だった。息を吐きながら起きあがり、青年はバキリと影の槍を砕く。

「（あ、危なかった……今の…躊躇無く急所を…！）」

そう思考している間に次の攻撃が来た。もう一本の影の鞭が建物ごとと青年をぐるぐると包み、そして一本に集約する。その攻撃は建物を板状に切り断つ。集約される寸前、青年は詠唱を唱えながら間一

髪と回避した。青年はそんな時でも未だに相手のことではなく麻帆良にいた同じ影の使い手のことを考えていた。錬度の違い、そして何よりも”本気”で潰そうとする相手など、彼は初めてだったのだ。

「（この人！？僕を本気でツ…！）」

回避して別の建物に着地した瞬間だった。彼の喉と胸を影の槍が貫く。やったか！？と誰かが叫んだ。だが貫ぬかれたはずの青年はボンツと風になって消え去った。青年が詠唱したのは囀を作り出す魔法だったのだろう。さすがに囀の魔法を使うとも思わなかったのだろうか、影の使い手は呟いた。

「ともだち（デコイ）かい？」

意味が通じるようであつた。通じない、どこかの変態だつたらなんとなくわかりそうだが……。囀につられたと見た青年は瞬間で一気に影の使い手の背後に詰め寄った。だが、相手は歴戦の戦士なのだろう、覆面スーツという格好はともかく。その動きすら既に読まれていたのだ。魔法の矢を装填した拳を繰りだそうとした瞬間、青年は横っ腹に衝撃を感じた。横に薙ぎ払われた影の鞭。青年はゴムボールをバットで殴ったかのように吹き飛んでいった。そのまま建物に突っ込んでいきドオン！破壊音をとどろかせる。

「へー、すごいねナギ君。一撃以上持った相手は久しぶりだよ……
…、当たり前か」

最後のほうをボソリと誰にも聞こえないように呟いた影の使い手。瓦礫の中から飛び出し青年は考える、反撃の糸口があつたか見つからないと。師との修行がなければ既に終わっていたであろうことに冷や汗を流す。青年の何重にも重ねられた障壁を軽々貫通する術式。

そして影の鞭を変幻自在且つ高速で操る技術。”本物”という言葉が脳内を通り抜ける。アハハハハ、と不愉快になる笑い声を響かせながら鞭を振るう彼をただ強い、と。強敵で本物だと……そう思ったのだ。

「あああつー！」

「（え？なにこれマンガ的なあれ？）」

ゾクリ、と今度は悪寒ではなく何かが伝わる。血が煮えたぎるような、血肉湧き踊る原初の本能。憤怒を喉の奥深くから叫び出し、全身から魔力を放出する。予想以上の膨大な魔力量を「ともだち（パワーアップ）か」とボソリと呟いた変人が影の槍を数本繰り出した。幾重に襲い掛かる影の槍を今までの戦闘からは予想も付かない速度で回避し、拳を使い、足を使い薙ぎ払っていく。影の使い手が繰り出す影の鞭よりもただ速く、青年は使い手に襲い掛かった。使い手は迎撃のために新たな魔法を繰り出していく。

「やつほー」

差し出した右手、右手の袖口から大量の影の槍が放たれる。だが青年はそれを予想していたのか、左手にためた魔法を解放し、影の槍を叩き切ったのだ。青年の師が使いし魔法を用いて全てを切り裂く『断罪の剣』であった。しかしまだ未完成なのか形がひどく歪んでいる。しかし相反の力で作られた剣が例え影の使い手の影であっても、それを切り裂くことが出来たのだ、完成したらどれほど強力な武器になるのだろうか。そして使い手に迫りながら、右手の魔法を解放しながら殴りかかった。だが…

「飽きたなあ」

一つの声だった。たった一声だった。その言葉が異様に耳に入る。青年はおかしい、と思った。何故なのか、青年は確かに右腕を振りかぶったはずなのだ。それなのに、何故、どうして”その右腕が無い”のだろうか。使い手の足下から伸びた影が青年の、……ネギの右腕を切断したのだ。だがネギは諦めなかった。右が無いのなら、左を使う、と。遅延呪文によって更にもう一個溜めていた魔法を解放しながら左手で殴りかかった。だが、それもとどかなかった。それは第三者によって止められたのだ。先程の褐色の大男が間に入り込みネギの腕と使い手の影を伸ばそうとした腕を掴んでいた。

「なかなかイイ見せ物だったが、この勝負俺に預からせる」

「へー『紅き翼』千の刃ジャック・ラカン君か。……潰すぞ、ああ？」

「あ、あたるぶら〜？何だそりゃ？俺がそのアラル海とやらの面子なら、どうだつてんだ？」

何故か途中から声色も口調も全て変わった使い手と、何故か妙な汗を出している褐色の大男だった。ゴホン、と影の使い手が一回咳込むと影の槍を今度は褐色の大男に繰り出したのである。対応するラカンが持ち出したのは仮契約のカード。「『来たれ』」と唱えるとカードから無数の光の矢が飛び出し全てを迎撃してく。

「なんでおま……君がなんでその”へんげんじざいでむてきむるいのほーぐといわれるあーていふあく”を持つてるのかなあ？」

「お、おうよ！今日は見物料無料の大サービス、アーティファクト『千の顔を持つ英雄（ホ・ヘーロース・メタ・キーリオン・プロ

ソーパーン)』だ!!」

そう言つてラカンは大量の剣を召還し、影の使い手に投げつける。使い手が持っていた影の槍や鞭を容易く切断した。そしてラカンが跳躍、必殺と口で言いながらかつての大戦において100を越える戦艦を叩ききつた、自身の100倍はあるつかという超大剣『斬艦剣』を影の使い手にたたき付ける。その衝撃にネギはただ驚くばかりだった。

「フアフアフア……間違つた。まだまだよ、この程度では僕は倒せない」

土埃の中から埃が一つもついていない覆面スーツの男がゆっくりと歩き出てきた。ラカンは余裕で無傷のまま出てきた使い手に、素手のほうが強いだの、本気を出してれば終わってるだの言う。そして相対している影の使い手は何故か妙に悔しそうに握り拳を持ち上げていた。そんな彼に対して…

「そんなに俺と戦いたきゃ……俺の弟子に勝つてからにしろ。舞台は闘技場、正式な拳闘大会でな」

「(面倒くせえなコイツ等)」

それは声に出さなかった。

「おお、シックスか。どこに行つてたのじゃ?」

「ああ……新オスティアの下見だ」

「ほー、そういえばお主行ったことなかったんじゃったな」

テオが行かないなら俺も行く必要がない、という理由を述べながら彼女の側による彼。珍しいのう、と感心しながら帝国城の廊下を歩き出した。第三皇女テオドラが彼に今後の予定のことなどを伝えたり、特にたわいも無い話をしたりと、実に普通で何よりも尊い光景だった。

「どうじゃった？」

「ふむ、そうだな。確実に言えることは1ヶ月後には最高で最低のシヨールが見れるということぐらいだな」

なんじゃそれは、という皇女のジト目の質問にさあなんのことやらと受け流す彼……帝国の大英雄ダブル・シックスだった。そんな自分の質問に素直に答えない彼に彼の主である第三皇女は驚き目を大きく開かせた。急いで厨房に連絡を入れ、今夜はパーティを開くとかどうとか。わけわからん、と彼は思うが彼の愛する彼女が異様に喜んでいたのでまあいいだろう、ということと遠い目で眺めていた。脳内フォルダにバックアップ数十本、保存しまくりである。

「（……出来れば、何も起こらないのがいいのだがな）」

彼らの敵である『完全なる世界』の残党がいるのだ。普通の残党は雑魚でいいのだが残党の中には最も厄介な幹部級の存在がいるのだ。確認はとれてはいないがアーウェルンクス、修学旅行の時で十分破壊したもののソイツが動いていたということは他にも誰かが動いて

いる可能性が高い。何より決戦のとき、少年の姿に爺口調のゼクトに乗り移ったつばい造物主がいるのだ。まだ奴は諦めてはいないだろうとシックスはまだ見えぬ敵に思考を傾けた。奴らは必ずネギ・スプリングフィールドと何かしらの接触をするはずだ、と彼は予想する。味方に引き寄せれば、いつか絶大な力を持ち得るであろう少年だからだと。味方に引き込まなくても……

「（ネギ・スプリングフィールドの側には”彼女”がいるではないか……二代にわたって滅茶苦茶な）」

「そういえばお主また依頼が来ておったぞ？アリアドネー北部にある海に巨大な海獣じゃそうじゃ。どうにも騎士団では手が終えないほど”巨大”らしいのじゃぞ！」

「そうか、精々暇つぶしにはなるだろうな。明後日行くとするか」

「明後日？明日ではなのか？」

「そりゃ明日はテオと一緒にいるからなあ、そりゃ無理だ」

「な、ななな、何をそんな！？いやいや……ほ、ほう！……だ、だめじゃそこは（規制されました）」

ブツブツ言い出した第三皇女を視界の真ん中に捉えながら海獣とやらをどう料理するか考え始めた彼だった。出来れば鰻みたいな”精力”の付きそうな奴がいい、と思うのだが世の中そんなに上手くはいかなかったようだ。後日彼が討伐したのは、島にも見える巨大なタコだったのである。しかし触手プレイとか、援護に来たアリアドネー騎士団の戦乙女達がいたがそんなサービスシーンはまったく無く、むしろ『帝国の狙撃主』の伝説をまた一個増やしただけに終わ

ったのである！残念だったな！本当につ！

T o b e c o n t i n u e d

第三十九射 ともだち（後書き）

衝動が混ざってもいいじゃない人間だもの

第四十射 イカタコ作戦

「フフ、今回の協力感謝しますわ」

「あんな雑魚、もといタコで俺を呼び出すとはな。騎士団の質が落ちたというものだな」

アリアドネーの悪夢……アリアドネーから北にある沿岸部にて巨大な海の魔物が現れた事件だ。デープ・ワン（深き者）と言う他が無いほどの異形、というか緑色の巨大なタコが現れたのである。遠くから見れば動く島にも見えるというほどの巨大さだったという。アリアドネー魔法騎士団が一度応戦したものの、魔物の圧倒的質量と”諸事情”により大敗。そこで白羽の矢として大戦の英雄である彼に仕事が続いてきたのだ。アリアドネーは永世中立をほこっているが、場所が場所。魔物が現れたのはヘラスから西に位置している、と言うことも出来た場所だったのだ。オマケ程度だが後には「島喰い」と呼ばれる帝国の英雄の逸話の一つになる事件だ。

独立学術都市国家アリアドネー

ヘラス帝国帝都より南西に位置する都市国家である。中立を唱う国家の言うとおりソコは大戦時帝国・連合のどちらにも付かなかったのである。そんな中立国家アリアドネーが所有するアリアドネー魔法騎士団は、中立故に非常に重要な騎士団である。例えば、もうすぐ行われる新オステイア平和記念祭において、新オステイアの警備をおこなったりと。どっちにもついていないためどっちに対しても公平な審判が出来るのだ。学術と言うとおりそこは格闘から魔法、

そして魔工学などとあらゆる学問を学べる”要塞”なのだ。帝国にも連合にも付かず済むのはその学術の名門が揃いに揃いまくっているためである。下手に手を出したら痛い目を見るし、そもそも場所的にあまり重要ではないのだ。

「で？依頼も終了、俺を呼び出した理由は？」

「帝国の英雄が来ているだけ、それだけで生徒達はやる気が上がるのよ」

学術都市の中でも一番人気と言われる学部・通称『魔法騎士団候補』の、学部塔のとある場所にある広い部屋の中に相對している人がいた。片方は偉そうにソファに座っているフードを被っている男で、もう片方はイメージ的に校長とかが座ってそうな机が前にあるイスに座っている角の生えた妙齡の女性。

「ハッハア、俺を利用する気が。テオ以外がなんちゅうことを」

「ホホホ、素直に来るアナタに正直驚き」

「……『将来の人員の為じゃ』だそうだ、まったく面倒だ」

フードの男はやれやれ、と手をひらひらさせながらため息を吐く。相對している女性は手を口に当てて「オホホ」と上品に笑っていた。彼女はアリアドネー魔法騎士団総長『セラス』という、かつて大戦の最終決戦において彼らと共に戦った一人だ。角の生えているあたり、人間じゃないことは確かである。もっとも彼女が相對している相手は生命体という枠組みの中にいていいのか若干不安になる存在なのだが…。

「それにしても……騎士団でもあのタコを倒せるはずだがな」

「ええ、それには深いわけが……」

巨大な質量を持っているということで大多数の魔法は蚊の一撃程度にしかならない。しかし世の中には大魔術と呼ばれる大多数の存在が協力して放つ高度魔法がある。騎士団という組織のため一応その方法を習得しているはずなのだ。深いワケ、それは相手がタコという軟体生物……”触手が複数”あつて尚かつ”ニヨロニヨロ動く”という理由だ。更に簡単に言つと何回か騎士団の乙女達はその蝕手の餌食になつたわけである。それを見てしまった仲間達は決して近づきたく無いのだ。もちろん性的な意味で、やったな！実際は男もいたのだが、むしろその存在が「私、戦わない、無理」を助長させる原因になつただけになつた。

「それにしても外が騒がしいな、何かあつたのか？」

「新オスティアの警備の選抜試験、各学年から二名「もういいわかつた」あらそう」

恒例の脱がしレースか、と彼が呟く。学術都市アリアドネー観光目的の一つである通称・脱がしレース。文字通り箒にまたがって飛行し一位を狙うのだ、途中相手に武装解除の魔法をぶつ放すという。これは一応戦闘練習の一環としてある。危険のことを考えて全て相手の戦力を壊す武装解除に納めているだけなのだが。選抜試験と言う名前だが実際は……エロイ。すごくエロイ。年頃の女の子が相手を積極的に脱がしながらアリアドネーの街を箒で飛行していくのだ。アングル的にも美味しいイベントである。さすが魔法世界、半端ないな。

「フフ、今年もウチの生徒は元気ねえ」

「（なんだこの吐き気が催す最悪のレースはっ!?!?）」

おえっおえっ、と喉の奥から灼熱の浪漫が溢れそうになっている英雄が苦しそうに喉を押さえる。いつものことねー、と彼女はそんな彼を流しながら手元に浮かび上がった映像でレースの確認をしているのだった。そんな中、一段と元気というか、頭がなかなか回る生徒がいたようだ。二人同時に武装解除を発動させ、より強力な相手の魔法をかき消したりと、実に戦略性のある行動である。

「あら、特にこの子は元気ね」

「ああ?……どっかで見たことあるなこのデコっぱち」

キランと彼女のイアリングが光る。彼は顔を真っ青（もともと白いせいか本当に青い）にしながらか、その映像を見た。映像から聞こえてくる音声からは、どうにも落ちこぼれコンビがレースのトップを走っているらしい。うーむ、と頭をひねらせてどこかで見たようなと考える彼である。で、その瞬間「あ、どうでもいいか」と忘れるいつもの彼だった。

「あら、こんなところに『グリフィン・ドラゴン鷹竜』が」

「なんだ竜モドキか」

近道をしようと森を突っ切った一部の生徒がドラゴンを引き寄せてしまったようだ。彼が言うとおりに”モドキ”と小馬鹿に出来るほど弱っちいドラゴンだが、ドラゴンはドラゴンである。少なくとも訓練中の学生が戦えるような相手ではない。だが”四人”ともその

場を動かそうとはしなかった。映像を見てみればその理由がわかる。倒そうと立ち向かっている。引き寄せた二人、先程のデコっぱちのコンビの四人だ。

「アーティファクト？……やはり思い出せん」

「……」

彼が言ったデコっぱちが仮契約カードを持ち出し、そしてアーティファクトを召還したのだ。森の中を飛行しドラゴンを誘導していく。誘導していく道の先には罫を構えているのだろう。その通りドラゴンが木々をなぎ倒しながら進み、そして上空から氷の礫を落とす。しかしこれでは威力不足だった。翼で氷の槍をガードしていく。名門の生徒といえどまだ未熟、竜の翼を貫通できはしなかった。だが、デコの広い生徒がその礫の雨を器用に避けながら……

「ほう角か、お前んところは個別の竜の弱点でも教えているのか？」

「まさか……あのアーティファクトね」

儀礼用の短剣を角の根本に差し込み、そして電撃の魔法を喰らわせた。弱点である角に電撃を流されたらさすがのドラゴンとも一溜まりもない。だがそこは幻想種ドラゴンである、せいぜい数分の気絶程度にしか時間を稼ぐことは出来ないだろう。だが生徒達には十分な時間であった。

「……どこに行く？」

「あら、総長たる私が迎えに行かなくて誰が行くのかしら？アナタも来る？」

「お断りだ莫迦が」

「じゃあなたはどこに？」

「さあ？」

彼はガチャンと銃を構えながら竜の眠っている森の方へと跳び出した。彼のこれから行う行動が目に見えて、かつての大戦の英雄も人が変わると思った彼女だった。ちなみにその後森の中で何かのミンチが見つかるのだが、原型どころかもはや液状になっているソレに研究者達が大いに騒ぐことになるのだった。更に付け加えるとセラス総長がレースの状況を帝国の大英雄が見ていた、とつい口を滑らせることになるのだが、これもまた秘密なのである。

「人がゴミのようだ」

「お主は何を言ってるのじゃ」

新オスティア平和記念祭。今年の記念祭には10年振りにヘラス皇族が参加するという話で持ちきりだった。そこで話を発展させるのが『帝国の狙撃主』である。親善大使の役職を持っているヘラス皇族第三皇女テオドラが来るということは、護衛の彼も来るということである。知らない人は存在しない大戦の英雄の一人だ。現役で活動している数少ない存在だ、色々イザコザがあるものの。金字で刺繍サレタ帝国の紋様が光るローブを着込み、ゆっくりと歩く彼女の

後ろに控えている。生の皇族だけではなく英雄という存在が目の前にいるということ、観客は大いににぎわっていた。平和の祭典といっても、未だに帝国と連合は裏でバチバチしているという不安もあるのだがそこでアリアドネー魔法騎士団の出番である。中立である彼らが中を取り持つことで発言権を強くするという大人の事情もあるのだが…。

「（メガロメセンブリア主力艦隊旗艦スヴァンフヴィート…戦争でも起こす気か）」

スヴァンフヴィート、神罰砲という精霊砲の強化された砲台を所有し大戦時からずっと現役で起動している全長300メートルを超えるド級戦艦である。また、唯一狙撃手が落とせなかった戦艦として有名なのだ。もっとも今現在再び戦争が起きたら確実に落とされるであろうが。そして戦艦の腹から落とされた数体の巨人、鬼神兵だ。儀礼用の杖を持っている儀仗兵だが裏の思考が丸見えである。

「（で、こっちは守護聖獣にインペリアルシップ……笑いかよ）」
相対して帝国陣営はインペリアルシップに『古龍・龍樹（エインシエントドラゴン・グリクシヨ・ナーガジャ）』である。帝国最強の戦艦インペリアルシップに、超高位存在である龍樹。更にそこには大英雄がいるのだ。連合側の主張としてはスヴァンフヴィートでも持ってこないと戦争なんたらだろう。古龍・龍樹とはあのリヨウメンスクナカミのような格の高い霊的存在である。肉体を滅ぼされようが決して死ぬことはない。そんな存在が帝国の守備にまわっているという不思議だが、未だにその理由は不明だ。互いの最上の戦力模様に観客は感嘆の声しか出せないほどだった。

「（クルトにセラス、リカード……何をするつもりか）」

20周年記念という形であるものの、メガロメセンブリア信託統治領の新オスティア総督クルト・ゲーデル、アリアドネー魔法騎士団の総長セラス、メガロメセンブリア元老院議員主席外交官ジャン^{ケラトマスター}、ジャック・リカード、そしてヘラス皇族第三皇女テオドラ、極めつけに帝国の大英雄ダブル・シックス、一級品の登場人物達であり、この光景には驚くばかりである。彼は第三皇女テオドラとリカードと呼ばれた不思議な髪型の人が握手しているのを視線で神を殺しそうな勢いで見ていた。だが、前日にちゃっかりとテオドラに話をつけられた彼は仕方がなく我慢することになっていたのだ、見えない握り拳がミシミシと鳴っている。

「シックスもお元気そうだな！」

「ああ、死ね」

「死っ！？おいおい、英雄様といえどそれはひでーなあおい！」

ボソボソと会話するヒゲダンディのオッサンと英雄。彼らも一応大戦時の古い顔見知りなのだ。彼の具体的な暴言を笑いながら受け流し普通の会話を進める。なんでもいつも通りだそうだ。一体どういう英雄なのか頭の中身を見てみたいものである。

「お主は妾以外にももっと口を慎むのじゃ！」

「ぬう」

「ガハハハハ！」

「ちよっと落ち着きなさいよ」

後ろからセラス総長がたしなめる。更に後ろでは実は彼らと顔見知りのクルト・ゲーデルはため息を吐いていた、いつも通りすぎて。クルト・ゲーデル、タカミチと同じように『紅き翼』に拾われた少年だった。タカミチと違い若干平和と正義に偏る思考のためいざこざがあつたのだが…、とある理由で元老員に所属している。シックスとは『紅き翼』時代に知り合つたのだ。特に接点を持たなかつたがクルトにとってシックスの思考は感動を覚えるほどのものだった。シックスの思考はある意味「絶対正義」に近い。彼が愛するテオドラ以外全て封殺する、言い換えればテオドラが正義でそれ以外が悪という見方なのだ。それが世界平和に向いていないということからクルトは彼のことの苦手であるのだが。

「……」

「ん？どうしたのじゃ？」

「なんでもないさ、虫けらが動いただけだ」

そうか、とそれ以上テオドラは言及しなかつた。ただ一言「行くのか？」と質問する。少しだけ間を作つた後に彼は否定の趣旨を述べた。この場において”彼ら”に攻撃を加えるほど”奴ら”は馬鹿ではないことを知っていたのだ。テオドラもそれは理解しており、何よりも自身の従者を信用してた。彼がそういうなら、それが一番良いのだろう、と。それに彼が動いたら動いたらで実際は社会問題になるのだ。一番困るのはアリアドネーだ。彼らが警備している中、一部の騒動で”帝国”の英雄が動くなど、顔に泥どころかシヨンベシオン引っかけられるレベルだ。そして連合側にすれば丁度良いタネになる。それが戦争の種になるか、搾り取る種になるかは定かではないのだが。

「（やはり貴様がアーウェルンクス）」

視界が狭まっていく。人々の間をすり抜け、建物の脇をくぐり、噴水の水を越え、奴がそこにいた。今はまだいい、と彼は退場していくテオドラ第三皇女の側に行くのであった。その後には彼の耳に入ったのは、やはり誰かが無許可戦闘を行ったらしいということ。空に広がった巨大な石柱やら、不自然な観測を残す結界。更に聞いた話だとジャック・ラカンらしき人間の存在も確認されたという。実際にどうでもいい話である。

「よし！これでいいのじゃ！」

「フード被るだけが変装というのか？」

「意識阻害はバツチリじゃぞ？」

「（犯罪に応用出来るんじゃないのこれ）」

男女二人が夜の新オスティアを繰り返していたそうなの。

T o b e c o n t i n u e d

第四十射 イカタコ作戦（後書き）

ともだち「フレンドリー・ファイアかい？」

第四十一射 狙撃主の嘆き（前書き）

刹那の違和感解消イベントが発生したり

第四十一射 狙撃主の嘆き

「俺様特製自主製作映画を用意しておいた！！この制作費はネギの給料から引かれる！」

ズバーン！と金髪褐色筋肉達磨が映画のフィルムを片手にそう言った。もちろん彼の名前はジャック・ラカン。千の刃という二つ名を持ち大戦時において無敵を誇った最強の一角である。彼の正面にはネギ・スプリングフィールドをはじめとした少女達がチョココンと座っていた。給料とかわけのわからないことを言い出したラカンにもちろんネギは文句の一言二言、しかし見事に無視されフィルムを流し始めるラカン。映し出された映像にはどこかのハリウッド映画でよくあるファンファーレとともにトップ画面が現れるのだった。

「ちょ！ラカンさんでかいよ！」

「あんたが主人公かよ！」

「うぜえ！」

「黙ってみんかー！！！」

今回少年達はラカンから『紅き翼』に関する話を聞こうとしたのだ。それで出されたのがこの映画。なのにトップ画面には正面にデカデカとラカンが映り、彼の背後にナギや詠春といったメンバーがオマケ程度にのっていたのだ。何部作という設定なのか、サブタイトルが『EP・1 旅立ちのラカン』となっている。自主製作という技術にも驚くが、数部作構成の自主製作とか本当にありえないと思う。

戦争真っ直中の時代だった。物価の上昇は勿論のこと民衆の不安は次々と募る。だがその帝国には”奴”がいるということもあり連合よりはいささかマシであつただろう。子供達は子供らしく走り回り鬼神兵を見に行くとかなかなかすごいことを言っている。そんな中、カフェの一角にて黒ずくめ（バーロー）の男らしき人と、金髪褐色筋肉達磨……ジャック・ラカンが対面していた。

「ターゲットはこの三人の男に……この少年だ」

「フン、餓鬼じゃねーか」

黒ずくめの男が三枚の顔写真を取り出し、そして最後の言葉と共に赤毛の少年の写真をトン、と置いた。最初の写真には、短い黒髪にメガネの青年、魔導師と言わんばかりのローブとフードを被った青年、そして白髪の少年だった。彼らこそ『紅き翼』のメンバーにて、青山詠春、アルビレオ・イマ、そしてゼクトであるのだ。勿論最後の写真こそ最強の魔法使いナギ・スプリングフィールドである。その写真を手にとり余裕の表情を見せるラカン。

「油断すると痛い目を見るぞ、オステイア回復作戦の失敗の原因はほとんどコイツラだ。送りつけた正規の部隊も壊滅。君が望むなら部下もつけよう。賞金稼ぎや傭兵になつてしまつがな……」

「一人で十分だ、任せときな……と言いたい処だが、なんでも帝国には強い奴がいるそうじゃねーか。ソイツはどうなんだ？」

カフェのイスにもたれているラカンはその答えた。当時帝国には強い奴……謎の狙撃手が存在したのだ。初戦には9割以上の戦艦を叩き落とすという神業とも言える所業を行い、そして現に狙撃手と『紅き翼』は戦場で対面したこともあった。戦場という範囲では狙撃手が個人的な勝利ではなく、帝国の兵士として帝国の勝利を優先していたため『紅き翼』を放置していたのだが、もちろんその都度出来れば撃ち殺そうとしていたみたいだ、だがそんな曖昧な意識ではそれが出来るほど彼らは弱くはなかった。狙撃手が彼らを潰すためだけに戦争に参加させることも出来たが、そこは彼の立場に問題があった。

「狙撃手が……ソイツはアクマで第三皇女の護衛という設定でな。やたらと動かすわけにはいかんだ。故に超重要作戦のときにしか出撃させることは出来ないんだ。そもそも皇女が戦争に反対しているからな」

へーへー、とラカンは答えた。その狙撃手とやらと一度戦ってみたかと思つてはいたものの、傭兵である彼が任務以外のことをしでかすと信用の問題に悩むし、情報が少なく狙撃手が誰で、どこにいるのか、そもそも個人なのか、という疑問がある。もっとも彼が信用のことなど考えることはしないし、今は『紅き翼』の奴らで楽しむという結果を出したのだが。

「んっふっふーこいつが旧世界の日本の鍋という料理か」

処変わり更に辺境の大地、四人組の男が鍋を囲んでいた。新世界の一角だというのに旧世界の端っこの国の料理をついついているという特に不思議な光景だ。唯一の日本人である詠春がその鍋を仕切っていた。赤毛のナギが早速と言いながら肉を投下しようとする、生粋の日本人である詠春は勿論それを防ぎにかかる。

「あ！馬鹿！？何肉を先に入れようとしてんだよ！」

「トカゲ肉でもうまいかのう」

「あー！うっせえーうっせー！！」

詠春の言葉を無視して肉をヒョイヒョイ入れ出すナギ。箸を器用に使いこなすゼクトは特に関係無いことを考えていた。熱の通りの時間がどうのこうの、詠春が見事に奉行をしている中最後のアルビレオが口を開いた。

「フフ、詠春知ってますよ。日本では貴方のような人を”鍋將軍”と呼び習わすそうですね」

「ナベ・シヨーゲン！？」

「っ、強そうじゃな…」

見事に勘違いしている知識を披露したアルビレオ、背後に日本の武士のビジュアルが流れるナギとゼクトは啞然とする。勘違いしたまま詠春の何かを認め出す二人だったが、肝心の詠春はまったく嬉しそうにない。後はたわいも無い会話を進める四人だった。オステイ

アの姫子ちゃんがどうのこうの、狙撃手をぶっ倒すだのどうの、醬油ソースが最強だの、戦争に疑問を覚えるだの……そんな時”何か”が飛来するのを感じた、詠春以外。

ドオン！！

大剣が鍋に直撃し中身をぶちまける。ナギ、ゼクト、アルビレオの三人は直座に行動を始めた。ヒヨイヒヨイと空中にぶちまけられた鍋の中身を器用に取り皿に入れていく。詠春は鍋奉行のせいかな反応が遅れ鍋を頭から被ることになってしまった。崖の向こうから大声で叫ぶジャック・ラカン。その後詠春が切れたり、詠春が色仕掛けで負けたり、ナギと13時間の決闘を始めて地形を変えたり、妙な友情が芽生えたりと、実にどうでもいい話であった！！

「で、何か知らんが俺も仲間になって、色々あって、スゲー事があるって……戦争が終わり今に至る、と……んー！おしまい！」

「ええー！！！」

今から、という時点で端折り出したオッサンに文句タレタレの少女達。長いから面倒くせえ、とぶっちゃけたラカンに声を上げて文句を連ねる。フェイトの正体だの、少なくとも一番知りたかった情報を隠しだしたオッサンはさすがだろう。一部、ネギや近衛木乃香のように肉親や近い人物が『紅き翼』の人は色々と思うことがあったらしいが。そこで一端会話が途切れ、誰かが切り出した。

「そついえばさ、時々出ていた狙撃手つて人……、式典にいたよね」

「あー！見た見た！」

「あー、狙撃手ね、はいはい」

ラカンと裏で色々やってる狙撃手ダブル・シックスである。ラカンの脳内には、サムズアップしながら地獄の底のような笑みをうかべている彼が横切る。大戦時において戦場であった回数是指で数える程度だが、彼の恐ろしさをよく知っているラカンだった。同時に大戦時の彼と、今実行中の悪ふざけのことを考えると変わるものだなあ、とか思ったり思わなかったり。

「『帝国の狙撃主』ダブル・シックス……」

「お？桜咲の嬢ちゃん知ってるのか？」

ええ、と桜咲刹那が呟いた。流れるには映画の後半彼が現れるのであるが、どれほどの存在かは未だに測ることが出来なかった彼女は少しばかり気になる存在だった。ダブル・シックスと聞いた時点で修学旅行にそういう人いたんじゃない？とか話が発展していく。ネギやオコジヨ、桜咲刹那などそのときの事情を知っていた人たちが説明していた。勿論その後英雄がすぐ側にいたことに驚き、はしやぎ回る結果となる。サインがどうのこうの、残念だが彼はそういうことはしない。

「じゃ。まあ早送りしていくか。戦が始まったのはアイツが13歳のころ。こつちじゃ12・13でも強さがあれば問題ねえ」

ヘラス帝国の突如の侵攻。初めは辺境の小さな争いから、そして確実な意志をもって帝国の侵攻は始まった。最初のアルギュレー・シルチス亜大陸侵攻、帝国の南に位置するシルチス亜大陸と、帝国から東に位置し現在謎のモニュメントで有名なアルギュレー。帝国はまずそこから侵攻を始めたのである。帝国の真の目的は古き民の文明発祥の地「オステイア」の奪還だったのだ。強力な魔法力と、狙撃手『ダブル・シックス』を保有しているヘラス帝国は圧倒的だった。そして最後の砦と言っても過言は無いほどの重要地点『グレートブリッジ』を大規模転移魔法で一気に奪還してきたのだ。300キロメートルに渡る巨大な要塞を奪われた連合……オステイアに王手をかける直前だった。だがそこで連合に希望が見える。

「俺様たちの出番ってわけだ。アルギュレーの辺境に追いやられていた俺たちはすぐに呼び戻されることになった！」

彼らが全面復帰すると、大激戦のグレートブリッジの戦いを越えて一気に名を広める事となる。同時に敵対している狙撃手の名前もである。敵には『赤毛の悪魔』と怖れられ、味方には『千の呪文の男』と讃えられたナギ・スプリングフィールド。その時だろう、もともと戦争が激化していたのは。連合側は狙撃手により既に壊滅状態だった。『紅き翼』関係無く、それほどまでに強力無比な英雄だった。『紅き翼』の参入と影からの支援でやっとギリギリ均衡を保てる状況だったのだ。

「シックスさんはそれほど……？」

「ああ……個人戦になったらどうなるかは知らんが、アイツは戦場

では一度の敗北もねえ」

映画の映像には次々と跳んでくる閃光により火柱を上げながら地面に落ちていく戦艦達が映っていた。ブリッジや管制塔、大切なエンジン部分を正確に撃ち抜き、火の海へと変えていく。彼らが出撃すると、狙撃手も桃色の竜に乗り出張ってくる。帝国・連合の間にて少しばかり戦闘をおこなうと、狙撃手は高速で連合の戦艦へと肉薄。その戦いの結果として……連合の戦艦は全て撃墜され、残ったのは人の呻き声と天まで伸びる黒煙だけだった。

「すごい……」

自然と『紅き翼』と『帝国の狙撃主』という構図になるのも時間の問題だった。メンバーという意味では『紅き翼』のほうが有利である。しかし狙撃手はそれを超える戦闘力と殲滅力を持って対抗。結果としてメンバーの数で勝っていたはずの『紅き翼』は物量とパワーによって、ただ個人であった『帝国の狙撃主』に破れたという記録が残っている。

「投影……シックスの個人技能だ。魔力から物体を作り出す魔法……作り出すのは兵器みたいだが、近付けば影の魔法、離れれば狙撃……戦場では常に勝利のことを。ホンツト腰抜けにもホドがある奴だ」

言葉だけなら罵倒にも見えるが、ラカンの顔は嬉しそうに笑っていた。均衡した帝国・連合だが狙撃手の立場が幸いしたのか、連合側が徐々に押し始めることになった。グレートブリッジという大規模な補給地点を失った帝国は大きく広がった軍隊を撤退させる他が無く、そこを好機と見た連合が一気に侵攻を始めたのだ。

「途中でガトウやタカミチといった仲間が増え……ああ、その頃フ

アंकクラブも出来たんだっけな」

戦争の裏側……『完全なる世界』という秘密結社の存在を知り、オスティア王女との出会いと『紅き翼』の物語は進む。オスティア……長年巨大勢力の帝国と連合に挟まれ翻弄された国である。オスティア王女『アリカ・アナルキア・エンテオフユシア』は自ら調停役となり戦争を終わらせようと走っていたのだ。『完全なる世界』という完全に謎の裏組織だった、彼らは調査を始めることになった。そこで思い出すのがかつての『帝国の狙撃主』である。

「シックスさんが？」

「俺はまだその時はいなかったがー、どうにもシックスは既に『完全なる世界』のことを捉えていたらしい。それも目的も、だ。思えば奴はテオドラ第三皇女の為なら何でもする男だ、平和を願えば戦争している人間を皆殺しにしても平和にするだろうな、もっともそれを願わなければ素直に別の手を取る奴だが」

「み、皆殺しって言い過ぎなんじゃないの？」

「奴にとってじゃじゃ馬皇女以外は全てゴミ”だった”からな」

「だった？……今は？」

「あー、信じられねえけど普通になってやがる。会話が弾むというか、妙に人間臭いというか、なんか馬鹿の匂いがするというか」

そんな中、アリカ姫が帝国の第三皇女と密会をすることになったのだ。テオドラ第三皇女もまた平和を望んでいることを知ったのだ。第三という継承権は低いものの、効果が無いというわけではないの

だ。むしろ第三だからこそ民衆の支持もあつた部分もあつたのだ。

「ちよつと待つた！テオドラ第三皇女と密会つて……シックスつていう人は彼女の護衛じゃ？」

「そこがポイントだ」

アリカ姫とテオドラ第三皇女の密会、これから大いに物語は進むこととなる。彼女たちが密会している間に、ナギ達は別行動を取つた。戦争を終わらせる決定的な証拠を見つけたものの、協力者たる元老員が『完全なる世界』の幹部と入れ替わつていたのだ。畏にはまり彼らは帝国は言うまでもなく、連合からも追われることとなつたのである。

「滅茶苦茶だな……」

「王女様達は？」

「ああ『完全なる世界』の一派に捕まり幽閉されてやがつた。さすがに護衛する対象が二人だとシックスの奴も限界がある。そもそもアイツの戦い方は全て殲滅だからな、逃げるにしてもオスティアの王女がいるんだ」

古代遺跡が立ち並ぶ『夜の迷宮』ノクティス・ラビレントゥスに幽閉されているという情報を掴んだ彼らは救助に行くことになつたのである。彼らが救助についた時には狙撃手も復活し、さあ脱出しよう、というところで彼らが来ることになつたのだ。救助の後にはオリンポス山の誓い、帝国の第三皇女と狙撃手シックスとの共同戦線と物語がいよいよ後半へと移りだしたのだ。

「まともに顔を合わせたのはあのときだったぜ」

後は史実通りに進むこととなる。狙撃手と『紅き翼』の面々の反撃は始まったのである。要点潰しにはそこそ狙撃手の本領が発揮され、帝国でも情報収集も楽になった。アリアドネー魔法騎士団を初めとする仲間を次々と集め……そして最後の決戦が始まった。

「わーシックスはん格好ええなあ、あいむしんかーって言うんやな」

「シックスが戦場で歌う歌だな、トラウマになった奴もいるらしい」
シックスとナギが共に戦いそして『完全なる世界』の最後の敵・造物主を倒したのである。始まりと終わりの魔法が発動したものの、それを抑えることもでき世界は平和になったのである。これが『紅き翼』の物語だ。今でこそ世界は『紅き翼』が救ったということになっているが、狙撃手の存在を忘れる者はいなかった。桜咲刹那はアリカ王女とナギの関係をラカンに聞き出している少女達の後ろで、シックスがよく歌うという歌を彼女の知人も歌っていたということ思い出していた。

「（マナと同じ歌……？銃といい歌といい、知り合いなのだろうか）」

その疑問に答えるものはいるはずでも無く、そのことを知っているのがごく僅かである。アリカ姫とナギの関係の後はもちろん狙撃手と第三皇女についてになるわけであり、ジャック・ラカンはどこか

の馬鹿餓鬼のように「秘密ー！」ともったいぶっていたのである。正直に言えば内心、狙撃手の銃口がこっちを向いている気がしないでもなかったのだが……さて、それはどういうワケなのだろうか。

「あのラカンさん？ちよつと聞きたいことがあるんですが……」

「あー？なんだー？」

騒ぐ少女達をやりわり払いのけて桜咲刹那の問いに答えた。彼女の質問はこう、英雄シックスと龍宮真名の関係だ。あまりにも接点多すぎて無視など出来やしないだろう。対してラカンは首を傾げ「タツミヤ・マナ……あぁーマナという奴は知ってるが……同一人物か？」と手をアゴに当てて考えた。刹那が彼女の特徴をなんとなく伝えると、納得したように手をポンツと片方の手のひらに打ち付けた。

「あー、マナね。あーはいはい。そりゃ関係ありまくりだ、マナはシックスの弟子だからな」

「弟子、ですか……？」

そつだ弟子だ、と続けるラカン。弟子ならば彼女の原動が彼に似ているのも、若干違和感があるもののあり得る話だと刹那は理解した。だが、同時に彼女が戦場で時には肩を並べた友に疑問を覚える。映画の中、そして実物の彼、総じて統一性があった。それはテオドラ以外どうでもいい、という態度。他のことになんとなく顔はツツコムものの個人、というか何かの団体にさえ関わろうとはしなかった。それは皆「主以外どうでもいい」というスタイル故だ。そんな彼の弟子である龍宮真名は……、一体どういう思考に降りたっていたのだろうか。ラカンが言うには半年から一年程度の師事だったそうだ

が、それでも彼女は砂漠に垂らしたラクダの唾液のごとく吸収していった。それは彼の精神である”腰抜けじゃなくて何が狙撃手か”という信念さえも受け継いでいるのだ。もし、彼女が彼の「その他大勢」という見方を持っているのなら…。

「(さすがにそこまでは…たぶん)」

だとしたら麻帆良で傭兵をやっていたのも、友として背中を合わせで戦ったことも、全て理解出来なくなってしまう。気まぐれかもしれない、そうじゃないかもしれない。それで今は十分だが、逆に”そう”だとするのなら、彼女にとって”主”とは一体誰に当たるのだろうか、と刹那は思う。ただし思うにしても答えは出なかった。今までの行動を見る限り、狙撃主のようにぶっ飛んで一周してきたような行動を起こすわけでもなかったのだから。今はただ、まだ見ぬ友のことを脳裏の奥にとどめておくことにしたのだった。

「やあ諸君、私だシックスだ。……何？終わりだと？」

T o b e c o n t i n u e d

第四十一射 狙撃主の嘆き（後書き）

あれ？主人公が…？

第四十二射 覆面と筋肉と時々筋肉（前書き）

気付いたら400万PV逝ってた件について
さすがテオドラ様ですね

第四十二射 覆面と筋肉と時々筋肉

「お主自分の弟子にでも銃を向けるとは、いやある意味予想通りじゃが…」

「ピンピンしてるからどうでもいいだろ」

「いや実際ものすごく痛かったよ師匠」

新オスティアに作られた皇族御用達のとある部屋に男一人、女二人、男はフード付きローブを着こなし、どこからどう見ても魔法使いで、と言わんばかりの格好だ。女の片方、腰を越える特徴的な黒髪に褐色肌の、出てる処は中学生のはずなのに出ている。もう片方は、褐色の肌にこれまた人間とは思えない角の生えた高貴な雰囲気溢れて止まない美女。言うまでもなくダブル・シックス、龍宮真名、テオドラの三人組である。実はこの三人組は結構昔から揃っている、というのもシックスはテオドラの護衛としてすぐ側にいるし（むしろ離れない）龍宮真名は彼の弟子、というわけですぐ側にいる（むしろ離れない）からだ。典型的な三角関係だが、種族を越えた（化け物、亜人、真名の正体）愛溢れるロマンティックが上がるものであり、そして危険な関係でもあるのは言うまでもない。

「（……対魔弾を使ってくるとは、まさか気付いて…ッ!?!）」

「（必要ないから適当に使った対魔弾効果ありすぎだろ、意味わからん）」

「お主等どうしたんじゃ?」

包帯の巻かれた右腕を押さえながら思考する龍宮真名といつも通り無表情ながらに、ボケーとしていたシックスの師弟二人。二人同時に「なんでもないさ」と言葉を言うと、女片方は不機嫌にもう片方は上機嫌に、オマケに男は胸を抑えてロマンを押さえ込むという奇妙な状況になった。師弟そのものは知らないものの、まさかお互いが人間じゃないということを知ってしまったのなら一体どういことが起きようか。案外何も起こらないような気がする。

「そういえば……なんでマナがここにいるんじゃ？ん？」

「師匠あるところに私あ……麻帆良からの依頼だよ」

「なるほど、これが呪言というものか」

そうか、と呟きながらテオドラはシックスの頭をスパン、と軽快良く叩いた。テオドラはこういう依頼か、という疑問は口には出さなかった。恐らく彼女テオドラこそ、今日の前で同じ格好ポーズでコーヒーを飲んでる師弟二人のことを知っているからだ。二人は、特に弟子である龍宮真名は”傭兵”という立場にいる。別の戸口からの依頼をホイホイ他人に知らせるなどある意味信用で戦う”傭兵”としては非常にいただけないものだ。そして何よりその”傭兵”たる何かを教えたのも彼女の従者であり、最も信頼を寄せる男であるダブル・シックスなのである。テオドラが同じ格好でコーヒーを飲んでる二人にジト目で抗議しても、二人は頭上にハテナマークを浮かべるだけで、シックスに至っては脳内で激しく萌えていたりするのだが、これは割愛しよう。

「そういえば……」

「ん？」「ん？」

「……………拳闘大会にナギそっくりな奴が出てるそうじゃ、ジャックが出資してる奴の」

テオドラはこいつら何なの、とか思ったがそれは口に出さずに皇女たらしめる優雅さでサラリと流した。シックスはギクリと全身が一度震えたものの「あーあー、あれね、あああれあれ、うんあれだな」とコーヒーカップを持つてる左手がカタカタと揺れていた。マナは「ああ知ってるさ」と一言言うだけで、蕁麻疹でもできたのかな？と彼女のカタカタしている師匠をただ眺めていた。

「実際はどうなんじゃろうな、本当にソックリ……………まあ幻術でも出来るかのう。生身でアレだとしたら、血族か何かなのじゃろうか」

「実の息子だからな」

「ネギ君も成長しているようだ」

「なんじゃ息子か……………ん？な、なんじゃってー！！」

ズバーム！と背後に巨大な擬音が流れるテオドラ第三皇女だった。普通に喋る馬鹿従者とその馬鹿の弟子の、あまりの普通さにごく自然にそのまま終わろうとする処だった。何で今まで黙っていた、と言おうかと思っただけだった。自分が聞いたというわけでもなかったし、そういう会話をしていたわけでもないからだ。まあいいか、と思うぐらいには彼女は彼を信用していた。ただし、気にならないことがあった。勿論龍宮真名も知っていたという事だ。シックスの手紙で麻帆良に少年がいることは知っていた、だからこそ二人が知っていることもわかる。だからどうした、そっというワケであった。

「ほ、ほう。従者のお主が知らせないのはまだいい。じゃが二人で共有しているとはどういうわけじゃ？ん？」

「……思えばそうだったゴフアツ！？」

「やだなあテオドラ様」

吐血してビタンツ！とマグロ市場に水揚げされたマグロの悲劇のよ
うな惨事を起こしたシックスを無視したまま、乙女二人のドキドキ
ッ！人外二人のチョメチョメが開催されていた。彼女達の背後には、
八つの首を持つ龍と、九つの尻尾を持つ狐が火花、というか本気で
光線を撃ち合っていたという。世の中数が勝負らしい、諸君も覚え
ておこう。互い互いが首がもげてても、尻尾が焼けただれでも再生出
来るリバイバーだったという、わりとどうでもいい！！！！

「よしっ！闘技場へ行くのじゃ！今日はそ奴の試合もあるみたいじ
やしのう！ほれっ！いつまで腐っておるんじゃ！」

「ハッ！？」

「（師匠が莫迦に……いや案外）ああ、非常に残念だけど私は遠慮
するよ、任務中だからね」

死にかけているシックスにつついたら後、満足そうな笑みでありなが
らどこか、未練がましいというような表情をしながら去っていった。
彼女もまた傭兵という身でありながら、皇族の部屋に入ってるとい
う状況故、退いていったのだらう。無論そんなことはない。まった
くの嘘で真っ赤っかである。

《話題のナギ選手！異形の魔族コンビを圧倒！コジロー選手は高見の見物か〜！?》

どういうセンスか疑いたくなるような仮面と、思いつき『蜘蛛魔ぞく男』とプリントされた甲冑を付けた、足がいくつもある男の魔族と、手が三対……何故かメイドの格好をしている女の魔族のコンビとナギ・コジローのチームが戦っていた。いや、戦っているとのは間違いだろう、何故ならばそれはもはや蹂躪に等しい、圧倒的な展開だったからだ。コジローは後ろで手を組みながらそれを見ていただけ。実質二対一でありながら、魔族のチームは御覧の有様だった。

「くっ、これほどの実力とは聞いてないぞ！」

男の魔族が吠える。蜘蛛手の女が六つの剣を握り斬撃を出すも、強化された拳だけでそれを受け流し、それどころか一対の手でありながら攻勢に出ているナギ。一瞬で隙をつかれナギに正拳突きを喰らい闘技場の柱へと直撃する。男の魔族が魔法で生み出した水流で押しつぶそうとするも……、全身に雷光をまといながら逆に決定的な一撃を出したのだった。

《ナギ選手圧勝——！！！！》

「（蜘蛛女……アリだな……ハアツ!?）」

「ケツ、ちったあ嬉しそうにしゃがれってんだ」

「（シックスがまた妙なことを考えてそうじゃなあ）」

蜘蛛手の魔族の女性だが……長い黒髪に褐色、オプシヨンのオマケ程度に角が生えているという。実質効果があるかどうかは知らないがメイド服装備である。正直に言うとな彼のストラクゾーンに直撃しているのであった。シックスは彼女を奇怪な目で凝視したあと「うわああああ！！！！うああああ！！テオドラアああああああ！！」と叫びながら己の愚かな所業を悔やみ、そして悟ったような顔で闘技場のVIP席から飛び降りようとした。もちろんそれは周りのテオドラとジャック・ラカンに阻止されたのである。その後では色々噂になると恥ずかしいので何事も無かったかのように話が進んでいく。

「それにしてもお主がわざわざここに来るのも珍しいのうジャック」

「ああん？どうでもいいだろーが」

久しぶりの友人に出会ったということもあつたのだらう。皇族故の悩みである。友人に出会えてた彼女は嬉しそうに笑いながらラカンに蹴りを一発入れる。なんでかは知らないがこういう挨拶が日常らしい。それに対してラカンは三十路がどうのこうの言いながら適当に流すのだった。もちろんそこに待ったを入れるのが彼の役目である。

「貴様、我が主がどうでもいいだどっ！？」

「いや、そういつわけじゃ……」

彼の愛する皇女が「どうでもいい」の一言で切られるなど言語道断

である。故に彼は激怒した。必ず、かの邪智暴虐で変態で半裸のラカンを除かなければならぬと決意した。シックスにはテオドラ以外がわからぬ。シックスは、帝国の英雄である。銃を撃ち、金と遊んで暮して来た。けれどもテオドラに対しては、人一倍に敏感であった。今日未明シックスは村を発すること、もちろん野を越え山越えることもなく、この新オスティアの街を訪れていた。とかどうでもいい事を一息で”叫んだ”後…

「なんだと貴様ツ、ツンデレだと言う気か？なるほど死へブイ!?」

「やめんか戯けえい!!」

「(あ、コイツ面倒くせえわ)」

ポッポーと頭から七色の蒸気が噴出し始めた処でテオドラの拳がシックスの顔面にめり込んだ。さすが、愛……と呟き、指についた鼻血で「愛故に死ぬ」と一筆してボタンと倒れる彼だった。殴った後、どういふ成長を遂げてしまったのか、その一部が露わになったことで後悔の念が絶えず落ち込むテオドラだった。なんであんな場所に……まあいいか、と一瞬でケロリで復活するのもまた彼女らしい。

「ハハハ、これはとんでもない光景……かなりやべえな」

「おお!?なんだなんだおめえらそろい踏みだな!」

「放っておいたらすぐに戻るのじゃ」

ガチャリと扉を開け、またVIPルームに人がやってきた。シックスが言う泣きたくなるほど可哀想な髪型のメガロメセンブリア元老員リカードと、アリアドネー魔法騎士団総長セラスの二人だった。

入った瞬間空に手を伸ばしながらプルプル震えている帝国の英雄を
目の当たりにして、一度目を擦ったのは言うまでもないだろう。帝
国の第三皇女、アリアドネー魔法騎士団総長、そしてメガロメセン
ブリア元老員という三人の状況についてラカンが一言言っても…

「つれねえこと言うなよラカン、俺たちあ戦友だろ？せつかくの再
会に難しい話はナシだぜ？そこのびてる帝国の狙撃手も含めて、
な！」

「バレないように防護対策は万全よ」

元老員とかやりたくないんですけどー、的なことを言いながらリカ
ードは肩を回す。それに対してセラスがまた一言言ったり、ナギと
いう名の拳闘士に注目したり、実はナギの実際の息子ネギだと判明し
たりと……シックスが黄泉返った辺りには既に会話の大部分が終わ
っていたり……。いい夢だったぜ、とか言いながら帰ってきたシッ
クスだったが、どうせなら最後まで死んどけばよかったと後悔した
りと様々だった。

「ナギの息子ならあいつが優勝で決まりじゃなー、つまらん」

「いや、それもわからねーぜ？俺もエントリーしてきたからな！ガ
ハハハ」

「「はあ！？」」

拳闘会から身を退いて十年ほどになるラカンだが、まさか彼自身が
出場するとも誰も思わないだろう。彼は英雄であり、何よりも最強
の一角なのだ。だからこそ宣言しよう、誰も勝ち得ない、と。例え
相手がナギの息子であろうとも、まだ10歳ならば……。大戦時に

おいてシックスには劣るものの『紅き翼』ではナギを越えて堂々の戦艦撃破数一位を誇る彼なのだ。だが、そこで気になるのが”パートナー”である。一体誰？というわけなのだ。

「ああ……ええと、ああ、カゲタロウつつ俺の”ともだち”的な……」

「カゲダロウ？」聞いたことない”のう”

「予選で見たが、そいつ”かなりの実力者”だぜ。今まで”無名”だったのが恐ろしいぐらいだ。一番恐ろしいのは”まったく情報が無い”ことだな」

「ええ私も見たわ、それに未だ”力を隠している”わね。彼が最後の相手だったでしょうに……それに千の刃が加わるとねえ……」

彼らの頭上には「やっほー」と言いながらも ちマスクを付けている正体不明の敵が映っていた。戦歴不明、ただあるのは突然現れ、そしてヘラスの拳闘大会予選を全て数秒で終わらせた”怪人”という情報だけ。生年月日ももちろん本当の顔も全て不明なのである。そんな奴がいるとなると、しかも帝国だと……彼に質問が回ってくるのも自然なことである。

「シックスは知っておるか？」

「あ、ああ……俺の”ともだち”でもあるさ。ハハッ、なー糞莫迦死ねラカン？」

「なー、俺たちの”ともだち”だぜ、ハハッ」

なんとか誤魔化そうと脳内の分割された666の思考をフル活動させるシックス。結果としてやつあたりを決行。念話にて呪詛を666の分割された思考で送り込み、ジャック・ラカンを一時機能停止にさせるといふ悪魔を彷彿させるようなことをしてかしたのだった。医療術師などの活躍により、結局カゲタロウの犠牲は有耶無耶になったのである。彼は作戦通りッ！と新世界の神（Not造物主）のような顔で深い思考の奥にその感情をしまったのだった。

《予選Dブロック決勝！南方、ヘラスの怪人カゲタロウ！！さあ今までタッグ戦というこの大会をなんと一人で戦い抜いた猛者！しかし今回ついに彼（？）のパートナーがエントリー！！》

「（怪人？）」

闘技場の真ん中で覆面に普通のスーツを着た怪人がただ立っていた。全方位から降ってくる歓声の声に何を思うか。ただの瞳が無機質に描かれた覆面からは何も想像出来やしない。突然のパートナー、それを聞いた観客がざわつき始める。

《驚くことなかれ！彼が公式の場から消えて早10年！彼こそ伝説の傭兵剣士、自由を我が手に！大戦平和の立て役者！……アラルブラ！千の刃のジャック！！ラカーーン！！！！》

ウオオオオオオオオオオ！！

「（うるせエ…犠牲にすんぞ）」

闘技場の闘士専用の通路から大剣をかついて現れた筋肉隆々の大男。最強の一角である彼の登場に、あまりの驚きであるう対戦者は身動きが出来なかった。例え動けていても全て無駄であったろう。だからこそ彼は最強、最強の魔法使いナギ・スプリングフィールドの盟友であるのだ。大音声の開始！の一言で全てが決まるほど、彼は強く、そして相手は弱かった。一気に跳躍し、そして彼の心底に眠る気を解放する。

「んー！…羅漢適当に右パンチ！！」

「（ +弱連打つてとこだな）」

轟音を轟かせながら彼の一撃、土埃が闘技場に巻き起こる。もう戦いは終わっていた。土埃が消えて見えたのは、人が小さく見えてしまつぐらい大きな拳の形をしたクレーターと、その真ん中に情けない気絶している二人の対戦者だった。ラカンは峰打ちだから安心して、とか現状をよく見て言え的なことを言い、そしてカゲタロウは

……

「（おー、いいそらだー、もう帰りたい、俺の暖かライフは何処へ…）」

カゲタロウエ…

To be continued

第四十三射 怪人カゲタロウさん（前書き）

そろそろ僕らのカゲタロウさんが活躍する季節（？）ですね

総合評価が8000を越えました

皆様の評価誠にありがとうございます

目指せ1万ですね！フヒヒーン！！

感想も400台にッ

感想を書いてくださる皆様に（テオの）愛を込めて、

第四十三射 怪人カゲタロウさん

千の刃のジャック・ラカン。その名前を聞くだけで世界は震撼する。伝説の傭兵剣士、自由を手にした奴隷剣士、様々な名で呼ばれる彼はまさしく伝説の存在だった。彼にはかつて奴隷剣士として生きた時代があった。その時代では彼でも負けた記録が残っている。しかし、現在彼は無敵・最強と呼ばれる面々の一人として、特に目立つ存在だ。何故ならば、ある意味ジャック・ラカンは才能の無い存在の最終到達地点であるからだ。『千の呪文の男』ナギ・スプリングフィールドのように莫大な魔力と天賦の才を持っているわけでも、『帝国の狙撃手』ダブル・シックスのように超特殊な個人技能を持っているわけでもない。彼が持つのは”気”だ、存在している者全てが所有する身体のエネルギー。ただ修行を持って、ただ鍛錬を持って、ただ戦いを持って、ただただ精進し続けた。その結果こそ『究極の一』アルティメット・ワンなのだ。故に彼の人気はやはり極大である。拳闘士の間では、それこそナギやシックスを越える存在だ。そんな彼がまさか奴隷時代を生き抜いた闘技場に戻ってくるなど、どれほど重大なことか…

「おっさんがエントリーってどういうことだ！」

「それを今から聞きにいくなん」

猫耳を生やしている少女の言葉に続き、犬耳が生えた黒髪の青年が答えた。彼らに先行して赤毛の青年……今でこそナギとは名乗っているが、ネギ・スプリングフィールドがただ走っていた。勢いよく、ただ力強く廊下を走る音が軽快に響き渡っている。彼ら三人はジャック・ラカンの戦闘参加について文句の一つでも、とりあえず聞きに行こうとしていたのだ。運が悪いことに……、怪人カゲタロウの存在をまったく忘れて…

「ラカンさん！一体どうい「ボタン！！」……………」

「一体どうしたんや？扉を閉めて…？」

「部屋を間違えたか？…………合ってるな」

ダン！と勢いよく扉を開けたものの、突如ネギはその扉を閉じた。彼の現在の顔は、有り得ない物を見てしまったかのような、ただ己が今現実にいるかどうかを疑うばかり。少女と相手の言葉に返すのは扉の向こうの非現実な世界の詳細を告げるのみだった。

「カゲタロウさんがラカンさんをイスにして座ったままワインを優雅に…………」

「見間違いやろ、そんなんありえんって！！」

「あまりのシヨックに現実と幻想が入り交じつ…………ここ『ファンタジー幻想』だった…………」

ズーン、と落ち込みながら少女…………『ハセガワ・チサメ長谷川千雨』は扉に手をかけた。彼女が今小学生みたいな体型に猫耳が生えているのも実は変装であるのだ。彼ら彼女らは”一応”賞金首という立場だからだ。彼らのことを知っているシックスだが、もし彼らがシックスの行動が無制限になる帝国領内に入り込んだらお陀仏になってしまっただろう。『白き翼』のメンバーを探しに行った者達が帝国領内をコースにいられてないことに幸福を覚えてしまう。扉を開けようとした長谷川千雨に、ネギが制止の声を上げる。そういう前フリかな？とか千雨は特に思うわけでもない。それに開けなくては話が進まない。故に彼女は一歩踏み出し、栄光の扉を…………

ガチャ…

「やつほー」

「ギヤアアアアアア！！！！！」

少女の悲鳴が廊下を伝わり、大地を伝わり、空気を伝わり、空へと伝わり、宇宙へと。そして遙か彼方イス　ンダルまでとどいたという。ガチャリとゆっくりと扉を引いて見た物は、扉のすぐ前にただ立っている覆面の奇人だった。気さくな台詞だが、実際は力が抜けてしまうほど平坦で、逆に疑ってしまうほど”普通すぎる”　何かを感じさせた。バつと警戒した後ろの青年二人だが、彼がカゲタロウだと気付くと警戒を解いていった。驚き過ぎな気もするが、彼らはカゲタロウのことを二度と忘れないだろう、後ろから、カゲちゃーん何か殺したのか？と物騒な事を聞いてくるジャック・ラカン氏がいたが、薄くなったのは否めない。

「一体どういうことですかラカンさんッ！？」

ダン！と机を叩きながらネギは正面に、ソファに座ってワイン片手にくつろいでいるラカンに聞いた。ちなみに先程もう一度扉を閉め、再び開けると何も無かったかのように二人は普通にくつろいでいたという。ネギの質問にラカンは、あー？と首をかしげ、そして数拍置いて…

「なーんの話だ？」

横で総司令官のように手を組みながら座っていたカゲタロウとワイングラスをチンツと鳴らしながらそう返答した。ネギ達はいつぞやまでラカンとは仲が良くない、むしろ流れるにはカゲタロウがラカンと戦いたいたいな雰囲気だったのに、今仲良くワインを飲み合っているという光景に疑問を覚えた。何故？と疑問を口に出したら出たらで

「それはね、ラカンと僕が”ともだち”だからだよ」

「ああ！俺たち”ともだち”だ、ワハハハハ」

「（うさんくせえ）」

聞けば聞くほど”友達”という単語に嫌味が入っているような気がしてくるほど胡散臭いと、長谷川千雨はそう思い顔をしかめた。肩を抱き合っているラカンとカゲタロウだが、カゲタロウのいつもの覆面が無機質すぎて逆に恐怖の祭りを催している。そこでカゲタロウのあまりにも濃ゆさ故に囚われすぎていたが、やっと本当の目的を思い出せたネギはラカンに尋ねた。何故試合に？という質問にラカンはワインに酔っぱらったかのフラフラしながら答える。

「俺が出ないとかいってないじゃーん、ヒック」

勝てるわけがない！と叫ぶネギ達にラカンは適当に返している。諦めるには速いぜえ、とかそんな感じのことを言っているラカンの隣でカゲタロウは冷めた目　覆面で見えないが　でそれを見ていた。彼は率直な感想として「なにこの茶番」と思っていたのである。ラカンとネギ、そしてネギの相棒小太郎のやり取りを客観的に

ただ見ていたのであった。ただ気になることがある、と心で一置きしながら、覆面で隠れた目だけで、何かに気付いたような目でチラチラとこちらを観察してくる少女を見やった。

「（……なんだかなあ、この変態どこかで見たこと……いや、同じような雰囲気を持つ奴をどこかで……？）」

「（なるほど、学園長が集めたクラスの一人なだけではあるな）」

素直に驚くカゲタロウの中の人だった。否、中の人などいない。人がただ自然に出す雰囲気、それは必ずと言っていいほど変わらないうものなのだ。癖といった、その人特有の動きなどを敏感に感じ取る才能……それが長谷川千雨にはあるのかもしれない。だからこそ魔法使いという”普通ではない”佇まいをする存在を、昔から感じ取っていたのだろう。違和感から確信へ、しかし己こそ普通であると思いたい故に否定する。それが長谷川千雨という人物だった。最初の魔法使いや、魔法を第一に開拓した人々は彼女のよう人間だったのかもしれない。だが結局ネギ・スプリングフィールドを通してドツプリヌトヌト浸っているわけなのだが……

「ネ、ネギ先生の成長を確かめる的なアレなんだろう？ほら、オッサンが勝つても賞金がやる、とか……」

「あーん？んなことするわけねーだろ！俺が勝ったら当然賞金も俺のものだ！」

ええー！と三人は叫ぶ、文句を言う三人にラカンが色々言ったり、最強の道なんたらと言ったり、俺がそのステージへの扉だ、とか格好良く決めたジャック・ラカンだったり、その後何を思ったのかカゲタロウがワイン瓶でラカンの頭をぶち抜いたり、ワインのラベル

を見れば大変なことがわかったりとか、実にどうでもいい！！

「（賞金無かったらシックスが…）」

「（金無かったら無かったらで莫迦から徴収すればいいか、傭兵的に）」

「駄目だー！！もうお終いだー！！！」

白き翼参謀会議、と書かれたダンボール箱の上でオコジョがうねうねうねうねしていた。隣では長谷川千雨がブンブン頭を振って現実から逃げようとしている。逃げちゃだめだ。彼らの今回の議題はただ一つ…

ジャック・ラカンを倒せるかどうか

である。大戦時の英雄、最強の一角を僅か10歳の少年が倒すことなど、経験的にも総じて無理であろう。現時点で彼らはフェイト・アーウエルンクスや『完全なる世界』といった秘密結社で色々ゴチャゴチャしている状況だった。そこにラカンのオッサンが乱入してくるといふ始末、彼女たちはもう色々な意味で満腹だったのである。

「やはり優勝賞金は無理ですかね」

「当然だ！大体あのオッサン無茶苦茶なんだよ！先生だって知ってるだろ！オッサンの反則的な強さは！あのオッサン理論上脱出不可

能の異空間を気合いだけで脱出したんだぜ」

弱気なネギに猫耳の少女……長谷川千雨がそう言い切った。オコジヨが少しでも勝てるようにとラカンについて調べて来たものの、ただ彼の異常さが際立つだけに終わった。何かの弱点、と思い調べてきたオコジヨだが、大戦において『帝国の狙撃主』の”公式”撃墜数に次いで137隻、あえて言おう化け物だと。ただの人という肉塊が、鉄の塊魔の結晶を、ド級戦艦になれば300メートルを越える存在を次々と落としていくその光景を想像しれみればいい。ラカンはただ個人における逸話も多くある。一人で、しかも素手で鬼神兵9体に喧嘩を売った、龍樹と引き分けて友人になった、とか下手をすれば信じられない、の一言で斬られる話だ。しかし、彼には、彼らにはそれを信じさせる力を持っていたのだ。

「実はな、好奇心であのオッサン自身の強さを聞いたみたんだ、いくつだと思っ？」

ゴクリとネギとコジローが生唾を飲み込んだ。長谷川千雨は「もうだめポ」と言わんばかりのため息を吐きながら、冷酷に残酷で不愉快な現実をたたき付けた。

1万2千

悲鳴どころか、絶望の声どころか、もう何も出なかった。長谷川千雨を1とし、戦車を200、通常のネギは500、イージス艦を1500、リヨウメンスクナカミを8000としたときの戦闘力指数である。ラカンの強さがただ顕著に顕れているだろう。ただ三人と一匹の間に重い重い暗黒色の沈黙が通過していく。もう背景も真っ

黒黒助になっていた。オコジヨは八百長だの袖の下だの色々言っているが、それが通用する相手とも思えないことはわかっていた。そして更にもう一つ、オコジヨが爆弾を落としてしまったのだった……

「ええい！もう駄目だ！あのカゲタロウって奴の情報も全然無いわ本当にこの大会どうなってるんだー！！！」

「情報が無い……？」

「新参者ってことか？」

オコジヨの悲鳴に千雨と小太郎が反応した。ネギは何かを考えているようで、聞いてはいないようだ。聞くだけの余裕が無いのだろう。小次郎の返しに千雨は否定の意見を出した。新参者にしては”カゲタロウ”なる人物は強すぎたのだ。圧倒的強さを持ってヘラスの出場予選を突破、そして本戦における予選すら全て一撃の元に相手を沈黙させる怪人。それほどの人物が何故今まで誰にも知られずにいたのか？異常なほどの隠密者か、あるいは”変装”の類か。変装だと考えるなら嫌な方向にそれは向かっていく。『完全なる世界』の尖兵の可能性……、だからラカンと共に行動しているという謎。二人が”ともだち”だというのが……、何か妙な臭さを感じさせる怪人カゲタロウ。そして千雨が感じた既視感、あの沈黙殺を使う最強を、彼女は一人だけ知っていた。暗殺、謀殺、殺殺殺殺。殺を否定しない『立派な魔法使い』であり、ただ個人の想う。見知らぬ人、側にいる他人全てを薙ぎ払い、ただ想うのは一人の存在。0を助け、億を蹴飛ばす邪悪思考天元突破の大英雄。だが、それはあまりにも可能性が低いというか、信じられないの一言だ。全てを蹴飛ばす彼が、わざわざ大会に出る必要があるのか？否、あるわけがない。想い人のため、と言えばそれで終わるかも知れないが……大会に出て何のためになるのだろうか。金？彼女は金を必要としない、名声？

彼はもう持っている。

「（ありえない……でもなんというか……このどす黒い不愉快な感じというか……ああ、くそ！）」

「影を使う相手だけ、つてことしかわかんねえ。影と言えばシックスの旦那が詳しいはずだ！聞いてみようぜ！」

「そうですね……あ、ちょっとみんなに見せたいものがあるんだ。来てくれる？」

どうも、俺だ、カゲタ……シックスだ。まず今俺が感じている怒りをどう表現したらいいだろうか。全てを燃やそうとすればテオが怒る、じゃエコにやさしく（？）溶けた鉄の雨降らそうかと思えばテオに怒られる、面倒なので喰っちまおう（食事的な意味で）と動けばテオに殴られる。一体全体俺はどうすればいいのだろうか、フン、まさしく八方塞がりだな。

「『千の雷』電撃系の呪文では最高位にあたる魔法じゃな、そなたの父君が最も得意としていた呪文じゃ」

「ただの広域スタンガへブアツ！？」

バサリとローブを脱ぎ捨てるマイスイートハニーテオドラ。一瞬あの猫耳少女の頭にのっかているオコジヨから殺したくなるような邪気な波動を感じたが……、ふむ、気のせいだといいがな。ちなみに

銃を取り出したら速攻で没収された。なんてこつたい、我が愛が足りなかったのか。テオの威光に当たられた莫迦共がギャーギャー騒いでいるが正直どうでもいい。一番肝心なのはテオドラが何故ここにいるの？ということなのだが、どうにもラカンとネギが戦うという事で手を貸しに行くという。

「すまんな莫迦餓鬼、墓ぐらいは作ってやるから今すぐ殺……テオ？」

「お主は少し黙ってるのじゃ、な？」

ウフフフ、と華麗な笑顔でお願いされたら俺駄目だ。もう死んでもいい。死なないけど、いや死ぬか。復活するな、こうドロンと。なんだか空気が重い、オコジョが餓鬼共一人一人耳打ちをしているが、一体全体どういうことか、聴覚強化して盗み聞きしてもいいのだが……。やっぱり嫌だな、俺の耳はあらゆるテオの命令を聞くための付属品だからな。それに雄だろ？あのオコジョ、やめてよね、噂になっただらどうすんの。

「（ぜってえー！姫様のご機嫌を少しでも削るようなことをしちゃうダメっすよ！シックスの旦那の前では敬意も全開でっ！）」

「（い、いえっさー！ー！）」

「（どうせシックスのことじゃろうなあ、目がギンギン光ってるおるし）」

テオがジト目でこっちを見てくる。一体俺が何をしたというのだろうか、命令さえすれば何でもしちゃう！ビクンビクンというか、なんとというか。まさしく『お前（その他大勢）の物は俺の物、俺の物

「は君の物テオトラ」って感じだな、うん。

「いよおおー！お前がネギか！ー！ワー！ハッハッハ！政治屋やってるリカードってもんだー！！」

「相変わらず暑苦しい男ね、セラスよ」

「テオに祝福を、それ以外は知らん。シックスだ」

ふむ、決まったな。というかね、何このメンバー。ありえない、まずテオがこんな腐ってるような場所にいるのがありえない。リカードとセラスはどうでもいいや。更に莫迦餓鬼共もどうでもいい。エヴァンジェリンっぽいのもいるが、やっぱりどうでもいい。結局テオドラが全てだな。なんだお前等喧嘩でも売ってるのかつ、テオをこんな、こんな、こんな？……よくわからん場所に行かせよって。わざわざ『千の雷』完成させるって、一体どういうことよ。『千の雷』程度で、ラカンならまだしも俺は倒れないぞ、愛的に……って、俺正体隠しているね。

「体術のことなら俺にまかせとけ、これでも近衛軍兵では白兵戦の鬼教官って言われてたんだぜ！」

「魔法なら私にまかせなさい。私は戦闘魔法を専攻にしているのよ」

「妾は教えるのは得意ではないが、まあ色々サポートぐらいはしてやるぞ？」

「フン、ぼーやの師は私一人で十分だ。こいつらの言うことを聞く必要はないぞ？雑魚だからな。まあその狙撃手は別格だろうが」

なんだが一人一人カツコ良くポーズ取ってるんだけど。そしてこの四人が俺のほうを何か期待しているような目で見てくる。餓鬼共も見てるがどうでもいい。何？俺も」 は俺にまかせろーバリバリ！』的な感じになればいいのだろうか、やだなあ、面倒くさい。教えるのは得意じゃない、おお！テオと一緒にじゃないか。運命的なアレを感じる。ああ、はいやりますテオドラ様。そんな目したら俺、断れない。よっしゃ！気合いを入れよう、全てはテオの為に。

「死にたいならまかせろ、銃の扱いと掃除には慣れている」

「『『やめて！』『』』」

T o b e c o n t i n u e d

第四十四射 ネギー・ポッターと最後の秘策（前書き）

変更後、であります。

最初らへんは同じですが、後半に関して色々修正。

よく考えれば仮契約の方法も色々あるというじゃない
もういっそのこと相手も変えよう、という感じ。

第四十四射 ネギー・ポッターと最後の秘策

ダイオラマ魔法球つてばマジ卑怯だと思う今日このごろ。皆様はぶっちゃけどうでもいいがテオは今日も可愛いです、ざまあみる。流れるにも、何かの運命を感じさせる現象の結果、何故か俺も莫迦餓鬼……ネギー・スプリングフィールドの修行に手を貸すことになりました。不安で不安でもう三日も寝てません。いつ莫迦餓鬼が死んでしまうのかという期た……、とにかくダイオラマ魔法球は反則だ。決勝戦であるラカンとの戦いは三日後、この魔法球を使えば30日にのばせるという。1日を10日だって！なにそれ美味しい、味噌とか速く出来るな。俺の味噌汁を毎日飲めえい！とかプロピョーズ出来るぜ。あ、別にエロい意味じゃねーから。というかこの莫迦餓鬼たった30日の修行で勝つ気なのか。いや、密度のすごさは正直俺も驚く。新世界で五本指に入るトップクラスの教官がネットリドゥプリヒタヒタになるまで詰め込んだ。その上相手は才能のカタマリである血統からチートのネギー・スプリングフィールドだ、……まあ完全にコイツ等カゲタロウさんのこと忘れてやがるけどな！インパクト重視にしてみたけど、影なだけに薄いつてか。

「ホレホレ！力を抜くとプチッと逝ってしまうぞ！」

「1480！1481！1482……」

古典的伝統様式にもほどがある光景だ。莫迦でかい岩を背中において腕立て伏せ。莫迦餓鬼と莫迦狗の二人は今日も死線をくぐってるようです。畜生、テオが声をかけてやってるといふのになんというだらしなさ。あれ？この二人10歳前後じゃないの。最近俺の中の常識が……テオ以外だからどうでもいいなやつぱり。で、気付けば周りには莫迦餓鬼と仮契約した餓鬼共もうじゃうじゃいるというね。

「一体こいつら何が目的なのか、そういえば俺知らないな。別に知ってたから何かするとうわけじゃないけど。あー、速く終わらないかなあと俺は期待をするものだ。腕立てが終われば、暑苦しいオッサン代表のリカードと徹底的に組んでるし、いやリカードの近接格闘の能力の高さは羨ましいがそれを三日で叩き込むってどういうことよ。ほら、そこ！莫迦餓鬼共も実際三日で覚えるんじゃない！」

「やっぱり飲み込みがいいわね」

「そ、そうですか？」

セラスと魔法を飛ばし合ってる。セラスも段々老けてきたが、一応アリアドネー魔法騎士団総長だからな。まだまだイケルらしい。まあ魔法というものは老体にキツイとかそういうわけじゃないからな。創作とかでいかにもツ！的な高位魔法使いは大体爺だが実際そうなのだ。周りの成長が速いんだよつ、10歳で広域スタンガン（千の雷）を使えるとか聞いたこと無い、いやホント。あ、俺1歳で影魔法ビュンビュン使ってたわ。投影に射撃、アンチマテリアルライフルで人を片っ端から分断させてきたなあ。なんだろう、この激動の過去は。8割以上がテオドラで埋まってるのも嬉しい誤算だな。あまりにも高貴すぎてアルビレオでさえ「イノチノシヘン」による半生の書を処分したぐらいだった。まったく芸術も理解出来んとは愚かな奴だ、全然たいしたことないな。

「そーら避けるなり防御するなり、死ぬなりしないと死ぬぞー」

「ギャー！ー！！！！」

「ウオツ！こつち来た！？」

リカード、エヴァンジェリンにより近接格闘。セラス、エヴァンジェリンによる魔法訓練。そして俺ことダブル・シックスによる対影魔法訓練。我が愛しの主様は全般的な補佐をしてくれる。もつたないもつたない。というかエヴァンジェリンが色々万能すぎて困る。体の小ささという問題があるもの。一世紀ほど鍛錬した合気道はすさまじい、それに真祖の吸血鬼たるハイスペックがドンツ。今のエヴァンジェリンは巻物から出てきた劣化コピーだというのが……。間違つて莫迦餓鬼の太ももに影の槍がブスツと……。あ。

「ほな治療するえー」

「ホラ。さつさと立て。さもなければ葬式に出すぞ」

マジこの子便利、一家に一台的なアレだ。怪我をして数分以内なら完全に治すというアーティファクトを所有するとか、なんだこの『白き翼』のメンバー。読心術師の腹黒ちゃんは言うまでもないし、あのメガネは人の気配を読み取るわ、木乃香嬢に限っては魔力は莫^ナ迦^キを越えている。後は知らん、興味もない、俺に興味を持たせたいならアーティファクトがサテライトキャノンといった辺りを持つてきな、はっはっは。まあそんなアーティファクトが当たる奴はいねえーだろ！……いやそんなのマジでいたら困る。

「じゃ次は影の槍千本あたりからなー」

「「エエツ!?!」」

まあそんなわけで。心臓と脳味噌は当たらないようにしている。テオの命令だからしょうがない、しょうがない。本当に、しょうがないッ。三日の間にある普通のトーナメント戦に出たり、まあ俺……カゲタロウも出ているのだが軽い軽い。そういえば俺自分と戦う相

手を鍛えているんだよなあ。鍛えている感じがまったくしないけど。影を襲わせる、死にかける、木乃香嬢の治療、の連立形式だ。ただそれだけ、なのになんでこいつら強くなるの？サ ヤ人の血でも入ってるのかどうかと疑いたくなる。ナギの奴は本当にサ ヤ人ぽかったけど。まあそれでも正直に言うならば、俺が勝つ方法はいくらでも思いつく。それにラカンとの作戦があるからな。作戦を完璧に実行できる男はテオドラにモテると聞いた、いや頑張ろう俺。

「どうしたばーや？それで終わりか？」

「まだです！」

このなんちゃって青春物語を燃やしたい。なのに燃やせない、悔しいですツ。それはそうと『闇の魔法』^{マキア・エレベア}だったか、あれ反則。ホントまじやめてほしい、今から切実に頼み込みたい気分だ。体を魔法と合成するなんて正気の沙汰じゃない。……まあ俺は色々な生物混じってるけどさ、俺のはアレだよアレ、グチャグチャにして寒天で固めた的なアレだけど、『闇の魔法』は違う。本当に魔法と一体化するのだ。体を属性化すると、下手をしたらそれは身を精霊に昇華するという、いやさすがエヴァンジェリンが生み出した個人技能だ。俺も覚えようかな、あーでも体に変な紋章が出るのは嫌だな、やめておこう。大体面倒臭い。例え闇の魔法を俺に対して使ってきたとしても、俺が英雄たらしめるのはどんな戦場でも勝ってきたからだ、絶対に勝てると思うなよ。

「ラカンに勝つ方法、ね」

「はい！」

「兄ちゃんなら何か知ってるやろ？」

そんな修行の合間のこと、莫迦餓鬼と莫迦狗が俺に質問、というかもう核心的なことを聞いてきた。いや、考えとしては悪くない。というか兄ちゃんて。だがそこで一番厄介な問題が発生する。確かに俺は、全力の本気でやればラカンは倒すことが出来る。だがそれ以外なら勝てない、という問題だ。俺の能力と戦法上”殺す”ことに特化しているわけで、ラカンのような莫大とかいう言葉では表せない気を持っているわけでも、ナギのように魔法が得意というわけでもない。ナギはアンチョコ見てたけど。確かに影の魔法も使えるが、それはアクマで狙撃の補佐、近接戦闘の補助程度だ。それでもやろうと思えば戦艦でもなんでも落とせるがラカンとか無理だ。莫迦餓鬼が聞きたいのはラカンの弱点とかその辺りだろう、スネでも殴っておけばいいと思うがな。

「魔力のゴリ押しでいいんじゃないの、小手先をアイツにやっただけ無駄無駄ア」

むしろ性格的に小手先を使うやつから潰していくからな。そう考えると小手先を怖れているのか、いやそうだとしてもラカンがそれで負けるとは思えない。ああいうお莫迦さあんに限って「正面衝突正々堂々」とか言い出すというね。いや、お前実力考えろよ、と叫びたくなる。バグ相手に正面から行くとか狂気だ狂気。あいつ剣が刺さらないことで有名なんだぜ、刺されよそこは。人間的に考えて。ちなみに俺は刺さりまくるよ？そりゃもう、そういう肉体をしますから。脳味噌か心臓を吹き飛ばさないと殺せない再生ボディに、殺しても復活する摩訶不思議ストック制。残機がどうのこうのってな。

「魔力のゴリ押し……」

なるほど、という風の手をアゴにあてて思考するネギ・スプリングフィールド。確かに大戦時の話を聞いた限り小手先で通用するような相手じゃないことはわかっていた。ラカンが出した『紅き翼』に関する話の中でも、それこそ図書館の資料にものっていた狙撃主ダブル・シックス、ヒントだけでもと思い質問した少年だった。少年は実はものすごく頭が良い、10歳で大学卒業レベルの学力を持っているのだ。狙撃主の一言は少年の脳内を刺激した。勝つ方法、と質問すれば答えは実にシンプル。相手より強力な魔法を放て、相手より強力な技を使え、狙撃主はそう言ったのだ。それが出来ないから聞いている、と小太郎は返した。だが小太郎は、思考を張り巡らせているネギを見て言葉を失った。どうした？という問いには、

「なるほど……シックスさんありがとうございます！」

「えっ……あ、ああ」

「一体どうしたんや？」

わかんねえ、と頭をひねる小太郎。その疑問に答えたのは背後からの声だった。あ、あなたはっ！？風な感じで振り返るとそこにはアリアドネー魔法騎士団総長セラスト、彼女の足下からネギのほうへと走ってきたオコジョ。そして腕を組んで頭を捻っている狙撃手のほうへと近寄るテオドラ第三皇女だった。

「魔力のゴリ押し、これ以上にならない戦法じゃな」

「生きるバグキャラに何をしても無駄でしょうね。正面からぶつかり合って勝つしかないわ」

「そこで！考えたのが『バクティオー仮契約』っす！」

さすがシックスの旦那！とオコジヨが褒め称える。フードの奥の彼の表情はいつも以上に何も映してなく、それとなく不機嫌そうだった。その件に関して第三皇女はもちろん気付いており、何か、と質問をするのだが、何でもないと狙撃手は返した。実のところ狙撃手自身も何と表現したらいいのかわからない不愉快感を感じていたのである。

「妾は立場上「絶対にノウ！」…シックスもおるしの。妾は無理じゃが…」

「そこで私ね。さすがに負けるけど、魔力も一級品だと自負はしているわ」

「魔力の譲渡、つてやつやな！」

その通り、とオコジヨは小太郎に返す。あーなるほど、と誰にも悟られないようにした人物がいたのだが、それは一体誰であろうか。セラスの魔力量は皇族であるテオドラよりは少ない、しかし彼女もまた、かつての『完全なる世界』との戦いを生き抜いた最高位の魔法使いなのだ。ただでさえ莫大な魔力を保有する、しかも全て譲渡すると思われるならそれが二人分。魔力が多い、戦いにおいてこれは非常に有利なことであるのだ。増大した魔力にエヴァンジェリンから授かった闇の魔法、そして少年が極秘に研究している”モノ”が組み合わされば”ラカン”の勝てる、必ず勝ってみせると意気込む少年だった。

「じゃ宝石に血を垂らすわね」

「え？」

仮契約なんじゃないんですか？とネギは頭を傾げた。ちなみにネギの肩にピヨコンと座っていたオコジヨは変な汗をタラタラと流している。おいまさか……と声をかけたのはテオドラだった。10歳だからこそまだ許せる範囲であるものの彼が後数年成長したら、と思うとゾツとする。シックスが内心「さすが莫迦ナギの息子だな」と思ったのだが、それはナギのことをよく知るテオドラもセラスも思ったのであった。一番厄介なのがネギにやましい感情が一切無かったことである。一体どれだけの乙女が犠牲になったのか、半分以上は意外とのもっていたのだがそこはここだけの秘密である。

「どうしたの？……まさか今までずっと接吻してきたとか？」

「……………あはははは」

「やるじゃないかネギ・スプリングフィールド。特にそのオコジヨ」

「はひっ!？」

テオドラ以外ならばどうでもいい、というわけでむしろもっとやれ、と言うシックスに Spanien とテオドラが頭を叩く。セラスは大戦のころから変わらない二人を見て上品に笑っていた。ただ、シックスの右手に握られたオコジヨな存在が一匹。上は天国、下は地獄、という感じの状態で少年とセラスの仮契約は終了していった。ちなみに魔法陣を書いたのもセラスであるため、オコジヨには仲介料は入ら

なかったことは余談である。

「必ず勝ってみせます！」

「さて、まだまだ修行を続けるわよ」

「はい！」

「おう！まかせとき！」

少年二人の”対ラカン”の特訓はまだまだ続いた。時々シックスによりカゲタロウ対策として影魔法使いとの模擬戦も行っただが、それは通常の特訓と比べ比重が少ないようだ。不幸か、幸いか、怪人の存在は頭に残るものの、そこまで重要視していない現状に。置いておけるからこそ集中できるのか、集中したあと、それを後悔してしまうことになるのか、それはまた今後のお話であるのだ。大戦時の英雄『紅き翼』人にして千の刃のジャック・ラカン、そして正体不明の怪人カゲタロウ。二人のコンビはほぼ不戦勝という立場で闘技大会のトーナメントを勝ち進んでいった。同じくネギ・小太郎ペアも特に苦戦することもなく勝ち進む。そこで苦戦などしておけばそれこそ彼らには勝つことは出来ないだろう。もとより多くの専門家達が、そのカードを予想していた。

そして当日、決戦の日はやってきた

「テオ、すまんが用事が入った。少し場を離れる」

「むお？そうか、むー、それは残念じゃが……どこにいくのじゃ？」

T o b e c o n t i n u e d

「あ、ちゅうくつ」

第四十五射 愛と勇気の使者 前編（前書き）

「なあシックス、一つ聞きたいことがあるんだけどよ」

「んあ？」

「おめえ覆面つけたままワイン飲んでたが……、なんでその覆面にワインはつかないんだ？」

「そういう日もあるさ」

「日付の問題ッ!？」

第四十五射 愛と勇気の使者 前編

歓声が響き渡る新オスティアの街。年に一度、空中に浮かぶその都市に開催される平和記念祭においてその大会は存在する。ナギ・スプリングフィールド杯。優勝賞金が大量ということもあり”初期”の参加者は莫大だった。名前の通り大戦を終わらせた英雄ナギ・スプリングフィールドを称えるための拳闘大会である。新世界各地の地方予選から始まり、そして新オスティアで行われる更にもう一つの予選を越え、大会の決勝トーナメントは始まった。世界中からの名うての拳闘士達が我こそはと集結し、そして戦い抜くその大会における優勝とは非常に名誉なことである。今年は特に、親善大使であるヘラス帝国第三皇女テオドラが見ているということもあり盛り上がりは最高潮だった。もちろんそれが理由の全てではなく、この大会における決勝戦のカードのこともあったのだ。むしろ、そのカードこそ理由の大半を占めているに違いない。

英雄ナギと同じ姿をしている拳闘士

英雄ナギと共に戦った世界最強の一角

その二人が戦うのだ。見ない者は恥、と言える程の一大ニュースなのだ。ナギを名乗る拳闘士、そして彼の相棒である狗族の青年コジロー。対するは大戦の英雄千の刃のジャック・ラカンと正体不明の怪人カゲタロウ。互いが互い、各々の戦闘力を持って世界各地から集まった最高峰の拳闘士達を一蹴し上り詰めた存在である。もつともそれは英雄であるジャック・ラカンには言うまでもないことである。ナギを名乗る相手に、既に身を引いたジャック・ラカンが登場

ということでも人々の間で様々な諸説が走り回っていた。ナギを確認しにきた、偽物を懲らしめに来た、カゲタロウ怖すぎ、とか色々あったのだ。大会でこそ圧倒的に勝ち進んできたナギ・コジローペアだったが、マスコミがおこなった街頭アンケートの調査・勝敗予想では、だいたい4割がナギ・コジロー。残りの6割がラカン・カゲタロウだという結果だった。さすがに英雄である”ラカン”には勝てないだろう、という言葉まで残っている。むしろ何分持つか、という賭け事までおこなわれている始末という。

「よお、どうした？何か不機嫌じゃねーか」

「見せ物は余り好きではない」

ああそうかよ、とジャック・ラカンは豪快に笑いながら言った。闘技場の選手の待合室の一つに二人の影があった。言葉を最初にかけて金髪褐色の大男と、それに対峙している銀髪白色の色以外普通の男。白色の男こそ、帝国において圧倒的な知名度をほこる大英雄ダブル・シックス本人である。何故彼がここにいるかという、既にお気づきであろうが…

「まあいいじゃねーかよ、この覆面マジイケテるぜ？」

「(どこが……ッ)」

ホレ、と言いながらラカンはその覆面をシックスに投げた。覆面に描かれている模様はある意味今大会で最も有名なもの。目玉の中に天に指を差す手、手の甲が目玉の瞳に当たるという奇妙全力全開そのまま卍解しそうな勢いの暗黒模様。そう、彼こそカゲタロウの”中の人”だったのだ。英雄と英雄、もし彼が普通に参加していれば大会は既にオジャンになっていたであろう。もしかしたら負けるこ

とすら記念になると思い挑む存在がいるかもしれないが…、おかげで街頭アンケートを全てひっくり返すことになるだろう。二人は妙に何故か結託し今回のカードを引き出したのだ。カゲタロウに変装したシックスがナギに化けた……実子ネギ・スプリングフィールドを誘い出し、ラカンが色々”誤魔化し”て修行させたのだ。ラカンの本来の目的はネギの成長である。この決勝でどれほど力が伸びてきたか、そしてネギが目指す父ナギと同じ最強の一角という土俵に登るための壁として君臨したのだ。ちなみにシックスはただの気まぐれである。

「15分遅れ……こういう展開はな、だんだん面倒になるんだよ」

「どーかんだ。だがアイツは逃げるような奴じゃねー。そうじゃないと……困る」

「ハッ、既に退場する気満々だな莫迦筋肉。少しは足掻いて見せる凡人」

ククク、シックスは笑った。ラカンも同じように愉快そうに笑った。テオドラ以外の繋がりは一切持とうとしないことに『帝国の狙撃主』は非常に有名だった。だが、今二人の間に”それ”は確かにあった。二人は英雄であり、宿敵であり、そして”仲間”で背中を預け合った存在だった。狙撃手と『紅き翼』の物語は有名だ。今でこそ色々美化されているようだが……。ただ二人はゆつくりと歩き出した。シックスが覆面を被りカゲタロウへと変装する。ラカンはガチャンと大剣を抱える。闘技場へと続く階段を上り、そして光の中へと入り込んだ。一気に開放感を味わう二人、風が頬を撫で回し、闘技場の砂埃が視界に映る。

ワアアアアアアア！！！！

歓声が更に広がった。名前を呼ぶ声、黄色い声、勝利を願う声、ありとあらゆる声があった。一人の言葉なぞ全て溶け込んで隣の人にすら聞こえることは無いほどの音量。闘技場が揺れる、震える、震撼している。ここで全てが決まると、ここで全てがわかると、ここで全てが終わるということを理解しているのだ。二人が戦場に立った。まもなく、反対側から二人の青年が登場する。会場に設置された空中映像によって各々の選手の顔がピックアップされ、様子がよくわかるようになった。二人と二人が対峙している。

「よく来たなぼうず、いつちよやるか？」

「逃げておけば楽であったものの……まあ何でもいいか」

ガンツ、と剣を地面に突き刺しラカンはネギにそう言った。続いてカゲタロウもまた相手を挑発するように言う。だが、対峙するネギとコジローと名乗る小太郎は涼しい顔でそれを流した。ネギは言う、勝たなくてはいけない理由が出来た、と。ラカンは感心するように声を漏らし、黙ったままのカゲタロウの覆面に描かれている目の視線が二人を貫いている。

「もし僕が勝つたら……一人前と認めてくれますか？」

「フン、そらまあ……勝てたらな」

「一人前どころか」ともだち」だな」

意味わかんねえが怖えなお前、とラカンが心の中で呟いた。正面か

らまつすぐと、言葉を放ったネギ・スプリングフィールドは反面、さすがと言うべきか喜んでいた。なるほど主人公だ、とか呟くカゲタロウにラカンが若干不安になりながら、もう始まるうとしている戦いへと身を乗り出した。全てが決まる、観客達は全て、例外無く、前のめりになり、その光景から目を離すことは無かった。

「それでは、全力全開どんな手を使っても勝たせて貰います！
来たれ！」

「アーティファクトだと!？」

ネギは小太郎に声をかける。表現するならば、ヒマラヤ山脈を登る者同士声を掛け合うがごとく、互いを喚起させ奮起させ、目の前の山（最強）に登らん（越えん）と。もともと二人は実に不運だと言う他が無いだろう。あの丘を越えれば、そう思うの自由だが丘の向こうに何かあるのか考えたことが無いということに。だが確かに不運であるものの、反面”幸運”とも言えた。かつて述べたように余計な思考を増やさずに済んだのだ。実に愚かで愉快な話である。

「（蠟で固めていないことを願うばかりだな）」

愚かな愚かなイカロスの翼、彼は思った。ただその翼は単純な”憧れ”という蠟で固められた不愉快極まりの無いものであるのか。それとも、真なる意味の翼なのか…。空へと、上へと羽ばたくための翼は、本当なる意味で存在しているのか。だが、そこまで考えた彼は、自ら思考したその考えを消し飛ばした。原点に帰ろう、所詮関係無いと。例え翼が蠟で固められた物だとしてもそうじゃなくとも、否、だからこそ”どうでもいい”と。見極める必要すらそこに存在はしなかった。天からの罰として蠟が溶かされようとも、どこまで続く晴天を己の意のままに跳び続けようとも……。彼は笑った。二

タアとそれはもう生理的嫌悪をもたらすほど醜悪な、顔を歪ませ
て。それは実に”不運”なことに覆面で見えることは無かった。

《それでは決勝戦！開始イーーー！！！！》

「（天から落とされようが、登り飛び跳び越えるのが人間であろう、
なあテオドラよ）」

そういえばそうだった

ソコに来てから何度も呟いたその言葉を彼はまた言わずにはいられ
なかった。

「始まりますよテオドラ様ツ！うわー！すごい生ラカンですよ！

……あれ？姫様？」

「ん？……ああ、そうじゃな」

闘技場のいわゆるVIPルームに侍女を控えた第三皇女がいた。侍
女の騒ぎようにぼんやり答えるものの、特に興味も無さそうに闘技
場に目を向けていた。彼女の視線の先には色々と吹き飛んでいる格
好をしているカゲタロウがいた。彼女のため息を共に向けられている
視線に気付いていないのか、気付いているが敢えて無視している
のか、彼がこちらを向くことは無く、対峙している青年二人のほう
へと顔を向けていた。

「やれやれ、やることが大人気無いものじゃな。まあ……あやつらもたかだか”この程度”の理不尽を越えることが出来なくてはな……」

「姫様……？」

第三皇女のぼやきに真意を見いだせない侍女が頭を傾げた。そんな様子の侍女に気付いたテオドラは納得したかのように声を漏らし、その試合のタネをあつさり伝えることにした。背後から影の触手をうねうねさせているカゲタロウに指を差し……

「カゲタロウじゃがな、あやつのは正体はシックスじゃ」

「な、なんだってーッ！！」

侍女が騒ぐ、というかなんだってー、の一言で終わらせるのは容易ではないほどのレベルの事象。世間では事実のようにラカンvs偽ナギの構図なのだ。ラカンのペアであるカゲタロウも、偽ナギのペアのコジローもそこまでメディアが主人公として取り上げることはすくない。それを正面から打ち崩す所業だ。複数人である『紅き翼』と対比される個人『帝国の狙撃主』が、その場にいる。それだけで十分なほど騒がれるのだ。しかも、ラカンとペアを組み偽ナギと戦う、おかしいと言わずに何を言えようか。当たり前かのような顔で勝敗を予想している専門家達は総じてヒツクリ返ることになる。

「え？ええ！狙撃手様がッ！？なんでまたッ」

「さあそこは知らんが……。ま、ナギ達が勝てる見込みはゼロに近いのう」

侍女は驚く、彼女もまたシックスを性格を知る人物の一人だ。第三

皇女が知らない場所で彼が行動するなど想像も出来ない。だが事実として、今眼下でおこなわれようとしている試合があるのだ。

「修行もした、策もうつた、自信もついた、じゃがそれを打ち壊すほどのイレギュラーを、越えることが一番の課題かの」

「……」

息を飲む侍女。そこまでいけば逆に偽ナギのほづが気になってくる。シックスとラカンが出張つてまで対峙する価値があるのか。それはもう”偽”という一言で片付けるほど…、単純な出来事じゃない。目の前の皇女もそうだ、千の刃も、狙撃主も、対峙する青年達に目をやった。侍女は冥福を祈れずにいられない、皇女の言葉からしてシックスは偽ナギの全てを砕き折るつもりだと、そしてそれを越えなくては偽ナギの目的は達成”さえ”出来ない、と。

「シックスは妾に秘密しているつもりじゃろうが、フッフッフ。まだまだ甘いのう」

「は、はあ……」

悪代官のような笑みを浮かべるテオドラに対して、どう成長してしまっただのか不安に思わずにはいられない侍女だった。大人になったじゃじゃ馬と比喻された彼女の成長に感動すればいいのか、変な方向に曲がってしまったことに憂えばいいのか…。だが結局、狙撃手様よりマシですね、と侍女は案外素っ気なかった。

「行きます！『ラス・テル・マ・スキル・マギステル！契約に従い我に従え高殿の王！』」

雷属性最大級の呪文を唱えだしたラカンに驚く。無理も無いのだ、目の前の青年は本当はまだ10歳の少年なのだから、天才を越える天才と比喻も出来るほどの才を持っている、とラカンは感心する。一端呼び出したアーティファクトを下げ、詠唱に入ったところからラカンはアーティファクトについての予想を立てる。呪文などの威力を上げる補助型のアーティファクトと仮定し、己の気を増大させ始めた。

なんだ、つまらん

詠唱に入ったナギにも、コジローにも、ラカンにもそれは聞こえた。背筋が凍るかと思うほど冷淡で平坦な一声。いつのまにかナギの背後に彼は立っていた。どっこいしょ、と一転気が抜けるような声でナギをそのまま殴りつける、だがそれをさせまい、と割り込むもう一人の青年コジロー。

「ハッ、やらせないようにするのが俺の役目や！」

はいそうですか、と冷ややかに彼は思う。もうその瞬間コジローは既に空を舞っていた。誰も理解出来ないほど彼は”ごく普通”に投げ飛ばしたのだ。あまりにも自然すぎて、それが普通かのように思ってしまうほど。一瞬だけ空気が止まる。投げ飛ばされたコジローは気付いたら浮かんでいたという状況、わけがわからないの一言。

「ハ？ぐあッ！！」

次の攻撃の間までにそれを疑問に思うしか出来なかった。腕からみつけた影を肥大化させ、巨大な獣の腕かのような爪を模した手でコジローの腹を”上”から殴りつけた。腹の痛みを抑えながら、地面にたたき付けられながら、血の気が引くほどの威圧を感じた。威圧を感じるほうを見てみればジャック・ラカン。アーティファクトで召還したのであろう投擲槍。

「へー、ずいぶんと地味じゃねーかカゲちゃんよ、そら俺の番だ！」

やばい、とコジローは本能から理解した。ラカンが持っている槍に込められた気の量に、もう声すら出てこない。だが、たたき付けられたコジローの側にすぐに移動してきたナギは、気に威圧されながらも口元を上げた、青年は笑ったのだ。

「俺様も久々に全力が出せそう、ダリヤアアッ！！！」

そのままラカンは槍を投擲した。コジローと庇うかのように前にたつたナギに槍は襲い掛かる。たった一撃だが、その一撃は音を越えた。もうその攻撃に爆発音も無かった。直撃したように見えた槍は、大地を砕き、闘技場に張られた防御結界を振るわせ、衝撃が空までのぼった。闘技場の障壁が無かったなら、オスティアの大地をそのまま砕いていたのでないのか、軽くそう思えるぐらいの威力だった。

「なにこれ意味わからん」

理解出来ない理解出来ない、と。人類一匹の気と名付けられたエネルギーが、どうしてここまでの被害を生むか理解出来なかった。相変わらずだなあと思う上、意味がわからないのは今に始まったこ

とではないのだが…。そのまま爆煙に巻きこまれていく。とりあえず爆煙に紛れて岩石を一個ラカンへと投げつけた。

「おいテオに何かあったらどうする気だゴリラが」

ボソリと呟いた。爆煙の向こうから「いてえーッ！」と聞こえた気がしないでもなかった。爆煙が次第に収まっていくと同時に、観客達は騒ぎ出す。普通に考えるなら、死んだんじゃない？と思う、それは正直ラカンさえもやりすぎた、と冷や汗を流したぐらいだ。もっとも途中で降ってきた岩石で思考が遮られたが。

ウワアアアアア！！

「ハツハツハ、まあまあ」

歓声が広がりラカンの名が叫ばれる。すさまじい一撃だと、誰かが言った。もう終わったのか、と誰もがそう思った。しかし、それははずれることとなる。未だに巻き上がっている爆煙の向こう側には、二人の青年が五体満足どころか無傷で立っていた。さすがにこれにはラカンも驚く。龍すら絶命させるような力技から無傷で生還するなど、誰が出来ようか。直撃したのなら英雄ナギ・スプリングフィールドでさせ傷を負うのは間違いないのだ。

「ハマノツルギ、ますますムカツク莫迦餓鬼だな」

「おいおい、それはあの子専用のはずだが！？」

だがあれならば防げる、とカゲタロウは納得した。ハマノツルギを構えたナギとコジローが一気に突っ込んでくる。若干キレ気味の力ゲタロウが影の鞭を展開し、ラカンもまたアーティファクトによる

剣軍を召還。無数の影の鞭と大量の剣軍が青年二人に襲いかかる、
がナギの手に持つ剣の一振りですべてを掻き消した。

「ほ!？」

「本物か」

ラカンのアーティファクトを軽々消し飛ばしたその剣は本物でしか
ありえない。ハマノツルギ、魔法使いといった存在に対する最強の
攻撃力を誇る大剣だ。魔法といった神秘を打ち消す能力を保有し、
そしてあの子の本来の能力に指向性を持たせ増幅させる装置である。
そうそのアーティファクトはあの子専用のはずなのだ、それはもう
誇りの高く狙撃主が認めるほどの少女のもの。

「契約相手のアーティファクトを呼び出すアーティファクト」

「ハッ!？なるほどねえ、これは激レアだ」

まあどうでもいいか、とカゲタロウはコジローへと向かっていった。
影を展開しながら面白い、と笑う狗族の青年と対峙する。

青年は自信があった

目の前の影の使い手を倒すという自信があった。何故ならば彼らは
努力したからだ、同じ影の使い手であるダブル・シックスに半殺し
にされながらも戦い抜いてきた。正直に言うならば、青年は影とい
う魔法を相手にするなら狙撃手”以外”に勝つことは出来るだろう。
影の鞭を拳一つで弾き飛ばし、そして殴りかかる。その巫山戯た覆
面の上から顔を殴りつけようと決めていたのだ。普通ならばその
まま殴られていただろう、普通ならば。

「鈍い」

彼は頭に向かった拳を、そのまま背中を後ろに曲げて回避した。避け方すら奇抜すぎると、観客は騒がずにはいられない。無論、青年はそれに驚いたものの攻撃をゆるめることは無かった。拳、蹴、拳、拳、蹴、思いつくかぎり攻撃してみた。だが…全て無駄だと思いつけられたのだ。動きが違いすぎる、と青年は口を開けた。個人的にカゲタロウの動きやら戦法の研究をしてきたのだ。全ての戦闘が一撃二撃という少ない時間であったものの、彼もまた戦闘の天賦の才を持っている。見切るのも可能、なはずだった。そこでようやく気付いた。

「（コイツツ！？まだ手え抜いてやがる！）」

「グッバーイ」

人差し指を親指に引っかけて、勢いをつけて人差し指の一撃を青年のオデコにぶちかました。デコピンだ、何の変哲も無いデコピン。だが、青年はまっすぐと吹き飛ぶ。何百メートルも吹き飛ばされ、闘技場への観客へと……、そして障壁が発動しコジローを受け止める。コジローの背中に浮かんだ障壁の魔法陣、だがコジローはそれに深く食いこみ、まるでガラスのようにヒビを入れた。

「……………峰打ちだ」

《か、カゲタロウ選手のデコピン！たかがデコピン、されどデコピン！コジロー選手を観客席まで吹き飛ばし、……………障壁を破壊！？信じられませんか！！》

彼の背後で、ラカンとナギが撃ち合っているのだろう。だが、そんな光景よりも、デコピンでラカンの一撃を防いだ障壁結界に一部といえどヒビをいれるなど。大事件を三回通り越して珍事件である。彼からすれば、ただ術式を追加しただけである。莫大な魔力と精練を極めた”衝撃”のデコピンなのだ。バットに組み込めばバントでホームランが撃てるし、キーボードに組み込めば打つ度に床が陥没するだろう、そういうアレなのだ！

T o b e c o n t i n u e d

第四十五射 愛と勇気の使者 前編（後書き）

いつかやりたいネタ

「故に俺は問う、お前が俺の担い手か…」
マスター

第四十六射 愛と勇気の使者 中編(前書き)

おい

造物主より長いぞ

第四十六射 愛と勇気の使者 中編

実にくだらない、と何度目かの言葉が彼の脳内を横切った。同時に
”だからこそ面白い”という一見矛盾したような感情も併せ持った。
彼は何度も戦った、そこに意味があるとすれば全ては彼女のため。
否、もう彼に戦う意味など問う必要すらないだろう。彼の全ては彼
女のためであり、彼”自身”も彼女のために戦う。彼から見れば、
戦う理由など実にどうでもいいものだった。目の前の青年に化けた
少年二人。片方は単純に父の背中を追い求め、そして超えようと。
もう片方はただ親友と肩を並べ背中を合わせ戦うため。何度も何度
も思った、どうでもいい、と。彼から見れば彼女以外のことなど、
無限の彼方の出来事だ。精々何か面白いことがあるかどうか詮索す
るだけ。自ずから見ようとも思わないが……彼女が願うならどこま
でも行くような存在だ。思えば、この”児戯”に参加したのも何か
の気まぐれなのか、彼が参加するなど基本的にありえなかったこと
である。

「まだ立てるだろう?」

「ぐっ……めちゃくちゃやなカゲちゃんよう。……アンタ何モンや」

狗族の青年が全身に力を込める。彼に飛んで来たのは威圧だけでは
なく殺気。彼の異常さに気付いたのだろう、彼の強さに。拳闘大会
などラカンと同様に遊びの範囲に収める最強の一角が何故ここに、
という疑問を抱いたのだ。彼もまた天才の一人だった、気付くこと
は容易い。闘争によって我が身の戦闘力を上げる、いわば野生の能
力を持ちながらヒトガタの生命体のみを赦された思考という能力を
持つという、ドラゴンがガトリング砲を翼に装備しているようなも
のなのだ。

「素晴らしい、それなりに力を込めたつもりだが……」

もう少し込めてもいいようだ

「ハッ、ほざけッ！」

殺気というものがある。戦人ならば誰もが用いる強者の証だ。気の一種であり、明確な”殺”の意図を持つ。強者同士の戦いは時には戦わずに決着がつくという、それは殺気のぶつけ合いをした結果なのだ。より強い殺気を放つ物が強い、それは自然において決定事項だ。だからこそ今、青年は武者震いをした。殺気が”まったく”感じないからだ。強者ならば必ず持ちうるはず、それも戦場という死を交差点を超えた者ならば例外ではないのだ。なのに何故、目の前の覆面はここまで”静か”なのであるうか。能ある鷹は爪を隠すという言葉がある、まさにその通りだ。ストリートで肩を揺らしながら歩くチンピラほど弱ちく見えるものは無いように、スーツをピシヤリと着こなし、いつでもどこでも”笑顔”のリーマンのほうに恐怖を覚えるように…。

「そこでお前に質問だ」

「ハッ！」

大きく振りかぶった拳を足を動かさず体の動きのみで回避し、ピョンと跳ねるだけで足払いを避け、下から顎に向けての拳を軽く払いのけ彼は聞いた。青年は聞く耳持たず、と言わずに代わりに拳で語った。聞けば、耳を傾ければ、何かがおかしくなる、と直感が告げ

ていたのだ。青年の額に焦りの汗が一滴流れ落ちた。殺気を異様に持たないこれは一体何なのか、まだ実力を隠しているのか、それとも……

まったく殺気を持たない戦人なのか

ありえない、と青年は頭を振りながら否定する。暗殺者であろうとも、狙撃銃を使う者だろとも例外無く持っているのに、一体どういうことだ、と。ここまで殺気を消え去ることが出来るならば、それこそ最強の『暗殺者^{アサシン}』で、そもそも最初から殺気を持たないならば、どういう場所に生きて、どういう生き方をしてきたのか、想像だに出来ない。それは息をするように殺す、という異常性（自然）を表しているのだから。

「何故戦う、何故生きる、何故……何故そこにいる？」

「クッ！」

そんなの決まっている、と青年は心で呟いた。心で呟いたのがまるで聞こえたかのように、彼は嘲笑った。非常に耳に残る不快な音、だが一度聞くと何度も聞いてしまうような不思議な笑い声でもあった。原っぱを駆ける”少年”のような純粹さ故に、それを出す”大人”という疑問、だからこそ不愉快だと。

「ほら、足下が居留守ですよ」

「ガッ!？」

どこからともなく伸びた影の鞭が青年の足を払いのけた。体勢を崩し地面に倒れ込もうとする。致命的ツ、と青年が後悔してももう遅かった。彼が関節など無いように ニュルンと奇怪な擬音がピツタリ 腕を伸ばし青年の足首を掴む。そのまま一回転し…

「キラールパスッ」

投げ飛ばした、人々は言う、華麗だった、と。全世界の物理学者が望みそして届かなかったというほどの美しい放物線を持って青年は飛んでいった。そのまま闘技場の壁にめり込む。パンパンとスーッについた埃を払うと、モギユモギユと足音を立てながら…

「（え、なにあれこわい。雷光化…？）」

恐らく片方はナギなのだろう、白い光…：放電を伴いながらラカンとインファイトしている。雷の速度は150キロメートル毎秒という、ものにもよるが狙撃銃はだいたい1000メートル毎秒、雷がどれほど速いか具体的な例すら思い浮かばない。で、その雷の速度、ではないがそれ並の速度で移動しているナギ、もうそこから色々吹っ飛んでいる。それに対して普通に殴り合っているラカンもラカンだ。予備動作らしきものがあるし、雷化したといっても思考まで早まるわけじゃない。だが無茶にも程がある、と彼はドン引きだった。さすが闇の魔法汚い、と。

「（雷化したとしても物理攻撃はまだ当たるのか？いや、ラカンだし信憑性は薄いな）」

もう知らね、モギユモギユとナギを殴り飛ばしたラカンへと足を進めた。中途半端な雷化と言えど、それを素手で殴るなどとてもない！と大げさに思いながら”ともだち”になりたくねえなど、どう

でもいいことを彼は考えた、ある意味現実逃避かもしれない。とはいっても事実として彼は時間を停止させる相手と戦ったこともあるのだ、というかそれとあまり変わらない。

「なんだ、もう終わったのか」

「おうお前も速かったな！ま、俺様を一瞬だけでも本気にさせたのは評価できるがな」

彼が丁度ラカンの方へと足を進めた時のこと、ラカンの痛恨の一撃がナギの腹部に刺さったようだ。雷化したとしても思考が速くなるわけではない。肝心の速さも、ラカン程になるとカウンターのプラヌ要素にしか成り得ないという。圧倒的強さを見せ付けたラカンとカゲタロウに、ナギとコジローは敗北を悟った。ナギの脳内に、様々な光景が映る。闇の福音と呼ばれた師のようになれない、父のようになれない、ラカンのようになれない、シックスのようになれない、自分には無理だと、そう思いながら視界が段々と闇に染まっていく。コジローもそうだった。瓦礫に半分埋もれながら勝てないことによる純粋な悔しさだろうか、目の前の壁は高すぎた、と後悔しているのだろうか。握り拳を作りただけ…震えていた。

だけど

ナギとコジロー、否、ネギと小太郎は全て否定した。なれる、勝て

る、勝つ、と。奴隷の身分に落とされた知り合いがいた、彼女たちを解放しなくてはいけない、と。勝利を確信してくれた人がいる、ここで終わってたまるか、と。ナギは拳に力を入れ、地面に叩き付けた。血反吐を吐きながら、それでも立とうとする。コジローもまた、全身の痛みに堪えながら我が身の肉体に命令を下す、動け、と。ナギの口から血の塊が出てくる。それを見たラカンは、いつもの余裕の表情のまま棄権を促した。

「やめとけよばーず、中身がぐちゃぐちゃでいかれてやがる」

治療しないと手遅れだぜー、とラカンはナギを無視したまま淡々と述べた。カゲタロウは特に何も言わずにただ彼の横に立っていただけ。ラカンの言葉にナギは静止した、それは敗北を認めた静止ではない。カウントが始まった、次々と大きくなる数字、誰もがここで終わると、そう思った。

「今回俺が喧嘩を売ったのはな、100%のお前を見てみたいからだ、いやーよくやったぜ。ハッハッハ！」

「予想より弱かったが、まあ”中身”のことを考えると及第点だな」

「な、なにを……ッ!？」

この人たちは何を言っているのだ、とナギは怒りを覚えた。初めから全力で戦うなど、もとよりその気が無かったと言っているのだ。ラカンがナギの闇の魔法を使った瞬間を褒め称える。世界に初見で見切れる奴は5人程度だ、と。中身が10歳の少年がそこまで出来たのだ、誇りに思え、よくやった、ラカンの中身の無い賛辞と拍手がナギに送られた。カウントを速めるようにパンパン手を叩く様子に対しカゲタロウは依然として何の行動も出さなかった。しかし目

に見えるほどの落胆の気配を見せていた。なんだここまでか、と言いた気の空気を携えている。

「あ、そうそう。俺に勝ててないから一人前の男ってのはナシだからな！それとお前の母親の話もまた今度っつーことで！」

「ふっ、ざ…けるなッ！」

「ほへ？」

立った、ナギが立った。全身に力を入れ、血みどろになりながらも青年は立った。両腕からうっすらと見える闇の魔法を習得した証でもある模様が浮かぶ。観客達の歓声、審判から大音声の復帰宣言。ナギの闘志に燃える目を見てラカンが武者震いを起こした。何十年ぶりかという武者震いだ。最後の相手は、そうだ、青年の父親であるナギ・スプリングフィールドだったと、かつての記憶を引っ張った。同じ目をしている、間違いなくナギ…ネギ・スプリングフィールドは”ホンモノ”であると今確信したのだ。

「へッ！言うじゃねーか！！！」

ダンッ！とその場にコジローがやってきた。頭から血を流しながら、それでも立ち上がった。二人はまだまだ戦える、と奮起を起こす。今こそ反撃だと、最後の策を打つと二人が前に出ようとす。…その時だった。今、最も最悪な出来事と言わざるを得ない出来事だ。

なんだ、まだ足りないか

「なッ！ガアッ!？」

《おっと！カゲタロウ選手の無情なる一撃！有無言わさず追撃――
！！！！》

ナギとコジローの反撃、誰もがそう思っただろう。しかし相手が悪すぎたと言わざるを得ない。彼は決して戦人なんかじゃなかった、元よりそういう存在だったのだ。わざわざ変身中のヒーローを待つような模範的敵には決してならない。立ち上がったナギとコジローに対し無情なる一撃。スツと彼らの正面に転移したかと思うと、そのままナギの顔面を一殴り。地面に叩き付けられながら派手に吹き飛んでいく。コジローがその出来事に気付いた瞬間にはもう遅かった。彼の肩から伸びた影の蝕腕がコジローを握り天高く振り上げる。

「クツ！？」

そのまま地面に叩き付けた、何度も何度も。土埃を巻き上げさせながら、彼はずっと攻撃している。ピクリともコジローが動かなくなつた所で、彼は影を振り回し放り投げた。それもナギを吹き飛ばした方向へに。観客達の熱が上昇した、見事なまでに悪役ヒールという、ここで再び彼らが立ち上がるならば最高の茶番であろう。

「やりすぎやねーの？死んじゃねーだろうな？」

「んなわけねーだろ、死ねば俺の負けだ。それだけはあつてはならん……が、死ねばそこまでの存在だったのだろうよ」

隣に飛んできたラカンが言葉をかける。一応それなりに青年達に気を遣っているのだが、彼は素っ気なく返した。彼からみれば赤の他人にもほどがある存在だ、彼の性格上ナギ・スプリングフィールドに何かをしても、命令や任務以外ならばネギ・スプリングフィールドに関わることなど一切無いのだ。それはもう、成長を願うことな

どもしない。そもそも、と彼は続けた。青年に化けてはいるといえどまだ10歳、その点を見ればここまで来ているのは実に素晴らしいことだ、と。

「ま、同感だな。奴隷の解放なんざ他にもまだ手があるしな」

「（奴隷なのにメイド服とはどういう趣味なのか…）」

二人の会話の向こうでは、ナギ達のカウン트가既に始まっていた。もう闘技場の皆は彼らの勝利を確信しているだろう。それでも二人が立つのなら、再び言うが最高の茶番だ。実に盛り上がることだろう。例え天才であろうとも、例え最強の一角であろうとも、例え英雄の息子であろうとも、例え血反吐を吐くような努力をしようとも、何度も壁を乗り越えたとしても例外は無い。万人に与えられる敗北という可能性、それは無論英雄二人にも言えることだが、全てが違ったと言っしかない。

《ここで終わってしまうのかナギ選手！さすがに千の刃のラカンと怪人カゲタロウには勝つことは出来ないのかー！！》

審判が試すように言う。おそらく青年二人の耳には届いていないだろう、二人は瓦礫の向こうにただ埋まっているだけで沈黙を続けている。やれやれ、と彼はスーツをはたきながら肩をぐるぐる回した。

「（おいおいここで終わりか、ばーず？）」

彼は背中を向け帰ろうし始めた。ラカンはそんな様子の彼を見ても特に言葉を出すことは無かった。今でこそ性格が大分変わったものの、なんの接点も無い青年が相手、例えナギの息子であろうとも狙撃主である彼の態度は変わらないことぐらい知っていたのだ。審判

のカウントが20に近付こうとしている。長いようですぐに終わった決勝戦が終わろうとしていた。その時…

ダァン！！

強烈な音と共に岩石が空高く吹き飛んだ。それナギとコジロー達に追い被さるかのようには落ちた一枚岩だった。へえ、と彼は体を少しだけ傾け立ち上がった青年二人を見やった。もう出来すぎとしか言いようがないほどの状況だった。観客が騒ぎ出す、まだまだ観客は騒げるようだった。ラカンもここでの復活はさすがに予想してなかったのか驚きに満ちている。そしてニヤリと満足にそうに笑った。

「まだまだ立ち上がる！ナギ選手！コジロー選手…コジロー選手は獣化外装をまっています！！まだ戦うようです！！」

「あー、はいはい」

だが、彼はそれでも潰そうとした。影に沈み込み青年二人の前に立ちふさがる。方や英雄の子、方や戦闘の申し子、二人とも確かに天賦の才を持っていた。ナギのほうに至っては…

「『闇の魔法』、千の雷を二つか面白ッお？」

彼の言葉が最後まで行くことはなかった。もうその時にはナギの拳が彼の顔を殴り飛ばしていたのだ。いつぞやの再現と言わんばかりに吹き飛んでいく彼、何故か直立したまま不動なのだが一体どういうことだろうか。そしてまだ青年達の攻撃は終わってなかった…

「うらあッ！！！！爆ぜえ！！！！」

巨大な狼に変身したコジローから追撃を貰う。口から放たれた漆黒の弾が彼に直撃、そして爆煙を上げた。否、それだけでは終わらない。全身を使用し彼に猛攻を仕掛ける。体当たり、牙、尻尾、そして漆黒弾、ありとあらゆる攻撃を持って彼を押しつぶした。

《コジロー選手の猛攻！！カゲタロウ選手一步も動けませーん！！！！》

彼がまとっていたスーツが所々破れ穴が空いていく。これまた奇妙なことに覆面には決して傷が付かないのだが……。コジローからの攻撃を喰らいながら彼は”沈黙”を続けた。ただの沈黙、コジローもその異変に何を感じ取った。だがしかし、攻撃の手をゆるめるといふ選択は現時点において存在しない。もう青年二人は最後の力、と言ってもいいほどの限界なのだ。退くことなどありえなかったのだ。そして大きな一撃が彼を吹き飛ばした。闘技場の壁を破壊し、瓦礫に埋もれながら……彼は薄く笑った。その声は誰にも届くことはなく、届かなくても彼は笑っていた。

ニタリ

ニタア

クスクス

クカカカ

覆面の向こうでは、それはもう楽しそうに笑っていたという。

「ナーギー君、あーそびーましょー……」

T o b e c o n t i n u e d

第四十六射 愛と勇気の使者 中編（後書き）

今日の没ネタ

6 「俺の幻術にかかっているから無理だ」

葱 「そうイメージさせる僕の幻術：かかりましたね」

6 「幻術だ…」

葱 「その前から僕の幻術は発動されていたんです」

6 「残念ながら、俺の幻術はそのさらに前からだ」

カゲタロウ怖すぎワロタwwww

第四十七射 愛と勇気の使者 後編

カゲタロウが瓦礫の中で色々はしゃいでいる中、本日の主役とも言える二人が対峙していた。コジローはカゲタロウの封殺に全ての力を注いだのか闘技場の端っこで俯せになったまま動けずにいた。もう既に荒れ果てた闘技場の大地にまた二人を中心にして風が吹き荒れた。ゴクリ、と誰もが息を飲んだ。あのラカンの正面に立つというナギ。おそらくそこには何か秘策があるのだろうと安易に予想がつく。しかし対峙しているのは英雄ジャック・ラカン。圧倒的”無敵”を誇った英雄だ。まだ大型新人ルーキーとしか言えないナギの秘策程度が彼に通じるか、という疑問を持つのは自然のことだろう。

「ほー、二重装填か、それが最後の切り札か？」

「さあどうでしょう？」

「へッ、まあどうでもいいさ。勝つか、負けるか、その二択だからな」

千の刃とナギは正面から向き合っていた。互いいつでも殴れるという位置、それがナギの答えだった。カウンターで潰されるならインファイトを、そして二重装填の常時雷化より超高速、後はコジローがカゲタロウをおさえるだけ。その目論見は”見事”に成功したのだ、ただ彼から見れば実に”不運”と”踊っ”ちまったあ、としか言いようがないが。

カク打頂肘！！

ラカンが何かを思ったのはナギの肘打ちを喰らった後だった。吹き

飛ぶラカン、しかしそれより速くナギが回り込みラカンに次々と攻撃を加えていく。常時雷化の結果としてラカンが見抜いた弱点「出がかり」を潰すことが出来る。身体能力のさらなる加速は言うまでもないだろう。そして超絶なインファイトでカウンターを潰す、これほどの技は世界最強の者でも使う存在はなかない。ナギは次々とラカンに乱打、乱撃を放つていく。だが…

「こ、これは…ッ!? 倒れない! ラカン選手倒れません!! 幾十幾百の打撃を浴びて英雄未だに倒れず!!」

例えラカンが追いつけないほどの速度だとしてもただそれだけで火力不足は否定出来なかった。膨大な魔力を使つての速度で迫っても何十年も鍛え抜かれ気で極限までに強化されたラカンの肉体の鎧を超えることが出来なかったのだ。

「おーおー、よくやるじゃねーかばーず。だが、これではお前は俺に勝てんぞ」

そう言い切ったラカン。しかし対してナギは笑った。青年は言うのだ、畏にかかったな、と。彼の最後の切り札とはこれではなかったとラカンは気付く。そう思ったつかのまにコジローの技によって足を固定されていた。ラカンの足下にまるで底なし沼でもあるかのように、ズズズ、と重力に従いラカンが沈んでいく。確かにラカンはまずいと思った。しかしそれ以上に解せないのはカゲタロウだ。カゲタロウがナギに一発、そしてコジローの乱撃で沈黙するはずがないのだ。何しろ彼も、性格が最悪だが英雄の一人なのだから。

「(シックスの野郎!? 何考えてやがる!?)」

やっちまった、と同時にラカンは彼の意地汚さに呆れた。彼とラカ

ンはこれでも戦友だ、彼が何を考えているのか手に取るようにわかったのだ。彼の趣味は実にシンプル、階段から突き落とすことだ。才能のある人間を思いつき伸びた鼻ごとへし折るといふ外道の中の外道。外道の道の内側をまっすぐ歩く所業。そんなことをするのが彼の隠れた趣味だという。

「例え鋼の肉体であろうとも不滅ではない、その証拠にヒット直前に体の芯をズラすことで直撃を避けましたね」

これがラカンの不死身性　実際は不死身ではないが　の正体なのだ。誰よりも多く、誰よりも重く、ただただ鍛錬を積み戦い研磨し続けた結果が彼だ。百戦錬磨の結果として彼が天より授けられたのが超直感。例え視覚出来なくとも、脳が反応しなくとも、それは反射の域で攻撃を回避する頂点の一つ。

「行きますよラカンさん！『双腕解放！左腕固定・雷の投擲！右腕固定・千の雷！術式結合・雷神槍』鬼神ころし”『』」

「ほあー、魔法の融合とかどこまで器用なんだとお前…」

彼は超直感によって直撃を避けていたのだ。それはつまり直撃してはならないという決定的な証拠である。ナギはそれに気付いたのだ、故に己が放てる最も強力な一撃を放つと決めたのだ。それに対してラカンは薄く笑った。わざわざ「行きます」という言葉を言いのけ、そして力を溜め込む。これは最もラカンが好む状況だ。対する者が全精力を持って放つ力比べ、最も愚かで最もわかりやすい。

「結局力比べかよばーず！それなら罫をかけなくても付き合ってるぜー！！」

ラカンが右手に気を溜め込む。氣と魔力の奔流、闘技場に熱風が広がっていく。この点に関してラカンを知る者は信じられないという表情だった。力比べとはラカンが最も得意とするものだ、そのうえラカンは僅か三秒という時間で全開へと辿り着くという。同じように何十年もの研磨の結果として、ラカンは気を完全に我が物にしているのだ。ナギの片手には20メートルを越すかというほどの雷の長槍。莫大な魔力を込められたそれは己自信が耐えられないのか放電を起こしている。光り輝く拳に次々と気を溜め込んでいくラカンでも、その魔法には感心するものだった。

「力比べなら、手加減しねー！ラカンッ！！インパクトッ！！」

拳を突き出し気を波動砲のごとく放つ。放った後、そこでようやく彼は何故今頃？という疑問を感じた。ナギは氣、魔力を完全に封殺するアーティファクト・ハマノツルギを使用出来るのだ。それに全てが終わるはずであるのに、カゲタロウが一向に動く気配を見せない。その証拠にナギは槍を控えさせ飛んでくる氣の塊へと手を伸ばした。槍をぶつけるのではなく、そのまま直撃しようと…

「馬鹿か！死ぬきかばーず！！」

「『術式解凍！！』」

ネギ流閻の魔法・敵弾吸収陣

「ッ！？」

ナギの足下に巨大な魔法陣が出現した。六芒星を中心とした中心の魔法陣に、さらにそれを包むように展開する幾重もの魔法陣。幾何学的な模様が鈍く輝き、術式の効果を発動させた。そして氣の直撃

を、その気になれば戦艦を数個もぶち抜く一撃をナギは受け止めたのだ。あまつさえそれを一力所に溜め込むという荒技まで行使している。

「敵弾吸収だと！馬鹿な！？しかも何時……アノ時か！？」

二重装填したときのナギの乱打、ナギはその時に密かに魔法陣を構成していたのだ。つまり、敵の攻撃を最初から利用する完全な罠ということだったのだ。ナギ、ネギではまだラカンには届かない、しかし己自身の攻撃力が足されなければそれは確実に相手の体内へと届く一撃となる。

「確かに僕はまだラカンさんには届きません、でも！貴方自身の力ならどうです！？」

ナギは受け止めたラカンの気を闇の魔法によって取り込んだ。莫大な気を無理矢理取り込んだためかナギの意識が一瞬吹き飛ば。しかしまだ出来ると自身を奮起させ、そのままラカンへと全ての力を出し切って倒すために殴りかかった。

「うおおおおおおお！！！！」

「グッ、これは確かにやべえッ！？」

光がナギの拳を螺旋状に包み込む。その一撃はまさしく英雄を倒す”最強”の一撃であっただろう。……もともと、世の中そこで終わるほど甘くはなかった。むしろ”彼”の存在は最高に最悪だろう。理不尽を体現したような……悪夢の存在が。

「な……ッ！！」

おめでとう少年、君はこれで敗北だ

「おいおい……おめー最悪じゃねーか……」

ナギの拳がラカンの腹へと刺さろうとしたその時だった。”何者”かの手が、ナギの腕を握り掴んだのだ。ラカンを倒すレベルに達した拳を片手で静止させる異常さ、そして脳髓を鉄槌で叩きつぶすような衝撃を与える無情な声。

「か、カゲタロウ……さん？」

「ふむ、及第点から平均点って所だな。術式の甘さは……まあどうでもいいか」

「な、何を……グツ!？」

彼はバチンとナギの右手に何かを撃ち込んだ。今でこそ昔の話だが、かつて”彼”がエヴァンジェリンと戦争という名の模擬戦をしたことがあった。その模擬戦のとき彼がエヴァンジェリンに撃ち込んだ使い捨ての封印術式と同系統のモノをナギに撃ち込んだのだ。しかしそれはかつての術式とはレベルが違う。綿密に練り込まれた術式に、圧倒的に使用された魔力、比べるほどが烏滸がましいと言えるほどのモノ。ただでさえ真祖の吸血鬼を無能に変えたというのに、例え天才であろうともあったナギ（ネギ）では動くことすら出来ないだろう。

「な!？魔力が……封印術式!？いつのまにッ!？」

「んー」

彼の右手がナギの顔面を掴む。そしてそのまま倒すように押し、地面に叩き付けた。岩盤を破壊し、地面が陥没する。正面からその光景をラカンは冷や汗をかきながら見ていた。動けなくなったところをジツクリ殴り飛ばす、宇宙の帝王並に外道な奴である、と。

「（うわぁ…）」

「……だめ押しだ」

そう言いながら彼は地面に食いこんだナギを地面ごと蹴り飛ばした。

《なんと！！ここでまさかのカゲタロウ選手復帰ー！！最後の力を振り絞ったナギ選手の攻撃届かずー！！っていうか今の攻撃止めるなんてマジっすか！？》

「おー危ねえ危ねえ、なかなか悪趣味……いや、最初からこうだったな」

「それにしてもお前は阿呆の子だな」

「あぁん？お前喧嘩うつてるのか？ん？買っぞコラ？」

並び合ったラカンと彼。ボロボロのスーツを「あ、これダメージ加工っす」と言わんばかりに普通に着こなす彼がラカンのほうに向かって呟いた。突然の阿呆の子宣言にしようもないが怒りを隠せないラカン。仲間割れの雰囲気闘技場は別方向の盛り上がりを見せる。

「今更お前に力比べなんかするわけねーだろ、俺でもせん。お前はぶつけ合うフリしてればなんでも餌にかかりそうだな、な？お莫迦

「さあん？」

「……………」

気を放り投げた後にラカン自身でもそう思ったことだった。ぐうの音も出ないとはこういうことだろう。

《ナギ・コジロー両選手ダウンしましたのでカウントに入ります！》

「あー肩こった」

「老人かつ」

「愛を背負うとな、こうなるんだよ莫迦」

「なにそれこわい」

完全に終わりムードでワイワイ騒ぎ出す二人。観客の方も興奮を残したまま、やっと終わるのか、という感想を覚えた。だが、全ては杞憂に終わる。突然の咆哮が闘技場を包んだ。カゲタロウか、ラカンか？どちらでもない、咆哮を放ったのはナギだった。

「オオオオオオオオ！！！！！！」

《な、ナギ選手再び立ちました！！》

魔力を霧散させられ、ただでさせ誤魔化してきた身体的ダメージによって今にも倒れそうだった。そのうえ更にカゲタロウのため押しがそれを加速させたのだ。やっと立てる、ではなく、もうすぐ倒れる、と言ったほうが正しいほどの消耗具合を見せている。しかしそ

れでもナギは立っていた。ラカンは本日何度目かの驚き、今までで最も大きな驚きだろう。カゲタロウも本来ならばもうすでに追撃をおこなっているだろうが、何を考えたのか無言のままナギを見ていた。

「あ、あな、たはッ!? 何者なん、ですかッ!?」

何か違和感を感じた

「誰でもいいじゃないか” 莫迦” 餓鬼。負けるか勝つか、相手が誰であろうと関係ない、そう思わないか?」

何か違和感を抱いた

「そりゃー極論だろ?」

何か違和感を覚えた。

「莫迦…? その声…、ま、まさか…」

「なんだ、気付いたか」

ナギはそこで気付いた。思えば開始当初からその違和感を知っていた。圧倒的影の使い手がたまたま側にいたという事実。彼と同じように影の魔法を扱う情報が全て不明の謎の怪人。リカードから、セラスから、エヴァンジェリン（巻物）から、テオドラから、カゲタロウの何かを教えて貰っていたのだ。実力を隠したまま目の前に立ち”英雄”ラカンと同じ舞台にあがっている彼という存在。鍛錬を積んだコジローですらまだ全力を出させなかったという存在。何よりも冷酷で、残忍で、影を扱う英雄、何よりも”普通”な奴などこ

の世に一人しかいない。もう答えは既に出ていたのだ。

《か、カゲタロウ選手が覆面に手をツ！どうやら素顔を表すよう…
…ニヤッ!?》

「し、シックス……さん？」

覆面に手を伸ばし、それを取り除いた。露わになる素顔、もはや白い銀髪に、血の海を映しだしたかのような赤眼。決してピジョン・ブラッドのような深紅や、燃えるような灼眼ではない。真っ赤な真っ赤な戦場の色だった。彼の足下から影の沼が広がり彼を一瞬だけ包む。もうボロボロの安っぽいスーツではなく、この世で彼を顕すと言っても過言ではない背中にヘラス帝国の紋様を刻まれたローブ付きフード、シックスだ。彼はまるでナギが飛び込んでくるの歓迎するかのようには手を広げ、立ったまま口を開いた。

「そっだ、俺だよ。俺がカゲタロウだ」

バサリとローブを揺らして宣言した。

《な、ななな……な、なんだってー！ー！！！！！！》

闘技場が静けさに染まる。しかしそれは一瞬のことで次に目が瞬く時には

ウワアアアアアアアア！！！！

大歓声が広がった。

《なんとということでしょう！！カゲタロウ選手の正体はなんと狙撃手！帝国の大英雄ダブル・シックスだー！！！！私興奮が止まりません！！》

「おーおー耳が痛え」

「五月蠅エ…ん？」

「は、ハハハ……」

ナギ……ネギはもう笑うしか無かった。彼の戦略上ラカンに勝つことは出来ても、その向こう側にいるシックスには絶対に勝てないからだ。言うまでもないがもうすでにラカンすら倒すことは不可能だ。今まで姿を隠してきた彼が正体を現す。彼ら英雄にとって戦闘能力はもはや固有の物として存在している。こういう風に闘うからこそ彼、それが成り立つのである。つまるところ、今彼はカゲタロウから脱し、隠す必要性が無くなったのだ。変幻自在の影の魔法のみという制限が無くなるのだ。

《ラカンとシックス！まさかの最強のタッグです！彼らに勝てる相手などこの世に存在しているのかー！！！！？》

「こんな理不尽…ハハハ」

「さて、そろそろ止めといこうか『歯車・起動』」

地面と平行に伸ばされた右手に光が集まりソレが形成された。右腕全体を包む自身の身長ほどの巨大な大砲が現れた。ガチャンと砲口をネギの方へと向ける。

「クツ！『ラス・テル マ・スキル マギステル…』」

それでもネギは最後まで足掻こうとした。例え絶望に染まるとしても、可能性が無いとは限らない。ネギにだって”勝つ”理由を持っているのだ。たかだが英雄二人の適当なやる気で負けてるいいものか、と。

「魔力装填 回れ歯車 螺旋の如く」

「……おい、おめーそれ人間に使っていいのかよ」

「なあに、死にはしない。シヨックだけ与えてやる」

「え？それでも死ぬんじゃね？」

地面に固定された大砲の砲口から光が漏れる。大砲の後方左右に見える歯車が高速で回転し、まるでチェーンソーのごとく甲高い音を響かせた。

「『来れ雷精 風の精 雷を纏いて 吹きすさべ 南洋の嵐…』」

「生命変換 唸れ鉄輪 生命の憤怒」

震える右手をシックスに向けて魔法を発動する。残り僅かなはずの魔力によって練り込まれた魔法だが、窮鼠猫を噛むとも言えないのか、火事場の馬鹿力と言えいいのか、枯渴限界とは思えない程の魔力が流れている。さすがにこれにはシックスも驚いたが、どうでもいいか、と一蹴した。いつものことだった。右手から魔力を帯びた雷が奔流する。そして…

「生・命・氣・弾」

「『雷の暴風！』」

実に当たり前のことだが、例え予想外の魔力量であつとしても少年が彼に勝てるはずもなかった。雷の暴風と命の弾丸が均衡するはずなどなかったのだ。二つの波動が正面衝突するが、暴風など有つて無いが如く、丸い弾丸が全てを薙ぎ払い少年へと向かつていった。

「ネギよ、少し考えればわかることじゃ。シックスやラカンがまだいるというのに『完全なる世界』がまだ存在しているという事実を、ま、独り言じゃがな」

音もなく闘技場が光に包まれた。決して優しい光ではなく崩壊をもたらす悪の光だが、彼女は高台でその光に包まれながら呟いた。受動的にしか働かないシックスやラカンだが、二人が、特にラカンが奴らを見逃すことなど無いのだ。だからこそ今こうやって修行をつけ、これから起こるであろう理不尽に少しでも耐えられるよう…。

「……………それにしても、大丈夫なんじゃろうか……………」

正直に言うならば、彼女はネギが死んでないか心配でたまらないという感じだった。さすがに大多数の観客がいるなかでスポーツという拳闘で殺害をするなど……あまり考えたく無いことである。彼は決して何も思わないだろう。「チッ、うっせーな。反省してまーす」とか言うかも知れない。

T o b e c o n t i n u e d

第四十七射 愛と勇氣の使者 後編（後書き）

『生命氣弾』

決して生命帰還ではない。ここ重要。武器のイメージは巨大ロックバスター。またはオメガモンの右腕。魔力を超圧縮してぶっ放す固有武装。ただし今回では主人公の体内にある”命”を燃やして作ったトンデモ弾丸。威力はラカン全力の気の攻撃と同等というトンデモ設定。ちなみに砲弾型でも波動砲型でもどっちでもイける。腕全体を覆う巨大な大砲もまたロマンである。考えた奴は天才だと思っ
なあ、マジで。

シックス・テオ・マナ 合わせてシツテマ(前書き)

噂の章間小話

後半、結構血なまぐさいというか、かなりのレベルでのヒドイ描写がありますので気分を害する方がいるかもしれません。外道オーラが出てますのでご注意ください。

シックス・テオ・マナ 合わせてシツテマ

「おお、帰ったかシツク……おいどこから攫ってきたのじゃ」

「拾ってきた」

彼の正面にいる褐色肌で出ているところは出ている、むしろはしゃぎ回ってる（？）美女が彼の後ろにチヨコンと存在している少女に指を差しながら言葉を出した。対して、一体コイツは何を言っているんだ？と言わんばかりに整然と言い放ったフードの男。彼の背中側には、彼女から隠れるように彼のローブを握り締める少女が、彼を壁にして覗き見るかのように彼女を見やっている。少女の特徴と言えば、指を差してきた美女と同じように褐色、ただし彼女のように頭に角が生えているわけでもないし、彼女は金髪だが少女は黒髪だ。肌が白ければヤマトナデシコウ、と言えるぐらいの可愛さだろう、ゲフン。

「……大丈夫じゃシツクス。初犯だし妾がついておるから」

「まずその謎の誤解を解いて貰おうか我が主よ」

「……師匠は犯罪者なの？」

「なん……じゃと……ッ!？」

ヒヨコヒヨコ彼の後ろをついて回る少女、そして少女を無視したまま歩く彼。彼女は彼に対して自首を勧めるものの、それが勘違いらしいことに気づき顔を赤くさせた。良い光景だ、とふむふむ頷いている彼を尻目に、彼女は彼のことを”師匠”と呼んだ少女の肩を掴

んで詰め寄った。

「いいか？見知らぬ少女よ、こやつは色々と危ないから近寄ったら……」

「おい」

「……大丈夫」

そう良いながら、懐から取り出した鉄の塊。質量保存とか色々無視しているが、そもそもそこは”魔法”世界という場所。魔を持って”法”を為す神秘の前ではギャグ程度にしか感じられない。鉄塊……銃を取り出した少女に、彼女は安堵的なため息を吐いたのだった。その安堵は、襲われても大丈夫という意味なのか、銃という繋がりに師事云々が正しいという意味なのか、そこは女の感情故が彼が知る由は無かった。もっとも普通の人間の雄の感情ですら彼にはなかなか理解しがたいことだろうが、そこは割愛しよう。

「それにしてもお主に弟子がのう……、今ならまだ間に合うのじゃが？」

「私をお願いしたこと……」

「そうか、ならばいい。お主の師匠は行動概念が変態じゃから注意するのじゃぞ？」

ホメ言葉だな、と内心呟きながら女同士の会話を背中で彼は聞いていた。時折すれ違う侍女や、警備兵達が彼女と彼の二人が一緒にいることは常のことだなんてはいるのだが、そこで謎の少女がいたことに疑問を覚えた様子だった。決してどこかの王族や皇族、貴族、

名門の子女のような身なりをしているわけではない。黒を基調としたワンピースを着ている普通の少女なのだ。それも”ヘラス帝国第三皇女テオドラ”と、大戦の英雄、帝国の大英雄、狙撃の代名詞ともなった”ダブル・シックス”と共にいるという、なんとというか不思議な光景だったのだ。皇女自身、いい方は悪いが平民達と会話をしたり慣れ親しむ光景はたびたびあるのも、その後ろで彼が無表情なりに怖い顔をしているのもよくある。だが、今は帝国城内なのだ。疑問に思うのも不思議ではない。

「……………まさか！隠し子！？」

「（ついにこの日が……………あれ？いつのまに？）」

「（おめでとう……………！おめでとう……………！圧倒的賛美ツ……………！）」

ざわ…………ざわ…………、と回りがはしゃぐ中、そんな周りの様子に気付かないのか、気付いているがどうでもいいのか、淡々と渡り廊下を歩く三人組だった。無論、その後少女が彼のことを”師匠”と呼んでいることに気付いた者たちの手によって、その噂は次第に薄れていくことになる。もつとも、それがカモフラージュ　なんのカモフラージュなのかは定かではない　という噂も同じく流れ出すのだが、その噂を出した者は忽然と姿を消し、三日後普通に帰ってきたと思ったらテオドラ至上主義になって帰ってきたとか、なにそれこわい。

「「ここが妾の執務室じゃ、弟子のお主じゃから来る機会は増えると思っぞぞ？」

「……………わかった」

ギギイ、と重ってくるしいドアを開けると豪勢な、というわけではな

いがそれなりに豪華に見える部屋。紅い絨毯を敷き詰め真ん中にポツンと存在する、いかにも最強です、と言わんばかりの執務用の横長い机。それを包むかのように数多の本が並べられている本棚。マナはその光景を見て、最初に豪華な執務室と言われて思い浮かべるソレとホトンド一致していることに面白く思う。ただし表情が表に出ることはなかったが…。

「あ…」

「どうした？」

「ん？」

彼女が突然何かを思い出したかのようにボソリと呟いた。彼、少女と続き声をかける。彼女はそういえば、と続けて言葉を紡いだ。

「妾の名はテオドラじゃ、お主の名は？」

「あ…、マナ。マナ・アルカナ」

「そうか、良い名じゃ」

フフ、と肝心なことを忘れていたことに少し後悔するテオドラだった。同じように一番肝心とも言えた名の交換をすっかり放り投げていたマナも同じようなもの。どーでもいー、と言いたそうに鼻くそをほじっている”英雄”にテオドラは　どこから取り出したのかまったくわからないが魔法だから問題ない　ハリセンで頭をはたいて、三人は部屋へと入っていった。後には結構有名になる、というか日常光景になる三人組である。一人は皇女、一人は英雄、一人は凄腕の傭兵として、まあ色々噂が流れるのだが大丈夫だろう。

「……無理」

「無理じゃない」

「無理だって」

「無理じゃねー」

無理無理、と言っているマナを説得しようとも思わずただ言葉だけで潰そうとするシックス。こういう光景なのもほとんど当たり前の一つである。少女が彼に弟子入りしたのがこれの原因だ。彼は少女に「正直言えば面倒臭いが、勢いで許可したから責任ぐらいは持つぜ？ゴマ粒程度には」というコメントを残した程度には師事をしてきたのだ。その結果がこの無理無理である。

「3つの跳弾後に的に当てるとか師匠しか出来ない」

「そうか、やれ」

「うー！うー！」

「うーうー言うのを止める！」

やれやれ、と彼は言いながら銃を取り出す。「手本だ、よく見ておけ」と言いながら発砲。ただし的を正面から狙うのではなく、銃口

を明日の方向へと向けて放ったのだ。一瞬のことだったが、確かに跳弾する音が3つ、それを聞き取る少女もすごいが彼が側にいると普通に見えてくる、不思議。こうだ、と言いながらマナに撃つよう急かす彼だが、ぶつちやけるとお手本見た程度で跳弾を利用した三次元空間狙撃とが出来ねー、と諦めムードのマナだった。だが、彼の背中には憧れるし、彼の生き方はひどく望ましいもの、望ましすぎて誰にも到達出来ないし、到達したらしたらで今度は狂人と言われるほどのレベルのもの、それでもマナは彼の背中を追いたかったのだ。

「……よし」

ガチャリを自らが愛用してきた銃を構える。目を大きく開かせ魔眼を発動させる。魔眼の使用と、一見狡つこいように見えるが彼から見れば持てる力を使うのは常に正しいことだと言っている。問題は無。むしろ魔眼を使わないと当てる気がしないものだが、彼女は銃を撃った。何度も何度も撃った。硝煙の匂いに包まれ、火薬と鉄で囲まれる生活をしていくのだ。それでも彼女は生き残り、後には英雄から直接任務を貰うほどの傭兵となる。それは全てマナの才能の御陰だろう。

「…で、出来た…」

「ナンティコツタイ」

3つの跳弾後に確かに銃弾は的に当たった。的の端っこのほう…正確には頭身大の人型の眉間のあたり。彼は心臓にヒットさせたが彼女はヘッドショットをしたのだ、一発目で。驚きを隠すどころか口調が変になる彼。何語？と弟子の突っ込まれるが、なんでもない、と変な汗をかきながらマナに対してそう言った。今後には様々

な場面、市街戦や森林の中、そこでの狙撃、近距離銃撃の技術を叩き込んで行くのだった。ちなみに、最初のほうは確かに跳弾は成功したが、次は上手くいかなかった。やっぱりマグレかハッハッハ、と安心した彼だが、一週間後には10発中8発を当ててくるという状況になったそう。ちなみに余談程度だが、的に描かれている人物像がやけにリアルで、赤髪の馬鹿そうな青年だったらしい。

「師匠褒めて、具体的に頭を撫でたりして」

「断る」

ムズと少女の頭を掴み、そのままクレインゲームよろしく持ち上げ少女を投げ飛ばす。虐待まっしぐらで警察がトンできそうな光景だが、数十メートル吹き飛んだ少女が華麗に着地すると、何事も無かったかのようにトコトコと彼の側へと走っていくのが何度も何度もあったそう。このころは子犬属性を持っていたのだ！

「師匠のツンデレ」

「黙れ潰すぞ莫迦弟子」

「でも師匠なら……」

「考えている意味まったく違うだろこの莫迦ッ！」

マナは彼の物言いに、ポツと頬を赤く染めてヤンヤンしだした。あ昔はあんなに素直（本の数刻前、ついでに無口）だったのに、と何処かのババアのようなことを彼は考えた。どうしてこんな性格にと流れもしない涙を流し、一ミリも思わない悲しみを胸に抱いたという。だが性格が変わったというのなら、それは間違いなく環境。

具体的に言つとシックス、彼自身の所為だと言わざるを得ないだろう。

「頼む！見逃してくれ！故郷にはおふく「パアン！！」……」

「お袋さん泣いてるぞー」

帝国領内の辺境でのお掃除中のことだった。どこかの組織の末端部分なのか、確かに大きな犯罪行為に繋がるようなことはしているが、調べれば調べるほど不可解なほどの情報の無さ、もう聞き出すこともしようと思わなくなった彼は無情で冷酷に、そもそも何も感じることもなく引き金を引いた。

「や、やめてくれ！もうしない！だから命だけは「パアン！！」……」

「そーなのかー」

聞いているようで、返事もちゃんと返してはいるが、相手にその声が届くことは無い。というか言葉だけでは本当に聞いているのか疑問に思うほどだ。

「畜生！？なんだよ！人をゴミみてえに！コイツ英雄なんかじゃ「パアン！！」……」

「今頃気付いたか生肉」

ゴミという部分か、英雄を否定する部分か、どっちに対しての言葉かわからない。だが、彼にとって一つだけ言えることは、そんなことはどうでもいい、ということだけだろう。大方掃除を終えたところで血が不自然なほどに、まったくついていないフードをとった。彼の眼前には、赤い血で染まりきり吹き飛んだ肉塊と、歩く度に足下からビチャビチャと音を鳴らす原因である赤い水が広がる光景。トラウマまっしぐらで速攻で胃袋の中身をリバースカードオープンしてしまうような光景だ。

「師匠、終わった……、四人捕まえた」

「そうか」

「な、なんだよコレ！？おい！お前仲間をどうし「パン！」……」

「……三人だった」

「報告は正しく」

「ん」

建物の影からスツと入ってきたマナが彼に言葉をかけた。マナがひっぱてきたロープの先には拘束された男が四人、だった。彼が起こした惨状を目の当たりにして、色々あつて三人になったがどうでもいいと言う感じ。残った三人は人間とは思えない冷酷さに、言葉を出そうとしたが、その結果が隣にいる血と生肉が詰まった水風船という現状を見て喉に無理矢理言葉を押し込めた。三人の内一人がもう言葉を出せるような現状ではなく、あらゆる恐怖を体験したように全身を震わせ顔を青くする。

「聞きたいことは色々あるが……まあ話さなくてもいいぞ？俺としちゃそつちのほうで楽だからな」

「は、話す！絶対に話すから！！」

「そうか、……莫迦弟子、外をみてこい」

「わかった師匠」

チラリと隣の肉塊を見ながらニヤニヤする彼に、我慢出来なくなつたのか命乞いの声を出す。男の脳内に保存されている限り全ての言葉を出してくるが、逆に彼は五月蠅くなった男に苛立ちを見せた。とはいっても、自ら話すというのに殺すのもアレなので大人しく聞くことにした。9割がなるべく殺すな、とテオドラの有り難い言葉を貰つてるといふ抑止力がある所為だが…。

「詳しいことは知らん！突然現れたんだ！仮面の魔法使いがッ」

「ほうほう」

「顔は知らない！本当だッ！アンタと同じようにフードを被って、声からして男だと思っ！」

「なるほどなるほど」

「あ、あとは…」

「……あとは？」

言葉を濁した男に、彼は銃をゴリッとコメカミに当てた。慌てて必

死に思い出そうとする男を、楽しそうに見やる。ほれほれ、と急かす彼だが男から見ればたまったもんじゃない。

「そ、そうだ！女の子だ！ソイツの後ろに女の子……ほ、本当だ！現にお前もあんな小さな子「パアン！」……」

「ヒッ！」

「いかんあと二人になってしまった」

彼は突然有無も言わず発砲した。残った男達は短く悲鳴を上げる。ここで大きな声を出さないようにするのも、全ては彼の機嫌を削らないようにするためだ。残った男達は、二人とも目の前の存在が、今世界で知らぬものがないほどの英雄だという現実を否定せずにはいられなかった。目の前の地獄絵図もしかり、先程起こった突然の発砲もしかり、みんなを助けるイメージの”英雄”とはまったくかけ離れた存在なのだ。これでは英雄ではなく”化け物”と言ったほうが正しいかもしれない。そんな疑問を覚えた男二人の心情を察したのか、彼は男に言葉をかけた。

「あー、すまんすまん。おまえ達は”なるべく”殺さん。今の時期なあ、不景気のせいとか殲滅しても、殲滅した証拠が無いと殲滅したことになるんだよ。こうやって組織の一員を残した方が楽だ。ドラゴンの群とかならこういうことも無いのだが。おっと、一人でも構わんが…、せっかく弟子が捕まえてきた奴だ。せいぜい残してやろう、大サービスだぞ？」

「なッ……！」

完全に見下してる彼に唾然とするしか無かった。人間の心が無いの

かこのゲスが、叫びたくなるぐらい吹っ飛んでやがる、と男は思わずにいられない。彼がそれを聞いたなら犯罪者が何を言っても無駄無駄無駄ア、と言っているのだろうか…。

「(仮面の魔導師に、女の子、どういう組み合わせだ…まったく理解出来ん)」

「兵隊が来たよ？」

「うむ、仕事終わりつと。所詮末端以下だったな、あーメンド」

「師匠褒めて、具体的に撫で撫で…」

「五月蠅い」

いつぞやと同じように頭をムンズと掴んで、そのまま放り投げた。遅れてやってきた帝国の兵士達は、地獄絵図と化したこの光景に息を飲んだ。まるで狼の群が徹底的に攻撃したかのような、全てが無慈悲という惨状。”生き残った”男二人は全てに絶望し恐怖したかのように、恐怖を能面にして顔に貼り付けたままだった。今回、二人が潰した組織は確かに犯罪組織の末端だった。しかし明確に犯罪を表に出したということが無いため、堂々と罰することは出来なかったのだ。そこで白羽の矢が刺さったのが彼である。重鎮達は確かに頭を抱えた。確実に、明確に危険な犯罪をしているのだが証拠が無いため裁けない。そこで英雄という立場を利用して無理矢理処罰させたのだ。そして後日には重鎮達の頭を抱えなくなるような予想通りに英雄である彼が批判されることもなかった。むしろ…

「師匠あんまり殺しちゃダメだよ」

「ほー、弟子の分際で俺に意見する気かマナ・アルカナ」

「テオが悲しむよ?」

「なん……だと……ッ!？」

T o b e c o n t i n u e d

第四十八射 始まりの唄

カゲタロウという魔法使いがいた。その外見は一度見てしまえば忘れることが出来ないほどのインパクトを与え、衝撃そのもの。頭の正常性を疑うほどの奇妙さなのだが、今はそこじゃない。世界各国、各地からの拳闘大会の歴戦の戦士達を軽々と影魔法”だけ”で払いのけた。それは数分どころか数秒、数撃、というかほとんど一撃で相手を沈黙させ続けた異端者であった。魔法世界の”最強”達から見れば拳闘大会などスポーツの域を出ることは出来ないし、その上出場するものも軽々倒すことが出来る。むしろ相手から棄権される勢いである。だが、それでも拳闘大会において最高の拳闘士達だったのだ。彼の強さを再認識する出来事だっただろう。

カゲタロウの正体は『帝国の狙撃主』ダブル・シックス

この話は一時間も立たずにオスティアの街に広がった。無理もないだろう、もう既に表に出ることがホトンド無くなった”彼ら”なのだから、ジャック・ラカンと彼が同時に存在するなど極めてレアな出来事だ。特に彼には驚かれる。というのも彼は、冷酷・残虐・第三皇女第一主義・前が見えない等と言われる存在だ。特に意味も無く、彼女に関わることもないのに拳闘大会などに参加するわけがなかったのだ。その上彼は正体を隠していた、そうカゲタロウとしてその彼が正体を現したのが決勝戦、しかもその相手があのだギ・スプリングフィールドの名、姿を持っている青年だったのだ。彼も例外無く参加大戦時において『紅き翼』のだギ・スプリングフィールドは有名だ。その名、姿が同じとなると……。さすがに彼でも、かつて背中を任せた英雄を騙ることは赦さないということだろうか、そういう噂や推測が流れるのだが、真実はわからないままである。

「どつじやった？ネギは？」

「齡10にしてアレだと、まあまあマシだな。だが戦争に年齢は関係ない」

「クフフ、お主が”マシ”と言うか、さぞや強いのかな。……マシになつてもらわんと困るがの」

「なんだその笑みは」

皇族が居座つても問題が無いと言えるほどの豪勢な部屋にて二人が語り合っていた。窓から見える新オスティアの街、そびえたる建物、行き交う人々、空の荷物を運ぶ翼付きトカゲ。今頃、拳闘大会に ついての話で盛り上がっているころだろう。彼女は窓からそんな様子の光景を眺めな、彼は彼女にうかかれながら口を開いた。

「土のアーウエルンクスはあの莫迦餓鬼に固執してるからな。……喧嘩を売るのは一流だなあの莫迦は」

「親子二代に渡つて戦う、か……、これも運命なんじゃろうか」

「Fate（運命）ね…、一番嫌いな言葉だ」

彼女が顔を上げた彼の顔を見た。彼は依然として空を見つめるばかり。その赤い眼には何故か、どこまでも広がる青空が広がっていたという。彼の言葉に、彼女は全てを魅了するような笑みを浮かべて、こう返した。

「妾は好きじゃぞ？お主との出会いも運命じゃ！」

「……そうか、ならば……ああ、案外悪くない」

彼は着ているローブごと、彼女を包み込むように腕をまわして抱き寄せた。すると、今まで彼女は己の足で立ってはいしたが、彼になされるがままに力を抜きローブの中に身を寄せるようにした。ちなみに、空気をブレイクするようで悪いが、いや、ここは逆に空気を読んでいと言うべきか、護衛の兵士、侍女達は部屋の外で誰も近寄れないようにしていたという、すごい顔で。まさに上は洪水、下は大火事である。なんてこったい！

「む、そういえば……ネギの仲間の、奴隷になった子はどうなったんじゃろつか」

「今頃ラカンが借金して解放しに行ってるんじゃねーの。あいつは……クツ、存外甘い男だな」

乾いた笑いを響かせながら彼は呟いた。かつての戦友の姿を思い出しているのだろう。戦場では最強の名に相応しい戦闘を見せたラカンでも、今でこそ平和な世ではなんの役にも立たない。そんなラカンが、かつて自分が奴隷として戦った拳闘大会の出資者となり、そして今ネギ・スプリングフィールドに対しての修行と試練を、そう考えると大層変わるものだ。

「ま、そういう英雄も悪くない、じゃろ？」

「……俺に聞くな」

「んー」

彼のバツの悪そうな顔に満足したのか、彼の胸のあたりでスリスリ

してくる彼女だった。無論、これは語るまでもないが、若干彼が死にそうになっていたのは……余談である！まったくの余談だったのだ。懐かしき脳内の彼らが一気に勢いを取り戻した日である。花びらを浴びながら一気に凱旋したり、星空満点、そのまま降ってきそうで洒落にならない夜空のホールで舞踏会が行われたり、大人の口マンスが公開されたりするのも、全部彼の脳内の話である。全部同時進行なのも加えておこう。

「……我が騎士シックスよ」

「……」

そんな平和の一時は終わった。彼女もまた大戦を彼と乗り越えた存在である。目に明日を映す光を灯っているのを彼は感じ取った。彼から数歩離れ、彼と向かい合う。彼もまた、重要性を理解したのかローブをバサリと揺らし、フードを脱ぐ。数分か、数秒か、もしかしたら1秒もたっていないかもしれない。そんな沈黙の後、彼女は彼に”命令”を下した。

「今夜総督府にて舞踏会がおこなわれる。ここに、お主と妾の招待状がある」

淡々と、普段からの彼女からは想像が出来ないほどの低く、冷たい声が部屋に響く。それでも彼は黙って聞いていた。

「……全部”守ってみせる。お前がお前である限り”」

「仰せのままに、我が担い手よ」
マスター

彼は手を胸に当て、片膝をついた。その光景はいつかの……全てが

始まったオリンポス山の黄金の誓いと同じものだった。英雄と王女、古今東西この二人組が似合うものは他には存在しないだろう。救うのは英雄の役目、王女担うは囚われたお姫様。一秒、二秒、三秒、数度の時計が時を刻む。彼はフツと立ち上がり扉の向こうへと消え去っていった。

その時刻が来るのは速かった。そこには電氣的な灯りなど有るわけもなく、魔の力を燃やし、どことなく懐かしい雰囲気を出す淡く光るもののみ。夜空に浮かぶ星々が更にそこに灯りを加え、神秘の名の下に色を付け加えていた。

「I'm a thinker. I could break it
t down.」

メガロメセンブリア信託統治領新オスティア総督府。今宵において全てが決まるであろう舞台。花火が無限と思われるほどに打ち上げられ、その光は全てを魅了して止まない。されど、彼はその花火に背を向けるようにして、壁に寄りかかったまま想いを紡いでいた。彼がいるのは舞踏場などと言えるような場所ではなく、どこかの高台の屋根の上。彼の眼下には、舞踏会に招待されたのであるう世界各国の名を持つ者が正装して階段をのぼっていた。

「I'm a shooter. A drastic baby.」

彼の背中を支える石柱、その上には魔法世界で最も有名な像が乗っ

ていた。従者と魔法使い、今の契約システムを生み出した二人を称える像である。どこにもである像故、若干軽視されているが彼らが世界に貢献したものは計り知れないだろう。魔法使いの女を守るかのように剣を携える従者の男。花火の光を反射し、闇夜の空に浮かびあがりそして消えていく。

「何も知らない、儂い木偶人形達。一体どこに行くんだらうね」

「知るか、というかお前誰だ」

彼の正面に、空からコツリと靴の音を鳴らして降り立った青年が口を開く。どこかで見たことあるような白髪に正装を表すスーツ。若干着慣れていない感が隠し切れない様子だが、そんなことはどうでもよかった。彼の見知らぬ存ぜぬ態度に若干イラッと来たのか、眉を一回ヒクリを動かす。

「……フェイト、フェイト・アーウェルンクスだよ。狙撃手」

「ほー、成長期か。面白いなお前」

ククク、と明らかに莫迦にしているように声を抑えて笑う彼だが、相対するフェイトは相変わらず顔を变えることは無かった。無表情同士の対面である。ガチャリと金属音を鳴らしながら彼は立ち上がった。これから起きるであろう出来事を、二人を歓迎するかのようには花火はまだ打ち上げられていた…。

「人の自我など錯覚による幻想に過ぎないというのに……まあ言っただとところで慰めにもならないね」

「……幻想ね、最高にいい言葉だ。死ねばいいのに」

「ただ僕もたいした違いはないけど。狙撃手、君はどう」想うんだい？」

「何も」思わない」さ、…ラカンはどうだ？」

クイツと首で、彼と同じようにフェイトと立ちあはだかるようにやってきた褐色肌の大男に聞いた。やってきた直前に、突然聞かれたラカンは一瞬静止するが、ニヤリと笑うとフェイトのほうを向いて言い切った。突然現れたラカんだがしつかりと話を聞いているという、…怖い。

「クツクツク、頭のいい馬鹿の言ってることはワケわかんねえな」

「これは分が悪いね、英雄二人相手だとは…少々”骨が折れる”よ」

フェイトの「勝てる」という言葉に彼は口を押さえながら笑った。どこまでも莫迦にし、馬鹿にされる彼だからこそ、と言えるだろう。対してラカンは少し彼と違った。フェイトの言葉に対して特に何も反応を返さなかった。それはそうだろう……

敵を倒せずして何が最強か

ある意味ラカンと彼の行動は”同じ”だったのかもしれない。二人は最強であり、相対している一人もまた最強であった。倒すことが出来ないからこそ、あらゆる敵を倒したからこそ、全ての壁を粉碎し打ち抜き、そして超えてきた彼らだからこそ最強、そして二人は英雄となった。腹を押さえてヒイヒイ言っている彼は、次第に呼吸を整えていく。指をパタパタ動かしたかと思うと、ラカンに指を差

してフェイトに言った。

「安心しろ、戦うの俺だけだ。その達磨は背景の一部だ」

「あつ！？おいコラなめてんのか、その無表情二人組」

ラカンの言葉にフェイトと彼は何故か顔を見合わず。ジロジロ互いを眼球だけ動かして観察、同じタイミングで同じ場所を見合っていたように見える。そして再び二人の視線が交差、かと思うと”同じ” タイミングでラカンの方を向いてほぼ”同時”に口を開いて…

「一緒にするな」

「一緒にしないで欲しいね」

そう言った。案外仲いいんじゃないの？のこイツ等、と数秒の間でも思ってしまったラカンであった。同調した彼らだが、相変わらず無表情。しかし、背景が歪むほどの威圧、珍しくシックスが”威嚇”しているという。そこまで怒るか、とラカンは内心で笑いながら先程の言葉を撤回する。恐らく同族嫌悪、一番世の中で嫌い合っている二人だろう、そう思ったラカンだった。

「二人とも、世の中のことなどどーでもいいという感じだから意外だな。まあ狙撃手のほうはなんとなく想像出来るけど」

「ダチの娘に説教されてよ、自分の尻の拭き残しは自分で拭けつてな！！」

「なにそれ汚い」

「そういう意味じゃねーよ腰抜け！」

ラカンが怒り立ち拳を振り上げる。対して彼は冷静に体を反らせながら両手の手のひらをラカンのほうに見せ付け……完全に「近寄るな」という無言の言葉を送る。ギャーギャーと五月蠅く一方的にラカンが怒鳴った後、ラカンは悪役の鏡たるように待っているフェイトに気付いて怒りをなんとか収める。こんなことをしている場合じやねー、と思うが二人の無表情スキルを見て収めた怒りが再びニョキニョキ……

「へッ、てめえ土のアーウェルンクスだったか？20年前に一人、そして10年前にも二人目をナギが。てめえーは三番目ってわけか」

「頭を撃ち抜いたはずだが、一番しぶといなお前」

「さすがにアレはひどかったよ。それとそんな無粋な名前では呼ばないで欲しいね、ジャック・ラカン」

軽口を叩いている三人だったが、常人がいれば既に発狂しているだろう。呼吸を忘れるほどの重圧、具体化された死と具現化された殺意、最強三人組のそれぞれの背後にはムキムキの手足が直接生えたジャパニーズ達磨、まさしく仏頂面の千手観音、黄金に光るツタンカーメンの柩、世にも仰天な光景だろう。お？お？お？とガンタレまくるラカンに、リボルバーをぐるぐる回しながらカハアと黒い障気を垂れ流すシックス、そして背後から無数の石柱を呼び出すフェイト。まさしく一触即発だろう。そんな中、ラカンが口を開きガンタレる以外の言葉を出した。

「おめーな、ぶっちゃけ暗い、めっちゃ暗い、なんつーか？暗い」

「ついでに言うトドブの底みたいな粘着質だ莫迦タレが」

「だが逆に人間味を感じるぜ？前の二人には無かったが…、どうした？世界に絶望でもしたか？」

「現実に溺死したか、シ バニアファミリー（人形）風情が」

おう言つたれ言つたれ！的な空気を携え徒党を組んだ二人だった。だが、フェイトは彼らの言葉に対してため息を一回、やれやれ、と呟きながら背後に存在した石柱を消した。それに続くように彼も威圧の収める。二人に遅れるように冷静さを取り戻したラカンだった。少し恥ずかしそうだ。そんな二人を見ながらフェイトは彼に言葉を向けた。

「シックス、君にはわかるはずだ。」同じ”作られた存在として、意志をつなく役目の大切さが、”親”の命令がいかに大切であるかが…」

「ああ、そうだな……ああ理解出来るとも全部、な」

彼が口を開き動いた。手を広げ天を仰ぐように、そしてフェイトの言葉を肯定する。目的の遂行のために作られた存在、まさしく二人は同じ存在だったのだ。だからこそ、故に、彼は邪悪な笑みを浮かべた。無表情の顔が崩れた、ニンマリ、ニタア、クスクス、ヒヒヒと寒気を覚えるほどの幻覚を魅（見）せるほどの薄気味悪い笑みだった。真つ黒なフードの奥から覗く、真つ赤な三日月の口と真つ赤なまん丸お目々が二つ。まるで闇夜にそこだけが光っているようなただおぞましいという感情をもたらすほどの気色悪さ。全ての物から忌み嫌われるであるほどのナニか。ただの存在から”悪”と呼ばれるに相応しいおぞましさ。

「……どうだい？君が、君が”望め”ば君の愛するテオドラ姫と共に永遠に過ごすことが出来るよ」

「おいてめえ！シックス何考え……ッ！？」

耐えきれなくなったのかラカンが口を開いた。だが、彼がラカンを制するように手を置いたのだ。もうすでに彼は無表情に戻っていた。また同じようにゾクリ、とラカンすら背筋が凍るような（無）表情だった。まるで、飽きたうえに壊れている玩具を見るかのような……、明日の市場にはトンカツ用の豚肉として売買される豚を見るような……。 「可哀想だけど、ぶっちゃけ美味しいのよね」と言いたげである。

「君も僕たちの「黙れ」……」

その瞬間だった。空気が止まった、音も止まった。もしかしたら時間すら止まったのではないかと錯覚するほどの何かが空間を包んだ。もう三人には打ち上げられ散っていく花火の音は耳に入らないだろう。決してこれは威圧による重圧ではない、決してこれは威嚇による殺気ではない、強いていうなれば”存在感”かもしれない。圧倒的なカリスマを持つ王のもとに家臣が集まるように、”主人公”を中心として物語が進むように、ただ自然のものである。広大で偉大な瀑布を見たとき、圧倒的深度をほこる森林に迷ったとき、全てを抱擁する蒼き大洋に包まれたとき、ただ純粹なる恐怖と畏敬とそしてただの敬意を。目の前の生物はソレに準ずるものだとフェイトは既視感を覚えた。いつだったか、それを感じたのは、と過去を振り返りソレを見つげ出す。

「進化の末、か」

いつだったか、そうだ、あの日だった

運命が造物主を見たときそれを感じた。圧倒的何か、進化する生き物として上の存在。絶対上位種、自然、世界そのものに対する謎の感情こそソレだと。

「負と正の螺旋の先の雫、それこそ我が我である所以也。故に我は底と頂きに存在、す」

いつまでだったか、そうだ、あの日までだった

億を超える天賦の才を持つ個体、それを超越するための億を超える群體。かくして、群體は螺旋を描き一本となった。その先からこぼれる一点の雫。進化からはみ出た人工物、人工物でありながら進化の頂点に。それになったのはいつだっただろうか…、段々を薄れ削られていく記憶、記憶の片隅に存在した　　という名。コンクリートの道路を歩いたのは何年前か、友人と肩を並べて学舎に通ったのは何年前か、毎日が退屈でありながら最高とも言えた日はいつまでだったか…、毎日毎日鬱陶しく思うものの何よりも大切な親を忘れたのはいつの日だったか…

「ラカン、退け」

彼はそう言いながらラカンの肩に手を置いた。ラカンは驚く、いままで見たこともないような彼の表情がそこにあっただからだ。

「はあ？おい……てめえ何考え…ッ！？強制転」

ラカンの言葉は全て言い終わることなく途切れた。彼はラカンの肩

に手をおいた瞬間、術式は発動、ラカンを”見知らぬ”ドロかへと送り出した。

「さて、始めようかアーウェルンクス」

「……」

ここで朽ち果てる泥人形、進化の現実つてやつを教えてやる

頂きなんて烏澁がましい、君には水底が似合いだよ

T o b e c o n t i n u e d

第四十八射 始まりの唄（後書き）

突然ですが正直言いますと、最終章始まりって感じですが、ええ。原作的にも進む余地がッ

フラグ立ち砲台、なんつって

第四十九射 オスティアの女王

20年前

「くそッ！？なんで飛ばねえんだ！？」

幕にまたがった男がそう叫ぶ。そこは旧オスティア、そして都の最後の光景だった。崩れゆく建物、空から降り、そして落ちていく大地。数多くの歴史を紡ぎ太古より長く生きた国がまた一つ滅びようとしていた。逃げまどう人々、されど魔力が謎の衰退を起こし魔法が発動出来ないという現象により、今必死に足を動かしていた。しかし今まで魔力、魔法の恩恵を授かってきた人々だ、突然当たり前にあつたものが消え去ったという点も含め混乱が混乱を呼ぶ。あるものは不可解な現象に言葉を濁し、またある者は鍛えておけば…と今更な感じだという。

「皆様こちらへ！お守りいたします！！」

逃げまどう人々の前に黒い甲冑を着込み巨大な剣を持った騎士が現れそう言った。突然の武装集団に人々は疑問に思い、それを口にする。騎士が相対し答えて言うには

「我々はメガロメセンブリア重装兵団のものです！逃げ遅れた子供や老人、病人に心当たりは！？一人残らず助けよとの厳命です！」

騎士の言うとおりに動き出した人々だった。これはある意味魔法世界だからこそその光景かもしれない。誰一人とも我が身を第一とし我

先にと逃げるものはいなかった。だが…、突然のオスティアの街が、大地が崩壊し、挙げ句の果てには魔法の不発動。まるで戦争でも起きていたのか、そういう疑問を持つのは当たり前のことだろう。

「ハツ……確かに戦争は終わりました…し、しかし…」

騎士の一人がそれに答える。しかし、次に言うであろうその言葉を、言い出し難いのか息を飲み、震える拳を握り締めていた。非常にもうしにくいのですが、と一置きし騎士はようやく答えた。

「この都は……オスティアはまもなく滅びます」

空から無数に降ってくる岩石、魔法を使えぬ人々にとってそれは隕石の雨に等しいものだった。民もすでに理解はしている、重武装をしている騎士といえど道案内程度しか出来ぬ、と。しかし従わぬ理由など何も無い。ただ、今は速く逃げよう、生き残ろう、と疲れ切った足を無理矢理動かしていくのだった……。だが、それでも岩石は降ってくる。騎士の持つ盾では到底受けきれぬ大きさの岩石。それでも騎士は民を守ろうと前が出る。……そんな時だった。

ドオオオン！！！！

空から落ちてくるはずの岩石が突然崩壊、見るも無惨、というか限りなく岩石は粉碎され吹き飛んでいったのだ。突然の爆発とも言える現象に人々は足をつい止めてしまった。

ドオオオオン!!!

再び爆発でもしたかのような音、目がいいものはそれが遠くで起きたと理解した。空から落ちてくる岩石が爆破でもされたのだろうか。粉碎された細々な岩石では騎士の盾を超えることなど出来るはずもなく、突然の崩壊に感謝しながら首を傾げた。とある一人がその原因を見つけ出す、一つの高台へと向けて指を差した。

「お、おい……あそこに人が……」

「……誰、だ？あれ……」

白いローブを着込んでいるのかサツパリわからない。ただ人だということしからわからなかった。一つ気付くのはローブが、まるで金属にでも光を当てたかのように反射しているという点、どこかで見ることがあるような、だがやはりよく見えない。ローブの男は真っ黒な長い棒のような物を持っていた。長い棒を構え、そして空への岩石へと向け、そして……

ダアアアアン!!!

閃光が一本のびた、かと思うと既にその岩石は崩壊していた。空中

で圧倒的な力をぶつけられたのか、岩石は落下地点を大きく変え大地へと落ちていく。助けが来た、誰もがそう思うだろう。次々と放たれる閃光、そして崩れ吹き飛んでいく岩石群。被害は限りなく小さかった、そう本当に。疑問に思うことは、それが誰かということなのだが、もうここまで来ればどんな人々でもわかった。

「ハードスケジュールだな、まったく……莫迦が」

岩石を狙撃していた。あらゆる方向を、右よ左よ、後ろよ前よ、上よ下よ、全てが見えているのではないかというほどの”攻撃範囲”、そして狙撃というスタイルでありながら一つの岩石が爆散したかと思うと既にもう一つの岩石が爆散しているという異常な速度。古今東西こんな芸当をするものはただ一人しかいない。

「そ、狙撃手だ！」

「助けに来てくれたのか!？」

「俺たちは助かるぞ!!」

希望が蘇った。敗北を知らぬ大英雄であり、『紅き翼』と限りなく同等、あるいはソレ以上の存在、そして大戦の裏を突き止め世界を平和にした者の一人、ダブル・シックスであった。淡々と無数の岩石を攻撃し、無害に変えていくその様子は何よりも尊いものに見えるという。狙撃していく彼の視界の隅っこ映るのは次々と飛んでくる無数の戦艦、一見戦争でも始めたのかと思えるぐらいだが、帝国

連合関係なく入り交じっている様子から見ると違つとわかる。空中に浮かぶオスティアの大地を囲むように戦艦が停止、そして逃げてきた人々を乗せ飛んでいく。ただそれを繰り返す光景だった。

「シックス！」

「あゝ？」

そんな時、彼に声をかけたものがいた。あたりにはもう既に人々はいない。彼は内心「さすがメガロメセンブリア、逃げることににおいては一級品だ」と侮辱以外の意味を持たないことを考えていたころだった。事実無根だが”今後”のことを考えるとそう思わずにはいられないのだろう。彼を呼んだ声の主は女、長い金髪に珍しいオツドアイ。あと胸が大きい、ここが一番重要だと思う。

「アリカ姫か、なかなかの庶民派だな」

「巫山戯たことを申すな！！」

アリカ・アナルキア・エンテオフュシア、それが彼女の名前だった。何を隠そう今滅び行く都をもつ国の女王……否、女王である。オスティアの王族という出身のだがそれは極めて特異なことだった。魔法がつかえないのに、オスティアの中心で狙撃をしている彼の元に誰が好きこのんで行くだろうか。しかし彼女は女王として、民を守るために来たのだ。逃げ遅れた人々がいるかもしれない、その言葉だけで彼女の動く理由になりえたのだ。

「な、何故逃げぬ!？」

「逃げる必要が無い、そもそも逃げるといふ手なぞ持っていない」

「な!？お主が死ねばテオド「死なん、それが命令だ」お主は…」

オステイアの王族に備わる”王族の魔力”というものがある。魔法世界、新世界と色々呼び名があるものの、その世界において最古とも言える国家である。最古だからと言って大国というわけではなく、帝国、メガロメセンブリアからみれば小国も小国、伝統が売りにしかならない弱小国家だった。だが、表向き最初の帝国の”オステイア回復作戦”からわかるとおり、そこには大国が押し寄せる明確な目標が存在した。”その中の一つ”が王族の血、王族の魔力、そして王族が保有する超特殊能力だったのだ。

「妾はここでも魔法が使える!お主はどうやって…!？」

魔力が衰退した地域でも彼女は魔法が使うことが出来たのだ。何故ならば、今の現象はそれこそオステイア王族の能力によるものだったからだ。アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシア、それが犯人の名前である。恐らくこの事実上最も能力が強く、それこそ世界を変えるほどのレベルの”魔力完全無効化能力”を保有しているだろう。あらゆる害意のある魔法、術、神秘を無効化する魔法世界の天敵、『完全なる世界』の願いを成就させる存在。この魔力衰退現象は彼女の能力を利用したものだ。何故、王族が

その能力を保有しているのか、それは定かではないが……定説がある。世界最古の王家、初代オスティア王女は創造神の娘であり、彼女の血には神代の魔法が宿ると言われているのだ。ちなみに、彼女こそ契約システムを生み出した魔法使いであり、彼女と騎士の像はどこにでもあるほど有名である。魔力完全無効化能力といえど、同じ恩恵を授かっている王族の魔力を封じることが出来なかったのだ。

「魔力が外に出せないなら中に出せばいい、ってな。魔法生命体ってまじ便利、死にかけただけ」

彼はそう言い、腹から弾丸を取り出した。あまりの歪な光景にアリカ姫は息を飲んだ。腹から金属を取り出すという異常性も然り、それを当たり前のようにやることも然り、そして何より彼がオスティアの者のためにそこまでするか、ということに疑問を払うことが出来なかった。アリカ姫はそのことについて聞くが、彼は顔を嫌に歪ませながら答えたという。

「……ふむ、意味は無い。ただの命令だからな、テオの人類愛やかしなに感謝するがーよい、フハハハ」

「……」

どこか現実逃避を思わせる笑い声を出しながら適当に返す彼だが、腕の動き、狙撃が止まることは無い、止めるはずがなかった。細長く巨大な狙撃銃をもってオスティアに隕石を落ちることはなかった。全てを粉碎し、崩壊させ被害をゼロにする。一言で言える現状だが、

それを実行するなどほぼ”不可能”だろう。もつとも、彼らは”不可能”を”可能”にしたからこそ英雄の一角よして存在しているのだ。たかだか不可能如きで止まるはずがなかった。

「そら、速くゆけ。ここで止まる気か？」

「クツ！？お主も速く逃げるのじゃぞ！！」

「…………話聞け莫迦女が」

走り出したアリカ姫、背後から無礼にもほどがある単語が聞こえたような気がするが、気にする時間はなかった。彼女の走る後ろ姿を見て、彼は薄く笑い空を見上げ、空を掴まんと手を伸ばした。伸ばしても伸ばしても届くことなく無く、無論掴むことすら出来ない。その行為にはなんの意味も無かったのかもしれない。だが、何かあったのかもしれない。

「空よ聞け、大地が負けるはずがない」

空から落ちてくる隕石のごとき岩石、大地を落とそうと天からの災厄。その日の彼はとてつもなく上機嫌だったという、ただそれを確認できるものは誰一人とも居ないのだが。ガチャン、ギギギ、ガガガ、金属と金属の音を鳴らして…英雄はここに一人、降臨した。

「空よ退け、ここは一つたりとも通さん」

クハハハ、と愉快そうな笑い声が響いた。歴史は繰り返された、滅び行く国など過去にはいくつもあった。ましてや都が滅ぶなど数えることすら出来ない。しかし、人々は笑った。大地に足を伸ばし、不幸を喰らい幸福を育て根を築き花を育て歴史を紡いできた。歴史は繰り返された、何度も何度も、何度も何度も人々は立った。ならば問題などあるはずがなかるうて。国は滅びぬ、国とはなんぞ？昔の王が民に聞いた、民は答える。王こそが国、だと。王は否定した。

民こそ国なのだ

そう言った。人が負けぬ限り国は負けない。思いが折れぬ限り、都は何度でも蘇る。大地の怒り、天の裁き、神の気まぐれ、嵐の息吹き、”たかだか”その程度で人間が負けているならば、もう既に人は存在などしてはいない。

「ゆけ、オスティアの女王よ。貴様が負けぬ限り民は負けん。何度でも何度でも、森を切り払い畑を耕し蹂躪する魔物を打ち払い、…そして都（国）は蘇る」

彼の言葉は無論誰にも伝わることは無い。未だに落ちてくる岩石群を払いのけ、彼は再び笑い、頭をかきながら誰にか言うわけでもなく言葉を出した。

「柄にも無いことを…、成就して見せろ、お前の答えを」

そして彼女が気付いたか、気付かなかつたは定かではないが彼女の

走る先、そして頭上には岩石どころか石一粒落ちてくることはなかったという…。

そして二ヶ月後、彼女は牢獄につながれた。2年後の処刑を控えて…

「腹痛エ…後で弾丸費請求しとこ」

その日がついに来てしまった。重、などと一言では言い表すことの出来ないほどの重い罪を背負った犯罪者がまた一人、処刑されようとしていた。魔獣うごめくケルベラス溪谷と言われる地域、魔法、気の類を一切使えぬ死の谷として古くから怖れられ、そして古来より残虐な処刑場として有名な場所である。魔法、気を一切使えないためそこは恐らく英雄であろうとも生きて返ることは出来ないだろう。

「歩け！」

「触れるな下郎、言われずとも自分の足で歩く」

溪谷にかけられた先の無い橋の上を女が歩いていた。彼女こそアリ

カ・アナルキア・エンテオフユシアである。あの日、オスティアの都が落ちた日より二年たったその日こそ彼女の処刑日だった。まだ”彼ら”はやってこなかったのだ。彼女はとうに痩せこけ、かつての黄金に輝く金髪も色あせ、見る影もない。しかし、未だに折れぬ心はより強く、そして何よりも美しく見えた。

「…………ナギ、主らと過ごした戦いの日々だけが何故か暖かだった……」
橋の下から聞こえてくる魔獣の雄叫び。魔獣が今こそ我こそと食料を得ようと蠢きだしたのだ。牙をガチガチならせ、口から漏れる唾液、新世界のおいてもっとも相手にしたくない魔物共だろつ。

「亡き父王は言った。人の生も、この世界も、全ては儂い泡沫の夢に過ぎぬと…………ならば、これも」

きつと夢、そう呟き彼女は足を踏み出した。頭からまっすぐ落ちていく彼女に、今こそ食らいつこうとする魔物。そしてそれを妨害し、自分が得ようと周りの魔物を駆逐し始める魔物。全ても全て、ただ肉を喰らうため。処刑をただ見ていた元老員の者や、彼女が犯罪者としてか思っていない兵士達がざわつく。彼らが見ている溪谷の暗き穴からただ聞こえてくる魔物の叫び声と悲鳴と歓喜の声。…………ここ
で彼らが引き上げようとし始めたその時だった。

「よーし、お前等撮影終わったな？ん？ウシツ、終わったか！」

……古今東西、英雄と王女は似合うものである。古今東西、英雄はヒロイン王女を助けるとき、遅れてやってくるものである。古今東西、彼らに敗北は無い。あつていいはずがないだろう。

「なんだ貴様は！？無れゲフェツ！？」

「うっせーなおっさん。今からここで起きたことは全て”なかったこと”になる、いーな！」

「き、貴様は……」

突然無礼な動きを شدした一介の兵士がいた。元老員の頭をバシンバシン叩きながら、軽口を叩く。元老員が兜の穴から兵士の顔を見て、それが誰かわかってしまったようだった。兵士はフンツ、といながら全身に力をいれ鎧を吹き飛ばす。まずそこからおかしいが彼らなのでむしろ控えめだ。

「千の刃のジャック・ラカン！？」

「ぬっふう〜ん」

「青山……詠春！？アルビレオ・イマにガトウ！？『アラルツラ紅き翼』が何故ここに……女王は！？」

次々と兵士の波から現れた彼らに兵士は騒ぎ出した。元老員は疑問で頭を覆い尽くすが、一番知ってはいけないことに気付いた。ナギ・スプリングフィールドがいけないということに。ならば、彼らがどう動くなど一つしかなかったのだ。だが、兵士に命令を送ろうとも、背後から聞こえてきた褐色筋肉達磨の叫び声でソレどころじゃなか

った。

「んー！ラカーン！インパクトアー！！！」

「な、ナギ…なぜお主が地獄に…ふえ？」

彼女がわけのわからない、と言わんばかりな顔をしていた。彼女を
いわゆる”お姫様抱っこ”をしている赤髪でそれなりにイケメン（
滅びよ）な青年、ナギ・スプリングフィールドだった。死ぬ、そう
覚悟した瞬間彼女は謎の浮遊感を覚えた。もう死んだか、そう思い
目を開いたかと思えば、赤髪の青年が目に入った。

「バーカ、お前を助けに来たんだよ、アリカ」

「え？何故じゃ…？え？」

未だに要領の掴めない彼女にナギの頭突きが襲い掛かった。思えば
彼女にすれば勘違いのままであつて欲しかっただろう。そこはケル
ベラス渓谷、英雄でも死ぬ地獄の谷底なのだから。最強の”魔法使
い”ならばなおさらであろう。魔力が使えぬならただの人間、魔獣
に勝てる見込みなど砂漠で高飛びをしているヨボヨボな老人がいる
可能性よりも無い。

「魔力も気もない程度で俺は死ぬかよ、俺は英雄だ！」

「ば、馬鹿者……、ッ!? ナギあそこに人が!？」

「へッ、いくぜアリカ!！」

彼女と視線の先には光が見えていた、そこを飛び出せば溪谷の力の通じぬ出口がある。背後から溪谷の魔獣共が蠢き襲い掛かろうと追いかけている。そんな時だったのだ、逆光で姿がまったく見えないが人らしき存在が”ポツン”と立っていた。奇妙すぎる、怪しすぎる、考えることの出来るものは数多も想像出来るが、彼女がそれを感じるにはいささか時間が足りなかった。ナギは真つ黒なナニカの横をそのまま通り過ぎ、ただ不敵に笑っていた。アリカの思考が間に合う前に、彼女の耳に、不自然なほど冷淡で普通で、どっちかというトラスボスが言いそうな言葉が届いた。

「 喜べ女王。お前の願いは、ようやく叶う」

「 なッ!？」

そのままナギは溪谷を飛びだし、溪谷の封印する力から逃れ、杖を搦んだ。全ては終わった。英雄と王女の物語にバッドエンドなどありはしない。英雄は救い、王女は救われその身を英雄に。全ての原点はここにこそ英雄の物語。

「 ナギッ!? やつは、やつはシツクスじゃ!? 助けに……」

彼女の言葉にナギは答えず、浮遊したまま溪谷の穴を見ていた。よ

く考えれば超近距離で抱きついているナギとアリカという構図にな
っていることに気付いたアリカだったが、ナギの無言につられたの
か、ナギと同じように渓谷に目を向けた…。

ギ
……

大地が揺れる、大気を喰らう。

ガ
ギ
ギ
！

天を揺らし、空を割る。

ギ
ギ
ギギギ
！！！！！！

彼女の耳に届いた謎の声、声などではなく雄叫び、絶叫悲鳴歓喜と
絶望の声。地獄の蓋を開けてしまったのか、あらゆる悪夢を詰め込
んだような地獄の震え。アリカは頭を金槌で直接叩き付けるような
悪意（衝撃）に体を震わすことが出来なかった。

「は、ハハハ……あの野郎本気出さなかったな」

「な、ナギ？」

ドオオオオオン！！！！

アリの声に答えたのはナギではなく、爆炎だった。突如炎が連なる溪谷から吹き出たのだ。溪谷全てを薙ぎ払うつもりなのかと疑いたくなるほど猛烈で、そしてそれが可能だと言わしめるほどの熱風。谷底全てから吹き出る地獄の火炎の壁の向こう側。彼女はその時に全てを理解した。ナギの言動、そして何よりあそこには誰が居ただろうか……

オ

オ

オオ

ン

……

天まで届かんとする炎がゆらりと揺れた。その拍子にナニかが見えろ。黒い化け物、百人みれば百人答えるであろう『化け物』モンスターがそこにいた。1000メートルを超えんとするような体躯、炎に紛れて影しか確認できないが……本能的、生理的、物理的、精神的、存在的、威圧的、圧倒的、なによりも絶対的な存在がそこにいた。だが、一度ゆらりとその姿が見えたかと思うと……まるで陽炎の如くもう既にそこには炎だけしか無く、すぐにその炎も跡形無く消え去っていった。静寂、何事も無かったかのような静寂、風の音、虫の音など一欠片も存在しない虚空の空間が広がっていた。

「ハハ、よく生きてたなー俺」

「……………ば、化け物か」

後には、ただの幻覚、目の錯覚として捉えられるようになったケルベラス渓谷の化け物。何より渓谷は1000メートル級の化け物が過ごせる環境ではなく、何よりもそれが一瞬で消え去ったなど信じるはずがなかったのだ。ただ……………、一つだけ確実なことがある。その日、その時間、その事件以後、ケルベラス渓谷より魔獣は存在しなくなった、跡形も無く、影も無く、魂も無く血痕もなくただその現実一つのみが存在した……………。

「あ、あいつらのこと忘れてたな」

「手伝わなくて大丈夫……………夫そうじゃな」

炎が消え去ってようやく動き出したのか、彼ら二人の目の先には爆発やら、派手に気を飛ばす光景。重力魔法による巨大な球体魔法などが見えた。かなり暴れているらしいが、もうそこにいる兵士に戦う意志など一つも残っていないだろう。そもそも『紅き翼』個人個人が最強クラスの人間達なのだ、よってたかつて彼らに囲まれるなど想像すらしたくない。

T o b e c o n t i n u e d

「普通に生きたー？」

「あー、シンズ」

第四十九射 オスティアの女王（後書き）

フエイトvsシックスだと思ったか!?

目線的には原作上でクルトがネギ君達に映像を見せてる感じでしょうか。

シックスの言動が全て正確に映ってるわけじゃありませんが…

最後の台詞は間違いなく映像に入っていないでしょう。

第五十射 撃鉄の英雄（前書き）

知ってるかい？俺はキャラメイク系のゲームでは男1残り全部女なんだぜ？

第五十射 撃鉄の英雄

笑う、という表情には様々な意味がある。よくある笑うという行為は攻撃性を示すという話だが、案外それも間違いではないかもしれない。笑うという行為の際には、口元を大きくゆがめるものだ。それこそ、かつては鋭い牙として存在した犬歯が見えるほどに。ヒトでは既に糸を切る程度にしか使えない歯だが、生物本来として、威嚇、という行為におけるかつての攻撃性を示唆しているだろう。かつての鋭い牙を始めとし、巨大な体躯、刃を通さぬ剛毛、筋肉組織から部位の刺々しさはヒトに近づくほど退化している。これに至っては退化という言葉は間違いかもしれない。なぜならば、鋭い牙は敵を倒すためのもので、巨大な体躯は敵を威嚇し自分が強いということを示すもので、剛毛とは体を守る防衛機能であるからだ。つまるところ、ヒトには敵がない、防衛しなくてはならない敵が存在しない、威嚇する必要がないということなのだ。退化と進化、薄っぺらい壁一枚で遮られた同意語（矛盾）と言えるかもしれない。今、退化と進化という二律背反を極めた人工人外人智外の人間がそこにいた。

「勝つ負ける引き分けドロールーズウィン、どうでもいいと思わないかアーウェルンクス」

「それは肯定出来ないね、競い合うことは実にいいことだよ」

「底辺頂点同士が競い合って何になるのか、もうそこに道は無いというのに」

「道があるか、無いかは君が知る由じゃないだろう？」

「ああ、実に”どうでもいい”ものさ。結局な、俺が言いたいの……」

コキン、コキンと首の関節を鳴らしながら彼が言葉を一端切る。思ったよりいい音が出たのか、満足そうに頷き、そして彼は”笑み”を浮かべた。それは道化を笑うのではなく、歓喜があったわけでもなく、理不尽に衝突したときの無力に悲しむ笑いでもなかった。

「お前はここで終わる」

「……」

一呼吸置いて放った言葉はたったの一言。彼はただ普通に普遍で通常と変わりなく言っただけだ。感情の有無など考える必要すら無いだろう、全ては無駄であるために。戦闘に、殺し合いに、死合いに、これから片方が居なくなるというのにソレを語るのは実に無粋だ。相手が何人で、どういう奴で、こっちはこういう理由で、考えるだけで頭が痛くなる。

「フェイト様ー！！ここはひとまずお任せを！」

「こんな変態ゲス野郎を相手にするだけ時間の無駄です！！」

「最高のホメ言葉だな」

だからこそ、今こそ戦おうとしたときに乱入者がいたとしても特に彼は何も思わなかった。長いツインテールやら、角や猫耳が生えていたり、知る人ぞ知る彼と相對しているフェイト・アーウエルンクスの仮従者達である。その世界では複数の女の子の従者を得ることが流行なのか定かではないが……、彼から見れば掃除が楽になっただけである。ゴミから一ヶ所に集まってくれろという、実に素晴らしいことだ。

「ダメだよ、君たちでは荷が重すぎる」

「いくらコイツでも私たちが全員で「ダメだよ」うう……」

「餓鬼が一人や二人、数百人集まったところで死体が増えるだけだ、ハッハッハ」

従者達は自分達が戦うと言ったもののフェイトはそれを一蹴した。もし相手がラカンであったなら彼も許可を出さだろう。基本的にラカンは甘い男であるため、ワケアリ確実な彼女たちが死ぬ結果にはならないかもしれない。しかし現実の相手はダブル・シックスである。冷酷と変態が武装して歩くような存在なのは周知なのだ。道を遮る壁をヌルツと貫通するような性格である彼と対峙したのなら、最終的には彼が言った通りになるだけだ。だが、本当のことであるものの彼の物言いは明らかに上目線。少女達は怒りを隠せない。そこでこれ以上会話をさせないつもりなのか、フェイトが口を開いた。

「環、君のアーティファクトを貸してくれるかい？ここでは被害が

大きすぎるから……」

「は、はい……『来たれ、無限抱擁！』」

「君たちは遠くに、出来るだけ……ね。壁に隠れているんだよ」

少女達は恨めしそうにフェイトを見ながら立ち去っていった。従者の一人、頭に大きな角が生えた少女が持つ『無限抱擁』は空間そのものに作用するアーティファクトである。数十？の範囲を誇り、少女が解除しない限り理論上脱出不可能の無限閉鎖空間、言うなれば「暴れても問題無し」である。余談だが従者たった一人にここまで能力を持つアーティファクトが支給されるという現実には彼は頭痛を覚えたという。

「いつぞやの再戦だね」

「邪魔も存在しない、少々空間に”ゆとり”が無いが……まあいいだろう。だがやはりセンスに問題があるな」

「環のアーティファクトにケチをつける気かい？」

「ああ、無論だ莫迦ヤロー」

クッククック、と憎たらしい笑みを受けながら彼は腕を眼前で交差させた。手には黒き拳銃、ただしヒトが扱えるような代物ではないことは、サイズからすぐにわかるだろう。ガチャン、ガチャン、と鳴らし三日月を横に置いたように歪んでいる口元から、カハア、と

黒い障気が漏れていた。

「君とは一度、全力で戦ってみたいと思っていたんだ」

「吐き気が出るほど不愉快だ」

ズズズ、とフェイトの背後から無数の石柱が伸びてきた。冥府を支えた漆黒の石柱が一本一本、彼を狙いつけている。圧倒的光景であるう、目の前で無数に発生した底が見えぬ石柱の群と対峙する、た一人の小さな武器を構えたヒト型の生き物。彼は拳銃を指を基点にグルグル回しながら口を開いた。

「精々この世最後の余暇を楽しみたまえ」

ガチャンと銃口を彼に突きつけた。フェイトは彼の言葉を聞き届けた後、腕を振り下ろし石柱が彼へと襲い掛かっていった。彼の眼前を覆い尽くすように無数に降りかかってくる石柱群だが、彼は銃を構えたまま動こうとはしなかった。それどころか……

「化石ごときが、俺を越えられると思うなよ」

そのまま石柱は彼を、正確には彼がいた場所へと次々と突き刺さっていった。空間にマチマチに存在する建物を貫通し破壊し、土埃が巻き上がり石柱が林立するがごとく。その光景だけを見るのなら彼があっという間に負けてしまったと思うだろう。しかし実はそうではなく、フェイトはソレを既に捉えていた。

「……ッ!?」

ピクンをソレをフェイトは直前で察知し屈んで回避した、しかしソレがフェイトを越えた瞬間爆発、そしてフェイトは爆発に飲み込まれた。しかしまだソレは止むことがなく次々と襲い掛かる。

「狙撃か、厄介なものだよ」

石柱が直撃する瞬間彼は転移をしたのだろう。ここより遙か前方、それも数?かというほどの距離の先に彼は銃を構えて立っていたのだ。下手をすれば10?を越える標的を裸眼で捉える彼にとってその距離での狙撃は容易すぎた、あまりにも容易だったのだ。だが相手はフェイト・アーウェルックス、先程の通り僅かなナニカを感じそれを回避した。音速を超える弾丸を避ける彼も、もはやヒトガタが所有してはいけない視力を誇る彼も普通ではなかった。爆発の中から、煙を尻尾のように引っ張りながらフェイトは飛びだした。真っ直ぐと彼へと向かう。

「『ヴィシユ・タル　リ・シユタル　ヴァンゲイト……』」

フェイトは詠唱を始め、石で出来た鋭い槍を召喚した。的確に脳天を狙う弾丸を最小限で避けながら、石の槍を解放する。例えかつて戦艦を叩き落とした焼夷弾を放とうとも、大きい質量の石の槍を落とすことのは五分五分であろう、なにしろ使い手がフェイトなのだ

から。そもそも彼が弾丸で戦艦を落としたのは、中の人を殺し、戦艦としての機能のみを正確に破壊していったからなのだ、機能など皆無な石柱に意味はない。20年前より遙かにレベルが違う射撃精度、距離、威力を持っているとしてもそれは変わらない。

「やあよく逃げるね狙撃手」

「実に素晴らしい行動だろ？」

「ああそれは否定出来ない」

彼とフェイトが肉薄した。もう一度転移して狙撃、それを繰り返してもよかったのかもしれない。しかし彼はソレをしなかった。何故ならば、彼はある意味フェイトを高く評価していたからである。言うなれば、フェイトが単純な狙撃で落とせるか、という話なのである。もし相手が20年、10年前のアーウェルクスだったのなら、それこそ狙撃という名の爆撃で終わらしていたであろう。今回ソレをしなかったのは今のアーウェルクスが実に人間くさいという理由に他ならない。進化をよく知っている彼は、進化を顕著にあらわす人間がどういふ存在なのかもよく知っているのだ。弱いくせに何よりも強い、世界中を探せば人間より遙かに強い生き物は多数存在する、人間を数回殺す毒を持つ植物、容易に人間を握りつぶす筋力を持つ動物。だがそれでも”彼ら”は人間に負けたのである。それこそ人間が弱く強く、何よりも面倒な生き物である証拠だ。

「『歯車・起動』」

「『おお、地の底に眠る死者の宮殿よ、我らの下に姿を現せ』」

彼の背後から大量の重火器が現れた。フェイトの周りには無数の石で出来た槍が滞空している。彼は手を振りかざし、フェイトは手を広げ、彼は宣言し、フェイトは告げた。

「燃やせ貫け殲滅せよ」

「『冥府の石柱』」

弾丸で石を越えれないなら火を、火薬を、鉄を持って越えればいい。そうやって人々は石を切り家を建て、時には加工し武器としたのだ。先程とは比べ物にならないほどの圧倒的質量の石柱が彼へと襲い掛かる。だが彼の背後から無数に発射される弾丸、榴弾、ロケット弾、ベトン弾、焼夷弾、徹甲弾、榴散弾、ペイント弾、ミサイル、レーザー、ありとあらゆる兵器が飛んでいき石柱を次々に破壊していく。だが石柱も止まることはない。互いが無限にあるのではないかと思わせるほどの質量とパワーのぶつかり合いだった。決して無駄など無く、当たり前のように優雅さも何も無い。無骨で単純で普通、されど極めて強力で無数、だからこそ彼を表す言葉に”戦争”という単語があるのだ。一人で戦争をする、それは間違いでは無かった。

「今頃ネギ君達は元気にやってるでしょうか」

「向こうには狙撃手がいるだろ」

「いや、むしろ彼が不安要素ですねキティ」

遠き麻帆良の地下の一室、一室とは実に言い難く、地下なのに異常に広い空間で淹に囲まれているという謎さ。さすが麻帆良と言わざるを得ない。建築学的にも、物理的にも色々な無視をしている建物のオープンテラスに三人。アルビレオ・イマと近衛詠春、そしてエヴァンジェリンがいた。

「そ、そこまでヒドイのか？いや、確かに片鱗は見せてはいたが…」

「ヒドイなんてものじゃないですよエヴァ」

アルビレオの真っ直ぐ彼を否定する言葉に少し驚くエヴァンジェリン。彼女が返した言葉には詠春が反応した。だが、言葉そのものはヒドイと言えるかもしれないが、それこそジャック・ラカンと同じように懐かしむようで実に楽しそうに笑っていたのである。それはアルビレオも例外ではなく、胡散臭い笑みでは無かったことを加えてエヴァンジェリンは少し疎外感を覚えた。ちよつと付き合いがある程度の彼らに疎外感とはいささか違う気もするが、エヴァンジェリンとしては何か思うところでもあるのだろう。

「ええ、本当にヒドイ奴です。つい最近なんて」

「そつえば彼とはよく」

「実に」

「」

「もういいやめろ、そいつの変態っぷりはわかった」

英雄、最強と呼ばれた者達の密会に返り咲く変態のお話、聞くだけで暴走つぷりや冷酷さ、反面どこか馬鹿な彼には語る部分が多すぎるようだ。英雄と言えど『紅き翼』だが最強と言えど『帝国の狙撃主』である。だが『紅き翼』の面々に対して彼は圧倒的に情報が少ない。それが何故なのかはわからないが実際少ないのは確かであり、その分個人的な付き合いをした彼らでは語る部分が多いのも普通のことなのかもしれない。

「おやキティ？ 仲間はずれですか？」

「あ？」

紅茶が注がれていたのであろうカップを口でカポカポカカポカポ、偉そうに組んだ足をユサユサユサユサユサユサ、歯でカップでカチカチならし不機嫌全開だった。というのも、実はエヴァンジエリンが最近、ネギ・スプリングフィールドが来てから気付いた重大な事の確認がとれたからである。

「私とナギが出会ったのは15年前、ぼーやは10歳、その時には既に婚姻していたというわけか。フツ、私になびかぬ道理よ……」

「ご安心を」

「ん？」

「何がどうあってもなびかなかったと思いますよ。体型で……おっと失礼」

「死にたいようだなその古本、私が処分セールに出してやる」

誤魔化しにもならない行為だが、言っちゃまったぜウフフ、と言わんばかりに手を口に当てたアルビレオ。言うまでもないがエヴァンジェリンの最近切れやすい堪忍袋はやはりすぐに切れた。カップをバラバラにしながら魔力を覆わせてキシヤー！という擬音が似合いそうな感じでアルビレオを威嚇する。それを隣から見ていた詠春だが、いつものことで、その上『紅き翼』最後の良心らしくハハハと笑いながらお茶を楽しんでいた。

「それにしてもゲーデルと言ったかソイツは…？」

「ええ」

破壊したカップをエヴァンジェリンの人形が見兼ねたようなのか、サツと片付け新しいカップに紅茶を入れ手渡した。ご苦労、と言いたげな笑みを浮かべ一口飲む。エヴァンジェリンと『紅き翼』、ついでのおマケたる彼とは付き合いが長いが、エヴァンジェリンはクルト・ゲーデルだけにはあったことがなかったのだ。というのも18年前のアリカ姫処刑の日に仲違いをした所為である。クルトも何気にアリカ姫に恋心を抱いた所為なのか、色々と厄介というか面倒くさい奴らである。

「なかなか愉快的な男ではないか、生真面目なぼーやと話が合いそう
だ」

「シックスに随分と懐いてましたね、蹴られてましたが」

「方向が違いますけどシックスと彼は似てましたから、蹴られてま
したが」

「何なんだお前等…」

彼は真面目というより”それ以外しない”と言ったほうが正しいのかも知れないが、目的のためなら非情にもなれる彼は、絶対的な平和を願うクルトからすればいいものに映ったのだろう、いつも蹴られていたようだが。お陰様で現在では彼のことがとてつもなく苦手になっていくという話。子供を英雄が普通に蹴っているという衝撃的事実にドン引きなエヴァンジェリンは眉をヒクヒクさせ紅茶を飲むことを忘れていたという。

爆発、衝撃、轟音、閃光、硝煙を巻き上げ石柱が飛び交い怒りの火が空を舞う。彼と戦いながらフェイトは”尊敬”に値する不思議な感情を覚えた。かつての京都とは違い、互い互いが本気全力で戦うその空間内部、”狙撃手”という言葉が嘘に見えるほど、今の彼は”狙撃”とかけ離れていたのだ。まるで、と比喩に使われるような存在も見つからず、ただ思うのはソレ以上。もはや彼の能力とは一つな生命体として所有していい能力ではなかったのだ。空から溶けた金属の雨を降らし、粉末マグネシウムによる派手な粉塵爆発をし、馬鹿でかい旧世界の戦艦を”剣”のごとく振り回し、手を振り払ったかと思うと主砲クラス兵器群による弾幕を展開しているその様。

「君がいれば資源問題解決するんじゃないかい」

「同感だ食物力発電（魔法使い）め」

数度数十度数百度、何度も放った石柱と放たれる火薬。その合間の奇妙な”会話”という空間。

「もう終われ、人形遊びは卒業だろう」

「悲しいかな悲しいかな」

「あ、アツ!？」

突如フェイトがワケの判らないことを言い出した、と彼は首を捻る。その瞬間彼は珍しくギョツとする。そういう感情もあったかと思いつながらその光景を見ていた。その光景とは、何故かフェイトが片方の目のみ涙を流している光景だった。思わずチンピラみたいな物言いになった彼だが、人形とは思えないフェイトの行動にむしろ上機嫌になる。だがしかし、突然のこの状況に彼は何も言うことが出来なかった。

「やはり君は強い、この僕よりも。下手をすれば世界と戦っても勝てるかもしれない」

「……………」

「でも、君が僕に絶対に勝てない。残念だよ……いや君は勝ち負けなんてどうでもいい存在だったね。それにしても実に不思議だ、まさか君だけに、君という確立した存在のみに対して世界を作り出すとは。いや、例外などという存在も包み込まなくては”完全”とは言えないからね」

「（ワケワカンネ…）」

勝てないという物言いに彼は何も言わなかった。無論、彼は彼女のために目の前の敵を”殺す”という明確な目標を持っており、それが勝利というのなら彼は勝つつもりでいると言えるであろう。しかし、違和感があった。ハツタリじゃないと直感が告げた。呆れるほどの自画自賛のつもりなのか、それとも……

「やはりコレは尊敬だ。僕は君を尊敬する、縛りから解放された人形である君を。度重なる欠落と寄せ集めた欠陥品ジャンクパーツとして完全体、不完全でありながら完全を内包する君は実に素晴らしい」

「……と、特別製ですから」

僕は君を尊敬する

フェイトはそう言った。そしてフェイトの手元に現れた武器か何か。切り札というものならば、否、そうじゃなくてもそれが強力なのは言うまでもないだろう。ソレは鍵の形をした何かだった、大人一人分と同じぐらいの大きさの何かだった、表しているのは違うであろうが地球儀らしき物体がついている何かだった。

「そう、これは特別製。言うなれば特注品だ、君専用のね」

「三倍って所か」

戦いが始ま（終わ）ろうとしていた。もうここまで来れば彼はその鍵の正体に気付くのも自然なことである。20年前、彼の役目が終わった日の戦い。相手は造物主、魔を持つ物全ての親（作り手）とも言えるべき存在。重なり合った魔の因子は次第に螺旋をえがき変化し、そして命の、進化の、螺旋の革命を起こしたのである。結果は、今ここに彼が存在することが答えになっているであろう。彼はその鍵を見ながら、やれやれ、と面倒くさそうに呟いた。

「『造物主の掟』【1ド・オブ・ザ・ライフメイカー】」

「……やはり君は存在してはいけない、それは運命（Fate）だよ、君は強すぎた」

T o b e c o n t i n u e d

第五十射 撃鉄の英雄（後書き）

今週の没ネタ

フェイト「チクシヨオオオオ！くらえシックス！新必殺『冥府の石柱！』」

シックス「ぐあああ！？莫迦なツ！？このThe・不死身と呼ばれるこの俺が！？」

シックス「フ、シックスがやられたか」

シックス「奴は我らの中でも最弱」

シックス「人形ごときに負けるなど、英雄の面汚しよ…」

フェイト「くらえ！」

シックス「ぐわあああ！！？？」

フェイト「やった…ついにシックスを倒したぞ…これでやっとシックスのいる帝国城の門が開かれる…！」

シックス「よく来たな「コズモ・エンテレケイア」フェイト…待っていたぞ…」

（ギイイイイ…）

フェイト「ここが帝国城だったのか…！感じる…シックスの魔力を…」

シックス「フェイトよ…戦う前に一つ言っておくことがある お前は私を倒すのに『造物主の掟』が必要だと思っているようだ…別になくても倒せる」

フェイト「な 何だって！？」

シックス「そしてお前の従者はどうでもいいので無視しておいた。あとは私を倒すだけだなクツクツ…」

（ゴゴゴゴ）

フェイト「フ…上等だ…僕も一つ言っておくことがある 僕の宿敵のナギに息子がいるような気がしていたが別にそんなことはなかつ

たぜ！」

シックス「そうか」

フェイト「ウオオオいくぞオオオ！」

シックス「さあ来いフェイト！」

フェイトの勇気が新世界を救うと信じて……！ 「こゝ愛読ありがとうございます」

ございました！

第五十一射 人形（前書き）

P V 6 6 6 6 万いきました、毎度毎度ご回覧いただく皆様に感謝と愛を。

第五十一射 人形

「全ては儂き夢の跡……国破れて山河ありつてね」

「良い言葉だ、世の中を体現している」

「フフ、やはり君とは話が合うね」

「ああ、だからな……」

お前が先に消える

彼が捨てるようにそう呟く。同時に彼の足下から伸びる影の槍が白髪青年……フェイト・アーウエルクスへと襲い掛かった。フェイトは千へと届くかという無数の影の槍の雨に対して、特に驚くこともなく淡々としたまま手に持っていた鍵状の”何か”で影の槍を薙ぎ払った。いや、薙ぎ払うだけならばまだマシであっただろう。影の槍は弾かれるわけでもなく、ただ消えたのだ。まるで火をつけた蠟燭に強烈な風を当てたときのように……、フツと槍の弾幕が何事も無かったかのように。彼は予想をしていたのか、特に表情を変えるわけでもなく、だがどこか不機嫌な口調で言う。

「ハッ、面倒くさいものを引っ張ってきやがって」

「君のために出力を上げたんだ、恐らく君との戦いが終わったら壊れるだろうね」

現にフェイトの持っていた鍵状の何かには既に小さな罅が入っていた。例え小さな傷だとしても彼の眼から逃れるわけがなく、物質的にもどこか無理をしていることも見て理解した。だからこそここで潰す、と決めたのだ。壊れる限界まで出力を上げた武器、ああまさしく極限の戦争に相応しい武器ではないか、彼は内心で妙な歓喜を覚えた。誰がどういう武器を使おうとも、それに関して言えば正直関係無い話だったのだ。ならば何故、彼は歓喜を覚えたのだろうか。それは恐らく共鳴に近いものだったのだろう。己も兵器、対するのも兵器、ああこれこそ戦争だ、20年前の大戦時において日常の隣にいたものだった。記憶が削れる彼であったが……、懐古とは言えない摩訶不思議な感情がわき出していたのだ。

「『歯車・起動』」

彼がそう呟くと全身に光が浮かび出す。それはまるで電子精密回路のようで、だが何故か本能的恐怖を覚える虹色の光を放っていた。彼の肉体を基盤、流れる魔力を電子とし、回路を流路へと。ゆらゆらと煌めく星空のように薄く、しかし一度見れば脳内にこびり付く茶色のペンキのように。ありつただけの魔力を流し込んだ。撃鉄を鳴らし彼は設計図を元に作り出す。

「燃やせ貫け殲滅せよ」

彼が手を振り上げる。彼の背後の空間に現れた無数の兵器。全ては

目の前に立つフェイト・アーウエルクスへと口を向けられていた。彼が腕を振り下ろし、それらは文字通り火を噴いた。だが、フェイトもまた攻撃を開始する。手に存在する巨大な鍵を振り上げ、鍵の軌道に沿うように数多の杭が生み出された。もうその数は彼の放つ弾丸と同じように”数多の”やら”無数の”などでは表現出来ぬ数、圧倒的数。視界を埋めつくさんとする弾丸と杭がぶつかり合った。

「……ッ、文字通り火力がすごいね君はっ！」

杭が迫る。弾丸が破壊する。弾丸が襲う。杭が弾け飛ばす。弾丸が飛ぶ。杭が交差する。彼の頬元を擦り血を巻き付ける杭も、フェイトの来ていたスーツをボロ雑巾のようにしていく弾丸も、まったく同じ。互いが互い、弾丸も杭もまったく違った、しかし互いが互い、杭は文字通り弾丸の如く突き進み、弾丸は杭の如く敵を貫こうとする。だが、時間が長引けば己が不利であることは”互い”が理解していた。それは矛盾かもしれない。片方が不利になれば片方は有利、それは天命のように正しい。しかしそこには確かに二つの均衡する不利があった。

「灰に戻せば楽だろう?… 『歯車・起動』」

キィィィ、と甲高く、されどまるで草原を走る風のように優しい音を立てる儀図。それから起こるであろうことをいち早く感じ取った彼は、杭の雨をかいくぐりながら魔法を発動した。それは右手にもたらされる巨大な”筒”であった。右手を肘と肩の間あたりから包み込み、更に腕の二倍はあるう程の砲身。同時に展開される砲台を

芯にして円状に滞空する『ライフリング（生命輪廻）』。

エネルギーライン（生命回路）、全弾直結

杭が腕に刺さる

ランディングギア、アイゼン、……フルオープン

杭が脳髓を貫く

チャンバー（薬室）内、異常加圧中

それでも彼は止まらない

ライフリング回転開始

命の胎動が遮られる、そんなことがあつてはならないのだ

「回れ生命、叫べ命の断末魔、燃やせ天上、火の雄叫びを」

「やはり、ダメだ君は。存在してはいけない、アレ以外に生命を操

る存在などあつてはいけないんだ」

生命が繋がった。生命を増幅させた。彼だからこそ日常的に出来る想像外の荒技である。たつた一つの命でさえ、小さな人間の命でさえ、英雄となり造物主を破壊した青年がいたのだ。度重なる努力と修練を積み、奴隷であつた己を自らの血肉で変えた剣士がいたのだ。そう、それを”しでかした”のは全て命一つ、一つの命を持つ人間、生命体だつたのだ。命という不明確であり確実に存在する概念一つには、すさまじい力を、存在的なモノを持っている。そんな命を、エネルギーという破壊的火力に変え弾丸で放つなどという奇想天外で破天荒。あまつさえ複数の命を連結し放つたのだ。その威力はすさまじいなどと軽々しく言えるものでははなかつた。

「生・命・氣・断」

「『造物主の掟』」

白とも、赤とも、青とも、緑とも、黒とも、何色かもわからない。命の流れ、大いなる流れ、何事よりも気高く美しく、そして何よりも醜く羨ましい生命の光。光が空間を走った。その光は一瞬にして空間を満たし、そしてフェイトを有無も言わず貫いた。もしかしたら有無を言わさないだけでも幸運だつたかもしれない、その光はまさしく光速、感覚が感じ取る前に全てが終わっていたのかもしれない。なかつたのだ……。

「ふむ…、来たか……」

人々が騒いでいた。

「さて、本日のメインディッシュというわけじゃが……どう動くのやら」

彼女は……第三皇女テオドラは窓から”ソレ”を見ていた。彼女の後ろでは人々が逃げまどい、そして混乱し悲鳴を上げていた。それまで優雅讚美を極めていた舞踏会も今や形無しである。オステイアの都の下に存在する雲海の中から飛び出たソレには少しだけ驚く、と彼女は妙な落ち着きを保ちながら見ていたのだ。

「なな、なんだアレは!？」

「み、みる戦艦が!」

巨大なソレ、雲海を突き抜け空へと伸びる頭のソレ、黒い巨躯、ただ巨大な存在だった。二対の腕を持ち、体を骨で構成してありながら、上半身は漆黒の筋肉の鎧で身を包む。オステイアを見下ろすように複数の眼が輝いている。ちょうど骨盤のあたりには魔力で構成されているであろう多くの尻尾、九尾などが笑えてくる、もう数えることが出来ないほど多数。メガロメセンブリアの戦艦が小さく見えるほど、尻尾の一つが戦艦へと絡み付き真つ二つに折る。

「ほう、20年前の奴も動いておるか、派手じゃの〜」

「テオ、なにを暢気なことを…」

彼女の側にいた金髪で角の生えた良い美貌の女性がたしなめた。サングラスに隠れようともしないツリ目、あとおっぱい。彼女はそんな女性の物言いに無礼などと言うわけではなく、フフ、と微笑して返した。

「奴らも同じもんじゃ、20年前の戦略的化け物……我が従者がいるのじゃからな」

「そりゃ同感さ」

フフン、と胸を張って言う彼女に一度安心したものの、よく考えれば問題はそこではないことを思い出した。

「ってそうじゃない。」一応”君の護衛もかねているんだ、安全な場所に」

「もう来た」

女性の言葉を遮るように彼女は言った。視線の向こうには、会場で果敢勇猛に戦う戦乙女の騎士達、そしてドレスに身を包んだ神楽坂明日菜の姿。女性から見れば遠き麻帆良で同じ仕事をしていた同僚（魔法生徒）の姿もあった。こんな遠い、加えて上流階級のトップ

の人が集うような場所で見るとは面白いものだという。もう一つ、窓の縁に隠れるように連隊を組んで飛行してくるインペリアルシップを筆頭した帝国戦艦連隊が見えていた。それを見ていた彼女をたしなめるつもりなのか、大きな　人が壁に叩き付けられたかのような　音が彼女の耳に届いた。バツ、振り向けば神楽坂明日菜が召喚魔に拳を入れられているところだったのだ。中身が色々あるとはいえ、旧世界で中学生の一人として過ごしてきた少女の無防備な拳が腹に刺さる。そんな様子から、コンマー一秒以下による思考で現状を把握した角の生えたヘラス族の女性が動き始めた。

「おや、クラスメートを守らないと。私は雇われた身だからねイ、精々死なないでくれよ」

「ほざけ小娘、妾は死なないのじゃ、なんせ最強のわ・ら・わ・の騎士様がおるからのう。のー馬鹿弟子？」

「フフフ」

「クフフ」

ゴゴゴゴゴゴ、と今は非情で非常、そして卑情なまでにまったく関係の無い戦いがおこなわれていた。周りの人たちは、突然現れた謎の攻撃に戸惑うばかりだが、この瞬間のみは違っていたという。まるでブリザート、どこから見てもツンドラ艦隊（寒帯だけに）である。その時のみ、周りの人は凍り付き、襲ってきた魔物の影、闇の魔法で組まれた人形と影の中間的召喚魔ですら、動くことが出来なかったという。実はその女性、とある人物が化けているのだが…
…恐らく誰もが既にわかっているだろう。

「やれやれ、師匠から聞いたけどさ、護衛の任務ほど面倒なものはないね」

「……ほう。ま、いいかのう後でゴニョゴニョすれば。さて妾も行くかの」

実は最後に”テオドラ以外”という有り難い言葉もあつたのだが、あえてそこを言わなかった女性である。

「手伝おうか？神楽坂明日菜？」

「え？……って龍宮さん！？」

召喚魔に吹き飛ばされた神楽坂明日菜を庇うように、女性はたつた言葉とともに頭に手をやり、金髪のカツラをとる。長く鮮やかな黒髪を揺らし、スーっと白かった肌が元の褐色に戻っていく。でも胸は変わらない、あいかかわらずカーニバツてる。

「な、なんでここに？」

「おや、ここに私の師匠曰く偉大なる主様がいるんだ、弟子たる私がないはずもなく、まあぶつちやけるとただの任務だ。」
「ラカ
ン氏に君たちの護衛をね、ちよつと高かつたもんで」

つい受けちゃったせてへ、なんていう擬音が無機質に消えてきそう

である。神楽坂明日菜の疑問に答え、満足気味な真名は目の前に群をなしている召喚魔に目を見やった。中には3メートルをはるかに越えるという体を持っているもの、どこかの使途っぱいものから天使っぽいものまで様々。

「さて、面倒だからどうしたもののか。依頼内容に含まれてないし

」

「そんな！？あんな小さな子までいるのよ！？」

真名の言葉を遮るように神楽坂明日菜は言った。明日菜は彼女たちの背後にいる小さな少女　間違はなく招待されたものの子女に指を差し手言った。だが真名が返したのはごく単純な拒否、依頼以外はしない、傭兵に求められる基本的な事項だった。傭兵が金より満足に働けないのならただの邪魔、それ以上に働くのなら正規兵の邪魔、与えられた事以外をしないのが、それをどれだけ手抜きして出来るか、それこそ龍宮真名がダブル・シックスより受け継いだものなのだ。無論、それに神楽坂明日菜は怒鳴る、見事にハマったように…

「じゃ私が雇う！」

「ほういいのか？新聞配達程度のバイトの身で……私の弾丸は”莫迦”高いぞ？お姫様」

「しゅ、出世払「ダダダダダアン！！！！」で！…え？」

「了解、君は出生しそうだ。大歓迎さ」

真名はほくそ笑みながら弾丸を放った。真名の放つ迫り来る召喚魔の脳天を貫き吹き飛ばす。そこには弾丸の無駄撃ち一つすらなく、瞬動を使い敵の背後に回った、かと思うと既に蜂の巣となり真名は次の敵へ。召喚魔の攻撃を体を反らしただけで回避し、最低限の動きで最上級の働きを。

「おや？さすがにコレじゃ無理か」

ふと真名の目に入った大きな体を持つ召喚魔、拳銃の弾丸ではさすがに貫けそうにない。ならばより強力で大きな得物を、そして彼女は揺れる（重要）胸元に手を伸ばし、何かをヒツパリ出した。バレットM82、シックスお手製強化術式を組み込まれた対（怪）物ライフルである。師弟揃って大好物な一品、君も是非。

「ひゃー…すっっ」

「なんだこの人間台風…」

その余りに光景、戦闘のすさまじさもあるが主に胸元からライフルを取り出すということに神楽坂明日菜は感嘆の声しか出せなかった。ガチャン、とライフルを鳴らしたかと思うと、目の前には何もなかった。ただ龍宮真名が暴れ、そうだったという記録しか残らなかった。真名は彼が組み込んだ物を使ってまで戦ったというのに、軽く全滅したことに消化不良気味なのか不満を覚えたようだった。

「なんだ、案外脆いな。これじゃただの”動く的”だ」

周り一同からは”ただの動く的”という言葉に疑問というか、驚きしか表すことは出来なかった。

もはや光とはいえない、生命という確かな正な力でありながらな絶対的な破壊と負の結果をもたらす閃光が無制限鎖空間を走った。キユイイン、と音を響かせ、閉鎖空間に存在する造形物をすれ違っただけの圧力のみで崩壊させ無に返し……そして空間に限界が来た。

「ふえ、フエイト様！」

「あ、ありえない……」

その光景を見ていたフエイト・アーウエルンクスの従者の少女達が声を上げる。1秒前後の光が世界を包んだと思えば、真っ直ぐと空間を走り抜ける正負混濁の光が空間の”壁”に突き刺さった。そのまま光は本来内包していた破壊力の全てをぶちまけた。

カアアアーン!!!!!!!!!!

「キヤアツ!?!」

「うツ!?!」

まるで巨大な狼の体当たりを喰らったのか、そう思うほどの衝撃が空間を巡り、再度目を開けることが出来ないほどの光が発生した。その空間を呼び出した少女はすぐに理解した。もうこの無限閉鎖空間はダメだ、と。オスティア平和記念祭にて、ジャック・ラカンがこの空間に閉じこめ、そして今の彼と同じように圧倒的パワー、ただ純粹なる力のみでそれをこじ開ける英雄達に、そしてそんな彼らが同格と認める少女達自身の主を、もうそこには畏敬しかなかった。

だが…

「クツ、あの筋肉達磨と同様やつぱりデタラ…め?」

「あ…え?アレ?ここどこツ!?!」

「てゆうか服まで!?!」

光が過ぎ去った。もうそこには無限閉鎖空間は無いはず、オスティアの街の中にいるはずだった。だがしかし、今はどこだろうか。見渡す限りの草原、花が咲き蝶々が舞い、風が走り草は歌う。どこまでも続く蒼い空にただ流れる沈黙の白き雲海が遙か彼方に。オマケ程度に、先程までローブを着ていた少女達は何故かメイド服を完

備しているというサービス精神、お腹いっぱいだけ。

「……チツ、実に不愉快だ」

一方彼は、言うとおりの不快を感じていた。彼は今これが何なのかを知っていたのだ。忌々しそくに、片方の目を歪ませソレを隠そうともしない。彼の目線の先には、透き通るような青い水が張ってある池の小さなオープンテラス、その一角にて優雅に座りながらコーヒを嗜む白髪でスーツの青年、フェイト・アーウェルクンスがいた。彼との戦闘で見ても無惨であったはずのスーツはまるで新品のごとく、彼との戦闘で流れているはずの血も無かった。

「ようこそ狙撃手、コーヒでもどうだい？」

「ハッ、俺は牛乳派だ死んでろ」

やれやれ理解出来ないね、とフェイトは首を振った。ある意味重要なことをカミングアウトしたような気がする彼に対して少女達は、この空間ということも含めて驚きを見せた。

「君はあまり驚かないようだね、いや、直接何度も喰らった君は知ってたのか」

「……ご生憎、どうでもいいことは覚えないう主義でな。だがこの程度だと欠伸しかでらん」

「そりゃ残念だよ、……君とはもう少し語り合いたかった。でももうダメなんだね、君の体は……」

フェイトの背後には例の鍵が発光しながら浮かんでいた、がそれはもう限界だったのか崩れさった。二人はもう鍵には関心がないのか鍵の様子を見ようともせず会話を続ける。

「フン、まさか刺されるとは思いもしなかったぞ？……ああ、正しい鍵の使い方だな」

パキリ、パキリ

そんな音が響いた。依然としてフェイトはカップに入ったコーヒを飲むだけ。対する彼は立ったままだった。

彼の体が崩壊していた

「汚染とはひどい言い草さ、これは”救い”だよ」

かつて三番目を狙撃し、陶磁器のようにバラバラに砕いたように

「救いなどあるはずがないだろう？それはただの行為であり、本来ヒトは”救くわれる”ものだ」

だが血が流れることもなかった

「言いたい放題だね君は、そこまで嫌いかい？」

ヒビが顔に走る

「いや、大好きだ、潰したくなるほど」

ガラガラ、ガラガラ、彼から右腕が消え去った

「それは結構、実にいいことだよ」

だが、彼は笑っていた

「あばよ、酔っぱらい」

「……」

ガシヤン

崩れ去った。彼の体は岩のごとく崩れ去り、そして砂のごとく風に乗り散っていく。フェイトの従者達がフェイトに近寄る。もう終わった、と少女達は思っていた。これで終わり、だと。最強の一角を崩した、己が主が一番、そう信じ”たかった”のだ。誰もが想像すら出来ないだろう。

「行こうか、そろそろ始まる」

「え？フェイト様？……ってアレ!？」

フェイトが立ち上がった。もうすでに草原が広がる世界など無く、夜空が広がるばかり。フェイトは無言で空をじっと眺めていた。その行為に何の意味があるのか、始まるとは何のことか、疑問をぬぐえない少女達はソレを聞く。

「倒してこそ英雄、か……、少しだけ羨ましいよ君が」

あばよ、酔っぱらい、また会おうぜ？

大地が揺れる、大気を喰らう。

天を揺らし、空を割る。

海を砕き、道を裂く。

ギ

満たせ血の底、閉じよ地獄の門。

ギ

我こそ思想家、全てを破壊し喰らう者。

例えるならソレはガラス。未来に人は語る、空が割れた日、と。

T o b e c o n t i n u e d

第五十一射 人形（後書き）

「生命氣断」

生命氣弾の誤字ではない。こっちは放射状、向こうは弾丸状。今回は限界まで”溜めた”破壊光線、でも反動とか無い（普通の人間が出すならミンチもいい所）らしい。ライフリング回転で伝導率マックスロマン溢れる。

時間がかかるのではない、時間をかけるのだ！

最後の射撃 我こそここに在り

「テオドラ様！上空に何かガッ!?」

「……………うむ」

帝国が誇るインペリアルシップ、帝国が保有する戦艦の中でも最強の攻撃力と防御力を誇るまさしく化け物である。魚類を思わせるその体軀だが……………その大きさは100メートルを軽く越える。そんな戦艦のブリッジにての会話である。突如、腹の底から何かを叩くような音を”空から”ぶちまけた何かが現れた。ブリッジの中ではその不可解な現象に焦る兵隊と、妙な落ち着きを持つ帝国第三皇女テオドラの姿があった。彼女は、ただジツと”盛り上がる”という怪奇な現象を起こしている空を眺めるばかり。思わず戦艦の艦長が彼女に声をかけるもの…、返ってきた答えもまた不可解なものであった。

「よく見ておくのじゃ、……………帝国が誇る最強を」

「……………何が起こるので?」

「見てればわかる、じゃが、な……………あまり良いものじゃないのじゃ」

「……………」

どこかを懐かしむような声で彼女は返したのである。そんな彼女の

表情に”あてられた”のか艦長は思わず閉口してしまった。次第に大きくなっていく謎の音……、何かを呼んでいるような雄叫びか……、それとも崖に落ちる直前の助けを求める悲鳴か……、羽虫が忙しく羽根を動かす仲間を呼ぶ騒音か……、ただ、まるで、と比喻するにはあまりにも異常すぎた。だが、艦長は何かを感じ取った。艦長もまた彼女が何かを懐かしむようなことに対し、不思議なことだが己も同じような感情を持ち、未だに鳴り響くうなり声を”どこかで聞いたことがある”と、そう思っているのだ。しかもそれだけではない、この空気も、この雰囲気もまたどこかで感じた……、それも”彼”が戦場にいた時と同じような空気を。

「敵さんも動きませんね……」

「動けば死ぬ、かのう？」

「……洒落になりませんね”ソレ”も”アレ”も」

戦場は静かであった。召喚魔のキーキー、ギヤーギヤー、牙をガチガチならし爪をキリキリ擦る。そんな音もまったく聞こえなかったのである。そう、それも静止したまま、であるのだ。例外無く突如オステイアの雲の海に現れた巨大な召喚魔も等しくただ空を見てジツ……と、まるで石のように、否、へびに睨まれた蛙と言ったほうが正しいのかもしれない。気付けば、忙しく動いていたはずのインペリアルシップの乗組員も止まっていた。同じように膨らんでいく空を眺めていた、別の部署からの通信が聞こえるであろうスピーカーからはオペレーターが出す僅かな吐息を捉え、誰かがゴクリと喉をならす。妙にその音がブリッジに響いた。

「来た」

「……」

ピシリ、空にヒビが入った。膨らんで膨らんで、もう限界が来たのだろう。一度そう鳴らすと、もう我慢しないと聞いたげに連続して聞こえていく。ヒビは波紋状に広がり、ある一定まで来ると止まった。どれほどの大きさであろうか、見る位置の問題でそれは確かではないだろうが、わかりやすく大きさを言うならば”1000メートルを越えるようなナニかが出てきても問題は無い”と表せば良いだろう。ポツリ、と彼女は呟いた。いつのまにか、艦長は右手に血が滲むほどの拳を作っていた。彼女は次に懐から一枚のカードを取り出した。仮契約カードだった。それは巨大な銃を構えている彼が映っている”はず”のカードだ。だが今は…、白かったカードは黒く染まりきり、絵柄もまた変わっていた。それに人間…：ヒト型でも映っていればまだマシであったかもしれない。

「そ、それは…：シックス様の…、ってどちらへ!？」

「……甲板じゃ」

カツカツ、と彼女は鋭い足音を立てながら振り向き歩き出した。その声と音にハツとした艦長は、すぐに武装を整え自らがお供をした。彼女が持つ仮契約カードはただ一つ、それも帝国の民からすれば一般常識でもある話だ。故に艦長はすぐに気付くことが出来た。今、彼女が手に持つ仮契約カードは”彼”とのカードだと。だが信じた

くもなかった、思えばソレを思わせる発言は多々あった。だがそれは今になって初めて意味をなすことで…、例え世界中の頭脳が集まったとしても今の答えを出すことは出来なかったであろう。彼が”そう”なる、などと…。

「テオドラ様ツ！？ぐ、ぐごご護衛を！何かあったらシックス様に
なんと言われるか！…！」

艦長は震える全身に気付くことが出来なかった。同時に聞こえてくるガラスが割れるような音に、少しだけ耳を傾けるも……嫌な予感しかしなれないという現実がそれを押しつけた。今は走ろう、そう艦長は思い、導かれるように甲板へと足を向ける彼女の背中を追いかけていった。

「オ オ オ ……」

ガキーン、そういう音が空に響いた。膨らみに膨らんだ空が割れたのである。星々の光をいつものように映している空は、光を映したままガラス細工を砕いたかのように地面へとゆっくりと落ちていく。割れた空は一部が欠けていた。欠けている空には何もなかった。次元の狭間、隙間、虚無空間、混沌、さて一体どれが”ソレ”に相応しいものだろうか。中にはアレを”根源”だと言い出す者もいるかもしれない。真っ黒なはずである空であるのに、割れたガラスの穴越しにソレを見れば真っ赤。赤いペンキをぶちまけ、紅い満月を

溶かし込み、朱い血飛沫で模様を。赤く紅く朱い背景から……、うなり声を上げている中かがギョロリ、ヒョロヒョロ、ヒタヒタ、ズブルズブルとのぞき込む。

アレハイツタイナンド？

静まりかえった戦場で声を出さずに皆そう思いこんだ、もっとも例外は二人ほどいたであろう、が……それはアレの正体を知っているということとで幾分冷静なだけである。そう言うならばやはり、例外なく誰もが”アレは一体何だ”と思ったと言える。覗き込んだ何か MOZOMOZO と動く。目玉をドロドロ震わせ何かを探すように忙しく動く。おぞましい目玉だった、昆虫が所有するような複眼ではなく言うなれば複数眼。一つ一つが哺乳類などが持つ球体の目玉、その小さな一個一個が寄り集まって、一つの巨大な眼球を中心に、まるでその大きな目玉のガラス体を作り出しているように一つの目を構成しているのである。その小さな目玉一つ一つもまた、自己主張でもしているのか、寒気を覚えさせ鳥肌を立てさせる不快感を出しながらクルクル動き回る。キョロキョロ、クルクル、ギョロギョロ、グルグル……、ビタリ。動きが止まった。全ての眼球は同じ方面を向いていた。ニタア と黒い何かが目蓋を動かし笑う。

「
」

バリン、バリン、ガリガリ、空から漆黒の槍が伸びてきた。正確には空の背後にいる黒い何かからであったが……、空を”貫通”しそ

「数の暴力の化身、というワケじゃな。おー、あれは『混沌竜』カオス・ドラゴンじやな、珍しいのう」

「ッてお、テオドラ様！！にゃ、にゃにを暢気なことを！？おえッ、ぎもぢわるッ！」

その皮膚はありとあらゆる生き物で構成されていた。皮膚などでは決してなかった。生きたままの、バラバラにされグチャグチャに混ぜられ、そのソースを塗りたくり固めたまんま……。獣の一部が苦しうに動く、翼がパタパタ、尻尾がブンブン、中には人の腕もあった。人の腕はまるで歓迎するかのように左右に振っている。獣の口が皮膚に張り付いていた、ギーギー、本能を揺さぶる雄叫びだった。

『助けて』

『死なせて』

『こっちにおいで』

『ゲヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ』

『痛い』

『苦しい』

だが、一番耳に入りこむのは一番聞き慣れた人の声だった。耳を傾ければ僅かに、少しだけ、確かに聞こえてくる複数の声。誰もが耳

を閉じたくなるほどの歓迎の声だ、悪趣味で最低の、絶望に染まりきりありとあらゆるものの死を願う声。

「まさか……そんな、アレが……あれがシックス様だとっ!？」

英雄、と言うにはあまりにもそれは歪だった。人ですらない、生き物ですらない、ただの”かたまり”だった。艦長があまりの現実に膝をついた、絶対に違う、そう思いながら同時に出てくる感情は恐怖。あれが帝国を守っていた、あれに敬愛していた、あれが英雄と言われていた、あれが……化け物にしか見えない。逆だ、英雄に倒されるべき存在は今日の前の巨人、なのに何故？英雄のように戦うのか、誰もがこのことを知っているなら思ってしまうだろう。だが、一人だけ違った。

「もうよい、お主は戦った。これが終わったら……存分に休むのじゃぞ? じゃから……だから、今この一時を。後継者達を導いてやってくれ……、帝国の大英雄よ!!!」

テオドラは叫んだ。化け物の耳に届くように、大きな声で、何よりも思いをのせて。あれが彼ならば、とどかないはずがない、何故ならば……彼は『帝国の狙撃主』ダブル・シックスだからだ。これ以外の理由など、探す必要があるだろうか。

「

……!!!」

化け物は彼女の言葉に応えるように咆哮した。不規則な大小の牙を無秩序に生やした口の奥から「我こそは此処に在り」と、轟叫んだ。咆哮に感化されたのか、オスティアの雲海から大量の召喚魔が出てくる。無数、大量、空をうめつくさんとする自動人形が化け物へと襲い掛かる。口からブレスを吐き化け物に攻撃し始めた。

だが化け物は何事も無かったように歩き出す。召喚魔の攻撃を受けながら全てを無視したまま。ふと、化け物が空を見上げた。真つ黒な闇夜が続いている。星空が点々と輝きながら、化け物を仄かに映しだしていた。細長い頭部を傾け、虹彩を真つ赤に光らせる複数眼をギョロギョロさせながら、後頭部に連なる”具体化した怒り”という名の絡み合う角をバチバチと発光させる。刹那

その時、グバアンと化け物が口を開いた。ドロドロに溶けきつた生命体で皮膚を構成した頭部、大小ばらばらで様々な生き物の牙が生え連なる口内を露わにする。真つ黒で奈落、覗き込めば魂まで吸い込まれるのでないか、そう思いこむほどの深さ。だが、その暗き口内が瞬間に変わる。光が集まり始めた、粒子状の光を口内の一点に集め、それを天高く

キイイイイン!!!!!!

一筋の光光が天へと昇った。雲を蹴散らしながら光が 空で爆散する。

「り ゆ う せ い」

例えるなら流星だった、光の雨だった。昼と勘違いするほど明るい天災の雷。光が召喚魔を薙ぎ払う。光が召喚魔を焼き払う。召喚魔は為す術も無く光に飲み込まれ消滅していく。破滅そのもの、莫大で純粹な破壊エネルギー。大地を砕き、剔り、粉碎する。光の雨は自重することを知らないのか、それは真下にいた化け物にも降り注いだ。しかし化け物は光を無視したまま歩き出す。光が化け物に落ちようと、ただドロドロの皮膚を焼き固めるにしか終わらなかった。そんな中、

「やれやれ、召喚魔がほんの数秒で壊滅か」

光の雨をかいくぐり白髪の青年が化け物の目の前に浮かんでいた。化け物もまた歩みを止める。

「すさまじい破壊力だ、化け物という言葉がふさわしい。でも……造物主には逆らえない」

フェイト・アーウェルンクス、フェイトの視線が下がる。視線の先に見えるのは穴だった。まるで桜の花びらが散っていくように、化け物の胸を侵食し虚空へと消滅させていった。しかしその速さは遅かった。『造物主の掟』による最強の攻撃といえど、絶対的な生命の密度を誇る化け物の”連結”を砕くには、あえて言おう、パ

ワーが足りない」と。

「！！！」

だが、それでもいつか消えるには変わりない。フェイトが言葉を言い終えたその瞬間、フェイトの隣を何かが通り過ぎた。バシユン、と高速で飛行するなにか。化け物の口より放たれたソレはあつという間に地平線の彼方まで飛んでいき…瞬間、爆音が響く。光をぶちまけ、たかと思うと次の瞬間にはリング状の雲を携えたキノコ雲が高く伸びていた。キノコ雲の根本にあらう地平線の彼方は紅く染まり見渡す限りの炎熱が空まで伸びている。闇夜を照らしていた。フェイトは無言で太陽が昇ってきているかと思わせるような地平線を見、その惨状を見る。

「！！！！！！！！！！」

「『ヴィシユ・タル リ・シュタル ヴァンゲイト』」

その惨状が当たり前か、気にすることなく化け物は腕の一つを振り下ろしフェイトを地面に叩き付けようとする。しかしフェイトはそれを空中で回転し紙一重で回避する。フェイトのすぐ側を化け物の太い腕が通過、あらうことかフェイトは回転した勢いをそのままに腕を走り抜ける。腕から飛び出た生き物の小さな攻撃を無視し、彼は魔法を化け物の肩に叩き込んだ。

「『冥府の石柱』」

フェイトの石柱が化け物の肩に深く刺さる。肩にいた生命体の欠片の悲鳴が劈くように響き渡る、が、化け物は構うことなく石柱の刺さった肩ごとフェイトを反対の手で握りつぶそうとした。グジュル、と握った指の間から何の色かも不明な液体が滴り落ち、石柱は発砲スチロールのごとくバラバラとなり地面へと落ちる。化け物の握撃を間一髪で回避したフェイトは突然の出来事に空中に身を投げられた。空中にて一瞬の隙を表すフェイトに化け物の攻撃、突然肩がバコンと開く。一面牙が生え揃い、まるで地獄の鑢のごとく。紛う無きそれは口だった。肩に出来た口から、灼熱の炎をフェイトに向かつて放出した。フェイトは避ける間もなく炎に身を包む。

「ッ」

バシユン、と炎を引きながらフェイトが炎の竜巻の中から出てくる。そのまま化け物より高く昇り、ギョロギョロ眼を舞わしている化け物の頭部に

「『冥府の石柱』」

数十本の石柱を突き刺した。化け物の目玉は潰れ、曲がりくねった角を破壊し、首を貫通する。化け物の頭が吹き飛んだ。だが、それでも化け物は止まらない。たかだが頭一つで化け物が止まるはずがなかった。化け物は腕の一つでフェイトを地面に叩き付けた。頭の代わりに石柱がなってようが動くこの化け物を見たせいかフェイトはそれを回避出来ずに、地面に叩き付けられ大きなクレーターを作った。化け物の頭部は回復、ジュルジュルと蘇り膨らむ肉で石柱を払いのけ再び頭部が出来上がる。

「」

追撃、化け物の口に光が集まり……放つ。着弾、十字架の光が大地に突き刺さる。まだだった、何度も何度も化け物は光弾を放ち、放つ度に大気が震え、爆風を呼び、大地を砕く。化け物の攻撃は地面が赤く染まり……大地が溶けきり地獄と化した後でようやく止まる。ゴゴゴ、とゆっくりと動く化け物。もうすでに胸の大部分が花びらとなり消え去っていた。刹那、ゴキーン、と生々しい音が化け物から響く。化け物は腕を、本来曲がってはいけぬ方向へと折り曲げ背後にいたフェイトを左右から叩いた。自らの筋力を持って関節を破壊するなど想像出来やしない。

「グッ！どこに目をツ」

『ケヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ』

化け物の背中から笑い声が聞こえる。化け物の背中には目玉があった。侵食による穴で大きく欠けていたが、それでも大きな一つの目玉だった。頭部にある複眼ではなく真正銘の一つめ。真っ赤な虹彩と、まさしく血迷っているといわんばかりに充血している白目。その目玉が周りの皮膚を巻きこみ、ニタァ、と笑ったのだ。満足したのか目玉は欠けてはいるが丸く大きく大きく見開き、紫電をまとわせた。バチバチ、とエネルギーが飛び散る。徐々に目玉は青白く輝き……光が走った。

「おぞましい、だからこそ君にはこっちに …… . . .」

「

淡く青白く、極太の閃光がフェイトを握る手ごと焼き払った。閃光の衝撃で辺りに爆風が舞い散る。地面を剔り大地を吹き飛ばしあらゆるものを吹き飛ばした。

「
!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

化け物は叫ぶ。己の所業を天に誇らんと、我こそが英雄だと、己の全てを誇示し続けた。雷雲が共鳴し雷を落とす。例え侵食が加速し胸の大部分を失い、拳げ旬には足の先からもそれが始まるうとも。化け物は叫び続けた。天に咆哮を、大地に雄叫びを、化け物は六つの腕を広げ続けた。

「
!!! シ
!!!」

化け物の雄叫びの中から誰かの声がした。まさか、誰もが信じがたい。化け物の雄叫びは一瞬で止まった。化け物が”彼”であるならば、彼が彼女の声を遮るはずがない、聞かないはずがなかった。

「
シーーーーーックス!!!返事をするのじゃー!!!この戯けー
!!!」

「ヒイイイ！！死ぬ！死んじやいますテオドラ様！ああ、妻よ娘よ、次は墓で会」

小型のソーサーにのつてきた第三皇女テオドラと、どうみても無理矢理やらされてるしか思えない操作を担当する艦長。艦長は化け物に共鳴するかのように叫んでいた。ねえな絶対、と艦長は一人で否定しながら彼女に退くよう進言するも軽く一蹴。ギョロギョロ何かを探すように彷徨っていた視線がビタリと全て彼女のほうへと向く。

「オ オ オ オ ……」

「シックスー！！！」

化け物が手を伸ばした。だが足りなかった。時間がもう化け物には残されていなかった。徐々に速まり出した侵食は化け物の大部分に及んでいたのだ。ゆっくりとゆっくりと彼女のもとへと”彼”は手を伸ばす。彼女もまた艦長に命令し己を化け物へと近寄せ手を伸ばした。彼の手が彼女へと至ろうとしたときだった。

悪いなテオドラ、共に成就は叶わん

「あッ……ああ！！！」

そう、もう化け物には時間は残されていなかった。化け物の手は彼女に触れようとした瞬間花びらとなり消え去った。花びらに包まれる彼女の視界の奥では、全てが、化け物の全てが消え去る光景が映っていた。

「シューシューシューシューシューックス!!!!!!!!!!」

英雄とは如何なる者（物）か。ある人曰く

「敵を倒した者」

英雄とは如何なる者（物）か。ある人曰く

「人々を救った者」

英雄とは如何なる者（物）か。ある人曰く

「祖国を守った者」

英雄とは如何なる者（物）か。ある人曰く

「ただの生け贄なる者」

英雄とは如何なる者（物）か。ある人曰く

「妾の英雄はただ一人じゃ」

その全てが正しく、私はそれを否定しよう。

世界が再び始まろうと、終わろうとしたとき、彼はこの世に降臨した。それから本来起きたであろう、少年少女の勇敢なる旅の物語は存在しなかった。彼が全てを壊し破壊していったからだ。造物主が次なるアーウエルンクスを作り出す頃には、その少年と周りの少女達はあまりにも強くなりすぎた。

「……ハッ、野郎が消えたくれえーで俺は悲しまねえーよ。そつちのほつがいいだろ？なあ、……シックスよ」

逆に少年達が弱かったところに戦ったアーウエルンクスは強すぎた。だからこそ先代の英雄達が出てきたのだ。彼らもまた強すぎたのである、だが戦場とは常に儚いもの。死者が出ない戦争など子供の遊び以下である。

「狙撃手も逝ったか、……600年だ。問題ない、死ぐらい何度も経験しているぞ。……私は『化け物』だからな」

世界は救われた。化け物によって救われた。しかしその現実げんそつを知るものは少ない。誰もが信じたくなかったのだ、あんな化け物が世界を救ったなど。異形の頂点に立つような存在がこの世に存在してはいけない、と。それは当然のことだろう、なんせ造物主つみのおやにすら手を向けた怪物モンスターなのだ。

「ナギ、貴方は今どこにいるのですか……。また一人”仲間”が逝つたんだぞ、……。馬鹿野郎」

だからこそ、だろう。人々が涙を流したのは。彼は世界を救わずに英雄となった。救ったのはただの過程である。彼にとっては道ばたに落ちている虫の死骸とほぼ等しい。むしろ目をつい向けてしまうソレよりも悪い。彼は化け物だった、だが、世界のために戦い平和をもたらした。そんな過程で十分すぎた。

「……………彼の半生には興味がありました、その願いも叶うことも無く……………ッ、言葉も残せないとはッ」

英雄は英雄、それ以外に意味は無い。それが敵を倒した者だろうが守ったものだろうが、ただの傀儡であろうとも。持っているのだから、敵を倒す力を守る力、利用されるだけの力を。『完全なる世界』は次第に戦力を減らす。三番目の運命を慕っていた少女達は皆、復讐する相手もおらず世界各地に散っていく。

「……まだだぞ！まだ僕は見せてないんだぞ！僕は、こんなに強くなった、と！跳弾も出来た、後は……貴方にッ」

「そっちはどういう場所なんでしょうね…、誰よりも強かった、でも逝くなんて……誰も、予想出来るはずがないッ」

幻想であろうが現実であろうが問題も無い。そこに彼らは生きて、生きていたのだ。それが嘘でも誠でも、対した違いは無かった。物語はここで終わる、彼は生きていたからどう終わろうとも問題は無く、何よりも彼は満足していたのだから。

担い手はそこに独り、生命いのちの果てで想いを紡ぐ

テオドラ・バシレイア・ヘラス・デ・ヴェスペリスジミア。帝国第三皇女にて英雄ダブル・シックスの担い手マスター。彼が表より消えた日、境に彼女もまた政界から姿をけし隠居を始めたという。時折帝国の城下町に出かけ人々と笑いあう。どんな時でも彼女は元気で、太陽のような笑顔を振る舞っていた。彼女の女としての一生はどうなったのかは不明だ。ただ一つ言えることは、彼女の側には「イレヴン」と名付けられた一人の少女がいたということだけである。

「待つんじゃないレヴン！お前の父はもうすこし落ち着きを持っておったぞ！というかそんな物騒な物を持つのではない！」

「あらあら、そんなの知らないわ？ねえお母様、だって私」

龍宮真名。大英雄の没後数年にて、彼女は『狙撃』の名を皇帝より授かる。彼無き今は、思いをくみ取り彼女の従者として戦場を歩いたという。彼女は死ぬ最後まで純潔を守り、最後の一言は「師匠に勝てる奴と結婚する、来世も」と迷惑極まりない言葉だった。彼女の手に握られた二つの拳銃より放たれる無限とも思われる弾丸は、帝国の、彼女の敵となる全てを貫き葬り去ったという。あと求婚者が止まない。

「好きな人？ああお前じゃないことは確かだね、フフ、何泣いているんだい？」

人々は、泣いて忘れる生き物である。それが生命体として常に正しいあり方であり、それ以外は狂っている。無論、彼から言わせて貰えば狂っているようが変態であろうが、テオドラ以外は実にどうでもいい、というかそういう発言すら残さないだろう。

I'm a thinker.

私は考えた

I could break it down.

私は壊そう、その現実を

I'm a shooter. A drastic baby.

私は狙撃主、壊すことしか出来ぬ愚か者

Agitate and jump out.
弾丸を弾け飛ばし

Feel it in the will.
己が世界を葬り去る

Can you talk about deep-sea
with me.

私はそこにいる、深海よ我に答えを

The deep-sea fish loves you
forever.

私は深海魚、いつまでも貴方を愛している

All are as your thinking over.

例え貴方が忘れようとも、全てはそこに在る

Out of space, When someone
waits there.

空間飛び越え、何が待っているとも

Sound of jet, They played for
out.

我が歩く音は止まらない、そして私は人へと至ろうぞ

T
h
e
T
r
u
e
E
N
D
f
o
r
T
H
E
O
D
O
R
A

「あー、死ぬかと思った。造物主まじやべえ」

T
h
a
n
k
y
o
u
f
o
r
r
e
a
d
i
n
g
!

最後の射撃 我こそここに在り（後書き）

後で全体的な後書きと最後の黒歴史を公開しますよ？更新的にはそれが最後になります。

後書き・主人公設定

どうも、無事に完結出来て本当によかったです。最後のほうは更新が遅くなり非常に申し訳ありませんでした。中途半端にある自らが書いたオリ主もので最初の完結となりますね、まあよくあるネギマ + Fate系の技でしたが、特に後悔はしておりません。なんやかんな、あいかわらず主人公の性格が吹き飛んでますが、なんでこうなるのか。まあ最初に書き出した設定にもこんな感じになると書いていたのでそうなるんでしょうが、ハツハツハ。テオドラスキーとしては満足に書けたと思います。皆様のよいネタになると自身も嬉しく思います。ネギまの題材にして、正直ものすごく楽しかった、あの程度物語が進行しており設定も多く、型月系の作品に見られる…簡単に言うると小難しい設定も無く物語が悪い意味で壊れない程度に書きました。で、実は作中に出していない設定や小話のネタがあるのでそれを大まかに書き出したいと思います。

主人公と兵器の投影について

fateでの本来の使い手士郎君然り、主人公は狂ってます。士郎君がキリツグの願いを叶えるという願望を受け継いだただの剣とすなるなら、主人公はテオドラの護衛をする兵器と言えるでしょう。彼の属性は兵器ですが、それは彼自身が人工的に作られた兵器だからというトンデモ理論から出てきたものです。あと関連性が高いのは”部品”という単語でしょう。彼自身が数多くの生き物を部品として、彼という一個の物を形作っているという見方です。だからこそ最初、彼がまだ安定していない（逆に一番安定している、連載当初の）時期に見られるようにまだ世界が確定しておらず、時には一面の歯車（部品）の世界、またあるときは赤褐色の工場街と色々な心情世界を見ております。歯車の世界は言うまでもなく、部品を作り出す工場街もまた彼の世界の一部という話でした。というわけで兵

器（ここでは殺傷能力を持つ神秘を持たぬ現実武器のことを指す）に対する投影にはアドバンテージを持つていますが、土郎君のように剣を内包、それを取り出すという工程ではないため再現度にはいささか問題があります。あっても後で表記しているとおり8割程度、練習をしていない剣などは一片も投影出来ません。ただし兵器に関しては神秘を内包しておらず、投影後に術式追加で強化というフオーが付き特に問題にはなっておりませんね。ただし神秘という特殊な能力はないですが、魔力による構成のためそういう部分では神秘があると言えるかも知れません

最後の『造物主の掟』について

感想にあつたので、これは書いておきます。恐らく他の皆様も思っているかもしれないですね。大戦時代では彼は『造物主の掟』に対する耐性を得ました。では効かないんじゃないの？という奴でしょう。自分が納得出来た設定では、第一に時間が立ちすぎた、第二に出力が高かった、第三に解放という概念を持つ鍵で直接ぶっさしたからの三つです。耐性を速く得ると言うことは無論実によくことです。その環境に完全に適応するわけですから。だからこそ逆にいらぬものはすぐに失うということでもあります。『造物主の掟』に対する耐性を持っていても、その『造物主の掟』が存在しないんじゃないかという必要ありませんね。今度は耐性が不要ないという環境に適応したというわけです。進化という単語を時々使うように彼は進化する化け物ですから、こういう耐性の取捨が大きく出てきます。第二、出力が高いということ。まあこれは他の二つでも十分でしょうがただの駄目押しです。第三、作中では飛びましたが主人公はブスリと刺されて開けられました。詰め込んだ箱が飛び散るのと同じですね、堅い箱を横からポンポン叩いて開こうとするのと、鍵穴を開けて開くことの、どっちが効率が良いか。後者ですよ。色々無理矢理くさいですが……。

・主人公、真の名前を知るの巻

作中にて という憑依前の主人公の名前ですね。特に設定はしておりませんが…当初は名前らしきものがありました。名前に辿り着き、シックスの変態度が曲がるという流れでしたが、さて一体どうやってその名前に辿り着くかが問題。で、魂に刻み込まれた記憶は消えないとかなんとかで、シックスですら知らない彼の記憶を読み取る少女が『宮崎のどか』でした、原作中でもみんな揃って『マジパネエ』と言っている通り『いどのえにつき』は凄まじいものです。これを没にしたのは、まず名前の問題。今更日本人くさい名前いらなくね？が一点、なんでこいつがヒロインっぽいのか？で一点、そもそもコイツラどう関わらせるよ？で一点、関わったとしても宮崎県が勝手に人の（敵対者ならともかく）記憶を読み取るようなこととはしないだろう、で一点。合計すると四つの点でボオツとなりました。

・神楽坂明日菜、隠れヒロイン疑惑の巻

ええ、そうですね。最後の三番目^{ヒロイン}は彼女のことさ。っという風に考えてましたが、そもそも大戦時敵対していた主人公が 実際アスナに銃を押しつけたりと 色々してまして、ヒロインとしてどう昇格するのか、思い出に残っていたため妙に気になる これって恋？なんていうのもアリかもしれません。しかし、まあ原作メインヒロインの彼女でネギパ主戦力の彼女がそういう扱いにしたら、どう動かせばいいのか、ハアーサツパリサツパリ！で没。しかし妙に主人公に関わったり（恐らくネギパで一番関わっていると思う）と隠れヒロイン時代のプロットの名残が出てしまいました。あ、でもかなり可愛いですよ、個人的には上位に入りますです。

・マナの巻

ごめんなさい、正直きついでござる。なったとしても絶対にテオドラ&マナのダブルに突入しそうで私には攻略出来ませんでした。期待していた人ごめんなさい！お詫びにテオドラの愛を少しだけ分けてあげよう、え？いらぬ……だと。

・クルト・ゲーデル、実は主人公を慕っていたでござるの巻

ぶっちゃけしんどい。なんで私が主人公以外の男のいざこざを書かなくてはいけないのか。とまあ、そういうことでボツ。大戦時代編にクルトが出てこないのは実はこれと関係があります。タカミチは麻帆良に一端残り、そして最後らへんで登場です。しかしクルトとなると新世界編では関わりまくり。ああ、コイツだめだな、と私の脳内で敗北が決定しました。大戦時代に関わりを少なくし（描写において）実は苦手だよ、という設定で新世界編での関わりの少なさを誤魔化そうとした結果です。ですが、最低限関わっているはずですから、勝手にマネるクルトです、彼の射撃芸も否応無しにマネてます、原作よりも少し強くなっているのではないのでしょうか。クルトとネギ君の描写がないのも、そこあたりを誤魔化そうというわっ！お前何をする！やめ

・主人公、実は『完全なる世界』の一派の巻

作中の最初らへんにて、科学者と『完全なる世界』がどうのこうの言っていました、実は関係ありましたという最初のプロット。言うなればフェイトの従兄弟にあたる関係です、え？違う？細けえこたあ！テオドラ、アリカが捕まったときに主人公が造物主の元に連れて行かれさようなら、という最初の流れ。ただ書くにしてもどーやって復帰すればいいのか、実はこの時をまっていた！と鰯の市ギンみたいなことをする予定でしたが……。が諸事情でやはり没。面倒

だから最後までテオドラだい！つていうわけです。本音を言うと『完全なる世界』に所属するならば『完全なる世界』の人たちとの交流を書かなくてはいけません。飛ばすにはもったいないですよ？帝国派のオリ主は結構いますが、完全敵対者のオリ主はかなり少ない。それなのにカットするなんてとんでもない、あーでもわかんなえ、という結果がこれだよ！それに繋がり研究者もごく普通の脳細胞が壊れぎみのおっさんになりました。実は設定では結構イケメン、美女でもありだったかもしれない。

・主人公、固有結界発動するの巻

これはしませんでしたね。彼から想像できる固有結界の効果としては、弾丸が一杯飛ぶ無限の銃声とか、どうみても混沌さんです地獄のアニマルパークとか、赤褐色の街工場とか、一面歯車の世界とか、まあ色々ありましたがここはネギま世界。世界を侵食するのは造物主さんのお仕事ですので消滅。当初の設定では、感想の返信で書かせていただきましたが『己の世界を弾丸にし、相手に撃つことで貫通した相手の世界ごと侵食する、相手は死ぬ』というものでした、派手さが無いのでボツ！ですね。副効果として己で侵食するのだから、己の命も余分に増えますねってことぐらいです。ただこれは複数の命持ちには強力な攻撃ですね。固有結界持ち以外だと、己の世界も確定してないのに別世界の侵食を防げるとは思えません、例えばバーサーカー（鉛）でも！逆にアーチャー（赤）は微妙な所です、精神力で真っ向勝負です、それでも地味なのはしょうがない。

・千雨嬢ちゃん、主人公を知るの巻

ネギま世界にも戦闘力の数値がありますね。嬢ちゃんを1にするとジャック・ラカンが1万2000だそうです。闘技大会にてそれを知る話もありました。ですが、これはたんなる文字数の関係でカツ

ト、別に書かなくてもいいか、という二つがツ。更に明確な戦闘指数を表すとここで止まっちゃいますからね、ネギ君はまだ成長しませんが英雄の皆さんはそうでもありません。自分が考えていた設定的には原作に色々付け加えて…

0・5	ネコ
1	千雨嬢ちゃん
2	魔法世界人の平均（魔法使い平均）
3 - 5 0	旧世界の達人
1 0 0	魔法学校卒業生
2 0 0	戦車
3 0 0	麻帆良の魔法先生、高位魔法使い
5 0 0	ラカン修行前のネギ
6 5 0	竜種（雑魚）
1 5 0 0	イージス艦
3 0 0 0	上位竜種
8 0 0 0	リョウメンスクナカミ、影オンリーのカゲタロウさん（犠牲エ）
1 0 0 0 0	ダブル・シックス、詠春とかアルビレオとか
1 2 0 0 0	ジャック・ラカン、ナギ、古竜・龍樹
2 0 0 0 0 0	最終形態ダブル・シックス

ですねい、身体的能力的にも主人公はラカンと互角以上ですが経験の差です。作中では誰よりも強かった、と言われてますがそれは戦闘による方向性の違いのせいです。ナギ達は最小の犠牲で戦闘に勝つようにしてますが、彼はそういう部分は無いです。ナギ達が意図的に派手な技を使うのも（脳内設定）この違いでしょう。殺傷数、戦艦撃墜数では派手に楽々一位をゲットしちゃってます。

これぐらいでしょうか。他にもまだあるかもしれませんが、自身が明確に覚えているのはこれぐらいでしょう。さて、お次は主人公の Fate 風の設定（黒歴史）を。

名前 ダブルシックス（36号）

真名

性別 なまもの

クラス アーチャー/モンスター

種族 生体兵器エックス

身長 マチマチ

体重 推定数万〜数十万トン（術式効果で平均程度まで下がっている）

属性 秩序・悪（テオドラ・主従）

イメージカラー：白

特技：射撃、曲芸、事務作業、解体、

好きなもの：主、金属、牛乳、階段を眺めること

苦手なもの：主のいない世の中、性格が真っ直ぐな奴

天敵：主、キャスター

《略歴》

架空の存在。お伽噺「紅き翼」の舞台である魔法世界のとある国の英雄。彼の正体は人間ではなくさまざま生物が凝縮された人工の化け物。そういう存在のため英雄譚で滅ぼされる「怪物」でありながら「英雄」という真逆の属性を持っている。二属性を持った英雄は時折属性が反転し凶悪な存在になるが、彼は”同時”に存在するという 史実には存在しない英雄ということも含めて イレギ

ユラーを体現したような英雄である。その世界において最強の存在を倒し英雄となった。複数人の英雄と互角の戦いをし、個人で国を壊滅直前まで崩壊させたり島と思われた巨大な化け物の討伐、竜の群れを撃破したりと逸話が多いがそれから転じた宝具などは皆無であり、彼の戦闘スタイルが確立していることを示唆している。

《人物》

性格については善悪損得前にまず主、という極端かつ単純である。その影響のため主以外は大抵見下す、あるいは実質的無関心のため見下すことすらしない。主に絶対を誓うためか、聖杯戦争におけるマスターの命令を聞くとは限らない、が……。出生理由のため、極めて冷酷な性格をしており長い鼻を折ることが趣味、という点もあるが案外気にかけることもありツンデレ。召喚を受け入れたのは「己が幸福な第二の人生」を得るためである。だがその願いと苦手なものが同じように存在するため時々暴走する、いい意味で。

《能力》

イレギュラークラス・モンスターとして召喚された場合、スキル・怪物英雄譚を会得する。これは彼の本来打ち倒されべき存在でありながら、英雄として存在したことによるものである。魔術師、反英雄、一般人に対して能力向上を見せるが、肝心の対英雄戦になると低下する。一番の特徴と言えば彼が耐性を得ることである。環境、攻撃といった全ての現象に対し発動し、一回で耐性が得るわけではないがクラスが低いものなら数回で耐性を得る。これは回復魔術にも当たるため諸刃の刃である。しかし再生のスキルがあるため特に意味は無い。アーチャーとしての能力は格段に強く、その気になれば40?離れた地点にて誤差±10?の狙撃を行う。とはいってもこれは彼の技量だけではなく彼の使う武器にもよる。

する。ただしAランク相当の攻撃を防げるようになるにはその攻撃を20回程度喰らわなくてはいけない。

単独行動：A

マスター不在でも行動できる。ただし宝具の使用などの膨大な魔力を必要とする場合はマスターのバックアップが必要

・モンスター

怪物英雄譚：EX

生前英雄と言われた相手には宝具以外の全能力が1ランク減少、それ以外の相手には1ランク増加する。

《保有スキル》

拒絶：EX

令呪の命令を拒否出来る。ただし拒否出来るのは”期限が曖昧”で”命令が不明確”な場合のみである。彼はただ一人の存在のために生き続けたという。

進化の起源：A

攻撃を喰らえば喰らうほど、それに関しての耐久性が上がっていく。ランクの高い攻撃ほど、ダメージをゼロにするまで慣れるために喰らわなくてはいけない回数が増大する。

心眼（虚）：

修行・鍛錬によって培った洞察力ではない。人為的に吸収された経験、知識を元に構築され人工の心眼。経験したことのない経験、感じたことのない感情、習得した覚えのない技術によって保たれる勘、そして勘とは似て非なる物。

選弾眼：A

あらゆる状況、環境において弾丸を最も良い軌道で放つことが出来る。跳弾、貫通、威嚇射撃全てにおいてそれは適当される。

再生：D

死んでない限り、傷を修復し続ける。が宝具と合わさって死んでも再生するようになった。

《宝具》

『支配者たる桃色竜』
ドラグーン・オブ・ヘラス

クラス：D

種別：対軍宝具

レンジ：1～50

最大補足：10人

生前利用したドラグーンを召喚する。移動、突貫なんでもござれ。搭乗者が耐えられるだけの速度をたたき出すため理論上光速も可能、時が見えてくるぜ。

シンカー・トゥ・シンカー
『深海帝国』

クラス：B

種別：対命宝具

レンジ：-

最大補足：1人

命を貯蔵することが出来、己へと変えることが出来る。同系統の能力を持つ物（宝具）の『十二の試練』ゴットハンドのようにマスターからの魔力による命の補充は不可能である。そのかわりに、個人による補充を可能にし耐性の習得が極限に薄くなったもの。スーパーアーマーというより常にオートリレイズ。そして血を通貨にすることで魂の経験・知識・技術を会得する。しかし基本的に、意図しないかぎり一番想いの強い存在しかえられない上、会得したといってもそれぞれ

経験したことの無い経験、習得した覚えのない技術であり、知識以外の存在を活用出来るかどうかは不明。

『時の引き金』
クロフ・トリガー

クラス：C

種別：対人宝具

レンジ：100～1000

最大補足：1人

過去において対象を狙撃したという過程を残し、現時点に狙撃したダメージを与えたという結果を起こす因果逆転の”業”である。同系統の宝具『刺し穿つ死棘の槍』ゲイボルグのように必殺を誇るわけではないが、アクマで業であるためこちらには幸運は通用しない。でも所詮弾丸なので弾丸が通じる範囲でしか通用しない。ちなみにこれはどんな銃でも使うことが出来るため、案外洒落にならない。

『帝国の狙撃主』
ダブル・シックス

クラス：EX

種別：対 宝具

レンジ：10000～99999

最大捕捉：

彼が彼たらしめる最終宝具。1000メートルを超えんとする三対腕の化け物に変身し全てを薙ぎ払う。空想上における怪物としての全ての行動、思考、存在を具現化させた『人類種の大敵』であり”人類”に対して極限までの攻撃力を保有するため人間として英雄に昇華されたものが束になろうとも、既に”人類は勝てない”という概念を内包しているため勝つことは出来ない。英雄譚において怪物を討伐した”人間以外”の英雄、あるいはそもそも怪物という英雄、反英雄でしかダメージを通すことは出来ない、が例え英雄の宝具の

一撃であるうがその圧倒的な質量故にほんの小さなダメージでしかない。

『完全なる世界』
「コスモエンテレケイア」

クラス：EX

種別：固有結界

レンジ：

最大捕捉：

化け物の固有結界。本来彼は自らが内包する命を切り取り個体として分割することは出来ない。しかし発動するとその原則を無視することが出来る、が内包する数千、数万の命を全て分割するため弱点を晒すことにもなる。彼から切り離された命は、全て彼の思うとおり動き、発動されたその光景から『死の河』と呼ばれる。またその死の河に飲み込まれた命もまた、彼の内包する命の一つとなる。通常から常に彼の内部に展開されるように実行されており、実際は発動するというより少し無理をして外界に世界を伸ばすという形である。そのため詠唱は特に必要ない、いるのはその場のノリ。彼の体内に存在する完成された世界、それは食物連鎖という意味でもあり、生き物の進化という意味でもあり、一個にて完結している個体を表す。『帝国の狙撃主』が内に向けて世界を解放するのに対して、これは外へと向けて解放する宝具と区別出来る。

《仮契約カード》

主 テオドラ・バシレイア・ヘラス・デ・ヴェスペリスジミア

名前表記 36 (Double Six)

称号 底と頂きを歩くもの

色調 白

徳性 沈黙

方位 北

星辰性 月

アーティファクト ドラグーン

ドラグーン

カービィのアレ。七色の羽をもつエアライド。大きさはカービィのサイズシックスで見ても現物より二回り大きいぐらい。超高速で走り回る。乗った人を守る術式やらを自動で展開。その気になれば戦艦をのつたままぶち抜く。もっぱら召喚 相手にぶつけるといふ選択をとる。ライダーの『騎英の手綱』と性質が似ているが威力はこっちのほうが低い。ちなみに真名とテオドラの契約で手にれたのはハイドラ、という設定。

《総合評価》

能力糞高い、スキル優秀、宝具マジキチの最低三拍子が揃った変態野郎。負ける要素が無い、が天敵は神楽坂明日菜の持つ『ハマノツルギ』やメディアたんが持つ『破戒すべき全ての符』ルールブレイカーといった対魔宝具。というかルールブレイカー喰らったら死ぬ、間違いなく死ぬ、エッフェル塔のボルトを全てはずすような所業に等しいぐらい死ぬる。あ、結構イケるかな？とか思った瞬間死んじやう。回復不可の武器に対しては微妙な域、死ねば回復出来るようになるが死なない限りそれはリセットされない。でも無理矢理回復しようとするからなんとかしてほしい。というかこれだけで8000字越えてわけがわからない。屈折延命のハルペー辺りでも結構やばい。

11月01日

累計：PV 7,079,042

累計：ユニーク 842,126
本当にありがとうございました！

2011/01/22

ステータスとスキルの修正をしました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8179/>

ひょうい！

2011年1月29日06時45分発行